大正十一年九月二十日印刷
大正十一年十月一日發行
大正十一年十一月二十五日再版發行

第一冊（再版）

要目

元祿板「好色むらく坊」解題
大近松の破倫物
浮世繪の賣春讚美
評釋 藤蔓戀のしがらみ

尾崎楓水著

江戸軟派研究

第一冊

自叙

題して、「江戸軟流研究」と曰ふ。太平の逸民にも非ず、同じく現代の生活苦に掀髞されたる身、さればとてその苦を慘たかうしたことに遁れむとするさる卑怯者にもあらず。寧ろ近代に徹し、現代人に徹ししかも自己の趣味性癖上より、憧憬と思慕とを江戸に求め、その泉を殊に軟派に求めむと欲するなり。これのみ、これのみ。

軟派、一に文學、二に繪畫、三に俗曲、四に演劇、其他曰く何、何。總てを包括するに此の軟派の文字を以てす。研究とはいへど、單なる考證にもあらず、江戸に浸り終りて他事なきにもあらず。唯、現代の予の眼、解釋に由る。時を絕し、背景を絕して、彼等江戸軟派の肉に徹り、予を見出さんとする也餘計な事をといはるゝあらんも、そはわが性癖のみ。寧ろ、到る處文藝思潮の野を漁り盡して、終に此にその安息處を求めたるが故にと謂はむ。

片肱張りて國粹を叫ぶ野暮にも非ず。爪彈きに此の情調はいかにといはむ通にも非ず。强いて謂はゞ予の唯美主義（しばらく斯く名づく）の標的として最も恰適なるもの、江戸なり、江戸軟派なりと謂はんのみ。情痴の波濤、悲戀の洪水、到る處予の視野を奪ふ。中年の戀をして若し有り得べしと爲さば、予は、此の江戸軟派に中年にして始めて戀したりと謂はん。

頽廢、靡爛、しかもそこに惡の華咲き、惡德の實こぼる。惡の肯定、惑溺の無自覺。元祿、化政、二つの峠を塋だてゝ、恍として予をいざなふ。彼等は梳き零るゝ黑髪と燃ゆるばかんなる脚布と、以て予をいざなふこと頻り也。往かんかな、いざなふ儘に。かざせば朧ろ〳〵、靑羅に包まれたるが如く、はた嬉しき春夜の交會の如し。ひた歩む、予はそこはかとなく。

大正十一年九月

楓水しるす

元祿板「好色むらく坊」解題

友人の洋書家猪飼俊二君から讓つて貰つた物に、此の元祿板「むらく坊」がある。半紙判全十三枚。卷末に、元祿八年亥ノ正月吉日　長谷川町　近江屋九兵衞板とある。作者名は不明である。表紙は原本當時の物ではなからう。標題もない。墨で、春のひと夜　全と記し、右肩に、元祿板むらく坊と手書されてある。然るに本文の各柱には、下に丁附と共に上にむらく五と全十三葉に亘つて刷られてある。內容は、むらく坊といふ好色な青道心とその還俗譚である。從つて此の册子、むらく坊といふ標題は恐らく外れぬ所であらう。春のひと夜　全といふのは、宛(あて)にならない。元所有者のいたづらに過ぎなからう。

先づ板元の近江屋九兵衞は、井上和雄氏編の「書賈集覽」を調べると、アの部に、

近江屋九兵衞　江戸長谷川町　元祿——享保　一に横山町二丁目

好色むらく坊(元祿八)　好色俗紫(同十一)

とある。すれば近江屋九兵衞からは、此の好色むらく坊の他に、元祿十一年に好色俗紫等が

出版されてゐる。營業期は、元祿から享保への約四十八年間(元祿元から享保二十まで)以内である。これで本屋の輪廓は大体分つたものの、まだ好色むらく坊の作者が不明である。

今、私の手許にあるむらく坊は、むらく五とある所から推すと、第五冊目に違ひない。むらく坊の坊主になる以前の艶話が、前四冊に費されてゐるらしい。此の手許にあるのが、最終の篇であることは、版元と年月もあり、また、「めでたけれ」で文を終つてゐる所からいうてもそれに違ひない。作者は?果して五冊物か?と、今度は日本小説年表を繰つた。年表にはたうとう無かつた。念の爲と、柳亭種彥の好色本目錄を繰つた。これにはあつた。該目錄の最尾に、

好色優天狗　半紙形五冊

江戸作　長谷川町　近江屋九兵衛板

序に桃の林紫石、印に蝶ㇵ゚ろ。

柳亭も近年見たり、更に興なき書振りなり。

標題知らず　元祿八年印本

杜にむらくとあり。夢樂坊といふ者の事をつくろ。

作者、板元、「やさ天狗」と同じ。面白からず。

これで見ると、種彥は、背て此のむらくもやさ天狗も通讀したものらしい。一は興なき書振

りと貶され、一は面白からずと露骨に出られてゐる。末期の大作者種彦の手にかゝつては、かういふ評を受けるのも尤もだ。その實私もこのむらく五を讀んで面白からずと思うた。しかし面白い面白くないは、時代を絶した正直な我々の作品に對する判定、好尙である。一歩退いて江戸小說草創期に於ける江戸出版として此のむらくを考へてやるならば、幾分かそこに愛憐と鑑賞の懷が湧く。種彦の才筆もかうしたむらく坊作者如きの先輩の努力（或は半分以上醉興にしろ）あつて、始めて生れたのだ。――話が傍へ外れたが、別に浮世草子目錄（大久保葩雪）を見ると、年次不明の中に、好色優天狗、五、桃隣紫石とある。（隣は林の誤か）種彦の方は、序文の記者に止めてゐるのを、これには作者にしてゐる。無論或る場合、序文の署名は作者であるから、此の類推も間違ひではなからう。すれば、むらく坊の作者も桃林紫石である。冊數も優天狗と同じく全五冊であり、家藏のものは、その五冊目で無論あらう。

浮世草子目錄、好色本目錄、日本小說年表等に亘つて、此の桃林紫石の同著を探してみた。中、らしいものを發見した。即、好色酒呑童子五（元祿十年序。桃林堂、印蝶麿。後に好色榮花女と改題すと）。好色艶虛無僧（桃の林印蝶麿）。好色連理松（桃隣堂。小說年表に此本俳隣堂とあり。誤植か）（以上、好色本目錄）。好色大福帳五（桃のはやし。元祿十板。但し年表には、七册唯樂軒と云。）（以上、浮世草紙目錄）で、むらく坊、優天狗とも、先づ五六種は確かであらう。

家藏のむらく坊は、第一、草枕うつゝの小町。第二、妹背の千人限と二篇に分れてゐる。此の体裁から推せば、一冊に二篇づゝ、全五冊で十篇の見出しがあらう。無論話は連絡して行く筈。家藏むらく坊五の第一、第二の梗概を左に略述してみよう。

夕ぐれの月にいざなわれて。宿を立出れば。いづくもおなじ秋はあれど。みやことて町はさびしからず。若しゆのすさむつゞみ。よめのうつきぬたも。森はやしをへだてゝかよふをとこそ。ひとしほきゝところあれど。わびものずきにゆきさきさためず。あちらこちらと行まゝに市原野にいたりて。花すゝきの風にまねけば。さきのころききやうのうなつくもおかしむらく坊もしばし立やすらい。げにやむかし小のゝ小まち。……(原文のまゝ)

これが、第一枚目表の全文である。それからむらく坊は、小町と業平との昔の情話を追想する。「かれこれふるごとを思ひ出すにも、なほあはれに袖をうるほし、傍なる草の上にしばし休らひ居けるに、風さわ／＼として物凄く、薄の亂れし中より齡三十斗りの女郎の、素顔に眉細く、梳き流したる黑髮のこぼれかゝりたるさま、いとけだかく」云々の姫が現れる。これが實は、小町の幽靈で、故あつて切羅したむらく坊に情事を強いる。丁度常盤津の「將門」のやうな振りがあつて、光國ならぬむらく坊は、難なく征服せられる。結句これが機緣となつて、むら

く坊は再び人間普通の體になつた。

「……われも成佛の身となれり。御身此の後えにし深き女にあふて、再び富貴の身と成べし。いそぎ元俗したまへ。われ永き形見に小野と云名字を讓りまいらせん。さるにても殘り多や。（中略）あかつき風そよ〳〵と、薄に蟲の聲のみ殘りて、夜はほの〴〵となりける。」

で第一は終つてゐる。

第二の妹背の千人限は、小野清五郎と還俗したむらく坊の、漁色の繁しいに始まる。神無月の初めより末の冬迄に九百九十九人。此内娘五百人。後家三百八十人。遊女三十八人。尼二十人男もちたる女六十九人。今一人となつた。「ある日、雪ふりていと寒く、町並の軒も白妙なるに八坂のほとりをさまよひ、かしこの茶屋にあしをとゞめ、休らひゐたる所に、年比二十あまりの女、背たかくしゝつき（略）が、緋無垢のうへに無紋の黑小袖、さらしの上羽織して（略）裙をからげ、びらうど緒の塗足駄に、紫竹の細杖をつきて、いやしからぬ下女三人つれて通りけるが」同じく此の茶屋に休らひ、やがて清五郎を下女して呼び入れる。色々あつて、

「わらはは、嵯峨のほとりのものにて候が、ちゝはゝ亡くなりて後、父の養ひ置きし文屋安之丞と云へるをつまとなし、半年に足らずして安之丞世をさり候より、獨りねに三とせを重ね

心に叶ひたる夫あらばと……」と、女、自ら素性を語る。

清五郎もまた宿世の縁があるのか、それに不思議なことは、相手が前の夜市原野で購うた小町の顔にそつくりである。たうとう懸想を通はすことゝなる。

「内儀云ふよう、これよりすぐにわが宿へ御供申し、ことぶきまゐらせん、いかやうのたまふに、清五郎ともかくもと、あるじの女に褒美をおくり、夫婦もろとも駕にのりつれ、さがの宿りへぞ帰りける。かくて富貴日々にさかえ、あまたの男女に敬はれて、よるひる分かぬ……千秋樂には……万ざいらくには……　相生の中こそめでたけれ。」

で完つてゐる。第一、第二、交會の描寫は宛然讀和（よみわ）である。しかし文が幾分古雅であるから江戸末期の物の如くではない。挿繪が三葉ある。市原野、茶屋の出逢ひ。嵯峨へ伴はれて行く所。すべて菱川風である。但し師宣では恐らくなからう。（師宣は元祿七年歿）その中、茶屋の繪が稍エロチックである。文體と描寫、凡て西鶴の浮世草紙本の比でなく、純好色本の部に入れて然るべきものである。江戸出版であるにも拘らず、全然京を材料にしたことも、記すべきことであらう。（作者、桃林紫石に就いては、一臆說がある。好色本目錄中、好色酒吞童子の註に「江戸の俳諧師にて、伊勢の產には非ずや」といふ種彥の言だ。確否は、何とも云へない。）

大近松の破倫物

大近松の戲曲に現れた破倫事件は三種ある。大經師昔曆　改め戀八卦柱曆）（寶永三年九月）と、堀川波の鼓（寶永四年二月）と、槍の權三重帷子（享保二年八月）とである。各曲中の主要人物を擧げると、『昔曆』では、本夫京の大經師以春。姦婦おさん。姦夫手代の茂兵衛。『波の鼓』では、本夫因幡の家中小倉彥九郎。姦婦お種。姦夫京堀川鼓の師匠宮地源右衛門。『重帷子』では、本夫中國の藩淺香市之進。姦婦おさゐ。姦夫同家中笹野權三である。

『おさんは實家の窮乏を救ふ爲、茂兵衛の實體で親切なのを見込んで金策を賴み入れる。茂兵衛は一時逃れに以春の印を盜用する。以春に見付かり詮議の破目、茂兵衛に兼々心を寄せてゐた下女のお玉が我が身の事に云開く。その夜、おさんは晝の厚意を謝すべくお玉の閨に行き以春が彼女を每夜挑むと聞き、お玉に代りて臥す。茂兵衛もお玉の晝の云開きを嬉しんで、情を交す心になり、同じくお玉の寢間へ來る。そこで二人の不覺が生れる。逃亡後、丹波で召捕られたが、黑谷の上人の手で助命となる。』（昔曆）

「源右衛門は、お種の養子文六の謠の師匠。お種、夜に入つて酒肴を出し饗待する。お種は酒好み、次第に座が亂を紊して行つた。所へお種に横戀慕の磯邊床右衛門が挑みに來る。お種困り果てゝ賺き歸す。それを源右に口留めさせうと、契ひの盃のやり取りが嵩じて、つひ正體もない不義の遂行。床右衛門に現場を見付けられ證據の袖を取られる。源右は京へ逃げる。京には妻子がゐた。お種はいつか身持になつた。四月目、本夫彦九郎歸國の日、罪發覺し、お種は自殺する。やがて彦九一族、京の堀川で源右を討つ。」（波の鼓）

「おさゐは悋氣深い性。姉娘のお菊の婿といふ口約束と取かへに、權三に茶道の奥義を或る夜許さうとする。端なく權三に他の婦（おさゐに戀慕の侍川端伴之丞の妹深雪）ありと知つて、權三の締めた帶を誰が縫うた、遣つたと飛びかゝり、無理やり解いて庭に棄てる。代りにこれなと締めよと我身のを解く。權三もその悋氣に呆れて、要らぬと庭へ投棄てる。それを伴之丞が拾つて不義者と喚く。二人の逃亡。伏見の渡場で市之進らに諸共討たれる。」（重帷子）

特筆すべきことは、彼女等の全部が事前の相思から來たものは一人もないことである。まだおさゐだけは「しんとろとろり」と權三に岡惚した事は一度や二度はあつたらう。お菊に對しても「其方が嫌なら母が男に持つぞや」と戯談にも言うてゐる位。「我身が連添ふ心にて吟味に

吟味」した婿だとも。數寄屋で悋氣を起した折にも「不承乍ら此帯締めなされ。一念の蛇となつて腰に巻付き離れぬ。」などと喚いてゐる。おさんは茂兵衛を唯實體な男よと幾分か好いてはゐたらしい。お種はてんで源右に愛憎はなかつた。從つて三者の破倫は、意外な過失や偶然事に動機してゐる。

注意することは彼女等をして此の災厄に趨らしめる爲に大いなる力を爲した敵役が全部ある事である。おさんには平素から横戀慕の手代助右衞門があつた。彼が茂兵衛の印盗用を以春に告げた。お種には床右衞門がある。おさゐには伴之丞がある。近松は此等の惡を使用して、三女性に對する破倫詰責の聲を緩和しようとした。用意狡智なりと謂ふべしだ。三女性性格上の缺陷には、おさんは咎むべき事殆ど無い。おさゐは、稍平素の岡惚と悋氣深さとに於て彼女の罪がある。況して彼女は自己の悋氣深さを自ら認めてゐる。(權三に無理押しつけにした自分の娘菊のことをいふ時に、「妾に似たらば、定めて悋氣深からう」云々というてゐる。)然るにお種には貞淑を外した酒好みと不謹愼の言葉を弄した事とから、彼女自身より多くの罪がある。然し心付かれる事は、三女性凡てが、個々の性癖よりも、寧ろ孤棲の境遇のせゐのやうに、女人憫むべしと看過したいやうに描かれてゐる事である。(「昔暦」では、おさんは孤棲ではない。

然し夫の以春は女中のお玉に夜這つてゐた。)お種斗りは偶然とも云切れない。自ら先んじて源右に挑んだだけ、彼女は自及する丈の責はある。不義者と決つた時に於て、まだ其實が無かつたのはおさゐ。有つたのは他の二女。(但し此の中、お種は承知してかゝり、おさんは過失。)

遂行後、三女性に何れ程の自責懺悔の念が起つたらうか、最も苦しんだのは、「波の鼓」のお種である。その夜もお種はふつと眼を覺し、「我夫ならで一生に覺えぬ男の肌觸れて……女の罪の第一にて未來は愚か此の世の耻」と嘆き、たつた一回の罪から懷胎し、四月目、知られた妹へ「好みし酒も今思へば前世の業の毒の酒、無明の酒の醉さめて自害せんと思ひしが、夫の顔を今一度見たい〳〵と思ふより」生きてゐると嘆き、夫彦九郎歸國の日、「是は我が身の言譯なり免して下され是御覽せ」と、胸押開けば、九寸五分膽先に切羽まで刺貫してゐた。お種は死ぬ迄、夫に愛慕した。律義な侍の生活と、中年女の成熟した體。初めに彼女は、「隔年の江戸詰。お國にゐては毎日のお城詰、月に十日の宿直番」たるを嘆き、鬱さを酒に遣つてゐると告白した。弟文六を養子にして子もない彼女、思へば可哀想、人間と道義との枷に縛られた犧牲だ。況して彼等夫妻は「樣子ある夫婦」といふから、町人ならば人も羨む鴛鴦の仲の筈だ。「昔暦」のおさんは、元來平凡な京女。それ丈、「互ひの心耻づかしく、顔打あげて顔と顔見合せ、顔を

あかめては涙の外に詞なし」。町人の女房といふだけである。
端倪すべからざるものは、おさゐである。彼女は善良なる母婦の半面を夙に有してゐた。と同時に、悋氣深さの人後に落ちざる點に於てまた偉大なる娼婦であつた。「涙も袖に落次第。エ丶思案する程嫉ましい。（略）我身が連添ふ心にて吟味に吟味、思ひ込うだ稀男なればこそ大事の娘に添はするもの、悋氣せずに置かうか。（略）え丶恨めしい腹だ丶や。（略）悋氣も因果か病か。…… 我男を手放して海山隔て丶能う置くぞ。能々お主は怖いもの。皆心の氣隨から、姑が鑓（權三をいふ）の悋氣とは惡名の種、さらりと思ひ忘れうと拂へども猶胸焦す」とある態は何うだ。よく云へば娘を思ふ熱情火の如し。惡くいへば、年少の美男に焦る丶娼樓の婦だ。それも「我身が連れ添ふ心で」擇んだ權三故だ。凡ての禍因は此にある。興奮の塊、或は東の夫を慕ひ殿を怨み、轉じて直下の問題たる權三に及ぶ。彼女は、實家の母に對して孝行者。娘や悴に對しても、「妾は娘もたんと持つ。嫁入の時の諸道具を一色も散さず、子供躾ける便に、小身の我が夫に餘り苦を」かけない利口者。その女が、墮落。然し巣林子の筆は、三破倫曲中、此のおさゐに作者の氣魄集るかと思ふ程、精到爛熟、おさゐの複雑なる面目躍如たるものがある。人間的といへば、おさゐこそ最も人間的、女性の執拗と可憐さとを具現した唯一人であらう。

おさゐの、當夜、伴之丞に發見されてからの權三に對する口說、惡くいへば自家辯護が面白い。彼女は妙な言を吐いて、道心に安心を與へた。「生きても死んでも廢つた身、東に御座る市之進殿、女房を盜まれたと後指を指されては御奉公は愚か……唯今二人が不義者に成極めて市之進殿に討たれて男の一分立てゝ』と賴むのだ。權三は「死後に名を雪げばいゝ。間男に成極まるは口惜しい」といふ。それを『跡に我々名を淸めては市之進は女敵を討過り、二度の恥といふもの。不肖乍ら今此處で女房ぢや夫ぢやと言うて』くれといふ。頭の惡い時には分らぬやうな大分な理窟。それから到頭、本當に成極まつて了ふ。下之卷のはじめは、名文。極めて色つぽい。「淺香の水の濡れ初めて笹野の露と置き惑つ」たり、「十二違ひ（おさゐ三十七 權三二十五）の月更けて姉ともいはじ岩枕、代す枕」があつたりする。いやはやだ。

おさゐは熔鑛爐のやうな女。馬觸るれば馬を愛し、人觸るれば人を愛すの槪があつたといふべきか。

姦夫の性格其他に就き、餘談なほ一囘。

浮世繪の賣春讃美　上

命題は、「浮世繪の賣春讃美」である。然し誤解なきやうに願ひたい。私が賣春を讃美するのではない。賣春を讃美したものは、浮世繪である。畢竟浮世繪に現れた彼等畫家が讃美した賣春階級の印象である。所謂花柳美人の印象である。

一體、浮世繪とは、世上周知の如く、世界に誇るに足る、江戸の文化が生んだ版畫藝術である。一名錦繪ともいふが、然しこの錦繪は、浮世繪の或時期、板畫が次第に發達して多色摺となり、絢爛の美、京の錦にもをさ〳〵劣らぬ物となつてから、江戸人が特に名づけたものである。即ち浮世繪の中期以後の製作に對してのみ本來は冠すべき名稱である。從つて今私は全部を一様に浮世繪として論議を進めてゆく。

浮世繪といふ名義は、浮世は當世、現代といふやうな意味で、當時の風俗畫、時世畫といつた意味が、浮世繪である。誰が附けたかは分らないが、當時江戸の初めに、浮世といふ名を冠した色々なものが流行した。浮世巾着、浮世袋、浮世人形、浮世團子。それが次第に士民の日常

生活に切實な交渉を持つやうになつて、即ち浮世床、浮世風呂の類を生んだ。文學作品上では寫實主義に根柢を置いた當時の作物を浮世草紙、又は浮世本ともいふ。甚しいのは、當時遊女買を、浮世狂ひといふた。骨董集にも「遊女に戯るゝを浮世狂ひといひしなり」とある。浮世草紙は、淺井了意の浮世物語(延寶年間作。延寶元年は、西紀一六七三年)から出で、一般天和貞享から、寶暦明和、安永にかけて此種小説の稱となつた。浮世人形、浮世團子は、元祿頃に流行した。浮世床、浮世風呂は、現に式亭三馬の著作まである。さうして肝腎の浮世繪はいつから、この稱呼が始まつたか。それは不明であるが、師宣(菱川)が貞享四年版(西紀一六八七年)の「江戸鹿子」に「浮世繪師、菱川吉兵衛」といふ署名がある。これが浮世繪師なる言葉の著作に現れた最初であるから、恐らく浮世繪なる市井の稱呼は、貞享四年よりもなほ以前の事であらう。先づ延寶、天和、貞享の間といふてもよからう。

さて一口に浮世繪といふても、其の種類は色々ある。大別すると三種になる。芝居繪と美人繪と風景繪とである。今日歐米に喧傳せられてゐる此等の代表作家を擧げると、芝居繪(役者繪を含む)は、春章、寫樂、初代豐國。美人繪は以下の縷述に讓り、風景繪は、有名な北齋と初代廣重の如きである。然し畫家其物からいふと、役者繪の畫家であつて美人畫の製作もあり、

又風景畫家にも美人畫があり、一概に斯うとは謂へないが、今日評價の上から右のやうに謂つてもよからうと思ふ。

愈々本題と交渉を持つた美人畫の話である。浮世繪に美人と謂うても、實は色々ある。悉しくいふと、無論各種の階級や職業が含まれてゐる。即ち花柳美人それも遊君と藝者。茶屋女房娘、或は夜鷹（私娼のこと）。素人階級には、町娘、町女房、或は武家の女性。或は水茶屋の女（つまり看板娘である。之も私娼の一種であつた。）このやうに各種に亘つてゐる。然し其の中、最も多いのは謂ふ迄もない花柳美人、殊に遊君（江戸では主に花魁といふが。――この稱呼初めは吉原に限られたりと）の美人畫である。藝者は「洞房語園」に據ると、踊子の名に於て既に享保年間吉宗將軍の頃現れた。今から約二百年以前の事である。然し藝者として花柳界の一半階級として發達し出したのは、文化文政以後の事である。從つて化政期の畫家でない限りは、藝者を餘り多く描いてゐない。それ以前は大抵遊君である。而もその遊女繪の畫様が、三味を彈いたり琴を彈じたりしてゐる。所謂賣色と賣藝と、遊君と藝者との合一體の時代であつた證據である。

浮世繪の先驅者は、岩佐又兵衛である。これには異論も色々あるが、先驅者といふ意味ならば差支ないであらう。それからその眞の意味の創造者、第一歩を立派に踏みしめた畫家は、菱

川師宣である。師宣以來幾多の畫家殆ど二百人以上が浮世繪に現れた。天和、貞享、元祿の菱川から、明治の芳年へかけて約二百年間、その描く所は、大抵は風俗畫而も美人畫がその大半を占めてゐる。この浮世繪師であつて美人を描かなかつたのは、恐らく寫樂位ゐなものだらう。他は兎に角その量の多少はあれ、美人を描かないものはなかつた。然程に美人畫は浮世繪製作の過半を占めてゐる。其の殆ど無數の美人の中で、量の一番多いのは、無論花柳美人である。當時江戸士民行樂の中心は、劇場か然らずんば遊廓であつた。從つて當初から風俗畫即ち寫實主義を標榜してかゝつた浮世繪の美人畫に花柳美人の多いのは、無理もない事である。さうして此の花柳美人の中、大半は花魁で、藝者がその餘りを占めてゐる。さて以下少しく、又兵衛師宣の草創期から、月岡芳年に至る二百年以上の各時代に亘つて、各畫家の描いた花柳美人主に遊君に就て、其の印象を略かた述べてみよう。

又兵衛に就ては、色々異說がある。然し今日其の眞筆と謂はれてゐるものを「國華」などの類で見ても、唯温雅な上品な氣分である。描く美人は無論當時の遊女であつて、慶長元和頃の遊女の一瞥に足りるのみの事である。まだ然程深い物ではなかつた。

評釋 藤蔓戀のしがらみ

解題

藤蔓戀のしがらみは、新内節の正本の一。從來の四種の新内正本集中、國書刊行會本、聲曲文藝叢書本には全く、此の正本なく、最近刊行された新内全集と中川愛氷本とにある。但し全集本には、此の正本の前三枚を略き、中川本は珍しく全文を載せてゐるが、校訂粗、正本の生寫しではない。幸ひ私の先祖が偶然私に殘してくれた生地の此の正本がある。よりてその全斑を正本のまゝ此に掲げ、併せて字句の評釋を試みようと思ふ。新内は殆ど全部吉原の公娼に材料を得てゐる。從つてその一たる之が評釋は、當時の吉原の內面描寫である。即ち以て吉原研究の一端ともならう。「藤蔓戀のしがらみ」正本の年月は、不明である。然し、鶴賀新内直傳とあれば、新内の歿年安永三年以前の物に屬し、新内の同門であり後に師弟の關係にも似た彼の先輩朝日敦賀太夫（元は宮古路）が、敦賀を鶴賀に改め姓とし若狹掾と名乘つたのは、寶暦八年（聲曲類纂說）であるから、新内が若狹掾の懇請により鶴賀を姓に名乘つたのは、それ以後即ち寶暦八年以後としなければならぬ。即ち鶴賀新内直傳ときつぱり署名せる此の藤蔓の正本は、彼が、寶暦八年より安永三年に至る十七年間の何れの年かの作であらねばならぬ。恐らく明和時分の作であらう。傍證として、喜之介年ぎぬの心中を調べれば分るが、これは無論變名であらうし、また強ち當時實在の人物があつたとも斷言出來ない。心中の榮にたのは、元祿、寶永と普通いふが、豐後節が、古今の天才宮古路豐後掾によ

つて、享保十五年以後江戸に榮え、元文四年九月の豐後節停止に逢ふまで、都鄙に心中を挑發せしめた觀があり、たとひ心中の形式が遠慮と張りから凋落して、金に詰つての厭世心中と早變りしたものの、兎に角心中は、當時猶盛んであつた。元文四年の停止から、若狹掾の一旗幟を建てた寶曆八年迄は、約二十年を經てゐるが、心中の習遊里に全然絶えたといふのでもない。延享三年十二月十三日の尾上伊太八(遊女尾上と元津輕岩松家來原田伊太夫)の情死未遂やら、明和六年七月三日には、浦里、時次郎(美吉野と伊之助)の已遂やら、一は寶曆八年前十三年(尾上)一は、寶曆八年後十二年(浦里)である。寶曆八年後二十八年目の天明五年には、有名な綾衣外記の心中もある位ゐで新内草創の前後に心中は頻發したものらしい。兎に角當時此種の心中はあつたらうが、さて實在の喜之助早衣はと來ると不明だ。然し新内節(正しくは鶴賀節)の盛行と心中の流行とは彼此相呼應して、假りにモデルありとせば此の心中も明烏と同樣、明和頃に起つたものと見ていい。即ち私の此の正本を明和年代とする所以である。尚、此の正本の珍らしい譯は、新内の正本が殆んど若狹掾の直傳なるに、これは新内直傳であることである。(悉しくは折を見て、「**新内の正本に就て**」で云ひたい。)

○

ふじのや喜之助
ひしのや早ぎぬ
藤蔓(ふじかづら)戀(こひ)しがらみ
鶴賀新内直傳
濱之斗石述

イロ詞
栴檀は二葉よりかんばしき。楠(くすのき)は二ばより名石(めいせき)をふくむとかや。武士(ぶし)は

腹中をでゝふくちうをさだむるは。（地カヽリ）うごかぬくに（國）のおしへ（教）かとおもへど ゆめの世の中や。（ハル）かたい（堅）ことばはおもてむき（表向）。そのないしやう（内證）は（長地）やわら かや。なさけ（情）あきなふながれ（流）にも。（ハル）ふかい（深）こゝろのあればこそ。

○栴檀は二葉より云々。人の幼にして聰慧なるに借り、觀佛三昧海經に見ゆ。○楠は二はよ り名石云々。東雅、一六に「石楠といひしは、即ち今も俗に、此の樹久しくして化して石と なれるなどいふ事は、太古の時より云ひつゞきし所と見えたり云々」ともあれば、此句楠の 化石を云へるならんか。古くより此の傳說一般にありたりと見え、吉野拾遺物語一にも「楠正 行の墓所にいかなる者のしわざにやありけん書きつける、楠のあとのしるしを來てみれば 誠に石となりにけるかな」とあり。こゝまで或は栴檀といひ楠といふも、すべて人の人たる 者は幼少より非凡の瑞相ありといふに歸す。○武士は腹中を出て云々。稍難解なる句なれど も、初めの腹中は、母の胎内の義。後の腹中は、心中、所存、覺悟といふに同じきが如し。 即ち武士は武士らしく、幼少より既に覺悟を定む。節義の爲には死を輕んずる腹中ありとい ふ單なる義なれども、腹中即ち心中、心中また心中立の義より情死に轉義せるより、暗に後 段叙出の喜之介の心中（情死）と照應して、町人の喜之介の腹中の定め方は、トンデモない情

死沙汰なりと以て武士と町人との差をきかしたるものなるべし。而して町人の此の腹中の定め方の悪しきを直ちに、作者は辯護して「夢の世の中」といひ、「堅い言葉は表向き其内證は」といへるなり。最初堂々と、人の人たる者の幼少より聰慧なる事や武士の覺悟の程を說き、町人の喜之介に中々云ひ及ばずと見れば、おもへどゆめの世の中やにて急轉直下、而も如上の堅い言葉をその實、非人間的なりと冷殺し去れる也。喜之介もやつとこれで浮べるならん。

○ゆめの世の中。 浮生若レ夢、爲レ歡幾何(李白)。一切有爲法、如ニ夢幻泡影ー(金剛經)など見ゆ。

○ながれ。 遊女の異名。昔、常に扁舟に身を任せて、波のまに〳〵流れ、逢ふ人々に情を賣ること流水の如かりしよりいふと。但しこゝは境涯の意にして暗に遊女の義を兼ねたる也。

○深いところ云々。 流れと深いとは緣語。君傾城に却つて深い情ありとは先刻御承知の通。

はなのひしのや(菱の屋)はやきぬ(早衣)にからむ(搦)ふじ(藤)のや喜の介が。ゆうくれ(地 夕暮)ごとの玉ぼこ(玉鉾)を人のうはさに花川戶。戀のかけはし四ツ手かご。かたをそろゆる(揃)ゑもんざか(衣紋坂)たが(誰)いゝ(いひ)そめし吉原と。げにはんじやう(繁昌)の大もん(大門)を入(入り)こむ人や仲の町。

○はなの云々。 はなと菱。搦むと藤とは緣語。喜の介も亦トンダものに搦みついたもの也。

大正十一年十月二十七日印刷納本
大正十一年十一月一日發行
第二冊（每月一回一日發行）

江戸軟派研究

尾崎楓水執筆

第二冊

要目

評釋 藤蔓戀のしがらみ
藝者の起源
大近松の破倫物餘談

江戸時代年號一覽

年號	年數	西暦
慶長	一九	（一五九六—一六一四）
元和	九	（一六一五—一六二三）
寛永	二〇	（一六二四—一六四三）
正保	四	（一六四四—一六四七）
慶安	四	（一六四八—一六五一）
承應	三	（一六五二—一六五四）
明暦	三	（一六五五—一六五七）
萬治	三	（一六五八—一六六〇）
寛文	一二	（一六六一—一六七二）
延寶	八	（一六七三—一六八〇）
天和	三	（一六八一—一六八三）
貞享	四	（一六八四—一六八七）
元祿	一六	（一六八八—一七〇三）
寶永	七	（一七〇四—一七一〇）
正徳	五	（一七一一—一七一五）
享保	二〇	（一七一六—一七三五）
元文	五	（一七三六—一七四〇）
寛保	三	（一七四一—一七四三）
延享	四	（一七四四—一七四七）
寛延	三	（一七四八—一七五〇）
寶暦	一三	（一七五一—一七六三）
明和	八	（一七六四—一七七一）
安永	九	（一七七二—一七八〇）
天明	八	（一七八一—一七八八）
寛政	一二	（一七八九—一八〇〇）
享和	三	（一八〇一—一八〇三）
文化	一四	（一八〇四—一八一七）
文政	一二	（一八一八—一八二九）
天保	一四	（一八三〇—一八四三）
弘化	四	（一八四四—一八四七）
嘉永	六	（一八四八—一八五三）
安政	六	（一八五四—一八五九）
萬延	一	（一八六〇）
文久	三	（一八六一—一八六三）
元治	一	（一八六四）
慶應	三	（一八六五—一八六七）
明治	四四	（一八六八—一九一一）
大正		（一九一二—）

〔備考〕各年號の眞下の數は、該年號使用の年數を意味し、括弧内二行の數字は、該年號の初年と末年との西暦年數なりとす。

○玉ぼこ。道の枕詞の玉鉾より轉じて、道そのものをいふ。玉鉾の及(み)と道のみと續けたるなり。○うはさに花川戸。花の咲きたる如く、ぱつと人の噂に立ち居れる也。○花川戸。淺草廣小路の東にして、今其北を花川戸町、南を材木町といふ。昔、花川戸の渡といふは、材木町に在りしなり。砂子に、「淺草竹町の渡しを花方の渡といふ。花川戸は川端町の通也」とある竹町は、木竹店のありしに由り、又花方に訛るも端河津(ハナカウヅ)の謂ならん。一書に業平渡と云ふは、本所業平町に對すれば也。云々。(地名辭書)。花川戸、貞享年中板本江戸繪圖に、舟川戸とあり、筆者の誤りなるべし云々。○四つ手駕籠。山籠より小さき粗末のもの。四本の竹を柱とし、割竹にて略式に編みて作り、小さき垂れのあるもの。よつでともいふ。江戸繁昌記二に街輿と出づ。○戀のかけはし四つ手かご。かけはしは懸橋。棧道。花川戸の川戸をうけ、また四つ手駕籠にもかゝる。喜之介の爲に戀の棧となりて、早ぎぬが許へ渡すものは、四つ手駕籠なれば也。○かたをそろゆる衣紋坂。肩をそろゆるは、衣紋を正すの意より衣紋にかゝり、また駕籠舁の二人肩をしやんと揃ふるにもかゝる。遊客自身が衣紋を正したりしは菱川畫の繪本道引(延寶六印本)にも、「金龍山(待乳山)、こゝにて馬より下りて、(江戸花街沿革誌に曰く、貞享元祿より以前は、遊客は舟と馬とに依りたり。馬は輕尻馬と呼び、二人の馬奴に手綱を取り乍ら小室節を歌はすな事

者なりとし、又白き馬を好みたり。」やうすを直し、えもんなどつくろひ心せらるゝ所なり」とあり。

◎**江戶の辻駕籠**。參考として、「皇都午睡」三編、中より左の記事を拔く。

「江戶通り筋の木戶木戶見附々々に、辻駕籠とて駕籠に尻かけ、往來を見かけ次第、駕籠へ〳〵、丹那かごへと呼び居る駕籠屋といふもの、一町に五軒と七軒はなきはなし。（中略）道中の雲助には非ず。いはゞ江戶裏店より出づる駕籠舁也。（中略）直段は大抵極りありて、道中の雲助の如き、餘りに餘計に貪る事なし。辻駕籠の得意とする所は、遊所通ひ也。四里四方ある江戶の地に遊所なく、深川、本所、根津、谷中、麻布、赤坂なんど遊所諸處にありけれども、當時（弘化四年頃）禁止となりて、いよ〳〵不自由なれば、南に品川宿、西に內藤新宿、板橋、北に吉原、千住と此の五ヶ所也。何れも日本橋より二里半、三里に餘る道なれば、行く計にも隙どれば、はづかの隙に駕籠にて駈け行き、歸るにも又其地より駕籠にて駈戾る故、辻駕籠大に流行るなるべし。駕籠賃の相對も京攝の如く直切小切するにも及ばず、四文錢何本とか、南鐐とか埒早く乘ると直ちに駈け出す事誠に宙を走るが如し。人立多き四ッ辻にてもヱイハアと掛聲して腰をひねり、云々。駕籠舁、寒中にも肌を脫ぎ、入墨見事にして手を盡せる武者繪などあり。（中略）間には、駕籠の垂をおろしありとも、見附々々にては、手早く垂れを上げて走れり。吉原大門口、品川入口、新宿には、夜明前より、駕籠へ〳〵と聲をかけ、數十人控へたり云々。」

此の皇都午睡は、西澤一鳳が、弘化四年以後三年間、江戶にゐたりし時の隨筆なり。されば此の藤蔓戀しがらみの新內正本の現れたる安永三年以前（新內は安永三年六十一歲で歿）より、七八十年を經たり。然れども當時駕籠舁の風俗としては前後大差なかりしならんか。

因みに、江戸の辻駕籠の數は、元祿の頃より辻駕籠御免となり、江戸中にて百挺を限られたりしが、寶永八年卯三月二十日、向後六百挺と定む。內、町方三百挺、寺社方百挺、代官附二百挺なり。（當時辻駕籠流行りて、千八百挺ありしを、斯く激減せしめしと云）正德三年には、町方の數を更に百五十挺に減じたりと云ふ。然れども法令再び弛み、後は夥しき數となりしと。新內節正本の凡てを通じ、遊里通ひの描寫、多く此の四つ手駕籠なり。即ち新內、若狹掾等の後の所謂新內節盛行の初期をなしたる明和安永天明の頃に於ても、遊里通ひは多く駕籠を便とし、多く之を用ひしと見ゆ。したがつて此期は再び駕籠の數夥しき數となりゐたりしならん。

○ゑ（え）もんざか。江戸名所圖會云、日本堤とは、荒川（隅田川の上流に曲れる名なり）の大堤なり。聖天町より三之輪町に至る。此の大堤の半にして、西へ降るを衣紋坂といひ、新吉原に入る道なり。遊客の此處を往くもの、必ず衣紋を正して行くとの意より名づけしとぞ。京都島原に衣紋橋あり、恐らくは之より轉せしならんと云。○吉原。初め日本橋の東にありて、葭多き中にありしかば葭原といひ、後字を祝ひて吉原と改む。明暦二年、幕命により、日本堤の內、田間に一廓を開きて移轉し、新吉原といふ。世俗舊によりて吉原を以て呼べり。或は仲

ともいふ。一廓の内仲之町を以て眼目とすれば也。日本堤より降る小坂、衣紋坂、五十間茶屋町を表口とし、大門を設け、江戸町一丁目、二丁目、（舊伏見町を合す）、揚屋町、角町、京町一丁目、二丁目の六坊に區分す。江戸砂子云、明暦二年に所替被仰付、此處は龍泉寺村と云ひしなり。江戸繁華に隨ひ、傾城市中に在りては、如何とて、此田地を下され、引料壹萬五千兩。明暦三年店開き、新吉原と號す。五町とは、江戸町、同二町、角町、京町、新町なり。此外堺町、伏見町、揚屋町あり。中の通りを仲の町といふ。□新吉原の地は、舊千束村なりとも、金杉村（龍泉寺）なりとも、又山谷村なりともいふ。千束は、本來郷名にて、金杉山谷等も郷內なり。此に決すべきは、金杉か山谷かといふにあり。形勢を以て推すに、金杉龍泉寺村といふもの頗協へるに似たり。山谷といふは、山谷堀を往時去來の小航路としければ、誤りて山谷の新吉原といへるにや。（地名辭書）○**仲の町**。入り込むと仲とは縁語をなす。

仲の町は、前に出づ。

◎衣紋坂より仲の町まで。「衣紋坂　山谷より八丁目に左の方へ下りる。是を衣紋坂といふ。時に高札場ありて、武家たりとも槍ならず、馬駕籠ならず。など制札あり。是より大門口迄の茶屋を五十軒と唱へる。同じく案内する茶屋なり。爰を七曲りともいふ。道少し曲りありて、大門口を入る正面仲の町にて、往來廣く、両側皆茶屋ばかりなり。店をお

ろし、絹莚敷物數きつめ、二階表座舗には、高欄手摺付にて、往來を見下し、下より廣き段階子をかけ、大體茶屋は間口二間半三間也。」（皇都午睡三ノ下）之にも見ゆる大門外の五十軒とは、両側に茶屋二十五軒宛ありたれば云ふといひ、よりて五十軒町ともいふと花街沿革誌などにあれど、此は誤りならん。五十軒はその實五十間の誤なり。地勢上、僅か五十間の路傍に、如何して二十五軒づゝの茶屋並ぶべきや。但し少許の茶屋はありたり。さて此の大門外の茶屋と廓内の茶屋との品等如何。次を看よ。

詞

きさくなちや（茶）屋の佐次兵衛がサア〳〵だんな（丹那）が御出あそばしたおつれ（連）さんはごふ（何う）あそばしなされましたと。きげんゐがほ（機嫌笑顔）の女房（にようぼう）がおく（奥）へともな（伴ない）い入りにけり。

〇きさく。打解けて氣輕なり。氣のさくきことなり。源氏物語にも見えたる景迹（きようさく）、この轉訛なりと云。〇茶屋。昔は揚屋、揚屋附茶屋の次に此の茶屋位ゐせしが、揚屋衰へ、揚屋附茶屋もその餘波を受けたる寶暦十年頃よりは、此の茶屋全盛の世となれり。次に悉しく說かれ、

◎揚屋と揚屋附茶屋。茶屋。（廓内と廓外）

揚屋。元吉原時代より、太夫（當時第一位の遊女）格子女郎（第二位）を買はむとする客は、必ず揚

屋に於てす。（第三位の局女郎以下然らず）從つて揚屋は、廓内に全權を振ひ、延寶天和頃は最も昌え、從つてその數も多かりき。然るに此より先寛文八年、散茶女郎（從來の局女郎の次、端女郎の上の如き品等の妓）現れて、安價にして實用的なる妓風を宣傳せしかば、一時に世に行はれ次第に局女郎は勿論、太夫格子まで之に壓倒さるゝに及び、終に太夫格子衰へ跡を絶つに至りぬ。以後散茶は妓の首位となりたり。然るに此の散茶は揚屋の繁縟を用ひず、茶屋より客を招きたるより、當然揚屋並に揚屋附茶屋は、太夫格子の運命に殉ずるに至れり。乃ち元文五年頃、彼等は揚屋町より新町（京町二丁目）京町（一丁目）に移住し、寶暦十年頃には揚屋全く廢れ、茶屋の獨占となりたり。（恰も此頃廓内に藝者現れたり。「**藝者の起源**」参照。）

揚屋附茶屋。元吉原時代より、揚屋は各々一個の茶屋を隷屬せしめ、茶屋の屋號は、揚屋と同一ならしめたり。新吉原開創後、揚屋が揚屋町に住むに及び、揚屋附茶屋も揚屋町に住めり。揚屋と同じく十八軒ありたり。然るに散茶女郎の出現、次で普通茶屋の勃興に逢ひ、揚屋附茶屋は、揚屋と共に勢力衰へ、揚屋亡ぶるに及んで從來下位なりし茶屋の下に屈伏するに至れり。

茶屋。（引手茶屋とも後にいふ）元は、下等の妓を買はむ客を妓樓へ案内する役のものなり

しが、散茶女郎の勃興により、揚屋、揚屋附茶屋を壓倒するに至りたり。(引手は案內の義)。二種あり、廓內廓外に分つ。

仲の町の茶屋。(廓內)新吉原最初の頃は、商家と茶屋と並び建てられしが、茶屋全盛となるに及び、商家退轉して、仲の町は殆ど茶屋ばかりとなり、揚屋町にもその數を增すに至りたり。茶屋の營業は、遊客の送迎なれども、茶屋より送る客は、大籬(上等)、半籬(中等)に限り、他は送り迎へを爲さず。

廓內茶屋の收入。(一)揚代に準じて引手錢と稱し、客一人につき銀三匁、天保頃は五匁の口錢を妓樓より受けたり。(二)遊女より五節句每に付け金として金一歩づゝを受く。(三)女藝者が客より貰ひし纏頭(普通二朱)の內より小せりとて二百五十文を差引く。(四)客よりの祝儀若干。(花街沿革誌に據る)

茶屋が料理兼業となりしは天保の初めなり。此頃茶屋內に料理番を置けり。元は雇人男女四人づゝを普通とし、送迎、杯盤の周旋は主に主婦の任たりき。

(守貞漫稿には、收入につき異說あり。曰く、「仲の町七軒の茶屋を第一とす。酒肴の價を賦けて送りと云。妓院の送迎の料とする也。七軒の茶屋送り料一客金一分其他仲の町の茶屋送り二朱づゝ也。七軒は大門內右の七戶を云ふ。仲

の町及揚屋町の茶屋凡て百一二十戸あり。云々。」此の送りは引手錢とはまた別の收入ならん。）

茶屋の數。（廓外共）諸書により又年代によりて種々あり。就中、此の藤蔓戀しがらみに時代の相當せる明和より文化迄の數を、花街沿革誌上、幸堂翁の記述によりて抜かん。（藤蔓の正本を大凡そ明和年代と見ば、興更に深からんか。）

大門内外揚屋町並に裏茶屋まで

最高百五十軒内外。最低九十軒内外。

山谷堀　片側並に土手際迄船宿

最高六十軒内外。最低五十軒内外。

（寛永の頃より今戸橋向うの船宿は絶えたり）

（文化文政の頃より田町に二十軒、龍泉寺町に二十軒の引手茶屋を開店せり。）

大門外の茶屋。（一）五十間町に茶屋ありしが、（嬉遊笑覧に曰く、明和五年四月燒亡以前迄は両側にて二十軒ありし）此等は、仲の町揚屋町の茶屋とは異りて、特に編笠茶屋と呼びたり。是より先き、明暦年中、山谷の仮宅に業を營みし頃より、士民の妓樓に詣るもの、編笠を被り扇を鼻にあてゝ面を掩へる慣はしとなりたるを以て、此等編笠茶屋の店頭には編笠を吊し置きて遊客の望むまに〱之を貸し與へ、幾何の料を取りたり。此の編笠には、茶屋々々の燒

印を捺して目標とし、彼の夜間に客を送る時、定紋附けたる提燈を點すと同じき用に供へたりと云。但し此風享保より稀になり、元文に至り全く止み、後には編笠は名のみとなりて、一般客人の身仕度する所となり、同じく引手茶屋と稱するに至りたり。(二一)此後田町(一に泥町)にも編笠茶屋を生じたり。「守貞漫稿」當時、百八十餘戸ありと同書に見ゆ。(二二)山谷堀の船宿及び會所船宿も大門通行の權を得るに及び、引手を兼ねたり。

廓外茶屋の收入。別に揚代の外、送りと稱する費を取らず。妓院より一客二百文の錢を與ふ。(守貞漫稿)

提灯の柄に由る各屋の品等。序でに面白き記事なれば紹介せん。當時引手の提灯の柄によつて截然たる等級がありき。妓樓は鐵の柄。揚屋は木の柄。茶屋は竹を用ゐ、船宿は繩を用ゐたり。船宿ときけば粹なれど、品等は繩の最劣等なりし也。

〇丹那がお出で云々。心中する不良若年も、人氣商賣からは丹那也。**〇おつれさんは云々。**今宵はお一人といふ所也。常套の世辭にもあらざるべきか。喜之助これ迄大抵は惡友と連れ立ちて來りしものか。以下に現るゝ早ぎぬ喜之助の對話中なる、喜之助の「親女房友だちの異見」とある友達は、この不良なるお連さんには非ざるべし。同一とせば、初め互ひの浮れ心

地より誘ひしものが、喜之助の早衣といふ標的を得て、神經怪しくなりたるを見て、さてはと驚き、俄かに豹變、意見を始めたるやも不知。今宵は喜之助、早衣に秘密の用談あればさてこそ一人で來りしものならん。此のお連さんは以下の詞は、茶屋の女房の詞也。さて此處で喜之助の遊び方が餘り下種(げす)でもなき、彼も相當の家の息子なりしならんといふ證據を擧ぐべし。そは、茶屋よりせずして直ちに妓樓に赴く客を振りといふ。大籬は振りを斷り、半籬は振りと茶屋客とを選ばず、同樣に迎へたり。それ以下の妓樓は、振りと限りたり。然るに喜之助がいつも茶屋より行けるは、茶屋の亭主女房に馴染なる點より明かなれば、喜之助は、大籬か、安く下つても半籬(中等)かなりし也。すれば早衣も當然大籬若しくは半籬の遊女なりし也。息子といふ所、大籬の大盡遊びも出來ず。さりとて下等店へ行く人品にも非ずとすれば、半籬とするを正しとせんか。**○きげんゑがほの女房が**。亭主はきさく。女房は機嫌笑顏。照應し得て妙、面目躍如。機嫌笑顏やきさくにひきかへ、此の夜、喜之助の胸中は如何。今宵は、親女房友達の異見により、ふつつり逢はぬと覺悟して緣切に來れる也。(それがまた思はぬ相手の出樣で、心中とまでたうとう遣つ付ける也。)彼が胸中、萬斛の哀愁ありといふべきか。それとも意志の弱いのつぺり色男、何でもなかつたといふべきか。

藝者の起源

藝者の起源に就て多少心付いた事どもを書き記さうと思ふ。それには「江戸花街沿革誌」（關根氏）が最も要を得てゐる。今その記事に藉りて記すことにする。

遊女は、正德享保の頃までは、後世の藝者を兼帯してゐた。遊女の他に、茶屋の主婦、或はその娘などが、三絃を彈いたり唄を奏したり踊を爲したりした。此等の輩を取持と呼んだ。享保以後は漸く、遊女の色藝を兼ねることが止んだが、しかし猶新造の中で遊藝に通じたものは客の前で絃歌を事とした。寶曆の末に全く廢れ、遊女は、賣色の專門となり、爰に始めて女藝者なる一階級を生じた。

是より先き廓外では、既に踊子（一に躍子）なる者を生じてゐた。初めは遊藝を以て士民に侍づてゐたが、後には、私娼同樣となつた。此類が、後世に至つて町藝者なる名に變じた。その當時（寶曆のはじめ）新吉原へもこの踊子が輸入された。小樓で踊子の名義を以て公然色を賣らしめたものが、寶曆四年には二十餘人の多きに及んだ。然るに同八年には踊子を抱へた妓樓は

僅かに四戸、妓は五人に過ぎなかつた。同十一年には踊子を抱へた樓數は三戸、妓は三人に減じた。此等の少數の踊子は、皆他の遊女と同じく部屋を持ち、店頭に列坐したが、風俗は異樣であつて、後帶に結んだ。明和五年には、この踊子なるものは、全く絶えた。即ち新たに興つた藝者の勢に蹴落されたのである。

寳暦四年、始めて踊子の他に藝子一人があつた。同十一年には、始めて藝子と共に藝者の名を見るに至つた。即ち藝子には、大黑屋（小樓）に豊竹八十吉がある。藝者には、扇屋（大樓）に歌扇があり、玉屋（大樓）にらん、ときの二人があつた。伊勢屋（小樓）に主水があつた。是より先、寛保の頃の細見記に豊竹兼太夫、同妻太夫などの藝人のあつたことから推すと、藝子とは此等の藝人に與へた換名であらう。藝者とは單に三絃を以て、當時流行の小唄などを歌つた者の類であらう。明和五年には、藝子の數二十餘人であつて、安永七年に、藝子十六人、藝者五十餘人の多きに至つた、されば、藝子の起りは、寛保の才であつて、女藝者を生じたのは、寳暦十年頃の事であらう。云々。

なほ、同書には、文化年間から、慶應へかけて、廓內女藝者男藝者の員數を示してゐる。

	女藝者	男藝者	合計
文化年間	一六三人	四〇人	二〇三人
文政年間	一七二人	二五人	一九七人
天保年間	一〇六人	二八人	一二八人
安政年間	二四五人	二五人	二七〇人
慶應年間	三四一人	三八人	三七九人

（天保年度の減少は、關根氏は明示しないが、例の水野越前守の風俗肅清の影響に因るのであらうか。）

以上は、主に吉原に就て云つたのであるが、深川はどうであつたらう。所謂辰巳藝者はどうであつたらう。守貞漫稿第二十編娼家下から、左の數説を拔く。

「江戸官許非官許の遊里ども に藝者の賣色すること無之。唯だ深川仲町と大新地の藝者は賣色する也。故に仲町に遊ぶ者は、藝者を犯すを功とす。蓋し初參等の客には容易に賣色せず。夫も人品と時宜と金とに應じて、初會にも之を賣る。馴染客にも賣色せず。江戸深川仲町等の藝者を使すには、口止め金と稱して、客より金三兩を青樓に出し、青樓より藝者に與ふ。京阪の枕金と同意也。仲町は、藝者色とて前にも云ひし如く、色客を數輩持ち、女郎に似たり。或

は客の妻に均しき者を預け置きて遊びに行くもあり。此所の藝者は尊大にして、女郎却つて謙退す。云々。」

吉原辰巳以外の町藝者は、どうであつたらうか。

「江戸藝者とも云ふは、吉原及び深川より市中を指して云ふ言なり。兩國柳橋邊、葭町甚左衞門町邊、堀江町邊、京橋邊等に多し。天保以前は、堺町葺屋町にも有之。今は猿若町に之有りて芝居茶屋に出る也。天保後にも、堺町邊に再出せしが、當時名主熊井氏嚴刻にてその支配中には甚だ稀なり。是は、天保の府命に（天保九年十二月二十八日の嚴命。當時水野忠邦既に老中たり）町藝者も三絃等伎藝を以て座興を催すのみにて色を賣らず、親兄等を奉養の爲にする者は、之を許す。賣色をなす者は、之を咎む、之を罪す。又賣女養女にも非ず、奉公人に抱へ、藝者に出すことを禁ず。云々。京阪には、町藝者は之無し。江戸の町藝者は、專ら貨食店に之を迎ふる也。又た舟行等にも之に供する也。兩國以下前に云へる外に、下谷池の端、仲町邊、芝神明其他山の手にもこれ有り。是等は場所により一席に二朱也。（普通は一席一分、長坐には、之を一倍又は二倍すと云）陽に、藝者と稱するは私稱にして、酌人と云ふを名目とす。」

以上で大凡そ盡きてゐるが、なほ序でに京阪地方の藝子の記事を、同じく「守貞漫稿」から拔

いて、江戸と對照しよう。

「藝子　彈妓也。乃ち江戸に云ふ藝者なり。昔は藝子之無し。遊女三絃をひく。其後未熟の遊女は彈くことを得ざる者あり。或は尊大を究めて自ら之を彈かず。「一目千軒」に曰く、太夫天神自ら三絃を彈かざる故に、幇間女郎を呼ぶなり。又藝子と云ふ者外にあり。昔はなかりしに、寶暦元年に始まる云々。「澪標」（大阪新町細見）に曰く、幇間女郎と云へる者は、揚茶屋へよばれ、座敷の興を催すための者なり。琴三絃胡弓は云ふも更なり、昔は女舞も勤めし者なり。享保年中より藝子と云ふ者出で來り、云々。』然らば、大阪は、享保。京は寶暦に始まるか。

「京阪、島原新町、其他祇園島之内以下諸所の藝子皆色を賣る也。江戸吉原藝者は更に色を賣らず。他所俗に云ふ岡場所の藝者も其所の風により或は之を賣り、或は色を賣らず。京阪藝子色をも賣ると雖も、亦女郎の如く假初には双枕せず。其主人たる置屋に茶屋を以て之を談じて金を與へて後にするを本とす。其の與ふる所の金を枕金と云ふ。其多きは十兩、或は二三十兩少きは二兩なるべし。云々。」

藝者の起源は、大要右の如くで、以て京阪東都の狀況を知り得たであらうと思ふ。古今その揆を一にするといふ言葉もあるが、この藝者の起源をよくよく査ねて見たら、矢張現下の彼等賣

色狀態の詮索と大した區別は無いやうである。京阪にも無い特色であつたといふ吉原藝者の藝一本で通つたといふ事も、隨分怪しいものだが、（最初は兎も角その末は）兎に角その風が傳はつてゐるのか否らぬのか、多く何處の都會でも（大阪は、私の聞知る所では公然秘密の准公娼であるが）遊廓内の藝者が他の町藝者に比較して、藝一本で立つてゆくやうな傾向のある事は、まだ嬉しい事に思はれる。

追記――其後、藝者の起源に就き見當つた他の記事を諸雜書から拔萃しておく。

○（原本洞房語園）（享保五年）近年町々に踊子といふものお國歌舞妓が類云々。御停止にて其後又流行れり。○踊子御停止（寛保元年）舞子三絃等にて所々に雇はるゝ内に、遊女ていに類するもの多し。依つて其の類停止。（ころび藝者の鼻祖なり）（我衣）○女げいしやの事、歌舞はもとより遊女の所業なるを、後には其道心得ぬもの多くなりしより、おのづからせぬ事となれり。云々。又藝子と云ふ者外にあり、昔はなかりしに寶曆元未年に始まるといへり。（嬉遊笑覽九）○今、藝者と云ふ女は、昔舞子の名殘なり。又はおり藝者とは、深川のげいしやより云ふ。明和七年の冊子、辰巳園、藝者を喚ばむと云ふ處、はおりにしましやうかといへり。もと女共、羽織を著たる故なり。豐後節はやりて此風起れり。（同九）○豐後語りのことをいふ處、あまつさへ女が、あられもない羽織をきて、脇差まで差した奴も折ふし見ゆるぞかし。昔は堀の舟宿の女房ばかりぞ羽おりを着ける。云々。昔女郎にも男に作りたるあり。其餘風なり（下手談義）○天明の頃は、世の中賑はしく、武家にても少し酒盛めく折は、町藝者とて酌取女を招くは、何れの家にもある事なり。されど此の酌取女も、質素の風ありて、髷結に紅絹の切をよしの紙に包みて用ふる事流行り、地女等も是を學べり。今は田舍娘も、髷結に縮緬を用ふるなり。天明年間、町方の女ども、櫛卷といふ髪はやり、髪を束れて櫛につらぬき、根元を文通の反古にて卷きし物なり。今は見る事なし（蜘蛛の糸卷、追加）○女藝者流行りて江戸端

々遊所は申すに不及、並の所にて藝者の二人三人なき町はなし。餘り募りて吉原品川の賣女の妨げになるにより、賣女屋より訴へて、高繩邊の女藝者十二三人被召捕たる事ありけり。（一書に天保十年八月）皆藝者に極りて遊所に行く者なかりしなり。寛政の御改正より羽織も藝者も三味線も皆止めて、正風體になりたり。（賤のをだ卷）○寶曆の頃、扇屋の歌扇といふ者に始まれり。其初は、歌扇ひとりなりしが、後（後は昔物語。に、寶曆十二年の頃よりと云）追々に外の娼家にも茶家にも出で來て、細見のやりての前の所に「藝者誰、外へも出し申候」。これより遙か後に、大黒屋秀民といふものけんばん（見板。或は檢番。劵番）を立てたり。藝者を踊子と肩書して、店へも遊女と同じく並びゐて客をとりたる娼家もありき。其前は、藝者といふものは更になく、遊女の中にて三線を彈き、唄も歌ひしこゝにて、多くは新造なり。三線の出來る新造を揚げよなどいひて呼びて彈かせたることなり。店に並みゐる時も、皆唄を歌ひ三線を彈きたるなり。是れ昔よりの樣にて、中頃より此の習はしいつとなく止みたり。今も店を張る時に、すがゞきを彈くは、三線番とて新造の役なりといへり。（これと殆ど同じ文、手柄岡持の後は昔物語及び守貞漫稿下にも出づ）（中略）さて女藝者は、古の白拍子の名殘などの如く思ふ人もあれど、さに非ず。もと遊女より出でゝ踊子の一變せしもの也。云々。（三養雜記二）○女藝者の事を昔は踊子といふ。明和安永の頃より藝者と呼び、者などゝしやれたりと云々。（奴凧）○天保の改革には、市中の酌取女を禁ぜられたれば、藝妓は半元服となり、丸髷に結ひ繰切り齒より前の齒のみを染め三絃は繼竿なるものを工夫して密かに往來したり。昔は大なる三絃箱を携へたれば、到底箱屋の男手を借らざれば、運搬し得ざりしを、此より後女子をして風呂敷に包みて運搬せしむるの便法となりしなるべし。（日本社會事彙）○維新前の藝妓の風は、必ず帶を長く垂し、長き笄を挿し、伊達の素足と稱して夏冬共足袋を穿かざりしこと娼妓に同じ。而して客の前に出づる時は勿論、平常にも羽織を衣ることあらず。只深川の妓のみ之を著たり。維新後帶を垂らすこと廢りたるが、明治二十四五年頃より再び流行し、笄は今も儀式の日のみ挿せり。昔は必ず最初には紋付を着して出で、後に縞の衣服に着かへしが、この事一時廢り、今復再興したりと雖も、最初の衣裳も着替も同じ樣なるが多し。茶花圍碁、笛胡弓琴等の餘藝までも心得、自から俗謠など作りて歌ひたるもの也。（同）○藝妓の名も其初は娼妓と同じ事なりしなるべし。藝妓の色を賣らぬ頃になりて、遊廓の藝妓は通常人と同じ名を付けたるべきが、町藝者が俠を以て名を賣るの點よりして奴などの名起り、之に次で男らしき名を付くるに至りしなるべし。（同）。（楓水曰く、社會事彙所說の如く、初め娼妓と同じ事なりしは、歌扇など其通りなれど、後町藝者が男名若しくは何奴と

いふに至りしは、當時男童盛んにして彼等徃々女裝せしより、それに對抗するため男に近き活潑さお俠、脇差を帶し羽織を着したるも豊後節太夫の云々もあらんが、是に最原因を置かずや。名の男名となりしは、無論男童の模倣といひて可也。)○踊子は、京は寛文、江戸は天和、貞享の頃傳來し、(楓水曰く。是れ町方の踊子也。但し外骨編「賣春婦異名集」には、寛永頃より江戸に在りしといふ。けだし外骨氏は女歌舞妓に之を結び付けしならん。私娼擬ひの踊子はその以後を正しとすべきか。)元祿二年五月二十一日には、已に踊子の屋敷方への出入を禁じたり。然るに寛保延享(八代吉宗)の頃は、江戸中到る處に踊子の二三人なき町はあらざりきと云。吉原にては女藝者を略して藝者といひ、之に對して幇間を男藝者といへり。市中にても明和安永の頃より踊子を藝者といひ、廓内の藝者に對し之を町藝者と謂へり。(百科大辭典)○寶暦の末、藝者踊子と肩書して傾城同樣店頭に列せしめ客を取らしめたる娼家云々。其等も風俗は傾城の仕掛前帶の姿と別を立て後帶に裝はしめしとぞ。(近世世相史)○江戸の踊子は、元祿以前天和年間に生じ、古くは舞子とも云々。元祿となり立花町、難波町、村松町を本場として舞曲以外盛んに能業をも云々。○明和年間、即ち吉原に歌扇の出てから少し後に、芳町に菊彌といふあり。是が踊子の全盛を誘ひ、彼等の跋扈を見るに至りしかば、吉原品川の遊女屋は、上に訴へ此の菊彌を土地より追拂へり。次で有名なりしは深川仲町の本屋お六云々。○踊子を藝者と云ふやうになりしは天明の末年より。○天明享和時代には年の長けた女多かりし。○踊子の送迎は初め其母親なりしも文化年間止み、間もなく箱丁現はる。○扮裝は振袖で來て留袖に替へ、歸りは又振袖で、此風後に廢れ、冬は專ら銘仙縞の小袖、夏は絣の帷子。年中素足の吾妻下駄。深川のみ羽織を著たり。深川は舟宿の女將を眞似たる也。(以上日本花柳史)○深川、後は(天保に既に然り)羽織も著れば男裝もせず、淺脂薄粉、水も滴る島田髷に仕掛といふ無反り一文字の櫛を戴き、無地小紋裾模樣などの紋付瀟洒たる衣裳に下げ帶といふ清妍の風貌は、やがて世に辰巳の俠骨と云々。(近世世相史)○江戸の踊子又は町藝者は、私娼類似となつたので、天和三年、享保中、寛政中、天保十年八月とに吉原からの申立で、橋町、高輪等の藝者を召捕つた。文化十年には奢侈を禁じて美裝の者は夫々押込を命じた。○幕末期、吉原藝者は、町藝者をして一切廓へ三味線持つては入らしめなかつた。深川は文化文政に榮え、柳橋は安政より榮えた。(以上日本花柳史)○藝者に關する法令。踊子時代は元祿、寛保、延享等。藝者時代は天明七。文政七。天保四。天保九。同十三。弘化五。嘉永元等の諸法令町觸等苛嚴を極めき。法令等の一斑は、百科大辭典並に日本社會事彙等に散在せり。(楓水補)

大近松の破倫物餘談

大近松の三破倫曲を讀んでゐると、誰しも氣の付くことは、姦夫姦婦以外他の配在人物の關係が、三曲殆ど同一揆であることにであらう。試に表解を以て示したら、左の如くである。

（昔　暦）

お　玉→茂兵衛
助右衛門→おさん
おさん←→茂兵衛

（波の鼓）

床右衛門→お種
お種←→源右衛門

（重帷子）

妹深雪→權三
伴之丞→おさゐ
おさゐ←→權三

昔暦と重帷子とは三系を爲してゐるが、特り波の鼓だけは二系である。之に若し本夫と姦婦との關係が加はれば、併せて四系若しくは三系である。世上普通の破倫は、姦婦姦夫と姦婦本夫との二系に過ぎぬ。一系若しくは二系を增してゐるだけ、戲曲であり又た脚色の妙――寧ろ技巧茲に在りと謂ふべきか。之に依つて想ひ起されるのは、私の淺い智識では、かのシユニッツレルであつたと思ふ「リング」といふ短篇や、江戸末期讀和の一たる實名梅亭金鵞作の「春情花朧夜」などである。姦夫にまゐつてゐる女中（昔暦）や敵役の妹（重帷子）を使つたり、三戲曲全

部姦婦に横戀慕の敵役を配し、細流朝する處此の大江といふ體で、姦婦姦夫の結合に終つてゐる。芝居といへば芝居だが、また人事の不可思議、宛轉なることを示して餘りある。しかも不倫の最大楔子、動機たるものは、夫々三敵役のお蔭たるに於てをや。人形なればいゝものの、生きた役者であつたらば、嫵嫌な役廻りであらう。

先づ三姦夫の容貌器量の美醜上下から品隲を始めよう。

「昔暦」の中の茂兵衛は、さしたる印象も我等に殘らぬ。唯だ下女のお玉の「同じ手代衆の內でも、茂兵衛どのの樣な、かりそめに物言ひも、あいそらしうていつ腹立顏も見せず。ほんにあの樣な男持つ女は果報」といふのを無條件に受入れても、のつぺりした京男の唯だ實體が取り得の――餘り意氣地もなささうな、手代の顏より映らぬ。その夜、玉とばかり思ひ込んで夜這ふにも、「次の茶の間に玉が寢る。疊はいづく摺足の屛風にはたと行當つて、吃驚したる膝ぶるひ」より他の藝はない。極めて密男には不似合である。宜なり全篇殆ど彼の印象はない。

「波の鼓」の源右衛門もさしたる印象はない。彼は唯だ据膳の箸を撮んだばかりだ。何とかは男の耻と單に考へたに過ぎなからう。破倫は、前後一回、當夜のみであつたらう。(其後、お種の處へ寄り附いたげに書かれて居らぬ。)されば其の一回が懷胎したとも、況してその一回の取食から

大正十一年十一月二十七日印刷納本
大正十一年十二月一日發行
第三冊（毎月一回一日刊行）

要目

浮世繪の賣春讃美
藤十郎擬間男の件
本朝艶畫考
涉獵漫筆

尾崎楓水著

第三冊

○廣重の「美人赴莚圖」

週刊朝日二ノ五（大正十年七月三十日）に高須梅溪氏の「夏の江戸に於ける凉味」といふ文があつた。其中、浮世繪美人の夏姿を列擧して廣重に及び、廣重の美人赴莚圖が云々といふ記述がある。知らない人は、廣重にそんな外題の美人畫があつたかと不思議に思はれたであらう。あれは實は私の藏品に私が命名したものだ。原畫は外題がなかつた。廣重最初期の作として珍中の珍たる畫圖。拙著「浮世繪の印象」にその寫眞版を掲げてゐる。その時私が拈つて斯く命名したのだ。高須氏程の大家も拙著からと書くのが估券に拘るとでも思はれたのか、却つて書かれなかつたが故に人を惑はすやうな態となつた。氏は原畫がもと〳〵此の題だと誤解されたのか、でなければ讀者に忠實なる爲にも出處を一々記載すべきである。同氏としては似合はしからぬ事と思ふ。事、小生の命名した畫題故一言した。

○ゆかりといふ飮料

ゆかりは黄ろいあられのやうな、湯に入れて飮むと香りがあつて氣の利いた飮物であることは先刻御承知であらう。荊妻は越後出であるが、新潟の名產だそうな。所が仙臺にもあると後に他から聞いた。そのゆかりは名古屋のいさうあたりの賣店ではこゝのへと標記してゐる。そのゆかりが瀧亭鯉丈の大山道中膝栗毛初編の上にある。中橋の茶屋で、

……また湯をくんで來る。福七「ハアゆかりか妙だ〳〵。是でやつと目が覺めた。德さん見ねえ、近年は茶ばかり飮ませちやア置かれえ。三度が三度品を替へて呑せる云々。」

とある。此本種彥の序に文化十四とあるから、其頃既に此の飮料が江戸にあつたのである。何處の名物かは分らない。

○子おろしの藥代金

子おろしの藥代金が、近松の「堀川波の鼓」の中にある。同中の卷に、

「御勿体なや私は何にも存じませぬ。此間お種樣、人に隱して子隋藥を買うてくれさおしやりまして、一貼を七分宛、三貼を二匁一分で買つて參つたばつかり……」

と、女中の言葉だ。藥名の分らぬのが殘念である。

○傾城にまことなし云々

傾城に誠なしとは譯知らぬ野暮の口からいきすぎの、とは浦里の文句だが、古い唄にも色々ある。嵐小六調の「里の松」に、

傾城に誠なしと世の人の譯知らずなさけ知らずの言葉ぞや……。

近松門左衞門作、同東南改調。傾城にまことある文といふにも、

「傾城に誠なしと世の人の中せどもそれは皆僻言。譯知らずの言葉ぞや。誠も僞も本一つ……」

とある。

自分の首が落ちようとは、夢更考へてゐなかつたらう。他の二姦夫の獨身とは事異り、源右には女房があつた。分別者の頂上である筈である。それが此の有樣。以て當夜のお種が如何に酒のせゐとはいへ、狂態、嬌態のある限りを盡したかが知れよう。分別者の年輩の彼が、殊に當夜破倫を即行するに於て、餘程の誘惑があつた筈だ。作者は、一も源右の心理に觸れて居らぬ。唯、据膳食つて、さあといふ女敵討のドタン場に逃げ廻る卑怯者とよりしか書いてない。

「槍權三」の權三は、おさゐの妖婦的半面、變態性慾の可憐な犧牲のやうに書かれてゐる。彼の容貌は絶倫である。その容貌が凡てに仇となり、彼の手練の槍術もむざ／＼伏見橋上の露と消える。容貌から器量から少壯武士の典型、それがおさゐの爲に蹂躪される。然し西澤一風の「亂脛三本鑓」には、全く此とは正反對。おさゐ結婚以前に、一度おさゐから持ちかけ、危ない首尾。おさゐ結婚後そのすました奥樣ぶりが癪に障り、今度は權三から挑む。遂ひこゝに破倫の構成と、極めて人間的に、凡庸情痴の展開として描かれてゐる。「三本鑓」は、享保三年作、大近松より以後であるが、恐らく之が實説であらう。さうとすれば、寧ろ權三の方が姦夫の性格者として最も遺憾ない。一風はおさゐを平凡化し、大近松は權三を平凡化して了つてゐる。

姦婦姦夫二組死んで、一組（昔暦）助かる。こゝにも大近松の技巧を覩るべきであらう。

浮世繪の賣春讚美　下

師宣には、繪本が多くある。到る處に此の遊女が描かれてゐる。然し未だ遊女本位のものではなく、一般に遊廓內の描寫、太夫の道中姿であるとか、格子先の氣色であるとか、座敷で客と遊宴の狀であるとか、まだ何處のなにがしといふ太夫夫々の特徵もなければ、其の遊女の顏にも一々の個性が現れてゐない。次には京都の畫家である西川祐信が出でた。祐信は他の美人も描いてゐるが、花柳美人も可なりある。例の豐頰、惡くいへば丸ぽちやの顏である。師宣に比べると餘程寫實的で、全體に色氣が現れてきた。その感化が多少江戸に及んだらしい。奧村政信の美人は、稍之に似て居る。大阪の月岡雪鼎も、肉筆ではあるが、祐信風の遊女を盛んに描いてゐる。政信の次に西村重長の門人石川豐信が現れた。政信も豐信も、丁度師宣と祐信とが產んだ子や孫のやうに、寫實的であり乍ら、まだ何處かに上品な、甘くない所がある。まだ祐信や雪鼎の方が、上方式といふのか、餘程甘いといつてゐゝ。師宣以後に、或は之と前後して懷月堂一派の畫家がある。度繁など、その名手で、線の强い割合に、軟かな感じのものである。祐

信に感化が及んだらしいもので、美人は、天平式の豊頬、大抵一人立の大きな美人が多い。
次に鈴木春信が出でた。春信は、例の極めて涼しい眼の、誇張的と思はれるやうな細い手と足との所有者たる美人を多く描いてゐる。花柳美人も多い。それに此の畫家は、餘程戀愛の場面に巧みな技倆を持つてゐて、遊女の夫々の扮態。立つたり坐つたり、歩いたり、それに四季の風物が背景となつて、餘程風情が加はつてゐる。その美人の代表作は、繪本「青樓美人合」五冊である。（明和七年版）但し之には背景がない。然し春信の美人殊に明和頃の花柳美人を見る好模型である。總てが處女性を失はない遊女の如くに描かれてある。初々しい、けだかい、泥中の蓮といふが、性來が蓮であつて、また永久に蓮であるやうな、少しも頽廢的な處や、遊蕩氣分などがない。顏は餘程類型的であつて、個々の描分がしてない。之が缺點といへば缺點であらう。
次に磯田湖龍齋がある。（豊信、春信同樣西村重長の門人）此の人の花柳美人は、春信と大同小異である。幾分實感味が多いかといふ迄の事である。丁度之と前後して、勝川春章と北尾重政との合作「青樓美人合姿鏡」の繪本三冊がある。（安永五年版。春信の「青樓美人合」との距離は七年ある。）之は、春信の「美人合」とは、大體に於て異つた物である。春信のは、遊女の肖像集であるが、春章重政のは遊女を中心に、背景の密なるものがある。殊に春夏秋冬の風物の推移を添へて情趣に豊か

なるものがある。即ちこれは美人本位といふよりも、遊廓氣分本位といふべき物である。春章などの顏も案外いゝことを首づかせる物である。鳥居清滿（鳥居三代）描くの美人も、上品なエロチックといつた氣分で、半裸体式のものがある。石川豊信の感化が認められるものである。

次に鳥居家四代の鳥居清長がある。この人は、頗る背の高い美人を描いてゐる。清長には漸く藝者の繪も現れてゐる。線は頗る勁い。さうしてその勁い線が案外、柔かな感じを生んでゐる。然し大抵は、花魁に何物かを添へ、客とか、朋輩女郎とか、瑒るが、矢張り花魁の繪が多い。半裸體のやうな作もないではない。清長は、春信を一層現實化して、所も室内室外色々ある。

次の歌麿に及ぶ中間、春信が父、清長はその子、歌麿は其の孫のやうな關係になつてゐる。清長の美人は、現實的ではあるものの、まだ頹廢的な所が餘程少い、瀟洒な氣分といつていゝ。清長以前の歌川豊春にも美人はあるが、大抵田中益信（春信門人）あたりの畫様にちかい。

次が、愈々喜多川歌麿である。歌麿は、實際美人の天才と呼ばれ、汎く歐米にも喧傳せられてゐる畫家である。彼は隨分遊蕩家であつたといふ話もある。そのせゐか、描く所は花柳美人が多い。殊に青樓、或は遊君と名を冠されたものが多い。例へば青樓美人名花合、青樓十二時、遊君を冠らしたものは、遊君六家選、遊君七小町といふ類である。その顏の類型であることは

爭はれぬ事實である。然し其の歌麿式とも謂ふべき妖艶な、打上つたやうな、戀の諸分を知り盡してゐるやうな、併し何處かに冷たさのあるやうな顏。美と淫蕩と神聖と、それに江戸女の聰明、利口な所がよく現れたあの顏には、誰でも動かされないものはないであらう。敲いたら案外冷たい、情のうすいものであるかも知れないが、見た眼は非常に挑發的である。色氣が多い。さうした顏が、彼の繪を繰る何處にも（遊女以外の物にも）轉がつてゐる。誠に彼は、生れ乍らの青樓畫家、遊君畫家であつたのである。彼の晩年の作に、「青樓年中行事」二冊の繪本がある。これは、當時の花柳史の好材料である。然し美人の特徴は之には缺けてゐる。（享和四年版）

勝川春潮（春章門下）の美人は、八分清長、二分歌麿といふべきで、稍々豐頰、惡うはない。

次に、細田榮之がある。榮之は生れが、浮世繪師中稀な高い家柄であるせゐか、（彼は、御勘定奉行細田丹後守三世の孫。彼自身も九代家治の御小納戸役であつたといふ）其の書も描かれた花柳美人も中々氣品の高いものである。遊君も御殿の奧方かと思はれるやうに描いてある。恐らく彼は、モデルを見る事少なく、唯自己の高雅な趣味から描いた美人に、遊君を冠らしたに過ぎなからう。窪俊滿（一説重政門人）には、光と陰を描分けた遊里描寫、淸長風美人がある。

北尾政演（山東京傳と同人）は重政の弟子で、初期に錦繪も描いた。その「吉原傾城美人合自筆鏡」

（天明四年）は傑作である。葛飾北斎は、初め春章に師事したが、此頃から獨自の、あの不羈奔放な、堅硬な精緻な、一物も苟もせざる風俗畫風景畫を描き始めた。彼はその製作往く處として可ならざるなき概があつたが、美人畫も初期のものは、まだ艶冶な態があつて惡うはない。菱川宗理時代に私の好きなのがある。美人畫の製作は、寛政享和の頃に多い。

次に初代歌川豐國があり、またその弟子の國貞の類がある。花柳の美人も隨分盛んに描いてゐる。豐國の遊女は、顔は歌麿風、姿は清長風色々あるが、凡て肉に乏しい。迚も歌麿や清長の魅力はない。國貞（後の三世豐國）は、藝者に於て巧みである。遊女は、格別遊女らしい特徴はない。唯英泉流に描いたものに、娼婦らしい匂がする。豐國の弟子に、今一人國芳がある。この男の美人は、また頗る特色がある。傳法肌な所がある。すつと胸の溜飲まで下るやうな。然し遊君の繪は、餘り傳法肌でもない。藝者の描寫、或は玄人上りの町女房と思はれるやうなものに、堪らない好いものがある。江戸ッ子の意氣と張りとを象徴したやうな美人を多く描いてゐる。豐國と同時代に歌川豐廣がある。その美人は豐國より品がある。その弟子に初代安藤廣重がある。池田英泉に似た美人で稍淋しい。（豐國、豐廣は、共に豐春の門人である。）

同時期に英泉がある。これは天下一品の美人畫家である。挑發的な蠱惑的な眼や、素振を持

つた美人畫家として、私の好みからは、歌麿の上にありといつてもいゝ所のものである。英泉は、英山(菊川)の弟子と普通謂ふが、これは餘り當にならない。彼は、藝者にもいゝのがあるが、女郎の繪が隨分ある、さうして其の特色は、女郎の繪に一層多いのである。文をよむ遊女の立姿、煙管で頬杖をついた思案投首の坐像、その背景には、實寫と思はれるやうな花街の氣分が、浸み出るやうに描かれてゐる。總てが挑發的である。慥かに歌麿に比して、下品である。然し挑發感、實感味は、彼より數等の上である。繪の女の話であるが、自分には、歌麿の美人よりも慥かに曖昧に富み、愛して呉れるやうに思はれる。さうして存外彼女は、客に分け隔てがない。所謂ふらぬ女のやうに思へてならぬ。殊にそのじろつと横目を使つた長い睫毛の色目斜視のやうなその眼が、天下一品だと思ふのである。げに睫毛の細かい描き方は英泉の特色であつた。並びに直ちに閨事を聯想させる、あの鬢のほつれの描き方も。

以下の畫家は、略する事にする。

以上述べたやうに、約二百年間に現れた美人畫家、其の花柳美人の中で、自分の最も印象の深いのは、三人ある。春信と歌麿と、英泉と三人である。今茲に三人の大體の特色を、今一言謂うておかう。春信は其の美人、多く室内の坐像、形もささやかに。全體の感じは、靈的であ

る。所謂靈と肉との問題で、靈の國に棲んでゐる遊女の如しである。之が處女性を永久に失はぬ遊女のやうだと謂つた譯である。

歌麿のものは、大抵半身像である。其傑作は、所謂大首に多い。之は、前にも述べたやうに靈と肉とを巧みに調和した、春信の靈に新しく肉を發見した靈肉合致の世界のやうである。而も全體の感じが、遊女を女神のやうに取扱つたもののやうに思はれる。英泉は、半身の大首は尠なく、大抵立像、坐像である。室内室外色々ある。凡て色氣の描寫が非常に多い。遊女を最も遊女らしく人間的に描いた、靈と肉と謂ふが、最も肉本位のものである事を思はせる。

浮世繪の世界は、畢竟一半を賣春婦の描寫に、一半を役者即ち芝居の描寫に（極僅かを風景畫に）斯くして其の畫技を傾倒してゐる。要するに江戸の最も民衆的藝術、世界稀覯な人工でなし遂げた版畫藝術の主要部分は、此の賣春婦、然らずんば所謂河原乞食であつたのだ。自分は之がいゝとも惡いとも今は暫らく論議を避けるが、唯如何に浮世繪が、否江戸太平二百餘年の士農工商の凡ての階級が、此の賣春婦に憧憬と讃美とを吝まなかつたか、それが諸君に多少とも御理解願へたらば、滿足である。（大正十年四月廿六日大阪中島公會堂にて講演）

藤十郎擬間男の件

元祿濡れ場の本尊坂田藤十郎を題材にした「藤十郎の戀」が嘗て大每の紙上に創作として發表せられた時、私は何の氣なしに讀んでゐた。面白いとは思つた。然し自分の藝術表現の爲に、一人妻の感情を弄ぶといふその筋が、餘り近代染みてゐて、藤十郎その人としては受けとられぬやうに思つた。原作者菊地寛君の特殊な創作興味とだけ考へた。ところが當時間もなく調べ物の序に演劇に關した古隨筆を檢索してゐたら、偶然この「藤十郎の戀」の出處か、又は菊地君がこれからヒントを得たのではなからうかと思ふ記事を、私は發見した。稍時候遲れの話ではあるが、まだ誰の口からも聞かぬらしいから、左に披露しておかう。

それは賢外集（藤十郎と同期時代の立役、染川十郎兵衞なるもの、聞き覺えの事どもを、東三八「狂言作者」が傳へて書置けるもの。賢外は十郎兵衞の法名なりと」といふにある。「賢外集」は、大半は坂田が逸事逸話を傳へたものであるが、就中、左の一項がある。

『坂田藤十郎、祇園町、ある料理茶やのくわしやに戀を仕掛け、やがて首尾せんと思ふに、件の

妻女、奥の小座敷へ伴ひ入口の灯をふき消したり。時に藤十郎、すぐさま逃げ歸りけり。其翌朝、右の茶やへ行き、妻に打向ひ、御かげにて替り狂言の稽古をしたり。此度の狂言は、密夫の仕内なり。つひに左樣の不義を致したる事なければ、甚だ此の仕内に困り、此間太夫元より、早く初日を出し申度と再三せがまれ、日夜此事にあぐみ、密夫の稽古を男に出會ひもらひては其情うつらねば、ひとつも稽古にならず。我願ひ成就致し、稽古仕たり。今朝太夫元へ、初日明後日御出しと申遣はしたりと、一禮申されし。一座の人々、扨々名人と呼ばるる人の心がけは、凡慮の外なる事と手を打ちぬ。」

これである。菊地君のと徑路は同一であるが、然し菊地君は、芝居の爲の機と知つて、妻女をして自殺せしめてゐる。これは、私も、この妻女を殺した方が作としては高調を來して面白いと思ふ。實外集の通りでは餘りに呆氣ない。入口の灯をまで吹き消した女が、その翌朝、計事であつたと第三者扱ひにしてゐる藤十郎の顏を、平氣で見て居られるといふのも不思議だ。

藤十郎は藤十郎で、平氣で舞臺の話のやうに事の仔細を述べてゐる。而も「……と一禮申されし」は、女にとつては隨分手嚴しい皮肉ではないか。どんな顏をしてこの女はこれを聞いてゐたのか。前夜、灯を吹消したのも、ちよいと役者を買つて見よう。それに當時濡事の名人、

下地は好なり御意はよしの上方女式の浮氣から來たのか。灯を吹き消したのに、嚴肅な心持がない以上は、翌朝のこの種明しにあつても、却つて岡惚れ役者の材料になつただけでも嬉しいと、反對に祝儀でも包む氣になりはしなかつたか。「一座の人々」がさてもくと感心したのも馬鹿げてゐる。然し役者、芝居が生活の要素であつた京阪の當時の男女としては、尤もかも知れない。今でも大分この類はあるらしいが。でこれを菊地君があゝいふ結末を見せたのは、菊地君の世界であり、本當の京阪の色を出してゐないといふ評を生んでもいゝと思ふ。

却說、前述の「賢外集」の中にある、くわしやといふのを餘計の事乍ら說明しておかう。これは、當時の浮世草紙にはざらに出てゐる言葉。字を宛たら花車。大槻氏の解によると「花車の音にて、妓をまはす意とも、纏頭にて廻る意ともいふ。遊女屋にゐて、諸事のとりもちをする婆なり」とある。即ち遣手の類をいふらしいが、然し、これは主に江戸方面の稱呼であらう。京阪地方のくわしやは、別者である。即ち守貞漫稿第二十、娼家の鑓手の條下に「京阪には揚や茶屋の妻を花車と云ふこと、今も然り」とある。即ち此の藤十郎の場合のくわしやは、無論料理屋のお女將である。

尙々藤十郎を悉しく御存知ない方に、ほんの輪廓をだけ書いておかう。藤十郎は、濡れ事、

殊に傾城買に扮して古今の名人、寶永六年十一月一日歿した、六十五歳。(一説六十三歳)。夕霧の伊左衛門は、格別盛名を博して、一生の中この役を十八回、而も事毎に人氣を博したといふ。近松の淀鯉出世瀧徳のうちにも「坂田藤十郎が夕霧をま一度見たいと思ふたが」とある。賢外集は、この藤十郎の逸話、中には、藤十郎が人に敎へた歌舞伎役者の心得やうのものもある。藤十郎は今で謂ふ寫實主義の男であつたと見え、次ぎのやうな詞がある。

『歌舞伎役者は、何役を勤め候ふとも、正眞をうつす心がけより外事なし』

と。然し性格は、濡事師に似合はぬ案外謹直であつたらしい。それは、

『舞臺にて、傾城買の狂言を勤むるさへさしあひなり。然れどもわれは(役者なれば)是非に及ばずと申されし』とあつて、筆者は、藤十郎の慷慨したやうに、近き比益々濡事の極端な表現、「二人寢る狂言など組」むやうになつたその當時の作者、役者の廢頽を一樣に嘆いて、「親子兄弟一所に見物なり難し。扨々苦々しき事なり」といつてゐる。

藤十郎のことは、其他諸書に散在して居る。「新撰古今役者大全」には藤十郎を堅固と評してゐる。逸話の多いものでは賢外集の他に、「耳塵集」(上下)などもある。

本朝艶畫考　上

第一、名　義　考

第二、發生の根本

第三、江戸期の盛行及禁令

はしがき

「本朝艶畫考」、頗る微妙な問題である。私は、この微妙な問題を、決して遊戯的な立場から考究しようといふのではない。汎くは、我が國民族の性的歴史、狹くは、我が繪畫史殊に版畫史と密接な交渉を有つてゐるからである。私は、本朝艶畫その物に對し、例へばその畫風又は畫樣の説明をするといふのではない。艶畫そのものの具體的な説明には觸るゝことなく、唯だこの艶畫なるものの一派の畫が、我朝の何時代から發生したか。その發生の淵源は如何。我が國獨創のものであらうか。又は支那あたりの傳來に、その俑を成してゐるか。それ等の考査と、及び江戸期艶畫たるこの派の畫版行に關する上司の取締は如何であつたらうか。さうした問題を、民族歴史の一端、或る半面の説明、その材料として提示しようといふのである。從つて讀者に依つては、私の案外枯淡な、非享樂的な筆致に失望せられ

る方があるかも知れない。然し私としては、當分この種の問題に對してはこの眞面目な學究的な態度を改める譯にはいかない。殊に斯る眞面目な記述に於ても、尠からず自身の筆に戒飭を加へなければならない。然程に今私達は、或る拘束を自分達の筆の上に感じない譯にはいかないのである。私は、自分の筆に對して非常な嚴肅さを抱いて、今この稿に筆を進めるものであることを、最初に宣明しておく。記述の順序として、まづ艶畫の名義考から始める。

第一　名義考

艶畫の本朝に於ける名義の數は、尠くとも五六種はある。普通は、之を一般に春畫というてゐる。が然し元來この春畫なる稱呼は、無論支那に生れたものである。元來「春」は、支那に於て男女の情の意に舊くから用ゐられてゐる。詩經にも、「有レ女懷レ春」とある。この「春」とは無論戀愛の義である。其他支那にありては、この春畫の他に、或は春宵秘戲圖といひ、或は、秘畫といひ、或は秘戲畫ともいふ。(支那に於ける秘畫の發生は、前漢時代なりといひ、或はそれ以前なりとの反對說もある。但し支那に於ける發生、及び其の沿革は、他日の機會に讓る。)

我朝に於ては、如何なる名義をこれに生んだか。先づ年代順によつて列擧してみよう。

一、おそくづの繪、(或はおそぐつの繪なりといふ)二、枕繪。三、枕草紙。四、笑繪。五、

わ印。

其他に、支那稱呼の秘戯圖、又は秘畫。秘戯畫、又は春畫。或は艶畫、閨房畫さては淫畫等、交々その階級の差によつて呼ばれたものである。以下簡單な解釋を之に下して見よう。

一、おそくづの繪。(或はおそぐつの繪)

「おそくづの繪」とは、如何なる意味であるか。嬉遊笑覽は、之に解説を與へて曰く、「おそはたはれたる事。くづは屑なるべし。陽物をいふに似たり」と。然れば、おそくづは、痴けたる屑なる繪といふ意味となる。

「おそぐつの繪」とは如何。「國語辭典」(上田、松井)には、左の如く、之を述べてゐる。

おそぐつのゑ。枕繪、春畫。(玉勝間)。一説戯畫なりと。(嬉遊笑覽)。類聚名目抄曰、「俊賴口傳抄に、人の妻にみそか事すれば、ぬぐ沓重なるといへば、襲沓の意か。夫木抄三十二に、「ぬぐ沓のかさなる上にかさなれば、いもりのしるしかひはあらじな。」

之に據れば、「おそぐつ」とは、襲沓の意であり、即ち姦淫不倫を意味するといふからには、この「おそぐつの繪」は、姦淫の畫といふ意味になる。この解釋と、前上の「おそくづ」に對する解釋と、何方が正しいであらうか。元來、この「おそぐつ」と「おそくづ」と兩樣の名稱を生んだの

も奇である。一たい何方が本來の稱であらうか。それが極れば、その意義も極る筈である。然るに、この「おそくづ」なる名義は、古今著聞集に眞先に現れてゐる。即ち同十一、鳥羽僧正及び繪かく侍法師の二者の對話中にである。(この出典、第二「發生の根本」中に擧ぐ、參照)これには、「おそくづ」とある。或は傳寫の誤かも知れないが、兎に角その證とするに足りよう。嬉遊笑覽は、これに據つて解説を下してゐる。「おそぐつ」とあるは、「燕居雜話」四(百家説林續篇所載)に、「春畫は、和名おそぐつの繪といひて、俗にいふ笑繪のことなり」とあるのが、その一例である。國語辭典所載の説もその一例である。今遽かにその先後を斷ずることは出來ないが、思ふに、初め「おそくづ」であり、時にそれが訛つて「おそぐつ」となつたのではなからうかと思ふ。襲香は、それに與へられたる後日の附會であらうと思ふ。兎に角おそくづの繪(或はおそぐつの繪)は、本朝最古の名稱である。

二、枕繪、三、枕ざうし。

これは、同時に發生したものか。或は枕ざうしが、その先であつて、枕ざうしの繪なる意味で、枕繪なる稱呼が生じたものかも知れない。或は共に、枕べ又は枕の抽斗におく意より、之を基點として、同時に一は枕繪となり、一は枕ざうしとなつたものかも知れない。但し「枕の

繪△」といふものは、この枕繪と異るものである。武雜記に曰く、

「御枕の繪の事禁中にもお用ゐ候事なり。かた〳〵は獏。かた〳〵は菊、又は鶴などの類をかき申候。公方樣にも同前」

とある。これは、無論「寶船」と同じ性質のものであつたらうと思ふ。

枕ざうしは、古くから清少納言の隨筆「枕ノ草紙」と混同されてゐる。一たい枕ざうしはこの清少納言の隨筆なる同名に何らかの因由を有してゐるであらうか。現に「松屋筆記」一にも、

「春畫は、俗に枕草子といへり。そは清少納言犬枕(いぬまくら)といへるものによりて呼びけるにや」（尾崎氏曰く、「犬枕」は元祿十五年刊三冊。一種の好色本）とある。これで見ると、「清少納言犬枕」から來た名稱寧ろ異名のやうであるが、さうとも謂へまい。恐らくこの名稱發生の當初には、御本尊納言の隨筆枕草紙が何等の緣由をなしたに相違なからう。恐らく「枕」、こゝに因を發し、以て閨房をヒントするに足ると考へ、尚、納言の隨筆もあれば聞えよしとして用ゐるやうになつたのであらう。さうしてその間一種の滑稽味もありて、益々爾く傳唱されたものであらう。而して初めは、貴紳の間にこの名稱生れ、後代に及んで自から下層にのみ汎く用ゐらるゝものとなつたものであらうと思ふ。「枕繪」は、「枕の繪」などから思ひ着いたことか、或は、この枕草子から來たものかも知れない。

然しこれに就て、嬉遊笑覽に左の如く言うてゐる。

「枕ざうしとは、榮花物語に、「きぬの褄重なりて、うち出したるは、色々の錦を枕草紙に作りて、うち置きたらんやうなり。」又、新六帖に、「さぢおける枕ざうしの上にこそ、昔がたりの夢は見ねけれ」。春曙抄に、枕さうしの名の由說けるは非なるべし。朝夕身に添へたる冊子といふ義にて、枕は、枕べなり。源氏桐壺、「この頃あけ暮御覽ずる長恨歌の御繪云々。やまとの言の葉をも唐土の歌をも、たゞその筋をぞ、枕ごと（解に曰く、寢話といふが如しと。）にせさせ給ふ。とあるに同じ。さるを枕繪に、枕草紙の名を呼ぶは、枕書といふを隱したるなり。」

然しこの說は兎も角として、枕草紙と枕繪との區別を、強いて付けるならば、枕草紙といへば、冊子の類。文章又は解說の義を主に含め、枕繪といへば、單に書圖本位のものであらう。他の稱呼に於ても、笑繪と笑本と兩樣あるが如し、である。然し強ちに斯うとも亦た斷定は出來ぬらしい。さうして此の稱「枕繪」「枕ざうし」は、何時代から起つたか。不明ではあるが、寬永二十年（西紀一六四三年）以前であることは明らかである。即ち油糟（松永貞德が、山崎宗鑑の犬筑波集の前句を借りて、それに附句を試みたるもの。寬永二十年出版）に、尊くもあり尊くもなしの句に、「枕繪を羅漢の奥に書き添へて」とある。貞享三年版「好色一代女」の（國主の艶妾）なる條下にも、

「されども武士は、掟正しく、奥なる女中は、男見るさへ稀なれば、まして褌襠の匂も知らず。菱川が書きし小氣味のよき姿枕を見ては、……」

とある。その「姿枕」こそこの繪の謂である。亞で元祿元年版「色里三所世帯」中卷、大坂の卷の二、「戀に座敷あり女髮切り」の中に曰く、

「眞綿を入れし錦緣の疊、寢間に名女揃の枕繪、さながら思を裸になし(中略)、此外斯樣に思ひもよらぬ取合せ可笑しき中にも、氣を移し、堪忍のならぬ樣に拵へたる座敷なり」云々。

右に、きつぱり枕繪とある。恐らく此種の詮索に據らずとも、この名は、餘程古くから、或は室町期あたりからとも思ふ。さうしてこの稱呼は、江戸期全般に、一般的に行はれてゐたものであらうと思ふ。現に延享二年の「賢女心化粧」にも、この稱呼が表れてゐる。嬉遊笑覽の著者曰く、「其碩が賢女心化粧(に)、淸少納言も、次第に不如意にて、袋入の枕草紙をして、内證のたすけとしたまへ共云々(とあり)。戲文ながら、其の頃之を枕草紙と云ひしを知る」と。平田篤胤の「氣吹颫」上にも、「寶曆安永あたりの春畫帖に云々」とある。以て推して知るべし。

四、笑繪。五、わじるし。

笑繪は、笑ふべき繪、可笑しき繪の義であらう。單に滑稽畫なる意に用ゐらるゝ事もある。

その艶書の一名として行はれたるは、江戸期に多いやうである。枕繪等が京坂にその端を開いたのに反し、これは、江戸に生れたものであらう。わじるしとは、丁度狂者をきじるしといふが如く、所謂江戸人の暗喩を好む性癖から出でたものである。即ち笑繪の意味である。笑繪は一般に用ゐられた。或は御殿女中などから、この稱呼の俑を爲してゐるかも知れない。わじるしは、多く通人又は繪草紙賣買の者流に稱へられたらしいのである。然し私は、嘗て、爲永派の艶本に於て、作者自らその篇中の人物に此のわじるしの名を用ゐしめてゐるのを見たことがある。（梅亭金鵞の匿名作であつたかと思ふ）。當今でも、或る玄人側商人側に、この稱呼が用ゐられてゐる。甚しきは、指に輪を描いて符徴となすものもある。

餘分のことであるが、讀和といふのを説明しておかう。讀和は、玄人間の通稱であるが、文章本位の艶本である。讀むわじるしの謂である。大抵繪は普通公刊の人情本風の物であつて、しかも文に特色を發揮する。が中には、文と繪と兩樣ひどくて、しかも文本位のものもある。これも讀和の類である。

名義考が案外長びいた。先づこれ位ゐに止めて、次は、第二、發生の根本に移る。

尾崎楓水著

第四冊

口繪と本文

英泉畫『向島の雪』
鳥追から女太夫へ
『踊形容』に就て
本朝艶畫考（中）
松方氏浮世繪展を見て

大正十一年十二月二十七日印刷納本
大正十二年一月一日發行
第四冊（毎月一回一日刊行）

松方氏浮世繪展を見て

十一月十五日、大阪每日主催同社樓上の松方氏購入浮世繪板畫展覽會を見た。以前から今度の展覽會には、多少の期待を持ち、また松方氏の購入された板畫が餘りに評判が高かつた爲、わざ〳〵大阪へ出向いた。大阪へ着いたのは、當日の朝五時。まだ間があるので友人を訪ねた。途中電車内のポスターで始めて同じく松方氏藏品の浮世繪展が、高島屋にもあることを知つた。友人と相談して、先に高島屋を觀ることにした。（大每は十時からであつた）午前中に、都合よく高島屋と大阪每日と兩方を見終ることが出來た。今その時の印象やら、云ひたい批評やらを、なるべく控へ目にいはして貰はう。世間では、大每の擧のみ傳へられてゐるから、大每展本位に筆を進めよう。

あれでは聊か幻滅

勿論我々は多少玄人の中に屬すると自負してかゝるのではないが、あれでは聊か幻滅を感じない譯にはいかなかつた。あの當時、サンデー每日（十一月十八日發行の分）には、澤村氏や誰やかやが、大分提灯を持つて居られたが、あれは、大每に對しての遠慮かと思ふ。私は、あれ程の過褒には當らないと思ふ。誤解する勿れ、私は松方氏購入の板畫その物の全体の價値を落しめるのではない。あの儘では、大每社の學藝部か、何か、さうした部の失敗だと信ずるのである。通俗を標榜してかゝつたなれば、あれで十分だ、また成功であらう。が苟くも玄人向きにも見させるといふならば、稍失敗だといひたい。それは、外目には、浮世繪の概觀が、一通り陳列されてゐて、浮世繪の通常智識には結構であるが、然し各畫家の作品その物には、大いに問題にすべきことがあらうと思ふ。或は、松方氏購入の全部も、畢竟一佛人の個人の蒐集をその儘讓り受けたのであるから、我々の希望するやうな傑作のみを以て、全部陳列し終ることは不可能かも知れない。然しそれにしても、隨分保存からも中等のものもあり、また構圖からも並の物の多いのには、驚かされた。一般概念を得させる爲に已むを得なかつたといふならば、私も大每社の意を諒とするばかりである。然し一般浮世繪界には、常識の爲にこそなつたれ、新しき智識は得られなかつたことを遺憾に思ふ。唯目星しい物としては、大每の方では、政信、寫樂、榮昌位ゐである。廣重の近郊八景も聲は大きかつたが、あれは決して初版揃ではない。「吾嬬の杜夜雨」の如きは然りである。こゝで

高島屋の方を相伴にしたい

高島屋の方は、まだ玄人向に出來てゐた。春信と清長、歌麿と寫樂、北齋と豐國と廣重の七大家の作品のみ、百餘點の陳列である。大每と比較すると凡て大每よりも質に於て優秀なる作品が多かつた。大体に於て大每は量に於て勝ち、高島屋は、質に於て勝つてゐた。然し大每高島屋兩方を通じて、松方氏の藏品を全部斯うだといふのは早計であるが、綜合して忌憚なく言ふならば、一、案外中以下の摺と保存の物も混り居れること。二、傑作と作品といふよりも、寧ろ構圖は中なれど、珍らしきといふべきは折々見受けた事。以上である。例をいふと、一、清長は、雙方を通じて保存凡て惡しきこと。二、北齋は最も保存に於て完全、それに多く上摺を以て滿たされてゐたこと。（寫樂、春信など、之に亞ぐ）三、廣重の如きは、時々初版仰版以下混同されてゐること。即ち廣重は餘り自慢出來ないこと。（高島屋の京都名所の如きと等である） 最後に印象の最も鮮やかなのを列擧すると、清長（山門雨宿）○政信（湯上り美人）○豐春（ヴェニス）○政演（桂繪、地紙賣）○歌麿（錦町七變人と辻君）○榮昌（廓中美人鏡）○北齋（阿彌陀の瀧と群鷄）○寫樂（一○八號の芝居繪）等（以上大每）○春信（蚊帳と桂繪美人と緣端）○歌麿（青樓十二時揃）（相學十躰の内浮氣の相）○清長（官女と虛無僧）廣○重（嵐山と宮の越）其他數枚。（高島屋）

最後に大每の錯誤を

氣附いた儘いふと、長喜を場内の畫面の下の札にも亦印刷された展覽會圖錄にも歌川長喜と明記してあつた。長喜は豐春の弟子ではない。石燕の弟子で、百川子興が前名たることは誰も知つてゐる。（「浮世繪の諸派」には玉川とあるが誤植であらう。）榮松齋長喜というたのは、子興の寛政元から八迄位の間だ。とに角歌川は全く誤りだ。又圖錄には廣重、「吾嬬社の夜雨」とある。杜を社と讀誤つたのだ。誰も指摘しなかつたから特に記しておく。

向島の雪（英泉畫）　著者藏

鳥追から女太夫へ

「鳥追から女太夫へ」、鳥追の沿革である。沿革というても、軟かな話である。鳥追遷替の詮索をして、かねては彼女「鳥追」の三日月形の編笠と紅(あけ)の笠緒(かさを)との風姿――大江戸の春が産んだ浮世繪情調に浸りたいとの享樂的な念願に過ぎぬ。

元三の江戸を賑したものは、諸大名の外觀だけは嚴めしい、内實は「封建」の燒印みじめな猿芝居的な登城姿ではなかつた。

年に一度開放せられた、第四階級として、あらゆる試練に堪へたる彼等町人士女の歡び、享樂の的(まと)は、げにや幕府が非人の名を冠せてゐた者ども、萬歳、鳥追、春駒、大神樂(だいかぐら)、大黒舞の類であつた。とり分けて、「……大々(だいだい)神樂門禮者、梅が笠木も三圍(みめぐり)の土手に囀づる鳥追は三筋霞の連彈(つれびき)や」(清元、梅の春)と唄にも唄はれた鳥追の優しい蠱惑的な媚態は、江戸ならでは見る能はぬ艶麗な背景の基調であつた。

さうした鳥追は、一たい江戸期或は其以前の何時頃から發生したものであるか。最初から女

太夫のみであつたらうか。またその女太夫も非人の類とは誰しも知つてゐるであらうが、どうして非人の專業となつたか。また鳥追の語原は如何。その考證を多少こゝに費やさうと思ふ。

鳥追には、三次の變替があつた。第一次の鳥追は、たゞ田家の鳥を追ふ番人である。即ち田園の一賤夫の業であつた。謠の「鳥追船」（一名鳥追）は、丁度この意味のものであつた。「鳥追船」は、九州薩摩の日暮殿、訴訟用にて滯京十年餘。その留守に家來の左近尉といふもの、その家を横領して、主家の妻子をして鳥追船に乘りて水田の鳥を追はしめた、日暮殿の歸國によりて罪發覺するといつたものである。「三莊太夫五人孃」（竹田出雲作の淨瑠璃、「三莊太夫」物の一。但し此の作以前にも三莊太夫の傳説は隨分淨瑠璃に唱はれてゐる）の中にも、對玉丸安壽姫の母の御臺が、人買の手から佐渡で鳥追の苦役に服したことが哀絶を極めて描かれてある。但しこの時の御臺は、傳説では粟圃の鳥を鳴子を鳴らして追つた。さうして此の事件は、村上天皇の天暦年間（西紀九四七―九五六）即ち平安朝前期末の事であるといふ。若し此の傳説に現れた御臺の鳥追が眞であるなれば、田圃鳥追の賤役は、既に古く此の時代から存在してゐた事になる。然るに「近代世事談」には、「鳥追は長者の田園の鳥を追ふばかりの勤めにて妻子を養ふ」とあつて、その者ども、歳首に、この長者（三河の某所）の宅に來り簓を摺りて、長者の富を讃めたる唄を唄ふとある。その文中、延文の頃とあれば、延文は北朝後光嚴院の年號、

尊氏義詮の時代（西紀一三五六—一三六〇）である。鳥追第一期が室町草創期若しくは、遙かに三河太夫傳説の村上天皇期にあることは、これ等に依つて略判斷がつくであらう。同書に曰ふ踏歌の遺風なりと稱するのが果して是ならば、この鳥追の風は無論延文以前に發生してゐたのである。世事談の三河長者の話眞ならば、歳首の鳥追、また萬歳と同じく三河が發生地である。

第二期の鳥追は、所謂「雍州府志」にもある敲き與次郎一名鳥追の鳥追である。これは、第一期の風が更に發達して、一種の營業化したものである。「雍州府志」悲田院の條に、「元旦より十五日に至るまで、笠を着、白布を以て面を覆ひ、手を敲きて祝語を唱ふ。門戸に倚りて米錢を請ふ。是れ敲き與次郎と號す。又鳥追と稱す」（原漢文）とある、是である。守貞漫稿には、これが「安永天明（十代家治時代、西紀一七七二—一七八八）の頃迄來りしが、後之を廢す」とあるから、恐らく室町期から江戸中期まで、京阪地方に於て行はれたものであらうと思ふ。而して敲き與次郎の與次郎といは、京の悲田院の頭であつたのが、その配下の者までもこの頭の名を通稱したのであらうといふ事である。

江戸では、これが女太夫となつた。これが第三期の鳥追である。（或は京阪に敲きの存在中、既に江戸に女太夫の鳥追が生れてゐたかも知れない）京阪の敲きは、手を拍つたり、又は掌を扇に

敲いたり、又はさゝら（割竹の類）や或は笹竹や木片を擦り鳴らしたりしたこれは草創期、田野の鳥追が矢張りさゝらを使用した。夫から出てゐるらしい。「増補松の落葉」にもその意味の歌がある。（同書巻第四。古来中興踊歌百首の内、第百「ささら踊」）が變りも變つたり、即ち三味の三下りとなつた。さうして京阪の醜い襤褸を纏うたいかにも乞食の徒たる男性姿が、極端に柳腰皓歯の美女と變じた。

江戸の女太夫は、無論松右衞門や車善七（當時江戸の非人頭）の配下であつた。然し平常は彼女等は所謂女太夫として一種の賤業の徒であつた。守貞漫稿非人の部に、「右小屋の妻娘は、女太夫と號け、菅笠を被り、綿服綿帯なれども、新しきを着し、襟袖口に縮緬等を用ゐ、紅粉を粧ひ、日和下駄を穿き、いと艶めきたる風姿にて、一人或は二三人連れて、三絃を弾き、市店門戸に據りて錢を乞ふを業とす。往々此の女太夫に美人あり。市店には一文を與ふるのみ。他國より勤番の下士等は、邸窓の下に呼び、二三十錢を與へ、一曲を語らせ、或は花見遊山の所、多く女太夫の徘徊する時、彼の士酒興に乗じ杯を與へ煙管を共に喫ふ等、言語に絶せり」と憤慨されたものである。これが「元日より十五日まで、衣服は平日と同じと雖も、新綿服を着し、三絃の唱歌を異にす」（同書）とある。それが元日は「編笠を被り、……中旬以後は、菅笠に換ふる也。編笠の時を鳥追といふ。」（同書）とある。

して見れば、江戸の鳥追も、女太夫が鳥追といふ名の下に來た期間は、京阪の敲與次郎と同じく元日より十五日の半月であつたと見える。さうしてこの新綿服には、彼女等、階級制度の喧しい折柄、分けて特種民に屬する彼女等としては、涙の出るやうな苦心があつた。

「鳥追の姿は清新で艶麗であつた。冠つた笠の紐が紅鹿子の紋、白い〳〵頤に結んで、瀟洒な木綿中形の着附、帶も木綿だが、凝つた中形を擇んだ。それを引掛けに結ぶ。水色の脚絆、白足袋に日和下駄、化粧を淡白にしてゐた。概して木綿であるが、袖口に半襟だけは縮緬を附ける。それが妙に引立つ。大抵老若二人宛組んで行く。後から米袋位な麻の袋を擔いで、親や本夫がお供してゐる。その收入は、よい時には松の内に二兩二分位の貰ひはあつたといふ。」（三田村鳶魚氏、「江戸の珍物」より）收入に關しては、「當町（江戸をいふ）の非人小屋より來る者一人に拾貳錢紙包を與へ、他は壹錢を與ふ。」（守貞漫稿上）ともある。

さうして彼女等の晴着の反物は、普通木綿の反物に比して三四倍の高値であつたといふ。賤民のこととて、幕府は絹布を着用させなかつた。乃で女性の弱點（賤民と雖も矢張り可憐な女性ども）を巧に利して、彼女等の欲求を滿足せしめる一種の吳服屋が出來た。彼等は年中非人の女性に向くやうに、木綿中形の凝つた染を工夫して、就中女太夫の初春、鳥追姿には、法令を

潜つた濃い派出好みを凝らしたといふ。従つて同じ非人でも金廻りのよい仲間であつた。今日でも飴賣などの女藝人が、木綿物で存外粋（いき）なりをして來るのは、此の遺風であらう。」

鳥追に關して、これを材料としたものに河竹默阿彌作「夢結蝶鳥追（ゆめむすぶてふにとりおひ）」（おこよ源三郎）の安政三年作がある。講談種にもなつてゐる。このおこよ源三郎の事實は、鳥追ではなくて、座光寺藤三郎なる信濃衆千石の旗本と瞽女（ごぜ）お八重との事であるといふが、私はこの實説よりも美化せられ戯曲化せられた、おこよ源三郎を取る。そのおこよも矢張り婀娜（あだ）な鳥追姿が凡ての悲劇の基であつた。（鳥追に關した芝居では、三世河竹新七（默阿彌門人）作に明治十一年の鳥追お松がある。外題、「廿四時改正新話」。穢多が新平民となる明治初年を背景にしたもの。仕組は、穢多毒婦の美人局（つゝもたせ）。）

女太夫の鳥追の唄つた歌は如何なるものであるか。これにも前後の變遷があつた。その初めは、丁度「世事談」の延文年間三河に行はれたものと大同小異の内容。長者を讃めてその田地の廣いことを稱（たゝ）へ、色々その長者の邸の初春の光景を叙し、併せて今年の害鳥驅除、豐年の稔あることを祈つたやうな、可なり長いものである。（全曲、「春陽唱話」に出づ。「江戸の珍物」及び「百科大辭典」に亦載す）それが後には、鳥追の文句を綴入した普通の小唄となつた。「お長者のお庭に音のするのは誰々。お大盡〳〵。響やらうか、鳥追に。買つてやらうか鳥追。東の方には淺黄帷、黑羽織、髮は本田か鳥追。」（文政の「新鳥

(追一の一節。)の如きとなつた。又「常の歌、及び淨瑠璃と異る一節を唄ひ、三味線を繁絃して來る。」(守貞漫稿上)ともある。此の繁絃が、昔のさゝらの波殘といふべきであらう。

江戸でこの女太夫の鳥追が何時頃から行はれたか。「近世世相史」には、元祿期の年中行事に既にこれを載せてゐる。然なれば、京阪の簓敲きの鳥追と既に同時に存在してゐたのである。京阪に簓敲き滅ぶるも、(京阪には女太夫は生れなかつた。)猶この江戸の鳥追は滅びなかつた。然るに明治を界としてその面影もたうとう滅びてしまつた。今や猥雑な三河萬歳、獨り餘喘を保つのみとなつたのである。「美しきもの、凡て滅ぶ」とでも、嗟嘆したくなるのは、無理か。

【追補】――三荘太夫物の古淨瑠璃、並に小説類の書目を補つておく。

○說教與七郎の正本「さんせう太夫」。之に次ぎて淨瑠璃山本角太夫の正本「都志王丸」。岡本文彌及其門人の語物なる「三椒太夫」。紀海音に「山椒太夫縁蔓湊」。(寶永五年豊竹座)。「山椒太夫葭原雀」(享保五年豊竹座登場)。竹田出雲に「三庄太夫五人嬢」(享保十二年、竹本座)。寶暦十一年に竹田小出雲に「由良湊千軒長者」(實は半二、三好松洛等合作)あり。○小說には、其磧の「咲分五人娘」(享保二十年刊行)。降りて不乾齋雨聲に「三庄太夫由良湊長者入船」(文化九年刊)。東西庵南北に「由良湊入船日記」(文政五年)等がある。○歌舞伎には、寶暦四年八月市村座、「由良千軒鬼湊」。天保八年七月市村座、「三荘太夫銑鶏鳶」。嘉永五年四月、河原崎座、「昔話禍三桝太夫」。明治、「増補三荘太夫」等がある。

『踊形容』に就て

これは、從來の文獻に嘗て現れなかつたことである。「踊形容」とは、決して單に踊の意ではない。寧ろ芝居の謂である。以前から錦繪――芝居繪の家藏のものに、此の特殊語を私は發見してゐた。爾來數年、明治以後の諸先輩の著述、あらゆる舞踊の記述にも演劇史の著述記文にも、此の語は現れなかつた。現れないばかりか或は抹殺されてゐるのかも知れない體のものである。坪内逍遙博士の著述記文にも、まだ私の知る範圍では現れないやうである。然し博士は無論家藏のものと同樣の錦繪を恐らく觀られた筈であるし、またより多くの「踊形容」の文字ある芝居繪を見られてゐるかも知れない。然し、まだ同博士は勿論、青々園氏あたりからも聞かぬ事であるから、私が遲まき乍ら、此に披露することにした。

「踊形容」とは何か、先づ此の問に答へねばならぬ。「踊形容」とは、芝居、演劇といふに同じである。知友の一二は、（石田元季氏など）「踊形容といふのは、まだ知らぬ言葉であるが、若しあるなれば、所作事の類ではなからうか」といはれた。以下に實證を擧げるから、分ること

であるが、斯くの如き解釋は、唯、文字の表面上の解釋に過ぎない。實は、所作事のみならず芝居の總稱として用ゐられたやうである。というても讀者には、茫漠として便りない感がしないでもなからう。私は、以下家藏の錦繪によつて、これを證據立てよう。

家藏の芝居錦繪の中に、踊形容といふ文字のあるのが、一枚二枚、否全部で四種、計十一枚ある。(内三枚續三種)列擧すると、一、「踊形容江戶繪榮」(初代豊國筆?、安政五年版)三枚續。二、「踊形容新開入之圖」(三代豊國畫。安政三年版)三枚續。三、「踊形容樂屋之圖」(同。同)同、四、「踊形容外題盡」の內、イ、踊形容外題盡兒雷也豪傑譚話(三代豊國畫。嘉永五年版)一枚繪。ロ、踊形容外題盡鼠小僧東君新形(三代豊國畫。安政四年版)一枚繪。以上の四種十一枚である。內、嘗て寫眞版として他書に掲載されたものは、「市川家歌舞伎展覽會圖錄」に、踊形容江戶繪榮が載つてゐた覺えである。大正九年一月の演藝畫報(合同七ノ一)には、その一三九頁に、「樂屋の役者(安政時代)右手は座頭の部屋で、突當りが鬘師の部屋です。」として踊形容樂屋之圖の內右二枚。その一四〇頁には、「樂屋の役者。二階口の所です。」として、踊形容新開入之圖の內右二枚が掲げられてゐる。其他は何れにもまだ登載されてゐない。右の圖錄や演藝畫報所有の方には、重複の恐れはあるが、此等畫面の大体を左に記してみよう。

「踊形容江戸繪榮」は、三枚續。半土間の半ばから、兩側に棧敷二階、正面に舞臺、天井、左に花道。凡て劇場内部の構造である。劇は、暫である。花道に例の暫が三桝の紋も大きく、兩袖を張つて蹲つてゐる。時期は、夏であらう。土間の職人風の見物は、所々裸体、若しくは半裸体である。さて此の繪に就て、私の疑問がある。これは初代豐國か三代豐國かといふことである。歌舞伎圖錄には、何代としてあるか、持合してゐないから不明であるが、今、眼の當り此の原畫に向ふと、すつかり初代の畫樣である。三代では到底あり得ない。三代が初代風に描いたにしても餘りに初代樣である。唯初代といふに疑問が置かれるのは、(午七)の檢印のあることである。此の檢印は無論午七、改印を伴はなかつた安政五年であることは、誰も知つてゐよう。然るにその當時は、既に三代豐國の時代である。(初代は、文政八年歿。)幽靈が描いたのでもまさかなからう。然し、畫樣は無論初代である。これに就て、私が昔、迂濶な錯誤(今では錯誤と思ふ)をした事がある。それは、雜誌「浮世繪」に嘗て「一陽齋雛獅豐國畫」とあるのを、初代なりとあつた。(同第十五號)それをまた私が三代だと反駁したことである。(同、第四十號)その時は、檢印のみに重きを置いて斯く斷定したのである。それは、この踊形容江戸繪榮が同じ一陽齋雛獅豐國筆の落款であるからであつた。然し今では全く之を撤回して、無論初代の畫稿である。初代の

畫稿を三代當時に出版し、三代が色を入れたのではなからうか。故に安政五の檢印があると、斯く思ふやうになつた。然し、「踊形容江戸繪榮」といふ標題はどうか。若し三代の出版當時に、此の題を新たに附けたなれば、異存はないが、初代の畫稿に已に此の題が附けられてあつたとすると、私の本記述に大なる交渉を有つこととなる。即ち初代の文政年間に既に「踊形容」なる語を生んだ證據であるからである。畫が初代としても此の畫題は何うだらう、尚若干の疑問なき能はぬ。言ひ忘れたが、此の三枚續は、藤岡平出の「日本風俗史」中に摸寫されてゐる。それには此の外題なく、落款もなく、「歌舞伎芝居」、文政時代、と明記されてゐる。藤岡氏の原圖は果して此の外題を有しなかつたか。或は畫家の拵へではなかつたか。「日本風俗史」は寫眞版ではないから、此の疑もある。とに角、此の繪は初代か三代か。初代とすると、此の外題は、三代の加筆か否か。それが決れば、「踊形容」とは、文政年間に已に使用せられた語であるか否かゞ分る。(「踊形容江戸繪榮」には、また暫の芝居繪であるから、暫の役者年代の詮索からも斷定されよう。迂路であるから、暫く避けるが、此の俳優も七代團十郎のやうである。すると、無論初代豐國の文政六七年頃であらう。)

とに角少くとも嘉永安政へかけては、無論云つたには違ひない。即ち以下の諸圖皆然りであるから。「新開(にかい)入之圖」は、演藝畫報所載の他に今一枚左がある。それには、樂屋の一部が見えてゐる。「樂屋之圖」も左一枚、十郎と見える札の下に、恐らく團三であらう、髮を髮結に結つ

て貰つてゐる。右手の板戸の上に、定として、一踊興行中他行不致事、一正六ッ時より出勤可致候事、右之通相守可申候以上月日と貼られてある。此の芝居興行中とあるべきを踊とあるのも注目に値する。踊形容外題盡は、家藏の他に尚數枚ある筈である。(他で見た事もある。)兒雷也四は立目藤橋の場。高砂、兒雷也の出會、橋下に蟇の吐いた兒雷也の廓通ひの姿。さうしたも

踊形容樂屋之圖　三枚續の內中

のである。鼠小僧の方は、梯子の上に足をかけた鼠小僧と捕手。大詰樋の口の塲である。

繪の解說が目的ではないから、これ位ゐの事にする。とに角少くとも嘉永五年(外題書に見えし)(A.D. 1852)から安政五年(A.D. 1858)の間は、「踊形容」と芝居を稱した筈である。所作事のみの謂でないことは新開入之圖や樂屋之圖でも證據立てられる。特に踊興行中は云々の貼札も有力な證據である。だんまりや立廻りの類かとも思へるが、(鼠小僧の立廻りや藤橋から)然し暫の繪にもある。殊に劇塲全圖に、「踊形容江戶繪榮」とあるではないか。矢張り芝居の替名に違ひない。どうして、芝居を踊形容と、斯かる替名を用ゐたか。これには、嘉永安政期に專ら稱したとして、(初代三代疑問の「江戶繪榮」は別問題として)丁度天保以後に當る所から、それに水野越前守の風俗肅淸を結び付けたい。水野越前守の天保十二年十二月の三座引拂替地やら、十三年九月の役者取締方申渡、弘化四年四月同申渡やら、色々の役者風儀の肅淸が、轉じて從來の此の芝居といふ名義までも憚るやうになり、踊形容なる新造語を用ゐたのではなからうか。

とに角以上を以て「踊形容」解說の一端とする。餘は識者によりて補足せられたい。尙ほ「踊形容」それ自身の語義の詮索としては、踊と形容とは切離すべきものでなく、踊即ち形容の意を重用して語呂をよくし、一に從來の單なる踊と區別したものであらうと思ふ。

本朝艶畫考　中

第二　發生の根本

發生の根本は、何時代であつたらうかといふ問題である。最初の討究は、本朝のみにこれを他外邦のそれと同じく偶然に發生したものか。又は支那、或は印度あたりの傳來かといふことである。

これは、無論、原始民族に共通な、我が國古代からこれと似たもの、同じ性質の繪畫は、その釀生は必ずあつたであらうと思ふ。藝術の起源は、原始民族が、性慾の發現から來てゐるといふ。即ち、彼等男が、相手の女の來るのを待つ間、武器の柄などに、女の顏や性器の形を刻んだりして、退屈と熱情とを慰した。それが凡て藝術の根元であり、表現の最初であるといふ。無論、日本民族の我々祖先、先住民族も移住民族も同じやうな表現の徑路を取つたであらう。從つて、男女の性器の繪、表徵、或は交歡の圖など、既に彼等の拙なき手に、或は壁畫として或

ゝ器物の裝飾として、或は立体藝術として現れてゐたであらう。嚴肅にいへば、我々の本朝艶畵は、此に起源を求めねばならぬ。（原始民族の生殖器崇拜も此に多少加味して考へてもいゝと思ふ。）とに角、艶畵の幼穉なるものは、我國にも獨自に發生したと見ていゝ。而して後代に及んで、漢土と交通が開かるゝに及び、一歩進みたる形似畵。寫生的のそれが、文化の先進國たる彼土より將來され、即ちそれが本朝彼畵の發達の俑を爲したものであらうと思ふ。即ち推古朝に端を開いた遣隋使、後代の遣唐使、彼我使節の相往來を見るに至つた飛鳥朝、奈良朝、平安初期に亘つて、この間必ず歸朝者の筐底、彼土のそれが齎されたものであらうと思ふ。殊に怪しいのは、元正天皇の時と、孝謙天皇の時と、二回唐土に渡つた吉備眞備である。彼が渡來した唐は玄宗皇帝の極盛期である。頽唐靡爛の極たりし大唐の世相間、殊に年少早熟なりし彼（彼の第一回渡來は其の二十四歲）は、また一個秀拔な享樂兒、遊蕩兒であつたに違ひない。享樂淫蕩の權化ともいふべき大唐の玄宗と、歸朝後、當時東宮たりし後の孝謙帝の侍講となり、恩寵を得たといふ眞備と、その間を結び付けて、疑問を打ちたくなるのである。

或は、それ以前、彼土の歸化民又は僧徒の渡來と同時に、こも亦た傳來したものではなからうか。眞備より後の桓武期の最澄、空海の渡唐の頃では恐らくなからう。無論平安朝以前に、

旣に宮廷貴紳の間にこの秘畫が弄ばれたものであらうと思ふ。

傍證として、本朝繪畫の發達を調ぶるも一策である。雄略天皇の七年（西、四六三年）畫師因斯羅我を百濟より招いた事や、崇峻天皇の時、畫家白加の來朝した事や、其後、推古朝曇徵の高麗より來るなど、以上の三韓を經て大陸繪畫の傳統傳來の事實や、聖德太子の寺院繪師に對する保護獎勵（各畫師を定め、課戸たるを免じ世業たらしむ）などによつて、佛畫は頓に發達した。然し之に伴つて幼稚なる古來純粹の表象技巧が發達したことは否まれぬ。降つて文武天皇（西、六九七―七〇七）の時の、畫工司の設置など、或は次いで天平時代の佛教の興隆と唐文化の摸倣と國運の進暢と、三拍子揃つて呈した藝術の爛然たる時代は、無論此の幼稚なるエロチックスにも進步を與へたであらう。平安期、前代の畫工司を改めて繪所（平城天皇大同三年）とした頃には、河成（百濟）、金岡（巨勢）などの純粹畫家も現れ、土佐（倭畫の本流）、その副流として春日の類を生み、覺猷（後を看よ）などの別派の大家また現るゝに至つた。丁度、此の間に於て、我がおそくづの繪は、最も發達し來つたであらうと思ふ。次揭の如く、覺猷とその弟子と、之に關した問答のあるのを見ても肯づける。

即ち、凡て本邦繪畫の發達と共に、影を小さくし乍ら、このエロチック描畫は發達したであらう。邈として起源を尋ぬるに由もないが、以上の覺猷に及ぶ本朝繪畫の略沿革を以て、略々

此物の發達も暗示し得たであらう。或は、艶書そのものを支那よりの傳來と見るよりも、書技の傳來自發と共に、別途に、此のおそくづは、本朝のみとして發達し來つたものかも知れぬ。眞備に疑をかけたり、渡來僧、又は歸化民の將來と見るは、僻目であるかも知れない。何れとも據るべき文献はない。唯、遺憾乍ら以上二樣の暗測を提示しておかう。

却說この「おそくづ」なる名稱の文献に現れた最初は古今著聞集(著聞集は、序に建長六とあるを即ち西、一二五四年)である。即ち前述べた覺猷(鳥羽僧正)の逸話である。

「同僧正の許に、繪かく侍法師ありけり。あまりに好く習ひければ後ざまには、僧正の筆をも耻ぢざりけり。此の事を僧正ねたましくや思はれけん、いかにもして失(あやまち)を見出ださんと思ひ給ふ所に、或時件(くだん)の僧、人のいさかひして腰刀にて突き合ひたるを書きて、自愛してゐたりけるを、僧正見給ふに其の突きたる刀、背中へ拳(こぶし)乍ら出たりけり。よき失(あやまち)と思ひての給ひけるは、「わ僧(そう)が繪(を)書く、永く禁(さぞ)むべし。いかなる物が、人を突くに拳ながら背へ出る事あるべき。柄(つか)口迄突きたるなどをこそ、嚴(いか)めしき事にはいふを、これはあるべきもなき事なり。かく程の心ばせにては、繪書くべからず」といはれければ、此の僧がい畏(かしこ)まりて、「其の事に候。これは繪の故實に候ふなり」といふを、僧正いはせも果てず、「わ法師が繪の故實、かたはら痛し」といはれけるを、少しも事ともせず、「さも候はず。舊き上手共の書きて候ふおそくづの繪などを御覽も候へ。その物の寸法は、分(ぶん)に過ぎて大に書きて候ふ事、いかでか實には、然(さ)候ふべき。ありの儘の寸法に書きて候はゞ、見所なきものに候。故に繪空事(おそらごと)とは申すことにて候。君

の遊はされて候物の中にも、斯る事はおほくこそ候らめ」と、へりをおかず言ひければ、僧正理に折れて、言ふ事なかりけり」（古今著聞集、畫圖第十六）

とある。右のおそくづの繪である。鳥羽僧正は、源隆國の子、覺圓僧正の弟子。名は覺猷。遂に天台の座主法務及び三井寺の長吏大僧正となる。嘗て鳥羽に居る。專ら倭畫をよくし、一家をなす。（扶桑畫人傳）所謂鳥羽繪の創始者である。この僧正また所謂「おそくづの繪」の創作があつたであらうと思ふ。この僧正傳にも記載せる如く、當時、既に倭畫が生れてゐた。倭畫は前にも言うたが、その先驅に百濟河成（文德帝仁壽三年歿）があつたが、淸和朝の金岡の巨勢氏また之を襲ぎ堀川朝の藤原基光（土佐の始祖）、近衛朝の藤原隆能（春日を稱す）に至つてその爛熟を將に見むとした。この間に鳥羽僧正また出でた。（僧正は、崇德帝保延六年歿）僧正及び他の此等倭畫々派に、この「おそくづの繪」の創作があつたことは疑もないことである。當時、既に彼等の先輩に、此の種の作畫のあつた證據は、覺猷の弟子が、古き繪師共の云々と言へるによつても分る。古き繪師とは、河成か、金岡か、基光か、隆能か、誰々だらう。殊に、藤原氏時代に孕み產れた倭畫が、彼等の享樂廢頽趣味に媚びる點からいうても、この創作は夥しく有つたに違ひない。鳥羽僧正遺筆の中勝畫（この名は龜山院の皇后、繪合の時、勝ちたる繪に名付けられしなりと。龜山院は元寇で有名である。）二卷といふのがある。一卷は放屁の卷。一卷は陽物くらべ

の卷なりといふ。私は嘗てこの陽物くらべの摸寫を見たことがある。露骨なる戯書である。但し春的要素は全然ない。「おそくづ」の原義戯れたる意味の物で、艶書ではない。然し非公開の性質たること、無論である。（一説に、この勝繪二卷、東寺に傳はり、後、白粉屋又兵衛藏之といふ。）その實、是以上非公開の、眞の筐底秘書が彼にも必ずあつたらうと思ふ。然しそれが爲には、今材證のないのを遺憾とする。

松屋筆記一に據れば、古今著聞集には、なほ「師の房の後家の事を春畫に書きし事」ありといふ。今、先賢の指摘によつて、古今著聞集を檢索して見た。鳥羽僧正逸話と同じく、同第十六にあつた。左の如きものである。これこそ眞の閨房秘書である。文に據ると、この僧は、著聞集の作者生存當時現存してゐたやうである。すれば、著聞集序に建長六年とあるから、この話は、後深草朝、執權北條時頼の時代と類推することが出來る。

「繪師大輔法眼賢慶が弟子に、何某とかやいふ法師ありけり。賢慶逝去の後、後家と不快になりて、相論の事ありけり。六波羅に訴へけれども、事ゆかで程經ければ、この法師繪もさかしく書きけるものにて、件の後家が有樣振舞を初めより書き現はしてけり。間男して會合したる所など、さま〴〵に書きて、えもいはず彩どりて、詞つけて六波羅へ持て行きて、奉行の者どもに見せければ、訴訟を殊に執し申さんの心はなかりけれども、繪その興あるによりても、とかく持てさまよふ程に、兩國司までも見て、訴訟の旨悉しく心得解きにけり。遂に勝ちにけり。件の法師、攝津國字出の庄にいまだあり。」（古今著聞集。繪圖第十六）

弟子と後家と何うして不快になつたか、不明である。探ればこの弟子も暗い事がありはせぬか。それは兎に角として、繪にして六波羅に持參したとは、頗る珍話。この坊主、中々の洒落者である。またそれを見せつけられた奉行はじめ「繪、その興あるによりても、兎角持てさまよ」つた揚句、兩國司までも見たといふ、その兩國司の面が可笑しい。さうして此の繪によつて始めて訴訟の旨を悉しく解いたといふのも、人間放れのした話である。

兎に角如上の鳥羽僧正の記事をのみ以てしても、當時、この「おそくづ」が貴紳に盛行してゐたであらうと思はれる。然うしてこの「おそくづの繪」の古きものとしては、嬉遊笑覽に「おそくづの繪として、「古き繪の傳はれるは、小柴垣。ふくろ法師などの外には、未だ見及ばず」とある。松屋筆記に、「にはくなぶり。袋法師書卷など、また古し」とある。この「にはくなぶり」や「小柴垣」や、「袋法師書卷」が如何なるもので、何時代、誰人の手に成つたかは、私は知らない。さうして此の類のものの中、「十二枚あるもの往々あるは、鎧櫃に收めたるものといへり。又衣櫃に納むる事もあり。」(同嬉遊笑覽)とあるが、尚他に、書櫃に納めた例もある。これらは、凡て禁厭に忙しい支那の風習を承け傳へたものらしい。火災を防ぐ、典籍の蟲食はぬ、衣類自然に殖ゑるなど、莫迦々々しい禁厭から來てゐる。

大正十二年一月二十七日印刷納本
大正十二年二月一日發行
第五冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎楓水著

第五冊

本文

浮世繪師の心理
新内の話
「東都一圖會」と「春の雪」
渉獵漫筆（二）

渉猟漫筆（二）

○芝居繪の亥

新年號の名古屋新聞に「浮世繪の亥」を書く爲、芝居亥を色々檢索した。中々、亥な人名に持つた芝居繪は見當らなかつた。が辛うじて家藏の中に一枚を發見した。それは「白縫譚」の猪助女房と悴の一枚であつた。檢印を見ても嘉永六年と分る通り、此芝居は、默阿彌が草雙紙を脚色したもので、此の猪助女房の現れるのは、同年四月の「しらぬひ譚後日狂言」の中である。二月河原崎座で「しらぬひ譚」を默阿彌の脚色で演じた處、好評を博したので、此四月に後日を再び上場した。圖の猪助女房お露は、猪助は太宰少貳の忠臣鷲津の若黨で、その女房である。主人の鷲津を救ふため、處刑の時を違へるため邪險な兒の頓念坊主に迫らんと、お露決死の体である。璃寛の適り役であつた。（裏表紙寫眞參照）

○孝行糖の流行

外骨氏の新著「奇態流行史」に載せられなかつたものだが、一筆庵主人(英泉)作の「稽古三味線」下の中に、孝行糖といふ菓子賣が流行したとある。即ち「……此節世間で專ら流行いたす孝行糖といふ菓子賣は、孟宗ばかりと見えて、竹の子の付いた袢天など着て歩き居るが、二十四孝の中で一人見立てられたは仕合なことぢや」云々。

○天の岩戸の記事

例の淫猥な見せ物、天の岩戸の事が、同「稽古三味線」の上に、出てゐる。得手吉、福助出太郎の三人の會話で、……得手「見たかア天の磐戸がいゝ(ト手を敲きながら)そりや出る〳〵それ出ちやたまらぬ。福「御戸帳開いてやれ出たそれ出た、へえる時はうかれてへえるが、出る時人の顔が見られるやうだぜ出太「如才なく見たな。へエ好きなやつだ……

……とある。

○夢が浮世か浮世が夢か

夢が浮世か浮世が夢かとは、義太夫の壺阪にあつて誰しも知るが、紀文の作といふ歌にも、「夢の浮世か浮世のゆめか。花も紅葉も一さかり。さびしき夜半に音づれて枕に通ふ琴のねは、誰に明かして明かして月に、月にあかして小夜千鳥、あゝ浮世ぢやな、千世も盡きせぬ松の風。」といふのがある。俗謠にも、「……とつと聞きたい松の風」といふのがあつた覺えだ。どちらが先か、後か。

○浮世繪の裸体画

此頃、雜誌「性」から頼まれて、浮世繪の裸体畫を探してみた。艶畫には無數だが、お座に出せる物(普通の公刊物)の中では、殆ど以下の數圖に過ぎなかつた。春信(柱繪の鮑取)○清滿(風呂の子供と女)(以上ザイドリッツ氏本に掲載)○清長(風呂場)○歌麿(鮑取三枚續)○初代豊國(肌脱ぎ盥に向ふ女)○北齋(同漫畫十一の女風呂)○三代豊國(鮑取三枚續)○芳幾芳年國周(風呂場の群集)位ゐだ。あぶな繪式は、まだ政信や春信や清滿あたりに多い。その中、全裸体といふのは、末期の芳幾あたりの作を除くと、清滿のザイドリッツ本登載の圖と、清長の風呂場と北齋漫畫十一とだ。就中清滿こそ此意味での絶品だ。清滿は此點から出色の畫家である。

浮世繪師の心理

（春信、歌麿などに對する考察）

嚴肅な藝術論ではないが、「斯くあるべし」を體現したのが、我々の尠くとも考へてゐる、名づけてゐる藝術その物であるやうな氣がする。評者は、理想主義の糟粕を嘗めた語であると謂ふかも知れない。兎まれ我々は、「斯くあるべし」を如實に提示して吳れる所に、すべて藝術の有難さ、存在の價値があると思ふ。

繪畫特に私の愛好二なき浮世繪は、格別この「斯くあるべし」の體現であると思ふ。といふた丈では判然分らないであらう。私の浮世繪とは、こゝでは美人繪の謂で、殊に春信歌麿などの創作を目して稱したのである。

春信の描いた美女には、春信の希求がある。歌麿の描いた美女には、歌麿の希求がある。希求即ち「斯くあるべし」である。「斯くあるべし」は、一種の偶像であらう。即ち彼等熱烈なる美女愛好者は、各自の偶像を自己の創作を以てリアライズした。

現在の觸目を否定して、至高至妙をほのかなるかの土に求むる、さうした彼岸の心持、それは、少數の人の心に、時として閃く影である。それは、樣々な形を取つて現れる。或は、單純な意味の厭離穢土的の心も湧かうし、はたと無窮の大悲に觸れておびえた最上者に取り縋らむとの心もあらうし、一所不住そこはかとなく迷ひ出でゝ、せめて憧々たる心の飢ゑ、周圍の淪寂を忘れようとする空しい努力も湧かう。

私は、春信、歌麿などの彼等が厭離穢土的な左程突き詰めた離れた心を、外圍にその時世粧に抱いて居たかどうかは知らぬ。然し彼等の作畫の心域が最上者の創造であることは勿論であるとすると、そこに一箇の否定から生れた肯定の惱み、丁度聖者が、自己の最高な欲求を、後光神々しい神佛の姿を以て自ら滿足したやうに、自らが描く夢——偶像ともいはう——で、今ある空しさ醜さを忘れようとした悲しい心が、彼等繪師の中にありはしなかつたかと思ふ。

さうした我々の今考へるやうな心は、自ら意識してゐなかつたにもせよ、尠くとも彼等が純然たるモデル作家でなかつた限り、彼等の美人は、彼等の手に成された美人で、當時の現實界にも恐らく覩られなかつたものであらう。然すると一種の偶像の把持者、自己創作の夢に陶醉した一種のドリーマーではなかつたらうか。

然し何といふ寂しい心であらう。私は、自分のことのやうに、彼等の寂しさが胸を打つ。夢を描いてそれの創造的な喜びに滿ちてゐる時はまだいゝ。然しそれも僅かな時である。私たちであつても然うである。自己作成の偶像に醉つてゐる間はいゝ。それが如實に見えつゝあるから。然しそれが愈々自己のみが描いた影であると分り、外圍に然あるもの一個もなしと分つたその時、どんな寂しさが、私を襲ふだらう。見果てぬ夢の寂しさである。夢を見て暮し通したら、よかつた。然しいつか人は、外圍の眞實に眼覺めてはたと驚く。

春信も歌麿も、その一生を通じて、實際に彼等の體が觸れた愛人も多かつたらう。歌麿は格別少壯時から遊蕩を仕盡くしたらしい。さうした遊蕩のもとに、或は妻女といふ名目のもとに、彼が相知つた女性を、彼はいかなる心持を以て受け入れたらうか。恐らく、彼等の夢とはちがつた「現實」の彼女であつて、彼等の最上美を創造する、彼等の心奥に潛んだ美の偶像に燃燒した心は、兩眼を瞑ぢて、見るを潔しとしなかつたであらう。

それ程の深い省察もなく、春信や歌麿は、唯だ美女を形而上に表現して、自分の「拵へ」の腕の冴えを自慢したり、俗衆の好色的な心に媚びたのみであらうか。歌麿の美人はまだ餘程現實味があるものゝ、春信こそは全く夢である。非現實の第一である。春信は然程に所謂通俗繪師

の心にあつたらうか。私が考へる程の、夢の創造、自分の偶像の表現に對する悲しみや喜びやが、あつたのではなかつたらうか。

偶像に依らなければならない心。せめて自ら描いた偶像に、斯くあるべしとの期待に自ら浸つて、やつと現實の裏切られた思を忘れようとする。さうした寂しい心域は、私らもつねぐ味はふことではある。然し私らは、畫家ではなかつた。求むる美女の姿も、自ら描くことは、たゞ心の姿として幻のやうに浮べることは出來るものゝ、一層それを實有らしく表象的に、例へば繪畫に現はすことは出來ない。人は、形なき幻だけでは、自分の心に蟠まる影であるとはいへ、それをせめて紙と筆とを借りた繪畫にでも表現しなければ、滿たされぬものだ。

春信歌麿は、此點に於て幸福であつた。彼等は、自分の幻を自由に形に表現しうるだけの天稟を抱いてゐた。私らは、かうした天稟がないだけ、美女のわが幻を彼等の先人の筆の迹に慰めて歩いた。然し從來の我が日本畫に、美女の群を偶像的の信念からではあるが、比較的寫實風にとり扱ひ、さうして殆ど美人の描寫を以て一貫したのは、浮世繪であつて、就中春信と歌麿とである。私は、乃ち彼等に慰められるより外に仕方がなかつた。

殊に彼等の版畫技巧は、純東洋畫の、落筆簡素な空間の一部に全體を暗示しようとする畫風とは異り、西洋畫式の背景も濃やかに、着彩描線も非現實を現實的に浮き立たせる體(てい)の線と色の融和が巧みに、第二の立體、實在變じて實有らしく、時に沒線的といふ程に、直ちに感覺的に全體の風姿が、私の實感味を唆る。純日本畫式は、如何に巧妙な美人なりとはいへ、とかく餘りに觀念的で抽象的で、唯空間にとり殘された偶人の如き感あるに過ぎない。素絢の美人など、この例にふさはしいものであらう。殊に日本畫式の胡粉を塗りあげる手細工は、美人の顏をして却つて非現實にする。浮世繪の地紙を應用した白の無彩とは比ぶべくもない。浮世繪は、殊にその美人は、畢竟非實有の上に築かれた實有、多様な殊に間色應用の色彩と沒線的描法との融和の下に生れた光りある姿である。

愛欲の思は不思議なものである。私は年長けるにつれて、女性をもの新しく見、考へるやうになつた。昔のやうな女性に稍崇高さあくがれを感じたのは、可笑しい程今とは相遠ざかつて、今は、たゞ私の滿たされぬほのかな愛欲の探求の爲に女性を考へるやうになつた。それが、中年期の男性として當然でありとも考へ、また一般の男性の習であらうにしても、それでは餘り

に自己を傷ける、焦躁から焦躁、こんなに焦躁を續けてゐてどうするのかと悲しまれて、せめて自分の愛欲本位の女性を忘れようとする。然し間なく私の頭は愛欲の爲の女性になつてしまふ。愛欲が乾いたら、この人の世はどんなに寂しからう。然しこの愛欲あるが爲に、わが身は萎え、わが心は疲る。聖者は、愛欲を截ること「夏日の蓮の根の如くせよ」というたが、語は眞理であらうが、下品の自分には、中々實行されさうもない。

愛欲のみに相手を見るのは、自分を傷つけると同時に、相手の信を裏切る。愛は心が基である。など〻、然程今更野暮なことは考へないが、然しその道程のあの煩しさ、道程を果しえてからのあの哀愁、期待を裏切るあの枯淡、これが堪らない。即いて離れ、離れて即くと「殘雪」及び「新しい芽」の作者は教へてゐるが、彼も未だその眞に徹してはゐない。その彼ほどに愛欲の圏内に滲透してゐない私にとつては、まだこの愛欲を離れて見ることは、迚も出來さうもない。愛欲本位の夢からまたその夢、さうして又かとばかり、同じ哀愁、枯淡に心が苦つく。でなければ、相手の思はぬ裏切りかである。さうして又、愛欲本位とはいふもの〻、その實、近代に生を享けたゞけ、冷たい理智が時々眼を覺して、昔の純遊蕩兒の如く、愛欲に身を溺らし

生を委ねることが出來ない。醉つてゐる瞬間も、全的にでなく、自分や自分の仕事を氣にかける。相手もさうである。女性は本來いふと愛欲本位であらねばならぬのだが、今の女性は假令賣春の徒、比較的愛欲の氣分に浸り理解のそれに多い者と雖も、たとひ藻屑の中から被きあげた純な戀心が偶々ありとはいへ、多くは生活を背景に持つてゐる。

私は再び「斯くあるべし」を如實に眺めて行くより他はない。「斯くあるべし」の繪畫は、永久の我婦である。永久に自分を裏切りはしない。不純な愛欲本位であつても別に小言はいはない。道程の後のあの幻滅もない。自分の觀る時々、異つた心と眼を以て迎へてくれる。私は比較的自分の期待に近い我婦の幻を探して歩いた、はてに見付けたのが浮世繪であつた。春信、歌麿などの天才に依つた彼等が創造した(でなくば偶像といはう)風姿に縋るより仕方がなかつた。安價な享樂と人は嗤ふかも知れない。然し周圍に見出すことが出來ず、而して偶々それに近きものありと雖もそれに親しむことを許されぬ、でなくとも醉ふべく沒頭すべく爾く素質づけられなかつた我々にとつては、これにわが愛欲の思を晴らすより外はない。

「斯くあるべし」を提示して、自分に愛欲のシンボルたらしめてくれる春信よ、歌麿よ。私は終生、君達に感謝の詞を惜まないであらう。

新内の話

新内は、江戸淨瑠璃の一種である。念を押しておくが、淨瑠璃は義太夫のみの名稱ではない。さうして義太夫節前後、江戸に發生し又は爛熟したそれらは、均しく江戸淨瑠璃といふべきもので、義太夫節の中の江戸畠のものもあるが、それは、同じく義太夫の名に一括して、私の江戸淨瑠璃とは、義太夫以外の古くは金平節、語齋節、肥前節、土佐節、永閑節などの類から、大薩摩小薩摩以後の江戸に發生し又は繁殖したすべての、主に唄本位の唄淨瑠璃を爾く謂ふのである。草創期から大薩摩小薩摩、外記節、半太夫節、河東節、一中節、これらを前期として、享保の豐後節を中期とし、寶曆明和安永以後を後期若しくは末期として、江戸に榮えた常磐津節、富本節、清元節、新内節、薗八節等、爛然たる花を咲かせた。以上三期を以て江戸淨瑠璃を大別することにする。草創期は、勿論文献に據りてその所在と内容を窺ふより外はない。前期中期また殆ど然りである。但し中期の豐後節の最も正統の流は、寧ろ、新内節にある。

一中節から出た（一中節の祖、都太夫一中は京在住っ因りて江戸淨瑠璃とはいへど眞に江戸に產れ江戸に發達したのは、大薩摩や河東位ゐである。他は凡ての時期を通じて、その胎は、凡て京又は大阪である（然し江戸民

心に最も多く、歡迎せられ、産地の京大阪を凌駕する位である故、私は凡て江戸淨瑠璃と命名した。義太夫のみは大阪にのみ榮え、江戸には大阪を凌駕する程のものはなかつたから、私はこれを矢張り上方淨るりとしておく。）國太夫半中なる男が、この江戸中期末期を飾る唄淨瑠璃の祖である。即ち彼は初代一中の門人であつて、初めは、都國太夫半中と號し、後に宮古路國太夫と改め、自立した。享保三年戊十一月、大阪竹本座に於て始めて芝居を勤めた。（語物は博多小女郎浪枕）以來國太夫節とて諸國に聞ゆるに至つた。それが享保十五年（或は十八年頃）、海道筋を名古屋を經て江戸へ來た。其頃已に宮古路豐後掾と名乘つてゐた。これ、所謂豐後節である。この節が次第に江戸に榮え、四五年にして在來の諸流を壓倒する勢となつた。この節は、今傳はつてゐないが、新内の元であるだけ、より多く凄婉、悲壯なものであつたらう。より多く露骨なものであつたらう。種は京の一中ではあり、仕込は難波のものなれど、その喝采の相手は江戸人である。漸く將門政治弛廢して、人皆淫靡廢頽に赴きつゝあつた。然し江戸文學史の上では最も尊い爛熟期の曙であるから、矢張り江戸の當時の時代と當時の民心と雰圍氣とが、この豐後節を創つたといつていゝであらう。題材は「悲しき聲に淺ましく賤しきこと」と春臺獨語（太宰春臺の著）に憤慨されてゐることを以て推すべしである。傳存してゐる彼及門下の正本集「宮古路月下の梅」、「同窓の梅」の歌詞によりて見るも、之が察しられる。即ち殆どが心中道行である。遂に豐後節の爲には記念すべき年が來た。

即ち豐後節の禁遏である。幕令による禁止である。即ち、元文四年(西紀一七三九年)九月二十一日、幕府は特に令を發布して、それを差止めた。即ち知るべし、享保十五年の豐後掾東下よりこの年に至る約十年である。十年間に、彼の創始した豐後節は、然程の勢力となつたのである。以て彼の兎に角、偉大な悲曲天才家であつたことが知れる。私は豐後掾の一生に就て非常に興味を待つ。況して彼も亦その後間もなく自己が曲譜の如く、情死したといふ傳說あるに於てをやである。彼は恐らく生れ乍ら悲曲創造の一生を運命づけられ、彼の一生も亦たその藝術を實行と不離な性格に生きたものであつたらうと思ふ。でなくばどうして斯る空前の幕府の禁令を煩はす迄、市民士女の心を誘發することが出來よう。民俗惡化の上よりせば大なる蠹毒ではあるが、また人間の本然よりいへば、所謂神と惡魔と共に存するもの人なりの前提よりいへば、彼は所謂人情界の偉大なる天才であつたのである。偉大な藝術家、恐らく日本音曲史の上では、彧星ながらも、光芒陸離たる位地を占むべきものであらう。その當時の江戸淨るりの各派の內容を知るため、その頃市井に流行した下の俗謠がある。「河東上下、外記袴、半太夫羽織に義太股引、豐後可哀や丸裸」と、豐後節は、股引よりも品の下つた丸裸であつたのである。然れどもこの俗謠が暗示せる如く、人の本然は丸裸であるかも知れなからう。

新内は、その子女である。新内には各流派がある。即ち富士松節、鶴賀節、藤園節、吾妻路節、花園節等皆これ、廣義の新内である。（其他、岡本節、源氏節も亦此の一派である。岡本は、富士松五代の門下より出で、源氏は更にその岡本より生れた。）

富士松は、宮古路豊後掾の門人宮古路加賀太夫（後、寶暦初年富士松薩摩掾と改む。）から生れた。却説、當時相弟子の文字太夫は常盤津を起し、その文字太夫の門人富本豊前掾は富本節を起した。初代富本の門人に齋宮太夫といふのがあり、その門人に岡本安五郎（後の初代清元延壽齋）なるものがあつて清元を創始した。即ち常盤津、富本、清元の三者はこれ皆豊後節から出てゐる。これを世に豊後三流といふ。他に繁太夫節、薗八節も（此の薗八より更に宮薗節を生む。）豊後から生れてゐる。然るに豊後の直系は別にある。上掲の三流叢は所謂幕府の干渉を避けて餘程皮肉になり婉曲になり、殆んど豊後直傳の丸裸は面影を殘してゐない。然るにその丸裸の系統を嗣ぐものに、所謂富士松があつたのである。その富士松は更に鶴賀節を生んだ。然るにこの鶴賀節も師の富士松節も、更に新内節となつた。即ちこれが例の問題になる鶴賀新内なる男の宣傳である。

鶴賀新内（正徳四―安永三。享年六十一。）は、諸書に一致しない。嬉遊笑覧には、本姓敦賀を鶴賀と改め云々とあるけれど、こは同門の若狭掾と混同してゐる錯誤歴然たりであるから、餘りあてにならない。また新内のいかにして藝道に入つたかには、色んな傳説もあるが、定説らしいものをい

ふさ、本姓を岡田五郎次郎（一書に五郎次）といひ、もと湯方御家人であつた。それが志を立てゝ藝人となり、當時流行しつゝあつた富士松薩摩の門人となり、加賀八太夫と稱したのである。然るに兄弟子に富士松敦賀、後に（寶暦八年）一派を立てゝ鶴賀若狹掾と名のつたこの男に乞はれて、鶴賀の姓を名のり以後鶴賀新内と稱した。よりてこの新内なる名の男の技倆が卓絶してゐたことが分る。即ち當時既に師匠の富士松節や兄弟子の鶴賀節と拮抗して勢力を張り、兄弟子中の一派を立てた若狹掾の鶴賀節は微々として振はなかつたのであらう。よりて若狹掾の乞によりてその姓を名のつた。即ち若狹掾の鶴賀節はこの名人を得て、漸く富士松其他豊後三流と拮抗する名聲を得たのである。然るにそれが鶴賀節とも若狹節ともならず、世間から新内節（後に富士松節も一括して）と稱せらるゝに至つたのは、新内の德とはいへ、若狹掾としては、思はく違ひであつたかも知れない。（この間、異説は、新内を若狹掾の門人なりとするものがある。又嬉遊笑覧は、新内即ち若狹掾と同一人なりと見てゐる。）（新内一派の藤園節は富士松より起り、（但し後に中絶）新内の一派吾妻路節、（安政文久頃の名人吾妻路富士太夫に創まる。）また中絶してゐたが、鶴賀派より入つてその後を嗣ぎ、また鶴賀派より花園節を生んでゐる。然るに現存の富士松、鶴賀、吾妻路、花園の各派皆一樣に新内淨瑠璃と稱してゐる。即ち富士松初代の門人鶴賀新内の名をとつたものである。豊後掾の孫弟子たる新内によつて、彼の名によつて、豊後直系のこれ

らの派が一括し總稱せられてゐる。（その傳稱の最初は不明なれど恐らく新内殁の安永三年前後には、既に此の名が喧傳されてゐたらう）亦以て彼れ鶴賀新内が如何に所謂新内節の妙手であつたかゞ分らう。即ち私の日本俗曲史上、特筆したいのは、祖の豐後掾と、この新内との二者である。

次に新内各派の歌詞及びその作者はどうであらう。有名な明烏や、蘭蝶や夫等は誰人によつて創作せられたか。而して富士松、鶴賀以下新内の各流派、各々その歌詞を別にしてゐるか、但しは同一であるか。この問題である。今日一般に傳唱せられ、また節は忘られたるもなほ歌詞を存するものは、蘭蝶、若木仇名草（わかぎのあだなぐさ）、明烏（明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあわゆき））、同後眞夢（のちのまさゆめ）、尾上伊太八（歸咲名殘命毛（かへりざきなごりのいのちげ））、三勝半七（千日寺名殘鐘（せんにちでらなごりのかね））等がある。其他國書刊行會本の新内正本集には、二十種を舉げてゐる。（新刊の「新内全集」には、百餘種を舉げてゐる。其前編既刊。）なほ今日傳播しつゝあるものに、なほ膝栗毛の類もあるがこは新内本流の情死材料でないから此等は一切省いた。（尚此等に就ては、後日執筆の「新内正本に就て」に於て悉しく論ふべし。）

この數種を代表として、その歌詞の作者の誰であつたかを撿索して見よう。正本の署名者は、蘭蝶は、鶴賀若狹掾。明烏、同じく若狹掾。後眞夢は富士松魯中。尾上伊太八、若狹掾。三勝、若狹掾。其他心中物は殆ど若狹掾直傳となり、鶴賀新内直傳とあるものは、少數である。（「藤蔓戀の柵」、「桂川戀散柳」、「二世至禮」等の數種。）よりて考ふるに、今日新内の精髓たる心中物は殆ど、大半は若狹掾の手

に成つたものである。而してその歌詞は、實際の執筆は誰人の手になつたか。恐らくこれは署名者の若狹掾であらうと思ふ。若狹掾は大木戸黒牛と稱し、薙髪して鶴翁といひ、狂歌を能くした。從つて相當の文筆家であつたらう。それに嬉遊笑覽にも、「かたる所の淨るり皆自作なり」とあるのを信じて、彼の創作と稱しても大過なからう。即ち新内は、この若狹掾程の文辭の才はなかつた。その代りに彼に餘りある聲調の天禀を有した。即ち新内の盛行は、若狹掾の文才と新内の聲樂との力である。然らば、若狹掾以前の富士松初代は何を語つたか。今日の富士松は鶴賀と同じく若狹掾直傳の明烏や蘭蝶をやつてゐるが、その昔若狹掾及び新内の二者の師であつた初代富士松は何の歌詞を歌つたか。是れ今日では不明の事であるが、恐らく豐後節の正本類を借りて用ゐたものであらう。それが、その次代、次々代に至つて新内節(鶴賀一派)の盛行につれ、同じく彼等の正本を借り、それに富士松一派の聲調を與へたであらうと思ふ。

現存してゐる新内の中、富士松節と鶴賀節とを比較するに、餘程隔りがある。富士松は所謂澁く、鶴賀は花やかである。同じ明烏でも、富士松の名どりと鶴賀の名どりとは餘程ちがふ。また施律(音樂のメロヂカルな點)の上からいうても、富士松は聲を殺してゐるにも拘はらず、鶴賀は、餘程聲を放擲に使ひ、且つ單調で、唯その奔放を以て勝れりとしてゐる。所謂富士

松は、同じ唄ひ物乍ら、劇的表現に力あるやうに聞かれ、鶴賀は唯我々の感情の焔に訴へる體の悲調一點張である。

新内そのもの丶歌詞の内容と形式はどうであらう。明烏や蘭蝶を聞いた人は誰しも思ふであらう。文字の上に於ては、上方に生れた義太夫淨瑠璃と殆ど大差のないことである。但し相違の點は、その段切の短かく、數枚の正本で盡きてゐることである。唯義太夫の歌詞に比べると、所謂義太夫のさわりといふが如き部分の比較的多丶して、會話の數少いことである。偶々會話のあることがあつても、矢張り節付のことが多い。義太夫は叙事詩であり、新内は殊に叙情詩である。常盤津や富本清元は、どちらかといへば叙事の部分多きにも拘らず、現存の江戸淨瑠璃の中獨りこの新内だけは最も叙情詩、場面の如實の表現といふよりも先に、直ちにその哀絶な聲調と、悲絶な歌詞とを以て人の肺腑を衝かずんば歇まぬもの丶あることである。これが新内歌詞の特徴といつていゝであらう。次に我々の最も氣のつくことは、新内語りには最も表情の少いことである。その代り聲には、悲絶の施律のあり丈を盡す。眞に絶叫といふべきものである。明烏や蘭蝶、あの浦里や此糸の嘆きを聽いたものは、誰しもその浦里や此糸の顏なり心持なりを想像する以前に、直ちに我をして時次郎たらしめ、蘭蝶たらしめずにはおかぬ然

程の一大哀調に先づ感打たれるであらう。光景の再現よりも、その情緒の訴へ、情怨綿々として盡くるなく、纏れて絲の如き、我らの胸に持てあぐむであらう。さうした結果を心がけるのが新内である。宜なり、この新内が往時、その常得意たる廓中に於てその流しを禁ぜられてゐたこと。即ち文化初年（元年であるか二三年であるか不明。若し文化元年とすると西紀一八〇四年、而して元文四年の豐後節禁止より六十六年を經過してゐる。即ち豐後節は、その精神に於て元文四年の停止以來約七十年にして新内に復活したのである。或は曰ふ、此の禁止、文政年間なりと。）新内語りの吉原出入を嚴禁し、唯一年の中七月十三日の一日のみは盆の供養と稱して特に許すこととし、明治の初年までこの禁を解かなかつたといふ。即ち約七十年の間（明治元年まで文化元年より六十五年）は廓内に於て禁ぜられてゐたのである。德程に往時は、この一個の新内が彼等遊君嫖客を騷がしたのである。即ちこの新内語りの結果、合意無理の情死沙汰が頻々と起り、吉原はその始末に寧日なかつたといふからである。それもその筈である。新内の全部、その心中物は、所謂士君子の顰蹙する男女痴情に關するものは、殆ど遊君と嫖客との心中沙汰即ち心中讚美の歌であるからである。加ふるに例の哀絶悲絶の歌調である。誰か實感を以て聞かぬものがあらう。これに實感なきものは、遊里耽溺の些の經驗なきまたは同情なき全然士君子か、又は所謂亡八たる彼等樓主の無情漢のみであらう。公然提唱した遊君讚美、青樓詩、心中讚美の叙情詩でこれがあつたのである。

「滑稽東都一圖繪」と「教諭謎々春の雪」

湯朝竹山人氏編の「風流俗謠集」（大正十年六月聚英閣發行）中にも、その卷頭に收載せられてゐる「東都一圖繪」、の初編及び二編。然るに湯朝氏編の此の「東都一圖繪」の初編は、全部紹介と斷書きし乍ら、その實、七丁目全部。十一丁目全部。十九丁裏の一首。及び終り三丁全部。合計三十一首を脱落してゐる。湯朝氏の原本は、或は寫本であるのかも知れない。湯朝氏「風流俗謠集」から漏れた「東都一圖繪」初編の解題と並びに脱漏の中の主要部分を、家藏の原本により、これを補足しておかう。

本の形は普通の中本であつて、序文、扉、本文共全二十三丁。作者及書者は、本文の扉に銀庵主人撰集　爲永春水補章と右一行。中央に滑稽東都一圖繪　全とありて、左一行に、一筆庵英泉書　風雅堂藏販とある。その扉のすぐ前に、狂訓亭主人（春水）の序を二丁添へてゐる。銀庵主人とは誰か。恐らく無名氏であつたらう。その證據に、表紙の裏面には、爲永春水補綴一筆庵英泉戲書、初編。度々一圖繪、東都書肆壽梓とありて、銀庵主人を逸してゐる。本文扉

の次に、ヒラキ二面の藝者二人、男二人その中の一人は立つて踊る。右に膳を持つた茶屋の女房といつた繪があり、(彩淡)「江戸をもてかゞみとすなり花に樽」といふ句が左りの上の雲形の中にある。その裏は、緒首の娘、懐ろへ手を挿し入れ乍ら、立膝の上の本を見てゐる圖。上に、「君を待つ夜は一夜が千とせあへば千里も一里ほどと云を譯す。俟レ君孤跪坐一夜是千年相見歸二千里一猶如二一里還一」とある。以下本文十九丁、各一首に繪が一圖づゝ、人物、動物、或は風景を以て歌意を説明してゐる。畫樣は、同英泉畫の繪本「浮世畫譜」あたりと同じく、極めて達者、線の行き方は案外勁い。歌は、多くは無名であるが、所々署名のものもある。左に、湯朝氏本に洩れた、終り三丁分の十八首を紹介しておかう。括弧の内は、一々の挿繪構圖の大体である。併せてその体裁の一斑が知れよう。(湯朝氏本は全編、歌の登載のみで挿繪はない。)

籠の鳥をばしたゝかだまし外へ巣をかけしらぬかほ(枝に鳥。下に籠の鳥)。○可愛さうだよあの子もこり性ゐけんするのもやすだいし(娘、小首を傾げてゐる。)。○人のしやくりできれるはよしなやつこ凧ではあるまいし(奴凧と龍の角凧と糸卷。)。○思ひ出すとはわするゝからよわたしや夜のめもわすられぬ(女、行燈に文をよむ。)。○逢ふてわかれのつらゐをおもやあわぬつらさがましであろ(お客にさゝやく女郎)。○種蒔ぬ岩に松さへはへるじやないか思ふて添れぬ事はない　かやば町ゐく

（岩に松。）。○筆は可愛やはなれて居ても戀しゆかしのたより聞く（女、書いた文を巻きおさむ。）。○あつひ御心もまたごゐけんも聞入ましたがきれられぬ　同（異見する老爺と俯向ける娘。）。○きれた〳〵と口ではいへど水に浮草根はたへぬ　いやば町ろく（船の百姓、水に棹を入れる。）。○女房さらずにわたしもきれず外に思案はあるまいか　柏屋ちか（腕組した男に、女。）。○愚痴もみれんもたくさんあれど向ふ鏡に耻て居る（女、鏡に向ふ。）。○末もとげない當座の花にむすぶ出雲の人ぢらし（女とその父親に說く他の男。）。○いふておくのになぜあさはかな口ゆへ浮名がたつわいな（口を両手で塞いだ男と立膝で詰めかける女。）。○かたひやくそく石山なれどかげじやわたしを秋の月（崖に月。）。○瀧の水岩にせかれて一チ度はきれる末はながれてまたひとつ（岩を挟んだ瀧の水。）。○目出た〳〵が三ツかさなりて庭に鶴龜舞あそぶ　福壽。　高砂の松も夫婦でもろしらがまで添ふを手本にするがよい。　延命。　松も緑を幾千代かけてするゐをいわふてゐるわいな　柏屋ちか女。（全面右半に、鶴龜と松竹。）以上。

巻尾に奥附を逸してゐるから、上梓年月は不明である。

次に、序で乍ら、一筆庵（英泉）畵作の「教諭謎々春の雪」を紹介しておかう。天保十六年乙巳春新彫東都書肆　中橋下槇町布袋屋市兵衛版と巻尾にある。（天保十六年とあるが、實は弘化二年である。）中本二十丁。一面を四行、一行を三段に割り、上の段は問、眞中は解き。下は心である。さうして夫々に問にも

解きにも心にも意味を明らかにした繪を小さく出してゐる。即ち一面に四個の謎の問と解と心。両面づゝ二十丁、計百五十八個（最尾二行、奥附で缺く）の謎の解である。畫は極めて簡潔要を得てゐる。一筆庵畫作とある以上、謎も英泉の工夫に據つたものであらう。英泉は由來戯作も數種殘してをり、「無名翁隨筆」の浮世繪考もあり、由來文筆には拙ならぬ彼であるから、此の「教諭謎々」も彼の創作とみてもよからう。すつかり、英泉君、いゝ氣持になつて畫作した物と見られる。

その一二を示すと、

夫婦なかトかけて。とむらひトとく。心はやくもありやかぬもあり。○とろわか町トかけて。壹歩二朱トとく。心は三朱倍ある。○氣のみじかい客トかけて。さやについた玉子トとく。心はかへるのがはやい。○桃に鶯トかけて。まけ角力へのまうびトとく。心は花がちがつた。○畫にかいた西行トかけて。本膳で食ふゐなかものトとく。心はかさばかりゝにする。○古家のやれトかけて。わかれた上方女トとく。心はのきゝさつた。○よみうりトかけて。さうぐわんすいくわトとく。心はたつてうつてゐる。○黒繻子の帯トかけて。日あたりの雪トとく。心はそらどけがする。○白木やおこまトかけて。狸のきん玉トとく。心は八丈で名がたかい。○大黒の頭巾トかけて。とり毛のやりトとく。心はぬいたを見たことがない。

此んな類である。海防騒ぎを外に、末期の惰眠を貪つた下民の状が知れよう。

大正十二年二月二十五日印刷納本
大正十二年三月一日發行
第六冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎楓水著

第六冊

文本

本朝艶畫考（下）
西鶴に據るおさんの正體
近世墮胎史雜考
東都一圖會と拙稿（湯朝竹山人）

東都一圖會と拙稿の脱落に就て

湯朝竹山人

尾崎楓水氏へ呈す。

拜啓。いまだお目にはかゝらず候へども、貴著「江戸軟派研究」は拜見いたしなり、おなつかしくぞんじなり候。

さてその第五冊に往年拙稿卷頭に收載いたしたる「滑稽東都一圖會」初編の轉寫に脱落あることを示教され、小生は今日までいまだその過失を知らざりしことを喫驚いたし候。拙稿序文にも認め候通り、原本より轉寫のことには隨分忠實に努力いたしたる次第に候。然るにも拘らずこの一大過失を知らざりしは全く注意を欠きたる咎はまぬがれず候。小生はこの機會に自個の失體をはづると同時に、彼の拙稿の讀者に對して深く過ちを謝せずんばあるべからず候。

拙稿「風流俗謠集」は大正十年六月の發行には候へども、その原稿はその數年前より轉寫いたしなりたるものあり、古書は丁數を氣にかけて調べねばならぬものといふを知らぬ時代の筆記もあり、終にかゝる過失をいたすに至りたる次第、なんとも申しやう之なく候。

右「東都一圖會」初編の一冊だけは、横濱の曾我部一紅氏の藏書を借覽轉寫したるものにて、その冊子に脱丁ありたるを全然知らず、今日貴下の御示教に接し、過失は明白にして罪を謝するの外なきことを知り申し候。拙稿に英泉醉書の口繪を採用するに至り、初編よりさらずして第二編より轉寫いたしなり候も或は一紅氏の藏書にその口繪が脱しなりしか或は出版の場合再び借覽を請ふのいとまなかりしか、止を得ず小生所藏の第二編の口繪を用ゐたることなども思ひ出だされ候。

右の過失がその一冊のみにて候はゞ、貴下の筆勞によりてこれを補足するの機會を得たる次第には候へども、拙稿收載の他の原本に於てもまた同樣の手落ちあるやも知れず、今さら身の毛のよだつ思ひいたしなり候。

然るところ、小生藏書の都々一本は、大部分を黑岩日出雄氏(故涙香先生令息、貴著「江戸軟派研究」を購讀してをられます)へ、また「風流俗謠集」へ收載したる中の幾冊は英十三氏(「歌澤茶話」の著書)へ、いづれもゆづりわたし、手元には一冊ものこしをらず、よつて他の部分の過失の有無を調査せんには他日の機會を期待するの外なき次第に候。

序でゆゑ一寸書き添へたく候。小生昨年「萬朝報」に數回紹介連載いたし候「早間調小唄」はこのごろやうやく脱稿いたし候ゆゑ、世に出だしたく目下稿本整理中に候。

貴「江戸軟派研究」が、名古屋より發行されたるを面白きことぞんじなり候。

小生こと十年以前より、都々一節の歴史を知りたく、多少の手がかりあらば調べんものとぞんじなり候へども、今もつてこれぞといふ記錄に出會はず、かねて遺憾とするところに候。貴下もし貴著の上に造詣を示さるればこの上もなく嬉しく候。都々一節は江戸で產まれたるやういひ傳へなれども、貴地名古屋で產れたりとの說あり、どうやらこれが眞實らしう思はれ候。御考慮願はしう候。

謹んで貴下の筆勞を感謝し、貴下の健康をいのり申し候。敬具

(大正十二年二月五日、東京萬朝報社編輯局にて認む)

第三　江戸期の盛行及び禁令

江戸期には、これが最も頻々流行した。これは、版畫の創見、(日本版畫の創作は、四天王寺の扇面古寫經の畫だといふ。)此期に於ける眼まぐるしいその發達に伴つての事實である。我等浮世繪の其他一般版畫沿革史に携はる者には、自然とその消息が諒解される。殊に元來がこの艶畫は、往古「おそくづ」の時代(此時代は殆ど肉筆畫)にありても、一個の寫實風の畫風ともいふを得よう。乃ち江戸期の當初、寫實に根柢を置き、時世粧の描寫に第一途を發見した岩佐又兵衞、轉じてその大成者菱川にありては、無論この風の好色畫の執筆があつたことは否む譯にいかない。殊に菱川(師宣)は、浮世繪の眞の意義に於ける創造者である。從つてまた江戸期艶畫のまた創造者でもあつたのである。その當時幕府は、未だ此の種の版行物に對して頗る寛大であつた。恰も庄司甚内に遊廓公許を與へたるが如く、敢て奬勵とは行かざるも、殺伐なる士風を太平謳歌の遊冶ならしめんとして、見て

見ぬ振してゐたのかも知れない。從つて、その當初には、公然と書者並に書肆板元の名を署したるもの、數多現れた。

師宣の筆畫として、艶色軌範、花の盃、さゝげ繪枕、色雙子、戀のうわもり等が現れた。其他、延寶、天和、貞享、元祿の間には、盛んに版行された。(その板行の最初は、承應明曆の頃であらうといふ。)「當時の春本には、麗々しく菱川師宣畫とか、古山師重畫とか、繪師石川流宣など、署名し、尙出版書肆も亦た松會(まつゑ)開版とか、鱗形屋板行と明記してある。これより後、鳥居清信、奥村政信等も多く描いたが、其の署名のものは少ない。京都では吉田半兵衛、西川祐信等署名のもの多く出版された。降つて寶曆明和安永、天明頃には、月岡雪鼎、鈴木春信、磯田湖龍齋、勝川春章、細田榮之等署名のもの多く出版された。」(外骨氏、「此花」第十三枝)

軟派通の外骨氏の言であるから、一々證左を攫んでの斷言であらうと思ふ。私は、祐信署名のものより未だ見たことがない。湖龍齋あたりのものは、署名でなくして、篇中の或部分に、衝立(ついたて)の繪などに湖龍と落欵あるものを見た。春信の如きも、序文(じよぶん)には、僅かに春信の書であることを意味したものを見た。歌麿、榮之の類は、篇中の男女の會話の中に、或は歌さん、或は榮之云々と曰はしめ、該書者たる事を暗示したものあるを、見た。讀物本位の好色本の類に至つて

は、作者名は逸したれ、版元、出版年月を明記したもの、(作者名なきも序文には大抵署名があり、以てその全篇の作者たる事を首肯せしめるのが多い。)例へば、「好色むらく坊」の如きがある。(本著、前掲、元祿板「好色むらく坊」解題參照)其他、此類は殆ど無數であつた。一度び「好色本目錄」の類を繙かば容易に知れることであらう。西鶴作、稱西鶴作、(「色里三所世帶」の如き)、其磧自笑作の類は云はずもがなである。

兎に角、所謂「おそくづの繪」は、浮世繪の盛行、板畫の向上と共に、頻出した。師宣から始まつて、(師宣は元祿七年七十餘歲にて歿。)爾來約二百年間、明治初年に至る迄、數度禁令出でながらも、その板行の盛出を見た。初めは、單なる墨繪、墨摺本であつたのが、錦繪技巧の發明以後(春信以後)、その着彩、彫摺、精密と絢爛とを極め、普通の板畫に比して數倍の高値を以て販賣された。その需要先は、主に御殿女中。或は、士族にありても、その士女の婚禮にはこれを用具として供へた。町人間の享樂心に之が投合して、その歡迎されたことは、謂ふ迄もないことである。畫師は、師宣以來、明治初期の歌川末派に至るまで、その數蓋し夥しきものであらう。然もその畫風も、師宣あたりの原始的(浮世繪として)素朴なるに反し、時代と作畫技巧との進むにつれて、時代の加層的な頽廢と淫靡に傾合するため、その描寫も唾棄すべき嫌惡

すべきものとなりつゝあつた。しかも、江戸末期多數の畫家の如きは、古人先輩の此種おそくづを以て、人體描寫の粉本とした。明治に至るも、風俗畫家、美人畫家は、多くこれに依つて人體の素描に習熟したものであるといふ。中期末期の諸艶畫家の中、春信、歌麿、榮之共々にその板畫に現るゝ如き特徴があつた。池田英泉は、就中此の方面に辣腕を有し、しかも彼は蘭風の解剖的智識、所謂性學なるものゝ一端を知つてゐるらしかつた。歌川國芳は、殊に、居常西洋の木版畫の斷片を貯へて、粉本としたと謂はれてゐるが、その爲でもあらうか、彼が畫いた此種のものに於ける這個の描寫は、その均齊を最も得てゐる。

さて次に禁令の問題に及ばう。

江戸幕府の禁令は、四五度出た。今見當つただけの年次を記してみる。その最初は享保七寅年十一月（吉宗時代、西紀一七二二）である。

新板書物之儀ニ付町觸

（前　　略）

一唯今迄有來候板行物の內好色本之類は風俗之爲にも不宜儀に候間段々相改絕版可申候事

（中　　略）

一何書物によらず此後新板之物作者並板元實名奥書爲致可申事

（後　略）

これが爲、西鶴物の好色本其他の春本類は、大恐慌を來し、比較的温和なものは、好色の名を削り改題するか、或はその程度以下のものは、絕版の已むなきに至つた。從つて無論これ以後公刊の艶書艶本類は跡を絕つた譯である。然しそれも名儀の上だけで、秘密出版は相變らず頻繁であつた。需要は益々盛んであつたのである。天明頃には、再びその法令も弛み、繪畫及び猥褻具は公然店頭に並べられたらしい。何となれば、天明七年（家斉、第一年。西紀一七八七年）植崎九八郎なるもの、時弊十數條を指摘して、松平定信に建言したことがある。その上書中にも、

「近來、惣たい風俗悪しく相成り、戯繪を店先へ開き、商ひ、或は張籠陽物を並べ賣り候ふ家相見え候。是等の類嚴しく御停止被遊度奉存候」

とある。氣の毒にも、彼はこの上書のため、卑怯なる當局の忌諱に觸れて、幽屛の罰を受けた。（植崎九八郎は、小普請組永井監物の支配にして、高四十俵二人扶持を受け居りしが、此建言のため罪を得て、片桐侯の邸に幽せられ、文化四年丁卯和州小泉に死せり。「國書解題」。）

これに鑑みたかどうか、次で寛政二年（同家斉。西紀一七九〇年）に、幕府は再び嚴令を出した。繪本繪雙紙取締令である。無論春本類にも嚴しく取締を命じた。即ち左の如きものである。

『地本問屋行事共へ申渡

書物の儀、毎々より嚴敷申渡候處、いつとなく猥に相成候。何によらず行事改め候て、繪本繪草紙類迄も風俗の爲に相成らざる猥がましき事勿論無用に候。一枚繪類は繪のみに候はゞ、大概は苦しからず。尤も言葉書等有之候はゞ、よく〳〵是を改め、如何なる品は板行致させ申す間敷候。右に付行事改めを用ゐざる者も候はゞ、訴へ出でらるべく候。又改め方行屆かず、或者改めに洩れ候儀候はゞ、行事共越度たるべく候。右之通相心得申すべく候。尤も享保年中申渡候趣も猶又書付にて相渡すべく候間、此度申渡候儀等相含み改め申すべく候。

寛政二戌年十月二十七日」

靑本年表寛政二年の條に曰く、「十一月、草双紙等に、時勢の雜說等著述せし物賣買停止並びに版改めの件に就き、取締の法令を發布せらる。」

「神道柱立」にも曰く、「寛政初めの年、江府は、店に春畫を賣る事を禁じ、又男女混雜の入湯を制し給ふ云々。」と。

寛政二年は、歌麿の全盛期である。當時百龜なる艶畫の大家があつた。蜀山人の「奴凧」には「元飯田町中坂に住める藥店、剃髮して百龜といふ。」とある。この男や歌麿などは眞先に打擊を

受けた筈だ。（浮世繪師便覽には、「百龜は、小松屋といふ。藥種屋なり。俗稱三右衛門。略暦摺物多し。天明頃」とある。）其他の畫家には、此の寛政二年當時に於て、豊國（歌川氏）は漸く物にならうとし、北尾政演（京傳）は、その全盛期であつた。畫家としてなほ、淸長（鳥居氏）もゐた。重政（政演の師、北尾氏の祖）もゐた、政美（北尾氏）もあつた。これ等も多少とも打擊を受けたに違ひない。

次で現れたのは、有名な天保十三年（西、一八四二年）の水野越前守の嚴令である。所謂天保改革、水越の改革である。彼は、繁縟な風俗矯正令の他に、書物繪草紙等に就て、六月三日

一、自今新板書物の儀、儒書佛書神書醫書歌書都て書物類其筋一通の事は格別、異敎妄說を取交へ作り出し、時の風俗、人の批判等を認候類、好色畫本等堅く可爲無用事（中略）

一、何書物によらず、新板のもの、作者並板元の實名奥書に爲致可申事

の禁令を發した。彼は尙ほ、俳優、妓女等の一枚摺、錦繪の刊行並びに賣買を禁止した。且つ合卷繪双紙の繪組に俳優の似顔、狂言の趣向を用ゐたり、或は表紙上包に彩色を施すことを一切嚴禁した。此月、種彥の田舍源氏に絕版を命じ、爲永春水を手鎖の刑に處した。七月、更に令を發して、人情本の賣買貸借を禁止し、且つその板木を沒收した。十一月晦日には、更に令して、合卷繪双紙の類都べて草稿中に、掛りの名主、その月番の認め印を受け、出版の際こ

れを査定するやうに嚴命した。（水越は此の外なほ數條、當時の出版矯正令を發布してゐる。初版「日本社會事彙下卷一七七頁に詳しく出づ。）

この水越の改革は、彼等出版業界には、青天の霹靂であつた。況して公然とはいかなかつた彼等秘密本類出版業者には、畫家も無論大恐慌であつた。然し恐慌も一時であつた。日ならずして普通版畫も絢爛贅澤なものとなり、從つて秘密本類も國貞、國芳等、其他歌川派の匿名作、頻出するに至つた。「所謂ゑさがしの類に男女の〇〇を描きしものは、公然店先に陳列せられた。それが明治の三四年頃まででであつた」といふ。否これに限らず、國貞（歌川）の作の艶本「相生源氏」は、松平春嶽（福井藩主）の御手摺本なりきといふに至つてをやである。

浮世繪師の他にも、應擧、素絢、文晁の輩、殊に崋山の如きにも此の種の作があるといふことである。近世では、靄崖（高久）、容齋（菊地）、小蘋（野口）等の作を自分は見た。

×

意外に叙述が長くなつてしまつた。誠に諸君にお氣の毒であつた。案外面白くなかつたかも知れない。それは偏へに筆者の罪である。乍然何故私が斯る羊頭狗肉の篇をものしたかと云へば、我が日本民族の生活史の一面として之を提示したかつたが爲である。殊に此の種の方面が一般の識者に閑却されてゐるからである。一言以て辯じて置く。

西鶴に據るおさんの正體

おさんと茂右衛門の破倫は、西鶴と大近松とによつて描かれてゐる。（但し近松は、茂右衛門を茂兵衛とする。）一は「好色五人女」、一は「大經師昔暦」であるが、西鶴の五人女の方が事實に近いことは、從來諸家の定論である。三田村鳶魚氏は、嘗て「大經師昔暦」なる章の下に、此のおさんの正体を解剖せられた。（「芝居の裏表」所收）然し三田村氏のは、大分(だいぶ)歌祭文の「大きやうしおさん」や主としては大近松の淨瑠璃が混入してゐるのか、おさんの正体に於て、まだ／＼明らかならぬ點が多い。殊に不自然な點が多い。即ち私は、今全部を西鶴の「五人女」ばかりに典據を求めて、それ以外はほんの參考として、此の「おさん」の正体を詮索してみよう。さうして、無論心ある讀者ありて、私の本著既載の「大近松の破倫物」中の大近松のおさんと對照せらるれば、妙であると思ふ。

先づ、分り易く、本夫、姦婦、姦夫三者の履歴を、表別けにしてみよう。

本夫。 大經師。

（姓名、並に住所。共に不明。（西鶴には是に關する記述見當らず。）

○大經師の性格。「衆道女道を晝夜の分ちもなく、さま〳〵遊興つき」た男。然るに、後に、愛妻おさんに姦通逃亡せられ、近江で死んだといふ噂を眞にうけて、「中にもいたづらかたぎの女を持ち合はす男の身にして、是程情なき物はなし。おさん事も死にければ是非もなしと、………惜しといふ心にも僧を招きて亡き跡を弔ひける」。案外物の分つた、諦らめのよい男。流石若い時からの道樂で、譯知り物知りと褒めてやりたい男。

○大經師の年齡。おさんとは大分隔たりがあつたらう。即ち「年久しくやもめ住み」したといふからである。

姦婦。おさん。

○生家。「すみ所は室町通り。」おさんをして娘時分「仕出し衣裳の物好み、當世女の只中、ひろい京にも又あるべからず」といはれる程贅を盡させ得た身分。職は不明なれど、茂右衞門などを使ひ居たる町家なるべし。

○おさんの容貌。「浮名の立ちつゞき都の情の山を動かし、祇園會の月鉾かつらの眉をあらそひ、姿は清水の初櫻、いまだ咲きかゝる風情、口びるの美はしきは高尾の木末色の盛り」云々の美少女。大經師がこれを見染めて、「今朝から見盡くせし美女ども、是に蹴落されて、其名床しく尋ねけるに、室町のさる息女今小町」といはれた程。だから不倫を爲した頃は、美婦に性の眼ざめの魂も入つて、一倍爛漫たる妖艶たる花の如きであつたらう。

○おさんの性格。「いたづらものとは後に思ひ合せ侍り」といつてゐるが、おさん大經師に嫁いで、(嫁いたのは、十三か四と見られた見染め間もなく無論その年と類推する。)三年越し、初めは娘々してゐたが、次第に町女房らしくなつた。唯、平凡忠實な女房となつてゐた。即ち「明暮世を渡る女の業を大事に、手づからべんがら糸に氣をつくし、すゑずゑの女に手紬を織らせて、わが男の見よげに始末を本とし、竈も大くべさせず、小遣帳を筆

まめに改ため、町人の家に有りたきはかやうの女ぞかし」と作者から褒められてゐる程、節倹家で利口で、さうして亭主を(前の「わが男」とは、無論亭主の事。)可愛がつた重寶な女房。即ち性格は、悪からう筈はない。

姦　夫。　手代茂右衛門。

○出生、不詳。たゞその身の叔母が、丹波の柏原にゐる。おさん實家の手代として「年をかされて召使」はれてゐた。大經師の東國旅立ちの爲、留守を差配する爲「聟のかたへ遣は」された。容貌は普通だつたらう。

○茂右衛門の性格。「此男の正直頭は人まかせ、額ちいさく、袖口五寸に足らず。髪置して此方編笠をかぶらず。ましてや脇差を拵へず、唯十露盤を枕に夢にも銀まうけの詮索ばかり」の男。情事には、案外初心で臆病らしかつた。

以上、三者の輪廓は、大凡以て判然したであらう。

次は、不倫を爲した前後、それから刑死に至る迄の徑路である。

大經師、おさんの結婚。見染められて間もなくの擧式。おさんは時に芳紀十四歳。(西鶴の記述は、一たいに年齢の記述なし。唯見染の記事中に、おさんを十三か十四とある。老けてゐる方を取つて十四とした。)

結婚後三年の經過。「花の夕月の曙、此の男外を詠めもやらずして、夫婦のかたらひ深く三年が程」とある通り、大經師君、戀女房を得て、すつかり耽溺を止め、商賣大事と稼いだらしい。それが爲の東國旅立ちでもある。おさんも何くれ、家の事にも働き、又、夫をまじめに愛してもゐたらしい。

大經師の東國出立。「京に名殘を惜めど、身過程悲しきはなし」とある故、女房に名殘はあり乍ら、商賣大切とも心得ゐたのである。その出立は、出立して間もなくの記事に「折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひやりて」云々と茂右衛門の灸療治にかけてゐるから、秋の初めか中頃と見るべきであらう。この時、おさん十六歲。

大經師の下女りん。茂右衛門に戀慕するのは、丁度この「折節秋も」の頃。それから、翌年へつゞく。

不倫敢行年月日。その翌年（結婚から四年目）の五月十四日の夜。（此の日時は原作に記入あり）おさん十七歲。

大經師宅に於ける、以後の密通。第二節「してやられた云々」の終りに、「乘りかゝつたる馬はあれど君を思へば夜毎にかよひ、人の咎めもかへりみず、外なる事にやつしける」云々とあるによつて、此の五月十四日から、翌年春、石山詣まで大經師宅に於て不義が續けられたと見てよからう。石山詣、それから僞入水、出奔と來たのは、その翌年春頃に、東國の本夫から間もなく歸宅との知らせがあつたのではなからうか。この類推を正しとすると、大經師の東國逗留は一昨年の秋から此の春へかけて、約一年半以上。即ち、おさんは本夫と別れてから密通まで（一昨年の秋から去年の五月へ）約八九ヶ月、空閨のせゐもあつたらう。否寧ろ、密通は、此

のせゐが主であつたらう。第一回は、惡戯から起つた過失にしても、その後の續行が、どうしても此の性の悩みと首肯させる。それに、その第一回の當夜も、西鶴の筆は、眼ざめて氣づいたやうに書いてゐるが、その實、半醒半眠であつたらう。おさんも情を通はしたことは、茂右衛門が、立退いて、「りんが女心はあるまじきと思ひしに、我さきにいかなる人か物せし事ぞと恐ろしく、重ねてはいかな」と思ひ止まる事にしたといふ呟きでも分る。すぐそのあとで、「よもや此事人に知れざる事あらじ。此の上は身をすて命かぎりに名を立て、茂右衛門と死出の旅路の道づれとなほ止め難く心底申きかせければ」といふおさんによつて、愈々おさんの本能性が俄かに擡げたといふ事が分る。「名を立て」ようとは、一體どういふ名か。性欲の復活を得て、すつかり死に物狂ひになつてゐる。おさんの此の町女房から姦婦への早變りも、元來「性」を根本に置けば、容易に了解される。此の事おさん十七歳の五月から十八歳の春。此の約一年かゝつておさんは、せつせと「金子五百兩」の軍用金を拵へたのであらう。

石山詣と僞入水。「東山の櫻はすて物になして、行くも歸るや是や此の關越えて」とか、「花は命にたとへていつ散るべきも定め難し」とあれば、無論春。即ちおさんの十八歳。結婚後から數へると五年目。

姦夫姦婦の交情。大經師宅に於ての繼續でも分るが、石山詣をすまして、「勢田より手繰り船を借りて、長橋の賴みをかけても、短かきは我々が樂しみと、浪は枕の床の山、現はるるまでの亂髮」というてゐるのを見ても分る。從つて丹波越の有名なおさんの臺詞の如き當り前の事である。こゝを見ても、西鶴といふ男の、道義を超越して、唯、赤裸々な男と女とを描破した作者だといふ事が斷言出來る。大近松と如何の相違であらう。

丹波越の苦しみ。おさんの有名な「命にかへての男ぢやもの」と叫ばしめた此の丹波越のおさん「脈も沈みて今に極まつた苦しみは、僞入水の間もなく、同年晩春三月末のことか。おさん同じく、十八歲。それにしても、此のあたり、丹波越の二人の生き死にの艱苦は、名文である。しかも、何處までも生きようといふ二人の要求が熾烈に描き出されてゐる。おさんも二人で生きようと思へばこそ、「道なきかたの草分衣」「生き乍ら死んだ分にも」なり、また柏原へ辿り着いて、すぐ逃げ出したその晩の喜劇や、後に切戸文珠の示現に答へるおさんの熱ある言葉もあるといふものだ。茂右衞門だつた、旣に滿更ではなかつたらう。

切戸文珠の示現。「末々は何にならうと構はつしやるな。こちや是が好にて身に替へての胸心。文珠樣は衆道ばかりの御合點。女道は曾て知しめさるまじ」とおさんが夢で啖呵を切つたの

は丹波越の翌月、四月頃のことであらう。おさん、十八歳。

切戸附近の借伏。これは、後に栗商人が、大經師へ來ての噂に、「切戸邊にありけるよ」とあるから確實だ。この借伏は、同年の同月、即ち前にすぐ引きつゞいての事であらう。

茂右衞門の京都事情偵察。その年の秋、七月十七日の事か。本文に「十七夜代待の通りしに、十二灯を包みて、彼が身の事末々知れぬやうにと祈りける」とある。七月とは類推である。因みに、十七夜代待とは何か。「代祭、（ふたみ まさこ）町々をすゝめて通る代まち（俚言集覽）。「物を與るゝ人に代りて神佛を祭る一種の乞兒。」（國語辭典）。とあるが、十七夜が分らない。「守貞漫稿」に上に、庚申の代待の記事がある。これに據ると、京は八坂詣りだが。丁度此の十七夜が、庚申前後に當つてゐたのか。ところが、「其身の積しまゝあたご樣も何として」と續けた本文では、愛宕詣のやうでもある。とに角、前後の關係から、七月と類推した。（此のあたり、西鶴本文の、劇場で大經師を見つけて、蒼くなつて逃げた事や、我が身の事末々知れぬやうに祈つたとある所など、茂右衞門の小心で然しおさんに溺れていつた氣持がよく現れてゐる。然しこれは主題ではない。）

發覺の端緒。（栗商人の噂）「菊の節句近づきて毎年丹波より」栗商人が來たとあるから、月見間近の八月はじめ頃か。即ち私の類推に依ると、おさん達の切戸借伏期間、四月より約五ヶ月。

逮捕。八月はじめ。こゝは、三田村氏の引いた「春羅生の「享保以前迄密夫御仕置之振合町代

書留」の八月九日に始めて調べをうけたといふのと幾分合ふ。

處刑。その年の九月二十二日。逮捕から約四十日。西鶴の記文は、九月二十二日であるが、最後早しからず世語りとはなりぬ」とある。おさんの年齡、時に十八歲。丁度此の類推は、「都の富士、廿にも足らずしてやがて消ゆべき雪ならば」と近江僞入水の前の記述にも當て箝るからである。然るに三田村氏は、大近松の方の十九歲說を取られてゐる。十八が十九でも一歲の違ひだ。これは構はぬ。

茂右衞門の刑死年齡。これは、私も大近松の中にもある二十五歲に贊成である。それは、彼が柏原の姨の家で、姨に、おさんを、「これはわたくしの妹」と云ひ拵へた點から考へて、茂右衞門とおさんとの年齡の距離は、七八歲のものはあらうといふのである。即ち茂右衞門の姨（叔母）は、茂右衞門の七歲位の頭に別れたきりで、その以後逢はなかつた。從つて妹と胡麻化し得たと見ての話である。何となれば、姨はおさんを全く何者とも見知らなかつたからである。然るにおさんは十八歲であつた類推がある。よりて私も彼を二十五歲とした。

（實說では、「貞享二年五月、牢舍の上、追放」だといふ。因みに西鶴の「五人女」は、その翌三年の板行。）

以上、私は、無論西鶴の記述に、大近松や歌祭文よりも比較的眞實が多くとり入れられてゐらうといふ前提から、此のやうな長々しい解説を試みたのである。特に三田村氏説に感服しないことは、氏が、「十九になる少婦が三月の間に二度の新枕」（芝居の裏表二九頁）といはれたり、「從つて花嫁は三月經たぬに此始末、なんの事ぢやと云はねばなるまい」といふ論斷である。たとひ此等が大近松の淨瑠璃から根ざしてゐるにもせよ、私には荒唐無稽、あまりにおさんの肉的經過を無視した言葉であると、以前から不平であつたからである。即ち私自身比較的眞實味ありと思ふ「五人女」から論據して、竹篦返しを試みたのである。其他密會から刑死に至る年月も、三田村氏のと、此の小生のとは大に異ふ。

私の論斷は、西鶴を幾分敷衍し、これを系統立てたに過ぎぬが、要は、十四で結婚した早熟した、利口な節儉な縹緻よしの町女房が、結婚後三年、十六歳時分には夙うにあつた性の眼ざめから、その了得。たうとう本夫の不在に堪へかねて、無意識の接觸慾から起つた惡戯が、とんだ事になりかゝり、（その瞬間は、私は、おさんは眼ざめてゐたと思うてゐる。眼ざめたが、性の誘惑にたうとう凡てを遺れたのだと思つてゐる。無論半ば以後合意の事と思ふ。）それから毒喰らはゞ皿までと、かれこれ一年の折々の逢曳。たうとう本夫の歸宅を聞いて逃げ出し、そ

の年の秋處刑。即ち不義から約一年四ヶ月を續行のまゝ生きてゐた。根本は、市井ざらにある性の悲劇（なげき）。美婦だつたから問題に上つたのだと思うてゐる。

以上で、私の記述は暫らく絶つが、最後に西鶴の五人女を悉しく知られぬ方々の爲に、「五人女」の中、卷三だけの梗概を左に示しておかう。

「大經師某は、おさんといふ美女を妻に迎へた。おさんはまだ若い娘であつたが、年の違つた夫によく仕へた。三年目の秋夫の大經師は所用あつて東に赴く。おさんの家許で長年召使つた實體の茂右衛門といふのに一切を托しておいた。して見れば茂右衛門は相當に才覺の切れた男らしい。その留守宅に事件が突發した。おさんの使つてゐる女中のおりんが臨時手傳ひに來てゐる茂右衛門に懸想して、おさんに文の代書を頼んだ。茂右衛門は初めはおりんを馬鹿にしてゐたが、おさん代筆の文言に絆されて、茂右衛門もその氣になつた。到頭或る夜を約するやうになつた。その晩が、五月十四日の晩。(大經師が旅立つてから、半年以上經過してゐた。)おさんは座興にとて、その晩おりんの身代りになつてその部屋に寢てゐた。茂右衛門が忍んで來たら、アッと驚かし、奉公人達も出會つて笑はうといふ計畫であつた。然しおさんは何時となく寢てしまつた。茂右衛門はその熟睡中に來た。奉公人達も待ち疲れて眠つて了つた。おさんは眼覺めて罪の遂行を知つた。それからまゝよと時々密會をつゞけた。翌年春、急に石山詣にかこつけて五百両を挾箱に入れて、家を出た。花の散る頃琵琶湖で漁師に頼んで二人入水と見せかけその實丹波へ越えた。柏原で茂右衛門の姨を便つたが、姨の息子の岩飛是太郎と結婚せねばならぬ破目になり、その晩逃げ出した。さうして丹後の切戸邊に隱れてゐたが、毎年京へ來る栗商人が、大經師の店先で、うかと「こゝのお主婦さんによう似た人が切戸邊にゐる」と口辷つた許りに事露はれて捕はれ、その年の九月遂に粟田口刑場の露と消えた」

近世墮胎史雜考

近世墮胎史の資料は、確かな物としては案外其數に乏しかつた。勿論、倉卒の際の渉獵であるから、他に洩らした物が多いのかも知れない。廣文庫所收の諸雜書（該書「墮胎」の項）が比較的まだ力になつた。以下の自分の記述は廣文庫其他の掲載に、幾分系統をつけ理論を挿んださいふものに過ぎぬ。然し尚以て一般讀者に、一讀を強いる點無きにしも非ずさ、即ち敢て物した。尚一言自分の「墮胎」には、廣狹の二義を持たしてゐる。單に墮胎さのみ謂ふ時は、（此の命題の如く）眞の墮胎さ嬰兒壓殺さ即ち此の兩樣を兼ねて曰ひ、他さ並べ曰ふ時は、（嬰兒壓殺若しくは避姙などゝ共に）狹義の眞正の義さ思うて貰ひたい。

墮胎の動機上二つの區別あることは、無論古今異りのない話である。江戸時代にも無論さうであつた。二つの區別さは、即ち育兒制限の意味からさ、痴情の結果之を掩はんさしたさの二つである。育兒制限は今に始まつたことではない、夙うからあつた。然し此の江戸期に於ける育兒制限の意味は、爲政者が之を强制的に爲したのは殆どなく、即ち大抵は生活に餘裕なき者が自ら之を爲すのであつた。さうして此の意味からの墮胎は、他に較べて生活程度の潤澤でなかつ

た細民階級に無論多かつたのであるが、然し江戸時代は殊に其の土地狀態の肥瘠、或は裕福か否か、物資の貧弱さと豊富さとの如何に繫がつて、物資の生產の乏しい凶荒に屢々惱まされたやうな邊土の民に、此の墮胎或は嬰兒壓殺が格別頻々と行はれたやうである。即ち屢々飢饉其他の天災に見舞はれた東北地方に此の風が盛んであつたらしい、是は公然の秘密であつたやうでもある。文化の宣布傳播の乏しかつたせゐから、道義心の缺如してゐた爲の理由も大にあらうが、然しそれよりも土地の凶荒、彼等の生活の逼迫が大なる原因であつたであらう。即ち、邊陬の地方、格別東北地方に最も墮胎が多かつた。其の意味は、人口制限の意味から、親が各自にこれを行つたものである。

他の痴情の發覺隱蔽の意味からの墮胎は、無論邊境の地にも行はれたであらうが、それよりも寧ろ、風俗の一層頽廢した都會に、生活上の條件や物資は、割合に好都合であり潤澤であつた都會に頻々と行はれたものと見て可からう。殊に京大坂及び江戸、所謂三ケの津には、之が多かつたであらうし、其他相當に殷富を傳へた各城下には、此の痴情からの墮胎は無論多かつたに異ひない。その階級も庶民から、士流にまであつた事は無論で、殊に奥女中の類には當然の事であつたであらう。

大正十二年三月二十七日印刷納本
大正十二年四月一日發行
第七號（毎月一回一日刊行）

尾崎楓水著

第七冊

本文

近世墮胎史雜考（完）
廣重畫最初の「東都名所」
涉獵漫筆（三）

○大名の心中已遂

「明和雜錄」に、

「武州金澤、米倉丹後守殿知行一萬二千石。丹後守殿、江戸吉原土手にて女郎と雙死是あり。早速御檢使相濟み、其の日御改易並に家老二人切腹仰付けらる。」

といふ記事がある。米倉丹後守といふ大名が、武州金澤にあつたことは事實である。大日本地名辭書にも「元祿九年より米倉助右衛門殿陣屋、金澤にあり。相州野州散在の田、並に當所合一萬二千石の大名たりし由見ゆ。陣屋址は、六浦村引越に存す。」とあるが、さて此の米倉家は、別に明和に改易にはならなかつたやうである。それにこの話は嘗て此の明和雜錄以外には見當らぬ。或は分家筋の情死ではなからうか。それにしても家老二人切腹とはトンダ災難だ。或はやはり事實、大名の米倉に關した事で、然し改易だけが誤聞で病氣届が首尾よく濟んだのかも知れない。とかく明和は、同三年に心中鼓吹家の鶴賀新内が歿してゐる。若し多少この米倉家の傳說據る所ありとせば、新内たちの所謂淫聲宣傳のせゐではなかつたらうか。とにかく事、大名に關するは、舊幕時代、動もすれば表面から抹殺され易き故、この已遂事件の眞僞、今俄かにどちらとも斷言は出來まい。

○女湯のはじめ

寶曆現來集卷之二に、

「錢湯男女入込、天明の末、松平越中守殿御役となり、寬政初め入込停止せり。尤も此入込は、毎夕七ッ時より男女入込故、扨々騷敷事、夫より最寄湯屋仲間申合せて、月に六日宛日割女湯と申す事始めける。」

とある。寬政以前までは、男女入込で「扨々騷がしき事」いか程であつたらう。三馬をして此當時既に作家たらしめ男女入込の浮世風呂を描かしめなかつたのが殘念だ。

○和印といつた一例

有名なかはらけ小傳の情夫の數々を、芝居顏見世の入代り番附に似せた、「傚顏見世番附小傳」の中に、和印　作者、猿猴坊月成、といふのがある。猿猴坊月成の艶本は、よく見る所。その月成が小傳の款待を果して受けたかは確定しないが、とに角、和印とあるこれだ。この番附は、文政十年の板行であるから既に此頃和印といふ隱語のあつた證據だ。それがかうやつて公衆の目に觸れる番附にまで載る位だから、汎く人の知つた隱語であつたらう。（本著、第六十頁、艶本考上の増補）

○勝川春章の匿名

艶本の話に今一つ。艶本艶畫類の上で、國貞の不器用又平や國芳の程よしや、英泉の白水などは誰も知つてゐるが、春章の如きは、知らぬ人が多からう。春章の匿名は、初川珍重といふた。それは、家藏の「本艶開得成三略の卷」の上の卷尾の跋語中にある。儒者の悴と御守殿の嫁とが、情事不通で困つてゐる件があつて、

「爰かしこ尋ぬるところに、市谷の八幡の境内にて、さがしあたりし書本は、今世に秀づる畫工の名人に初川珍重と云ふ人此道をよくあきらめ圖して初心の手本とする。本屋が敎にしたがひ、早速此の三卷をもとめて立歸り……。」

とあるとほりだ。初め、羽川珍重のことかと思うたが、文中の此の三卷とは、家藏の現に此の三略の卷を指すこと明らかであり、しかも繪を見れば、珍重か春章かは、一と目で分る。したがつて丁度春章が珍重をもぢつてその實自己の匿名にした事は明らかである。本は、墨摺の大本。冒頭に、野郎帽子と御殿との接嘴の繪がある。

奥女中と謂へば、格別大江戸大奥の女中共と、各俳優たちとに行はれた所謂不義、（江島事件などは不幸な犠牲者に過ぎない。但、殆ど此類の不義は、頻々たるものであつたらう。）それから來た此の墮胎行爲が、必ず頻行した筈である。其他町家の士女の間にも、此の犯罪が行はれた事は謂ふ迄もなく、花柳界にも無論行はれたであらう。花柳界の意味は、發覺を懼れるよりも、寧ろ自家の聲色の美の保存と人氣の衰退を防止する意味であつたらうことは、古今同一であらう。

東北地方は、誠に悲慘であつた。雜書に現はれた墮胎 多くは嬰兒棄殺とは、殆ど東北地方に限られてゐる觀がある。飢饉が丁度東北地方と殆ど想を聯ねて考へらるゝ如くにである。先づ人口制限の意味のこの墮胎、若しくは嬰兒棄殺を敢行した東北の例を、諸書によつて述べて見よう。

「窓のすさび」（享保九年の自序あり）には、

「庄内（酒井領分）の民、東國の習にて、子生じて三四人にも及べばまびくとて殺し捨つる事を、老臣水野大膳光朝は深く憂へ、樣々思ひけれどもとかく改めざりければ、貧民の養ひ難きものを選び、その子五才になるまで扶持米を與ふる事になりて、此の風改まりぬとぞ。

戸田氏宇都宮に在りし時にも、此の政ありて革まりぬる由なり云々。」

先づ庄内と宇都宮の例である。さうして名君賢相の之が匡救策を構じた例でもある。

墮胎防止に努めた名君は、尚色々ある。本朝要樞（寫本四卷。年代、作者共に不詳。）の第四卷には、

「日本東西の邊境に至りては、男女子多く生るれば、其の父母なる者、抱婆（とりあげばゞ）に命じて往々之を殺さしむ。云々。近頃、會津殿、私領の内にして、子を殺すことを深く禁ぜられたり、其後此事非ず。仁政と謂ふべし。」

此等は、前述の例も亦却つて墮胎と謂ふべきではなく、嬰兒の棄殺であらう。然し墮胎も之に伴なつて無論慣行されたであらう。但し會津中將は、（保科正之か）之を禁じたとだけであつて、如何なる對應策をとつたか、その仁政の所以が明らかではない。

甲子夜話（かつしやわ）（松浦靜山侯の編纂。靜山は天保十二年八十二歳にして歿したれば、其の以前の記聞に屬す。）にも、その第二卷に、

「白州の民間は、子を產すれば即ち殺して（楓水曰く、これも嬰兒棄殺の類なり。墮胎とは謂ふべからず）育つる事なし。これ取揚婆の產所に於てかく爲ることぞ。常州の俗に同じきか。然るを樂翁初め白川へ入部ありてより、殊に之を禁じ、國中に令を廻し、民間に姙身の婦あるときは、屆けさせ、醫者一人と產婆一人を遣はしあらため、臨產の時も亦遣して取揚げさせける。但しその手當として、一日に金壹圓二方宛を與へたりしとぞ。」とある。

近世畸人傳（伴蒿蹊著、五卷。寬政二年の序あり）第二卷にも、

「關東の習ひ、貧民子あまたあるものは、後に產せる子を殺す。（楓水曰く、これまた間引く也。多くは第三兒より間引きたるもの〻如し。）是れを間曳と謂ひ習ひて、敢て慘むことを知らず。貧凍餓に及ばざるものすら傚ひて此の事を爲せり。官の敎（をしへ）あれどもなほ然り。然るに陸奧白川の傍邑須賀川といへる所に、內藤平左衛門といへる豪農之を

歎きて、年毎に祿を求めて、間曳かんと思ふもの有りと聞けば、其の養ふ財を與へて救へり。もと米價賤しき所なれば、多分の貲にはあらずと、自らはいへりとなん。云々。領主も賞し給ひ、苗字帶刀をも免され士に准へらるゝといふ。」

と。これは名君直接の行動ではなくして、傍邑の一慈善家の話である。

百姓懶惰、農に勵まずして、墮胎を流行らした話が、「草木六部耕種法」（佐藤信淵、天保三年の著）といふにある。其の第十一卷に、

「上總國は領主の在住することなき國なるを以て、上より農政を世話することと無きが故に、百姓は甚だ懶惰にして農を勵む者あること少し。是を以て膏腴の地を未だ開發せずして、荒野のみ多し。云々。故にかの國の百姓十萬餘家ある中にて、婦女の自ら其の兒を墮胎して殺すこと、毎年三四萬人づゝなり。云々。今の世に當りて、百姓の自ら己が子を殺す國は、啻に上總のみならんや。滔々として天下皆然り。」

毎年三四萬人づゝの墮胎とは、ちと話が大袈裟のやうなれど、或は此の驚くべき數が、事實であつたかも知れない。

其他、一般、凶荒飢饉等で、邊境の民が墮胎した事は、尙幾千の書に現れてゐる。今その要を摘むと、

「……富民の田畑を借りて耕作するを以て、公税の外に數多の增税を取り立てられ、豐年なりと雖も、衣食の足

らざるに困しむ。凶年饑歲に於てをや。是故に父母ありと雖も孝養を爲すこと能はず。婦人姙娠することあるも、大抵毒藥を用ゐて此れを墮胎す。云々。所謂富豪兼併の禍に罹りて、其父母を飢寒せしめ其兒孫を毒殺して、遂に他邦に離散する者、幾萬人と云ふ事を知るべからず。豈是農民のみならんや。山民鑛民百工漁夫に至るまで、花利の金に縛られて、富民の爲に生涯役使せらるゝもの極めて多し。」（佐藤信淵――垂統秘錄）

近世唯一の農政改革論者、經濟學者の上首であるだけ、（信淵は、嘉永三年正月江戸に歿す。壽八十二）言ふ事が、現代の時弊にも亦適中してゐる。問題外ではあるが、古今同一轍の理を道破する哉と、讃歎せざるを得ぬ。同じく信淵の他の著述、「鎔造化育論」にも、

「後世に至るに及びて、諸公奢侈を好み、淫樂を縱にす。邦內空虛、百姓困窮し、十室の邑、年々子を墮胎陰殺する者、二三を下らず。或は一國七八萬に及ぶもの往々之有り。況んや四海の大、算（かぞ）ふるに勝（た）ふべけんや。」（原漢文）

とある。七八萬といふ數は、果して誇張に過ぎなかつたのであらうか。

「何れの國も貧乏百姓のみ極めて多くして富饒なる村里あること鮮なし。百姓貧窮して食物衣類の給（た）らざるが故に婦人胎むと雖も、其兒を養育すべき儲蓄なくして、往々密かに墮胎すること多し」（草木六部耕種法、一）

「本朝にも間々多き事なり。或は卑賤の家は、貧苦によりして胎を墮し、或は東家の墻を越え、穴隙を鑽（き）り、婬行を爲す者の類ひ、懷孕の事あれば、必ず墮胎の藥を用ゐて不仁不義を爲す。故に命を失なふに至るもの夥し。云々。況んや富貴の家、婬行を隱し、過（あやまち）を飾る類の者此の事を爲すあり。「不仁不義戒しむるに言葉なき也。」（婦人壽草、四）

（「婦人壽草」は香月啓益の著。全六卷。寶永五年刊行なり。婦人產の心得書なり。）

以上の如く、隨分悲慘な境遇に置かれた邊土の民は枚擧に遑なき程であつたらう。況して人倫の敎まだ普くなかつた邊土としては尤もである。さて「婦人壽草」の項の最後にも罵つてゐるが、窮乏の爲ではなく、痴情隱蔽の故からの墮胎も都鄙多かつたことは勿論である。田舍の例としては「田家茶話」といへるに、下女が主人の子を姙んでおろさうとした話が出てゐる。同書の三に、

「國々にては、孕める子を四五月におろすことあり。是れは國の風にて菜大根を捨つる樣の心持にて、罪とも何とも思はざるなり。又都に遠き在々にて間引とて、安產したる子をすぐに殺すよし、皆罪は同じ事也。昔の事にてありしが、下女に手をかけ懷姙したる子をおろさんとて、主人の母御には四五日逗留にて參る由を申出でしを、下男其の事を知り、密かに母公に告げければ、それは速く追付きて呼返し來るべし。我が爲には孫なりとて、親里にて安產させ育て、成長して後に養子に遣はしけるが、追々立身して一萬石にて國の家老となり、其の國を治めし事ありつ。かゝる者をいかでか水となし果てんや。」

といふ記事である。江戶の話が尙續いて語られてゐる。曰く

「其の水子に性(さが)なきものと思ふは、大いなる了簡違ひなり。江戶にて或る婦孕みて、旣におろさんと、おろし婆の方へ行きて頼みけるに、其の夜の夢に大きなる男來りて云ふやう。我れ折角腹に宿りしものを闇より闇になし給ふか

と恨みしよく、母其の手を取りて引きければ、手拔くると見て覺めたり。其後おろしたるに、其の子の片手ぬけておりたるとぞ。」

これは、因果譚めくが、兎に角かゝる話も相應に信ぜられて、一面墮胎防止にもなつてゐたらう。江戸の流行は此の婦位ゐの話ではなかつたらう。序でに、以上の文中、屢々諸書に現れてゐる「まびく」なる言葉である。これは書物によつて、墮胎と嬰兒棄殺と両様の意味を含んでゐるやうである。本來は、無論嬰兒の棄殺、即ち育兒制限の意であつたらうが、後には胎兒の殺害即ち墮胎をも併せて意味したであらう事は、想像に難くない。「言海」などには、〔片田舍などの惡俗に、子多き時、親自ら生兒を殺す。〕（多子を疎らにする意。）とあつて、その語原は、同じく「間引」の解釋條下の、〔畑の蔬菜の芽出しなどを、間を置きて引拔きて疎らになす〕より來たものであらう。從つて地方の言葉として傳播したものであらう。（元祿九年版、好色本「小柴垣」三の四節、「木曾山の化生」の中にも、「夫は山にわけ入、世を渡る業にいとまなく、その留守には……事しても、誰咎むる事もあらず。そのかたまり五人とも出來れば、世話のたねと、子をまびくといふはなしはこゝの事。」とあるのも、間引の一例である。戯作ではあるが、この一節は、「間びく」文獻史の一ともするに足りよう。木曾といふのも、作者多少據る所はあらう。）

次に墮胎には、婦自ら行ふのと、産婆其他によるものと、両様があるが、婦自ら行ふのは姑く措き、他の幇助者には、即ち産婆等には、如何の狀態があつたらうか。驚くことは、都鄙共に殆ど營業狀態の彼等があつたことである。多くは産婆、或は物慣れたる老婦であつた。

墮胎幇助を營業にした者の例は、

「浪華にて今は、傘職なるが、其の家の母、子おろしを業とせしが、今は母死して其の業はせざりし也。或時、淨土宗の尊き僧來り給ひ、無縁の家にも御立寄を願ひて、請待したりしに、佛前にて回向し給ふと、衣の袖の袋を兩手にて拂ひ〳〵し給ひし故、其の後にて御弟子尋ね奉りしに、彼の家は、子おろしをしたる家なるべし。赤子來りて我に取り付く事夥しかりしかば、それを拂ひ去りたるなりと仰せられしとかや」（田家茶屋、三）

とあるが如しである。此の話の傘職業の母の如きは、産婆であつて墮胎を間々行つたといふのではなく、眞の墮胎專門業者と謂ふのであつたらう。それだけ、此の母をして墮胎を營業化せしめ、死するまでその之を續けしめたるだけ、浪華の淫靡な風俗が之を需要したのかも知れない。恐らくさうであつたらう。

西鶴の「好色一代女」（貞享三年版）にも、墮胎の記事がある。これは、前述の「小柴垣」同樣、文學的作品の例ではあるが、寫實風な西鶴の作として、當時の事實（尠くとも墮胎の風習に就て）とは云へよう。即ち、その「卷之六、三の夜發の附聲」の中にある。

「ゆく〳〵年もはや六十五なるに、うち見には四十餘りと人のいふは、皮薄にして小作りなる女の徳なり。それも嬉しからず。一生の間さま〴〵のたはふれせしを、おもひ出して觀念の窓より覗けば、蓮の葉笠を着たるやうなる子供の面影、腰より下は血に染みて、九十五六程も立ならび、聲のあやきれもなく、おはりよ〳〵と泣きぬ。是かや聞

傳へし孕女(うぶめ)なるべしと氣を留めて見しうちに、むごいかゝさまと銘々に恨み申すにぞ、扨はむかし血荒(ちおろし)をせし親なし子かと悲し。無事に育て見ば、和田の一門より多くて、めでたかるべき物をと、過ぎし事どもなつかし。暫らくあつて、消えて跡はなかりき。………。」

子供が、「おはりく＼よ」というたとある。これは、「お鍼(はり)よく＼」ではなからうか。子供らは最初先づ自分たちを墮した鍼醫を恨んでゐるのではなからうか。即ち當時、墮胎醫は、多く鍼術醫ではなかつたらうか。尙、九十五六程も並んだとは、どういふことか。全部自分の子供らしいが。すると十五六から六十頃まで、四十五年に始終孕みづめであつたとした所が、五ヶ月で一度墮し、少くとも一年に二度づゝ孕んでは墮したことになる。彼女の生産力の偉大さに呆れる。無論誇張ではあらうが。

尙、同西鶴の「好色五人女」の二、樽屋おせんのはじめにも、夫婦池の小さんといつて、昔子(むかし)おろしを專業にした老婆が、ちよいと顏を出してゐる。

閑話休題、とに角京阪地方にも、以前から、この非行が流行り、したがつて專業者を生んだものであらう。但し無論京阪のみには限らない、江都も然りである。「中條」とは、當時の江戸に於て、墮胎醫轉じては墮胎その物の義にも一般使用されてゐた。「松屋筆記」卷百六に、「今

の世中條流子おろしの術都下に遍滿せり。墮胎の藥技を施す事なり」とある此の中條である。(「松屋筆記」は有名な高田與清(弘化四年歿、壽六十五歲)の雜考、卷百二十。)

稍問題外ではあるが、幾分記述の順序上、穩婆(とりあげ婆)と中條流產科醫と、其他江戶期產科醫の一斑に觸れて見よう。

「穩婆　とりあげ婆なり。國史續世繼等古代の實錄にとり上げ婆の事なし。產に慣れたる常の老女、此の事をせしなるべし。今世のとりあげ婆と云ふものは、近世の事なり。是は老女など召使ふ事もなきもの、あたり隣りに產に慣れたる人を賴み、其の賴まれし人を巧者なりといひ觸れて、處々より賴みしが、後には家業のやうになりて、とりあげ婆といふもの出來しなるべし。」(安齋隨筆)

とあるが如くで、あつたらう。(安齋隨筆は、伊勢貞丈(天明四年歿七十歲)の雜考。二卷)

斯かる產婆が間々墮胎にも與かつたであらうと思ふ。無論此の產婆の中には中條の流れを汲んでゐた、半ば醫術を心得たものもあつたらう。

中條とは、中條帶刀の流派に名づけたものである。

中條帶刀といふ豐太閤に仕へた男がその祖である。帶刀の事は「婦人科中條流の祖なり。秀吉聚樂城に在る時、帶刀兵を用ふるの暇、醫術を好み、治療を善くす。婦人科最も奇なり。」

（延壽和方彙函）といふに據れば、彼は武人であつて、醫を片手間に行つたものらしい。さうして恐らく秀頼をとりあげたものも彼であつたかも知れない。どうして彼の醫術が、後世に傳統を遺し、それが江戸に於て最も繁昌したのであらうか、それは分らない。無論京阪にもその流派が榮えたことではあらうが。

江戸期産科醫として中條に比肩して繁昌したのは所謂賀川派産科醫である。中條賀川二派を以て殆ど江戸期の産科醫を代表してゐたものである。賀川氏は、玄悦がその初代。彼は近江彦根の産、安永六年九月、七十八歳にして歿した。即ち中條流は其の創始の年代に於て兄たり、此は弟たりである。玄悦の著述「産論」は、皆川淇園が之を潤色したといふ物であるが、當時産科醫家の唯一の權威であつたことは事實である。

然るに面白い事は、墮胎醫としては、賀川氏の流派は餘り名を殘してゐない。或は賀川流の墮胎醫もあるにはあつたらうけれど、中條流從來の墮胎が餘りに時人に知られてゐて、賀川流者の墮胎をも直ちに中條と呼びなしたのかも知れない。兎に角中條が墮胎醫若しくは墮胎の異名たるが如きは、江戸軟派に與かる者の誰しもの夙に知る所である。

中條が墮胎の本元であつたことは、安永五年申季秋の序ある末番の句集「末摘花」四編中の

諸處に、その證據がある。全部で十四五句は、中條に關したものである。その中、比較的お座へ出せるものを謂ふならば、

仲條は後闇（うしろ）くも手間をとり

仲條へ行くより外の事ぞなき

面白い跡仲條で待つてゐる

などであるが、此の「仲條」は、（但し中條帶刀の中條、末摘花には全部仲條とある。）産科醫といふよりも寧ろ墮胎醫たる事明らかである。さうして此の中條醫は一般に男か女か。これは主に女醫の業であつたやうである。即ち昔の子おろし婆や取り上げ婆が、稍醫術的に進歩したものであらう。需要者の心理からいうても、これは、女醫が當然だ。現に延寶八年の墮胎醫禁止の町觸れにも女醫とあるとのことである。

主人と下女との戀の跡仕末としては是にも例がある。即ち、

仲條へ行くに褌下女ねだり

である。ねだるべくしてねだる下女と、女房の嫉妬、人の思はくを氣遣ひ乍ら難くなつてゐる主人との照應を想ふべしである。

さて中條は、普通の產婆とは違つて、自宅手術を主としたらしいことは、此等の句によつても知らるゝが、尙其家の表には、「月水早流し」或は「朔日丸」の看板を揭げて、公然墮胎藥を販賣してゐたとのことである。さてその中條宅は、設備も整つてゐ、無論秘密も保てたであらうと思ふ。奥女中や、大家の後家などで、中條の奥の間は、さぞ群集したことであらう。

中條が、墮胎その物の異名となつてゐる句も列擧し得られるけれど、割愛する。何の因果で中條帶刀は、自己の姓によつて千歲に醜を流すのであらうか。思へば可哀想である。

次に、墮胎に關する官憲の制裁である。江戸幕府の「法令としても一藩主の禁令としても明かに墮胎を禁じたる文書を存す」（百科大辭典）と謂へれど、該法令、或は藩侯の禁令なるもの、諸書を如何に檢索するもその斷片すら得る所がなかつた。唯、町觸れのあつたといふ說話や、違犯者の話は間々あるが、但しその所刑も如何なる程度であつたかゞ分らない。「百姓袋」の五に、

「山家の住民、子を繁く產する者、初め一二人育しぬれば、末は皆省くといひて、殺す事多し。殊に女子は大方殺す習はしの村里もありし。（中略）偶々今の世にも此の事有りて露顯しぬれば、父母共に罪罰に逢ふ事なり。……
又、雙子を產める事あれば、父母大きに耻ぢ恐れて忽ちに踏み殺し、或は媼婆に賴みて絞殺せしむ。………。」

とあるが、さうかと思へば、現はに或は暗に墮胎を奬勵するか、或は當然墮胎せざるべから

ざるの勢にまで順致した地方、刑罰の寛大、寧ろ默認放過の地方もあつたらしい。その例は、

「伊賀の藩主藤堂氏（何代なりや不明）は、藩内食糧に乏しきため、墮胎を奬勵したといふことである。尙九州の飫肥藩の伊東家では、嬰兒壓殺が行はれ、二兒制であつた。三人目の子供は「まびく」と云つて殺した。此風、安井息軒の生れる前年（寬政十年）まで續いた。」云々。（「性」五ノ五、平井明夫氏說）

伊賀は、之に據ると藩主公然の奬勵である。伊東藩は藩からの命令か或は土地の風習かは不明であるが、とに角公然行はれたものと見られる。即ちこゝで面白い斷定は、東北の墮胎は、凶荒飢饉頻發の爲已むを得ずの事であり、然るに、四壁山なる例へば伊賀の如き、或は僻遠の地九州日向の如き、是は理論的食糧制限の義として墮胎を行つてゐたらしいといふ事である。さうして、東北附近の話題逸話の遺聞が比較的多きに、中國西國地方が比較的尠きは、藩自らこれを風習或は一種の民治策として咎めなかつたに據るのではなからうか。

さて、次の例は、自治體自身の慣例（その主唱者は村名主）であつた例である。

「舊幕時代に墮胎或は初生兒を殺害する風が盛んであつたことは世人も知る通りであるが、此の弊風は常陸、下總に於て最甚だしかつた。此の事は、「天明集成糸綸錄」にも、特記せられてあるが、下總の知きは、大概旗下の士の支配下に在つて、苛斂誅求相踵けるがため、人民困窮の極に達し、不得已（やむをえず）各地名主（なぬし）に於て各戶財產の程度により產兒養育の數に等差を設けたのである。此の等差は、特等無制限。一等四名、二等三名、三等二名といふのであつて、

これ以上を養育するのは過分として排斥せられ、種々の社會的制裁を受けた。」(大正十一年度、國家醫學界雜誌)

當今流行の産兒制限とさも似たりで此はまた思ひ切つて强制的である。苛斂に苦しんだ邊陬としては自然の勢かも知れない。但し此話は、墮胎や嬰兒殺害の例とも限らず、避姙厲行のやうにも取れるけれど、當時の男女は況して田野の民は多く避姙の何たるかを知らなかつたらしい。(但し避姙の少智識は少數者間にはあつた筈である。例へば、當時の艶書本艶本等に、避姙の方法を教へてゐる。無論痴情の結果で、産兒制限の意味ではない。偶々知つてゐても、彼等の眞劍な强盛なる性慾は、都人の遊戲的とは頗る質を異にし、避姙を事實行ふべからざる程度であつた。まして藥品又は機械的の避姙智識は、都鄙の論なく一般になかつた筈だ。從つて此等の話は無論避姙强請ではなくして、墮胎奬勵、嬰兒殺害强請である。さて肝腎の幕府其物としては其間如何なる匡救手段を取つたらうか。即ち、「雙兒三兒を生みたる者に乳母の料を給し、明治に至るも猶數年、此の支給を續けた」とある。(社會事彙)然しその文獻は確としてゐない。

彼等墮胎の方法は如何であつたらう。無論、一、藥物嚥下。二、機械的手術(自己又は他がする)。三、自己振盪。の如きであらう。悉しくはいはぬ。

以上脱稿の後、更に見當つた材料の一二を追加しておかう。

中條流云々といふのが、洒落本に見當つた。それは、一向不通替善運（甘露庵山跡蜂滿作。天明八年の版本。）の中に、

三かつ「此のぢうのものをおめへ見たか、とは半七と色事ゆへはらみしが、跡月より月やくをみればきにかゝり、半七が所へふみにてしらせてやりしなり」（半「ム、。おれもあれがきにかゝつたから、其くすりをもつてきた。と何かかみに包んだくすりをそつとたもとへ入れしは、てつきり仲條流なるべし。

云々。

とある。但し此の、中條流とあるのは、果して中條が調合した藥であらうか。或は、既に中條流は單に墮胎の意となり、したがつてこは墮胎藥の隱語にすぎないのではなからうか。

大近松の「堀川波の鼓」にも、お種が子おろし藥を買つて飮む件がある。それは、いかなる動機からであつたか。作者は不倫遂行後のお種の心理に餘り觸れず、唯最後の本夫彥九郎歸國の日に、下女が主人の彥九郎から問ひ詰められて、

「御勿体なや。私は何にも存じません。此間お種樣、人にかゝして子墮藥を買うてくれとおしやりました。一貼を七分宛、三貼を二匁一分で買つてまゐつたばかり、……」

と。この女中の言葉で、はじめて知つたお種の姙娠、並びに墮さうとまでした彼女の心的徑路が、幾分肯づけるのみである。お種の此の墮胎行爲は、果して慚愧から來たのか、或は單な

る陰蔽から來たのか、それははつきり説明が出來ぬ。それにまた、その藥が果して利いたのか利かぬのかそれも分らぬ。

が、こゝに、墮胎藥の存在と、並にその賣價とある事は、我等の見つけ物だ。但しこれは、「波の皷」當時の寶永頃の相場ではあらうが。さてその後賣價は不明なれど、こゝに又一つ、墮胎の藥名、並びに賣店の所在まで明らかにした記錄がある。それは、記錄とはいへないかも知れないが、寬政年間の破戒僧の記錄、誰も知る延命院實記（近世實錄全書第二卷所收。）の中に、破戒僧の日當にゆかりをつけた局粂村（一說には桃村）の下女のおころが、姙娠したのを、日當の軍師柳全のすゝめで、墮胎せしめる件がある。

日當「其方よき樣に賴む」とて金子一分渡し、………。柳全は……、それより直ちに神田橋町へ行き、月水早流しといふ藥を求めぬ。是れ墮胎藥なり。………。（此藥を用ふるに法あり。但し粉藥にて、少し黑みあり。初めは鹽湯にて朝夕三度用ゐ、而して七日の內に其効しなき時は、此の藥の包紙を持參して、其譯を申さば、また外に藥を與ふると云ふ。）………。

おころは大に悅び、法書の如く四度迄藥を呑みけれども、一向其効し有らざる故、………柳全聞いて、「されば、藥屋にて請合候へども、粉藥の儀に付、十人に一人は効能なき事ある由。然る時は、當人を召連れ來るべし。差藥を致し候はんとの事なり。是は十人に一人も其利目あらざるといふ事なき由に候」と申すに（中略）…………其夜直樣橋町へ連れ行き、差藥を致させ、………三日目に安々と流產なして、血心もなく肥立けるにより………（下略）

即ち値は一分で粉薬、中條流の看板にもあつた月水早流し。それが利かなければ手重なれども差薬の方法もあつた。此の差薬で、おころは三日目に流産したのである。日當も、この差薬には案じたといふから、餘程危ない薬なんであらう。大近松の女中の言より、此の柳全の方が餘程墮胎薬の輪廓を傳へてゐる。實錄物故、どうせ當にはならないといふ人もあらうが、事件の經過に作爲は多少あらう、然し此等の世相の一斑は、殆ど眞相を傳へてゐると見做してよからう。

に、日當に對する上司の宣告文にも、「……殊にころ懐姙の由承り、墮胎薬差遣し候……」とあるから、（寶暦現來集巻之二十、）この墮胎已遂事件だけは事實であらう。したがつて、此實錄の記事も、このあたり丈は、その儘信用されよう。（尚、日本社會事彙に、「京橋具足町に墮胎薬を賣る家あり。胎見五ヶ月以上なれば、證人ある場合に之を賣る」ともある。）

最近、左の記事が見當つた。

「水戸の藩醫穂積角庵が撰める救民妙薬集（本誌本年新年號。）に墮胎の法を載せたるを、京醫芳村恂益が謗りしに、望月三英は、其隨筆に、墮胎は、唐にて白牡丹と云ふもの、專ら此の義を家業に致したるよし、此の廣き世界にかやうの儀もなくては、民用不叶儀有之也、聞のがし見のがしの事。恂益がせましく思ひたるは、未熟の所ある故なりといへり。」（「日本及日本人」大正十二年二月十一日號）

この望月の墮胎默認論は、已むを得ざる産兒制限論である。ところが肝腎の救民妙薬集（「日本及

「日本人」（大正十二年新年號所載）を調べて見ると、中々自分達の好奇心を滿足させてくれない。其の一二九に墮胎の事（はらみたるなおさす事）といふのはあるが、多分これ丈は、原文の全部ではなからう。不仁云々の文字ばかりでやむを得ざるその秘法は揭載されてゐない。これは無論編輯者の手心から來たのであらう。望月三英の記事では、墮胎の法をこれに載すとしてゐる。それが一寸も法らしいものはない。無論原文には、已むを得ざるその秘法が附記されてあつたらう。若し原文に之有つたとすると、これ水戸侯（光圀）の產兒制限默認（或は奬勵）の事實となる。何となれば、此の「救民妙藥集」は、元祿癸酉歲（元祿六年）常陽水戸府醫士、穗積氏甫庵宗與撰で、おまけに、序の一節に、

「予謹んで命を承け、其處に求め易き藥方三百九十七方編集して、……濟民の一助ならん歟。」

とあるに由つても、これが肯づかれよう。

尙、大奧で行はれた老中などの執政者が强制的に行はしめた墮胎。例へば、貴顯から入府あつた御臺所などに、姙娠の事あれば、その出生兒が將軍に他日なつては、外戚の威を振はれても幕府の經略上困るといつた計策から、典醫に命じて調藥を强いたとか、或は、絶えず服藥せしめてゐたとかいふ話は、無論多少その事實を見た事であらう。他の大藩小藩にも、政治的結婚の結果、或は妻妾の權力爭ひなどから起る此の悲慘事は、尠くなかつたであらう。

廣重畫最初の『東都名所』

初代廣重の東都名所物の最初としては、普通に川口板の、例の「兩國の宵月」のある「東都名所」十枚、所謂一幽齋がきを以て汎く世間に傳へられてゐる。なる程、人の云ふが如く、この「東都名所」十枚には、却つて後期の江戸名所類の諸作を凌駕する程の色々な意味からの佳作に富んでゐる。草創期に屬する彼自身の東都名所物としては、實に不思議な程である。若描きを無暗に愛玩する一派の好尙癖とは內容を異にした、眞に佳作の集まりとして珍重に値せぬでもない。然しこれが果して彼の眞の第一聲であらうか。「東都名所」の眞に最初の產聲であらうか。彼はこれに至るまでに、習作の刻苦を積んでは來なかつたらうか。恐らく一旦にして此等の佳作が產れはしなかつたであらう。一幽齋がきのこれは、文政十二年頃の作である。その文政末に及ぶ以前、彼は、「東都名所」に嘗て筆を染めたことがなかつたらうか。私は、時々この疑問を抱いてゐた。

それが、最近解けた。矢張り川口板の前提、最初の習作があつたのである。廣重の藝術その

ものとしては、勿論習作期の作品であるから、價値はないのであるが、總つて彼廣重の永い藝術史、あの偉大な風景畫家(東都名所のみの問題でなく)の藝術的生活の永い過程の第一歩としては、特に記述を煩はすだけのものがあると信ずる。人も知る、彼の東都名所類は、彼の風景畫作品史の第一頁、しかも私が以下謂はんとするは、則ちその東都名所の眞に最初、即ちこは、彼の全風景畫の先驅、眞に偉大な風景畫家の呱々の聲、生れむとする惱みであつたのである。

それは、永壽堂板の「東都名所十景」である。二ッ切中判竪繪のものである。嘗て廣重年忌展覧會目錄第十九に、此中一枚の記入があつた。東都名所十景として、深川新地、執行氏の所藏に屬するものであつた。私は、該目錄の作成者が、これを一幽齋がきの次に掲げた所より推して一幽齋がき即ち川口板の以後の作と見做してゐた。恐らく大多數の人は、この第十九の名所十景に何等の注目がなかつたであらう。それに目錄中寫眞版登載にもこれは抹殺されてゐる。で私も、最近實物を一見するに至るまでは、この僅かな一枚の記入に、大した注意を喚ばなかつた。然るに何故この名所十景が、從來抹殺されてゐたか、如何なれば嘗て何人からもこの十景に關する問題を敎へられなかつたのか。それが不思議と思はれる程、私はこの十景を見るに及んで、色々な興味を惹かされた。

江戸軟派研究

尾崎楓水著

第八冊

文　本

廣重畫最初の「東都名所」(完)

半二の「心中紙屋治兵衛」

渉獵漫筆(四)

大正十二年四月二十七日印刷納本
大正十二年五月一日發行

第八冊

渉獵漫筆（四）

○君がテ、

奉行はじめ歴々が、遊女屋の亭主を爾く稱したとのことである。彼等亡八には似合はぬうつかり聞くと、何だか勿体なさすぎるやうな名である。幕禁の書「環齋記聞」全、中にその記事がある。曰く、

「其頃而御奉行樣甚右衞門名をきみがテヽと御よび被成候。古來大人歴々の御言葉に遊女屋の亭主をきみがテヽと呼び給ふは、君が親方又遊女長とも書き候由」甚右衞門とあれば無論、元吉原開設當時からの事である。

○吉原開設の五ケ條

元吉原開設當時、幕府が庄司に與へた營業心得の五ヶ條が、同書にある。他書にも見る所であらうが、今本書の記事を拔いておく。

「元和三年三月の頃と申傳へ候右甚右衞門御見出に而願之通吉原一ヶ所に被仰付候同時甚右衞門へ被御渡候御書付五ヶ條之寫

○傾城町之外傾城屋商賣致すべからず。傾城町圍の外何方より雇來候共先々へ傾城差出候事向後一切停止たるべき事。○傾城買遊び候者一日一夜より長留致間敷候事。○傾城の衣類惣縫金銀の摺箔等一切着申間敷、何地にても紺屋染を用ひ可申事。○傾城屋町屋作り普請方美麗に致すべからず町役等は江戸町之格式之通り急度相勤可申事。○武士商人躰の者に不限出所慥ならず不審成者徘徊致候はゞ奉行所へ可訴出事。

さうして此の元吉原の開基は、同書にこれも「元和三年より地形普請等に取かゝり、同四年霜月中より初而一所に商賣仕候」とある。

○慶長頃の傾城町

元吉原開設以前、慶長頃の江府の傾城町の狀如何。尙同書にある「享保年中町奉行より上書の寫」といふのを拔くと、

「慶長年中迄は御城下に定り候傾城町無之貳軒參軒宛所々に分散致し罷在候。其中に軒を並べ居候場所三ヶ所有之候。

一麹町之通　傾城屋十四五軒。一鎌倉河岸　右同斷。一大橋の内柳町　廿軒餘。

（前略）右柳町傾城屋は皆々御當地素生の者に御座候。鎌倉河岸の傾城屋は御江戸繁昌に付駿府の彌勒町より引越申候。糀町のけいせい屋は京都六條の傾城町より引越候者ごもに御座候。此外伏見夷町奈良木辻などより參り所々に二三軒宛罷在候。」

○晝夜の御免と引越料

晝夜營業の免許は、新吉原に移轉した當時からである。同書に「是迄晝ばかり商賣仕候處、自今以後晝夜商賣仕候樣御免被仰付候事」とある。さて彼等が今の吉原の地に移轉したのは、明暦のはじめ。明暦二年十月九日に奉行の石害（谷）將監から吉原年寄中に移轉の命令を發してゐる。その時、四十餘年住居したから誠に移轉は困難だと、年寄中から訴へると、其緩和策として從來にない晝夜の營業を許したり、尙引越料の多額を遣はしたり、殊に從來の二丁四方の場所を代地では五割增の二丁に三丁下置かれるなど色々恩惠を與へてゐる。移轉命令の理由は「是迄の場所御用に付」である。引越料は元來諸書一致しないが、此の記聞には「壹萬五百兩、小間一間に付金拾四兩ならし」とある。因みに新吉原は「同（明暦三年）八月初旬新吉原普請出來に付引移商賣仕候」とある。

殊にそれが久しく疑問にしてゐた川口板の東都名所に到る準備、習作時代の唯一遺品であると感じたからである。

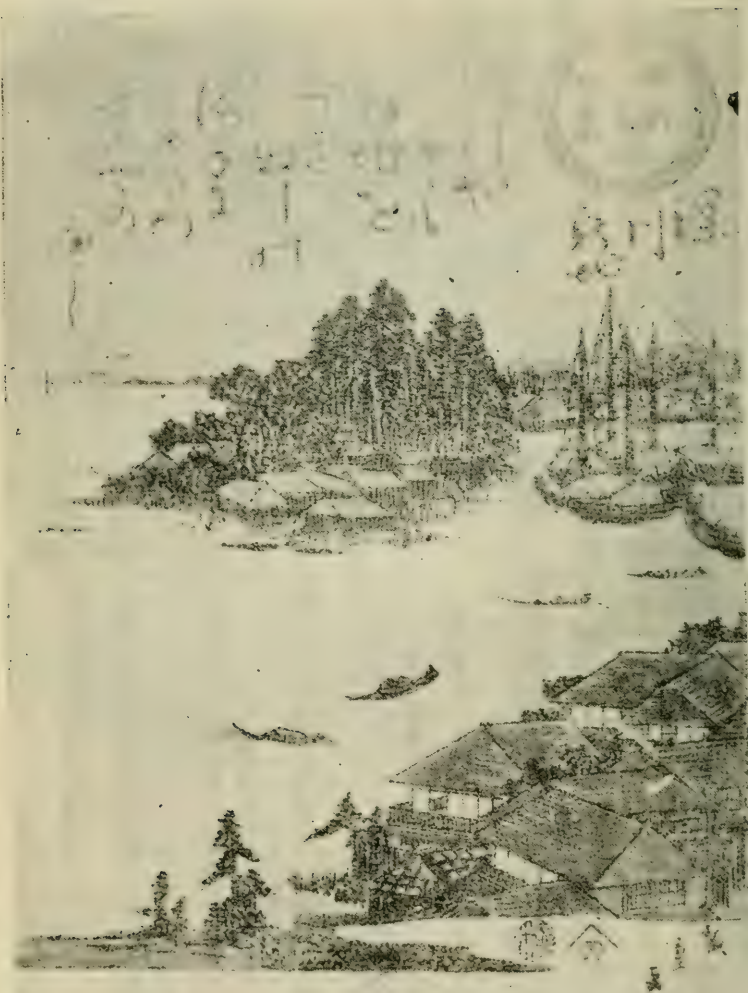
東都名所十景は、私の見た範圍は、五枚である。眞乳山、袖ケ浦、兩國、道灌山、深川新地（これのみ、年忌目錄に記入だけあるとは、前に云うた。）の五枚である。十景とあるからは、多分十枚完備で、なほ他の未知の五圖がある筈である。五枚の智識から云々するのは、幾分烏滸がましさを感じないでもないが、從來嘗て說かれなかつたこと、依而敢て以下の解說に及ばう。

落款は、彼の最初期の美人畫の少數に見受けると殆ど同じ確(かた)い楷書に近い書體である。拙著の「補訂浮世繪の印象」中の寫眞版「美人赴廷圖」（大錦竪）の落款と殆ど同じく、また有名な初期の美人畫「外と內姿八景」の落款にも幾分似てゐる。文政年間の作たるは勿論であるが、「外と內姿八景」がフエノロサ氏の文政三年作（橋口氏は文政五年頃といふ）とすると、これもその前後の作ではなからうか。殊に「外と內姿八景」と相同じく永壽堂の板行である。川口板の東都名所が文政十二年（或は文政十一年頃か）とすれば、この永壽堂の東都名所十景との年代の距離、これを文政三年頃とすると、約十歲の年月である。橋口氏說に從つて、「外と內」を文政五年とし、川口板東都名所を文政十二年頃としても約七八歲の距離がある。とに角川口板を生(う)むに、最少程度七八年の習作期があつたこと

は、この十景と川口板と對照すれば、肯かれる事實であらう。

東都名所十景は、私の實見の五枚では、極めて拙劣である。恐らくこれを見た何人も、彼廣重の名を恥づかしめるものと謂ふであらう。否恐らく廣重畫の落款ありと氣づかず、浮繪の豐春あたりの摸倣の拙な、無名作家の眇たる作品といふかも知れない。見た感じから云へば、寧ろ「外と內」よりも舊きかと思はれる程である。「外と內」には、既に、彼の美人畫として、風景畫とはまた異つた彼獨特な幽婉な情趣を滿たしてゐる。駈け出しの作家とは思へない。廣重に寧ろ美人畫家としても立派な素質や技倆のあつたことを證據立てゝゐる。それに引替へ、この東都十景の拙なさは、落款の書體の標證なくんば、「外と內」とは數十步離れた幼稚な、寧ろそれより以前の作品と見做して了ふかも知れない。況してこれが如何に贔屓目に見ても、浮繪の傳統をその儘受け入れたといふより外に特色がないに於てをやである。

十景の中上揭五枚の印象は、單に浮繪式といふより外にない。代赭と綠とが基調になつて、遠近の關係、水平線と手前の岸の人家、立木、總て草創期の風景畫たるを裏切らぬものである。竪繪、右上隅に、丸形の圍みがあつて、それに東都名所拾景、両國、或は道灌山と、命題が入つてゐる。上部に狂歌風のものが、いかにも碎けた書體で、躍つたやうな形で、稍畫面の大

「東都名所拾景」の深川新地　廣重畫

きさに相應して大き過ぎる程の文字で、一首宛が書かれてゐる。

(兩　國) 兩國のはしは龜より鱣より風に扇をはなしさうなり

(袖ヶ浦) さほひめの花の便りか御殿山、さくらもてゆく袖ヶ浦風

(道灌山) 道灌の城跡たえていまはたゞ鳥のみふせぐ畑の繩ばり

(眞乳山) をさな子も遊びあきてや待乳山、また姥が池尋ねてぞ見ん

(深川新地) 深川やこゝも新地をつき出しの海手にめだつ茶やの見通し

「新撰武者揃」の一部　廣重畫

以上の狂歌が掲げられて、餘りこれらの狂歌の提示する意味と直接交渉の乏しいやうな、平凡な、單に浮繪風の風景が描出されてある。線も浮繪風に、直線的で、人物もたゞ形ばかりの細かく、兩國なども、兩國の橋はあるが、名所案内體になり終つてゐる。全體は頗る豊春の浮繪式であるが、樹木の描法、殊に枝葉は、甚だ北壽の手法に似てゐる。或は、北壽に學んだとは、ここらあたりから、斷言が出來はしまいか。

廣重の有名なる風景畫には、大抵その作品の準備としての習作があつた。保永堂板東海道の先驅としては、山清板東海道（大錦竪三ッ切、横の細繪。「錦繪」十號の石井氏の説に據る。）があつた。近江八景にも泉市板近江八景（四ッ切横繪、）があつた。果然、東都名所にも、從來先驅と傳へられた川口板よりも、より以前に眞の先驅としてこの永壽堂板の「東都名所拾景」があつたのである。（廣重の、一幽齋から一立齋に轉じた月日が明確でない。唯師の豐廣歿後（豐廣は文政十一年五月、五十六歳歿説を取る）師號の一柳齋を直接嗣がず一立齋と改めたといふ從來の説に從つて、若し歿後直ちに改めたとすれば、川口板は一幽齋がきであるから、尠くとも文政十一年五月以前の作である。然するど、東都名所拾景との年代距離が愈々近くなる。即ち此から彼への飛躍が益々滑稽になる。東都名所拾景、或は「外と内姿八景」よりも以前の作ではなからうか。）

筆者曰く。予の「廣畫重最初の東都名所」は暫らく以上を以て打切とする。讀者に實證を示す爲「東都名所拾景」の中の深川新地の一圖を掲載しておいた。その如何に浮繪の摸倣であるかを見られたい。色彩は、草と代赭である。彼晩年の得意の藍の色は、まだ發明されてゐなかつた。別に掲載した「新撰武者揃」の内は、落款から推せば、丁度此の「名所拾景」前後の作である。家藏に二枚ある。内の一枚その一部を載せておく。（大錦、横繪三段。十數の武者を描く）此の武者繪と、あの風景畫。まだしも彼は美人畫家として、「外と内姿八景」の逸品を有した。若し彼に藝術の敵として英泉、國貞輩の美人畫家なかりせば、彼は此の「外と内」の傾向を大成して行つたかも知れぬ。武者繪にも、國芳の大家があつた。從つて彼は「内と外」の秀作も顧みなかつた。況して「新撰武者揃」の如きは。到頭比較的不得手な東都名所拾景類の完成。一筋の道を自分で發かうと苦んだのである。藝術産みの機縁、げに不思議ではないか。

半二の『心中紙屋治兵衛』

近松半二の「心中紙屋治兵衛」と大近松の「天網島」との比較、延いては却つて人に知られてゐない「心中紙屋治兵衛」の硬化した、詩から散文と變じた、半二の機本位（からくり）の通俗寫實主義の本體を明らかにして見ようと思ふ。大近松を聖、出雲を亞聖とし、半二を大賢といふとは成程巧く云ひ叶へたものだ。竹本劇が未だに所謂新舊歌舞伎の大部分を占め、或はその追隨者の多くを有してゐることから思ふと、殊にその竹本劇の大成、その發達の素地を築いたのは、大近松ならず、出雲ならず、半二であることを思ふと、彼半二の大賢主義また偉なるかなと謂ひたい。門左も中々操（あやつり）を顧慮した、興味中心の爲に腐心する所が多かつた。然し私から謂はしめると彼は矢張叙情詩人であつた。叙事よりも叙情味に於て勝つてゐた。半二は、全くその反對、純然たる叙事本位。散文家であつた。大近松は悲戀詩を歌ひ、半二は面白い操芝居の作に唯專念した。出雲は丁度その中間の峠のやうなものであつた。

同じやうな題材でも、「天の網島」と「心中紙屋治兵衛」とを比較すると、我等は、その懸隔の甚しいのに呆れる。勿論操人形の發達を影響に受けた點もあらうが、半二のは純然たる劇であり、門左のは未だ詩、情感本位である。今、私は「天の網島」と「心中紙屋治兵衛」とを比較し、その荒筋の相違を述べ、内容用意の差を述べて、以て私の言を如何に此等が雄辯に語り居れるかを示さう。

「天の網島」の追隨、摸倣作は、半二作の前にもあり、後にもある。即ち

天の網島（門左）享保五年十二月六日。竹本座○双扇長柄松（並木永助 豊竹上野）寶暦五年七月七日。豊竹座○中元噂掛鯛（三好松洛 竹本嘉藏）明和六年七月阿彌陀池東芝居○心中紙屋治兵衛（近松半二 竹田文吉）安永七年四月廿一日北新地芝居

○天網島時雨炬燵（半二？）不詳

である。今日、一般に知られてゐるものは、刋本に於て天の網島と、劇並びに素語りに於て普及されてゐるものは、時雨炬燵である。「時雨炬燵」は、半二の作といはれてゐるが、此の「心中紙屋治兵衛」と別物である。恐らく半二が在世中にこの「紙屋治兵衛」を更に増補修正したか或はその衣鉢を嗣いだ者たちの増補改題ではなからうか。（若し半二の作とすると、此の「紙屋」の安永七年以後天明三年迄、六年間の何れかに於ける作である。何となれば彼は、天明三、五十九歳で歿したから。）「炬燵」は我等五行本の紙治内に於て知る限りは、頗るこの紙屋治兵衛

よりも更に劇化、不純化である。炬燵には、末段、太兵衛善六の抜刀、治兵衛之を殺傷の形式となるが、この「紙屋」には、危くそれを堪へてゐる。其他おさんの出家、舅五左衛門の苦衷など、末節に於て、殊にその精神に於て、歌舞伎化と通俗映畫劇化位ゐの差はあらう。悉しくは時雨炬燵の丸本を手に入れた上で、此の論の補正をしようと思ふ。で、今は、唯、世上流布の「天の網島」と、比較的純正さに踏み止まれる「紙屋」との此の両者の比較にのみ終らうと思ふ。

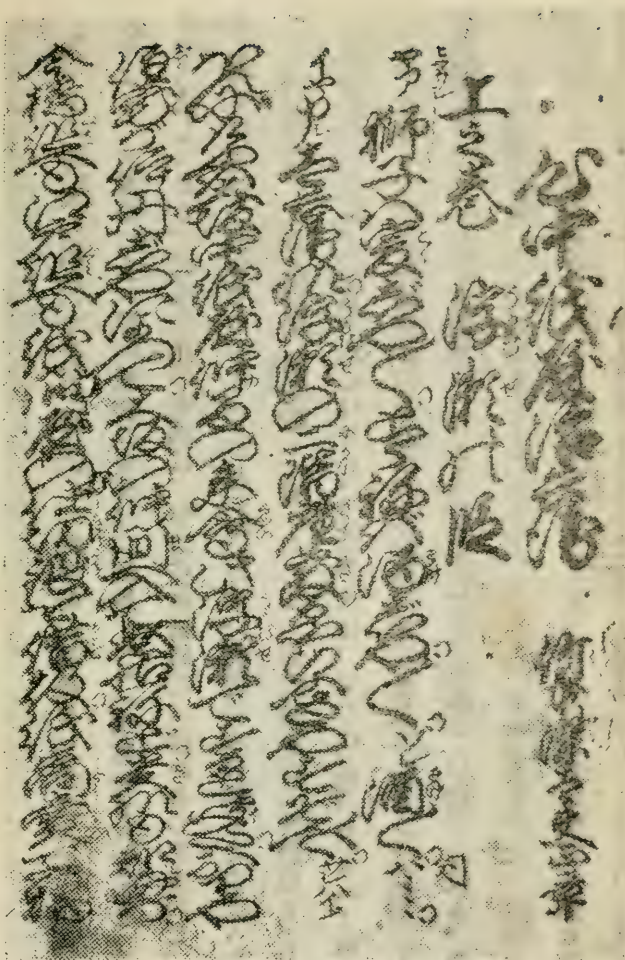
先づ仕組の相違をいふと、

天の網島	心中紙屋治兵衛
上の巻（河内屋）	上の巻（浮瀬の段・茶屋の段）
中の巻（紙治内）	下の巻（長町の段・紙屋の段）
下の巻（大和屋外）	
附名殘の橋盡し	

の通りで、「天の網島」の骨子たる上と中とは、「紙屋」の上の下と下の下とに殆どその全鱗を受け入れてゐる。随而「紙屋」の浮瀬の段と、長町の段とは、全くの新作である。全くの新作の

此の二段は後廻しとして、共通の二段（上の巻と茶屋の段。中の巻と紙屋の段）に就て、大近松のを受け入れながらも、「紙屋」が如何に詩より散文化に腐心（或は安易に）して成したかを證明してみよう。

先づ上の巻（天の網島）と茶屋（紙屋）との部分的の目星しい差（寧ろ半二の修正の跡）を検索してみよう。大近松の上の巻の最初の童謡は、「紙屋」には一切省略されてある。直ちに「よねが情」を持ち出してゐる。恐らく此の童謡は、半二在世當時には廢れきつたもので、その意味すら捕捉し得られなかつたのであらう。「よねが情」以下、大近松本に殆どそのまゝである。唯、大近松の「納屋は歌」とあるのを「時花歌」と變へてゐる。大近松本の「仲居のきよが是を見て」以下「女景清」云々迄は、「紙屋」本にはない。「紙屋」本は、すぐに「橋の名さへも梅さくら」へ飛んでゐる。此等も、半二の通俗本位を心掛けた結果の斧正と見られよう。「橋の名さへも」以下殆ど大近松そつくりだ。大近松の「行きちがふよね」が「往來ふ」に變つた位ゐ。但しその下のよねと小春の對話に於て、大近松本のよねの言葉「互ひに一座も打絶え」云々が半二本には無く、「氣色が惡いか」云々に直ちにかけてある。唯こゝらあたりの二者の對照で既に肯づけることは、大近松本は、對話でも言葉尻が齒切れよくぽつゝと切つてある。（例へば「やつれさんした」）

丸本「心中紙屋治兵衛」　一丁目表

然るに半二本は、甘く引張つてゐる。（例へば「やつれさんじたのふ」）其他は殆んど大近松本をそのまゝ踏襲してをり、大近松の「侍衆」が半二では「侍客」と明らかに指定してゐる位ゐである。大近松本の例の「なまいだ坊主が」云々の十數行は、例によりて半二本は之を省略してゐる。直ちに、小春をして河庄に逃げ込

ましてゐる。此らも、半二の筋を運ぶに急、大近松のそれとは違つた、文辭の才を見せた低徊主義との差が見られる。したがつて、小春の「表に李韜天がゐるわいの」が半二本では「表へいやな毛蟲客が來るわいな」（双方共に太兵衞を斥してはゐるが）となつてゐる。李韜天より毛蟲客の方が一般には分りが早いに決つてゐる。こゝらも彼の大賢主義が現れてゐようと思ふ。大近松本の「ぬつと入つたる三人づれ」が、「ぬつと入くる二人連」で、大近松本では太兵衞のみ名を有てるに、半二は、太兵衞と善六である。（善六なる迂愚なる此の敵役、後の歌舞伎に屢々現るる或る型、大近松には無し。）半二本の善六の例の惡ふざけの「結ぶの神の紙屑に貧乏紙屋の治兵衞の」云々のはやり唄は、大近松本には無論ない。唯この意味に近い言葉が、太兵衞の口から出てゐる。先づこゝまでの比較を以てしても、大近松は、太兵衞を普通の戀敵となせるに、半二は、太兵衞を、善六よりは稍ましな然し類型の迂愚なる、觀衆からは滑稽なる敵役にせしめてゐる。歌舞伎には、えてかゝる頓ちきなる敵役あつて、却つて觀衆の喝采を買ふのであるが、これもさうである。こゝらがその發生の根本ではなからうか。大近松本には無いが、半二本は、孫右衞門が現れ、治兵衞が縛られて後、太兵衞再び現れ、大近松本では、孫右衞門に唯追はれるのであるが、半二本では、この時僞名宛の二十両の借用證文を出して、治兵衞をか

たりと罵る段がある。さうして孫右衛門からその金を返濟させて歸る所がある。半二本ではまたこの二十両が伏線となつて、次の下の卷紙治内に於て、治兵衛に僞金だと喚(わめ)くのである。

さて、話が一寸混がらがつたが、かうなると我等は、案外流布されてゐない半二本の全梗概を述べる必要がある。によつて一層、二者の相違が闡かにせられよう。

第一段の「浮瀬」は揚屋であらう。最初善六と太兵衛との密談がある。善六は、治兵衛と從弟で、おさんに惚れて失戀した男、さうして太兵衛の取卷である。太兵衛もこれによると伊丹の紙商である。善六とは、治兵衛を憎む點に於て共鳴してゐる。けふは太兵衛は小春へ、善六は、紙屋の財産とおさんへである。太兵衛は純色敵であるのに、善六は、身代と色の二道である。浮瀬で大坂紙屋仲間の寄合といふので、奥から同業岩木屋の手代新兵衛が現れる。これも太兵衛に追從をいふ。場變つて、小春出場の途中である。小春は治兵衛との仲を堰かれて、親方の嚴しい監視にあつてゐる。今宵は斷りきれぬ侍客の約束（これが孫右である）があるのを、では晝だけといふので、ある僧客に名ざしでこの浮瀬へ呼ばれる。僧は、小春の駕籠を追はへて此の浮瀬へ來る。作者は、此の僧をして前代に稀れな極めて露骨な下(しも)がかつた事を謂はしめてゐる。僧は大和の門徒寺の住職。浮瀬へ來て、内に入る。そこへけふの參會に來た治兵衛と丁稚が現れる。丁稚を追つて小春と忍び逢ふ。（光景は、浮瀬の庭先であらう。明示してゐない。）小春と、人目を憚かつて、背(せな)〱になつて盡きぬ話に耽る。そこへ木の伊（河庄浮瀬以外の揚屋）の亭主が來て、治兵衛に揚代の貸二十両を催促する。出來れば、小春と切れるといふ一札を書けといふ。太兵衛の諜者であることを暗示する。そこへ伊丹の九藏といふ見知越しの男も現れて、共に、治兵衛を虐める。治兵衛は困り切つてゐると、太兵衛が現れ、俺がその金貸さうといふ。治兵衛は太兵衛とは初對面ではあるが、相手の腹を見透して借りない。太兵衛の味方九藏

は、代官所へ来いと小腕を引立る。そこへ最前の僧客現れて、「挨拶するは、事を鎮める出家の役」と、とゞ治兵衛はその出家から二十両借りて木の伊に返す。太兵衛九藏退場。そこへ河庄から急きに来て、小春は木の伊の亭主、帮間の豊八などと歸る。あとで治兵衛は、名宛無しの借證文を出家に渡す。（出家が、名宛はいらぬと恩に被せて）場面展開。薄月夜、小松のかげで、先刻の坊主客、實は乞食坊主の傳海、衣裳を脱いで、太兵衛が注文の名宛なしの治兵衛が書いた二十両の借證文を渡す。禮に十両、「長半の堂塔建立」と傳海喜んで受ける。で浮瀬の段は終つてゐる。

茶屋（河庄）の段となると、大近松作のやうに、小春出場。善六太兵衛出場。こゝで善六太兵衛の毒舌。孫右衛門に追はれ、あと孫右衛門と小春の例の對話。治兵衛出場、例によつて縛られる。太兵衛善六再び登場。前段の傳海から取つた名宛なしの證文に、太兵衛の名宛を書いて、治兵衛に二十両返せと難題をいふ。それを孫右衛門に金を返され、唯一武器の證文は取られて二人佛頂面で退場。アト例の三人の場面、「天の網島」と酷似。但し小春の手からおさんの文の發見。その瞬間の孫、春、治三人の描寫が、「紙屋」は、見物にも解るやうにと心掛けたせゐか、作爲歷然たり、從つて稍長文句となつてゐる。治兵衛が氣が付かず、見物の氣の付く劇の心理、普通興味を半二は捉へたらしい。大近松作を如何に修補したか、その大賢化の現在證據を此の一節に據つて示しておかう。

天の網島

心得やしたと涙ながら、なげ出す守袋。孫右衛門押ひらき、「ひい、ふう、三イよ。」十、廿九枚、かず揃ふ。外に一通女の文。「こりや何じや」と開く所を、「あゝそりや見せられぬ大事の文」と取付を押のけ、行燈にて上書見れば「小春様まゐる、紙屋内さんより。」よみもはてずさあらぬ顔にて懐中し、「是小はる、最前は侍冥利。今は粉屋の孫右衛門。商なひ冥利女房限つて此の文見せず。我一人披見して、起請共に火に入る。誓文に違ひはない。」「アゝ忝い、それで私が立ちます」と…………。

心中紙屋治兵衛

「ハテ今に成つて何のうぢ〳〵。サア早う是か〳〵」と懐へ手を指込んで守り袋、引出す一通。「ハテ惜うもない此紙屑残らずお返しなされ。」といひつゝ讀む文見て恂り。「小春様参る紙屋内」。「あゝこれそりや見せられぬ大事の文」と取付くを取り、孫右衛門、「スリヤこな様此の状の客へ義理立てゝ」。「ハテ扨どこの客から状が来ようと、思ひ切つた女夏の事、わがみの構ふ事はない。小春殿、最前は侍冥利。今は粉屋の孫右衛門。商ない冥利、女房子限つて咄しはせぬ。勤の中にも夫程迄。イヤサ眞實のないは女郎の常。最前の水くさい詞は、斯ういふ状が来て有るから。是じや物道理じや〳〵。夫レに心中して死なうとはいかい阿呆では有るはい。思ひ廻せば廻す程、おかしいやら、不便なやら、餘りて涙がこぼれる」と笑ひに紛らす眞實は、口に云はれぬ心の禮。「孫右衛門様。必ず其文外へ見せて下さりますな。」「起請共に火に入れる。コレ誓言に違ひはない。」「アゝ忝い、それで私が立ちます」と…………。

半二本の下の巻の前、長町の段は、小春母の内である。梗概は、小春の母は眼を潰してゐる。（小春の身賣もこの療治代からであつた）煮賣屋の三八が來て、娘小春の境涯を羨んで歸つて行く。そこへ馬方が來て米を屆ける。母と妹のお市が驚いてゐると、治兵衛が來て、「わしの志だ」と

いひ、小春とは切れたが、母は私の親身の親ぢやというて、今後の小春を除けた母やお市との交渉を約束して歸る。アトで母の治兵衞への義理から來た小春變心の憤りがある。そこへ紀伊國屋を駈落した小春が來る。母は知らない。一場の悲劇。丁度そこへまた紀伊國屋が小春を追つて來る。小春裏口へ外す。母は正直、來ないといふので、紀伊國屋は、では太兵衞の知邊を探せと追うてゆく。アト母と妹の愁嘆。頗る「河原達引」の堀川を思はせる劇的場面である。

最後が、紙治内である。「天の網島」とは違ひ、治兵衞の眼覺める前に、既に孫右衞門が來てゐる。奥に、治兵衞の起きるのを待つてゐる體。(「天の網島」は此の段の登場者は、おさん夫婦の他は孫右と伯母と、舅五左衞門のみである。)治兵衞が起きると、そこへ、太兵衞が來る。さうして前場の孫右(侍客)から受取つた貳拾両が僞金だと喚いて、摺換へた僞金を敲きつける。治兵衞は、「もと〳〵あの證文は、浮瀬の時坊さんから借りたその證文だ」。お前に借りた覺えはないといふ。そこへ門口へちよぼくれ坊主が來る。それを治兵衞は、「ヤア先だつての坊主客」とやつと發見する。坊主は一切構はず、「ちよんがれ節、新物の始り」と紙治を材料にした一くだりを演ずる。紙盡しで、紙治を罵り得て妙である。(前の河庄で演ずる善六の唄は、善六の主觀を意味してゐるが、紙治夫婦の惡。これはまた太兵衞の主觀を現してゐるが、紙治の遊女買ひの窮迫の惡である。同一ではない。(このちよんがれの中に、「盆も正月も小春がお〇〇に忍び紙」なる春的句がある。之を以てしても、此の「紙屋」の方がうんと、大近松作よりも一層俗衆の喝采を得る點に於て大賢である。)そこで太兵衞の奸策を漸く治兵衞君看破した。傳海に、治兵衞が詰ると、傳海逆捩を食はし、「サア請目ぢや」乞食坊主に金借りたといふなら、サア返せと啖鳴る。太兵衞も益々附上がる。代官

所へで一層脅迫する。治兵衛堪らず戸棚の脇差抜かんとする。奥から始めて孫右現れおさん共々治兵衛を或は宥め、或は叱り付ける。騒ぎの所へ、紀伊國屋の才兵衛が來て、太兵衛のゐるのを見つけて、太兵衛に小春を出せと掛合ふ。太兵衛喫驚。その譯は、小春の書置に、もと／＼太兵衛殿と添ふ氣であつたが、太兵衛殿のつれなさ故欠落する。行先は太兵衛殿の知邊とある。此通りの證據とその書置を見せる。形勢一轉。之を眞に受けた太兵衛の周章狼狽、悲歎、「小春やーい／＼」と泣き出す。（こゝらは半二の小春は、中々策士である。最後まで太兵衛を蹂弄してゐる。半二は、大近松よりも、腕があつて張があつて利口で、治兵衛にも太兵衛にも優越な女を描かうとしたのであらう。）太兵衛は、自分の心當りはないといふ。しかし愚圖々々してゐると小春が死ぬ／＼というて、傳海才兵衛諸共駈け出ようとするのを、最前太兵の泣いてゐる時落した手紙を拾つた孫右が、（その手紙は、傳海から太兵衛へ送つた一件に就ての打合並びに十兩の追借用を迫つた物）その手紙を讀み上げて、ドヽ太兵傳海の両人を打据ゑる。傳海はすつかり白状する。小春の偽書置ですつかりいゝ氣になつた太兵は、傳海諸共「惚れられたが身の因果」と戀の勝利者めかして退場。才兵衛も退場。そのアトへ伯母が來り、伯母と孫右の眼の前で、治兵衛は起請を書く。

以下殆ど「天の網島」と經過は同樣、詞句も變りない。唯最後に半二作は、小春が來て、いざ心中ともろ共家を駈け出し、大長寺まで來ると、（此間、丸本にて僅かに三行）待て／＼と孫右衛門走り付、「身すがら太兵衛惡者共、贋（にせ）金の工みお上へ露顯し、五左衛門殿の疑ひもはれて矢張り聟舅。小春の身の納まりも諸事我が胸にあり」と目出度し／＼で終り、何の心中どころかといふ段取だ。

要するに、半二作は、極めて俗受本位。さうして前後照應、技巧的技巧が冗い程である。説明の冗さには閉口せざるを得ぬ。二十両の僞名宛の證文。それに傳海坊主のやうな惡黨、すつかり歌舞伎流である。人物の多さも無論であり、局面が理窟を追うて展開することも然りである。善六のやうな性格、治兵衞とおさんと善六、治兵衞と小春と太兵衞の關係も無理な跡著しい。(但し大近松に比較的作爲の跡著しからぬのは、實説をより多く取り入れて、さうして急塲の作といふせゐもあらう。半二は、以後その摸倣作を二まで中間に置いての作であるから、斯うなるのも自然の勢かも知れぬ。)とに角無理ではあるが、然し面白いものと一體に心掛けた。これが後世の所謂歌舞伎の神髓であつた。その俑、開祖は、蓋し彼半二ではなかつたらうか。(上の巻で、浮瀨と河庄と、共に、小春の相手が變裝の客であり、且つ坊主と侍であることも面白い。此の思ひ付は、半二ならで、文吉の思付かも知れなからうが。)

最後に謂ふことは、この「紙屋治兵衞」の一曲中で、何處までが半二の執筆であらうかといふことである。無論後半が山であり、從つて下の卷の長町と紙治が半二の執筆であらう。殊に語り手も、上の茶屋になつて、政太夫の名が大文字で現れ、長町は梶太夫、紙屋は、哭太夫と染太夫である。染太夫一座の事故、無論紙屋の段が此戯曲の全主腦であらう。然し長町の段も恐

らく半二の作であらう。竹田文吉は、前二段、半二は後二段を執筆したであらう。さて此の「心中紙屋治兵衞」に於て「天の網島」から全く獨立した塲面は、「浮瀬」と「長町」であるが、就中「長町」は、しんみりした好悲劇の塲面である。後の「河原達引、堀川」（作者不詳。今昔操浄瑠璃外題年鑑には、天明三年豊竹八重太夫勤むとある。一般説は天明五年頃。）に影響を與へたかと思ふ塲面である。即ち治兵衞と傳兵衞。小春とおしゆん。小春の妹お市とお俊の兄貴の與次郎と、さも似たりである。唯だ違ふのは、おしゆんの母も傳兵衞も、おしゆんの心を知れるに、此の「紙屋」は、肝腎の治兵衞も小春の母も、小春の眞意をまだ知らずにゐる點である。然し悲劇は「堀川」よりも、小春の母や小春に一層多からう。女を思ひ切り乍ら、その母に俵を貢いでせめての面當といふ治兵衞にも戀に溺れた弱い人間の溜息がある。文辭も、全四段中、一ばん落著きのある、淨瑠璃の正脈らしい悲曲である。他の歌舞伎や、惡くすると通俗映畵劇や二輪加の類とは違ふ。私は、この「長町の段」を、半二の執筆と見て、その全鱗を左に示さうと思ふ。（校訂は、極めて難儀した。然しなるべく原文の儘を殘し、三四を漢字に換へ、且つ甚しい假名遣の誤はこれを正しておいた。）私は、此の塲面こそ、小春の獨舞臺であつて、しかも母も治兵衞もお市も凡てが彼女の衷情を知らぬ所に、作者の巧みな技巧があらうと思ふ。これは、歌舞伎に

するには餘りに淋しい場面である。從つて是れ、後年永く此の「紙屋」の中、河庄と、並に更增補の「時雨炬燵」の紙治內との二場だけが歌舞伎に殘り、長町は廢絕に歸した所以であらうが、こは歌舞伎の唯一手法たる所謂見物の知つてゐる事を舞臺は知らずに汗かくことの最も請目な、好場面であり、殊に小春治兵衞の二人が相逢はぬ事は最も面白く、治兵衞の出方彼の心持に今少しの修正を加へれば、紙治河庄よりも、今日に於ては寧ろ復活し得られるものと思ふ。

下の卷　長町の段

大阪長町家並は宿屋傘屋に煮賣店。中に貧しき老病の子に目は見えぬ母親に、孝行厚き小娘がかもじ簑すく賃仕事。我髪形は箕賣笠、着たい盛りを木綿物、貰うた儘の木櫛さへ遁女の子なりけり。相借屋のぶらり三八差覗き、「婆樣今戻りました。」「オヽけふは早うござんしたのふ。」「イヤもふ十夜で煮賣もさんと明きやんせぬ。夜店出して喰逃に逢ふより、宵からぐつたり寢る積り。コレ〳〵お娘いつでも精が出ますの。」「サア見て下んせ。わしが目が見えぬので、しほらしい手仕事覺え、よう養うてくれますわいの。」「したが顏立もよいのにそんな事さすは、惜い物じや。何ぞ三味線仕込まんせぬかいの。」「いや〳〵小娘にそんな事教へると徒になつて惡い。」「ヘヱ堅い事云はんすわいの。それでもアノ姉貴は、山衆じやないの。」「サアあの小春はわしが目の煩ひをどうぞ直したいというて其價に孝行の勤め親の氣ではどうかかうかと案じの絕えぬ間はない」と涙ぐめば、「ハテ惡い合点じやわいの。結構なべ

ゝな着て、身は樂で世界中の男に惚られ、此世からの極樂さは、あの事じや。おいらが一日新地中な鯡昆布卷さ賣あるく一年の儲な時の間に遣はすやつも手柄者、又遣ふやつも手柄者。身上厚い紙屋の治兵衛、今は夫れで漆漉、いかう薄う成つたげな。ヤモどうしてもあの道じやわい。ア婆樣も若い時から三味線でも覺えて居やんすりやよいにの。」「何いはしやるやら。目は見えず、あたまに髮もない此ばゝが、そんな事覺えた迚何に成らう。」「アゝいやさうではないぞへ。當世はコレ足は歩艱で目のうさい坊主さへ北の芝居でさへ出語りして大入なさしましたわいの婆樣も三味線でも引いてなら、神明の晩には大きな米に成るのになア。」「チゝマアいろ〳〵の事いはしやる。サゝちやつさいんで寐やしやんせ」さ呵られて、こそ〳〵さ惡口明いた路次口から己が住家へ走り入る。外は十夜の日暮前、辻からごやいで來る馬士。「多田屋の妙光樣はどこじやな」さ、所問ふのも喧嘩聲。「アゝこれかゝ樣〳〵。こはい馬奴が爰な尋ねて居るわいな。」「ハテ馬士に近付きはないが、妙光はこちじやが何の用じやの。」「アゝ爰かい。天滿から米が來やんした。請取つて下んせ」さ、馬からおろす柴田俵。「アゝこんなこちの内へ米の來る覺えはない。そりや大方向ひ角の米屋で有るぞえ。」「アゝいや〳〵慥爰に違ひない」さ。せり合ふ中にいきせきさ、色の緣さて天滿から爰にも通ふ紙屋の治兵衛。「チゝ太義じや有つた。三俵ながら中戸の内へ入れてもらな。」「エゝコレ丹那。中戸が何所に有るぞい。すりや又長町の妙光樣さは、どえらい隱居の下屋敷かさ思うたら、こいつはもうきつい薄やくしじや。」「ハテ扨惡口いふな。大事のおれが一ッ家の內。ヤモ此間は閙しうて便りも致さぬ。が此俵は利口な直段で、けふ內へ取つた次手にお下配申します。コレ馬士駄賃の外にソレ〳〵盃呑代。」「ヤ有り難いわい。ヤ又どうでも粹のみなかみやの丹那殿じや」、さ馬も尾をふるたいこ口。ハイすい云うて追うて行く。「コレハ〳〵丹那樣。マ

大正十二年五月二十七日印刷納本
大正十二年六月一日發行
第九冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎楓水著

第九册

文本

半二の「心中紙屋治兵衛」(完)
馬琴初期の黄表紙
附馬琴黄表紙年表
來簡一束

來簡一束

○踊形容について

御著第四册、踊形容についてのお說、面白く候。屢々目に觸れたる字面ながら別に調べもいたさず今日まで打過ぎ候ひしが、成程法令との關係に原因したることに候ふべし。尙東京へ歸り候て、取調べて見ることにいたすべく候。

御說の如く、早くも天保以後の遺語と存じ候草册子の外題にもあり、今手元には何も參考書なき故、明かには申しかね候へど、あの三字を「ダテスガタ」と訓ませたる例もあつたやうに記憶いたし候が、或は思ひたがへかも知れず候」下略。（一月十日　坪内逍遙）

○「中條」はナカデウ

御誌「墮胎史雜考」中の墮胎醫「仲條（ナカデウ）」はチウデウに非ずと存候が如何。ナカとしたる或る例證有之候。（四月十五日　井上和雄）

○都々逸は熱田から

前略。蓋し「邦樂」第一卷第二號に、都々逸根元記を引いて、曰く、「都々逸は貴地熱田の町端の茶店のお龜女の謠ひ始めしものといふ樣に見え候。但しコンナ事は貴所に對しては釋迦に說法。（四月十二日　小笠原久恒）

○「枕」の意味

（前略）さて三册目の艶書考上の「枕草紙」のこと、鈴木弘恭氏の訂正增補枕草子春曙抄上發端ニノウラ弘恭氏の頭註に

枕は夜のものにて、人の見ぬところに用ゐるがゆゑに、人にかくすべきことを當時の俗言に枕言といひし也

とありますが、御承知とは存じますが、御參考までにお知らせします。（沼波守）

〔補　遺〕

○艶画本の板元明示に就て

本著一〇二頁に、江戸初期だけに艶畫本の畫者板元の明示したものがあつたやうに自分もいひ、外骨氏の「此花」所說まで之が爲引いてゐたが、此頃、それを裏切るものを發見した。それは「極樂遊」といふ艶畫本、三册物である。これは有名な土器小傳を材料にしたもので、小傳（此本ではお大）が、坂東三津五郎（此本では大和屋の勝見）や淸元延壽齋（此本は千代本姥壽）や瀨川菊之丞（此本は多門）や鶴屋南北（鶴屋閑木）などに冥土で邂逅ふ物語だが、その見返しに、麗々しく

天保壬辰春正月
三津世川　極樂遊（ごくらくあそび）
和印問屋　金聲堂發兌

とあつて、發兌の下に、耕錦堂と讀める印がある。耕錦堂は錦耕堂（山口屋）のことであらうし、天保壬辰はその三年。殊に和印問屋が面白いではないか。著者こそ女好庵主人であり、畫者は署名なけれ、（國貞の畫であることは一目瞭然）和印問屋と稱したり、又板元を明示したりした反證の一だ。（著者）

アく数ならぬ小春を不便がつて下さりますさへ有るに、其縁につれ此のはゝ迄樣々のお心づかひ、余りくて冥加なうござりますわい。」「イヤ是はお袋、いかにも是迄折節の問音信は、小春が縁に連れての事。もう小春とは縁切りました。サ退きましたぞへ。」「エイそりやまあどうしてくく」とあきれる顔色打守り、「チヽこな樣は何にも知るまい。二年以來身上を打込んで身を打つた此治兵衛、思へばいかい徐者じや。惚れて居る目からは、する程の事が俺へする心中に見え、少々のあいそ盡かしも張のある女郎ぢやと猶乘が來たが、今思へば張ではなうて羽蟻のわいた蟲付の柱。眞はさうからくさり切つて有るわい。長々つまくれて、起請から狀文から役にも立たぬ事に高い紙を費した商賣の冥加に盡きたかと、今といふ今夢が覺めましたわいのお袋。互ひの起請取戻して仕まうたれば、埃程もう念は殘らぬ。さう思うて下され」と、聞いて母親身をふるはし、「エヽそんならアノお前樣をかはにして、外に男を拵へなつたか。チヽそりやもうお腹が立たいで何させうく。が其お憎しみの有るやつに緣を引いた私に又今日の此御深切は、こりや此奘に術ながらして死ねとの事でござりますかいなく。」「是は又わつけもない。コレこな樣の正直は見拔いて居る。あゝいふ不心底なやつ、親の事も構ひをるまいと、そこがいとしい。小春めが事は是限にしても一旦請出してこなさんを隱居させうといふた男の詞は、おりや違へぬ。改めて此治兵衛が眞實の拇者人と思うて、猶こな樣を大事にするが結句アノ小春めへの頰當。ヤコレお市、わがみはおれが妹じやと思うてゐる。其かはり又姉めがうせた共、必ず物もいやんな。もうあいつを思ひ切つたら一家の機嫌もようならうし、是からおれもさんと商賣氣に成り、ほんにもつけの幸ひ。とは云ひながら色を退いたと思へばどうやら斯う何やら落した樣で。アヽいやく是も愚痴く。ドレく是から逝んで商賣精出しましよわい。お袋隨分達者で、お市氣を付きや。アヽコレもうく目の不自由

なに、そこに居さんせ。其内来ましよ」と、離のよい男の氣性、傾城の胸の起請は神ならで白地(しらち)になして立歸る。お市もどうやら氣がかりに跡打ながめ、「コレかゝ様。丹那様(さん)から下さつたアノ俵物、貰うてもだんないかいな。」「ナゝあゝいふ男氣なお人。戻しても取りはさつしやるまい。というて晝の縁の切れたに米一粒でも何とそれが請られう。ほんに〳〵姉めがさういふ心になるとは、今の今迄思ひも寄らぬ。此後治兵衛様に顔を合さう共思はれど、小春めな勘當するが天道様への云譯。親でない子でない。コレお市、著(も)し来た共門(かど)ばたへも寄(よ)しやんなやっほんにマア時も時、有がたいお十夜にこんな事聞くもやつぱり罪の深いのか。アゝなんまみだ〳〵〳〵」と涙に咽をせき交ぜて苦しむ母の脊撫(なで)さすり、「コレイナア其様に氣なもますと、ちつと寐やしやんせ」と、指寄(よす)る枕も木地に艶のない子は眞實の孝行と、入相の鐘入顔も臨月かげ曇なき我身を我と我男の爲に男に疑はれ、死出の覺悟の數入は親の內さへはいりかね、覗けば、内に姉が釣佛壇に御明しの灯かげちらつく表の人影っ招くは誰と背戸口に透し見るより走り出、「ナゝ姉様か。」折角ようござんしたに、ひよんな事や」と云紛る。「ひよんな事とは氣づかひな、誰ぞ来て居るかや。」「イゝヱ誰もないがな、かゝ様は、今すや〳〵と寐てじやわいな。」「チゝそんならちよつとお顔が見たい。」「イヤ待たしやんせっめつたに逢れぬぞえ。いかうお前の事を腹立てて。」「ムゝそりやマアどうして何として。」「サア其譯は、さつきに天満の丹那様がござんしてナ。」「ヤヤあの治兵衛様が来てじや有つたか。」「アノ治兵衛様が。」「ハアそれなればかゝ様も機嫌の悪いが尤もじや。定めてわしが事を、人のやうにいうてにや有るまい。」「アイ逢うたとも物いふな、親子の縁切るといふてじやわいな。」「ヤアそんならアノ治兵衛様斗りか親に迄あいそ盡されたか。エゝ〳〵これはな〳〵〳〵いふにも云はれぬ此様な情ない義理が有る物か」と、軒に蹲(つくば)ひ泣居しが、「コレお市、姉は様子が有つて欠落して来た

わいの。是からどんな遠い所へ行かうも知れぬ。さういふ譯ならかゝ樣も所詮逢うて下さんすまい。是はそつと斗りなれど、かゝ樣の御明しに上げてたもっ物はいはずと餘所ながらお暇乞がして去たい」、といへば妹も猶うろ〳〵。「コレ姉樣そりやお前心細い事いうて下さんす。かゝ樣はよわし、わしやお前斗りを力にして居るわいな。ゆうべもゆうべとお前の死なしやんした夢を見て、悲しうてならなんだ。かか樣の手前は、わしがよいやうにいふ程にな、コレどつこへも往つて下さんすな」と、抱付けば、抱しめて、「チヽよういうてたもつたのう。其深切を聞くに付け、一人の母に孝行を盡す事さへならぬといふ淺ましい身の上を推量してたも妹」と、別れて居ても泣き寄りの親身の兄弟有りながら、なぜ死神の付きぬらん。表は十夜の人通り、小歌淨瑠璃ほう〳〵の格子店先ぐわつたひし。當り廻つてかしましき。母は目覺し起直り、「お市〳〵どこへ往きやつた。」「アイ〳〵爰に」と入る跡から小春をそつと入口の戸を塞是に母の顏見るに先立つなつかし淚。それ共知らず「コレお市、今夜は若い衆がいろ〳〵の惡さする晩じやっめつたに外へ出やんなや。最前氣をもんだので癪が上つたか肩の痛さ。しんどかろけれど、まちつと撫つてたも。」「アイアイやつぱりさうして居さしやんせ」と、後へ廻り妹が親の介抱みやづかへならぬ小春がうらやましさ。「そこなぐつとおしてたも。隨分と強う〳〵」といへど小腕の非力にこたへかぬれど、姉の身で押すに押されぬ親の癪、そつとかはつて孝行を分けて貰ふも親子なる。「チヽようこたへます。大分力が強うなつた。此癪を發しだは姉の小春め。俤が徒にばつかり凝つて親の事は何共思やしたるまい。」「イエ〳〵さうじやござんせぬ。お前の事を忘れさんせぬ其證據は、さつきに飛脚に言傳が有つてな、此金を御明に上げてくれさて持つて來たわいな。孝行な姉樣是見やしやんせ」と指出す包。「何じやチノ此金をおれにくれたか。エヽ穢らはしい。畜生めが手から一文半錢貰うては、治兵衛樣へど

うも立たぬ。ソレ早う戻して仕まや〱」さ投はかる。小春は悲しさやる方なさ。姉の心を思ひやり、「かゝ樣餘りじや。褻にも晴にもたつた二人の兄弟、私を不便さ思うてなら少々の事は堪忍して」さ縋りなげゝば、「サイノッ其わがみの三ぶ一、姉めに人らしい性根が有れば何思はうぞ。あれ程眞實な治兵衞樣、最前も悪びれぬ樣にいうてなれど內證の咄を聞けば、小春にかゝつておぬしの內も大分明いて、商賣も不手廻しになつたげな。お內儀樣や、一家衆にせがまれ、死なうさ迄さつしやつたさ、人の噂も嘘では有るまい。其段に成つて今更見放し、外の男持たうさいふ思へば〱憎いやつ。さは云ひながら小春めも、やつぱり町の娘で置いたらまんざらあゝも有るまい。勤さしたが母が誤り、親の事思ひ居らぬも無理でない。不孝な子を持つさいふも皆わしが身の因果じや」さ、跡云ひさしてたぐり咳。又せきのぼせば、「コレ申し氣をしづめて」さ清水燒、一ト口呑ます左右よりおさゞひ取り付介抱に、「オヽもうよい〱。がコレお市、此の白湯は誰が汲んでくれたの。」「エイチヽあのかゝ樣の何云しやんす。常住痰が發る故、土瓶は私が傍に置いてやつぱりわしが汲んだのじやわいな。」「さうで有つたか。おりや又近所の衆でもござつたら、今のざんげ咄し聞かしやつたかさ、はつさ思うた。コリヤ姉は子じやないによつてな杖柱共思ふはそなたばつかり。可愛や〱まだ親の世話にならにやならぬ年ぱいに苦勞する。エヽ此目が明かぬ事ならいつそ早う死たい。おれが生きてゐる中は姉めをよせぬは治兵衞樣へ立てる義理。死んだ跡では兄弟中よう、迚もの事なら達者で長生してくれさ、小春めにいうてたも。人の恨でひよつさ又、悪い死でもしをろかさ、おりや夫れが案じられる」さ、いふ聲咽にむせ返り、つまる所はかはいさの慈悲心肝にこたへても、死なねばならぬ云譯も跡で堪忍してたべさ諸事を淚の暇乞。折から表へ北の新地紀伊國屋が聲高く、「妙光殿の內は爰じや、明けてもらを」さ戸をたゝく。はつさ驚き裏口へ抜ける小

春の有りとも知らず。「チヽどなたじや、お市、戸を明きやいの。」「アイ／＼。明けた門からどや／＼と「イヤ紀伊國屋の才兵衞でごんす。」「チヽ是は／＼ようマア十夜參り遊ばしたな。お市、お茶上げましやいの。」「イヤ茶よりもちやつと小春に逢ひたい。爰へ來て居ましよがの。」「ヱイ何とおつしやる。アノ小春がさんじましたか。イヤマアどこに居ます。」「アヽコレとぼけまい／＼。小春は欠落なしたわいの。」「ヱヽイ。」「ゐゝじや有るまい。大事の代物。來てゐるなら隱さずと、渡して貰を」とかさかけても、しらぬが有りやう。「夫ればマアマア氣づかひな事じやが、こつちへは參りませぬ。此間から便りもなし、疑はしくば狹い內じや、御苦勞ながら一ぺんおさがし。」「チヽさういはいでも家搜しする」と男が挑燈先に立つ。「アヽコリヤもうよい／＼埋んで有るとないとは大がい五音でも知る才兵衞。居もせぬ所尋れて居るは隙費やし。コレお袋。今でも來たら知らさつしやれや。隱すとおれが命にかゝる。どうでも太兵衞が手筋の方搜すが近道。サア來い」と飛ぶが如くに行く跡にぎつくり當る親心。「憎いやつでも氣にかゝる。さつきの包は何所に」と搜し尋る上包み、とけばほどける佛の筐、朽ちぬ金に珠數一連。「ヤアそんならどうでも死覺悟か。尋ねに行かうも目かいは見えず。何所を證途に。コリヤ小春やい」小春／＼の聲計り。爰にと云ひたい所をばこたゆる辛抱法善寺の十夜の鉦を別にて紛れ行くこそ、便なけれ。

以て一篇の好中幕ではなからうか。治兵衞の「物を落した」云々の愚痴も、切なる未練の聲として、近代人にも共鳴深く、小春の心內の葛藤も亦比較的自然に而も鋭利に描破されてはゐなからうか。若し諸君に、砂中一玉を得たるの感あらば、以て予が紹介の勞足れりである。

馬琴初期の黄表紙

曲亭馬琴に、寛政三年の「盡用而二分狂言」を處女作に、以後數年黄表紙の作が彼の初期にあつたことは周知の事柄である。「近世物之本江戸作者部類」には、此間の消息を概括的に述べてゐる。「作者部類」は彼馬琴自身の自家擁護の匿名作（署名は、蟹行散人。序に天保五、春とあり。）でもあるのであるから、比較的之に眞を措くことが出來ようし、それに「列傳体小説史」はじめ、殆ど此の祖述に過ぎないと思はれるから。今左に、その中、赤本作者の部の要文を拔いてみよう。

曲亭馬琴

寛政二年、壬生狂言流行せしかば、用盡而二分狂言といふ二冊物を摺りて、明春辛亥印行したり。（和泉屋市兵衛板、歌川豊國畫）此折は、名號大榮山人と署したり。深川八幡の社頭に僑居したれば也。この年（寛政三年）山東京傳、故あり籠居二三月に及び、九月下旬に其の厄釋けたり。故に新作の臭草紙、明春正月の出版に一筆にて整ひ

がたしと云。是をもて馬琴代作して稍其數に充てたり。當年京傳が作四種の內、龍宮𩵋(ナマグサ)鉢の木(二冊物蔦重板、重政畫。趣向は京傳文は馬琴代作)實語敎幼稚(オサナ)講釋、(三冊物同畫。趣向かき入とも馬琴代作なり)など代作なれば、馬琴の名を著はさず、書賈へも秘しければ是を知るもの稀也。(當稿は京傳自ら書きたり)寛政四年壬子の春の新板。鼠婚禮塵劫記(三冊物、豊國畫芝泉市板)自花(ハナヨリ)團子食氣(クヒケ)話(三冊物大和田板)、荒山水天狗の鼻祖(ハジマリ)(三冊物右同)御茶漬十二因緣(三冊物、春英畫伊勢屋治助板)當年此四種より馬琴作と署したり。(記者云鼠婚禮塵劫記の序を京傳が書きて、曲亭某嚮に予が隱れ里に寓居し、ひとつ皿の油を甞て友とし善しといひしは、彼京傳が屏居の折、馬琴が止宿して久しく慰め、且つこの折は臭草紙の代作さへしたればなり)かくて寛政七乙卯年、正月の新板、蔦屋重三郎が誂へにより、京傳が善玉惡玉の第四編(三冊もの)四遍摺心學草紙いたく行れしより其名を世に知られたり。されば拔萃のあたり作多かる中に滑稽物流行の頃の無筆節用似字(ニタジ)盡などは、流行江戸のみならず、京浪花にても人の賞玩大かたならず、こゝをもてその翌年京師より新織の金襴純子に似字を織りたるを江戸へ出こしたり。(中略)されば寛政二年より今に至りて四十余年、書賈の需已む時な

く、その著編三百部に及ぶと云。（温知叢書本に據る）

（一）の註。京傳は、此の年、「仕懸文庫」、「錦の裏」「娼妓絹篩」以上三書洒落本の筆禍により、夏六月、手鎖五十日の刑を受けた。（板元の蔦重は身上半減の闕所となつた。）

增補青本年表にも、寛政三年の條下に始めて

廿日餘四十両　盡用而二分狂言　二　大榮山人作　豊國畫

馬琴初作にて當り物なり。

と見えてゐる。其他日本小說年表、列傳体小說史等殆ど同じく、此等に據りて今左に二分狂言より以下馬琴作の黃表紙全部を擧げてみよう。以て案外、彼に此の種戲作中の戲作の多かつたことを擧證してみよう。

○馬琴作黃表紙年表

馬琴年齡	外題	冊數	畫者	板行年代
二五	廿日餘四十両盡用而二分狂言	二	豊國畫	寛政三年
二六	實語教幼稚講釋	三	政美畫	同　四年

右　署名京傳

馬琴年齡	外題	冊數	畫者	板行年代
二六	花春虱道行	三（或は二）		寛政四年

京山の「蜘蛛の糸巻」に載りたる外題なり。曰く「花の春虱の道行全二冊但一冊五枚宛春朗畫にて蔦屋出版。馬琴自序に京傳門人とあり。此双

紙大に行はれてより、年々作ありて高名になりぬ。」と見えたり。しかも其内容の如何なるものなるかは、背て議題に上りたることなし。京山も此本類焼の時失せぬとある。蓋し傳本極めて稀ならん。

二七　浦島太郎　龍宮羶鉢木　三　重政畫　寛政五年
　　右　京傳署名
同　鼠子婚禮塵劫記　三　豐國畫　同
同　荒山水天狗鼻祖　三　同
同　浮世街道　御茶漬十二因縁　三　春英畫　同
同　自花團子食氣物語　三　同
　　右　序に京傳閣とあり。卷尾に京傳校とあり
同　銘正夢楊柳一腰　三　政美畫　同
同　増補　登坂寶山道　三　同　畫　同
　　右二本、馬琴序倪偏子作とあれど、馬琴の作也寶山道は、楊柳一腰の後篇にして、一名を増補伊賀越物語と謂ふ。

二八　福壽海無量品玉　三　春朗畫　寛政六年
二九　昔怪談諷教訓　心學晦荘子　三　重政畫　同　七年
同　作讀本草双紙　在衞受身成金言　三　同　畫　同
　　右青本年表のみに見えたり。此本「衞受有身成金言」として文化二年再板せりと。小説年表列傳体は、文化二年に新作の如く記載せり。
三〇　堪忍五両金言語　三　同　八年
同　報讐顯狂尾（チソノタハレチ）　三　重政畫　同
同　曲亭増補萬八傳　二　同　畫　同
同　四遍摺心學草紙　三　政美畫　同
同　小需雨（ショボく）見越松株　三　重政畫　同
同　墨田川柳禿筆　二　同　畫　同
　　列傳体小説史に享和二年版とす。「青本年表」、「小説年表」共に寛政八年とす。
三一　無筆節用似字盡　三　重政畫　同　九年

三一　安倍晴兵衛一代八卦　三　重政畫　寛政九年
同　押繪烏痴漢高名　二　同畫　同
同　加古川本藏綱目　二　同畫　同
同　楠正成軍慮智の輪　二　同畫　同
同　大黑橿黄金柱礎　二　同畫　同
同　龍ノ宮苦界玉手箱　三　同畫　同
同　庭莊子珍物茶話　二　同畫　同
同　北國巡禮唄方便　三　同畫　同
同　武者合天狗俳諧　二　同畫　同
同　彥山權現誓助劒　五　同
但し此本、傀儡子の署名。
同　寒山狐修怨　二　同
右、傀儡子の署名さして「作者部類」に載せたり。列傳体にも載せたり。「青本」等に記載なし何に出るか。

三二　大雜書拔萃縁組　三　重政畫　寛政十年
同　御慰忠臣藏之攷　二　同畫　同
同　似字畫後編　㐂想案文當字揃　三　同畫　同
同　鼻下長生藥　三　同畫　同
同　時代世話足利染　三　同畫　同
同　足利染拾遺雛形　二　同畫　同
同　增補猿盤合戰　二　同畫　同
右三本、傀儡子の署名。
三三　六代目市川三升追善禪定　東華皐月落際　二　豐國畫　同十一年
同　風見草緣女節用　三　重政畫　同
同　鯨魚尺品革羽織　三　同畫　同
同　彼岸櫻勝花談義　三　同畫　同
同　料理茶話即席話　三　同
同　無茶齋押兵　三　同

三三　世諺口紺屋雛形　三　子興畫　寛政十二年
三四　胴人形肢体機關　三　重政畫　同十二年
同　譬諭義理與襌褌　三　同畫　同
同　人間萬事塞翁馬　三　同畫　同
同　錢鑒貨寫繪　三　同畫　同
右、列傳体には、「錢鑑金貨字畫」とあり。
同　備前播盃一代記　三　同畫　同
列傳体は、摺鉢とあり。
同　覗藥霞報條　三　同畫　同
同　花見話虱盛衰記　三　豊國畫　同
三五　買飴紙鳶野弄話　二　重政畫　享和元年
同　足手書草紙畫賦　三　同畫　同
右、青本年表には、和樽作とあり。
同　敵討蚤取眼　三　同畫　同
同　曲亭一風京傳張　三　同畫　同

同　敎訓跡之祭戲草　三　重政畫　享和元年
同　浪速秤無女芬輪　二　子興畫　同
大正十一、十月の大阪鹿田の目錄に、「浪速喘筆の天秤」馬琴作といふあり。右の改題か。
同　春之駒象棊行路　三　重政畫　同
同　父讐宇都宮物語　三　豊國畫　同
同　宇津宮盟の卷五段淨瑠璃酒肆　二　同畫　同
同　繪本報讐錄　三　同畫　同
前二本傀儡子、此本玉亭子署名。
同　山東一風煙管簿（ヒナカタ）　三　同
列傳体に記載。疑はしけれど。
三六　養（カヒ）得筎名鳥圖會　三　重政畫　享和二年
同　初老了簡年代記　三　子興畫　同
同　衣食住三ヶ國世帶太平記　三　豊國畫　同
同　筆耕作稿裁着種蒔三世相　三　重政畫　同

三六　野夫鶯兒歌曲訛　三　子興畫　享和二年

同　六冊懸(カヽリ)徳用草紙　三　重政畫　同

此本、賣切申候切落話三と五大力三話訓讀の二作を、一紙を上下二段に分ちて記述せるもの。故に六冊懸の名あり。

同　畫本歴世傑　五　春亭畫　同

馬琴序。青本年表は、馬琴の作とせり。姑らく之に據りて此に掲ぐ。小説年表に、「此本後に、鐫草筆一本三册と改題す」と。

同　太平記忠臣講釋　三　豊國畫　同

同　同　後座之卷　三　同　畫　同

右二本、署名魁雷子。

三七　陰(カゲ)陽(ヒナタ)珍紋圖彙　三　豊廣畫　享和三年

同　花路の水浪花風爐 臍沸西遊記　三　秀麿畫　同

同　信濃賓客淺草主人 俟待開帳咄　三　豊廣畫　同

同　開帳地口提灯　三　重政畫　同

右、列傳体に擬せり。

三八　小夜中山宵啼碑　三　豊廣畫　文化元年

同　新研(シンパンカハリマシタ)十六武藏坊　三　重政畫　同

同　御伽怪談 五人拍部言　三　同　畫　同

同　敵討二人長兵衛　三　同　畫　同

同　松株木三階奇談　三　同　畫　同

○此年敵討の作多く、新刻の三分の二は然りにして其餘僅に戯作ありといふ。京傳馬琴敵討作の最初なりといふ。

三九　妙黄奈粉毀道成寺　三　長喜畫　文化二年

青本には、妙黄奈粉泉道明寺とあり。

同　二代順禮再度仇討 奉打(ウチタテマツル)札所誓　三　月麿畫　同

同　猫奴牝忠義合奏　三　豊國畫　同

四〇　敵討雜居寐物語　前後六　文化三年

同　武者修行木齋傳　前後六　豊廣畫　同

列傳体は、文化二年とせり。此本、青本年表になし。

四〇　敵討鼎の壯夫　前三 後二　重政畫　文化三年

同　大師河原撫子話　六　同　畫　同

同　復讐阿姑射松　六　同

右魁蕾子の署名。列傳体は、文化二年とせり。
此本、青本年表に記載なし。

四一　復仇夘之洞　六　春亭畫　文化四年

一名賣菜郎談

以上約九十三種

四一　大老門化粧若水　袋入 十丁　國貞畫　文化四年

右、紅白粉店萬屋の春の景物也。

四二　敵討身代名號　六　北齋畫　文化五年

四三　句全伽羅之柴舟　三　國貞畫　文化六年

右、上野山下萬丸油元結開店の景物也。

以上之內、合卷時代に移れる文化四年以後の分は、小說年表一本に據りて、今これを拔く。

——馬琴作、黄表紙年表。完——

私は、何の爲に、馬琴の黄表紙年表をうるさく拵へたのであらうか。はじめ、日本小說年表と、列傳体小說史と青本年表と三本を校合して馬琴の初期寛政期の黄表紙を調べて見てゐたのが、たうとうどうせ序でに、彼の全部の黄表紙年表を拵へてやれ、丁度嘗て黄表紙のみの彼の年表は何れにも無いからと、大分難儀し乍らも、右、やつと作りあげた。先づ大部分信用の出

來るものと見ていゝと思ふ。さて馬琴の黄表紙の中、從來活字本として飜刻されたものの中、我々の眼に親しいのは左の數種である。

○盡用而二分狂言（寛政三年）　○人間萬事塞翁馬（寛政十二年）　○敵討蚤取眼（享和元年）（續帝國文庫「黄表紙百種」）

勿論、馬琴は讀本作家として名を成し、恐らく彼自身と雖も晩年には、此等の黄表紙の作しかもそれが九十種に餘ることをこそばゆく感じたに違ひない。晩年こそ、彼は、善玉惡玉の本家勸善懲惡の元締の如き觀あるが、しかし彼の少壯期の此色々の黄表紙は、しか程の道學臭味のあるものではなかつた。但しこれは、彼の黄表紙の作全部を並べたてゝ、一々それを現物に據つて謂ふべきであるが、然し今の私の用意としては不可能なこと。但し、恐らく此の斷言は謬なきに近からうと思ふ。

最近、私が偶然購入し得た、それも敷島二個の代で購つた彼の初期の黄表紙が一部ある。馬琴の黄表紙を多く飜刻に於て見ざる私としては、極めて珍らしかつた。殊にそれが偶然、その當時評判の作であつたといふに於て、いやいや、それよりも彼の此の作など、全然さまでの道學臭なくして、當時の流俗黄表紙作家の亞流といふ譏はあるにしても、開けた、人間味のある（道學臭と反對の意味で）、遊戲氣分の多いものであるといふに於てである。馬琴を純道義作家と

することは、世間の多數の定評であるが、私は信じ得ない。事實、他の彼が卑賤に見做した中本作家に劣らざる挑發的の描寫を隨處に彼の作に於て發見する我々は、矢張り彼も一個の凡情的作家。比較的高げに、深げに、且つ敎化的に見えるのは、彼の糊塗且つ宣傳の巧かつたことと、彼の學問の効であり、その腹は矢張り人並の、當時の戯作者並びに浮世繪師に共通の、あぶないことを描いて、我も人もニタリ笑ふ、實行と藝術と一致の、好色主義が影を强めてゐたと思ふ。それが少壯期の黃表紙などには、後世の敎へん哉の態度がなく、寧ろ人と笑はんかなの氣分で、彼もふざけて、その代り後の讀本を書く時の苦蟲潰した顏（見掛けだほしではあつたが）とは反對に、眉を伸した、然し流石にデレ助ではなかつた、多少後年の先生振りの卵があつたさうした顏を聯想させる、悠長な愛嬌の多いものである。寧ろ彼の純な處がより多くそこに現れてゐると思へる物である。藝術家でもない、また一世匡救の志士でも何でもない。その代り、「矢張りいゝねえ」と來さうな、若い血の勢よく廻つた、快活な彼を見られるやうな氣がする。年も三十一の盛りである。（然し「吾佛の記」の自筆には、此の時、旣に、彼は遊蕩より脫したとあるが。即ち「二十五の時より志を改めて行狀を愼しみつ」とあるが、然しそこに、まだホヤ〳〵の作家時代から、すでに馬琴門人と自分の名をえらい地位に出して傀儡子などといふ變名で發表する所から思ふと、相當に矜持する所はあつたらしい。この矜持が、晩年に

は一流の道學と結び付いて、あの讀本となり了したのではあるまいか。

案外、序言が長くなつた。それ程私の興味を感じたといふ、その敷島二個代の黄表紙とは何か。寛政九年板の「無事節用似字盡」三である。彼一個の黄表紙年表からいふと、「二分狂言」以後、二十一種目、三十一歳の時の作。黄表紙史の上では春町の「金々先生榮華夢」の安永四年から數へて、此の「似字盡」、二十三年目の作。黄表紙史としてはその頽廢期の作たることは謂ふ迄もない。黄表紙が敵討物に變化したのは文化である。（その以前にも敵討物がないでもない。現に此の寛政九年にも楚滿人の敵討姥捨山などの黄表紙があり、馬琴にも是より先享和元年に敵討蚤取眼のやうに、敵討に借りた物がある通り。しかし大勢を純敵討に化したのは、文化であらう。）然れば、寛政九から文化元までは僅かに七年あるのみである。寛政九年當時の黄表紙作家は、京傳、楚滿人、慈悲成、樹下石上等の時代の作家と共に、新進作家たる三馬、一九、彼、が名を現してゐる。然るに三馬も一九も未だ彼程のものはなく、先輩の京傳、慈悲成の徒の作、また後代に謂ふべき程の話題を殘さなかつたのに、獨り彼の作のみが、即ちこの「似字盡」が世評に上り、彼の豫期以上の效果を虚榮心の強い彼に與へたのは、是れ文學者として彼は頗る幸運兒であつたと謂つてよからう。然し、彼としても、此の作には、相當の努力があつたことかも知れぬ。果して世評を贏ち得た。恐らく後の三馬作の「小野𥬆譃字盡」（享和三年）の類は、此の「似字盡」の影響の下に生れたものであらう。とに角、

此の「似字盡」のふざけた趣向は、墮落した機智に沈湎享樂して、我人以て得意にした、當時の人心にいたく迎合したのであつたらう。然らば、「似字盡」はどんな内容の物か、以下その叙述に移る。

結繩で約をなす。大古の不自由。竹薄で紙に換る。三代の不物好。科斗萬葉のむかし〳〵。倉頡鳥迹を見て。遂に字を作り。空海涅槃偈を取て文をなせり。周興嗣が千字文、野相公の歌字盡、大篆小篆假名まじり。唐と日本を乘合す。二一新作早急の。一から二まで擯着は。勸定合て智慧たらぬ。眞行草紙の符牒附。ムヒツセツヨウと目ること書のごとし

寛政九年歳次丁巳春正月　曲亭馬琴撰印

これだけが序で扉の文字。さて次のヒラキ二面は、右、參議小野篁の肖像。左、卷物形になつて、その外題に無筆節用書法傳授之卷とあり、卷物の面には、江戸の無筆と京の無筆との、糠を少し包んで、ちつと來ぬか、梯子に杖一本畫いて、月末にのぼらうと判じさせた、無筆節用書法の功德を述べてゐる。上は、ヒラキ二面共に、右より續けて篁卿の略歷を、「堯惠抄にいはく」云々と、かゝる物にふさはしき輕口口調で述べ、終りに無筆節用似字の卿の發明にいひ

及んで、假字の效用廣きを稱へてゐる。

次の二面からは、右の隅に一廓、假字をそれ／＼現はし、殘りの一面半は、その假字に連絡した畫面と、人物の會話、上欄の地の文、凡て黃表紙の体裁を追うてゐる。然し普通の黃表紙が、一篇一貫したある說話をなせるに反し、これはその面の假字によつた、それ／＼特殊の場面と敍述であつて、全篇一貫の說話でもなければ、即ち全然小說的形式を保つてゐないものである。寧ろ江戸末期によく見うける幼童向の文字學びの繪本の如き觀があるのである。

第一は、樣さかしくと、文と候との假字で、字の左りぶちに「さまはさる、梅のつぼみはかしくなり。文はかんざし、そろ烏のあし」とある。繪は、小娃吉三とお七。左りに吉三、坐つて梅の花を活け、右にお七、立つて文を手にしてゐる。お七の言葉に、「八百や萬のかみかけてばんに靑なといはしやんしてもおやのめにつくとうのいも中をわりなに」云々と、商賣物の靑物づくし。吉三の方は「コレ／＼そんな靑ものづくしのちぐちをいはずと何も小娃とおぼしめしかわいがつてやつてくださんせ」とある。上は「十三のはつ午に戀といふ字の手習はすいたすゞりと思ひつゝ云々。世の人のこれを手ほんにつゝしみによし」と、手習づくしの地口である。道義の芽生えはあつたが、矢張り人並に戯れてゐる。

以下は、文を省いて、右角の文字と、その歌と、及び書様とを説明してみよう。

第二、只、苗、月、申、田口。「只まないたなえは手むけに月ほうてう申がびしやく田口あんどう。」（右は、櫂を持つた女、擂鉢にあたる男。左は鉢を拭く女房、俎板に鯛を料れる亭主。）

第三、人町、囚、丁、叶。「人まちがたそやあんどうとらふ交丁はかなぼう叶てうちん」（右は仲之町大木偏が見え、提灯を手に持つた金棒挽の男と新造。左は花魁と禿。その左に誰哉行燈。この畫面頗る重政（北尾）としては上乘。さて以上のこれだけにも既に背づけたやうに、即ち畫面中大抵、人物の持物又は背景の何れかに、假字の材料の凡てが含まれてゐることである。それが大抵、自然に運ばれてゐる。以下同じ。）

第四、丁内、十、中、一。「てうないがすきに十のじつるのはし中はさいづちいちはかなてこ。」（この面、假字書上中下の中、上の終り故、半面のみ。假字の左、すぐにそれ丈で纏つた繪。徳利を手にするのと、振上げて地を擱れるとの二人の男。）以上上の終り。

第五、長、品、田、日。目。「長はつる品は三ついし田はくつわ日はふたつ引めのじ三つ引。」（此の面、半面のみ。繪は、刺繍をしてゐる眼鏡の男と、その師匠らしい、向つてそれを見る煙管を啣へた男。）

第六、卞、山、口、山下。「へんはやり山はやつこのうしろむき口はもつそう山下たけみつ。」

此の二面は、掲載した寫眞版の如くである。畫面は謂はなくとも知れよう。夜鷹の圖としてまた好個の一典型。文字は、特にその全文を左に掲げよう。以て寫眞版不明の箇處を

「無筆節用似字尽」中の図　北尾政美画

正十二年六月二十七日印刷納本
正十二年七月一日發行
第十冊（毎月一回一日刊行）

本文

馬琴初期の黄表紙（完）
評釋 藤蔓戀のしがらみ（2）
附 長唄めりやす考
渉獵漫筆（五）

尾崎久彌著

第十册

○間びくの特例

嬰兒棄殺又は墮胎の意味で、「間びく」なる語を生んでゐることは、本著「近世墮胎史雜考」（本著一二一—一二六）に悉しく述べたが、最近、これと一縷の交渉はあるが、とにかく異例の用語法を發見した。それは、元祿七板行の好色落語本「正直咄大鑑黑之卷」（近世文藝叢書第六所收）の第二、番太郎が出來口の條下に、女房の詞に、

「さりとてはこなたのやうな○○はあるまい、ときどきはまびかしやれ、命がつゞきませぬといふ。助兵衞されどもかんにんなりがたしというて……」

である。これで見ると、荒姪の亭主に對して、房事制限の意に使用してゐることである。若し多產能率の女房なれば、制限されたら、自然產兒制限にもなるから、墮胎の意の間曳くとも、一味通ずるやうにならう。（さて此の咄は、亭主の名が助兵衞ゆゑ、助平（荒姪者）の起原の一として、嘗て「日本及日本人」誌上に、南方氏が紹介されたこともある）。

○新内材料の艶本

此頃、某處で、新内に材料を採つた讀和本を見た。中本、表紙一切の感じ人情本の通りで、外題は「滿倉表紙」天地人の三冊「一名しん内四季の戀」と傍外題があつた。編者は開亭好人編次とあるが、恐らく初代春水であらう。畫家は一と目で分る溪齋英泉。畫は、天の冊に、口繪として極彩色のヒラキ二面の圖が春夏秋冬計四圖ある。お定りの繪で、その左り上に圍みをとつて、春は、「浮名初紋日」の正本仕立の表紙と中の文句。夏は、「藤枝戀の柵」の同上。秋は「二重衣戀占」の同上。冬は「明烏夢泡雪」の同上である。春は、初紋日の主人公の菊の井と小七が、御殿の女中と若小姓の樣子。夏と秋だけは、ほんの景氣づけで、筋書に關係はない。夏は、菊の井が、ある老商の妾となつてゐて、折から酒屋の小僧が晝寢の夢を驚かしに來てゐる處。秋は、貸本屋となつて昔の小七が菊の井の妾宅へ來てゐる處。冬は始めて「明烏」の世界を本當に借用して、菊の井が浦里となつて廓に棲み、小七が時次郎と改名してゐて、畫面はみどり諸共松が枝をの處。小說の筋も、菊の井小七がめぐりめぐつて浦里時次郎となるので、さうして心中未遂、時次郎が歸參が叶ふに終つてゐる。序に亥のはつ春とあるから、文政十年の板行だ。それは、英泉を若書だと見ての推定だ。丁度、その頃は、公刊の人情本界でも、新内材料のものが、頻出した。文政四年（明烏發端。後正夢）同六年（尾上伊太八契情意味張月）○同七年（蘭蝶記。菊廼井草紙。藤枝戀情の柵）といつた調子で、作者は春水、鼻山人の類だ。それはいゝが、丁度此の拙著にも評釋物として關係のある藤蔓が、この人情本外題でも藤枝であり、またこの讀和でも同じく藤枝であることである。なぜこれ丈藤蔓と原名のまゝでなかつたのか。——とにかく新内に題材を藉り、その上、春水英泉と二大家の好手を得ての物ゆゑ、小生も若干の興味を感じた。依つてこゝに紹介しておく。

對照されたい。

やつこさけなのめば心つよくなりてちからがつよくなる奴はよくつとめ心つよくなる奴はけんくばをする奴さいふ文字に心をそへれば怒(いかる)とよみちからをそへれば努(つとめ)と又奴といふ字を二ッにわくれば女又とかく女ゆへにまたによこれのやまひありもじなそさいふものもあらそはれぬものなり

「コレ／＼御むかひにゆきなるがおそくなるはい

「コレサあそびれへ口あけだはな

「見事／＼ちやうちんのものをせうさいふところだ

第七、右、邊(ほとり)、込(こむ)、双(ならぶ)、いしの字がせんどうほとりほかけにこむはまんぢうならぶほばしら。（これも同じく私娼、舟饅頭の繪である。文にも「西施が媚あつてぜいしが顏色なく陶朱が富貴なき閩越の潑娘(ばけもの)つれに江湖にさほさす舟まんぢうは……まみへよりはなはちりぬる御用心／＼」とあり。繪は、右、船頭と船の苫、左、船首に立つた饅頭の君。その上、飛べる河蟬の詳。言葉にも「さなたの與市のあふぎのまとじやアれへがこんやも大かりまたでゐられるのだしみ／＼つらひのう」と來た。尚、似字の歌の「こむはまんぢう」は一寸解し難からうが、何でもない。込の入が、船の苫。辶は、舟のさきに立つたまんぢう君の形である。こゝに於て、奇智賞すべしか。序でながら、初代豊國の「繪本時世粧(いまやうすがた)」の坤の卷の最尾の繪に、丁度この「似字盡」の舟饅頭と同一構圖の繪がある。但し此の「似字盡」の重政畫はお福の饅頭であるが、豊國の繪本は、恐らく饅頭の同類であらうが、懸絶した美女となつてゐる。）

第八、合、寶、亭、此。「あふ番やたからといふ字はんじやうなり亭はひのみ此がひのぱん」（繪は、二面にひらいた江府大通りの俯瞰圖。左、雲の中に、屋根越しに火の見。下は、人馬、車、侍の登城姿。）

第九、雨、久、圍、而。「雨なること久はいなむらかこいかごしかふしてこそくまでなりけり。」（繪は、籠を背にした里の童の手を差出せる三人と、左、扇を何本も手にして子供らに差出せる山伏。當時安全祈禱の意で、かゝる山伏の流行せしなるべし。但し特に扇といへるは、この扇を各戸に輿へ歩きしか。現に、文の終りにも、「神道者の災禍消除しゆげんじやの安全祈所、ぜんしうの立春大吉これらが文字のかどしなり。こうもあらうか、辨けいがそこらあたかの門杉に扇なけこむけさのさしたま」とある。言葉に、「アレまかしよがきた」、「まかしよ／＼／＼」「あにイヤ十六むさしぼうさしてあそばう。」「コゥあふぎをとられてはいたしぼうべんけいだ」とある。「まかしよ」とは、かゝる山伏の名か。それとも山伏――武さし坊――十六むさし坊の地口から來た、負かしよ／＼か。それとも山伏をまかしよと特に謂うたか。此戯作だけのことか。未考。）

第十、へ、ム、ヨ、レ、ヿ。「へはまみへムの字はなよヨの字耳レはつくりひげヿひたいなり。」（此の繪半面。肌ぬぎの男の右腕に、くりからの顔を彫つてゐる彫師。）以上、中終り。

第十一、壺、呂、皿、舍、回。「つぼはつほ呂の字はかめにさらはさらやざるはちろりかへるひちりん。」（半面の繪。酒屋の店先。腰掛の二人客、酒屋の亭主。）

第十二、乙、年、云、廿日、志。「おとはとしはつりさほいふはうきはつかおもちこ

ゝろさす笠。」（右、釣をせる太公望と左、周の文王。）

第十三、百、思、時、入、國。「百はりんおもふはもくぎよときはかね入はしゆもくにくにはじやうかう。」（右、布縫へる嫁。左、佛壇に向ひ、撞木を鳴らしつゝある姑。）

第十四、門、東、廿、京。「門ひやうし木東といふ字かなあんどうはたちは木戸に京は高札。」（右、夜廻の爺と犬。垣根の前に高札。左、垣根内、縁側に娘と子供。と庭の一部。）

第十五、怒、南、雨、乃。「ぬはねづみみなみはかめにあめうさぎつえつきのゝじあしのないたか。」（風鳥と簑がめを見てゐる母、子供、往來のもの。）以上、下の終り。

以上の本文十五丁以て上中下完結である。此作が、人氣の高かつたことは、翌年、京の西陣の織屋が、此の「似字盡」中の似字を金襴純子の中に織出して諸國に賣出したといふにも分らう。（この事、本記述冒頭の「作者部類」の文中にも見えたり。）殊に青本年表に據ると、天保十年本書を再板したといふ。これに當つたため、馬琴は、翌年（寛政十年）後編「鹿想案文當字盡」を出版した。馬琴の筆と稱する、京傳の生活、家庭性行等に比較的好材料多き、且つ寛政享和文化頃の文學史の好材證に富める「伊波傳毛乃記」の中にも、

是より（寛政三年）三四年、草册子の趣多く教訓を旨とせしかば、世人は其意を得ずして、京

傳は趣向の盡きたるにや、近日出る草冊子はをかしからずといひけり、依之馬琴が作や、行れたり。この比より萬寶、慈悲成等が作は、ます〳〵行れず、一九、三馬の兩作者出でたれども、なほさせる評判なかりき。一九は寛政九年の冬より名を出し、三馬が作は又一兩年後れて出たり。云々。

とあるが、自分は、今此等の彼の自畫自賛を其儘受入れようとはしない。唯彼が壯くして既に大家の風格を衒ふに急がしく、また時好を捉ふるに巧、且つ彼は讀本作家たるに終始したるが如く見ゆるもその實半面に過ぎず、その讀本の中にも、精神的遊戯好色は隨處に見られ、且つその初期作には、斯くの如き低級なる作を以て、しかも時流に投じ、得意になつて後編を著し、又之を再版した。殊に再版をなしたるは、彼が鬱然たる讀本大家となり了した時である(似字盡の再板は天保十年。天保十年は、彼の七十三歳、八犬傳大尾の二年前、卒前九年である。)即ち約言すると彼に一は、此の「似字盡」に餘程の自信があり、且つ得意さがあつた。恐らく初期の出世作として懷しみもあつた。一は、彼のやうな讀本作家の大家にも、この夜鷹や弁饅頭や靑物づくしのお七やを耻ぢぬ程の時好本位の彼があつた。唯是丈のことをこの「似字盡」から信じれば十分なのである。彼は聰明であつた。春水等の如く淫猥を露骨に現さなかつた。從つて上司にもよく、しかも下民にもよくて、亭々たる道義の

主張、流麗なる文調、該博を誇る引證の中にも、船蟲（八犬傳中の娃婦）賣婬のあの醜怪なる描寫を平然とやり了せた大膽、道義の皮を被た肉慾描寫を完了し得たのである。此の「似字蟲」は然程の彼のケレン澤山を云々すべきではないが、彼の後年抹殺に奔走した（初期の低級作、又は京傳門人の名ある板本を押收して歩いた。）自負倨傲、よくいへば自重の精神からもなほ抹殺しなかつた、否平然晩年再版を許した、爾く自信のあり、且つ彼自身讀本主義の彼として尙之に牴觸しないと思つた戲作であることに想到すると、私は此の現物を目にし、それに晩年のあの堂々たる、白面以て人を威赫する讀本と、彼の鹿つめらしい顏との對照に、可笑しくなるのである。

とに角此の「似字蟲」は、黃表紙が轉化して、敵討物にならんとした過渡期、黃表紙正脈の最後の流行作であつた。（黃表紙は敵討本位となり、やがて例へば種彥らの合卷となつた。）殊に讀本の大家、道義の主張を以て終始せる如く謂はれた剛直無比、硬派の如く見られる（然ることを欲した）彼の、比較的、吾人からいふ嫌味の脫けたうぶな人間的な彼の現れてゐるものとして、且つ黃表紙としては珍らしき（自分の淺識からはである）一貫した說話を成さゞる異例として擧げたのである。（彼の遊戲的好色的の氣分本位からいふと、後の「敵討蚤取眼」などは、まだひどいものである。蚤にさゝれて、裸になる女房の話など。）以上本記文の長々しきあつた由來である。

評釋 藤蔓戀のしがらみ　2

サア〳〵かご(駕籠)のしゆ(衆)だんな(丹那)がおつしやる(仰有)さけ(酒)一ツコレハありがたう御ざ(座)りますコレぼうぐみ(棒組)よさかずき(盃)ではめんごう(面倒)な。いつそちか(近)づきのこれがよいごぐつご茶わん(碗)でひつかけるさけ(酒)の。きげん(機嫌)に山ぶき(吹)のはな(花)のひかり(光)に氣もいさみ(勇)御亭様(ごていさま)おせは(世話)になりましただんなさま(丹那様)へもよろしくごひよろ〳〵あし(足)でかへり(歸)ける

○サア〳〵かごのしゆ云々。此の詞は、茶屋の主の佐次兵衛の詞と見るべし。**○コレハありがたう云々**。これ駕籠舁の言也。而してさかずきとちかづきと語呂を合はせたる點、作者の機轉也。**○山ぶきのはなのひかり**。駕籠賃なり。當時、吉原通ひの駕籠賃は如何(いかん)なりしや。山ぶきのはなのひかり云々は、うつかり取れば、小判を貰つての喜びのやう見ゆれども、金(かね)

に詰りたる喜の助が、如何に見えを張るが遊里の常なりとはいへ、殊に散茶以下の客として僅かの駕賃に小判一枚を投ずべしとは思はれず。當時、山吹色の金(かね)は、小判の他に小額の金(かね)もありたる譯也。しかれども駕籠賃に的確なる文獻なければ、(其後、捜索すること多時、未だ駕籠賃の記載見當らず。)何ともいひ難し。然るに偶然、「川柳吉原志」に當時駕籠賃に關したる句二三あり。これによりて、此の「山吹の花のひかり」が一分金を斥(さ)せりしこと的確とはなれり。今左にその見當りたる句の二三を拔かん。

その一八五頁に、

(明和) 駕賃をかじかんだ手で一分とり

(文化) 雪の駕両に四挺と相場立ち

明和の句も雪にして、文化も雪なり。雪ゆゑ一分と相場が立ちたりしならん。雪ならざる普通は、その半額二朱(四朱か一分)なりしならんか。その傍證は稍時代を後にしをれども、以前にも引ける(本著第二十二頁)「皇都午睡」三編、中に、「四文錢何本とか、南鐐とか拵早く……」とあるによりて也。即ち南鐐は、人も知る銀錢、明和九年九月に鑄たるもの。而して南鐐あたりが普通の駕籠相場と見るを得べし。(南鐐は、二朱に通用す)よりて南鐐の額二朱が普通

相場にて、それが雪には倍額の一分に値上げされしものと見るを妥當なりとせんか。即ちこの薄の助も、やはり一分をはづみたるものと見るを得べきか。（雪の日ならざれど、若いが損にて、多少の見えを張りしものと見るべし。）

歌カトリ〽まがき〳〵（籬）でひく（彈）三味に　歌〽たれ（誰）に見せうとてべに（紅）かねつけ（鉄漿付）うぞみんな（皆）おまへ（前）ゑしんぢうだて（心中立）おううれし〳〵（嬉）

○愈々早衣喜之助交會の場面の展開也。先づそれに及ぶ雰圍氣を描き出さん作者の用意と見るべし。○まがき。遊女の控へをれる店と入口路次との間に落間あり。その落間（おちま）と路次との間の格子戸。下等なる妓樓にては、落間なく、見世と入口庭とを直ちに堺するもの、是れ籬也。後にはこの籬の構造と間口とに依つて、妓樓の階級は自ら區分されたり。即ちこれ安永以後十七年、寛政期よりの事にして、（それより以前は、太夫格子見世、散茶見世、梅茶見世、切見世の四等ありき太夫亡び、從つて太夫格子見世も亡び、以後は、散茶より「大籬」「半籬」の二種を生み、梅茶は、町並となりたり。）その區分、慶應の末まで繼續されたりといふ。曰く大籬（間口十三間、奥行二十二間、格子は幅七寸の赤塗。籬の高さは天井に達す。總籬ともいふ）。半籬（間口十間以下、籬は名の如く大籬の二分の一或は四分の三。交りともいふ。）町並（間口同上。籬は二尺程。

大町小見世ともいふ。）小格子（籬を附けず、竹を横になし、格子の幅も三寸を限りとせり。河岸見世ともいふ。）長屋（小格子より倘下れるもの。切見世、局見世ともいふ。）の五種にして、凡て籬の有無及びその大小によりて店の格式を差別したる也。故にこの籬に大或は半を冠して、以てその名稱とせり。（但し是事、此の藤蔓當時より後の事たるは、無論也。此の正本の年代は、明和遲くとも安永三年（新内の没年）以前たる事確實なれば、從つて此の正本文の「まがき」も亦、寛政期以前の、單に籬の義と解すべきこと勿論也。爲念。）〇彈く三味。この三味は、所謂淸搔の類ならんか。守貞漫稿二十、娼家下に、

「吉原町見世女郎とも黄昏に至り夜見世を張る時、内藝者ある家にては、内藝者の役とし、無之家には新造の役として、三絃を見世の敷居際にて繁絃するを今世の「すがゝき」と云。故に夜見世をしらす昔垣など云ひて彈之を合圖に見世女郎とも上妓より次第に出來り、見世に列座する也。正面を上妓とし、左右を下妓新造の坐とす。此時内證と云ひて主人の棲む席の隔に簾を下し鈴を鳴す也。簾を下して障子を閉ゝ也。其次すがゝき。」

倘云。「（前略）新吉原へ移りし比も專ら唄ひて合の手にすがゝきを彈きしが、後には小歌唄ふことは止みて、すがゝきのみ殘りし由也。云々。今も吉原も昔垣は毎家大同小異ありと雖も皆繁絃にて唄はなく、同じ事をくりかへし彈也。此行他無之也。」

右に據れば、此の新内の本文「籬々でひく三味」は、三味に合せて、「たれに見せうとて」の

唄を歌へるやう見ゆれば、即ち唄あり、故に純然たる淸搔にあらざるやうなれども、しかも予は是を淸搔なりと見る也。何となれば、守貞生存當時は、文政天保期。此の新內の本文を遲くとも安永初年と見るも尙五十年の歲月あり。殊に元吉原時代は、小唄に淸搔を合の手としたる文献もあれば、此の新內本文は、此の風習が當時なほあり、即ち是を小唄まじりの淸搔と予は見る也。しかいふは、予の誤りにや、如何。而して、雛々でとあるは、此の「たれに見せうとて」の唄が、當時遊里にて大いに流行せしものなるが故にと見て可ならんか。**〇たれに見せうとて云々。**此の唄の句は、本、長唄「京鹿子娘道成寺」にあり。娘道成寺には、

「（前略）かはゆらしさの花娘、戀の手習つひ見習らひて、誰に見せよとて紅鐵漿つきよぞ。みんなぬしへのしんぢう立て。おゝうれし〳〵。（下略）。」

即ち「娘道成寺」にては、「ぬしへの」とあり。藤蔓の本文は、「おまへへ」とあり。（因みに、この「娘道成寺」は、寶曆三年三月、中村座興行、白拍子中村富十郎役也。長唄は、初代吉住小三郞其他にして、しかも吉住小三郞は、此の「娘道成寺」にて一層の名聲を博したりといひ、殊に彼が同年七月十六日に享年五十五にて歿したるに見れば、則ち此の「娘道成寺」は、彼が一世一代なりしならん。したがつて、寶曆を經て明和安永の此の新內正本時代にも、尙、娘道成寺の中の「誰に見せうとて」が喧傳せられ、獨立して小唄として遊里にも傳唱せられしならん乎。因みに娘道成寺は、吉住の秀技にもよりしならんが、格別の好評にて、三月より六月中旬まで興行せりといふ。而してその翌月飄然として彼は逝きし也。）

〇しんぢうだて。心中立也。わが心中を現はす也。證據として見するもの也。この心中も亦

現に心中（情死）などに轉化せる本の、互ひの心中——眞心の意也。

（メリヤス）花〵さそう（誘ふ）てふ（蝶）はかすみ（霞）の野べをまつ（待）合日かげの木〳〵ははな（花）をまつ（待）合人はなさけ（情）の夜すがらの二ツまくら（枕）のはな（花）をまつ（待）ほんにつとめ（勤）はまゝ（儘）ならぬ。

□めりやす考

○メリヤス。こゝにこの唄、「めりやす」とあれば、序でながら、メリヤスに就て一言すべし。

山崎美成の「海錄」に、曰く。

めりやす　歌舞妓事始卷之二廿、云、上略「一部の內、毎事樂屋にして三味線をならす、是をめりやすといふ。甲陽軍鑑にも出たるめりやすきといふ事を下略して是を名付る。」此下略の説信じがたし美成按るに、今端歌をめりやすといふ。その名目何の義たるを詳にせず。右の事始の文によれば、役者の藝をなす毎に、樂屋にて引ける三絃をいへるによりて、その三絃に合せ謳へる小歌故に、めりやすといへるならんかし。又一種、絲もて手掩ふべき物造れるをもメリヤスといへり。一名莫大小と云。そは手の大小によらず、何れへもよき程なればなり。亦何の義といふ事をしらず。或人の説ときけるは、メリヤスといふ唄ひものは、俳優の所作によりて長くも短くも心の

儘に唄ふものなれば、然名づけたる也。手おほ（ほ）ひより負せし名なりといへり。さもあるべき事にぞ思はる。（メリヤスは蘭語なりといへり。尾崎曰く。同じく美成著の「三養雜記」にも之と殆ど同文載りたれり。）

「めりやす」の語原は、矢張り外來語のめりやすより來りしものならん。海錄には、蘭語なりといへりとあれど、故前田太郎氏「外來語の研究」に據れば、スペイン語Mediasなりといふを（辭林說）正しとして、他の蘭語說、葡語說等を否定せるが如し。（外來語の研究二九―一三二）而してそのメリヤスは、手袋の名に非ず一種の布帛の名なりとして、柳亭種彥の足薪翁記、卷之二「めりやすを手袋の名とおもふはわるし、めりやすは手袋を作る布の名也。むかしはめりやすの足袋、めりやすの股引等あり」を引いてこれを證かにせり。（莫大小は、天文年間既に輸入し、享保の頃は、蘭人より手編法を傳授し、幕末は、手袋、靴下、大小刀の柄袋、鍔袋、刀の下緒、印形入、印籠下げ、巾着等にまで需要せられたりと云。日本百科大辭典、齋藤氏說く）

但し前田氏の研究は、端唄のめりやすには、一切言及する所なし。唄の「めりやす」は、本來小唄よりは長く、長唄よりは短かき一種の端唄也。而して此の「めりやす」の考證については、故佐々醒雪氏の「俗曲評釋」中の一篇『小唄と端唄』の中に、最も悉し。今左に、佐々氏の說を要約すれば、

手覆のメリヤスから來た說（第一說）、極めてしんめりとした唄故、「めいりやす」といふ傾城詞から來たといひ、（第

二説)、又音聲の低くなることを「める」といふから、この唄はとかく「めり易きもの」であるといふ意味で「めりやす」といふ(第三説)とも説かれてゐる。近世事物考は第二説により、嬉遊笑覧は第三説を採り聲曲類纂も第三説に傾いてゐるが、……元來この詞の起つた元文寶暦は、かの滑稽洒落の流行時代であるから、莫大小説が最も面白いと思ふ。「めいりやす」や「めり易き」は餘りに迂遠な考と思はれる。ともあれめりやすの本質は、以上の諸説に既に説明せられてゐる。第一、本來劇場に用ゐる三味の彈き方であつたこと。第二、音調の低くなり易い、動もすると滅入る樣な心持のするものであつたこと。第三には、長唄より短いものであるといふ事である。

右の中、第一の劇場に用ゐる三味線の手であつたといふことは、歌舞伎事始に「……」(尾崎曰く、海録所引の文と同じ)とあり、聲曲類纂には、「義太夫節の三味線には、詞の間に彈くものをメリヤスといひ、長唄(江戸長唄のこと)にては相方といへり。」とある。して見れば唯役者の詞の間に靜かに彈くあしらひの三味であつたので、本(もと)は江戸長唄に附屬したものであつたが、後に義太夫の三味線彈がこれを引受けることさへあつて、めりやすといふ名が、義太夫の方にばかり殘つたのである。すれば當初は、唯三味のみであつたが、後にはこれに合せて簡單な唄をも謠ふことが始まつてこれをめりやすといつたのであらう。第二の低い調子云々は、劇場の長唄の樣に調子が高くて他の鳴物を用ゐるものは、普通の宴席には適せない。殊に安永天明の瀟洒な四疊半趣味には、この滅入るやうなものが適して、一時に流行したのだらう。第三の短かいものに就ては、長短不論の説もあるが、元來短かいものを專らとし、間々長いものも謠はぬでもないといふに過ぎぬ。而して元來劇場の三味から起つたものであるから、長いめりやすといふと、大抵江戸長唄の文句を借り用ひる。短かいものは、投節の唄そのまゝの物もあるが、或は長唄の一節を取つたもの

もある。從つて三味の手も長唄に似たものが少くないのである。

めりやすの祖についても、佐々氏に明快なる斷論あり。鳥羽屋三右衛門說(江戸節根元記)松島庄五郎說(長唄系圖及日本演劇史)富士田吉次楓江說(守貞漫稿)を巧みに折衷して、曰く、

その傳系からいふと、皆師弟の關係のある人々で、三右衛門は杵屋第四世六左衛門の門人で、庄五郎は三右衛門の門人。楓江は父庄五郎の門人である。すれば問題は頗る明白で、鳥羽屋がめりやす風なる長唄の一流を創めて、庄五郎に至つてそのめりやすの名漸く世間に聞え、楓江に至つて盛んになつたのであらう。

年代は、享保頃には、まだ現れず、(尾崎曰く、此說、邦樂年表の享保十六年正月、中村座の「無間鐘」をめりやすの嚆矢と稱すといふに衝突せり。聲曲類纂にも松島庄五郎享保中とあり。)元文中に、流行の兆を來し、(尾崎曰く、此說、予が後段に述ぶる鳥羽屋三右衛門の唄めりやす創始を元文四年の豐後節停止後なりとの臆斷に照應するが如し。)寶暦年間には、「女里彌壽寶年藏」なるめりやす本まで上梓され、以後明和安永にかけて黃表紙洒落本の類に、屢々此の名が現れてゐる。天明頃に終つてゐて、其後は、長唄の寄本の末に、僅かに附載せられてゐるのみである。文化三年の「あづまなまり」には、尙めりやすの名ありて、三馬の序にも見え、本文中にも、五大力の如きは殊にめりやすと肩に記してゐる。云々。(以上、佐々氏說)

却說、茲に面白き發見は、鳥羽屋三右衛門も楓江も、共に、新内の祖たる豐後節に關係の淺からぬが如く見ゆること也。

東都にて長唄目利安(めりやす)、初めは鳥羽屋三右衛門也。其後豊後節も弾き始る也。三右衛門事、後に東武専太夫となり。唄(一本歌)は文五郎といへるもの専太夫の三絃の弟子也。東武の弟(イ東都に三絃弟子に)子にあらざるはなし。唄の弟子松島庄五郎、是は能く諷ひしもの也。(江戸節根元記)

……京(?)(享保カ元文カ)文年中東都へ下り、宮古路豊後太夫と名乗る。三絃相方鳥羽屋三右衛門、佐々木市藏、三絃手附は、三右衛門也。(尾崎曰く、佐々木市藏の名は、邦樂年表所引の諸書に豊後掾の三絃としては見當らず。前名幸八といひ、元文三年、宮古路文字太夫(後の常盤津文字太夫)の三絃として名を載せたり。市藏は、延享四年(此年、文字太夫、宮古路を關東に、更に常盤津と改む)關東文字太夫の三絃として改名市藏、以後、明和五年歿まで、常盤津祖の立三味線を勤めたり。鳥羽屋三右衛門は、勿論、豊後掾の三絃として無之。豊後掾の三絃としては、岸澤三五郎と片岡四郎三郎との両名の名を見るのみ。或はこの岸澤三五郎、改名して鳥羽屋三右衛門といひしか、未考。)國太夫節(尾崎曰く、豊後節の別名なり。)の三絃は、甚だせはしく東都に向きかねし故、子供にもよく弾かるゝやうに手を付替へし也。(同書)

此の江戸節根元記の中、豊後掾個人の出自に關する記事は、誤れること、誰しもの知る所なるが、鳥羽屋に關しては、多少の事實を認むべきか、如何。恰もよし、聲曲類纂「宮古路豊後掾」の條中にも、左の記事あり。

豊後掾三味せんの相方は鳥羽屋三右衛門が弟子の佐々木市藏(尾崎曰く、こゝにも、江戸節根元記同樣佐々木の名あり。)三味の手付三右衛門也。國太夫(豊後掾と同人也。)始めは、竹本豊竹の世話上るりを取直して語りし。(聲曲

（類纂卷二）

鳥羽屋を俟、入名辭書によりて見るに、

四代目杵屋六左衞門の門人なり。或は謂ふ天下一平左衞門（尾崎曰く、天下一平左右衞門は、長唄系圖によれば、二代杵屋六左衞門の弟子なりと）の門なりと。……長唄メリヤスは三右衞門始めて之を彈ず。初め文五郞と名づく。傳へ曰ふ豊後節（文五節か）は其の手に出づと。後東武藤太夫と改め、……當時三絃を手にする者一として其門に出でざるはなし。明和四年二月二十七日歿す。年五十六。門下に松島庄五郞あり。云々。（聲曲類纂、名人忌辰錄）

初め文五郞といひしことが果して事實ならば、ぶんご節は、文五節にして、宮古路豊後掾とは全く別物なりやも知れず。（すれば、三右と豊後掾との因緣說は全く後人の混入にして、二者交涉なく聊か失望なき能はず。）然るに、上揭の江戸節根元記は、文五郞を別人なりとして、三右の三絃の弟子なりといふ。何れが是ぞ。若し宮古路豊後掾と交涉あらば、そは豊後掾東下の享保十五年以後の事也。それ以前は、彼は、杵屋の系統として、長唄を彈きをりしならんか。（彼の師四代目杵屋六左衞門は、正德三年四月の歿なり。正德三年は享保十五年を遡ること十八年也。其間彼は如何になしをりしや。恐らく普通の長唄に遊びをりしならん。）即ち彼は元來、江府の產、長唄の三絃を習ひゐしが、恐らく豊後掾東下の享保十五年頃に於ては、三絃家として彼の名聲、全都に偏きものありしな

らん。從つて恐らく豐後掾より辭を卑うして招聘されしものならん。よりて彼は、舞臺には、己が弟子を立たせ、自己は、手付に專ら腐心したりしならん。而して彼が後年の唄めりやす創始には、この間、(享保十五年より元文四年までの)豐後との提携が大に與つて因を爲したるならん。即ち、豐後節も、初めは、「「竹本豐竹の世話上るりを取出して語りし云々」」(聲曲類纂)とあれば、その間、義太夫節に殘れる「めりやす」が自然、彼の藥籠中の物となりしなるべく、以後豐後節の停止が却つて彼に幸ひし、以て終に長唄めりやすの一派を彼が創始せしには非るか。

即ちめりやすは、その創始時代は、劇場の相方として用ゐ、傍ら義太夫節の家にもこれを傳へ、(此頃、既にめりやすと稱す)唯、三味の手に過ぎざりしが、更に鳥羽屋三右衞門に至りて、即ち彼の發明によりて、めりやすは、長唄めりやす時代(端唄も含む)となり、始めて、めりやす流の三味の手に長唄を合せて唄ふ事起れりと見るべき也。(用途は、劇場の床にても、また遊里酒宴の興にも、共に行はれたるものの如し。)

但し鳥羽屋三右衞門が唄めりやす創始の年代は不詳なれども、若し三右衞門が豐後節三絃の手を付けたりといふを事實とせば、恐らく元文四年後の、豐後節停止以後の事ならんか。(それ以前に於て、否、豐後掾東下以前の享保十五年以前に於て、既に、江戸の劇場の相方よりめりやすを長唄に工夫したりしとするも、一論也。然れども、唄めりやすは、享保以後元文頃に端を發し、以後漸く榮えたりと予は見るなり。何と

なれば寶暦七年の「めりやす豊年藏」に對して、享保十五年以前にては、約三十年を有し、餘りに年月の距離甚しければ也。）但しその以前にも、彼は時折りにこれを彈き試みしことありしやも知るべからず。

然れども鳥羽屋三右衛門の長唄めりやすは、門人松島庄五郎（人名辭書所載の長唄系圖は、四代目杵屋六左衛門の門人として、三右衛門と相弟子とせり。此説矛盾せざること後に曰はん。）の努力によりて始めて世に榮えたること、論なき也。

松島庄五郎。鳥羽屋三右衛門の門人。享保中其名最も高し。（聲曲類纂）

とあれど、如何にや。即ち享保中は、未だ鳥羽屋が、豊後掾の節付をなしゐたる頃也。即ち唄めりやすは、未だ母體に潜みゐたる時也。即ちこゝに於て惟ふ、この享保中、其名最も高しとは、松島がめりやす師としてにはあらず、正系の劇場長唄師として名聲高かりしの謂に非ずや。即ちこの聲曲類纂の文は、「享保中（長唄語りとして）其名最も高し。（後）鳥羽屋三右衛門の門人となる、（以てめりやすを創む）」と前後を轉倒すべき也。茲に問題となるべきは、坂田兵四郎の出現なり。坂田と鳥羽屋と及び松島との三者の關係、而してめりやすの祖たる榮譽は、此の三者の中、誰人に歸すべきか。是れ吾人の疑問として措く能はざりし所也。今臆斷に失するやも知れざれど、この三者の關係、而して何人がめりやすの祖たるかを明らかにせん。

其頃、坂田兵四郎なるあり。坂田藤十郎が妹の子にして、坂田を名のり、夙に小唄の名人として名あり。東下、享保十六年正月、中村座に無間の鐘を演ず。是れめりやすの嚆矢といふ説あり。(邦樂年表説。)然れば三右衛門とめりやすの本家爭ひとなるが、この坂田のめりやすの嚆矢と、鳥羽屋との交渉、諸文獻に明らかならず。強ひて謂はば、坂田は唄本位よりめりやすに及び、三右は三味本位よりめりやすに及び、二者共にめりやすの創成に力ありたりといふべきか。殊に、坂田兵四郎の享保十六年中村座出演當時は、既に、めりやすの祖たる一説すらある松島庄五郎が劇場に長唄師として一家を爲したる頃なり。然れども、松島は、未だ鳥羽屋のめりやすに轉化せざる以前の事にして恐らく正統の長唄師として、擡頭しつつありし頃也。而して此の坂田のめりやすは、恐らく天賦の美聲に委せたる獨吟風のものなりしなるべく、よりて後世の「めりやす」に似たりとて、めりやすの嚆矢と後人が稱するには非ざるなきか。即ち當時は、めりやすが、未だ鳥羽屋の手に僅かに三絃の手として存したるのみ。未だ何人も(坂田も況して松島も)唄めりやすの出現を夢にだに知らざりし頃といふを得べきか。殊に、こゝに面白きは、(予が此の説を裏書するは)松島が長唄系圖にて、鳥羽屋と同じく四代目六左右衛門の弟子にして、鳥羽屋と師弟の關係なき事也。これ即ちこれを證して餘りあらざるなきか。即ち松島は、初め杵屋の門入にして、鳥羽屋と相弟子、劇場長唄の新進として、坂田の享保十六年以前享保十一年市村座顏見世番附には、既に江戸長唄の筆頭に在り。而して享保十六年以後も、即ち寛保元年頃より屢々坂田兵四郎と一座して劇場長唄を演奏せり。是れ即ち、坂田も、彼も、未だ長唄の正系にして、間々獨吟ありて、後世のめりやすの體をなしたりきといふべき也。

而して其頃、既に鳥羽屋の唄めりやす創見あり。(予は、これを元文の末と推せり。)即ちその漸く新物として歡迎せ

らるゝ風あるを看取するや、坂田兵四郎のめりやす式獨吟に刺戟されゐたる松島は、自らも亦こゝ遂に正系の長唄を棄てゝ此の長唄めりやすに走りしには非ざるか。即ち相弟子たる鳥羽屋を新しく師とせしには非るか。かるが故に、また松島が鳥羽屋の門人なりとの傳說あるには非ざるか。即ち松島の前半生は、杵屋の正弟子にして、鳥羽屋と同門。後半生は、鳥羽屋の門人、唄めりやすの宣傳家、以て單に美聲の獨吟を以て鳴れる坂田を壓倒して、終にめりやすの祖たるが如く後人に傳へらるゝに至りしならざるか。恰も勁敵坂田は、寬延二年に歿せり。(聲曲類纂)爾來、漸く彼は斯界の第一人者たるの位置を形實併せ得、寶曆七年(坂田の歿後九年)には「めりやす豊年藏」、翌々九年に「歌撰集」の板行さまで機運を作り上げしには非ざるか。即ち鳥羽屋がめりやすの創始、松島の宣傳、更に松島の門人の富士田吉次(藤田楓江)の大成によりて、めりやす成るといふべき也。

次に名人、富士田吉次(松島庄五郎の門人)荻江露友等の努力に待つこと多し。

殊に、富士田吉次(藤田吉治)は、始め女形にて佐野川千藏と稱す。享保八年中村座へ下る。都和中(尾崎曰く。「聲曲類纂」によれば、始めは歌舞妓女形にして、都和中の抱へなり。和中は、乘物町伏見屋といふ茶屋なりしとあり。而して此の和中は、都一中江府にありし頃の弟子ならんか。すれば宮古路豊後とは相弟子也。)に一中節を學び、又豊後節をも稽古し、舞臺にて出語り彈語りなどなして名聲を博せしが、寶歷七年十一月に二代目和中と改め、更に長唄に轉じて、寶曆十三年より又富士元吉治と書せり。天性美音にして當代の名人と稱せらる。云々。(邦樂年表)

大正十二年七月二十七日印刷納本
大正十二年八月一日發行
第十一冊（毎月一回一日刊行）

本文

評釋 藤蔓戀のしがらみ（2）
浮世繪風景畫雜談
本朝艶畫考補遺

尾崎久彌著

第十一冊

本朝艶畫考補遺

時々艶書の話が出るが、「本朝艶書考」の增補として、艶畫の起源について、左の記事を載せておく。（前著の記述と重複の點もあるが、今その原文の全部を掲げておく。

○春画のはじまり

男女交合の圖をつくりしことは、いつの世よりやはじまりけん。さだかに記したるものもあらざるにや。西土にては、漢人の春畫傳はれるよし、青藤山人の路史に見え、皇朝にては能宣集に春畫の詞見えたり。能宣朝臣は圓融院花山院の御宇の人なり。されどこれをはじめとは云ひがたし。それよりこのかたは灌頂卷、古今著聞集の繪師賢慶が弟子の、師の後家が密夫會合の繪など見えたり。此のことをこなたの詞には、おそくつといへり。（著聞集　おそくつとはおそひくつといふ詞の中略にやと、類聚名物考にはいへれど、いかゞあらん。もし燭餘をほそくつなどいひしこともありけんには、陰塞の背を燭餘にたとへていひもしけんとおもはるれど、それも證據なければ、いひがたきにや。（おそくつ。鳥羽僧正の許に畫かく侍ひ法師ありけり。）（中略）

能宣集、但馬守ためちか、屏風にさまざまの畫かゝせて侍るに、男女けしからぬことどもかゝれたるところに、

うしろめた下のこころはしらずして
身なうちとけてまかせたるかな

灌頂卷は齋宮濟子女王（三品兵部卿章明親王女）の瀧口武者平致光といふものと密通ありしことを敷演してゑがけるものなり。木下侯に古本あり。其畫の樣鎌倉時代のものとおぼし。もしこれより先き原本ありしものにや。（中略）

著聞集男女會合圖、古今著聞集卷十一（畫圖部）に云、繪師大輔法眼賢慶が弟子に、なにがしとかやいふ法師ありけり。

文化十年十月十六日　弘賢。（輪翁畫譚）

○

灌頂卷は、一名小柴垣草紙である。さてこの野宮の話は、古來有名で、十訓抄卷三にも

「寛和（花山）齋宮、野宮におはしけるに公役瀧口平致光（平五大夫致賴五男）とかやいひけるものに、名立たまひて、群行もなくてすたれたまひける。夫より野の宮の公役は、とまりにけり。」

とある。序でながら、作畫家をいふと、諸說區々である。灌頂卷。繪、住吉法眼慶恩、詞、後白河法皇宸翰（本朝畫圖品目。古畫目錄。古畫類聚目錄。倭錦。）小柴垣。繪、信實、詞爲家（古畫圖品目。古畫品類。）繪詞、爲家一筆（柳庵雜筆）繪信實、詞慈鎮（西川岸賴本）などと區々である。灌頂卷と小柴垣と同一であるとはいひながら、古畫圖品目の如き、一は灌頂を住吉法眼、一は小柴を信實とせる如き、をかしいやうであるが、物は元來一つで、詳本を灌頂卷、略本を小柴垣といふ由である。

とにかく畫者も誰であつたか、詞書も誰であつたか、恐らく逸名の氏がその本源であり、それがもとゝなつて、或は信實も描いたらうし、住吉も描いたらうし、灌頂ともなり、小柴垣ともなつたのであらう。從つて異本摸本によつて畫詞共に種々の名もある譯だ。中には、本當に後白河院の宸翰があつたのかも知れない、と見るのが今日からは妥當であらう。

佐野川千藏と云ふ女形、聲よくて、初めは豊後ぶし淨るりなどを出語りにしたりしが、頓て富士田吉次楓江と名をかへ、歌うたひと成りて大に行はれぬ。これより歌舞伎唄を世に翫ぶこと盛んなり。後安永頃荻江露友よくめりやすをうたひたれども楓江には及ばず。（嬉遊笑覧卷六上）

右、嬉遊笑覧には、露友、楓江に及ばずとあれど、この露友亦中々の名手にして、名聲殆ど楓江と伯仲し、現に荻江節の一派を生みたる程なりしといふ。

荻江露友。（長唄系圖には、松島庄五郎の弟子として、即ち富士田吉次と同門なり。聲曲類纂には、明和安永の頃大に行はる云々。後ち剃髮して、泰林といふとあり。）

さはれ、鳥羽屋三右衞門は、宮古路豊後掾に親炙して、その三味線を勤めたる男也。楓江はその豊後節をまで學びたる男也。（以上、ぶんごと宮古路豊後にとりての予の獨斷也。）隨つてめりやすに、多少豊後節の三味線、或は節廻しが移入されをり、或はこれに似、從つて或は此のめりやす、豊後節の孫ともいふべき新内節とも因緣淺からざるべく、殊に訴ふが如く咽ぶが如き聲調は、その音に高低の差こそあれ、（めりやすは、低）四疊半式と路傍式の差こそあれ、彼此相似たりと謂ふべく、且つめりやすがその歌詞、（現に藤蔓の本文所引のものの如き）遊里の唄として、最も寫實的なる、實感の露骨なるものとして、新内と優劣を競ふべく、即ち何れも道學者の

探聽に値するものなる點より見て、豊後——めりやす——新内の三者の交渉淺からざるもの必ずやあらん。即ち豊後の丸裸式は、元文四年の停止後、めりやすによりて暫く息を屏(ひそ)め、再び新内によりて復活したりと謂ふを得べきか。

尙云、楓江は獨吟の名手なりしと。當時のめりやす、「本と劇に於ける長唄の獨吟より來れるものにして、撥數少く間の延びて閑なる様、何とはなしに沈痛なるもの也」（近世世相史）とあるに頼れば、寧ろ新内の三味と同じと曰ふべく、以て彼此一縷の脈絡ありと云ふは僻目か。

左にめりやす本の刊行。並にめりやすに關する主なる事項を年代順に列擧せん。（主に邦樂年表に據る。）

めりやすの最初演出は、劇場にては、享保十六年正月の中村座、「無間の鐘」で坂田兵四郎なりといふ。但しそのめりやすと名を冠らしゝの最初は、寶暦三年正月、「花のえん」、中村座（坂田仙四郎）なるが如し。

◉めりやす豊年藏（寶暦七年）（此頃、松島庄五郎は長唄語りとして主に中村座に出演、有名なり。此の七年、佐野川千藏（富士田楓江）都和中と改名すといふ。）（前本の續篇として見るべきものといふ。奥書に「松島杵屋の流行を汲ん

◉歌撰集（寶暦九年七月）（で」云々とあり。所載の長唄及めりやす、三十種。——邦樂年表に據る。此頃、富士田吉次（楓江がこと）及荻江露友、共に擡頭。）

◉荻江節正本（明和二年刊）（此頃、松島庄五郎既に劇場に名を載せず、富士田の全盛時なるが如し。荻江亦、次年あたりより盛んなり。）

◉常盤友（明和三年刊）長唄及めりやす、計百十六種。

□鳥羽屋三右衛門、明和四年二月歿、五十六歳□

◉「新版増補常盤友」刊行（明和七年六月）

所蔵の長唄及めりやす、七十六種。

□富士田楓江、明和八年三月歿、五十八歳□

□「江戸生艶氣樺焼」（天明五年刊、京傳作）

めりやすの種目を擧げて、六十三種。

□めりやすの戯場演出は、文化十一年の十一月、森田座「すがた見」（富士田吉右衛門）が最後なるが如し。

――以上、めりやす考、終――

○花さそふ云々。蝶は、遊女自身の心情ならずとせんや。かすみの野べは、春色駘蕩たる交會のシーン也。○日かげの云々。日かげの木々、固より彼女の境遇也。待たるゝ花は、勿論我郎也。○人は云々。「なさけの夜すがらの」とは、隨分飢ゑたる者の言也、殊に、二つ枕の花に至つては、これをあぶな繪より一轉化、艶書の露骨を繰りひろぐるが如し。○ほんに勤めは云々。けだし彼女等の眞情也。此のめりやす、何と名づくる物ぞ。恨むらくは、めりやすの正本を一々檢索して、その命題を求むるの便なきを。（國書刊行會本・「徳川文藝類聚」俗曲下のめりやすに關する正本は、全部檢索せり。しかれども、このめりやす不明なりしを遺憾とす。）

餘白あり。さて此の餘白に、めりやす正本「歌撰集」より二つ「荻江節正本」より一つ、めりやすの最も男女情痴の機微に觸れたるもの、計三を拔かん。

○明（あけ）がらす

三下り「たまく\に逢ふ夜さ逢へば、短か夜に愚痴をいふまい、あきらめられまいさ、心で心たしなめど、好いた

藤蓮無のしがらみ

因果の咲氣なやつ。身にむい〳〵ならぬ想ひ、闇いに下んせ初時鳥、東雲近き鐘の聲、戀しゆかしい其出しげみ黒い羽織を跡から見れば、塒出てゆく明烏。（歌撰集）

○名とり川

二上り「われが戀路は、糸なき、三味よ何の音もせで泣きあかす。それじや〳〵見れば思ひの實を帶び〳〵、さすぞ盃。ならへさ？、すさひとつまゐれ、いやよ何用なに、こちやもう。それじや〳〵。いやさうさんせそれじや〳〵。しかもよいこの情ざかりに、ちよつきりこつきり小女房の、こしもしなへて、やつ〳〵あり、くろりや〳〵やつくろりさ、ぬめりしやんすは、ふたりとふたりが名とり川、おゝそれふたりとふたりが名取川。（歌撰集）

○敷きぞめ

「積んであるまでは罪なき夜着ふさん。合ゆうべはたれが敷妙の合枕ふたつを並べておいて。ひとつはおまへ、また一つとは云はずと合點で　ギンガハリあろぞいの。夜なに朝なに睦みてふかきふかき思を呉竹の、葉末に露　合つもらば松の葉の糸でつないで仕立てゝくけて、かはす言葉のもろつばさ　合よしや錦に織るとても、一羽の鳥はいやじやわいな。合上ルリギン鴛鴦と燕はどこやら可愛い。鴛鴦にやおもひ羽、つばくらは子までなしたる中じやもの。すさみかさぬる、閨の敷きぞめ。（荻江節正本）

浮世繪風景畫雜談

浮世繪の風景畫は、その發源はと來ると、中々問題が大きい。一個眇たる浮世畫史の一部であるけれ共、大は泰西文化の初潮の詮索に始まり、中々これだけでも繁雜な然し有意味な研究題目である。今これを私の持合せの智識に任せて概説してみる。

浮世繪の風景畫は、その傳統の祖は、司馬江漢（一七三七—一八一八）である。江漢以前にも、蘭法畫を承けたものがないでもない。例へば天草一揆の叛徒の中にあつた山田右衛門作の如きも然りである。彼の直譯的な風景畫や人物畫が、今日でも稀々には傳存してゐる。彼は、其後特に赦されて江戸にゐたといふ。さうした山田一流の西洋畫繼承者が他に幾人もあつたことであらう。江漢は彼等の中の鬱然たる大家であつた。江漢は長崎にあつて蘭畫並に銅版術を蘭人から承けた。彼の異國趣味は益々増大せられて行つた。遠近法を稍正確にこなし得るやうになつた。樹木の陰影、螢火の隱見、明滅、凡て西洋畫の格風を追うて如實となつた。然し此に注目することは、彼の風景畫は、大半肉筆である。泥繪具を以て塗られた肉筆畫である。（少數に銅版畫の試作あり。）而し

て江漢は、また浮世繪正統の大家、美人畫古今の名手鈴木春信の門下でもあつた。彼の自記によ る懺悔文（「後悔記」）によれば、彼は、春信門下となつて春重と號し、春信式の美人畫板畫の製作に從つたのみでなく、時として師春信の贋作を行つたとの事である。

當時、浮世繪正統の畫家は、風景にどうした眼を持つてゐたであらう。浮世繪の創造は普通岩佐勝以（一五七八―一六五〇）といふけれど、此は嚴密に謂へば誤りである。眞の意味の創造者は、無論菱川師宣（元祿七年歿、七十餘歲）である。其後大家には、肉筆の宮川長春（一六七九―一七四九）、同春水、板畫の鳥居清信（一六六四―一七二九）、懷月堂度繁等の懷月堂一派、奧村政信（一六八六―一七六四）、西村重長（寶曆六年歿、六十餘歲）、石川豊信（一七一一―一七八五）等の面々が輩出した。然しその多くは風俗畫家であつて、風景畫と目すべきものは未だ成されなかつた。たゞ師宣に濫觴を開いた芝居畫、劇場の描出に、稍風景畫らしい手法を行ふものがあつた。劇場内部の描寫に於て即ち土間と舞臺、棧敷等の關係に於て、稍後世の遠近法らしい手法が自然にあつた。（此頃既に此の手法を浮繪（うきゑ）というた。政信の横繪に往々此の命題の物を見受ける。浮繪は、然し後代の豊春の大成に負ふ所多きは、謂ふ迄もない。）其後稍風景畫らしいもの、一部の現出は、鈴木春信（一七二五―一七七〇）である。春信の畫は、無論美人が中心である。風景は副へ物に過ぎない。然しその中に自然と現はれた風景畫の手法は彼の卓絶

した手裡から案出せられてゐた。家屋の背後たる庭園、花木、屋外人物の小川、小山、丘陵、月雪の光り、雲のたゝずまひ、總てが彼一流の圖案的であるといふ譏りはあるにしても、既に風景畫の先驅となすに足りるものがあつた。

江漢は、この師の春信の風を承けた、加ふるに直接蘭人から垂示せられた純紅毛畫の手法を以て、肉筆の風景畫、板畫の美人畫を製作した。

江漢の如き純風景畫の試みは、然しその後暫く現れなかつた。以後の浮世繪は如何なる傾向であつたらう。矢張り風俗畫(主に美人畫)がその主位を占め、芝居畫が其二にゐた。磯田湖龍齋は春信を單に繼承した。勝川春章(一七二六—一七九二)は、役者畫と美人畫に終始した。東洲齋寫樂は、春章の役者似顏繪を更に寫實的に凡眼からは誇張と思はれる程の細微な表情に注力を注ぎ、以てグロテスクな世界を創造した。鳥居清長(一七五二—一八一五)は、芝居の看板畫から轉じて、美人畫に偉作を多く殘した。然し清長に特に謂ふべきことは、春信、春重(江漢の別名)、湖龍齋の作に既に現はれた人物の背景たる自然の描寫、即ち斷片的な自然の一隅の描寫に於て益々正確に近づき、益々精緻なものがあつた。かの「江の島詣三枚續」の如きは、この意味から最も日本風景畫史上に記憶すべき作である。この風を承けて愈々大成に近からしめ加ふるにその本領たる美人

の描寫に於て、古往今來獨歩の境地を拓いた、即ち遊婦をして女神の境にまで脱胎せしめたと謂はれてゐる喜多川歌麿(一七五四―一八〇六)、次いで現はれた。歌麿は美人畫の美人の表現に於ては、モデル三分、觀念七分とも謂ふべき非寫實風な、美女の非現實な羅列ではあつたもの丶、花鳥樹木魚貝の類は、當時の作家としては稀に見る寫實的な畫家、自然を正しく明らかに見ようとした畫家であつた。この寫實的な花鳥魚貝の描寫は、後期の北齋、廣重等其他の群に、或は刺戟を或は感化を、或は粉本たらしめたことは疑ふまでもない。歌麿の次に、細田榮之(文政十二年歿、六十餘歳)がある。彼は浮世繪師中唯一人の貴族出身(御勘定奉行細田丹後守三世の孫)であるから、從て其の美人畫にも高雅な匂が多かつた。然し庭園山水を背景としたものには、その自然の斷片は、歌麿の風を承けて、自然に忠實ならむとした傾がないでもなかつた。

尚、云ひ忘れたが、春章と同時に、北尾重政(一七四〇―一八二〇)があつた。彼は浮世繪史稀に見る師系不明の男である。その作畫は一枚繪の板畫尠なく、繪本が多かつた。主題は、武者、美人、往く處として可ならざるはなかつた。風景らしきものもあつて、現に浮繪と命題した、政信風のものもある。かの有名な春章との合作である「青樓美人合姿鏡」の極彩色三冊の如きにも、花卉翎毛の描寫は日本畫在來の傳格と多少異る閃があつた。山東京傳はその門下であり、畫名を北

尾政演といふ。彼は多く戯作に於て名を成した。然し彼の自著作に成る黄表紙插繪中には、背景の自然が、遠近の均齊に於て、已に巧みなものがないでもない。

次いで現はれたのは、浮世畫後期の二大家とも謂ふべき歌川豐國と葛飾北齋である。

筆の進むに任せて書いて來たから、こゝでまた一寸後へ戻らねばならぬ。それは豐國の師たる豐春の問題である。歌川豐春（一七三五―一八一四）の作品の一瞥である。豐國の師豐春は浮世繪の權威者としては、第二流以下である。然れどもその門下に、豐國其他の秀才を多く產んだことゝ、一は浮繪（うきゑ）なる別個の畫風に於て彼はまた史上有數な記錄を持つてゐる。豐春は決して浮繪の創始者ではない。然し世上然く目されてゐるだけ、それだけ彼に浮繪の創作が多かつたであらうことは、否む譯にいかない。浮繪とは何であらうか。浮繪は遠近法を最も幼稚に應用した透視畫風のものである。覗機關（からくり）に使用し始めてから、その需用が起つたのだといふ。而してその浮繪は豐春以前にもあり、奥村政信の横繪に之を見ることを已に述べた。然れば、寧ろ此の政信をこそ浮繪の創始者であるといふべきである。兎に角從來の人物畫世相畫の背景であつた自然の斷片が、こゝに多少纏まつた形を取つたものと思へばいゝ。その主題は、神社佛閣の雜踏、或は三十三間堂の的矢の類の如き比較的空間の廣い人事、その全幅の動作を取扱つたものである。一種の鳥瞰圖であつて、丁度今日にもある神社佛閣の諸縁起額の圖繪と類似してゐる。

豊春は此の浮繪を多く描いた。浮繪とは空間にその景物が浮出する如く見たより名づけたものらしい。然しこの草創期の浮繪が江漢等の蘭風畫の手法と相俟つて後世簇出した浮世繪の風景畫家を啓發したことの多いことは言を俟まぬ。但し浮繪なるこの名稱は、豊春以後豊國及其門下の作に折々見受けられ、天保期、廣重の飛躍以後は餘り用ゐられなかつたやうである。偖愈々豊國と北齋及び其門下の話に移る。

豊國(一七五五―一八一一)は、豊廣と同じく豊春の門人である。而も歌川派の巨頭として、秀才を輩出し、今日猶その傳統を殘してゐる點から見て、彼豊國は、獨り浮世繪史の樞要な地位を占めるのみならず、日本美術史上のまた特殊な抹殺し能はぬ頁を把持してゐる。然し豊國夫自身には、前期の春信、淸長、歌麿等の如き世界的と許すに足る所の藝術上秀拔な特徵は、不幸彼には無かつた。彼は多才多能であつた。美人畫、役者繪、小說挿繪、繪本類此等一枚繪繪本の種目は枚擧に遑ない程の多作を遺してゐるにも拘らず、彼の藝術の全力は一個に集中されなかつた。唯役者繪の風格に於て、春章寫樂の風を亞いで稍一層寫實的ならしめたといふ點に於て、彼の藝術的收果を目するに足るのみである。唯彼には門下に秀才を夥しく生んだ。前期の春章、歌麿等にありても門下に秀才はあつた。(例へば、春章門下の春英、春好、春潮等の如きま

た錚々たる大家である。）然し豊國程の永い傳統を支ふるに足るだけの、門下無數を生まなかつた。豊國門下の尤物を列擧すると、一に國貞（これ後の三代豊國、今日現存せる殆ど多くの豊國畫は、この三世の作である。）國芳、國政等其他一方に覇を唱へたものは尠くない。二代豊國（豊重と同人。豊國の養子、後素亭と號す）の如きも晩年振はなかつたもの丶、その遺作は、また佳作尠くはない。國虎、國安、國直等また彼の（初代豊國の）門下として他派の畫家に拮抗するに足る力作を殘してゐる。降つて國貞改メ三代豊國（一七八三－一八六四）の門下は、また初代にも勝る程の包容の大を示した。明治前半期に亙る國周（主に役者繪）の如きは、彼三代の門下としては、最も傑出した大家である、其他中家小家の輩無數である。國芳（一七九六－一八六一）また門下の養成に力めた。則ち芳虎、芳幾、芳年等があつて、芳年は水野年方を生み、年方は、現代の清方（鏑木）故輝方（池田）等の新浮世繪を生んでゐる。（美人挿繪畫家として、現代畫家中私の最も好愛する英朋は、芳年門下右田年英の門人である。）

彼等の藝術を綜括すると、一に美人畫、二に芝居繪、三に風景畫、四に武者繪（戰爭歴史畫）である。國政は役者繪に於て、春章寫樂と雁行するに足る大作を殘してゐるし、二代豊國の如きも、美人畫と役者繪と少數の風景畫とに力筆を示してゐる。國直國安の美人畫及び人情本の挿繪、亦彼等一流のデカダン味が著しく江戸末期の頽廢文華を漏すに適つてゐた。國貞は、田舍

源氏の挿繪を出世作に、風俗畵、役者繪、武者繪、風景畵等多數の作を板畵及び繪本に殘してゐる。就中、彼の風俗畵及び三代豐國以後の夥多の役者繪、及び未曾有の板畵技巧を費した、五十以上の板木を使用した一枚繪の源氏繪の如きは、質の問題はさておき量に於て彼の名を銘記するに足りる。國虎は、北齋一派に似せて、特殊な紅毛風の風景畵を描いてゐる。國芳は役者繪に於ては失敗したが、武者繪美人畵に於て、彼一流の江戸前の匂高き豁達任俠の氣を見せて、男女の骨法、亦彼獨特の正確な寫實から來て、甲冑を帶せる者も、美衣を纏へる歌妓も均しく彼の油斷のならぬ解剖學的の手法智識を傾注した。(彼は西洋銅板畵の數百枚を座右におき、また北齋一派迦りては江漢時代の蘭畵に啓發されてゐた。)その門下の芳年は、北齋の癖を併せ得て、愈々着實正確なる人體の描寫風景の羅致に努めた。

次に葛飾派に一瞥を與へる。その祖北齋(一七六〇―一八四九)は人も知る有數の大家。歐米にありては、探幽應擧の名は知らなくとも、一個北齋(及び歌麿、及び廣重の名と共に)の名を知らざるはない程の世界的畵家である。彼は夥しい板畵、及び繪本(主に畵譜の名を以てした)、挿繪本を遺してゐるから、彼の藝術生活の檢討は、容易な業ではない。九十に垂んとして、猶未だ自己の手法に滿足しなかつた彼は、終生神人共に駭く程の全的努力を以て畵事に從つた。美人畵

の上にも彼は、特殊な畫格を出してゐるし、また魚貝草木類の描寫に於ても一歩益々自然の堂奥に侵入してゐる。然し彼の名を成した者は、後世の吾人が以て彼の藝術上の最首位におくは彼の風景畫である。彼の風景畫は、始めて風景畫らしい風景畫であつた。江漢に師事したとも謂はれてゐる彼は、蘭畫其他百般の在來の風景畫の手法を密着し、換骨して自家の手法の開創に盡した。彼は初め春章の門人ではあつたが、後、自ら破門を求めて獨立の反旗を飜した。初期は、先輩を繼承した美人畫に筆を揮ひ、世評身世思ふ儘ならず、唐芥子賣や秒文字書きまでなして生活の波に弄ばれた。然し彼の不屈な魂は遂に彼一流の手法を生んだ。晴、青嵐、咫禎ごも非難すべきではあるが、彼の人物風景は、傳統の總てを破却した、彼の眞骨頭を現すに足るものがあつた。彼の門下は亦た名人輩出した。北溪、北壽、辰齋は其の雄なるものであつて、而も彼等は、師北齋の如く獨創力に於て極めて富んでゐた。北溪は美人畫の製作もあるにはあつたが、根本は風景畫であつた。北壽は北溪に勝る風景畫の名手で、しかも北齋をも凌駕するに足る別個の純風景畫の收穫を殘してゐる。

北壽は、頗る偉才の畫家であつた。北齋の風景畫が未だ漢畫の手法を何處かに漂はしてゐるにひき換へて、彼は純たる歐風畫を開創した。光線のとり入れ、山の襞、雲のたゝずまひ、凡

て歐風畫から招致して、而も獨特な日本版畫の妙味を失はなかつた。彼の雲は眞に空前の描寫であつた。むら〳〵と湧ける海濱、または丘上の白雲、その幾團々は、地紙の白を應用して如實に明るく描寫せられた。カラ摺（無色の版木を用ゐて、物の模樣を地紙にきめ込むこと）を以てした雲の群は、彼に始めて見られた。後世の廣重、英泉等の風景畫家も試みなかつた雲の變化、幾種の描き分けは彼に始めて成された。師の北齋に於て、その發生は多少あるもの丶、彼の如く明るき雲、光る雲、幾樣雜多の雲を表せる板畫技巧を盡して描いたものはなかつた。廣重の雲は横に穩やかに曳いた一刷毛二刷毛である。英泉、或は國芳等の雲も、同じく霞と見紛ふ雲の形である。而して北壽に特筆すべきことは、彼は晝間の描寫が最も多いことである。白日下の雲の壯大な峰の簇出！それは彼の板畫にのみ獨り見られるのである。

却說、版畫の風景畫に於て、西洋畫の如く、額緣の如き感じを與へる紙幅の周圍に輪廓をこることは、北齋並に其門下の版畫にその多きを見、時として其の輪廓に、特殊の、唐草其他の圖案的趣向を凝らしたものをまで見受ける。北齋も頗る異國趣味の畫家であつたが、（例へば彼の風景畫に、畫題及落款を假名の横がきにして、恰も歐風文字の如くしたものもある。）彼北壽等は一層歐風趣味に感染してゐた。即ち辰齋畫の「七里ヶ濱」の風景畫は、周圍の輪廓は、黑地に

白く、一種變體な羅馬字の繋ぎを以て飾られてゐる。却說、此の北齋、北壽、辰齋等の歐風趣味、風景畫の新聲は、同期後期の新人に幾多の追隨者を將來した。歌川豐國派の國虎、國貞、國芳、二代豐國等皆風景畫を殘してゐるが、國虎の如きは最も北齋一派の感化著るしく、國貞は寧ろ廣重の感化、二代豐國はまた北齋と英泉とに何處やら相融通する風格を殘してゐる。然し國芳一個は夙に之等から脫胎して、北齋、北壽或は廣重等の純風景畫家に比肩するに足りる風景畫の佳作を殘してゐる。次は廣重の問題である。

廣重（一七九七―一八五八）は、豐廣（一七七三―一八二八）（豐春の門人であつて、美人繪張交繪小說挿繪等に相應な手腕を持つてゐた。然し同門の豐國の盛名には及ばない。彼の誇りは、唯だ廣重の師たりといふに於て最大である。）の門下であつて、彼こそ北齋と比肩する世界的風景畫家である。彼と雖も、その一生の作品繪本類、小說挿繪、狂歌本又は美人畫、武者繪、歷史繪の若干はあるものゝ、彼が名を成し彼を代表するは、保永堂版等の「東海道五十三次」の風景續畫、及び無數の江戶名所、其他諸國の風景畫である。廣重の風景畫は人も知る所のものである。彼はその初期にありては、豐春式の浮繪を描いたり、英山英泉流の美人を描いたりしてゐたが、爾後十數年、果然保永堂版東海道五十三次（天保五年、三十九歲の作）を振り出しに、彼は風景畫家として前代無比の盛名を

巳に時人から博するに至つた。然し嚴密に謂へば、この東海道に至る迄に、既に、彼には、幾多の東都名所江戸名所の類がある。若書きを街ぶ骨董癖からでなく、彼の初期の江戸名所東都名所には、佳作少くない。殊に彼が一幽齋と落款せる東都名所十枚は、初期の傑作であらう。かの英國風景畫家ホイッスラーに感化を與へたりと謂はるゝ「兩國の宵月」の繪はこの一幽齋東都名所中の一枚である。其他佐野喜(出版元の名)板行の「東都名所」には、中期以後の作に比して遜ない佳作に乏しくない。然し保永堂版の五十三次は、彼の盛名を一般に博した最初であつて、爾後、之に類似の東海道數種の製作、次いでは英泉との合作になる「岐蘇街道六十九次」の如き、彼は、順風に帆を孕ました大船の概があつた。廣重の風景畫は、此の如く、彼の生時にありて既に時人の風景畫は、彼が獨占場であつた。爾後最晩年の「名所江戸百景」に至る無數の囑系を博したのである。丁度美人畫の歌麿が生時既に世人の渇仰を得てゐたが如く。

廣重の風景畫、その風致を一言以て謂へば、無韻の音樂である。色彩を以て成された最微妙なる詩である。音樂と詩！彼の風景畫は、この言葉を以てその內容を表現することが出來るであらう。音樂とはその畫面にあらはれた、色彩描線の交々から來るスヰートなる交響をいふのである。詩とは、その裡に無言の然し人の魂を把握する力強さを以て歌はれた畫家と自然と心

胸相投影した刹那に生じた讃歎の調べ、大自然が含んだ無邊涯の愛の心、無始無終の永遠性の偉大な壯美な悲哀に觸れた人の心の慄へ、戰きをいふのである。廣重は自然の前にひれ伏した。自然を征服しようとは思はなかつた。淚垂れつゝその無邊の慈悲、慈悲の極の無涯なき哀愁に觸れて、うな垂れてゐる。北齋の風景畫はこれと正反對である。北齋は自然を征服しようとした。丁度近代科學の手によつて自然の雷鳴、雲雨を凡て人爲の下に奴隷たらしめようとした如く、彼は非凡な精力の溢れた氣魄を以て、自然を一喝して自家の脚下に慴伏せしめようとした。語を換ふれば北齋は自力門、廣重は他力門である。無論他力門徒の縋る阿彌陀の姿は、廣重が視たる取扱つた自然である。

米國の廣重熱は、甚大なるもの、眞に我國人の想像以上であるといふ。しかも彼愛好の主張者は彼土の婦人界が主であるといふ。歐米にありては女流が男性よりも藝術愛好の熱が高い。此傾ではあらうけれど、廣重のその風景畫の全幅を流れつゝある優しみ、愛のかゞやきは、又以て彼土の女流と相感應し共鳴する度の深いからでもあらう。

廣重の他に廣重に些少の感化を與へ、別個風景畫の地位を保つ者に、池田英泉（一七九一—一八四八）がある、英泉は、菊川英山（一七八七—一八六七）の一派、夙に美人畫家としては、古への淸長歌麿に比肩す

るに足る技倆を有してゐた。彼の美人畫は、遊冶淫靡の極端なる描寫を以て、古往今來第一人者である。無數の青樓美人は、彼を以て始めて人間らしい命を吹込まれてゐる。この美人畫の特徵の他に彼は、風景畫に於ても秀拔な手腕を示してゐた。廣重との合作「岐蘇街道」の幾圖はそれである。その風景畫は廣重ほどの溫雅さはない。然し北齋の堅硬を稍軟化して、その摸倣の迹はあり乍らも、別個の風格を打出してゐる。丁度英泉は、北齋から廣重に及ぶ中間者であつて、廣重に對して間接的の感化多く、恰も助産婦の如き位置にある。

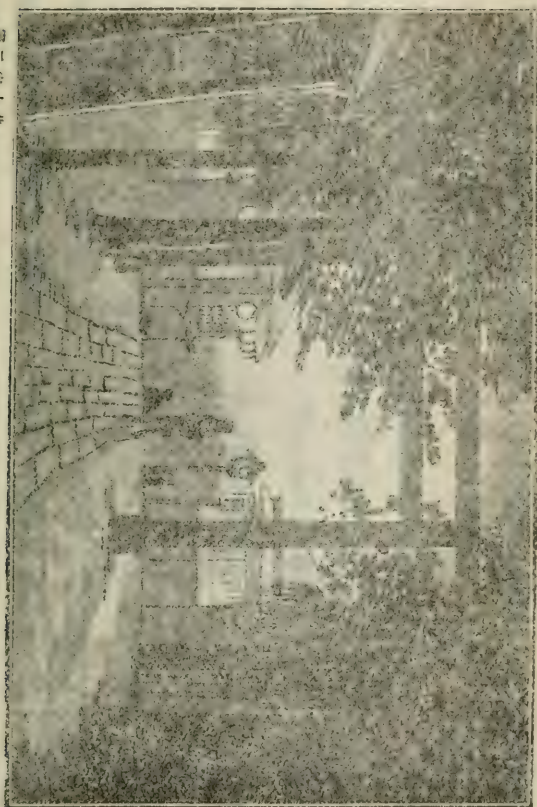
其他風景畫には、國芳の東都名所（初期）。二代豐國及び國貞、國虎。明治初期の小林清親、井上安治、月岡芳年（國芳の門人）の努力等あるけれど、煩雜に流れる嫌あれば玆に省く。唯國芳及びその傳統に、風景畫の佳作偶々多く、また明治の廣重とも謂ふべき小林清親にも問題にすることの多いことや、井上安治（清親の門人。安二と落款し、探景とも落款した）には、好個の新東京畫ありて、浮世繪風景畫掉尾の收獲を齎してゐることゝを附記しておく。廣重は二代三代と明治に及んでゐるが、二代に稍佳作あり、其他は廣重の名を汚すものである。

最後に、國貞（二代豐國）門下にあつて、特殊な風景畫家が一人ある。それは、貞秀である。彼は、埋れた天才とも名づくべきで、（山崎直方氏などは熱心な彼崇拜者である。然し一般的に

は、今日聲價を有してゐない。國貞門下としては、眞に異才である。彼は風景畫に於て廣重とはまた打つて變つた技術風格を有してゐた。彼の號を五雲亭或は玉蘭齋といふ。然して彼の作は美人繪武者繪等なきにしも非れど、三枚續の純風景畫が彼の得意の壇場であつた。武者繪等の背景にも、彼獨特の大きな空間の自然の描寫が見られる。國芳の武者繪にも見られぬでもないが、貞秀のはより多く自然の幅員が偉大である。即ち貞秀は、武者の亂鬪は從、その月夜雨雪等の自然の描寫が主であるやうに見られる。「赤穗義士討入」の三枚續の如きはこれであつて、たゞ一個厖大なる雪の月夜を主題として、館の屋根を傳ひ行く義士の群は、微細に而かも如實な點景人物である。晩年の「相州大山參詣」の圖三枚續の如きは此風の大成であつて、彼の作畫は一般にいふと豐春以來の鳥瞰圖式の浮繪と廣重風の風景畫と二者合して割つたやうのものである。極めて別格な風景畫の製作者として注目するに足りる。

最後に。浮世繪風景畫については、如上の他、平賀鳩溪、江漢門下の亞歐堂田善、北齋の門人であつたといふ安田雷州等の銅版畫、並に長崎畫家の一派に對する考察も無論必要であるが、今は、暫く純浮世繪の傳統のみに止めておく。尚、廣重に就ては、本著既出の、「廣重畫最初の東都名所」を參照せられたい。

湯嶋の夜　　井上安二畫

本文

一九の「三都の口眞似」

原始的な稚兒物 元亨元年の寫本「稚兒乃草紙」

あぶない小唄

尾崎久彌著

第十二册

あぶない小唄

新刊の「はやま小唄全集」（湯朝竹山人著）の中から、あぶないと思はれる小唄を、見當り次第に拔いてみよう。

○いさましや枕にひゞく太皷の音ちよつと手をとり腹櫓四十八手も取り盡しモシ場所があるではないかいな

○いやとはれのくのをむりにさッつらまいていれてなかせるきり〳〵す

○はやふけてかたらふひまや時鳥右と左の耳に聞くソレといふまにあけのかね

○春風が身にしみじみとはだとはだほれた互ひのうさ晴し去年のざしきは痴話のたれ

○はれて雲間にソレ月の影さしこむうでにいれぼくろもやひ枕の蚊帳の内いつか願ひもホヤまをし雷さんの引合せ

○はだか人形それなりにきものきせたりあやしたりぬしにそのまゝいきうつし

（この唄などは小唄に現れた「變態性欲」の例として著しいものか。）

○風にうらみは待合の軒ばにそよぐ忍草そよとの音も人さんに心をおくの四疊半

○立田川邊に船とめてまだうらわかき娘氣のどういうてよかろやらしんきまくらのそら寝入り

○夏の夜のしののめちかき蚊屋の内痴話にそむけし床の山戀にまけるはをなごのとゝとけてむすびし今朝の夢

○やうやうとめて今更に背中あはせてれやうとはむごい仕打ちじやないかいな

○二人が仲をお月さんそれとすゐなるおぼろかげ吸ひつけ煙草の火明りに話もふけてぞつと身に夜さむの風のしみ〴〵とじれつたいよも口の内

○今宵は雨か月さへも暈きていづるおぼろ夜にぬるゝ覺悟の船のうちすゐにもやひし首尾の松

○穴の深さを大工さんに聞けば大工さんも棟梁さんものみかんな墨壺差金投げたとさ

○際どいあそびの早歸りちやうどよいまにちよいされてちよいといたします別れせわしきあけがらす

○ゆふべのゆめのさめやらで寝返したのはたれが罪そより白む行燈のはづかしいではないかいな

○しようがいな〳〵しよがい奴様はとぼけたばさまでナきれたかんぶくろにまつたけおしこんで嫁女こつちよむけナヽむかしのことしようかいなそれもさうかいなホヤさんでもねえ

○

はじめ、二三句の積りでゐたのが、たうとうこれ丈、全部に亘つて拔いてみた。有拔いた中には、從來私の知つてゐた物もある。又既に活字になつてゐるものもあらう。尙是以外、エロチックな小唄は、めりやす、歌澤の類を探したら更に數十はあらう。露骨なものでない程、却つて床しく却つてシーンを餘計聯想させられるではないか。機會があつたらひま〳〵に書き溜めていつて、あぶない小唄の名作ばかり集めてみようと思ふ。

一九の「三都の口眞似」

面白いものがあるから、此の機會に披露しておかう。數ヶ月前、私が購入した浮世繪類の内に、偶然發見したものである。それは、國丸の畵、三河屋文兵衞板行の「三都の口眞似」と題した一枚繪、竪繪大錦判。一枚を六個に仕切り、上は、右が繪、大阪の達衆とした半身、左りは文。中は、右が文、左が京の粹がりとした半身。下は、右が繪で、江都の勇、左は文である。繪は、大阪の達衆は、顏をしかめた大顏、頤を青く隈どつてゐる。間抜け面が稍皮肉に出てゐる。京の粹がりは、月代の痕に左手をあて、右手で朱の杯を受けながら、心持ち眉の下がつた黑紋付、黑襟赤の襦袢を着た男。粹がりらしい体だ。江都の勇は、鉢卷をした例の勇君、あい辨慶縞を着用。しかし今私が問題にしようといふのは、繪ではない。繪は、國丸（初代豐國の門人）の繪で、とり立てゝ別に巧でもなければ、どうといふのでもない。唯、その中の文についてだ。三都で計三個の文がある。それが、その繪と呼應し乍らも、亦獨立して、當時の三都の男の中の男の氣風、長短所を極めて皮肉に剔抉自由にしてゐる所が面白いのだ。よく人は、

當時の三都の氣風を云爲したり、江戸つ兒と上方贅六とを比較したりするが、百の比較、千の傍證よりも、この三個の文、それ〴〵に配られた三個の文の方がより多く三都の彼等矜持たりし男性のアラをさらけ出してゐると思ふ。それが例の地方色打出に於ては、懸換へのない老大家、十返舍一九の執筆に成つたものであるから、一層に嬉しい。一九は、例の膝栗毛物に於て巧みに地方色を浮き立たしてゐることは、今更謂ふも野暮だが、この錦繪の三個の文などは、好個のまた地方色捕捉の小品、それが繪の解説とよりも獨立して慥かに生命あるものだと思ふ。國丸の畫ゆゑこの錦繪も或は、坊間偶々之を見るありとするも、閑却され易いものかも知れない。が、かゝる片鱗、なほ且つ一九の精到なる此の表現、迫眞の皮肉さを以て生命があり、價値ありと思ふ。强ち我徒の零碎なるものに强ひて價値を措かんとする反凡衆的の痛快さのみではなく、此類の如き、當時の三都比較の好小品、好資料としても、或は尙ほ一九の手輕い、しかも彼の特色たる地方色の表出に於て離れ技を有した彼の本質を窺知するに足る、また一資料として、紹介の價値はあらうと思ふ。

偖、此の小品は、彼一九の何時頃の執筆か、東海道中膝栗毛板行の前か後か、或は晩年であらうか。多少此等年代に就て考慮し、最後にその全文をその儘登載（例により讀み易からしめんが爲右傍に漢字を折々振つておく。）し

てお かうと思ふ。

此の繪には、檢印として極印一個がある。先づ是からいふと、（以下繁雜を厭ひ、要旨だけにする。）錦繪の極印單行時代は、1、寛政より文化元年までと、2、文化十三年より天保十三年までの前後二期である。しかし畫家國丸の年代としては、無論後期である。即ち檢印に據つて文化十三年以後天保十三年の間に、この錦繪が現れ、即ち國丸と一九との合作があつたものとしなければならぬ。爲念、國丸一九の年代に言及しよう。國丸は文化十三年末（卽ち天保元年のこと、同十二月に天保と改元）に、三十七で死んだ豊國門下の秀才。さうして彼の畫筆の處女作は文化六年頃であらうといふ。（坪内氏「芝居畫と豊國及其門下」の國丸の項參照。）ところが、一九はどうだらう。一九は、天保二年八月歿、享年六十八歳の老大家である。さて此の錦繪は、然れば文化十三年以後國丸歿年の文政十三年に亘る何時頃の作であらうか。それには、一九と國丸との交渉に一應及ばねばならぬ。國丸は文化六年を初筆として、以後數十種（今一々數へてゐる暇がないが、百には及ぶまいと思うてゐる。）小說挿繪の中、（錦繪類の板行は、全然不明の事で、到底その數を舉げられ得ないから、これを略く。但し錦繪も、後には、當時國貞、國安、國直等と共に、相當な數に板行されたらしい）初筆の第二年目文化七年に、すでに「駿州清水湊富利劍勳功」三の一九作に挿繪を畫いてゐる。增補青本年表に據つて、爾後（文化七年以後）の一九作國丸畫の稗史の數を、一走り數へると、文化八年に一種。同九年に一種。同十一年に四種。同十二年に三種

同十三年に一種。同十四年に二種。文政元年に一種。同三年に一種。以上で、文化七年以後計十五種である。單にこれのみで類推は危險であるが、一は、一九と國丸の提携に於て、一は、錦繪の極印單行が文化十三年以後だといふ此の標準に於て、兩者から、此の三都の口眞似の年代を考査すると、文化の極末十四年頃か或は文政初め、遲くも文政三年頃であらうと思はれるのである。その證據として尙云ふと、國丸は文政元年以後歿年の同十三年迄に、元年(四)同二年(五)同三年(二)四年(四)五年(六)六年(一)七年(六)八年以後十年まで(無し)。十一年(二)十二年(二)十三年天保元年(一)死後の天保二年(一)と以上の小説挿繪の總數を擧げてゐる。(増補靑本年表に據る。)この國丸の壽筆生命の迹を見ると、文政五年の六、同七年の六の多作は論外として概して、元年二年頃に、その堅實なる平衡した數量を有してゐるやうである。それに、一九との提携の最後が文政三年(靑本に現れたものとしては)であるとすると、恐らく此の錦繪は、文政元、二、三の頃の作であらうと思へてならぬ。(國丸の挿繪が、文政八年以後激減したのは、或は、坪内氏說の如く、師豐國の代作に耽つたせゐかも知れぬ)

以上の架說、誠に我人、迂路に踏み入つたかの觀がある。ともあれ、以下、一九執筆の「三都の口眞似」を發表するに就て、背景としてその年代を幾分確かめ、一層これを讀む上に氣乘させようとした婆心に外ならぬ。併せてこれを機會に、一九と國丸との提携如何を單に靑本

挿繪の上のみで先づ檢索して見たのである。とにかく、國丸は、一九に可なり引立てられたものであらう。（尙これについては、「浮世繪」六號の齋藤氏「歌川國丸」の文の中にも、種彥作、國貞畫の「三津瀨川上品仕立」二冊によつて、一九、國丸の生前の提携が窺はるべき好資料が擧げられてゐる。但、この資料の要旨は、坪內氏の「芝居繪と豐國及其門下」の國丸論中にも引かれてゐる。）

次に、一九自身に就て、尙數行をいふと、一九の製作に於て、此の「三都の口眞似」と交涉を有する地方色打出の作物所謂膝栗毛の年代をいふと、圝東海道中膝栗毛（初編・享和二年。八編・文化六年。發端十一年）圝續膝栗毛初（金毘羅）（文化七）。○同二（宮島）（文化八）。○同三（木曾）（文化九）。○同四（木曾）（文化十）○同五（同）（文化十一）。○同六（同）（文化十二）。○同七（同）（文化十三）。○同八（同）（文化十二）。○同九（善光寺）（文政二）。○同十（草津）（文政三）。○同十一（同）（文政四）。○同十二（同）（文政五）である。（其他に、「奥羽一覽道中膝栗毛」の自初編至五編あれど、こは二代一九の作。）乃ち本問題の「三都の口眞似」と交涉の年代は、善光寺、草津のあたりである。卽ち彼としては、東海道及び宮島、木曾で十分地方色作家として名を賣りつくした揚句である。卽ちこの點、この錦繪板元の機智が閃いて、當時挿繪畫家として賣出しの國丸の畫に、地方色打出の老大家たる一九の文を添へ、尙、追々賣出したものと見てよからう。（現に此の錦繪に、追々續きを賣出すと廣告されてあるが、私は、この一枚より持たぬ。續繪があるかないか。廣告だけか、不明である。續繪として、同じ三都でも、今度は女性を材料にしたものであれば、文、畫共に一層面白からう）即ち二者の利用である。而して老大家たる一九に

ありては、此の小品の執筆など、お茶のこさい〳〵たるものであつたらう。さて愈々、この一九執筆「三都の口眞似」の本体を示さう。さうしてその如何にうまいものなるかを示さう。やゝ京坂につらく、江戸に寛なる憾はあるが、とにかく、彼の鋭利なる皮肉、諷刺が、いかに万遍なく行き渡りたれるかを玩味されよと。以上。

三都の口眞似

國　九　讃

十返舎一九著

大坂の達衆

コレなにぬかしくさるやら　けたいなやつらじや　あんまりそないにやまひづかしくさるな　わしをたれじやとおもふてじや　北ばまちうで　人にしられたはなたれのごん七さいふて　しんまいのいりがらほどばりつくおとこじや　りよぐはいながら　せんごくふねをあぢかはのせんすいへうかべて　あはぢしまのつき山　すみよしのたかとうろうは　うへごみのあかりとり　ねながら見て　いけだいたみのきもろはくのみつゞけのおとこじやわいの　コレわるうほたへさらすと　どたまのかけなと　ひらはせてこますがどうじやい　ナンドつよいじやないかい　みそいふじやないが　ひさしくせつしよくでゐるびやうにん

かこしのぬけたちさまなら　いくたりきてもあいてにするのじや　サアはしづめまで出てもらをかい　こちや日あたりのよいとこ見たてゝ　けんくはするのじや　わしとりがいのすしじやないが　あたまうおしのきくおとこじやもの　そんのいかぬけんくはなら　なんぼなとするのじや　あぐちもきれぬぶんざいで
ちよこざいなこといはずとあしもとの
あかるいうちとつとゝいなんせ
わしもいんで　ちやづけ　くをわいの

京の粹がり

なるほど　京女郎といふておなごは京のこつちやわいな　アレ〳〵見さんせ　うらやのかゝやまゝたきのこめろどもまで　しゆみでなふて　だいいちはいろがしらうて　ふうぞくがやさしうて　ナンときよといもんじやないかいな　そのうちゑらいは　ひがしのげいこやまましうは　おそらくにんげんかいの　ものとはおもはれぬ　天人のやうでもつたいないとおもふほどのこつちやわいな　これをおもへば　たこくのおとこどもが京へきて　京の

女
おなごを見て　いきてもどるはふしぎじやないかいな　女　おなごばかりじやない　男もそれに
つれて　かも川の水にみがきあげるもんじやさかい　しぜんとうつくしうて水ぎはがたつ
わいな　そじやさかいわしやおもふことには　とつといなかの大じんのごけかなんぞで
とつとぶすいなおなごの　しかもふきりやうで　そのくせおとこずきなやつにかゝつて
おもふさまさきをよろこばしてやつたら　それこそマアどないにうれしがりおろかとおも
ふさかい　わしやそないなおなごにごしやうしてやりたいわいな　ハヽヽコレ／＼おも
てへせうべんかいがきたじやないか　こちのせうべんは水ませんさかい　ねをよふかへと
いふたがよい　コレ／＼なとかへことならそのきで
かへい　もしもこへくますなら　たれぞついてゐて　みばかり
すくふていなすな　せうべんともにすくふていなせ
みなちやがゆばらで　水たくさんにはこまりはてるはい

江都の勇

コウ手めへたちやア　人を見そくなつたか　むぎはらざいくのとうじんぶへを見るやうに

おつにひねくつたことをいふな　コレヱゑどつこのしやうねだまア　こんにやくだまたア
ちがつて　ぶる／＼するのじやアねへぞ　ほんのこつたが　やらうはけいせうても　ちりめ
んのふんどしと　しつけをのねへきものはきたことのねへ男だ　かさいぢうにりびやうかゞ
はやりやアしめへし　くそがあきれるもすさまじい　おいらアゑどのまんなかにそだつて
けつのあなのひろいおかげに　やアひとりまへのせつちんへ大びらにたれたおとこ　そのう
へたなちんいちもんかりはなし　よるよなかなんどきに　かへつても　ろじの戸をおほや
にあけさせながら　いぬのくそのこごとをいつてあやまらせる男だから　いだてんのまも
りをかけてゐるひきやくじやねへが　あとへとては　いつすんもひかねへのだ　そんない
やみからみをいふと　このさゞゐからが
あたまのごてんじやうへお見まひ申すが　ぐつとでも
いつて見ろ　あさひなのもんやぶりしやアあるめへし
とんだおしのつよいやつらだはへ

追々此つゞき
差出申し候。

地本問屋　大でんま二丁目横町
三河屋文兵衛版

原始的な稚兒物

稚兒物（衆道物、陰間物）は、江戸時代前期（浮世草紙類）中期（洒落本）等に於て可なりの數量である。室町時代にも、幾分はあつたらしい。蜀山人、一話一言の補遺の「男色の事を書きたる草紙」にも「幻夢物語、嵯峨物語、鳥部山物語、松帆草紙兼載、秋の夜長物語、岩つゝじ季吟、犬つれ〴〵（慶長の末年の著作いぬたんかと見えたり）右八部ともに家に藏め置けり。此外に宗祇若衆物語ありといふ、いまだ見ず」（新百家說林本、一話一言補遺卷二）とあるが、今、平出氏の「近古小說解題」に依つて、以上各作の年代を見ると、幻夢物語は、文明（室町期、後土御門）十八年以前の作だとし、嵯峨物語（室町中世）。鳥部山物語（同）松帆草紙（松帆浦物語。室町中世。）。秋の夜の長物語（室町初世か。）。岩つゝじ（近古小說解題に見當らず。）。などゝある。然し此等は、「近古小說解題」にも其の梗概が載せられてゐる如く、相當にノベルの形式を具へてゐるものである。然らば室町期以前に稚兒物があつたか否かといふと、從來の文獻上では、殆ど無いといふに近いやうである。誰しもいふ通り此の稚兒道（男色）が太古から行はれたことは、事實らしいが、それが文學に現れたのは、餘程後らしい。萬葉や古今後拾遺等よりそれらを指摘し

たるもある。（「變態性慾」第一卷。僧侶の詠んだ男色の和歌）其他の古い所では、「古事談」の賴通が長季を寵した話。鎌倉時代となつては、沙石集（無住法師の著たるは有名、誰しも知るが、彼は、梶原景時の孫で、弘安二年より同六年に書き終るといふ。）に現れた「ある藏人の子の稚兒となつたのを叡山と三井寺とで爭奪した」といふ話なども、幾分の文獻にはならう。とにかく、室町期の、足利義政などの武將の斯道發展家の現れぬ以前は、室町初期までは、多くは、禁欲の罠を人知れず脫しようとした僧侶、少數は性的遊戲の一としての、異性に飽いた贅澤さの公卿貴族と、この二階級に止まつてゐたやうである。それが室町期に於て、武士が之に加はり更に江戶期に於て町人も之に加はつたといふべきであらう。とにかく衆道史を通じて一本の太い線は、より太き線は僧、その他の細き線は武士であらう。

却說、純稚兒物としては（斷片的の記事の登載にあらずして、それ一個まとまりたるとして、）殆ど足利期以前には從來嘗て見ざるにも拘らず、こゝに紹介しようといふ一物がある。勿論今、私の提供する材料は、寫本ではあり、且つ轉寫又轉寫されたものであらうから、誤字脫字も少々あるにはあるが、とにかく原始的稚兒物として紹介するに足ると思はるゝ物である。この寫本を私が得たのは、五六年前。そのもとの寫本は多分京大あたりの圖書室にありはしないか。外題は「稚兒草紙」、年代は「元亨元六十八盡寫訖」と文後にある。六十八云々は、何の意味か。筆者が此年六十八歲にあたるの意か。

表題の稚兒草紙も怪しいものだが。勿論原本は、一切表題なしのものかも知れぬ。元亨元年云々も、怪しめば怪しめられる。しかし、以下に紹介するやうな內容であれば、全く、稚兒に關した斷片的の說話集であつて、室町期物の如き一個纏まりたる物語形式を有しない點からいふと、恐ろしく原始的なものである。しかし、春本「逸著聞集」の如く、江戸期に於て國學者が、遊戲的に成された僞書かも知れない。（逸著聞集にも、多くの男色に關する記事がある。）が、ともあれ、私は、「元亨元六十八盡寫訖」にどうも多少の信が措けてならぬから、これらを疑問としながらも、敢て「原始的な稚兒物」として發表する次第である。

人あり、汝の「江戸軟派研究」と、これと如何の交涉あるかといふかも知れない。私は、此の內容を發表する丈でも既に、この寫本を有する私の責任であると思ふが、尙、最近の私の「江戸軟派」にも、野郎衆道物の多きは、我人知る通りであるが、然しそれらの近世の同性文學の魁たり原始たるものは、此等「稚兒草紙」の類にある。即ち敢てその故を溫るの意に於て、これを本著に發表したいと念じたのである。つまり、私の、近世男色物（これはいづれ他の機會に執筆するつもり）の序として讀んで頂きたい、且つ彼此比較して貰ひたいといふのである。

さて、若しその「元亨元」を信用するとせば、これは又恐ろしく古いものである。即ち元亨元は、北條高時の執政時代、天皇は後醍醐。高時滅亡の十三年前である。資朝俊基などの陰謀且

つ露見の四年前。僧師錬の元亨釋書の成る前年である。しかも、元亨元……寫訖とあるからは或はその原本は元亨元より更に古きものかも知れぬ。內容は、以下現るゝ如く、多少僞底書式の文字もあるが故に、或はその以前にこの原本があつて、內々轉寫されつゝあつたものか、或は、寫本の度に、新記事を書き加へたものかも知れぬ。さうして、その原本作者は勿論、轉寫連中も無論僧侶の斯道家連であらう。さて先づその全文を載せて見よう。

（揭載に就ては、原文のまゝにした。讀み易からしめるために、その右に、漢字、或は正しき假名遣を振つた。濁音は一切ないのだ、誤讀でないと信ぜられる限り、濁音を附し、疑はしきは、その右に（？）を附して、想像しておいた。唯困つたことは、多少公刊上遠慮せねばならぬ辭句の、散在することである。これは、乍殘念一切伏字とした。しかし私のこの全文登載の目的は、全体の說話にあるゝ從つて、全体としては、この多少の伏字も、左程煩はされてゐはすまいと思ふ。）

稚兒乃草紙

仁和寺の關白の程にや　世おぼえいみじく聞し給貴僧（ふ）おはしけり　御歲たけ（長）たるまゝに三密の行法の薰修つもり（積）て　験德ならび（並）なくおはしけれどもなおも（なほ）この事をすて給はざりけり　童おほく侍（る）中に　こゝになつかしく御そひぶし（添臥）にまいる（参）は一人ぞありける　貴（き）も賤（しき）

もさかり（盛）すぎたる御身になれば　はる〴〵（かカ）しくこのわざもつき（?）地にしん（?）さしの風情にて
たゞ○○○○○○○○ばかりの箭いろにてぞ、井ヽ（(?)いゝカ）事はおもひ（思）よらずしてぞありける　此
蕫ほい（本意）なきことにおもひければ　夜々したゝめて　まづ中太と云ふめのと子の男をよびて
○○○させて‥‥（二字分闕字）せられつゝのちにはおほき（大）らかなる○○○と云ふ物をもちて○
○○て　丁子などをすり（摺）て○○○○○○せけり　この男心を入れてかく宮仕（こ）けれは○○○
○てたへ（堪）がたきまゝに　○○○をぞ○○ける　火をおこしてあぶりしたゝめてぞまいりけ
る　老の眠はもとよりはやくさむる（覺）事なれば　つれ〴〵（徒然）におはするまゝに　この蕫を○○
○○○○給ひけり　かやうにしたゝめおほせければ　すこしもとゞこほりなく　○○けり
か様に心に入てすら兒もありがたくこそ侍らめ

二　これにかぎる（限）べきことならばこそ　よふけ（夜更）なば御よるにならぬさきにまいらん
するこ（ずるにカ）さいま（今）はひる（晝カ）こそ思日（思ひ）あたらめ　心みじかき物かな
さててつき（手突きカ）○○○　（こゝに、中太と稚兒の挿繪あり）

一（中太）　かやうに毎夜のしるしに　とき〴〵は心の○○○○○○○○たまはばこそ

いよ〱このみ(好)まいらせ候はむずれ　あまり(餘)に　思ひやりのおはしまし候はぬこそ
たのも(頼)しからず候へ　このたび(度)ばかりは心の〇〇〇〇〇候はん

二　さらばいま(今)ちと〇〇く〇〇〇〇てさてあらん

二　あはれせむ(詮)なきことにて候ものかな　これならぬ奉公も候ものを　ゆゝしく〇〇
の〇〇候てたへ(堪)がたく候まゝに〇〇〇を夜ごとに〇〇候へば〇〇の〇〇かよは(か弱)くな
り候て　たもち〱かうは　（こゝに、稚兒の〇を火桶の火にてふきたれる中太の圖あり）
(?)ににくまれ候に　いま(今)はさゝ(支)へ候はん　ゆゝしくかうはしく(香ばしく)おはしまし候ぞ　しう(主)
ながらもさもむつかしき御〇〇〇〇いみじき御思こそ候はざらめ　こゝ〇〇候はん
まで　〇〇をお〇〇〇〇候はゞや
あら心なのふき(吹)やうや　みなひとのいかしたをやきたるぞや（たカ）　あなあつ(熱)や

はじめは　忍もぢずり忍つゝいろにはいでじとしけれども　新かまのさとの　あながちに
心の色ふかくなりければ　忍はつべき涙ならねば　袖のしがらみかくとばかりはもゝして
けり　此童あさましと思ける　心にまかせぬ身にしあれば　ちからなき事也おもひたえ給
へと度々申ければども　いつとなく　いかゞはすべきなどうちくどきければ　此事あらはれ
なば世にあるべきこゝにも侍らず　こゝにかやうに心ざしの給へば　さのみはいかゞたが
へたてまつるべき　夜深程になりて　この御口の草のなかに隠ておはせよと　たのめてけ
り　なが月のころなりければ　すゝきかるかやなどのなかに　隠居たりけり　此童おとゝ
の童にあひて　もしめしあらばここにてよび給へ　はたらきたまはでおはせよと云て　縁
におとゝハ童をおきて　此僧の隠居たるすゝきのなかにゆきて　ひゝたれ着ながら　○を
○○げて　○○○○るを　月のひかりに　これを見るに　いと心もこゝろなくて　すゝき
のなかより　○○○○○いだして　○○○みてけり　露ふかくおける草むらなれば　○○
わたりに○○のしづくうちそひて　ぬれわたりつゝ　いよ〳〵もの○○○りければ草ごみ
にて　てのきはして各帰にけり　たがひに心ざしあさからざりければ　よなゝゝごとの事
なれども　知人もなし　か様になさけぶかきことは　すくなくこそ　出家の後まで志ある

さくゐにてあるよし　たしかにうけ給候ひし

一　としごろの思は　たゝのまくそかなひ候ぬれ　これも本尊の御たすけにや　いかにし候てか　これことにかやうにみつから申さにて候べき　あらたへがたところがらにや

二　ひごろもみづから申べきおり〳〵は　候ひしかど　人の御心もたのまれず候しかば申さでこそ　すぎて候しが　いまはかくへだてなき事にて候へば　いそへのなみの　おりよく候はんときは　さこそ身にしむあきの風のけしきはおりしりがほにこそ

嵯峨の邊に時々かよひ給いみじき僧御けり　槐門の家をいでゝ　無爲の道に入　三史九經をすてゝ　天臺六十局を翫ゐければ　煩惱即菩提の觀門に　善惡不二の理をあらはし　生死即涅槃の同躰諸法皆空義をさとり給てければ　御心にまかせて　兒どをはしけり　常に御そば近くまいる童ありけり　御心ざしふかき事たぐひもまれなりけり　御房人に此道に

心をいれたる僧ありけり　いかゞしてとおもふ心ふかくてことさら此兒にとりいりてありければ　童もさるにこそとおもひけれども　これもかみきびしきに　かくもれ聞へるは身にも安穩にありがたかりければ　只知らぬ樣にて侍ける程に　この僧便宜ありけるに　心のいろをあらはして　としごろのことをかたるをうち聞より　この童ことはりと覺て　湯におりたりけるに　此僧をよびて　ともにあひけり　まづ○○を以て僧○○○○○りてやがて○○○○て　湯舟○○○○○て　前ざま○○○○○○○てけり　これのみにもあらず　それより　なつかしきものにおもひて　御前ちかく御とのゐをせさせて　我身房主御房とねながら○許を○○○○して　まかせけり　かゝるためしもありたき事也

一　これはいかなる事ぞや　さらにうつゝともおほえぬものかな　かゝるいみじきことは　いまだ身にとりては　おぼえ候はず　この日ごろの御心つよさこそいよ〳〵うらめしく候へ　あはれ○○たくさんのことかな

二　まことにひごろ申かはされしことはみのとがとこそおぼしめしよらぬことにて候

しかば申事(す)も候はず　いまはわすれきせおはしまし候はざらん事こそうれしく候へ

ぐう〳〵　（こゝに、主の御房の眠れる圖あり）

二　たま(?)しゐもあるに　こりてこそ人のおそろしき事も候へ　かくて〇〇〇〇きながら〳〵しなばや法師らは

一　あまりにけしからず　ののしらせおはしまして　ひこおごろかさせまいらせさせ給いな　返しも物おそろしく候ぞ　ちかく〇〇〇〇、〇〇かん

法勝寺の邊に　貴人のいとをしくし給ひける童ありけり　武藝をこのみて　ひ（此處二字分闕字）はかかひの邊尊勝寺はざまなどに　夜々たちて　惡情をこのむ童にてぞ侍け(り)る　見めかたちこのもしらかなりければ　見る僧は心をかよはしけり　その中に中間法師のなまこしおさなしきありけり　いかゞすべきさ年來わびけり　これを人しりなば　追出にあづからむこうたがひあるべからず　これをいろにいでずば　又この世にながらふべきにあらざりければ　くちよりほかへはいださねども　けいきばかりをしらせてけり　この童さしら心

たて〲しけれども(けカ)　此道をばすて(捨)ざりけるやらむ　年おさなしき(大人)ものの　やせ(瘠)おとろへ(衰)るをみて(見)　むざん(無慙)にもおぼし(思)ければ(えカ)　ひま(隙)をはかりて　この法師をへや(部屋)へよびて　足をあ(洗)らはするやうにて　○○○○○○○たりければ　この法師　見るもあまり(餘)にあさましくかなしく(悲)おぼし(覺)て(えカ)　ぬれ(濡)たる手にて　○○○○たるに　すこしも我を○○ともおぼさ(思)ずげなれば　○○○○○○○たりければ　さわるものもなく○○○○様にてこぶし(拳)の○○まで○○ぬ　おもひ(思)にたゝず(へカ)やがて○○○○○○　この童心ざしふかき(深)ものをば　いかにもすて(捨)ざりけり　ほかのもの御房人などをなさけ(情)をかけゝれば　ありがたきためし(例)にぞ申ける

一　あし(足)をば　あらは(洗)せて　いづく○○○○　あらしれ(痴)がまし　なに(何)とすることぞ

二　とし(年)のよりて候あひだ(間)　め(眼)がくら(暗)く候て　心のひく○○○てかゝけられ(手がかけられカ)候ぞや
なにかはくるし(苦)く候はむ　御あはれみ候へかし　ひごろ(日頃)の心のうちをしら(知)せおはしまし候はぬにやらん

大正十二年九月二十七日印刷納本
大正十二年十月一日發行
第十三冊（毎月一回一日刊行）

本文

原始的な稚兒物（完）
エロチックスに滲む心持
典籍の燒却、古美術の壞滅

尾崎久彌著

第十三冊

典籍の燒却、古美術の壞滅

今度の東京及横濱其他の震災は、傷ましい限りであつた。わけても東京には、私は哀傷の夥だしいものがある。それは、謂ふ迄もなく、典籍の燒却、古美術の壞滅である。さりわけ私の今やつてゐる仕事に近い軟派本の無數、帝大の圖書室にあつたさいふ數百の蒟蒻本や、かれが聞いてゐた安田文庫の古刻物や、好古堂の錦繪類はごうなつたか。暫く後に、小林文七氏の宅も駄目さ聞いて、あの無慮何十萬圓の肉筆板畫の無數の浮世繪の運命は。私は、あの時、號外の出るたび、くだらぬ三越や松坂屋、帝劇などの、（さし障りがあるかも知れぬが）燃えたこさを報らしてくれるよりも、中々待つても帝大や、京橋、神田、淺草あたりのその私の悲しむ範圍の知れないのが憤はろしかつた。帝室博物館も苦になつたが、これも中々分らなかつた。今になつて人々は折々帝大の圖書室燒却のことを、新聞の遲まきの報道や紹介で讀んだりして、喋々するものもあるが、あの當時何人も如何なる新聞も安否を顧慮しないかのやうに見えた、私には、それが實利に隨してゐる人々の弊のやうに見えて淺ましかつた。

なぜ、帝大あたりは、日本銀行の安全であつたさ同樣に、以前から設備されてゐなかつたのだらうか。金にも人の命に更もへられぬさ今でこそ人はいふが、然らば何故せめて金さ同じ待遇を與へられてゐなかつたか。地下室の設備がなぜなかつたらうか。私は今更に當局者の迂濶さ、腹立たしさは何さもいへぬ。

私は、それらを自分が借覽したこさもなければ、又今後も借りようさも考へてゐなかつた。然し私は、一身の便宜は不問、物その物さしてそれを惜む。當局の迂濶さを憤るのだ。諸君は官學の威を藉り、資を藉り、蒐集し盡した。しかもそれらは多く門外不出であつた。徒らに少數の教授連や、學生の閑餘の繙讀に委するのみであつた。しかもそれらは一旦にして今度燒盡した。天災さ謂ふ勿れ。誠に私は悲しい。憤はろしい。諸君は諸君の官學の倉庫を、なぜ天下の物さして廣く利用せしめ、また天下の物さしてその安全を計り、且つ警備しなかつたか。横濱の某藏書家は、藏書さ共に燒死したさいふ。それ程の意氣がなぜなかつたか。——然し今日さなつては、凡てが、唯、憐み、憐み。徒らに空に叫んだ所で仕方がない。

唯、今後は、古書の壟斷、獨占は無論止めて門戸の開放、及び設備の完全を願つておかう。古本の賣價釣上の苦は何さも忍ぶより仕方がない。それに浮世繪でもさうだ、好古堂あたりは、復活するかごうか。當分は、甲の手から乙の手へ、仲介人になつて少々の利を見る位ゐのこさであらう。迚も燒失以前のやうな倉に二萬三萬の材料を貯へ得ることは、こゝ廿年は難かしからう。古美術を個人や商店が獨占することも今後は考へ物だ。文化の平均の發達を望む内閣ならば、此際、否今後、ごし〳〵民間有志又は商店の古美術を買占め以て日本銀行式の安全の設備を施し、四時開放して國民一般の共有物さなさしむべきだ。帝大あたりの今後の古書蒐集もせめてこの覺悟でやつて貰ひたい。私は、大倉男爵閣下の古美術燒却よりも、好古堂や小林氏や帝大の軟派本をごれ程に傷むか知れやしない。

私自身でも此頃は自分の藏書や浮世繪類に一方ならぬ考慮を拂つてゐる。九月六日頃は當地にも例の流言が行はれた。私はおびえた一身に代る程の金目のものさいつてはない、さいつて今これを燒かれたら、創作家に鞍替らぬ限り、明日からは茫然自失だ。それなごうしようかさ何れ程にも苦んだ。坪内氏は逸早く早大圖書館に全部を寄附されたさいふ。私は附近に寄附すべき何物をも持たぬ。また喜ばれさうな先方もない。また坪内氏に對する早大程の安全を圖つてくれさうもない。さにかく坪内氏でもさうだが無論寄附しても自分が自由に今後使用することは條件であらねばならぬ。それには、いかに設備が完全でも、遠隔の地では駄目だ。私のやうなかうした非文化的の都市（東京京都よりも一層の）に住むものは同志相集りて共立保存館を作るか、又は一身郊外にでも住むかしなければ駄目だ。

それにしても救はれなかつた歌麿よ春信よ北齋よ廣重よ清長よ、蒟蒻本よ番附よ正本よ黄表紙よ、古寫本よ浮世草紙よ、私は自分の畠だけでもこれだけを並べ得られるその無數の燒却に、諳然たらざるを得ぬ。また、大英博物館などに拐はれて行つた方がその物自身のためにはましだつたのだ。噫。

二　とし月はもし御心もやすこしおぼしめしたるとこそ思ひまいらせて候へども　ゆく水の心ちして候へば　おそれ丶丶かくまいりか丶りて候　これはいかなる事ぞやしに〇ぬ

一　まづあしをあらはせて　わほうしはなにごするぞ　ひごろ心ふかく思ひけるこそかへす〲もいとをしけれ

北山なるところに　一念三千の觀に心をそめ　五想(?)外身の理をさする僧おはしき　ここのならひなれば　こころざしあさからぬ童をぞもちゐたりける　心ばひなだらかにて　はかなきあそびたわぶれにいたるまでも　座をさまさず侍(り)ければ　御同宿などもうけおもひてぞありける　貴人の御愛童を　人手をのくべきにもあらず　況(んや)御氣色あしき事にて　よにはしたなきこともありけるより　□□(二字不明)はかばかしくよそながらもたちよる御門弟もなし　としいまだわからかなりける僧　この童をおもひかけてけり　さるべきおり〱をもとめてほのめかさむと　心中にはあんじたりけれども　便宜もなかりければ　この童のすむ所のぬりごめのうちにつねはふしければ　僧さきにはい入てかくれゐたりけるに　童なに心

もなくいり（入）けるに　あやしき（怪）さまなるひと（人）の　けしき（氣色）しければ　なげきわび（嘆侘）たりけるに
やごおかしく（可笑）おぼえて見ぬてい（体）にもてなして　ぬりごめ（塗籠）のたれ（垂）布よりなら羅井いでゝ（なかなぐらひいでゝカ）　お
さなき冠者のあるさものがたり（物語）し　文などよみてそひぶし（添臥）て　○○○○○つくに　はた
らかざりければ　やがて○○をひき○○て○○○つるに　なを（なほ）しもおぞろき（驚）たる　さつく（？）
もなく　もとよりの達者にてありければ　いとわづらひなく　○○○○○りにけり　こ
の童なを（なほ）物がたり（語）してさりげなきてい（体）にぞもてなしける　ぬりごめ（塗籠）にきりいた（切板）をして常は（にカ）
かよはせけり

しばし御渡候へかし　けしから（怪）ずの御いそぎ（急）や

まことゝ

あやしきことゞもかな　ひとりを御とゞめあるとはねたや

心なし　いざやかへ（歸）らん

一　いまは〇〇〇〇〇〇〇〇

二　いやたゞしばしかくてもてあそびて　のちに〇〇かへして〇〇〇かんに

この人々のみるらんわざ〳〵しさは

みるとてはいかゞすべき　〇〇〇や　おそ〳〵

一　これほ(ご)〇〇〇物〇〇〇〇〇〇りては候べき　口のひまあらばこそ　くはしうは

申候はめ

あらびんなや

いかなる事候ぞ

(こゝに稚兒の圖あり。)

一　あらうまや　ちごにがく候

二　これもよく候へどもち（些）としはゝ（鹽はゆくカ）ゆく候ぞや

一　う（生）まれてこのかた　〇〇〇たる事はいまだ候はず　よきくせ（癖）とおぼ（覺）え候　あはれ（一字闕）御口よさしかな

一　あらしら〱しや　さわ（騒）がしや　いかなる（如何）御事候ぞ

元亨元六十八盡寫訖

伏字甚だ多かつたことは誠に遺憾であるが、然し大体に於てその輪廓を察知せられたことと思ふ。私の命じて「原始的」といふ稱呼に殆ど近いものがありはしなからうか。殊に編中挿める二三の繪を見るに、こも頗る古雅なる筆致である。しかも文と同樣、寫實的なる所も混へ居れば、以て後世の斯道小說類の魁たりと目すべきに足るものならんか。如何。

エロチックスに滲む心持

嘗て私がものし、本著にもその一部を發表する所あつた「浮世繪師の心理」とはまたすつかり異つた、艶畵を描いた浮世繪畵家の「何が故に描きしや」、又、「いかなる心持に於て」てふ彼等自らの心理と、それを需要し切望した民衆の「何が故にこを得むと欲したか」、又「如何なる心持を以てこを披いたか」の心理と、その二つに觸れて見たいと思ふのが、本論の主要眼である。

凡て藝術は、いかな個人的の色彩の強い、作家の個性味の著しい作と雖も、その内部には、該時代の民心と(或は時代を超絕した永遠の人間性ともいふべきものと)那邊に於てか接觸しつつある。比較的この個性味が勝つてゐるか、或は此の民心の要求に對する適從味が多いかの差である。艶畵及その作家たる浮世繪師の、外部の描かれた形の上にも内部の秘められた畵家の心の上にも、無論此の二つが何れかが強いか弱いかの差であるだけで、歸する所は、いかな個性本位と覺ゆる作家及其作品からでも、民心への適從味は爭はれぬもの、容易に指點し得るものであらうと思ふ。

したがつて、私は、艶書に滲む心持を說くに方つても、一は、必ず民衆の心理――需要心理を先づ忽緖に附することは出來ないと思ふ。究竟すれば、物は、需要あるが故に生れるのではなからうか。供給あるが故に需要が生るゝのではなくしてである。此の萬有一揆の理法は、無論この艶書の發生、及び既に現れ、既に發達し來つた江戸時代無數の、全浮世繪發達期を通じて誰でもの作家がものせるこの書風の批判にも、加へらるべきものと思ふ。故に、私は、本記述を、需要側と供給側とより見、先づ需要側の心理から觸れて行きたいと思ふ。

人々は、何が故に、艶書なる一種の非公開書を要求し、その發達を翹望し、且つその盛行を見るに至つて、歡喜措く能はなかつたか。(以下、人々。民衆なる語は、無論江戸期の人々、民衆に限られてゐることを、含んで頂かねばならぬ。)いかなる心持からこれを見むと欲したであらうか。これを需めこれを拔かんと欲したか。第一に是である。こは、士君子たりとも容易に首肯し能ふ事であらう。我等の喋々を俟たざること、事自明の理であらう。宇宙儼存の意識、文化の創造、その發達、凡て「我」あるが故にである。千万年の昔よりこの「我」があり、この「我」が無數に擴大して行つたからに外ならぬ。而してこの「我」は何處より生れしや。神秘なる手の至妙なる運動斡旋は姑く不問とし、一にその素材として陰陽男女の二性ありしが爲ではなかつた

か。男女相存在して、始めて「我」生れ、始めてこの「我」が「我」を生むべく、生れながらの生存欲と中期に於て自覺せる生殖欲これに熾烈な勢を以て加はりたると、以てその一生を自己の「我」と「第二の我」との爲めに、及びその「我」を存在せしむる環境の爲に、自然的の奉仕、協同を爲し、以て此の一時期の「我」を終るのではなからうか。即ち凡てが、異性の相牽引より生れたのである。人類の文化、生活の進み來りたる現代にありては、性欲の他に、雜多なる環境及其の事件に對する即ち我等の人文促進の爲に、「我」の發展欲を發現するありと雖も、その半面には、必ずこの「我」の原始的なる、本然的たる、「我」一個の天然の營み、即ち性の營みを爲しつつあるではないか。恐らく此の生殖欲こそは、或は他の尙一個の原始的欲望たる生存欲よりも更に强きものあらう。即ち生殖を完全に理想的に果さんとして、生存欲を否定するもの頻々たるあるの現象は、今日でも然りではないか。即ち生存欲も此の生殖欲の完全なる實行ありての隨伴たるが故にである。

却說、この生殖欲が最大最强の人間性、人間欲求である限り、我等の艷書、或は艷書要求の潜在意識と相均しき相近き軟派軟文學追髓の心（文學も廣汎的な藝術も、その人間に最も觸はるゝは、凡て此の軟のみであり、即ち軟のみが文學であり藝術であると、斷言してもよいかも知れぬ。然し、今假に特に軟の形容詞を附けておく。）も亦必然的の現象であらう。即ち此等は、最も端的なる自他共通

の性的生活の表現、進んではその美化である。理想化である。自己の行爲を何らかの形を以て表現し、又はそれを跡づけんとするは、即ち「我」の「我」を印せんとするは、誰しも人間の欲望。故に艶畵の如きも、其の創始時期にありては、單なる自己の性的生活の表現、印痕、かうした心理によつて生れたのであらう。無論當時は、彼等個々が、爲す人即ち描く人であつたのであらう。然るに時は移つた、年は世紀を追うた。人智は取捨選擇、美醜の判別力を有する所謂優秀なるの域に達した。彼等は、より完全なる、より美なるものを凡てに欲した。自己之を作り得ずんば、他代つて我に與へんことを希ふに至つた。乃ち、今我等が問題とさせる人類性的シーンの表現――艶畵の上にも、優秀なる美化されたるもの、進歩したるもの、より複雜なるもの、より變化あるもの、更に平凡より異常へ、より異常なるものへ、恰も個々の性欲自身も單純より複雜、更には變態異常にと進みゆくが如く、然る自然の要求がそこに生れたらうことは、必然であり、然る事實ありきと斷言すとも必ずしも妄ならじと信ずる。即ち玆に、艶畵の發生、該畵家の發生、若しくは畵家の執筆動機の根本原因ありと思ふ。（分業組織に進み來つたことも、この機運を促進せしめた一因ではあらう。）

以上は、餘りに迂遠なる然し凡庸なる詮索なりと嗤笑を買つたかも知れぬ。然しこれが、根本

であり、凡てはこれより發するものと信ずるが故に架說したのである。以上は勿論艶書を含んだ廣汎なる性的藝術、文學の上にも謂ひうることである。さて今度は、時代のすべてを通じ、すべての民庶が、特に艶書の形式に、かの物に、何が故に爾く要求の熾んなるありや、より微妙なるこの詮索に移らう。即ち一に彼等が、端的に自己の性的生活の一縮圖として此等を見むと欲する點に於て、艶書を選擇し、又要求してゐるのだと思ふ。軟文學軟藝術あらゆるものよりも、その骨子を端的に具現するは、その艶書唯一あるのみである。即ち彼等は、端的に自己の眞をそこに再現、或は直視せんとして、艶書を描き、後には特業的なる一畫家の手より產み出だされたる此等の艶書に、その欲望を充足せしめた。而して更に人々の感情が複雜になりゆきつゝあつた世紀後に於ては、更に此の我の再現直視以上、我をして蠱惑せしめ挑發せしむるものとして、彼等を選んだであらうと思ふ。より多くの性的生活の沈淪、その複雜化變化、それが爲には、自己の發見と共に、他の無數の發見の例を見倣はんとした、そこに艶書より受くる蠱惑の、自己性的生活との交涉が釀さるゝのであつた。即ち人々は、原始的なる本能から、人間的の知識の複雜に趁りつゝあつたのである。自己の經驗に、他の經驗を吸集せんとしたのである。即ち彼等は、自己の性的生活を深め複雜化せんがために、他の經驗を知らんと、それに

倣はんとしたのである。その結果はより複雜、終には誇張變態をすら知らず識らず求むるに至つた。即ち原始の眞純が發達の墮落に導かれ來つたのである。（この徑路は、艶畫そのものの變化、内容の發達上にも謂ひ得られる。然しこは、後段の供給心理（畫家心理）に於て、悉しくいはう。）

無經驗者に對する性的敎科書であつたといふよりも、有經驗者に對するより多くの經驗補充の器、更に鈍りたる感覺、或は生來鈍感なる彼等或は單調平凡化せんとするに對する刺戟劑であつたといふのである。而して江戸時代の民心は、いかなる時代もこの艶畫需要が民衆の内部にあつた。御殿女中、或は未經驗者の經驗有事の際（結婚）に於ける、或は幻想的自己滿足、或は性的敎科書（母のをしへの代用たる）といふよりも、寧ろ成人者の間に、有婦者有夫者の間に歡迎されたこと頗る多し、十中の八九は然りであつたらうと思ふ。そは、浮世繪の凡ては、ぶの眞面目側に屬する公刋の美人畫風俗畫と雖も凡てその多くは、特殊なる畫（艶畫）に於けると共通の、有經驗者が他の變化ある、相違せる經驗を得て喜び、以て自家藥籠中の物となし了せんとする体（てい）の民衆心理が働き具現されてゐた。凡てに所謂あぶなき風姿、匂ひを漂はせるを目にして、自己のエロチックなる感じを深めんとした。しかもその氣分の理解、陶醉者輩が（即ち錦繪の賞鑑者が）成人者流に寧ろ多かつたことよりして、即ち些少の經驗ある者、偉大なる經驗にそ

つかりて、いよ〳〵喜ぶ体(てい)の心理の發現に外ならなかつたに顧みての、予の斷言である。蒟蒻本、濡れ場多き芝居、(或は俗曲)を歡迎し、勿論理解したのも皆、成人者にその過半を占めてゐた。即ち些少の經驗なくゝんば、何んぞより複雜なる經驗の理解、それに對する歡迎、興味湧かざらんやは明白なる理ではないか。

彼等は、即ち如斯く性の蠱惑を端的に得んが爲に、その描かれたる說かれたる內容を以て自己の生活の素材たらしめ、經驗の補充たらしめんが爲に、平凡化を防ぐ唯一の刺戟たらしめんが爲めに、艶書に對した、之を要求した。是れ最大動機である。然りと雖も尙他にかゝる事もいひ得よう。即ちこは、當時代の民族心理の考察上からではあるが。即ち、痛ましき憐れなる封建時代の、人間の本能たる自己發展欲を阻害して措かぬ所の、人々個性の自由、表現の爲には最不幸時代、暗黑時代ともいふべき江戶時代に於ては、此等の上に、自己を韜晦し、寧ろ此等の上に豪者たらんとし、若しくは、その幻象に浸(ひた)らんとするの他はなかつた。一將軍のみに比較的自由が殘されてあつた。量の相違こそあれ、上は大名より下は町人に至るまで、凡て自己の自由、發現をあらゆる方面に杜絕されてあつた。遺(のこ)されてあつたのは、唯一、性的生活の上のみであつた。大名の折花攀柳、町人の二十四文狂ひも凡て此の欲望——個性の自由欲、表

現欲の轉換に外ならぬ。將軍と雖も時代、制度の些少の奴隷たらざるは得なかつた。即ち彼等將軍に漁色放蕩者流の頻出したるも、一に此に、時代、制度の束縛に對する憤懣を遣れんとする自慰の心にあらうと思ふ。況してそれ以下のものに於てをや。即ち彼等は、性の國に於て、纔かに、自己の飛翔を求めた。自由、征服、瑰奇の快感、充足感を求めた。その傾向に隨伴し大部分これの氣分を煽り、或は訓へ、これを導いたものは、多くの軟派文學藝術、就中端的には浮世繪、就中々、此の艶畫の類であらうと思ふ。自由、征服は、頓て常態より變態にまで趁らしめた。彼等の或者は艶畫に現るゝ獸欲に、同性相姦に、變態欲に喝采した。龍陽の不神聖は、士人より町人にまで流行しつつあつた。家庭の婦よりも性の蠱惑味多き娼婦に隨喜した。こも一に、彼等のより惡しき進化の跡である。艶畫家は、彼等（民衆）の欲求に副ふべく凡てを描いた。殊に民衆の征服欲、性の國の王君たらんことを欲する民衆の心理に伴ふべく、多くその主人公を、彼等の大多數が羨望しつつあつた貴族階級、殊に最高階級の將軍、若しくは諸侯の秘事にその取材を藉りた。江戸末期無數の源氏繪、其流の艶畫（種彦作の草双紙たる田舍源氏の主人公足利光氏、其の實十一代將軍家齊をモデルとせりてふ源氏に關する繪を源氏繪といふ）の類は、その露骨なるものであつた。即ち彼等は、此等の艶畫によりて、色界の自由者、最大權力者、暴力者、征服者、士人たらんとし大名たらんとし、果は將軍たら

んとしたのである。即ち亦彼等の心理可憐ならずやといひたい。

需要者（民衆）の心理は、此に姑らく息め、以下筆を改めて、今度は畫家、艶畫の供給者の心理に考察を移さねばならぬ。

供給側――浮世繪師の方からいへば、やはり本然の要求に驅られて物するのと、即ち本然の立場と、一は、之を他の何物かに利用せんとの、即ち功利的の立場との二あることは、無論である。然し、畫家――供給者。民衆――需要者たりと爾く截然たる區別の附き來つた後世にありては、如上の中寧ろ本然性の立場は菲く、功利的の發途がその主を占めてゐるといつてよからう。而してその功利的な、自己の何物かにこを利用せんとしたことに於いても、我等はその動機の上に雜多な區別を認めるが、今先づその二大特長ともいふべきを列擧し解說し、以て彼等――畫家の艶畫に對する主要なる態度――功利的の二大方面を先づ闡かにしよう。

功利的な彼等の立場に、純と不純との正に相反した動機から起る二種の著しきがある。純なるは、則ち自己の畫技の熟達研鑽上の好機、材料としてこの艶畫の描線に習熟せんことを努めたのである。従つて素描のもの、或は密畫的のもの、種々にその傾向を追うて、肉体の衣を被

らせたる、或は装らせざる男女の描線の習熟に努めた。而してこれが習熟の根本には、無論粉本として自國同派の諸先輩の板畫肉筆。更に明清の畫圖に據つたのであるが、往々には、モデルを有して、これを實寫したと思はるゝのも尠くはない。甚しきは顔面の微細なる表情にまで實寫的にである。姿態は甚しく不自然且つ變態を極むるも、その柔しかも靭なる肉体の描線には、寫實をはなれたる寫實、姿態の變態不自然の如きも、彼等の入神の技によりて、常態。眞をはなれたる第二の眞となつてゐるものも少くはない。とにかく根本は、寫實、又は眞實に近邇せることに重きをおき、それより出でゝ多少、個性。趣味の相違、或は畫家自身の性的興奮の強さ弱さの相違から、畫樣にも異なる寫實、或はうそから出たまことゝなり了せざる僞、或は虎を描いて猫に類するものや、或は天衣無縫、寫實と理想とが相融化し、心飛び魂消ゆる恍惚境を非寫實的に描き出してゐるものも間々ある。がその根柢は、矢張り一個の實である。それを楔子として、騰れるか、又は降れるかの相違である。

とにかく此等の種別があるにもせよ、彼等の殆どが、此の艶畫の描畫に親しむことを以て、彼等の畫技、主に人物畫の習練の具とした。この一事は、古來誰しもの熟知せる所、敢て再び細說するの要はなからう。次に不純なる動機からの功利的な立場とは何であらうか。謂ふ迄も

なく、賣らむかな、の卑しき心の發はれである。俗衆——否殆どの民心に媚びんとする、而して自己の畫技を誇らんとする、甚しきは、に出つて自己の名聲を高めんとする、即ち自己の畫家としての發展欲のまた一機會にこれを使用したかの觀あることである。好色多淫なる當時の人心に只管媚びんとして、能事終れりとなすものも少くはなかつた。即ち娼婦が嫖客にあらゆる姿態と、あらゆる言辭を弄して、自己の情そこに伴はざる誘惑教唆を試むるが如く、單に阿堵物の爲、比較的進みたるものなほ自己の秀拔なる技巧に對するその效果の靦然擧れるを見て自ら喜ぶてふ卑しき胸臆より出でたる、一は打算、一は自負に對する自らの滿足愉悦、かゝるものに過ぎなかつた。然りと雖も偶々には眞に戀愛國の幻想に自ら醉ひ、或はその一部を自己若しくは自己に邇きにモデルを藉りて、これを表現し、自己一身の好色心滿足の意味に於ける落筆も少くはない。寧ろ、これ等は、前者所說の如き他を度内に措けるよりは、大いに至純なるものと謂ふべきにはあらざる乎。春信より歌麿にいたる間の作家の多くは、此の比較的純なる立場にあつた。即ち自ら作る甘き戀愛のシーンに陶醉、その描畫も、自ら微笑む体の自己の趣味を以て貫けるものを見るのである。然れども、その歌麿等にありても、「歌さんは憎いね」の類を、畫中の人物をして曰はしむるを見ば、そこに、不純なる動機、自己の畫技の效果を、

自ら進んで廣告せんとしたる、卑しき心持の仄めくを肯定せざるを得ぬ。

事、微妙なる該畫家の胸裡の臆測に關し、妄りに斷言し能はぬものであるが、中には、自己の性感の魯鈍、或は先天的の能力薄弱を、寧ろ自己の畫技の上に、その正反の異常なる好色、猛烈なる漁色の場面を交々展開描畫し來つて、以て自体の缺陷又は境遇によりて畫面の如き放肆豪奢なる實行を杜ぎられたる自憤の情を自ら滿たさんとしたのもなかつたであらうか。(恰も西の國の小說家ゾラが、自己の性的不能を、例の姦淫小說の連作を以て滿足したりとの一說の如く)浮世繪畫家は、當時の戲作者と同じく大凡そ花柳の豪者(實際上の)ではあつた。しかし年齡に反比例せる性的能力の頽廢にはいかに剛情なる、聰明なる彼等も如何ともする能はなかつたであらう。かの歌麿の如きも殆ど遊君畫家、青樓畫家たるを冠せらるゝ程、遊君青樓を以て自己の畫材とした。成程彼が荒蕩であつたとの傳說も無きにあらざれど、それは壯時と限られてゐる。晩年なほ鞏强なる性的能力ありしや否や。寧ろ表現者製作者自身は、却つて幻想の中にそのモデルを藉り、或は寧ろ想像誇大が多く、若しくは他にモデルを藉りたる多きにはあらなかつたらうか。溪齋英泉も、その繪本類は多少の材料の複雜を見るも、その板畫の全部は、女性、殊に娼婦――歌麿の遊君に比して、これは娼婦といふ下卑たる名詞が最も適好である程、それ程、彼は、卑しきしかも人間本然の、全裸体的の、性欲その

ものといひたき婦女を描いた。恰も明治文學の紅葉氏の脂粉をかさね、綾羅をまとひ、彼の性格とは寧ろ反對ともいふべき暑苦しき、戀愛國の女王の如く描破されたる女性を以て歌麿描くの美なりとせば、「女子は生殖器を中心として成されたるもの」と喝破せる緑雨氏の女性は、英泉にあらずして何ぞ。大名に張りを通した太夫の存在は、すでに歌麿當時には眇影だに殘してゐなかつたが、然し彼の作畫には時として如斯き女性崇拜のものあるを見る。然るに、英泉に至りては、唯に男子の玩弄、よくいへばとて男子にあらゆる嬌笑、媚態を投げかくる女性として描かれたるもののみ。英泉の畫には必ずそこに性欲伴ひ、歌麿の畫には必ずそこに戀愛伴なふ。

事、英泉と歌麿二畫の比較論ではなかつた。筆端、思はずも平生の予の抱懷に觸れたるを許せ。（なほこの英泉歌麿の比較は、予が舊著「浮世繪の印象」にも、「神性と獸性」と題して觸れておいた。本著にも何れ機を見てその悉しきを說かうと思ふ。）

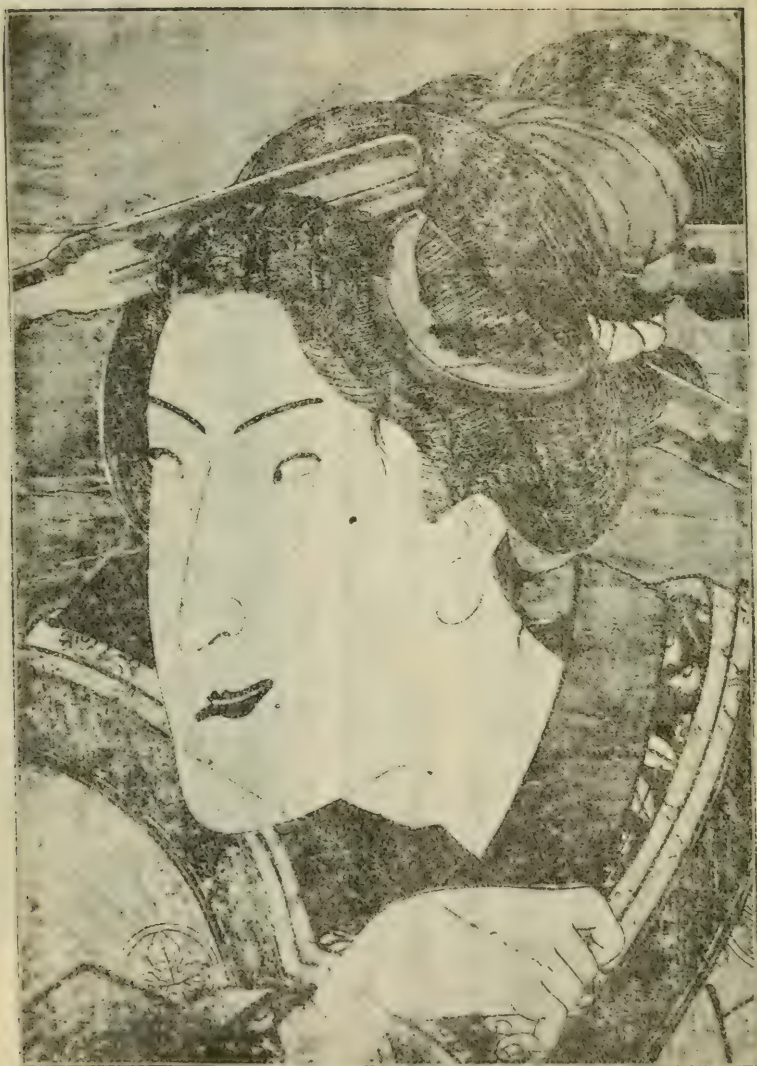
以上を以て、一は需要者民衆から、二は供給者――畫家からの艶畫（エロチックス）の上に浸（ひた）された心持を逼く說き終つた。さらば、我等は、終りに臨んで、一應、德川泰平二百餘年間に現はれた我等の目睹せる範圍に於ける艶畫の、直接、畫そのものの上に滲（にじ）む畫家自身の心持、隨つて印銘の差を前文と重複せざる程度に於て列擧し、大たいに評隲してみよう。表を以て示せば、

（陶醉感）祐信――政信――春信――湖龍齋――春章――清長――春潮――榮之――歌麿

（皮肉感）歌麿――初代豐國――北齋――英泉――國貞――國芳

（挑發感）英泉――國貞――國芳――歌川及菊川末派

右の表示に據るが如く、歌麿の如きは、陶醉感にも足を踏み入れ、また皮肉感にも踏み入れてゐる。即ち此の如きは、二者併有と見るべきが故である。（皮肉感と挑發感とに於ける、英泉、國貞、國芳の三者の如きも、兩者併有と見るべきである）尙、此の以外には、廣重をいふべきであるが、此は年代の順を以て曰はゞ、無論皮肉感の末であらうが、彼の艶畫の氣分は、寧ろ陶醉感である。即ち如斯き例外無きにしもあらざるも大半は、右の表示が妥當ならんと思ふ。識者以て如何となす。勿論此の三大別は即ち陶醉（悉しくは自己陶醉）より皮肉（くはしくは對他皮肉。）へ、更に挑發（くはしくは對他挑發。）への推移は、各畫家の一々に據らずとも、艶畫發達の上の當然の歸結、過程であるかも知れない。自己陶醉は、醇である。對他は內に於て不醇を加へ、挑發に至りては不醇の不醇、墮落である。然しこは、艶畫といふよりも寧ろ一般美人畫の變遷の大潮流、滔々たる不可抗の推移にして、如何ともすべからざるものかも知れない。試みに公刊の一枚繪、春信の淨潔なる戀愛美人畫と末期芳幾あたりの美人畫のしだらなき新東京娼婦とを比較せよ、何人もそこに陶醉のうらゝかなる峠より蠢々たる挑發の谷底に陷り來つ

艶本「訓楽極遊」の口絵　　不審房又平画

たことは、否めぬ目睹事であらう。況して艶書に於て此の傾向著しきものがある。しかし陶醉も極まれば、稍そこに目覺めたる自己意識を喚び起し、他に對する皮肉を產まざるを得ない。歌麿の如きも、甘きシーン（描畫の上の）に自ら浸（ひた）ると見せかけて、その實そにより多く陶醉せしめらるゝ自己以外（觀客）の未經驗、若しくは幼稚なる、僅かにして魅了され易き、我等の眼と心とを嗤笑してゐるのかも知れぬ。「歌さんは憎いね」の類は、この皮肉萬幅たりである。國貞、國芳わけて英泉の如き、皮肉萬幅、殊に彼等が念入りに描ける何でもなき彼等の艶書本の口繪（最初第一枚目表面の繪）の如きは、（この類の口繪は、既に春章、春潮、歌麿輩にも可なり念入りなるものありといへども、それらは單なる風姿、さらでもなき表情の女、若しくは男の顏、半身のみ）何たる皮肉橫溢ぞ。挑發といはゞ、彼等の他の該流義の畫、若しくは彼等の末輩たる挑發期の挑發畫樣よりも更に、以上なる挑發感を與へ、しかもその實何でもなく、ことをして挑發的なりといふは、見るものの卑しさに出ると云ひたげの其の描線、顏貌、風態、皮肉の極と謂はば極、挑發の極といはゞこれ程の挑發はあるまい。我等の偏狹なる好惡の情よりせば、我等の艶書に期待するは、寧ろ此の第一の繪、何でもなき、その實大に何でもある繪也。しかも陶醉に厭（あ）き、挑發に反感を抱いたる果、この皮肉さを見れば、三斗の溜飲忽焉として下るの感あり。英泉の如きは、まじめなる公刊なる、大錦判の錦繪にも、その大首繪、或は一人坐、一人立の繪には、間々その

大正十二年十月二十七日印刷納本
大正十二年十一月一日發行
第十四冊（毎月一回一日刊行）

本文

エロチックスに滲む心持（完）
方外道人著の「江戸名物詩」
原始的な稚兒物補遺

第十四册

尾崎久彌著

「原始的な稚兒物」補遺

第十二冊、「原始的な稚兒物」の解題中に、新百家說林の蜀山人の說を引いて、男色物を列擧した中に、「岩つゝじ」の一篇をうつかりノベルのやうな形に說いておいた。其後、讀者たる某氏からも指摘されて氣がついたことであるが、成程、國書刊行會本の、蜀山人編の隨筆集「三十幅」の中に、その「岩つゝじ」の全篇が登載されてゐた。堅い物ばかりの隨筆集の「三十幅」も始めて間に合ふ光榮を得たものである。「三十幅」の第一に岩つゝじはあつたである。三十幅の此の刊本を手にした時は、根が季吟の物ゆゑ、そのまゝ深く見もしなかつたのである。燈臺下暗しとはかゝる類であらう。「三十幅」第一の岩つゝじで見ると、丁度菊版二十頁ばかりの量である。成程、ノベルではなく、勅撰集其他から、男色に關した短歌を集めたものである。上下の二卷に分れてゐて、別に補遺が付いてゐる。古今和歌集第十一戀一の「思ひ出るときはの山の岩つゝじいはねばこそあれ戀しきものを」の歌がはじめに載つてゐる。こゝから、岩つゝじの名が起つたのであらう。歌の作者は殆ど僧徒で、それ以外公卿ではホンの二三を數へるのみである。以て此の變態道がいかに僧徒に因習せられたかと分明であらう。選した歌集は、古今、拾遺後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、續詞花、拾玉集などで、歌集以外では、大和物語、松帆物語。補遺は、諸記、諸隨筆からの拔萃で寧ろ補遺の方に面白いものが多々ある。大內義隆記、源賢法眼集、井蛙眼目、眞光院紀行、宗祇筑紫紀行、坂士佛伊勢太神宮參詣記、著聞集、宗長日記、萬葉第四の家持の久須麻呂に贈つた歌などである。歌としては、大抵平凡な戀歌で、勿論小生の發表した「稚兒の草紙」のやうな實感の猛烈な、內容の豐醇なものは一つもない。僧徒の間に、此の變態道が盛行した、といふ例證にはなるが、それ以上心理の考察には無論駄目であるし、變態性欲文學の古典としては薄つぺらなものだ。今左に、その敍だけを拔載しておかう。まだ此の敍の方が比較的面白いと思ふ。

「うましおとめをよろこぶは、女神男神の神代より、人の心のまさにしかるべきことはりなるを、うまし男をしも女ならでさるすける物おもひの花に醉るは、あやしくことなるに似たるわざながら、その妹背の山は佛のいましめさせ給へる所なれば、さすがに岩木にしもあらぬ心のやるかたにて、法の師のわけ入り初めし道なるを、つくばねの峯のしたに流れ落ちては、みなの川の淵となれることのごとく、末の世にはかへりて女男の情よりも猶そこひなきこととなりて、上達部うへ人などはさらにもいはず、たけきもののふの心をもなやまし、爪木をこる山賤も、なほ此の若木の陰に立ちよらずといふことなくぞなりにけり。しかれど是をやまとうたによみ出たることは、されまで多からずまづ古今和歌集のなかには、高野大師の御弟子眞雅僧都のときはの山のひと歌あり。これやかの色好みの家の風をつたへ花薄のほに顯れて、まめなる人にもかたり傳ふることと成けらし。其外にも代々の撰集にのせられし言の葉、拾遺集より新古今まではわづかにちりまじりにたれど、そののち十三代集の中には、つや〳〵見出るふしも侍らず、もしやありもや侍りけん、伊勢、源氏の物語、狹衣、枕草紙などにもさま〳〵戀草の色をつくして書きつらねたれど猶この一くさはもらしたりき。かくまれなる物はわりなく見まほしき人の心のくせなればにや、ある人此のくさ〴〵のふる言の葉を見出てよとしゐてのぞまるゝに、こよひ延寶四とせ八月十六夜つれ〴〵とふりくらし雨にむかひて、むなしく月を戀るもあやなければ、ひとり燈をかゝげて、かつ古今集よりはじめ、敷島の道の草双紙、また歌ならぬ物がたりの中などにても、やさしく捨てがたきことあれば、見るにしたがひて書あつめつゝ、岩つゝじと名づくめり、近き世がたりにはいとけやく目おどろかるゝこと多かれど、これにはのせず、此頃の事は人も耳なれて珍らかならず、かつは世にはゞかるべきこともおのづからある也ければなり。

北村季吟書之

「原始的な稚兒物」の塡字につき

仙臺の富士崎氏名古屋の中野氏其他數十氏より御切望により、謄寫版にしてアレを埋めることにした。不日刷ります。御入用の方は、費用の分擔として送料共郵券貳錢二枚を添へて、十一月十日までに申込まれたし。所用の數より刷りません。

然るに近きものを見受くれども、然れども大錦の此等にありては、寧ろしかるが當然にして、何となれば、枕、衾、行燈、懷を覗ける彼女の頤の如きによりて、然るを既に何處までも念押しをれば也。即ち却つて、我等に艶書の、淫猥本位なるにしかも、冒頭に掲げられたる、オヤ何でもない本だよといひたさうな口繪の、その實他の全卷の艶書に勝ること數等なるものある此等に、駭心驚目、我等は、感激の甚しきものなくんばあらずといひたい。普通艶畫樣の露骨さ、その實如何に異態新工夫を凝すも結果は、同じ效果に終るべきよりも、寧ろ或る皮膜をそれに被らせ、その實相は、人々の想像の自由なる翼の飛翔に委したらん方、より效果ありげに思はるゝは非か、予のみの懷にや。この機微を穿ち、そを具体化し、併せてその巧妙なる畫技の皮肉感を盛れるもの、彼等○印の扉繪ならずとせんや。

却說、艶畫の挑發本位の物の如きは、予は唯、赤し、毒々し、醜亦醜といはんのみ。他に何等曰ふことなし。さてこゝに諸賢に艶畫中、皮肉ぶりの極點、予の目して最大傑作と稱するものの一枚を掲げん。こは、不器用又平(初代國貞)畫、女好庵主人、天保壬辰三津春正月 世川極樂遊(土器お傳に關する和印本の一種金蓮堂(耕編筆)行)の口繪全一葉也。諸賢、その眼、その表情の以て純艶畫以上なり、予の言の妄ならざるを知り給へと云爾。(英泉作艶本の口繪にも割愛すべからざるものあれど、惜い哉、彼の畫は常と男女一對なり。したがつて稍皮肉さが露骨なり。故に此に略く)

方外道人著の『江戸名物詩』

此の九月一日、並に二日の兩日(大正十二年)に亘つた未曾有の震災のため、舊東京は殆ど壞滅した。無論舊東京に纔かにして殘りつゝあつた舊江戸の面影は、此際相伴うてその輪廓を消すに至つたのである。江戸趣味と人々がいふ。無論此の備く呼ばれた江戸趣味は、我等の「江戸」なる、いにしへの見ぬ世の幻想に浸らんとする時々に限つて與へられた一種の感興であり、興奮であり、好尙であつた。然しまだ最近までは、その好尙、思慕の機緣として、如實に近い一面として、我等の想像の翼の支障の主要部分として、舊東京があつた。舊東京は、此の意味に於て、我等の江戸趣味の一面の好資料であつた。然るに我等の「江戸」は、此の曉、斷然と當時代の稗史繪畵に據らずんば全くその好尙の如實さは不可能となり了つたのである。そもこの震災によつて、我等の感ずる先づ一の衝擊である。從來と雖も、その我等の江戸思慕の感じはその豊かなるは、潤へるは、舊稗史舊繪畵にありて、舊東京の餘影にはなかつた。然しかくとは知り乍ら、なきを強ひて索めんとする舊東京に對する、我等の凡情的なはかなき總望があつた。それが此際、すつぱりと破壞されてしまつたのである。即ち、「東京」によつて江戸を感じ知らんとし、その如實さの神髓の消却に嘆く、しかる幻滅の悲哀を、今後「東京」によりて繰り返す煩は全然除却されたのである。即ち我等は、典籍の上に、稗史の上に、繪畵の上に、專ら知らんと欲するもののみ知らば可なりの簡捷さに愈々斷定せられたのである。こゝに震災そのものゝ我等に先づ與へた反動的教唆があると

思ふ。

さうした感想に追はれて、最初私の取り出したものは、方外道人といへる男の著した「江戸名物詩」である。天保頃に都下に喧傳せられた名物の各肆に對する狂詩の創作、とその編である。名物詩の各肆は、殆ど今次の震災區域にあつた。舊東京の一部に即ちまだその殘骸を保つてゐた筈である此等も、すつかり根絶やしに遭つた譯である。私は、此の「江戸名物詩」を手にして、憮然とした。これまで左程氣にもとめなかつたその內容の一つ〳〵の狂詩が、あらためて、生きた思慕の燃料となつて、私の心にいやさいふ程の熱を、感激を、刺戟を與へた。私は自個一人にそれが濟まされなくなつた。同好、同癖の士にもこれが頒ちたくなつた。是れ、こゝにその「江戸名物詩」の解題と、並びにその全內容の紹介とに及んだ所以である。

寔に「江戸名物詩」は、さらでも天保當時の江戸四民の好尙、生活振の一端を知る好資料、しかも一は、此際震災によりて愈々滅亡に歸した舊江戸の各店舗、飲食調度其他の滅びたる波殘を偲ぶよすがには、恰適な具たり得るのである。さて一たい、この「江戸名物詩」の著者方外道人とはいかなる人物であつたか。「江戸名物詩」の此の署名を見るにいたつた以前は、曾て私の知る所なかつた男である。人名辭書を檢索すると、一は、此の名物詩の序を基として、一は別に木下梅庵として、二個異人物たるかの如く、錄されてゐる。

方外道人　狂詩家なり本姓は福井氏通稱を健藏と曰ひ梅庵と號す天保中の人家世々醫を業とす江戸に住す道人出でゝ木下氏を嗣ぐ其の人となりや風流洒落狂詩を好み茶菓詩、江戸名物詩等を著す一時人口に膾炙する所なり（文莊漫錄、江戸名物詩序）

木下梅庵　江戸の詩人にして名は健、字は成美通稱健藏方外道人と號す天保中の人なり。（廣益諸家人名錄）

前の「方外道人」の項は、後にも示す如く、名物詩の序をそのまゝといひたい。唯、「江戸に住す」並に「一時人口に膾炙する所なり」の二項を缺くのみである。後の廣益諸家人名錄に據つた「木下梅庵」の項は、前者と別人の如く取扱はれ居るが、その中、前者に缺くる所は、名は健、字は成美、の二項である。即ち寧ろ本業詩人にして、醫は、父祖の衣鉢を纔かに嗣いだに過ぎないのであらう。詩を本業としたことは、前と後の此の二詩の合致する所でもあり、且つ以下に示す「名物詩」冐頭の、迂庵主人の序「余暇尙從事刀圭」とあるを見ても知らるゝのである。

方外道人（木下梅庵）の略傳そのものは、以上で盡きるとして、尙、以上に洩れたることは、その交友關係、並びに狂詩人としての當時の位置等である。交友關係には、名物詩の卷頭に、當時の儒宗たる東條琴臺（寛政七年芝宇多川町に生る。先哲叢談續篇等雜著頗る多し。維新前後、越後高田榊原氏に聘せらる。明治十一年歿。八十四歳）が叙してゐる所を見れ

ば（琴臺、此の序の時、四十二歳）殊に「彼之明暢者、森嚴者、清艶者、無不盡在」と推奨してゐる所を見れば、當時既に狂詩家として單に無名の徒でなかつたことが知れよう。其他、岡部標齋（本草家。明治三年歿、六十六。「江戸名物詩」に跋す。）。中西研齋（江戸の書家。通稱原吾。名は惟寅、字は子恭、小溪堂と號す。生歿年不詳。）。廣澤文齋（江戸の儒者）。松本董齋（草書を能くせる書家。法眼に叙す。明治三年歿）。花笠文京（戲作者の一。東條氏。琴臺の弟。万延元（或は安政元）歿、七十六。）。二世立川焉馬（戲作者）。畑銀鷄（金鍋の子。醫家にして、狂歌狂文をよくす。天保頃。）。菊地五山（高松侯の儒官。市川寛齋の門下。詩を以て鳴る。安政年間歿。年八十四。）。宮澤雲山（詩人。市川寛齋門下。嘉永五年歿。七十五。）。秦星塢（書家。星池の男。）等の醫家、儒者、戲作者、詩人等を交友としたことは、此等の諸家の肖像を、「江戸名物詩」冒頭の「諸先生品諸名物之圖」に、溪齋畫（此圖、序の第六丁ウラより第七丁全部、三面。但し、余の藏本になし。今、安藤軾氏本によりて補ふ。）としたに據つても知れよう。

而して此等の肖像の中には、吾人の寡聞なる、なほ他に數個の名家を逸してゐるかも知れない參考の爲、「品諸名物之圖」に現れたその人名の全部を擧げておかう。伊三。惟草。文齋。董齋。桃林。接天。妓竹（妓の竹なる意。こは無論酒間斡旋の一人物。諸先生の中には入らず。）標齋。錦河。文京。文雄。通澄。南枝。（以上、右の一面。）涼々。梅月（女）。焉馬。研齋。靜一。五山。眞的。星塢。鐵鷄。文囿（女）。柳涯。銀鷄。琴臺（以上、左の一面。）。抱儀。六山。松守。雲山。東溟。春亭。竹雪（女）。文營（女）。雪下。春久。武雄。竹營。村彥。（以上、そのウラ一面。）人物總數、妓竹共三十九名。内梅月、文囿、竹雪、文營の四女姓あり文囿、文營は、文齋の門下か。竹雪は、竹營の門下か。以上の諸人物、溪齋畫（英泉）であつて

顏も皆相當に描き分けられてをり、頭髮（剃髮のもの多し。）、着衣（琴臺の上下。其他種々なる、階級を現すべく扮裝を異にせり。）、大刀の有無などの書別けによつて、相當に個人の寫生に據つたであらうと思ふ。圖は、六七人づゝ一團となりて、或は酒食（この酒食も名物であり其の品評であらう）、或は茶菓（同上）、或は他の名物を中央にしての品評の圖である。飮食の品評に興つたものたちは就中、有德の野に中つたと喜んでゐるのであらう。

次に、方外道人につき、遺憾なことは、彼の生歿年月日不明なることであるが、こは、差當りその典據は一もない。唯類推を借りれば、名物詩のはじめに、「方外道人名物詩推敲之圖」とある圖の中に、方外の肖像（袴、差添。着坐して、坐邊に菓子鉢やうの名物數個を置く）として、まだ若き感じの顏を描けることである。二十五六の表貌なることである。然れば無論明治初期まで或は生存してゐたのかも知れない。琴臺すら當時四十二歲であつた。しかも彼自ら琴臺老人と署した早老流行の當時故、案外方外自身も、年齒としては若かつたのかも知れない。次に彼の師系は全く不明である。唯銅脈（畠中氏。京師の人。狂詩に巧ゝ名は正盈、歡齋と號す。字はれむる。綽名を銅脈といふ。通稱は頼母。蜀山人同時の人。享和元年歿。）に私淑する所あつたのみであらうと思はれる。何となれば、「名物詩」のはじめに、「銅脈先生肖像」として、銅脈の肖像を一面入れ居れるが故にである。（別に、次の面に、純澤散人題の、銅脈に關する右の賛あり）以上、覺束なき詮索のまゝを記しておく。

さて、「江戸名物詩」そのものゝ解決にうつる。「名物詩」は、予の藏本（元、尾張八幡町、館氏藏本）は、初編

一冊である。二編ありしや否やは全く不明である。本の体裁は半紙四つ折大、見返しに、梅庵道人著、江戸名物詩、樂木書屋藏と三行にある。（此の板元に就て、予の疑問を其儘に擧げておかう。即ち、此の樂木書屋とは、此の書の跋文筆者たる阿部櫟齋の號から來てはゐないか。櫟は樂木である。而してこは一部此流好事家の道樂出版ではなからうか。或は、各舗から出版費を夫々分擔させてゐるのかも知れぬが）全丁數は、序七、扉一、本文十七（内、第二丁はさと又の二二重出せり）跋一、計二十六である。内、序中に「銅脈先生肖像」（半丁）「方外道人名物詩推敲之圖」（同）「諸先生品諸名物之圖」（一丁半。ヒラキ二面とその裏一面。）と三圖を挿み、本文には、「越後屋」（三越）（此圖、半丁。全一面。以下特に註せざるものは、凡て此半丁、全一面也。）「日本橋通一丁目の豪華」、「山本屋」、「古梅園」、「大丸」、「二州橋」（両國）、「日野屋」、「長井兵助」（此の圖、ヒラキ二面。）「淺草遠景」（同）「吉原」（同）「かよひ鮓」（吉原仲之町。）、「柳菴書の、通ひ鮓の詩」、（詩は、無論方外の作。唯別格として特に、左一面を費せしものか。）「森山蒲燒」（水道橋附近。）、「同森山蒲燒の贊」（これも方外の作。櫻所道人書とあつて、全一面。）、「越川屋、並に住吉屋」（ツヾキ、ヒラキ二面。）、「網中の鯉」（濱田屋に關せるものか、）、「向島附近」、「墨水の花」、「長命寺前の櫻餅」、の以上數圖を挿入してゐる。（但し、此等は、獨立したものではなく、本文と表、又は裏をなしてゐる。）挿繪畫家としては、予の知れる限りは、卷頭の「品諸名物之圖」の溪齋（英泉）と、「越川屋、住吉屋」（同溪齋）、「仲之町かよひずし」の國直（初代豊國門人。人情本に多く挿繪あり。）の二浮世繪師と並に雪堤（長谷川氏。江戸名所圖會の畫者同雪旦の子。名は宗一。明治十五年歿。年六十四）の三者あるのみである。然し他と雖も相當な他派の畫家であらうが、今檢索の煩を略く。唯、左に、その畫者の名のみを擧げておかう、所山。飄々山人。雪堤。源舜。雲峨。文兆。國直。

南涯。遠齋。綠山。溪齋。秋義女史。章。浩雪。他署名なきもの四。

さていよ〳〵本文の全部紹介にうつらう。（本文は、一面を罫九行。一名物に置きも三行。即ち前後の二面を除き、他は、一面に三名物の割也。）

梅庵道人著

江戸名物詩

樂木書屋藏　[樂木]

（以上、表紙裏見返し）

江戸名物詩序

周詩楚騷。其言既舊。緬思時變。不能無樂府歌行。纖焉則偶儷之明暢。律絕之森嚴。詞曲之淸艷。愈出愈新。各有所長。要亦永聲之一端耳矣。我土所謂。狂詩者。遇物抒情。能寫性靈。與風人旨。無以異焉。世之學者。以其辭易解。概以爲鄙俚淺俗可謂誤矣。方外道人有見於此。狂詩惟耽。其人既狂。頃著斯編以狂其不狂者。彼之明暢者。森嚴者。淸艷者。無不盡在。是亦言志之一端耳矣。余欲詳序其意。事長辭短。不獲覼縷。聊題言引首丙申秋

琴臺老人雨窓對客書　　董齋閑人書[印][印]

（以上、序の第一丁）

江戸名物詩序

方外道人遊ニ無何有鄕一夢爲ニ胡蝶一栩々然入ニ

常春國裏飛翔紫霧紅塵間親天香逐衆
芳隨時世之樣取當今之意俄然而覺將
記其所得者然恬憺虛無自厭其煩乃撰短
詩以記物之名干世者名曰名物詩非敢
為定名以傳之千不朽唯欲託有名之物以
記無名之詩耳道人此槀夢矣虛矣無為矣寓
言矣讀者莫以飲食之徒而議道人可也

天保丙申春三月學半道人識

江山閑人書□□

（以上、序の第二丁）

江戸名物詩序

方外道人。本姓福井氏。通稱健藏。號梅庵。
家世為醫。道人出。嗣于木下氏。其為人也。

方外道人著の「江戸名物詩」

風流洒落。好所謂狂詩者。賦之自娛。蓋抱有
為之材焉、適乎無用者也。予聞之友人享父焉、
既而。得讀其所著茶菓詩。今復有此集。名物
之情可謂詳而盡矣、與彼區々于禮法而。不解
時宜者。論不同日也。聞道人改業。餘暇尙從
事刀圭。起死回生。亦或有焉。此集之出又安
知不換世間俗骨之神丹耶。

丙申春日迂庵主人題

煙霞釣叟書

（以上、序の第三丁）

常惱平仄成窩襍不叶自由自在言可憐不療消渴
輩孰似我太平樂顏

代方外人　苦吟上人

鐵鷄習書

（以上、序の第四丁表）

（此處、序の第四丁裏、「銅脈先生肖像」、鐵鷄習寫なるあり。全一面。）

於文於詩如繫錢不切不離似通索金歟
銀歟賤難分誰疑銅脈不銅脈

純澤散人題

呂栗庵書

（以上、序の第五丁表）

（此處、序の第五丁裏、方外道人名物詩推敲之圖、春峰圖なるあり。全一面。）

我是放蕩無賴生只於惡態飽紅情先師跡斷
困家督乍憚汲流噴太平

代方外道人接天堂主題

六山閑人書

（以上序の第六丁表）

（此處、序の第六丁裏より第七丁裏表の三面に亘り、溪齋畫の諸先生品諸名物之圖あり。但し、予の藏本之を略く）

（此處、無丁。扉の表。江戸名物詩の五字のみ）

四里四方江戸中家々名物家々風穿鑿縱横濃
吟味坐見天下泰平功

題名物詩卷首　凡智子

曲藪散人書［印］

（以上、扉のウラ）

（以下、本文第一丁始まる）

（尚、本文は、凡て句点を略けるも、今讀み易からしむるため之を附し置きたり。返點、送假名は一切原文のマヽさせり。）

江戸名物詩初編

江戸　方外道人　著

不拘順序

越後屋呉服　駿河町角

兩側一町三井店。小僧判取帳場遐。半時商內何千貫。知是繁昌江戸花。

下村山城油　本兩替町

三都無レ類山城製。貴賤珍重六十州。貯得道中經二幾日一。不レ融不レ替一番油。

鈴木越後羊羹　本町一丁目

江戸誰知越後名。本町入口土藏宏。當時處處多二新製一。依レ舊羊羹天下鳴。

方外道人著の「江戸名物詩」

三馬江戸水　全二丁目

近年三馬大流行。德利往來店不レ違。賣出繁昌江戸水。粧成八百八町娘。

玉屋紅　全所

朱旗搖影本町風。認得暖簾玉屋中。世上人々貴二寒製一。買來猪口幾杯紅。（以上、第一丁）

（此處、第二丁表、全面、三越の圖）

丸角屋仕立　本町二丁目

紙入服紗巾着類。年々織出新工夫。近年胴亂多二鞠形一。古渡印甸縞廣東。

鳥飼和泉饅頭　本町三丁目

鳥飼和泉無二鳥飼一。饅頭日々注文多。唯歎皮薄餡尤好。荷出蒸籠日幾荷。

酢屋三臓圓　本町四丁目

箱入人參三臟圓。本家酢屋本町邊。世間勞症
虛分者。一劑嘗來性命全。（以上、第二丁）

近江屋太牢饌　室町一丁目

銅網招牌近牢店。反本巴艾太牢饌。黃牛肉製
宜進酒。又是味噌與甘泉。

近江屋感應丸　同所

正野法橋玄三製。驅役萬病都回春。一粒百
疋滅法價。乍去即効實如神。

十時庵金砂挺　伊勢町裏川岸

仙方補藥金砂挺。吞來即坐五體寧。新製天行
避邪法。梅香一炷十時馨。

美濃屋消毒散　南槇町川岸

南槇町邊金瓢簞。梅花萬能諸瘡安。就中賣弘
消毒散。日吞一匙不侵寒。

住伊吳服　日本橋中通

京都織物新帶地。判取帳場小僧忙。跳物手附
三日限。金泥染類決不啇。

瓢簞茶漬　同　浮世小路

俳偕之開小集筵。浮世茶漬忙出前。坐間並掛
多少句。客人笑指是翁連。（以上又ノ第二丁）

百川樓參會　日本橋浮世小路

諸家振舞名弘宴。貸切更無一日休。浮世小路
浮世客。百千來會百川樓。

唐林小倉野　日本橋西河岸

甘味十分小倉野。喰來一碗薄茶淸。卷皮養性
遠山餅。盡是唐林新製名。

紀伊國屋喜世留　四日市

喜世留多四日市。紀伊國屋大繁昌。赤銅眞鍮

流行形。毛彫金銀盡地張。（以上、第三丁表）

（此處、第三丁裏全面、所山諸の通一丁目（？）豪華の圖）

須原屋武鑑　通一丁目

藏板尤多須原屋。袖珍武鑑一家榮。年中役替仕官改。日日刊成海內行。

白木屋諸式　同上

諸式注文望次第。貯收品物不可量。唯非吳服絲而已。萬事人間無盡藏。

山本屋山本山　同　二丁目

買者立并客如市。番頭手代少無間。一時賣出三千斤。多是自園山本山。

古梅園古墨　通二丁目

南都仕入松井店。日本橋南輸墨塲。紫玉書奴揩來處。筆端乍爲古梅香。

方外道人著の「江戸名物詩」

本惣茶道具　新右衛門町角

靑磁染付高麗物。備前瀬戸古唐津。所持道具多名器。鑑定當今第一人。

金花堂雁皮紙　通四丁目

半切文筒短冊鮮。暑中團扇幾多錢。金花堂上金花發。染出雁皮五色箋。（以上、第四丁）

（此處、第五丁の表、日本橋附近の圖。瓢々山人畫。蛇山題。商家に〇〇の印あるは、山本屋か。）

（此處、第五丁の裏。蕉窓翁題の古梅園の圖。）

文魁堂筆硯　通四丁目

水筆羊毫小文筆。端溪和硯製尤新。誂來日日書生客。半是米庵門下人。

味噌屋元結　南傳馬町一丁目西側新道

元結賣初味噌屋。數年不絕店繁昌。金柑尤細

奴尤太。都爲二人間頭上霜一。

紀伊國屋於滿鮓　上槇町新道

何歳初開鮓屋店。連綿數代市中鳴。海苔玉子壚梅妙。知是女房於滿情。

明月堂蕎麥

明月堂中新蕎麥。蒔書重箱注文忙。盛來白髮三千丈。挽拔無レ交似個長。

環菊煎茶　中橋廣小路

湯湧釜鳴甘菊家。掃除店淨牀几斜。休來南北東西客。煎出山吹喜撰茶。

木谷實母散

江戸中橋實母散。和方神妙即効奇。產前產後皆通用。最好婦人血道時。（以上、第六丁）

壚瀬饅頭　南傳馬町四丁目

傳馬町頭壚瀬店。饅頭元祖製尤新。每朝蒸立皮如レ解。爭買世間下戸人。

坂本氏仙女香　同　三丁目

新板讀來草紙傍。此家口上兩三章。京橋之北春風夕。町內吹薰仙女香。

玉木屋煑豆　芝口一丁目

玉木煑來坐禪豆。干瓢銀杏小梅新。主人賣初知何歳。定是九年面壁春。

大好庵金化粧　芝神明門前

名久神明門外店。沈香白檀伽羅芳。古來別有二兒女愛一。大好庵中金化粧。

兼康祐元齒磨　柴井町

看板仮名文字白。兼康數代齒磨香。口中諸病多二奇藥一。盡是祐元家秘方。

堺屋反魂丹　芝田町四丁目

田町元祖反魂丹。一粒呑來諸病安。霍亂食傷又腹痛。懷中貯得萬人歡。（以上、第七丁）

（此處、第八丁表。大丸の圖）

（此處、第八丁裏。雪堤圖、林齋題の二州橋の景）

大丸屋新形　通旅籠町

流行新形流行縞。仕込澤山滿土藏。忽去忽來四方客。町人武士半分娘。

越後屋播磨菓子　石町

新製流行播磨捺。詰來菓子艶於花。人人攜至知何處。定是權門取次家。

釜屋艾　小網町

往來看板一町高。知是伊吹釜屋艾。土用寒前注文多。子供中小大人大。

翁屋翁煎餅　照降町角

砂糖上品味尤輕。進物年中客自榮。縱有結構干菓子。如此煎餅少江城。

萬久煮染　芳町

滿鉢長芋燒豆腐。干瓢椎茸露自含。一重見舞幕之內。味得直知萬久甘。

松本蘭奢水　住吉町

賣出一方蘭奢水。鬢付鉛粉製尤芳。家名松本紋銀杏。看板彫成岩戸香。（以上、第九丁）

四方赤味噌　新和泉町

劒菱瀧水土藏充。上戶往來嘗舌通。出店分家行處在。味噌赤似四方紅。

鶴屋錦繪　通油町

役者似顏國貞筆。狂言寫出響三都。近來別有

流行書。田舍源氏數編圖。

玉屋花火　兩國吉川町

流星虎尾入雲鳴。十二挑灯照水明。兩國年々大花火。滿城喚囃玉屋聲。

松本屋稀荳丸　兩國廣小路

稀荳松本家傳方。看板高懸兩國濱。平生服用身無病。買來近在近鄉人。

扇面亭書畫扇　兩國横山町肴店

文晁武清米庵筆。五山詩佛綠陰詩。年年仕込新書畫。扇面賣初發會時。

若松屋幾代餅　同　吉川町

兩國一番若松屋。雜煮汁粉客來頻。世間名物多零落。幾代獨歷幾代春。（以上、第十丁）

和泉屋唐本　兩國横山丁三丁目

玉巖堂上多唐本。經史文集土藏餘。誰道主人尤好事。百千書名腹中儲。

日野屋小間物　同　三丁目

主人閑月曉連祖。諸色道具店頭堆。近來新製一奇品。貴賤爭買脊令臺。

與兵衞鮓　向兩國元丁

流行鮓屋町々在。此頃新開兩國東。路次奥名與兵衞。客來爭坐二間中。（以上、第十一丁の表）

（此處、第十一丁の裏。溪斎（？）筆の日野屋の圖、暖簾にせきれいだいと見ゆ。成程、店頭に武士あり、町人あり）

大能志彈初　兩國同朋町新地　柳橋南角

今日彈初何檢校。勾當四度互爭吟。三絃胡弓河東節。一曲人歡豐一琴。

萬八書畫會　淺草平右衞門町　柳橋北角

萬八樓上書畫會。不拘晴雨御來臨。先生席

上皆揮毫。帳面頻付收納金。

日高屋繪馬　淺草御門外

江戸一軒繪馬初。家藏眞筆梶原書。日高淺草御門外。六百年來此住居。（以上、第十二丁の表）

（此處、第十二丁の裏と第十三丁の表とヒラキ二面、雲峨寫、長井居合拔の圖）

丸屋大團子　御藏前瓦町

土間店廣御藏前。丸屋盤中團子圓。評判從來大安賣。一盆喰盡腹便便。

長井兵助齒磨　御藏前

看板太刀正面飾。兵助居合上三方。人人待得今將拔。齒入齒磨口上長。

山口屋仕立　淺草並木町

鞠形利休煙草入。流行金物製尤濃。通人相見若相門。並木町頭山兵縫。（以上、第十三丁裏）

（次に、第十四丁全ナシ。所藏本並に安藤氏本とも第十四丁を欠く。是れ、第二丁の重出によりて、この一丁を略けるものか。）

村田喜世留　淺草御藏前

店自繁昌品自鮮。風流仕込在村田。近來新製文人張。吸出詩歌幾首煙。

永樂屋干海苔　淺草雷神門前

帖帖乾來積如紙。年年賣出早春風。白魚吸物豆腐汁。纔有一枚味不同。

金龍山餅　淺草寺境內

金龍山畔金龍餅。餅白餡甘黃粉新。日日觀音參詣客。掛腰頻食幾多人。（以上、第十五丁表）

（此處、第十五丁裏より第十六丁表へ、ヒラキ金龍山の遠景、立兆寫）

（此處、第十六丁裏より第十七丁表へ、ヒラキ吉原大門の景。立兆寫）

薪屋蕎麥　吾妻橋川端

薪屋無薪又無炭。坐舗二階大川濱。唯今淺草爲名物。歳歳年々蕎麥新。

八百善仕出　新鳥越

八百善名響海東。年中仕出太平風。此家欲識壚梅妙。請見數編料理通。

田川屋料理　金杉大恩寺前

風爐場淨在干庭。酔後浴來酒乍醒。會席薄茶料理好。駐春亭是駐人亭。（以上、第十七丁裏）

（此處、第十八丁表。仲の町かよひずしの圖。國直寫）

吉原通鮓

吉原名物両三種。通鮓此頃製尤奇。遊客通來多喰盡。樓中首尾十分宜。

（此一詩にて、第十八丁裏全部。此の詩、柳庵の書。下に南涯の笹さ、遠齋の白魚さあり。）

竹村最中月　吉原中ノ町

色白最中一片月。巻來煎餅品尤嘉。暑寒年玉又時候。茶屋携行得意家。

橋屋助惣燒　麹町三丁目大横丁

助惣燒始助惣燒。極上壚梅聞四方。先祖由來住居久。家名自與麹町長。

鈴木兵庫菊一煎餅　仝所大通

兵庫麹町三丁目。誂來煎餅客紛紛。古今唯製朝顔形。燒傚風流菊一紋。

於鐵牡丹餅　仝北横丁馬場角

馬場之角一軒家。於鐵數年此地誇。盛出盆中胡麻餡。人間賞爲牡丹花。

瓢簞屋蕎麥　四丁目

鎚飩蕎麥瓢簞屋。名字十三町内聞。代代諸家多出入。注文日日客成群。

笹屋粟燒　市谷左内坂

左内坂傍暖簾古。粟燒賣出幾年榮。誰言山手無名物。笹屋一軒市谷鳴。（以上、第十九丁）

（此處、第二十丁表。水道橋森山蒲燒の景。鍬山筆。）

森山蒲燒

水道橋外住水灣。蒲燒評判久世間。此家風景自然好。簷外有森又有山。

（此詩にて、第二十丁裏全部。櫻所道人の書なり。）

萬文加增餅　赤坂御門外

賣初一種加增餅。新製品多客自喧。赤坂町町幾千戶。流行唯是萬文家。

豐嶋屋白酒　神田鎌倉河岸

白酒高名豐嶋屋。氣强色薄一家風。人人欲買多難買。賣始賣終半日中。

方外道人著「江戸名物詩」

內田屋酒店　外神田昌平橋外

昌平橋外內田前。德利如山酒爲泉。孔子門人多上戶。瓢簞携至是顏淵。

深川屋蒲燒　外神田仲町加賀原前

蒲燒名物深川屋。魚切年中休日長。壹步鰻鱺纔一皿。喰來風味異尋常。

龜屋柏葉餅　外神田旅籠町御成道

寶生門外暖簾龜。萬歲千秋柏葉粢。形小色白何足賞。喰來第一味嚐宜。

翁屋煑染　上野廣小路

暖簾高掛翁之面。幾箇盤臺煑染溫。上野花開三月始。辦當重詰注文喧。（以上、第二十一丁）

歡學屋錦袋圓　池ノ端仲町

格子數間錦袋圓。小僧取次靜如禪。請看一

貼百文包。現出観音是結縁。

日野屋小間物　池ノ端仲町

仲町第一日野屋。品物並來望不窮。六十余州
諸名産。此家貯在土藏中。

酒袋香煎　同　所

祇園不及香煎味。下谷仲町酒袋方。買得家家
皆便利。客來先出一杯湯。（以上、第二十二丁表）

（此處、第二十二丁裏より第二十三丁表へ、溪齋
畫のヒラキ、右越川屋、左住吉の店頭雜沓の景）

越川屋袋物　同所仲町

閑清縫細製尤工。仕立從來世上通。胴亂腰帶
懷中物。人人自識越川風。

住吉屋喜世留　同　所

住吉屋名響他疆。人人持得壽更長。買來日日
注文品。半是櫻張出世張。

七澤屋手遊　池ノ端

長持簞笥臺子類。一寸屏風一尺樓。看來兒女
皆歡目。恰似小人島裡遊。（以上、第廿三丁裏）

（此處、第二十四丁表。秋蘋女史に成る老爺、鯉のかゝ
れる手網を肩にせる圖あり。別に桂陰の「試喫江南鯉
魚尾候家无此二杯羹」の題あり）

無極菴蕎麥　池ノ端廣小路

池砌樓高無極菴。近來出店在千南。太平一
碗新蕎麥。開蓋自然香氣合。

濱田屋奈良茶　山下佛店

茶碗大平鯉濃漿。羹附吸物鯛潮烹。坐鋪客夥
濱田屋。混雜唯聞打手聲。

安宅松鮓　御船藏前

本所一番安宅鮓。高名當時莫可並。權家進
物三重折。玉子如金魚水品。（以上、第廿四丁裏）

大正十二年十一月二十七日印刷納本
大正十二年十二月一日發行
第十五冊（每月一回一日刊行）

本文

方外道人著の「江戸名物詩」（完）

評釋 藤蔓戀のしがらみ（３）

文獻罹災遺聞（湯朝竹山人）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十五冊

文獻罹災遺聞

湯朝竹山人

貴誌「江戸軟派研究」の「典籍の焼却」を見たり「江戸名物詩」の貴下の前書を見たり、なほ來信欄に私からお送りしたはがきなど出してゐられるのを見て、私はせつかく忘れてゐたのを忘れようとしてゐた執着の念が湧き起り、貴下へ傳へかつ訴へんとて「文獻災厄見聞」を書きかけて見たのですが、餘り長い記事になつて貴下一人雖毫の「江戸軟派研究」へ厄介をかけるに忍びず、遺憾ながら見合せました。

ただ一つ申上げておきたいのは私の短信中「稿本も多分蒐集に苦心して愛藏したる俗謠の藏書を灰燼に歸し云々」となつてゐるのは「稿本も、多年蒐集に苦心して愛藏したる俗謠の藏書も灰燼に歸し」と書いたつもりだつたのです。別に苦にするほどのことではありませぬけれど、私の性分として一應は申上げておきます。

震災後、私の眼にふれたものでは「東京日日新聞」に連載された内田魯庵氏の「永遠に償はれない文化的大損失」の記事が一番に刺戟を與へました。私はひそかに同氏の筆勞を感謝しました。私の先輩や友人の内にも多數の文獻的罹災者があります。數日前も同鄉の先輩井上通泰博士に南天莊文庫燒失の悔みを申し種々のお尋ねをすると、もうなんにも尋ねてくれるなといはれました。博士は八千卷の藏書を失はれたのです。その内で何が一番惜しいのですかと尋ねたら、三十年前から書いて來た研究の稿本中二十年分を失つた。それが一番をしいといひ、見舞に來た宮内省の役人にも、私は二十年前に死んだものとしてあきらめてゐると、いつたことだというてをられました。

富士山と横濱に關する文獻の藏書家だつた横濱の曾我部一紅君は、藏書と共に火焔裏に消えて仕舞ひました。時と金とを厭はず蒐集研究を續けてゐた巢林子古曲會の細川賀茂君の近松文庫も全部燒失、大阪朝日新聞社へ貸してある僅々二十册ばかりをのこすのみですす前田林外君も全燒しました、同君も私と同鄉人であり歌謠研究家の一人です、燒失藏書中ロシヤ文學の珍籍を失つたことを最も嘆息してゐます。私の近しい二三人だけでもこんな大きな罹災者があつたのです。

私はこんな消息を書くつもりではなかつたのについ筆がすべりました。去る八月上梓拙著「はやま小唄全集」は旅行からかへつて見るはずでしたが市内の書肆へもまだ行きわたらぬ内に板元住吉町法木書店は全燒なので、私は數日前僥倖に發送されてゐた大阪の福田書店からやうやく一册屆けてもらひました。恰も難產の赤ん坊の顏を初めてつくづくと見る思ひがしたのです。江戸趣味小唄を而も著者が大阪の取次店から逆送を頼むが如き事實を想像してください、而も萬事がさういつた失望と不安と煩雜とに襲はれてゐるのが今日の東京生活の實狀です。オヤまた愚痴が出て來る。

帝國ホテルの演藝場で舶來バイオリン名手ヤシヤ、ハイフヱッツ氏とかいふのが拾圓と六圓の入場料で三日間滿員だつたさうです。私も柳橋の燒跡で小唄復興會でも催してやうと計畫はして見たけれど、川向ふ被服廠のお念佛やお題目を聞きながらそんなことをたくらんでは殺されてしまひさうなので、殘念ながら癪の蟲を押へつけてをります。（十一月十五日、東京市外池袋八五三番地にて）

（此處、第二十五丁表。章畫の向島附近の景。蒲路春風踏ニ斜柳蔭竹外水之涯なる白襟山人の書あり）

（此處、第二十五丁裏。浩雪畫の櫻花二朶。松嵐の題を附す）

船橋屋煉羊羹　深川佐賀町

本家久住深川岸。菓子羊羹天下横。縦有ニ同名同店在一。船橋文字自然明。

平清會席　深川

會席風流辰巳誇。坐鋪近對水之涯。尾花梅本山本客。馴染連來此地奢。

大七洗鯉

客込奧庭中二階。温泉石滑暖如レ蒸。酒肴色色湌來處。洗出鯉魚數片冰。（以上、第二十六丁表）

（此處、第二十六丁裏。長命寺附近の景。一任人呼成惡客必敲長命寺前家の柳涯の題あり。）

武藏屋濃漿　同

向島高名武藏屋。春花秋月客來頻。葛西太郎今何在。一碗濃漿風味新。

長命寺櫻餅　同

幟高長命寺邊家。下戸爭買三月頃。此節業平吾妻遊。不レ吟ニ都鳥一吟ニ櫻餅一。

海老屋料理　王子

欄干四面水潺湲。王子一番普請般。初午稲荷權現祭。晩來賣切客空還。

釜屋餞別　品川

遠國奉行發ニ品河一。此家見送客如レ蟻。町人出入同席使。用役頻驚ニ目錄多一。

江戸名物詩初編終　（以上第二十七丁）

方外道人著の「江戸名物詩」

和嶠於馬王濟於錢皆癖也耳杜預於傳自知其癖而不能止者也吾友方外道人襟度洒落好所謂狂詩滑稽諧謔常以爲戲亦癖也耳先刻茶菓詩今復嗣刻此集盖亦自知其癖而不能止者歟余把讀之能記江湖遂件名物諷誦之間眞教人蒐目鴻耳也

思夫自非今之淸世安能得以此爲癖以此爲戲售此傲名物詩之以傲生計乎要亦淸世之餘澤也予與方外同淸世間民而同癖之交久矣刻成之日喜書之云丙申桐月襟齋主人識于雜花繞屋兼蕭四來堂　三峰樵者書（以上、第二十八丁。完）

餘　言

右の江戸名物詩校訂の傍ら、心づきたる各名物の中三四につき、略註を試みよう。

○三馬江戸水（第二丁の裏。）作者部類、三馬の項に、「三馬は板木師菊地茂兵衛の子也。名は太助、總角の時より茅場町なる地本問屋西宮新六に仕へて後に手代になりぬ。年季滿て後去て山下御門外なる書林萬屋太次右衛門が婿養子になりしに、妻早世したれば、遂に離緣して石町なる裏屋に借宅す。其後大坂の町入某が、江戸掛店の中絶したるを再興させて、これを三馬に委れしかば、遂に本町二丁目に開店しける。しかるに舊來の藥は多く賣れず、三馬が新製の江戸の水と云ふ賣藥、世の婦女子に愛せられて、漸々多く賣れしかば、なほ種々の藥を鬻ぎて其身の株にしたり。戲作は寬政八九年の頃より名を著して云々」とある是なり。これによく似たことは、京傳（京屋傳藏）の煙管煙艸入、鼻紙袋、楊技入等の本業である。京傳の此の商賣も、隨處その戲作に自己吹聽せられ、また當時通人間にいたく

流行し劑造品まで生ずるにいたつたが、京傳の死後、弟京山跡を嗣ぐに及び、此の本業を廢したといふ。然るに三馬は其の子に至りてなほ父の此の本業を改めず、富裕な生計を得たといふ。然しこは、三馬の子が商賣人肌であつたといふよりも、寧ろ京傳の煙艸入煙管の類よりも、三馬の賣藥の方がより多くその生命の長かつたことを證してゐるのではなからうか。さて然らば、その江戸水とは、無論化粧水、水白粉の類ならんが、如何なる製法なりしかは、不明であるを遺憾とする。近世世相史の中にも、「化粧水は江戸の水、髮付は常磐香、紅は玉屋と歪り、詮索は江戸の習ひとやいはまし」と出でゝゐる。○**文魁堂筆硯**（第六丁表）その第四句に、「半是米庵門下人」とある、この米庵である。米庵は人も知る市河米庵、（寛齋の子。安永八年亥月亥日に生る。因りて名は三亥亦通稱に用ふ。字は孔陽、小左衛門と稱す。書家として一世に鳴る。就中、楷隷に巧みなり。嘗て金澤藩に客事す。安政四年七月十八日江戸に歿。年八十。）その書名一世に籍甚したことは、此の狂詩を以て亦證左と做すに足りよう。○**仙女香**（第七丁表）坂本氏仙女香の名は、江戸期草紙稗史類を繙く人の恐らく此の名に觸れざることと無き程、紙上廣告の盛んなるものである。草紙類はおろか、錦繪の類にも、美人畫ありて化粧をなすあれば、そこに必ずこの仙女香の袋を見た。廣重畫くの東都名所の中、隅田川八景（佐野喜板）の「眞崎の夜雨」には、その石燈籠にまでこれが刻されてゐる。以て實地廣告紙上廣告併せ得て、當時としては廣告道の要領をよく曉得してゐたものであらう。英泉、國貞等時代の錦繪草紙にその甚しきを見る。以てその當時最も盛行したものであらう。酷だしきは〇印にまでその廣告の手は侵入してゐる。○**鶴屋錦繪**（第十丁表）小林氏、仙鶴堂ともいひ、元祿の頃からの出版業者、後には特に錦繪類の板元として有名であることは、誰しも知る所。鶴喜とも稱した。唯謂ふべきことは、此の狂詩に現れた、「役者似顏國貞筆」「近來別有流行畫田舍源氏數編圖」なる二項である。此の「名物詩」の挿繪には浮世繪師としては、國

貞と同格の英泉（實質は國貞以上であらうと、予は思ふが）國直の二人があるにも拘らず、作者方外は、彼等に言及する所なく、國貞にこれを限つた。殊に「響三都」とは褒辭頗る盡してゐる。以てしても國貞の當時の如何に羽振よく、師、並に同輩を凌駕してゐたかが知れよう。その證左として特に。○扇面亭書畫扇。（第十丁のウラ）。その詩の中の。文晁、武清、米庵、五山、詩佛、綠陰の、筆並びに詩の作者についてゞある。文晁は誰しも知る畫者、武清は喜多氏、字は子愼、可庵と號した。五清堂、鶴翁の別號があつた。江戸の畫家、文晁の門下。壯年にして一派を成す安政三年十二月歿、年八十一と。米庵は、市河（川）米庵、解題中に既に述べたれば略す。五山も同樣。詩佛は、大窪詩佛。名は行、字は天民、通稱は柳太郎、痩梅、又た詩聖堂と號した。常陸の人、移つて江戸にゐた。草書をよくし、詩また海内に鳴つた。時に市河寛齋、柏木如亭、菊地五山と江戸の四詩家と稱したと。當時賴山陽、文晁とも交友があつたと。綠陰は、儒者。山本氏、名は信謹字は公行一に茶佛老人と號したと。○日野屋小間物。（第十一丁の表）その狂詩中の「貴賤爭買脊令臺」の句である。脊令臺は、鶺鴒臺であつて、鶺鴒は、諾册二神云々の俗傳から來てゐようとは誰しもの考へ及ぶ所であるが、さてその臺とは何であらうか。無論一種の四ツ目屋式道具であらうには違ひないが。幸ひ、此の「名物詩」の此の第十一丁の裏は、日野屋の圖である。その圖の中に、梅花堂なる男の題がある。曰く「記取遊仙窟、一趣脊令臺」とある。すれば、無論淫具たるは明らかであらう。即ち此の意は、遊仙窟にもこれに類した物がある、それを記取せよ、であらう。今遊仙窟中の、此の種の臺の記載を探してゐる暇がないが、一趣とは、同種の意であらう。さて此の脊令臺は、いかなる形のものか。或人が、幸はひ「或る○印でも讀んだことがある。枕のやうな小形なもので、バネ仕掛になつて、女性が□に敷いたものらしい」との事。臺といふと大きな

ものゝやうにされるが、矢張り形は小なものであるらしい。現に、此の日野屋の圖の中にも、小僧が捧げ出てゐる物が、小枕位ゐの大きさに見える。これは無論脊令臺の積りであらう。脊令臺と命名したのは、日本では、鳥の鶺鴒は、諾册二神の性的傳說に容易に聯想されて、淫具たることが言外に明らかであるが故にである。(遊仙窟中の同趣の物が何と謂ふかは知らない。)とにかく此れが流行もし、且つ大びらに賣られたものらしい。その證據には、圖の中、暖簾に公々然せきれいだいと白ぬきにされてゐるからである。成程、詩の通り士も町人も店頭にゐる。

參　考

右の「江戸名物詩」の他に、享保時、都下の名物及流行事物に關する「江戸名物鹿子」なる草紙の解題を「增訂武江年表」中に見たり。よりて左に轉載して、彼此對照の興を喚ばう。

「增補武江年表」卷六。天明年間中に、「天明時代のはやり物を集て、江戸名物鹿子と題せる草紙あり。云々。(無聲云。江戸名物鹿子は、享保十八年の刋行にして云々) 其目錄一二を記す。△鹽瀨饅頭△本町色紙豆腐△味噌屋元結△本鄕麴室△歌比丘尼びんざゝら△油町紅繪△白木呉服△本町益田目薬五靈香△破笠塗物△清水夏大根種△勸化僧△赤坂左たばこ△淺草茶筌△芝三官飴△横山町花莚織△瀨左衞門町薄雪せんべい△淺草簑市△こん〳〵坊△吉原朝日のみだ△さん茶女郞△目黑飴△駒込富士團扇△麴町助惣燒△てうし蝶△髭重兵衞が飴△赤坂鐔△長坂元結△松井源左衞門居合△佃島藤△吉原太神樂△麴町獸△湯島唐人の祭のねり物△淺草柳屋挽五倍子△両國の幾世餅云々。(一)料理茶屋行れしは、葛西太郎(牛御前の門前平岩の所也)大黑屋孫四郎(同所秋葉社手前也)武藏屋權三郎(同所麥斗庵といふ)甲子屋(眞崎)四季庵(中洲新地)二軒茶屋(永代寺山内)百川(いせ町裏川岸)竹屋宗助(深川洲崎)云々。」

方外道人著の「江戸名物詩」

評釋　藤蔓戀のしがらみ　3

江戸フシ〽なつの夜の蚊(か)やり(遣)のあこのうたゝねに。ざしき(座敷)〳〵もしづまりて。地 ねま(寝巻)きのまゝに喜の介が。身は(ハル)うつせみ(空蟬)のこゝち(心地)して。きゆる(スヱ)(消)おも(思)へのかや(蚊張)のうち(中)。

○江戸ブシ。江戸半太夫の半太夫節一名江戸節なり。聲曲類纂卷之三に「江戸半太夫幼名半之丞といふ。後江戸半太夫と改む。始は說經祭文の上手なりしを、肥前太夫がすゝむるにまかせ、浄瑠璃にかへて、則肥前太夫に學び一家をなせり。元祿の江戸名所咄に江戸半太夫が說經とあり。譚海に半太夫は外記節より出たり又永閑が弟子なりともさつま左内が弟子也とも云由記せるは取るべからず 甚左衛門町に住して、境町に操芝居興行の後、正德の頃薙髮して坂本梁雲といふ。貞享元祿の頃より世上にもてはやされ、今に江戸節又半太夫節とて廢る事なし。淨雲以後江戸にての名人なりしとかや。云々。門人多き内にも天滿屋藤十郎一派をなして河東ぶしと云ふ(下略)」尾崎曰く。他に、半太夫の師江戸肥前掾を以て江戸節となし、(普通に、肥前節といふ)而しく半太夫を半太夫節といひ、特に江戸節といはずとする一說あれど、今予は、此の江戸ブシを、流行の永かりしより見

て半太夫節のそれなりと見做す也。尚他に、肥前、半太夫、河東、土佐、外記、大ざつま、さらや永閑等の節を江戸節と總稱するものあり。○なつの夜の云々。以下しづまりてまでが、江戸節との意ならんも、こは單に江戸節の節付にて唄ふとの意か、或は、半太夫節正本中に此のやうな文句あるにや、念のため半太夫正本のあらかた（徳川文藝類聚俗曲下）を調べたれど、之を見ず。尚他日の考に委ねん。とにかく、聲曲類纂の編者も今に至りて廢れず（聲曲類纂は、天保己亥稿成、弘化丁未發行。編者齋藤月岑）といへるが如く、此の藤蔓正本當時の、明和安永期に於ても、此の江戸節は、珍重がられたるものなるべし。**○身はうつせみの**。身はうつせみの如きなり。「うつせみ」空蟬蟬のもぬけ、轉じて單に蟬をもいふと。世に現し身の轉訛たる現せ身と混用しをれど、こは空蟬の文字通りの義なりと解して可なり。而して「消ゆる」への緣語たることも無論なり。あたかも、「なきわびて身をうつせみと成ぬればうらむる聲も今はきこえじ」（續千載戀五）とある空蟬の如き、此の藤蔓の本文と殆ど同じ行き方也。

コレ早ぎぬ今（こ）よい（宵）まではいろ〳〵としゆび（首尾）してきた（來）が。もはや（最早）くる（來）事もかなはぬ（叶）ソリヤなぜにへハテしれ（知）た事さ。つね〳〵（常々）そなたにもはなし（話）おく通（さを）り。おや（親）。女房。ともだち（友達）の。いけん（意見）とぎり（義理）にせめ（責）られて。このごろは酒

もとうらぬものおもひ。どうしたいんぐわなことじややら。こよいがそなた
の見おさめと。かほつくぐゝとうちまもる。

○コレ早ぎぬ云々。此の段、喜之介が緣切の申出なり。その理由の口上なり。親、女房、友達の意見と義理とにこれを歸したり。そのため酒も此頃は通らぬ物思ひ、しかもこをどうした因果なことじややらと嗟嘆せり。意志の弱き、さりとて良心に於て全く麻痺し得ざる當時の不良息子を描出して、よくその性格を如實にせるものといふべし。「かほつくぐゝとうちまもる」は、點睛の句。これありて、しかも喜之助の未練たつぷりなる狀、よく描き出だされたり。簡潔にして巧なる手法といふべし。

はやぎぬなみだにくれながら。さしこむしやくをおしさげて。きこゑぬ事
をいわしやんす。あいそめてからかたときもわするゝ日とてはないわい
な。おかほのやつれを見るにつけおやどのしゆびはいかゞやとあんじく
らせしかいもなや。むりはおとこのつねなれどいゝわけするはおなごだけ

いふ(言)てかゑ(返)らここ(寝)ながらおまへにわかれ(別)て早(さ)からす(烏)のなく間もいきてい(居)らりやうかおしてとめ(止)たきあさ(朝)ごとの。わかれ(別)のむり(無理)なおことば(言葉)に。わたしがつよく。さからわば(カン)(逆らはば)。すひ(ツ)(粋)なおまへのおこゝろ(心)もかわら(變)しやんすであらうかと。あのまゝものゝに。まぎらし(紛)てかへすおもひ(思)はいろいと(色糸)のむすん(結)でとけぬかなしさ(悲)は人にしられ(知)ぬむねのうち(胸の中)。

○はやきぬ云々。**以下**は早衣の日頃の包むにあまる愚痴、怨言の羅列也。彼女の此の悲嘆、未練たつぷりなる男の胸に、いかなる神薬の効をなすや、いはずとも知れしこと也。是れ心中決行の序として、隱約の裡に作者が用意せる所のもの也。且つ始めて、新內の新內らしき獨特の悲絶哀絶なる詞調に一轉化したる序として、此の曲のクライマックスを促す所以ともなり、聞いても讀んでも漸く脂(あぶら)が乘りかゝる所也。**○あひそめてから片時も忘るゝ日とてはないわいな**。この種の文句、新內には、常套の句也。切なる女性の胸裡を描出して、かくの如く簡にして要を得たる句はあらず。此の熱情に絆(ほだ)されて、大抵は、心中と來る也。即ち新內の詞曲中、漸く曲高調に入らんとする砌、必ずこの種の、相手女姓の悲叫あり。尾上伊太八

の「歸咲名殘命毛」の中にも、「逢ひそめてから一日も烏の鳴かぬ日は有れど、お顏見ぬ日は無いわいな」とあり。**〇お顏のやつれを云々**。お宿の首尾は如何やと案じくらしたとあれば、此の女、また相手の環境を思ふだけの餘裕はありし也。しかもそれ程の明るき意識も、これを曇らすに餘りあるは、合歡情痴の夢なりといふ也。しかも心中して、相手方を永劫の不首尾ならしむるに於てをや。**〇むりは男の常なれど云々**。面白し。云ひ譯するは女。無理は男。男性本位の意氣見えて面白し。情界に多年巣くへる職業的女性も、惚れては、今の新しい女式にはなり得ざりし也。云ひ譯するは女。罪を引つ被るは、凡て女といふ也。ホンにしほらしきものといふべし。この一點のみに、喜之助の親女房友達を忘れしむるに十分なる、熱情奔馳の原動力ありといふべし。可憐々々。而して、この「無理」は何を斥せるにや。男の一般、我意を徹す横暴なる態を謂ふか。或は、「自分は惡止めをしなかつたのに、無理ばかりいうて居續なさんした」その無理の意か。現に、「お宿の首尾は惡いのも、氣のつかぬではなけれども、無理を云うての居續が……」(里空夢夜櫻)にもある、この反家庭、常理背反の意か。
〇お前に別れて早烏の云々。この「別れて」は、「絶緣されて」の意なり。單なる後朝の意にはあらず。この種の文句、また新内常套の筆法なり。「明烏夢泡雪」にも、「いつそ添はれぬも

のならば、一所に死にたい時次郎さん。殺して下んせ、死にたいわいのふ」とあり。里空夢(さとのそらゆめ)夜櫻(のよざくら)、園春部屋の段(二代目鶴吉直傳)にも、「お前と切れて何樂しみ、私(わし)や覺悟してをりまする。お馴染がひに思ひ出し、可愛いと思うて下んせ」とあり。其他にも尙多かるべし。**○早鳥。**朝きはめて早きに鳴く鳥、一ばん雞ではなくて、一番鳥の意か。**○おしてとめたき朝ごとの。**おして止めたきは、早衣の心なり。**○別れのむりなお言葉。**こゝのむりとは、前の、「むりは男の常なれど」とは、稍意を異にし、未だ別るべからざるに、いざ歸るといひ出せし、悋氣か、何か、とにかく男の急に歸るといひ出せし無理の意ならんか。或は、これほど思ふじぶんを振り切つて歸るといふ喜之助を、無理といひしならんか。いざ歸るといふ無理な、(寧ろ殘酷な、悲慘な)言葉に、の意か。**○すゐ。**粹の字を宛つ。狹斜より生れて、通語として廣く用ひらる。以下行を改めて、その考證をなさん。

すゐ考

すゐと普通に書けり。粹の字を宛つ。邇言便蒙抄中の末。一、粹、藝能にても數年其道になれて能く心得たる者をすゐといへり。〔吹か、(よく呑みこんだ意の吹なるべし。——尾崎註)帥か、粹ならんか」くはし

くもぬけたるといふ義なるべき歟。とあり。俚言集覧には、「增補、すい、遊所に云詞は粹にて、拔粹の意なりといふ」とあり。嬉遊笑覽には、「すいと云ふ詞は粹にて拔粹の上略なり」とあり。恐らく俚言はこれに基きしものならん。和訓栞には、「すい、俗に言はずして其の理を知るをすいといふ。睟の字なり。云々」とあり。其他、推なり。或は愚痴を月といひ愚痴ならぬを水、すゐといへりなどの、諸說紛々たり。往年、雜誌「新小說」誌上に、諸家のすゐ、いき、いなせなどの語原論を載せたることあり。その中、故、饗庭篁村氏の「粹と通」の一節を拔かん。

粹といふ辭は、元來上方言葉で、隨分古くからあつた句で、元祿以前、延寶前後の上方の板本を見ても、粹といふ言葉がもう出てゐます。

それから後年も盛に粹といふ辭は、狹斜の巷で行はれてゐる所から、段々廣い意味になつて、かの「忠臣藏」で若狹之助に、師直が、「粹め、粹め、粹樣め」などゝ言つてゐる。然しこれは少し意味が違つてゐます。それから當時から說をなすものがあつて、「粹は水なり、水なり」と言つてゐる。水の淸く流れ、淀みなく、爽快を意味するところから來たものらしいので。續いては「水月論」などいふ事が出て來ました。水は粹の一件で分つてゐませうが、この月といふものゝ飛び出して來たのは、因緣があるので。昔の本を見ると、（勿論上方の板本だが）、「こなさんはぐわちな」といふやうな文句がある。「ぐわち」の當て字は即ち月なので、その意味は、「愚痴な」と殆ど同じ意味に使つ

てゐるのです。尤も月といふ字の訓を「ぐわち」といふのは、謠曲はおろか、古く源氏枕草紙なんどを見ても「何月（なんぐわち）」なんどゝ言つてゐますからね。なる程此の場合、月の字を當てゝ、「月（ぐわち）な」とやつてもいゝ。而してその之と對して例の水——即ち粹を持つて來て、粹と愚痴とを對照し、この論が起つて來るといふ事なので。粹の「水」なりといふ事は、眞面目には考へられないが、一寸さういふ說もあるからお話するのですが、この「粹」といふ字は、前言つた通り上方語で、その當時から江戸のものには、この文字は一向見當りません。即ち「粹」といふ辭は上方の特有なのです。その代り江戸には之と對し、またこの「粹」の辭としつくり出つくはした辭で、「通」といふのがあります。この「通」といふ辭は、江戸時代には事の外流行つたやうで、云々。

でこの「粹」といふ奴だが、近代では「いき」といふ辭を、この粹の字に充てゝある事をしばしば小說や何かで見ますが、しつくりは充たつてゐませんね。云々。詮ずるところ、私はこゝに延寶頃の本で、色道大鏡といふものを持ち出します。云々。先づ今お話の「いき」「粹」なんといふ所を讀み上げてみませう。

意氣。（略）。

粹。當道の巧者を言ふ。拔粹を上略したる詞なり。云々。

とあり。上方の粹と江戸の通とには、なほ山崎美成の「世事百談」にも、

「拔ずるにすいといふ詞は、近きことなるべし。粹の字音なるべし。萬事にくわしき人といふ義にぞあるべき。江戸にて通といふを大阪にて粹と云へり。通といふも萬事に通達する義なり。」

とあり。ともあれ、すゐは、拔粹の上略の粹といふもの、最も妥當なりと覺ゆ。即ち出山

箕山の「色道大鏡」(續燕石十種第二所收。)喜多村信節の「嬉遊笑覽」「俚言集覽」の增補(增補は、井上賴圀、近藤瓶城の二氏に成る。)等凡てこの拔粹の上略說なり。(倘、すいの語原は、すき(好き)の音便なりといふあり。「粹の訣」の說。)

(倘、水(すい)と月(ぐわち)とは、篁庭氏說は、ぐわちは、ぐち、ぐちならぬを、ぐちを月といひしよりその反對の水なりといへりとあれど、これには、古く、太田蜀山人の、假名世說に、諸分店卸、一名、浪花鉦(西鶴の作と傳ふ、然か贋ならむ)を引ける、小太夫の二字論あり。曰く

「大臣、小太夫(傾城の名なり)に曰く、世に傾城買ふにすいじやぐわちじやと云ふこと昔から人每に云へども譯呑込がたし聞きたいの。小太夫、妾もしかと知らぬ事ながら、此處許で云ふ事がござんす。あらまし申しませう。先づすいといふ字は水といふ字を書きます。ぐわちは月といふ字でござるさうな。何故といふに傾城を水にたとへ、客を月にたとへます。殿たちのすいにならしやるといふは、傾文字にもまれてのちに、なることでござる。まだしよしんなをぐわちといふさうにござる。世間に初心なる人を、山だしといひます。そのごとく、男のはじめて女郎ぐるひにかゝるは、山出しの月でござんす。その月が傾城の洒落(しやれ)た水にうつりまして、傾城の心底を知りて、西へ落つるといふ心でぐわちの巧者になつたをすいと云ふので御座んす。(中略)すいぐわちは、傾城の方より云うた事でござんすわいの。隨分金つかうてすいにならしやんせ。おかし。」

即ち此の說は、傾城を水と見て、傾城の水なるが如く水になりたるものを、すいといふなりとの、傾城本位の說なり。牽强の嫌あれど、とにかく面白き說明なりといふべし。)

とにかく此の粹は、昔より談理の盡きざるものと見え、粹道の說明に關する戲著頗る多し風流粹談義、粹の水上、傾城仕送大臣、粹の訣、三粹一致浮れ草紙、風俗八色談、粹家張中

秘破紙子。粋得利等、其他枚擧に遑なしといふ。而して、この粋の上方語が、江戸に入り來りしはいつ頃なりや。今遽かに斷じ難しとするも、現にこの新内正本の「藤蔓」にあり。恐らくは、上方淨瑠璃の東方移植にその端を發せしにはあらざるか。而して、此の明和安永頃には、江戸女郎をして、平氣に、すいのぶすいのと云はしめしものならん。同じく新内の「明烏」の中にも、この粋をいへる有名なる文句あり。曰く「傾城に誠なしとは譯知らぬ、野暮の口からいきすぎの粋の粋ほどはまりも強く、たゞなつかしういとしさの、愚痴になるほど戀しいもの」とあり。但し此の浦里の言は、前者小太夫の二字論とは全く位置を顚倒し、時さんは水、浦里は月也。野暮はどこ迄もそれ自身が愚痴なれど、粋の粋ほど、今度は此方が愚痴になるといふ也。愚痴になる程戀しがられるは、余程の洗錬さならざるべからず。洞房語園異本考異の「すいは廓の案内しれる人をいふ。粋は米のしらけたるなり」の上半の廓の諸譯知りが粋なりとは、此の浦里の言を裏書せるものの如し。即ち色道に於ける洗錬さ加減を粋の不粋のといへる也。但し、明晰なる理智を以て溺れず、たゞ高處に鑑賞し、情海に遊ぶを以て後世人情本作者の描きし大通、粋の粋なりとせば、此の浦里當時の時さん流の粋は、(此の「藤蔓」の喜のさん尙且然り。)未だ左程に理智本位に墮落若しくは進歩せざる、情

熟本位の時代の反映なりと目するに足るべきか。即ち、女郎に惚れられる、女郎をして愚痴に歸せしむるだけの男性の容貌、言語、風姿、應對、技巧それらを凡て粹と總稱せるが如し平賀源内の青大通「味噌も味噌くさきはわるく、粹も粹くさきは粹ならぬものぞとは誠に古今の通言なり」とあるに從へば、浦里の「粹の粹ほど早衣の「すひなおまへ」の程度は、如何なる粹なりしならんかし。されど、あたら、粹論に、多大の行數を費せり、しかる予も、粹の粹ならずといはれもやせん。ともあれ、粹は粹なりとするが最もよかるべきか。（倘すゐといきとは、似たれど相異せり。そのいかなるけぢめあるかは、趣味研究大江戸の幸堂得知氏說にくはし。ついて見よ）○あのののもののに。あの事この事に也。俗曲に此の用言、頗る多し。○いろ糸の。結んでをいひたき序詞、且つ、結ぶとの緣語なり。然れどもいろ糸といひたる處、殊更、なまめいてよし。

クドキ　ないて（泣）あかせし。戀のやみ（暗）こがるる（焦）むね（胸）はあさまやま（淺間山）あいたい（逢ひたい）見たいは。いもせやま（妹背山）いつかめうと（女夫）まつちやま（待乳山）せうでんさん（聖天）のおまもり（守り）やくろう（苦勞）をかけた九郎すけ（助）のいなりさん（稻荷）やそのほかのひろいせかい（世界）のかみさん（神）のくはん（願）がかなふ（叶）てうれしいと。おもふ（思）てい（ゐ）たに。いまさら（今更）に。そわ（添）れぬ

やうになつたとはどうしたうすい（薄）ゑん（縁）じややら。

○こがるるむねは云々。以下、まつち山まで、宛然、これ山謡し也。いつもながらの文句なれど、外文には迚も眞似の出來ざる點、とにかく我が國文學殊に俗文學獨特の敍出なり。懷しとも餘りあり。○聖天さんのお守り。聖天は、待乳山の聖天なり。聖天は、大聖歡喜双身天王の略、而して一種の生殖器崇拜たるは近人の遍く知る所。今更架說の要なけれど、此待乳山に、聖天宮の創建されしは、いつ頃なりや。地名辭書所引の、文化元年、金龍山、大聖歡喜廟碑文といへるには 土人傳云、昔聞此山自地軸湧出焉。金色神龍自虛空降住焉、山與龍長留于此地、鎭護大士（[illegible]）廟像、蓋山名取於斯。名曰眞土山、（中畧）然此山之所以可貴者、豈在于斯哉。抑其所以可貴而傳者、以有大聖歡喜大自在天在焉也。緣起曰、大士出現後九年、始垂跡於此山、出拔苦與樂大神力、後天安元年、慈覺大師留錫於此山、用毘那夜迦一字呪文、淨油灌天像、亦修本地秘密供養法。抑歡喜天爲德也、陰陽和合之根元、諸物之父母、使呪經說之詳矣 とあり。江戶往古圖說（燕石十種第三所收）下卷の中に、「待乳山或は眞土山。觀喜天鎭座。社傳に推古帝御宇當山に降臨ありといふ。當山地主の神とて今宋社に道灌稻荷と云小祠あり。定て太田氏の勸請にありぬべし。是を地主の神としては歡喜天鎭座年歷に合ざる也。いかが猶考ふべし云々 江戶雀（近世文藝叢書第二名所記第一所收。）十卷目には、「金龍山附待乳山之事」 一、此山を金龍山といふ事、淺草寺の山號也、爰の名たるは、此寺の鎭守として、上に聖天宮を安置すると見にたり。云々。 增補江戶咄（同所收）卷第五には、第八金龍山附眞土山 觀音のうら門より出て、金龍山へ行。此山よりむかし、金龍なほり出しける故に、則ち金龍山と名付るとかや。淺草寺の山號も同名也。爰に聖天宮立給ふ。此御社には、緣組の事、又夫婦あいさつよきやうにと祈り奉る。さゝげ物にはふたまたの大こんを上る、尤も作り物にしてさゝぐる也。山は、松山にて、東の方に、淺草川、牛島新田迄見ゆる、西は大道也。扨又此山を昔は眞土山と云ひて武藏の國の名所也。紀州にも同名有と也。云々 ともあり。ともあれ、此の聖天の祠は、餘程古くよりあり、し

かも中世廢れ、現に慶長見聞集に、「是を人に尋ぬれば、淺草の里はなれに、ちいさき塚あり是ぞ待乳山と敎ふる。是はせうでん塚とて、むかしより塚の上に小社有、塚もとに小寺ありしが、近年は絶てなし云々」とあるによりても知らるゝが如く、江戸初期は、荒廢に歸しゐたりしならん。そが、隆盛を來しゝは、無論明暦二年の新吉原の開基に伴なひての事と見るを待べきか。(其他、まつち山の語原或は金龍山の所傳につき種々あれど、冗々しければ、凡てを略く)倚、待乳山は、一名聖天山とも云ふ。「紫の一本」にも、「待乳山、金龍山とも聖天山ともいふ。古木生茂り砂石山なり。仁王門の下、蓮池のなかに辨天の社あり」云々。かの土手通ひする二挺だちの船は云々。」とあり。

〇くろうをかけた九郎すけの云々。若勞と九郎とは、その頭韻なる事、いはでも著し。くろうをかけたとは、わが分外の願ひによりて、神にくろうをかけたとの意なるべし。**〇九郎助稻荷。**花街風俗志(大久保葩雪氏著。明治三十九年隆文館刊)の中に、

九郎助稻荷は元吉原に在つて、和銅四年の鎮座である。其昔白黑二疋の狐が顯れ出て、白狐は今の銀町一丁目の白旗稻荷に祀られたが、黑狐の方は千葉九郎助といふ者の地方の田畔へ勸請されて、田畔稻荷(たのくろいなり)と崇められ、云々。然るに慶長の末年、元吉原に遊廓設置と決ると同時に、田畔の九郎助稻荷は、此土地の鎮守と仰がれ、赤縄の神と呼ばれて、益々衆庶の信仰を受けたので、明暦年間新吉原へ遊廓移轉の折に、共に新吉原京町二丁目に祠を遷して、勸請され、其後享保十九寅年に、正一位大明神の官位宣下があつたので、同年八月朔日、大祭を執行した。其祭禮の餘興に催したのが吉原三景容の一として今日まで繼續されて來た所の仁和賀狂言なのである。云々。

而してこの由緒深き九郎助稻荷も、明治二十九年、江戸町一丁目の榎本稻荷、京町一丁目の開運稻荷、同二丁目の九郎助稻荷、と伏見町の明石稻荷と、衣紋坂下右手の吉徳稻荷との五社を合祀して、吉原神社なるものを創建し、毎月午の日を縁日と

定め、且つは廓内の鎭守となしたといふ。一說には此の九郎助稻荷、淺草三軒町の宮川稻荷の祠內に同居鎭座するに至つたといふ。九郎助稻荷に關する柳樽頗る多きが、就中「化せ化せと九郎助の御神託」（文化期）「化物の鎭守は黑い狐なり」（同）「九郎助が氏子やつぱり狐なり」（同）など、人の知る所也。**○そはれぬやうになつたとは云々。**喜之助に、女房のあるを百も知り乍ら、そひたいとの願望を燃やせしなり。早衣の眞情、けだし尤もなり。

ナチル　わしほどいんぐわ（因果）なものはなし。五ツや六ツでふたおや（二た親）にしにわかれ（死に別れ）あに（兄）さんひとりをたより（便り）にして。あさなゆうな（朝な夕な）のかんなん（艱難）を。なきあかし（泣き明）たる月や日の。めぐみ（惠）もつき（盡）てこのさと（里）へうられ（賣）てきたは身のいんぐわ（因果）。アヅフシ　にし（西も東も）もひがしもしら（知）ばこそやりて（鑓手）にしから（叱）れめうだい（名代）のきやくしゆ（客衆）に夜すがらいびられ（虐）て。なみだ（涙）をしぼる（搾）そで（袖）こめ（留）ておまへひとりをたより（便）ぞや　合

○わしほど云々。以下早衣の身上咄なり。二親に幼少時死に別れ、兄と二人の暮し、これが盡きて、この里へ賣られて來たの也。（中川愛氷氏本に、滑稽なる誤校訂あり。「この里へ浮かれて」とあり。うられてのうを、かと誤讀せる也。）**○やりて。**守貞漫稿に、「鑓手、又の名を香車と云傳ふ。俗等に象戲の駒の香車をやりてと云へば、香車が

別名を又やりてと云ふ。香車といふは本字は花車と書く也。花に廻るさと云ふ心也。然れどもくわしやと云ふは、ひゞきあしきとて、かしやと云ひかへたり。かしやと云ひしより又やりての名あり。守貞曰、やりてを昔は、香車と云ひし也。今はやりてとのみ云ひて、香車の名廢せり。京坂には、揚や茶屋の妻を花車と云ふこと今も然り。」と。とにかく、青樓、妓（はな）をまはす婆なり。主に、女郎上りのあばずれ者がこれに成りしと云。譜原には、尙、地獄の火車にして、惡婆の意とするものあり。○めうだいの客衆。姉女郎の名代となりて、出でたる客衆の意。名代は、女郎に、客立てこめて、暇なき時、己れに屬する新造を、自己の名代として客に侍らしむることありき。現に、天明期の川柳にも、「名代に出したり、下で使つたり」とあるが如く、新造は、姉女郎の名代として、客にも仕へ、また、帳場の用、又は拭掃除にも使はれたりしものなり。又、名代の外に特に、新造買目的の、客にも公然侍りしものゝ如し。而してその客は、主に老人客也。現に、『新造を冷水が來て揚るなり」（文化期）或は「親仁のは息子が買うた妹なり」（同）「新造の惡留入齒ひつたくり」（文政期）の如し。而して、その新造は、「三界に家なし新造廻し部屋」（天保期柳樽）とあるが如く、廻し部屋にてなり。しかも、その一人前となりたる、即ち振袖變じて留袖となりたる曉、「留袖がすむと明部屋授けられ」（天明期）とあるが如く、始めて、一部屋の主となる也。而して、かゝる新造が、新造中に、老人客に身請けせらるゝ事のありしは、

大正十二年十二月二十七日印刷納本
大正十三年一月一日發行
第十六冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十六冊

本文

評釋 藤蔓戀のしがらみ（完）
東風吹江戸繪榮
江戸名物詩管見（飯島花月）

江戸名物詩管見

上田　飯島花月

「江戸軟派研究」第十四冊に「江戸名物詩」を詳細に解題考証し且その全部を掲出せられたるは吾等同好者の大に感謝する所である。（中略）同書は隨分廣く世に行はれたから今に多く存在し敢て珍書といふ程でも無いが、唯その完本の少いのを遺憾とする。友人花岡百樹氏所藏本は軟派研究著者及安藤軾氏所藏の者と同一らしい。然るに「江戸名物詩初編」として出版されて二編以下が出來なかつたので、零本視される嫌ひが有つたとでも謂ふのか、家藏の複刻本は版木に入木して、卷尾の「江戸名物詩初編終」とあるを、「江戸名物狂詩選」と改め、表紙の題簽及見返しも同樣の書名に改刻されて居るが、本文第一丁の書名は原刻の儘で馬脚を露はして居る。扨これはホンの臆測だが此の複刻は銀鷄の所爲では有るまいかと思ふ。此男は賣名家で能くこんなことをしたらしい。風來山人の「長枕褥合戰」を小本に複刻して且私に其中の文章を改竄したのは全く此の銀鷄のいたづらで有る。素より親には似ず學問も無かつたと見えて、俗惡極劣な詩文などを駢べて衒耀する癖が有つたらしい或は江戸名物詩は複刻のみならず原本の出版も此男の仕事かも知れぬ。其故は多くの狂詩中に類例を見ぬ程正しい漢文の序跋や挿繪を加へ、且それが殆んど嘉永安政頃の聞えた名家の筆蹟や名前を列擧してあつて、銀鷄鐵鶏銭鶏など一族の名前を多く加へたのからして敢て臆斷を試みるのである。所で疑問とするのは、諸家所藏本（花岡氏のも）第十四丁が落丁であるとの事だが、家藏の複刻本には、十四丁が存在して、其表には左の三首が載つて居る。

釜六　釜　小名木川

主人清湖綺垣連。從來好事風流禪。鑄得八百八町釜。日々賣出幾萬千。

翁蕎麥　深川熊井町

白髮素線其號翁。下戸上戸得意同。從數世間蕎麥衆。一椀喰得急爲通。

金麸羅仕出　同櫓下

金麸羅名響海邊。會席料理品最鮮。揭出或五藻屑卷。初知意氣在深川。

十四丁の裏は、深川の大川端と見えて帆檣林立の間から富士を遠望する圖で畫者は水亭として信の字の印が有る。題詞は外の畫面と異りて銀鷄の狂歌「みあがりなして呼ぶ客はたをやめの心のうちも深川の里」の一首を萬葉假名で恰も漢詩かと思はせる体に書いてあるこれも銀鷄がこけおどしの慣用手段である。尙臆測に過ぎぬが此の十四丁の版木が全部紛失したか又は裏半面の繪の部分だけが火災其他の事由で損傷して間に合せにこんな繪と畫歌で埋めたのでは有るまいか。兎に角異樣に感じたから聊か言ひ試みて大方の教を請ふ事とする。

（尾崎曰く、飯島氏の此の書信中には、氏の藏本が、予及び花岡氏本の如く、第二丁がやはり重出しての上の事であるか否か分らない。兎に角花月氏のを複刻本とすると、この第十四丁は原本には全然無いもので、後に彫られたものとより考へられぬ。從而氏の「此の十四丁の板木が全部紛失したか又は云々」の言は、矛盾の言だと推へる。）

附言。軟派研究に、八丁裏の兩國橋の畫の題詩を林齋としてあるが、これは鼎齋で即ち生方鼎齋、名は寛字は猛齋と云つた人で有らう。陰文の印面を「寛印」と判讀して斯く思ふのである。

（尾崎曰く、これは御說の通り、林は全然鼎の誤讀であつた。）又五丁表の挿繪⌒一は山本山の商標かとの御說明で有るが、吾等は其位置から考へて⌒一カギヤマイチ即ち白木屋の誤りだらうと解してゐた。

序でに知りたいのは同書十一丁の表日野屋小間物の詩中に在る脊令臺の事である。同丁の裏に日野屋店頭の圖が有つて、（裏表紙裏に續く）

「新造は後家になる氣で請出され」(安永期)とあるが如し。純然たる妓たりし新造につきては、別に一説あり「江戸花街沿革誌」に、「才色兩つながら劣等にして後來に望みなき者に至つては、樓主は……直ちに獨立の遊女として客に接せしめ(序でに、新造につきてなほいはんにたり。云々。而して此輩の揚代は、大籬にて、金一分、半籬にて二朱なりき」といふ。(「新造とは、禿上りの年若き、突出し前の見習女郎で、まだ勿論一本立の部屋持とはまゐらぬ。先づ太夫附の妹女郎といつた格である。云々。通例、赤味噌の振袖を着てゐたので、振袖新造、略して振新などゝ呼ばれ、其太夫附古參の筆頭が、所謂番新、即ち番頭新造なるものである。又、一種、引込新造といふのは、内所にて育て上げられた、謂はゞ家附の新造であつて、これらは、源氏名を呼ばせぬ慣例」(川柳吉原志の新造の解説)なりしといふ。倘、外骨氏の「賣笑婦異名集」の新造の項及び「江戸花街沿革誌」にもくはしく出づ。就て看るべし) ○夜すがらいびられて。とあればこの客は、老人客にはあらざらん。壯年血氣の、纏り物貰ひの客ならん。○袖とめて。このとめては、留めてか止めてか。留めてならば、振袖を留めて、一人前の女郎となるの謂也。若し止めてならば、單に袖を拭うての意なるべきか。若し留袖の意ならずば、此の早衣は、年若き妓、即ち新造なりしやも不知。如何。愚考は、これを留めてとして、今や彼女、一人前の女郎となりをれりと見る也。即ち彼女の口吻所業、凡て新造の幼稚さとは比較にならぬ程なれば也。但し、同時に、涙の袖止めて、(涙をはらして) お前一人が便りぞやの意も利かしたるものなるべし。現に、同じく新内の若木仇名草(此糸蘭蝶)(鶴賀若狭掾正本)の中にも、是と同樣の文句あり。且つ同じく妓此糸の述懷談にして、用言頗る此の「藤蔓」と相似たれば、彼此對照の爲、ここに、その一節を掲げおかん。

「(前略)云ふが中にも、私程、世に暎氣ない者はなし。親に添寢の夢にさへ、見も知りもせぬ人中へ、賣られ廓の憂勤

め、禿の内の氣苦勞は、ねむる火影を追ひ起されて、文の使や返事さへ、長い廊下の行通ひ、まぶい手引や合圖の手練(てれん)、氣を紅絹(もみ)裏の色に出て、やり手に呵められ叩かるゝ。（以上、香時代つらさ辛さ曲）其の苦を拔けて、やうやうと見世へ出雲の神さんも片ひいきなる緣むすび、好かぬ客衆にいびられて泣いて明さぬ夜半とてもなし。それが中にも樂しみは、たまたま逢へば明る日は、姉女郎や朋輩にあて事云はれ、身じまひも、遲い遲いとせがまれて、淚を包む振袖の留むれば（以上、香時代つらさ辛さ曲）最早年増役、たとへ意氣地も負けまいと氣を張る胸の癪つかへ、思へば思へば男ほど我儘らしい物はなし。云々。」

上
たとへ野ゝすへ（の末）やまのおく（山の奥）どんなひんく（貧苦）もいと（厭）やせぬ手づからわたしがまゝたいて（飯焚）。たのしむ（樂）も戀。くゝるしむ（苦）もこへ（戀）。こいといふ字がさすわいな。まことはしんぼう（辛抱）一ツぞや。

○たとへ野のすへ云々。端唄で有名な「おまへと一生(しやう)くらすなら、深山(みやま)の奥の侘住居、縫針仕事糸車、細谷川の布晒(ざら)し、柴刈る手わざも厭やせぬ」も聯想されて面白し。然れども此の「どんな貧苦も厭やせぬ」の方、簡明にして要を得たるを思ふ。此の句また何處かにてその根を有せりと思はるれど、今さしあたり思ひ當らず。他日の考に俟つ。**○まことは幸抱云々。**これ早衣變じて、色道指南の大通の口吻の如し。早衣が、かゝる格言めきたるものをいへるだけ色道の先輩の如くにも取扱はれ、且つ比較的冷靜なる理性ありしやうにも窺はるゝは　余の

みの僻みか。「戀は辛抱一つ」、されど眞理は應々事實と扞挌す。この喜之助の場合も然り。辛抱の出來ぬ程の、紛糾したる周圍に對する自讀的自暴自棄の情、並に幾そばく早衣との惡緣に邁進せしめ得ざる、良心の苛責あるを如何にせん。遂に彼は、辛抱叶はずして、自ら身を破滅に委し去んぬ。乃ち辛抱の光明より、飜つて、役にも立たぬ心中の暗黒に趁りたる也。

かわゆうて(可愛うて)〳〵すい(粋)になるほどぐち(愚痴)になる。きしやう(起請)をまもる(守る)やくそく(約束)のかみさん(紳)がたもきこへ(聞)ませぬ。さてもそわれ(添)ぬならばいつしよ(一緒)にころ(殺)してくだ(下)さんせと。そで(袖)はなみだ(涙)のにわたずみ(行潦)

○かわゆうて云々。すいになるほど愚痴になるとは、蓋し名句。以前數頁を費したるする考もこゝに至つて粉薬徽塵。傾城の水變じて月になる也。結局、極端と極端とは一致すの眞理乎。粋になる程愚痴になると也。こゝまで來れば、「粋」は本來の冷靜なる情界鑑賞の意を放れて、沒頭沈湎陶醉の度の深きを具現せる語となり了せるが如し。乃ちこゝに至つて、冷靜なる早衣の口吻、一轉して奔放無比、情炎爛たる一塊となり了せり。始めて我徒の意に叶へりといふべき乎。**○起請。**起誓とも書く。起請すること、或はその文面、起請文の意も兼ぬ。こゝは後の意。左に若干起請につきいはん。

○起請が事

俚言集覧の起請の條下に曰く、

〔伊勢貞丈隨筆〕起請、オコシ請フ也。何にても願を起し請を云ふ也。國史などに起請と云文あるは是也。後代誓言に今かくの如くいふ詞に違はば神明の罰を蒙るべしといふ文を起請文といふ。罰を蒙らんといふ願を起して、罰を佛神に請ひ求むる意にて起請といふ也。愚案、〔齊東俗談〕野槌を引云、日本紀に誓約字をウケヒと讀めり。起請の字是訓に因じウケを立ると云るにやとあり。此說是なるに似たり。今奉公人の請狀と云ふも乞請の義にはあらず。牙保の義にて、意は誓をウケと訓るに同じ。請求ることはあるべからず。請は借字也。然るに〔古今著聞集十六〕賀縁阿闍梨の無實ウケて起請文を書きて三塔に披露の條末に、起請のおこり是なりとあり〔宇治拾遺十一〕かく起請をやぶりつるは云々、○起請〔三代實錄〕貞觀十八年三月參議太宰權帥在原行平起請、分二肥前國松浦郡庇羅値嘉兩郡一更建二二郡一號二上近下近一置二値嘉島一

世事百談〔山崎美成〕にも、

起請。起請文といふこと法曹には、その沙汰なし。いにしへの聖代すべて起請文につきて行はるゝ政はなきを、近代此事流布したるなり。「野槌」に、起請文といふこと唐土に盟誓をたてゝ牛馬の血をすゝり、其の詞を記して土にうづみ、約するところ若し背かば、此の牛の如くきり屠らるゝ罪にあたらんと諸神に誓ふなり。周禮左傳等にくはしく記せり。日本にては天照大神素戔嗚尊と誓ひましませば、神代にもありけるなり。始めは盟誓といひしを、人の代の末に至りて、白川鳥羽の御時も起請文といふことあるよし、貞永式目起請の裏書にありといへり。これによれば。中むかしよりのならはしと見えたり。あるひは慈惠僧正よりはじまれりともいへり。さて起請文に一枚起請二枚起請、また七枚起請百枚起請などいふことあり。義經記に、土佐坊が七枚起請かけること見え、後のものながら、室町殿日記、豊太閤朝鮮文書にも七枚起請といふこと見えたり。七枚起請の文をばかつて友人より得てもてり。文明年間のころ書きたるを寫しつたへたるなり。七枚各、文章別なり。そは誓言いく通にもしるしたるものなり。おもふにそのかみは、尋常のことは一枚にかき、その誓ごとの重かるは幾枚にも、かへすがへす書けることと見えたり。源平盛衰記に百枚の起請といふことあり。驢鞍橋に一枚起請二枚起請三枚起請といふことも見ゆ。これにて法然上人の一枚起請といふも明かなり。起請といふ文字は、後漢書劉盆子傳に、其餘不レ知レ書者起請レ之といふより出でたり。因に云、起請文の前書に、伊豆箱根の両社をしるすことは、北條家盛なりし頃のならはしにて、關東にては今にそのまゝ沿襲して改めざるなりといへり。

（尾崎曰く。起請文の誓の慈惠僧正より始まるとは、「鹽尻」の筆者もいへり。曰く、「起請文の誓は慈惠僧正よりはじまる。古今著聞集に賀縁阿闍梨が慈惠を濫行肉食の人なりといひし時、誓文を書きて不律ならざるよしを明（に）せり。但し起請の名は是より前にありしや、されども誓の爲にあらず。」と。）

蜀山人の「増訂一話一言」の中に、江戸時代武士の起請文の書方あり。ついで拔かん。

一、起證文の字配書樣左のごとし。古法也といふ。

梵天帝釋四大天王惣日本國中
六十餘州大小神祇殊伊豆箱根
兩所權現三島大明神八幡大菩薩
天滿大自在天神部類眷屬神罰
冥罰各可罷蒙者也仍起證如件

年號何年何月何日　苗字名判 名乘不書

宛所 何年ノ下ニ支干ハナシ

宛名ハ其日出席之老中大目附両人計也

評定所御用番御老中御宅両所之内にて誓詞被仰付奥御奉公被仰付候へば、其日御城にて誓詞被仰付候也。誓詞の節追付其席へ出んとする前に左の藥指を爪際の處を少（し）皮をはれて置（き）、血判する時、其所を小刀の先にて少し突かば其儘血出てよし、幾度も突くは見苦し。鼻紙を二枚ほどもみて右の袂に入置、其紙にて指の血を拭事のよし。扨又小刀をさす時に脇ざしを差（し）たまゝにて小刀も差（す）べし、差よきとて小刀柄を上にすれば脇差に反りを打樣にみえてあしき也。

心を付べし。血を右の手の藥指に附て居判の穴の白き所におす也。墨の所に附れば見えず候故也。血判して跡にて誓詞をいたゞく人あり。夫はあしき也云々。

さて、以上は、起請本來の起原と、並びに武家側の實行狀態なるが、遊里にありては如何。

遊里に於ける、遊女嫖客がとりかはしたる起請の用紙、文面、並びにその方法如何。

近松の心中天網島に、

「啼もあらそふ村烏ねぐらはなれて鳴く聲は、今の哀れを問ふやとて、いとゞ涙を添へにける。なふあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの烏。牛王の裏に誓紙一枚書度に、熊野の烏がお山にて三羽づゝ死ぬると、昔より言傳へしが、我と其方が新玉の年の始に起請の書ぞめ、月の始月頭書きし誓紙の數々、其度毎に三羽宛殺せし烏はいくばくぞや。常には可愛〳〵と聞今宵の耳へは、其殺生の恨の罪、報〳〵と聞ゆるぞや。

即ち「牛王」の裏に起請を書きしものの如し。さて然れば、牛王とは、何ぞ。

同じく俚言集覽に、

牛王。〔太平記雲景未來記〕熊野の牛王の裏に告文を書いて出したる未來記あり。

○牛王の烏はしならして〔高尾〕〔東雅十〕諸神の攝社に璽といふものゝあるは、今の神社の寶璽を藏めし所也、といふなり。世に熊野の牛王といふものゝ烏の形の文字あるは、古の烏篆の体の如く見ゆ。また牛王といふも璽の字をわかちて、牛王といふ。米の字をわかちて八木といふが如し。古の俗にかゝること多きなり。

其他、俚言集覽增補には、倘牛王につき數條あり。今迂路に過ぎるの嫌あれば、略きつ。但

し大槻氏の「言海」說、此等俚言集覧等の諸說を約して要を得たり。曰く、

牛王。祇園、八幡、熊野等の諸神社より出す牛王寶命と記したる符の名。民家に頒ち、門の上に貼り、疫災を避けしむ。或云、是れ生土（ウブスナ）の神の印にて、生土寶印なるべきが、生の下の一畫、土につきて王となり、寶の下の二點印につきて命となり、又轉じたるなりと。或云、佛書に、五大牛王あり、其守護の義に出づと。紀州熊野の神の牛王といふは、熊野牛王寶印の六字と、烏七十五隻とを印す。（烏を此の神の使とす）世に誓紙に用ゐる。熊野の三神は、妄語破禁の罪を糺すといふに起れりと云ふ。

心中天網島には、一枚毎に三羽の烏を殺すといふが、この七十五隻云々といふによれば、一枚毎に少くとも七十五羽の烏を殺さゞるべからず。これを三羽と限りたるは如何。或は七十五隻減じて三隻のものとなりをりしや。而してこの烏が死ぬるとは、この烏を犧牲にして神に誓へりとの意なるべきか。

さて、その牛王の裏に書きし文句は如何。「……盡未來切れ不申仍而起請如件」とでも書きしや。余、嘗て、何れかにてこの傾城の起請文句の記載を見たる記憶あれども、確かならず。今遽かに擧げ得ざるを遺憾とす。（尚、心中天網島の、月頭起請等にも觸れたけれど、すでに幾そばくの道草を食ひたり。よりて凡て略きつ。）而して、此の起請は、遊女嫖客互ひに書き、交換して所持したるが如し。此事、天の網島にも明らかなり。尚、この起請文を書くこと、遊女嫖客以外、武士町人等にも勿論行はれたれど、うぶな

る娘と息子との間に、商賣人ならぬ男女の間にも行はれたるが如し。—以上「起請の事」完—

○きしやうをまもるやくそくの云々。神さん方とこゝにあれば、この起請は、熊野一神ならず、即ち「一話一言」所載の武家起請の如く、八百萬の神々に誓ひを立てしものか。**○にわたずみ。**正しくはにはたづみ也。雨の降りて俄に地上に溜りて流るゝもの也。無論涙の最多き意也。

地(男)おとこもなみだ(涙)のかほ(顔)をあげコレはやぎぬ(早衣)人げん(間)はのかぜ(野風)のまへ(前)のとも(燈火)
しびのごとく(言葉)この世はゆめ(夢)のかり(假)のやど(宿)みらい(未來)はおなじ(同)れんげざ(蓮華座)と。イロ詞(男)おと
このことば(言葉)にはやぎぬ(早衣)はうれし(嬉)なみだ(涙)ともろとも(諸共)に。

○にんげんは云々。のかぜの前の燈火とは如何。或は、この「の」は、人間はのといへる、感動ののかも不知。普通風前の燈火とはいへど、野風とは聞かず。然れども、前後の調子より察すれば、無論野風のまへ云々の所也。風前の燈火の故事、「壽命猶如二風前燈燭一」(倶舍論疏)とあり。是れ也。**○この世はゆめのかりの宿。**これ、佛家常套の句。**○みらいは云々。**喜之助君亦靈魂不壞說者也。而して未來の戀愛成就を夢みたる可憐なる唯心論者也。非現實主義者也。**○うれしなみだ。**この涙をみては、遲疑せる喜之助の肚の裏も決然たらざるを得ざりし

や否や。但し女は、既に「一所に殺して下さんせ」、心中の押賣に出でをれる也。

くさばのしたてとゝさまやかゝさまもさぞおうれしう御ざんせう。おつつけお目にかゝるからやいばにかけしわがつまを。かならずうらみてくださんすな。ひごふのしにのつみごがを。ゑんまさんがしかるならわびことをして下ダさんせ。ゆうてんさんやしやかさんのよもや見すてはさんすまいおそばへいんであさゆうのおちやこうはなをきをつけて。この世のつみをほごこさん。なむしやかによらひ。ゆうてんさま。たすけてたまへなむあみだぶつ。

〇やいばにかけし云々。わがつまと來た。肝腎の喜之助の正妻は何處へ失せたやら。**〇ゆうてんさん**。祐天上人也。殊さら祐天さんといひたる所、遊女の、生一本なる信仰心見えて面白し。祐天上人は、當時、江戸人の信仰頗る篤き所なりき。傳に曰く、奥州岩城郡新妻村西村善内の男、幼名三之助、増上寺檀通上人の弟子となる。幼時、誦經の習熟魯鈍なるが故に爲に成田不動尊に祈り、夢に惡血を除かるの傳説あり。後、増上寺、三十六世源如祐天大僧

正に陞り、八十歳目黒に隠居、享保三年七月十三日寂す。その跡に寺を建て、祐天寺といふ。即ち浄土中興の祖也。**○この世の罪をほどこさん**。「ほどこさん」は、遍く償はんの意か。**○なむしやかによらひ云々**。釋迦、祐天、阿彌陀。祐天も浄土中興どころか、大に格が上りて釋迦、阿彌陀の間に在り。こゝらが、作者が不用意らしく見せかけて、その實用意、無智なる然し眞劍なる彼女ら信仰の度を表白せる名文句と謂ひつべき乎。然し我等には、餘りに八百屋的に、寧ろ滑稽の感起らざるを得ず。以上早衣の詞也。

フシカヽリ
此世のゑん(縁)はうすころも(薄衣)。えんじ(遠寺)のかね(鐘)のこゑ(聲)すぎて。たがい(互ひ)にかほ(顔)を見あはせて。コレはやぎぬ(早衣)いま(今)こそさいご(最期)のときうつる(時移)さまたげなひ(妨げない)うちにかくご(覺悟)をせよ。アイそんならおまへもヲ、かくご(覺悟)はよいごようゐ(用意)のひとこ(一腰)しぬき(拔)はなせばかげろう(陽炎ふ)いなづま(稲妻)ともしび(燈火)にけはしく(險)うつる。三重 なつ(夏)の夜の。なみだのあめ(涙の雨)のはれやらぬ。クリ上 はや(早)しのゝめ(東雲)のみだれごり(亂れ鳥)ちしほ(血潮)にそむるみ(三)つぶとん(蒲團)のち(後)のうわさ(噂)となりにけり。

○うすごろも。縁のうすきと、早衣のきぬにかけたる詞かと。**○コレ早ぎぬ云々**。いつの間に

か男も心中決行と相成りし也。こゝらが、内面描寫に緩なる此種俗曲の弊といふべきか。然しこれを新内太夫の口より聞かば、かゝる缺陷の浮ばざるは、不思議也。**○ヲ、かくごはよい云々**。男もかうなれば、覺悟はよいといはざるを得ず。而していつのまにか、「用意の一腰」とまで成りし也。喜之助が初めの、親女房友達の異見と義理にせめられて、切れてくれろのあの相談は、何處へやら。**○かげろふいなづま**。拔きはなつたる刄の光の形容也。かねて「夏の夜の云々雨」にかゝり、稻妻の光れる屋外の描寫にも響かせたり。**○はれやらぬ**。涙の雨の如きが霽れやらぬと、稻妻して雨の霽れやらぬと、及びすつかりまだ明けきらぬ東雲の實景と。**○みだれどり**。二人、乱れて死に伏せる景にも利かせたる也。**○三つ蒲團**。いつの頃よりか、娼家娼婦の室の蒲團の數は三となりをれり。一般事實の習慣上よりか、或は、三なる數字の流用範圍汎きが爲よりか。いづれぞ。（この疑問可笑しきやうなれども、事實青樓妓室の蒲團は、春夏下二上一枚の他に、上下二枚づゝ、或は下數枚使用したる場合もなきにしも非ざんと惟ふが如何。この疑問より生じたる也。）

以上にて、永々の「藤蔓戀の柵」の評釋、一先づ筆を擱きをはんぬ。倘、遺考は、併せて他日の他評釋の中に、説かん。

東風吹江戸繪榮

「云はずとしれた事なれども一年中をもふそうなら一夜あくれば若水屠蘇酒、商人は扇賣、道中双六、寶船、烏帽子着た大神樂、初もの詣では其年の明へ當りし神への惠方參り、初寅の日は芝金杉、牛込の毘沙門天、卯の日は龜井戸妙儀山、三日上野の兩大師、谷中大黑寺の餅の湯。門萬歳に鳥おひとのあとの福大黑、春駒に鶴龜踊、禮者のちどり足は目まで赤く、年季者の樅とめは片袖光る」とは、歌川豊廣畫、南仙笑楚滿人戯言の繪本「東わらは」(上下二卷、文化元年板)の中の言葉である。

江戸も漸く押詰つて、文化文政の頃ともなれば、禁裏と公方との疏隔は、次第に其の端を啓き、國防の患も漸くその煩はしさを加へる頃となつたが、江戸の士女は、然しただもう太平逸樂の夢に耽つてゐた。上に、豪奢前代無比、放蕩古今に絶した大御所(家齊)を控へた彼等、滔々として所謂「袋から出るも芽出たし弓はじめ」の芽出度さに忘我の體であつた武士の階級から、いかのぼりの絲ひく町人の丁稚を連れた我儘な小倅から、絹物を禁せられて纔かに派出な木綿

物の縫合せに女らしい滿足を得た、聲も陽氣な店も淸しい女太夫の鳥追に至るまで、凡てが東風吹く初春の樂しさ、賑かさに我を忘れてゐたのであつた。やがて起る大きな「國」の惱み、續いて起る反封建の思想にも、些の豫感もなかつたやうな、さうした無自覺の心、陶醉の夢の一瞬を永遠にまで引伸したやうな、彼等の凡てがそこにあつた。彼等が如何に國の新しい惱み、再生の前の蠢めきを知らなかつたかは、文化文政の頃から愈々益々その技巧を冴え、益々人間の手業としては恐らく古今未曾有の驚異とまで進めた浮世繪版畫——數多くの當代以後の浮世繪師の筆管から成つた、版下と彫と摺と益々三拍手揃ひ出した、所謂江戸繪の津々浦々に迄榮えた事を想像すれば足りる。

江戸繪は、民衆藝術の第一の烽火であつたことは謂ふ迄もない。その題材の花柳と演劇であつたことも。然し其他に隨分江戸民衆の生活と直接交涉してゐる事も否めない。況して一年行樂の最初、愉悅の先驅たる正月、初春の行樂行事は、勿論その題材から見逃さなかつた。數の繪本に、數の一枚繪(或は二枚續に、三枚續に、或はそれ以上に)に掬まれて描かれた事は謂ふ迄もない。

苦蟲を嚙潰して、始終いら〳〵してゐたやうな顏の北齋にも、正月の繪は隨分ある。同じやう

に初春壽の酒に陶然としたであらう。同じやうに女太夫の艶冶な姿に、人非人の境涯を惜しんだであらう。況して江戸市民行樂の氣分を飲込むに敏感であつた初代豐國や、より多く敏感で且技巧に演練し來つた彼の門下國貞(後の三代豐國)や國芳、及び其の末流に、華やかな正月を背景とした、數々の江戸繪のあることは、無理ならぬことである。

浮世繪は、師宣頃から板畫主に一枚繪に榮えてきたが、春信や春章、歌麿や淸長、榮之と諸大家を數へてきても、その特色は、主に靑樓美人か然らずんば俳優芝居の繪であつた。四季時をりの風物を背景とするにしても、或は間々それを主材としたにしても、多くは春は花咲く春と限られて、東風吹く初春の描寫は少かつた。春信の繪本「靑樓美人合」の春の卷にも、羽子板を弄んだり、鞠突く正月らしい遊女はゐても、それがすつかり正月といふ人間一年の最も樂しい生活味と切迫してゐなかつた。歌麿の美人も大抵は美人の顏や姿態本位で、殊に正月といふ生活味の表現は殆どなかつた。其他役者繪の大家春章の輩に至つては尙更である。然るに初代豐國、豐廣や北齋あたりから、この正月氣分を主題にまたとり入れるやうになつたのである。(即ち豐廣豐國兩畫十二候の三枚續十二組の中の、正月、豐國畫の如きがある)それも一つは、浮世繪が益々生活味の表現を帶びて來たのと、一つは、豐國北齋たちの末期の諸大家が、先輩の粉本、典型の踏襲から新境地を開かうとした

努力のその賜物であるとも謂へよう。

幾筐かの私の藏品の繪を全部疊に引繰り返してみた。中からいろいろ初春氣分の繪を拾ひ出した。

懷かしい江戸末期の頽廢、然し酣醉の夢の著しい物だけを左に列べてみよう。

先づ初代國貞、その香蝶樓國貞時代の三枚續『春のあした雪の乘合』がある。極印であるから、その天保四年以後同十五年に亘る間の作であらう。右一枚は、獅子舞(福助)と角兵衞(歌右衞門)、町藝者二人(紫若と菊次郎)。中一枚は町人(海老藏)と浪人(九藏)。左一枚は、山伏(諸三郎)烏帽師(多見藏)船頭(吉三郎)である。人物もそれぞれ括弧の如く實在の當時人氣俳優の似顔を集め、背景は雪の隅田川である。右手に金龍山の塔が見えてゐる。藝者の傘に、山伏の笠に、雪は白く堆かい。町人の乘つた駕籠(駕籠舁は船中に見えない)の後に、枝もたわゝな繭玉がびらり下つてゐる。人物のそれ〲配合、風情、それに人氣俳優の似顔。嘸かし當時の士女の血を湧かしたことであらう。

今一圖。同じく香蝶樓署名の三枚續「四季の内初卯の口詣」がある。右の一圖は、手拭を襟に

した、若い娘の繭玉を肩にせる繪。その腰付のしなら〳〵と、晩年の彼の繪の鈍重な腰付の美人には似合はぬすつきりとした風情。中一枚は苞に入つた鯉と盥を後ろに、帶際の懷紙に白い手を置いて、靜かに褄をとつた藝者。左一枚は盥に鯉の生氣も甚だしく、そつと口元を抑へた同じく藝者が前に立てる繪。その脊あたりに、「妙義大權現、東宰府天滿宮」と二つ大きな提灯を垂れてゐる。三枚に亘つて空は一連の繭玉の飾り。問はずと知れた龜井戸天神社頭の景であらう。「近世風俗志」の初卯日の項に「江戸にては妙義詣とて、龜戸天神の社頭、法性坊の祠に群參する也。此の法性坊は、叡山の阿闍梨にて、即ち菅神の師なるを以て、爰に祝ひ祭れる者也。妙義權現とは別神なるべき歟。龜戸の祠には、法性坊、華表には御嶽山の懸額あり」とある此れに相違ない。

餘分な話であるが、此の繭玉こそは、私は舊い江戸の緣起物の殘れる中の唯一の懷しき物として好く。柳の枝にたわ〳〵に枝垂れたあの玉よ、さうして紙作り、土作りの色々よ。「春」その物を象徵するにふさはしい青柳の小枝と、人の欲望を最も端的に表現した種々の小寶。私は「春」の匂ひを齎す唯一として之が好ましい。繭玉は昔、緣起物として町人、殊に花柳美人に尊ばれた。私が大正に生れて之を好ましい遊戲物視するよりももつと眞劍な願ひが祈りが、彼女

四季の内初卯の日詣

らにあつた。近世風俗志を繰つた序である。試みに繭玉の説明を省記してみよう、

「繭玉は土丸を用ゐ、其他は厚く重ね張りたる紙製にて、胡粉、丹緑青、其外とも彩を加ふ。圖の外にも、的に箭の中したる形あり。元日には淺草寺を始め、其他諸參詣人多き神社等、頭上に之を賣る。初卯、龜井戸亦專ら之を賣る。當月中諸神社縁日亦之を賣る。買人は、霜月酉市の熊手と同じく、又共に天井裏に之を釣る」とある。

さうして其圖とは、千兩箱や、お龜の面や、蕪青(かぶら)の形や、打出(うちで)の槌や、入船帳(いりふねちやう)や、其他寶珠の類を釣り下げてゐる。縁起物の一、京阪には無之と記してある。當名古屋あたりも、此の繭玉は流行されてゐる。すると之ばかりは江戸の風を倣ひ傳へたのであらう。(但し繭玉、凡てマヒダマと訓じてある。)

嘉永の頃の作に、一勇齋國芳畫の「春の賑ひ」三枚續きがある。右は廻禮の町人と鳶の者らしいその供。中は、獅子の大きな面を据ゑ、お祓を持つた大神樂のいなせな一人の男。左は鳥追の紅緒(あけを)の姿である。降つて安政期に入ると正月の趣向も愈々奇抜なものになつた。百花爛漫一時に咲くとは此の謂であらう。中、最も巫山戲た但し當時の江戸の士女の行樂氣分の象徴とも謂ふべき三代豊國の「梅暦見立八勝人」(安政七年初春賣出)の圖を解説してみよう。

梅暦とはあつても、人情本のそれとは關係なく、八勝人とはあつても滑稽本の八笑人に關係はない。八枚揃ひ、大首で皆それ〳〵人名は正月氣分に作つた假作の名にしてある。假へば男達、春駒の與四郎、男達、凧巾の幡藏、男達、千鳥懸の毬之助、男達、飾海老の門松の類であつて、繪の上に、稽古本風に文句を陳ねた（所謂彼等男達、ツラネの文句を記した）物を揭げ、下に一々その大首があり、衣裳は夫々に因んだお正月の飾り物を圖案にしてゐる。恐ろしく洒落氣の多いものである。脊なは、雲母さへ摺り込んでゐる。例へば毬の助のツラネは「江戸紫の突羽根に殿さまかみさまニゲの羽、曾我に由緒の千鳥掛、歩みの板や羽子板の角たつ達衆の其中で、心も丸い毬の助が、色には引を虎御前……」の如きである。芝居趣味に耽溺した江戸人に巧に迎合した其の趣向、殊にそのツラネが曾我と云々してゐるのは、初春興行は曾我と昔から決つてゐたからであらう。其他源氏繪或は風俗畫の類で、三代豐國及びその門下の「十二月の內睦月」の如き畫題は數ふるに遑ない程である。私はそれ等を一々見越して、偖江戸末期役者繪の大家、或は近き未來に於て春章、寫樂、初代豐國と比肩する地位にならないとも限らない國周の作畫の內、二三圖を列擧してみよう。

國周畫作、慶應三年卯年正月板行の二枚續、役者似顏繪である。二枚に亘つて、全面を繭玉

豊原國周畫

の趣向、それに吊られた金箱、的矢、大福帳の類、それに一々男女に扮した役者の似顔がある。役名は、その右傍の短冊に記されてある。右の一圖は、「三浦屋抱、岩藤」、「傾城尾の上」。左は、「船頭丹治實は大蛇丸」、「嚢や女房實は女兒雷也」と「奥州屋禮三郎」の三人物。賑やかな思ひ切つて正月らしい物である。謂ふ迄もなく之は默阿彌の芝居である。默阿彌當時五十二歳、正月市村座の興行である。お靜禮三の書卸された時で、此の似顔繪は、おしづ禮三を綯ませにした傾城草履打の主役のそれである。分つてゐる役者はお靜、岩藤は田之助。（丁度彼が脱疽を病む前年である。）禮三郎は家橘（翌年五代目菊五郎と改む）等であつた。其他龜藏、三十郎、新車、左

大正十三年一月二十七日印刷納本
大正十三年二月一日發行
第十六冊（毎月一回一日刊行）

文　本

東風吹江戸繪榮（完）
並木正三の「日本第一和布苅神事」
○並木正三傳並に作劇年表
「原始的な稚兒物」の正體

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十七冊

「原始的な稚兒物」の正體

記事の都合で遲れたが、「原始的な稚兒物」の正體が確實に分つたから御報告をする。あの篇執筆當時も、何處かに原本がありさうには思つたが、果してゞあつた。それが話に聞いてゐた京都醍醐三寶院の男色繪卷だつた。眞先に疑問を云ひ越されたのは、大阪市住の室賀雋之助氏であつた。

「(前略)「原始的な稚兒物」は醍醐寺のものとは別ものに候が、勿論小生は醍醐寺のものも存じならず候(十一月十一日)」

右のやうな疑問であつた。第二回は、名古屋市立圖書館長の阪谷俊郎氏からであつた。

「江戸軟派研究第十二冊御掲載の元亨元年寫本「稚兒の草紙」は既に御承知かと存じ候へども現に京都府醍醐三寶院藏の俗に「男色繪卷」と稱する繪卷物の詞書にして、原本にはもう一段有之候。該繪卷は傳鳥羽僧正筆(勿論信ずるに足らず)圖樣は甚乱暴なるものに候へども時代は奥書と同時代らしく筆力雄勁頗る優れたるものにて、本市關戸家藏の「病の草子」同樣珍重するに足るものに御座候 「稚兒の草紙」とは後世其卷物の題簽に書記せるものにて、或は原名の憚多き處より便宜上命名せるものかと存じ候。以上。」(十一月二十一日)

此の手紙に接して、私は、もう一段有之候と云々と指示されたその不足一段の謄寫を依賴に及んだ所、丁寧なる書狀を添へて不足分と稱する段の寫も頂いた。とそれはすでに小生が「江戸軟派研究」第十三冊前半に繼續した物であつた。阪谷氏は、小著の第十二冊だけを御覽になつて、この不足云々の言葉が生れたのであつた。で、とにかく小生の發表の分であの詞書は完結してゐるのである。

阪谷氏は、繪卷原本を見られた事があると見えて、手紙に左の如くあつた。

「(前略)實は小生或る機會に彼の繪卷物を一見致し其後知人の筆記せる詞書を借用して謄寫致置ける迄の事にて別に古き寫本等にては無之候(中略)其次の對話は第五段の文句とは關係なき數個の圖面に書入れたるものに有之候。以上。」(十二月二日)

越えて十二月七日、今度は、內田魯庵氏から左の書狀が來た。

「毎號おもしろく拜見。(中略)なほ此稚兒物は醍醐の男色繪卷と同じではないのですかアレにもタシカ元亨の奥書きがあつたやうに記憶しますが。(尤も此奥書きは後人の記入であらうといふ說もありますが。)(下略)」

十二月五日

丁度其の頃であつた。ふと氣がついて、黑川眞賴氏編の「考古畫譜」を調べてみた。もつと早く、あの篇執筆當時に、見當を付けて調べたら、もつと早く分つてゐたに、此の時分になつて、念の爲、考古畫譜の中の男色繪卷を探した。其の下に容易に見つかつた。さうして最も簡明に、あの「稚兒の艸紙」の正體が分つた。やはり男色繪卷だつた。丁度それへ魯庵氏の「あれにも元亨の奥書きがあつたやうに」云々が呼應した。考古畫譜の「男色繪卷」の全文は左の如しである。

「醍醐男色繪　一卷

橘窓自語云、鳥羽僧正戲畫、云々。或人の物語に、醍醐山某院に、男色の卷有りと云へり。實否をしらず。

貫雄曰、理性院にあり、未レ見二其物一或云三寶院にありと。

〔補〕四郎曰、鳥羽僧正の筆といへる、大に疑ふべし。奥書に、元亨元六十八書寫訖、とあればなり。又、甫裏書に云、此卷久藏、在二本寺庫中一濕氣侵レ之故、原裝接二縫之一處斷毀、不レ便二展觀一而中間已闕、今不レ知二其所在一余爲命レ工理レ之、而不三敢有二レ加焉、懼レ失二正眞一也、蓋與二詞書一歷年已五百年所、今理レ之更可二百年一明治二十有五年五月、永年居士、山田純識」

これで、あの「稚兒乃草紙」が、醍醐三寶院(考古畫譜では、理性院三寶院二說を載せてゐるが、阪谷氏の實見說に基き、三寶院とする)所在の傳鳥羽僧正筆の「男色繪卷」の詞書たることは疑ふべくもない。最初から考古畫譜を調べてかゝれば、難はなかつたのである。疎忽の罪を謝す。尚、元亨元六十八とは、元年六月十八日の意であること、村田鈴城氏御教示の通りである。(著者)

團次等の大一座であつた。因みに此時の藝題は例の如く曾我に因んで、「契情曾我廓亀鑑」で、その中草履打の部は、鏡山の尾上岩藤を世話に最も砕いた物である。今では之が傾城草履打と、お静禮三との二つに分離されてゐる。今一枚、國周に面白い趣向の物がある。それは翌慶應四(明治元)年正月板、鳥羽伏見の戰ひが行はれてゐる矢先、江戸はまだ此んな悠暢な板畫が生れてゐた。それは、圖に三味線の胴を大きく上から垂れて、その胴に、三番叟の顔と鶴の模様が大きく見え、上は、稽古本の體で右に再春菘種蒔、中村芝翫とあり、本文には「その昔秀鶴の名にし負ふ都鳥の折を得て」云々とある。當時守田座に再勤(?)した芝翫に因んだ物であらう。

筈を仕舞ひかけると、三代豐國の「八勝人」と同じ時の、矢張り安政七年正月賣出しの「當世立衆見立五節句」の五枚揃ひが眼に入つた。その内の若駒の春五郎は正月節句の擬人である。助六風の立姿。摺も色も極めて上物。衣裳には、海老、梅、七五三飾り、羽根等。それに春に因んだ「初日影さすが睨みし眼のたつた著ぎの友の勇む駒下駄。花の屋」の狂歌を添へてゐる。これも、初春氣分の一であらう。

其他繪本類を渉獵したら、幾らも此の初春氣分があらう。風景畫には手を着けなかつたが、廣重の東都名所などに、隨分此の初春氣分はある。(例へば、その霞ヶ關など)然し凡てを省く事にした。

初春の屠蘇機嫌、みなみに來れ此の江戸繪の春をこ嬉しがつてかく。

○田之助の脫疽發病年につき

「江戸軟派研究」三二〇頁に、(十二行目)「……岩藤は田之助。(丁度彼が脫疽を病む前年であるこ)」と云ふ事が載つて居ますが、さうするこ、慶應三年が前年であれば明治元年(九月改元)に彼が脫疽になつたと云ふ事になりますが私の覺えてゐる處によるこ(たしかな材料は燒いて手元にありませぬが)それと少し違ふ樣です。何卒お調べを願ひます。私は、たしか田之助は、慶應三年に病氣になつてゐた事と思ひます。慶應三年の五月に市村座で「善惡兩面兒手柏」(鬼娘のお百)の狂言でお百を田之助が演る筈の處、足痛で休み、家橘が演つた事がありますが、それが彼の病氣の現はれた第一であつたと思ひます。其後その年には出勤なく、慶應四年二月守田座で「娘形澤村田之助病氣全快仕候間初日ゟ罷出相勤申候」と看板を出して、乙女重の非狂言「染分千鳥江戸褄」上るり「円字梅後著重紐」清元連中を演じてゐます。而して翌年の明治二年三月守田座の「廓文庫神島物語」で、又病氣が再發して休演し、同五月(「河竹默阿彌」には、七月とあり。尼崎。)には病氣全快と看板を出して笠屋三勝 酒屋半七「星今宵逢夜睦言」清元連中の所作に出てゐます。それで、その年はもう出なかつたでせう。而して愈々脫疽として片足を切斷したのは明治三年だと思ひます。

それ故、慶應三年の翌年は彼の病氣について私は一寸覺えてゐないのですが、明治元年に、病氣が明瞭になつたと云ふ樣な事實が御座いませうか。勿論、慶應三年に舞臺を休む程な病氣であり、明治二年に又それを繰返してゐるのですからその間の明治元年に何ともなかつたと云ふ事は考へられませぬが。右御尋ねします。(東京、吉田暎二)

右の質問によつて、私は何によつて慶應三年を田之助が脫疽を病む前年としたかと、記憶を調べると、關根只誠翁著「演劇叢話」中の芝居年表草に據つたらしい。同書、明治元戊辰年の條に「正月守田座へ中村福助、中村のしほ下る。澤村田之助脫疽を患ひ、名醫ヘボンの療治を受け、義足をなし五月より三座へ出勤。」とあるこれに據つたものらしい。成程御說の通り前年より既に彼は脫疽を病んでゐた。(此事、「河竹默阿彌」にも出づ)全く小生の早斷で實は、「脫疽發病前四ヶ月」とすべきであつた。御好意を謝す。切斷も關根氏說は誤。明治三年二月であつた。(著者)

並木正三の「日本第一和布苅神事」上

私の子供の時分であつた。家にいろ〳〵なぼろ〳〵な本があつた。蟲食ひだらけの、殿様お姫様の錦繪もあつた。

そのぼろ〳〵な本の中でも、少年の眼に、瑰奇的と思はれるやうな本があつた。それが今から思へば、此の並木正三作、しかも彼の絶筆たる「和布苅神事」を刋本にしたものであつた。此の根本には、いろ〳〵繪があつたが、その中でも、一の終りの、富樫左衞門が、空を破つて現れた大きな手の爲に一攫みにされてゐる圖が、氣味の惡い感を唆つた。そのくせ、私はその本が好きで、一度は屹度その恐ろしい場面を披くのが常であつた。文字は、假名が振つてはあるが、さつぱり讀めなかつた。これが根本といふものだといふことを知つたのは、餘程後であつた。しかし本は、ありし乍らの古びと餘り變らぬ程度に於て、未だに私の書庫の中にあつた。汚ない、反古同然の物は、長い月日の中には、無論大抵掃除されてしまつた。主に私の手によつてである。しかし少許の繪本と、此の「和布苅神事」だけは、なぜだか捨てられずに今日まで殘つてゐた。それも一に少年の頃親んだ私の格別な愛が、無意味に繋がり來つたせゐであらう。然し私は、中途にして他の方面に趨り、この凄い繪のある、然し懐しい少年の日の本を忘れることが多かつた。月日は矢の如くに過ぎた。私は、再びこのぼろ〳〵な本どもに還つた。私の後半生の主題として擇んだものは、このぼろ〳〵の本が生んで與れるものに多かつた。「和布苅」の仲間も大分此頃では、買ひ集められた。私は今にして昔の反古どもを、掃除しなければよかつたの未練に慄へる。しかし纔かに此の「和布苅」が

殘つてゐた。着物も多少殘つてゐた。しかしそれ以後、女房が己が着物に對する欲望の如く、樣々な欲望を燃やして買ひ集めたものゝ方が、今の私から價値高きものゝ多いことは無論である。

その「和布刈」を今度此の小著の材料にすることにした。現在「和布刈」の連れとして今私の書庫のうちには「岩井風呂」と「天狗酒宴」とがある。これも竝木正三である。しかし「岩井風呂」も「天狗酒宴」も活字本がある。此の「和布刈」だけは、正三の絶筆として知られてゐるのみ、まだその何たるかをくはしく傳へたものがない。伊原青々園氏の「日本演劇史」の中に、簡單な梗概を載せてゐるのみである。で私は今、其の梗概、複雜なる筋、妙處、竝に作者の傳をものして、彼の門下五瓶等の後輩が紹介批判されつゝあるに比較して、由來僅少なる行數を以てのみなされつゝある、劇作家史の上の貧乏籤をひいた、この正三の、特にこの「和布刈」について、長い言葉を費してみようと思ふ。

それが、特に、私の少年時に懷しんだ本であるだけ、私には三十年といふ月日を經みして、古巣に舞ひ戻つた老鳥の溜息、仄かな寂しい喜びもある事を敢て述べておきたい。さうして私は三十年前、このぼろぼろな本の「和布刈」が、後に、私のペンの上に材料とされる日のある事などをどうして思つたらう。思へば、人生は奇だ。

竝木正三傳

最初に、竝木正三の傳を掲げることにしよう。正三の傳記としては、今私の檢索したもの、

限りでは、左の數種がある。

一、戲　財　錄　一（初代　並木五瓶）　　二、京攝戲作者考　一　烏　有　山　人

三、浪速人傑談　二（政　田　義　彥）　　四、並木正三一代噺　一（著者不詳。入我園主人題。）

五、傳奇作書初編中の卷（西　澤　一　鳳）

以上の中で、比較的正確に近きものと思はるゝは、正三門人の初代五瓶の「戲財錄」中の傳と、及び、「正三が十三回忌」の折、何人の著作にや出だされたるものと稱する「一代噺」と此の二篇であらう。而して他は、主にこれらを根（もと）として成されたものゝやうである。

「一代噺」は、名の如く正三の一代を敍述し、最も精緻なるものあるが、こは、後段の正三作劇年表の資料に讓り、今は唯「戲財錄」の初代五瓶著と稱するもの、簡單且つ正確と認むべければ、左にその全文を拔かう。

一、並木正三　法名當譽正三居士

道頓堀和泉屋正與忰、幼名久太郞と云。作道を好みて、寬延二年和泉屋正三と名乘り、作者と成りて歌舞伎へ出勤、夫より並木宗輔、千柳が弟子分と成り、操にも書作する。元來歌舞伎作者を好み出勤せしより、元來舞臺の大屋根を取り、場の中の柱も取りて、見物の眼障りなきやうにして、せり揚げせり下げ、廻り道具、三段返りのがんどう、

其外數々の道具を工夫仕出し、顔見世の序に化物を出して、見物の眠をさまさせし始め、作者にてもまねきの前看板出し始め、不出來の芝居を取り立て、役者を立て遣ふ事も鍛錬して、外題の頓作見物の眼を驚かし、威勢は古今獨歩にて、座頭をも呼捨て、誠に歌舞伎の作者鏡ともすべき人物。正三一代の當り狂言、其外所の賑ひを工夫し、英名日本に響きし事、人よく知る所なり。委細は並木正三一代噺といふ小冊物にあれば、こゝに略す。其頃俳名に名高き内山枝桐筆作にて、道頓堀法善寺石碑の銘に顯す。其頃の噂に、作は近松門左衛門に並木正三、才智は櫻田宗庵、竹田近江、並木正三、右三人ある故、大阪中恐るゝ由を評す。正三高才に依て、並木千柳子分と成、並木氏の本家也。安永二年二月十七日卒す。行年四十四歳。中寺町法善寺に葬る。紋所は正の草体かへ紋は略九本のすりこ木。

以上が、「戯財錄」中、並木正三の全文であるが、此の「戯財錄」は、巻末に享和改歳辛酉立秋吉旦　入我亭我入とある。若し西澤一鳳言狂作者に示すが如く、此の戯財錄が初代五瓶の著作と爲すならば、此の「入我亭我入」は同じく五瓶であり、且つ「並木正三一代噺」の中の入我園主人題は、五瓶の題であり、且つ「一代噺」の著者不詳は、或は他人のやうに記せるも、五瓶自身ならずやと思はる。然し此の「戯財錄」中には、肝腎の並木五瓶に關する記事も少許あり、別人なりとも思はるゝが如何。

而して、此の戯財錄の、享和改歳辛酉とは、享和元年のことであつて、安永二年の並木正三歿後二十九年目である。若し五瓶の著述とすれば、五瓶の四十一歳である。（初代五瓶は、文政五年、六十二歳にして歿）この五瓶の四十一歳から、ふと今氣のついた事であるが、五瓶が正三に師事したといふならば、何歳頃かといふのである。正三は、安永二年歿である。その安永二年は、五瓶の十三歳當時である。十二や十三では、師事も糞もないではないか。師事したと稱する程度に疑問が起るのである。

偖、以上の戯財錄を基幹として、一二異同を左に列擧してみよう。

一、父の名。及び身分。

○道頓堀和泉屋正朔。（戯）○正兵衛と稱す。雲州松江侯藩中の士なりしが、中年より仕を辭して浪花に來り、堀江に住居し、諸木金石より油を取り、南蠻流の秘傳を鍛錬せし故、是を家業とせし人なり。（浪速人傑談下）

○其父もとは雲州の仕官にて、いさゝか仕へを辭する事侍りて、大阪堀江へ漂泊し、諸木或は草花金石などより油を取る法、南蠻の秘傳を鍛錬し、いやしからぬ家業をいとなみ、正兵衛と呼ばれくらせし内（奴正兵衛とて人の知りたる男なり。）道頓堀元拼町、扇子屋方の遊客と成りしも、しかるべき値

過にや、扇子屋の娘に契り、正三をもふけ、幼名を久太と呼びしに、其後故ありて、正兵衛、右扇子屋娘のいもうと、いづみやといへる芝居茶屋へ入聟(むこ)して、連子の久太を養育せし故、幟襬の内より櫓太皷の音を友とし、竹馬の頃は歌舞伎の樂家をあそび所、又は操芝居へ入込介錯(かいしやく)のたすけに成り、からくり芝居の下屋へ這入り、ぜんまい積りもの、糸どりを見おぼえ、其節親正兵衛出羽の芝居世話せし時（今の角丸芝居の向ひにありし）のしかけは、久太十四五歳の工夫なりと聞及びぬ。夫より後元服して正三と改め云々。（一代咄）若水千歳狐といふ、手づまからくりの水船（以上を列擧して來ると、一代咄最もくはしく且つ正確に、浪速人傑談の如きは、全くその一部分をその儘なりといふことが出來る。而して若し一代咄の說話を信ぜば、正三の父は、姉と妹に通じたえら者、而して正三は、叔母を養母として育つたものとなる。因に、父の名正翺は、正兵衛の法体後の名。この事、「一代咄」に出づ。

二、正三の幼名。

久太（一代咄）。○久太郎（戲財錄）。○久太郎（浪速人傑談）。

（此間の異說あり。曰く、「正三は大阪道頓堀宗右衛門町に住みて、俗稱は高砂屋平左衛門といへる、年古き菓子屋なり。若き頃より戲場を好み云々」（京攝戲作者考）「並木正三は道頓堀宗右衛門町に住み、高砂屋平左衛門といへ

る菓子屋にて、年古く住む町人也。若き頃より云々。宗右衛門町の町年寄を勤め、作者にもあり。云々。（一代傳奇作書初編）とあり。共に、高砂屋平左衛門といへる菓子屋、一は年古き菓子屋」と云へれど、是れ如何で（一説には、この平左衛門を父の名といふ。）或は、此の菓子屋は父正兵衛に關係なく、正三立身後の副業ではなかつたらうか。

三、正三と改名し、作者となりし時。

○其節親正兵衛、出羽の芝居世話せしとき（前掲「父の名、身分」中、參照）云々のしかけは、久太十四五歳の上夫なりと聞き及びぬ。夫より後元服して正三と改め、はたちに足らずして大西の芝居にて（今の籠後の西大長あたりに芝居ありしなり。）中村喜代十郎といへる女形、中ウ芝居を興行せしとき、中橋筋大寶寺町西がは枡子屋の隣、鍛冶屋の娘手を負ひし噂を、三番續の狂言に取組み、寛延元年辰八月右喜代十郎芝居へ出せしが、正三歌舞伎狂言の書はじめ也。則其時狂言作者泉屋正三と名前を出し、云々。（一代噺）。○寛延二年和泉屋正三と名乘り、作者と成りて（戯財録）○寛延元年辰八月一夜に戯作の狂言を作りしより云々。（浪速人傑談下）

（以上の內、寛延元、若しくは二年なりとすれば、正三は享保十五年生、故に、彼の十九歳若しくは二十歳である。然るに、我等は、一代噺の「はたちに足らずして云々」とあるを信じ、彼の十九歳、寛延元年戊辰說をもて正しとしたい。）

四、並木宗輔に師事した折。

○作者となりて歌舞伎へ出勤、夫より並木宗輔、千柳が子分となり云々。（戯）○若き頃より戯場を好み、並木宗輔に入門して（㗆奇作書）○同文（京攄戯作者考）○幼年より學を好み云々、並木宗輔門人となつて、戯作に心を深くこらし、遂に其の妙を得たり。寛延元年辰八月一夜に戯作の狂言を作りしより生涯作る狂言八十余番云々。（涙速人傑談。）

然るに、「一代咄」の中に、

「巳の霜月より云々、午の四月まで大入云々。同じく七月より云々。其内芝居相休、當暮より淨瑠璃作者並木宗輔の門弟と成り此人に隨身して、豊竹操座へかゝへられし所、未の七月より云々。」

とあれば、即ち之を信ずれば、寛延三年（庚午）の暮に並木宗輔に師事したるを正しとせん。即ち彼の二十一歳の折である。然るに宗輔は、從來の諸說寛延二年九月歿說をとりをれるは如何。すれば、正三の宗輔に師事したる年は、この二年の巳に繰上げざるべからず。いつとは定らざれど、とに角寛延元年八月より同二年の九月宗輔歿に亘る間の短日月とならざるを得ないが如何。「一代咄」は比較的信用を措けるものなるが、此の宗輔歿の年によつて、ハタと戸惑ひした。幽靈を師匠とすることは、無論なからう。すれば宗輔に師事したるは、寛延

二年九月以前、或は、寛延元年八月の處女作以前、十四五歳の頃より、芝居のからくりに工夫を凝らし始めてゐたといふ(一代咄)早熟時代より、既に宗輔に師事してゐたのではなからうか。此の宗輔師事の出典数本の中、師事して後に戯作を試みたるやう書ける浪速人傑談等の說却つて正しく、歌舞伎へ出で、それより宗輔に師事せりとある戯財錄の說(無論一代咄も)等は謬傳なるにはあらないだらうか。

五、正三の獨步時代。並に並木と改姓した年。

「一代咄」によれば、「宗輔當十一月中旬、一谷嫩軍記の三段目を書きながら病死致し、師の遺命によつて、申の年は豊竹を離れず、同年霜月心にそまぬ事ありしや、角の芝居故三桝大五郎座へ住み、並木正三と姓を改め」とあるに據れば、申の年とは、寶暦二年に當る。然し前に述べたやうに、宗輔の歿年を寛延二年とすれば、この文は信じかねる。但し寛延二年より寶暦二年の足掛四年間を、師の遺命により、豊竹を離れずとすべきであらうか。不明。ともあれ、彼の獨立獨步時代は、宗輔の死後、寶暦元年頃よりと見て可からう。彼の二十一歳の頃である。又並木の改姓も同時と見て可からう。

六、正　三　の　死。

○「安永二年癸巳二月十六日。（中略）其夜八ッ時分に俄に心痛取詰めたりしや、妻をおこして水をこふにより、打ちおどろき親正朔七三郎共に（三升元服して七三郎後に新平と改名）近所の知音へしらせしうち、伊勢屋又右衛門、大村屋九八、中村歌右衛門、市山助五郎皆々多年の親友なれば早速かけ付、醫師も彼是其外昵近の輩まで思ひ思ひに介抱すれ共相叶はず、さのみ苦痛の体共見えず、大喝一聲南無三寶と一句を殘し、眠るが如く息たえ畢ぬ。云々。」（一代噺）（而してその死期を早めたりしは、一に彼の「和布苅神事」の爲であつたことは、後段に叙出する所を俟つて知られたい。）

七、正三の門人。

初代並木五瓶といふ。又、奈河龜助も彼より指導を受けたりと。其他狂言作者の並木舛、彼より凡て出づといふ。

八、正三の述作の數。

○凡三十年來道頓堀京都に及んで、狂言戯作の譽れ高く、一生の述作七十餘番。其外濱中ッ芝居の作文、又は一夜づけ、顔見世など數多ければもれやすらん。剰へ京都の出勤、伊勢部のさき〴〵にも急なる替りに望んでは見捨る事なく、筆作に助けられし端本なども多かめれど、是を記すにいとまあらず。云々（一代噺）○生涯作る狂言八十餘番に及びしとなり。（浪速人傑談）

今左に、「一代噺」の記事のあとを辿りて、正三の作劇年表をものしよう。

並木正三作劇年表

外題	興行年代	正三の年齢
一、不詳(三番續の狂言)	寛延元、八月中村喜代十郎芝居	十九
二、冬籠妻乞軍	同十一月坂東豊三郎座	同
三、二の替り 戀淵血汐絞染	同同	同
○筒十(高田瑞庵なる醫)との合作。		
四、男作養老瀧	寛延二年七月三桝大五郎、歌右衛門座	二十
五、壽黄金勝軍	同十一月大西三桝大五郎座	同
六、二の替り 大和國非手下紐	同同	同
○此狂言翌年の四月まで大入。		
七、若翠結相權現松	寛延三年五月同	二十一
八、薄雪遊撰染	同七月同	同
○此狂言、作り替へ也。		
九、三人組染貫模樣	寶暦元年七月角芝居中村歌右衛門座	二十二
一〇、雨防紅莞蓙(あまやどりくれなゐはなござ)	同	同
一一、織田軍記紅葉鐙	同九月	同
一二、名護屋織雛鶴錦	寶暦二年十一月角、三桝大五郎座	二十三
一三、二の替り 三河國照田姫昔物語	同	同
一四、高臺橋皈鳥	寶暦三年二月	二十四
一五、西東合見臺	同四月	同
○これは竹田の三切ものなりつせし趣向にて、舞臺道具を奇麗に仕立はり込みしゆゑこれも請よく、跡へ河堀江の心中、冥途ノ里塚さて又切狂言なりけしより、六月迄持越。(一代噺)		
一六、金比羅御利生幼稚子敵討	同七月同	同
一七、泰平木曾譜	同十一月大西三條定助座	同
一八、二の替り けいせいいかい天羽衣	同同	同

○同年疫病の呪に門々に張札せし、キノニノヤノハノモノといふ事を思ひより、二のかはりけいせい天羽衣といふ狂言を出せしが、正三一代名をあげし根本にして、大切に三間四方のせり上を工夫仕出し、大阪町中を悦ばせしも、全く幼き時より竹田のからくり、積りものゝ糸ごり、萬端見おぼえ置きし發明ならん。云々。此狂言戌（翌寶暦四年）の四月まで大入し云々。（一代噺）

一九、五説經　寶暦四戌年四月　二十五
（三荘太夫、愛護若、小栗、苅萱、隅田川を一ツにして五説經といふ看板出し、狂言本出來せしに、後に此の木をうつし取り、正三死期に新狂言として京都にて出す）其時故ありて不出。（一代噺）

二〇、七條河原茶湯の釜入　同　同
○さ外題して（これも後に淨るりに出されし事後にしるす）看板出しかど、これも初日不出、座中もめ合。（一代噺）

二一、丹波屋助太郎館　同五月、中の芝居、嵐三右衛門座　同
○今年（天明五年）東の芝居にて女大學と出したるは是也。（一代噺）

二二、奥州遊行柳の内　同　角、三桝大五郎座　同
○故大五郎親友にて、據なく頼まれ奥州遊行柳の四九次郎場を仕組つかはし、七月替りは此一場で大入を取らせ、（同）

二三、一休ばなし　同九月　中の芝居　同

二四、二の替り天照太神宮岩戸囃　同十一月　三右衛門座　同

二五、道中千貫樋　同　同　同

二六、久松おそめ戀の盂蘭盆　寶暦五亥年五月　二十六

二七、女文字平家物語　寶暦五亥年冬　京、布袋屋座　同
○中村十藏が上京の砌、十藏の教經を出したりと。（この事、「一代噺」になし。伊原氏「日本演劇史」に據る）

二八、二の替り時代世話黄金榮　同十一月　中、坂東豐三郎座　同

二九、村鳥廓音聲（さとのねじめ）　同　同　同
○尤も此年は一方の作者の立者永助と正三同座にて、二のかはりには定めて目ざましき趣向あるべしと、みなみなこぞり居たる所、鳥邊山心中に、茨木屋幸齋を取組み、村鳥廓音聲といふ二のかはりを出し、大きに評判あしく、各の内三四日相勤め、正月初芝居よりもめ出し、一向出來かね、三

月を待たず座中伊勢へ行きし也。正三も四月中頃より思出、參宮して懇ろなる中なれば、故三右衞門部屋に逗留の內、故三右衞門淫性の傷寒を煩ひ付、他事なく正三介抱すれども次第におもり、五六日の內に死去いたし、泣く〳〵其跡取り置き遣はし、五月の末に正三大城へ立ち歸り云々。（一代噺）

三〇、草津小女郎　寶曆六子年七月角、姉川大吉座　二十七

三一、大松百助壽六法（たんぜん）　同十一月大西芝居　同

三二、二の替り 天竺德兵衞聞書往來　寶曆七丑年正月二日同　二十八

三三、四天王寺伽藍鑑　同　同

○此狂言は新淨瑠璃に取組み、舞臺に手すりを操同然にこしらへし故、又々町中の氣を得て、大きに評判よく、はじめて大字七くだりの正本を出し七月までも持ちこしたるに、芝居出來かね、殘念に其年を送りし內、京都扇子屋孫八芝居より抱へに來り、丑の霜月京都へ登り、（同）

三四、大社結納三番續（淡イ）　同十一月京都染松松次郎座　二十八

○右、中村十藏の爲に再び京へ呼上されて作したる並木正三の「日本第一和布苅神事」はものとも云ふ。（日本演劇史に據る）

三五、二の替り けいせい飯綱八文字　寶曆八寅年正月同　二十九

三六、夏紅葉血汐紅　同五月同　同

○（此狂言）西陣織物屋の心中、（夜附々、赤い盡い外題。（一代噺）

三七、業平東下向　同七月同　同

○其霜月大阪へ歸り、（同）

三八、稀藤原系圖（ありがたし）　同十一月角、中山文七座　同

三九、二の替り 三十石艠始（よぶね）　同同　同

○古今の大當り、文七故大五郎始めての出合はなばなしく、大切に砂ぶたい共、面の廻り道具を工夫し、云々。（同）

四〇、大阪神事揃　寶曆九卯年八月同　三十

四一、福源氏壽卷　同十一月同　同

四二、二の替り 九州釣鐘岬　同同　同

○（此狂言）四月の頃まで大入して、（同）

○此後、戀の緋櫻（お七吉三）のくりかへし、八月は、戀女房のくり返しあり。この戀女房は「大き

によく、顔見世前までつゞきたりしが、二代噺に據る

四三、生如來金顔見世　寶曆十辰年十一月　同　文七座　三十一

四四、彌太郎天狗酒禮　寶曆十二巳年五月吉辰　同　三十二

○これも大きにあたり、（二代噺）此夏、正三親正兵衞剃髪して正朔といふ。（同）

四五、惣追補使鎌倉鑑　同　十一月　同　文七座　同

四六、二の替り　泰平いろは行列　同　同　同

○忠臣藏の作りかへ。（同）

四七、竹篦太郎怪談記　寶曆十二午年七月　同　三十三

○午の霜月京都へ登り、顔見世は、川太郎のくり返し、二のかはりはけいせい花城山云々。（同）

四八、京の二の替り　けいせい花城山　寶曆十二午年十一月　京　同

四九、源平通寶丸　寶曆十三未年十一月　京、松之丞座　本　三十四

五〇、二の替り　けいせい熊野山　同　同　同

五一、敵討仙臺訛　明和元申年　京　三十五

五二、其後祇園林　明和元申年十一月　京、尾上紋太郎座　同

○申の霜月は尾上紋太郎座、其後祇園林の心中の一夜づけより松之丞病氣にてとりかゝり、程なく死去せしより、大阪へ立ち歸へり。（同）

五三、狂言曾我扇屋惡方果報　明和二酉年正月　竹田芝居　三十六

○外にけいせい十三鐘、閑取二代鑑の三切りもの、故三桝他人巳之助立合の引はりよく。（同）

五四、恂り浦島　明和二酉年七月　同　同

○天上返りのおどけ狂言、そんてんびるのせりふを流行らせ、

○同年八月に、竹本芝居にて投頭巾北濱育といふ淨るりの外題出しかど、さはりありて看板を引。急に新淨るりの取組を頼まれ、正三永介其外の淨るり作者打込に相談して、姻袖鏡を拵へ、倶々書立達者をあらはし。（同）

五五、娶しのだ妻　同　十一月　中、三桝大五郎座　同

五六、惟喬親王魔術冠　明和三戌年四月　三十七

五七、男作後日帷　同　七月　同

五八、往古大坂村在所由來　同　十一月　角、雛助座　同

五九、二の替り世話料理鱸庖丁　同　明和四亥年春　三十八，

六〇、義經腰越話　同　同

六一、大阪日記鹽の長次郎　同　八月　同

十月には竹本へ又々に出て、石川五右衛門一代噺を出し、（これ先年かんばん出せし七條河原茶湯釜入なり）（同）

六二、男女相生鑑　同　角、中山來助座　十一月　同

（明和五年春は、京都中山文七より賴まれ又々に登り、二のかはりけいせい桃山錦を出し、同

六三、京の二替りけいせい桃山錦　明和五子年春　京、中山文七座　三十九

六四、宿無團七時雨傘　明和五子年秋　大阪、竹田芝居　同

○其頃の噂いは非風呂の一夜づけ尤も大入、（一代噺）

○（前略）是等をはめものゝ中にても活取（いけどり）さ唱へ、濱芝居の作者の仕事にて、並木正三の作にあらず。夫ゆゑ始て此狂言を出せし時には、高砂屋平左衛門さ正本にも書き云々。明和七寅六月中の芝居にても此狂言を出し、高砂屋平左衛門を並木正三さ

並木正三の「日本和布苅神事」上

作名を直せしは、正三歿後寛政二戊年五月、角の芝居にて中山來助二代目勤めし時なり。云々（傳奇作書）倚、此の岩井風呂の實說、西澤の靑傳栗に出づ。此の芝居、正三自身が茂兵衛を意見する所ありて、有名なること、人の知る所也。（尼崎）

（九月に、龜谷濱芝居跡にて、二相生橋南づめ、東へ入る所に有しなり）淨るりあやつりを取立、予分正吉名前にて、連管三番叟、蘆館狐馬懸姿競、唐土噺、闘取二代轉貸附、其外古物合して六切の淨るりを出し、太夫三絃操り方の一座をかゝへ、夫のみならず芝居の向ひへ新宅の茶屋を組立て、裏に勝手を計らはず、二階座敷に又々植込中庭拵らへ、大きに派出なる仕かけなりしが、保ち難く、芝居さ共に立消して、丑の年（明和六年）夏より思ひ立ち、蔦屋さいへるに內談して、一座を阿波へ引越させ、其身も弟分三勝其外晶近の者を引き連れて阿州へ立越え、看板に大阪歌舞伎芝居顏取さ英名をあげ、又々故來助雛介其外の役者を呼び下し、秋の末に立ちかへり、夫より父が吉左衛門町に居て、丑の暮より角芝居にて、富士松山十郎（今は三條木茂左衛門也）座を取立、顏見世濟ければ、納めの庚申待さ外題して暫らく始め、寅の二月上旬より

二の替り、阿波土産の心にて、東山殿女狩云々。
（二代噺）

六五、二の替り 東山殿女狩　明和七寅年二月上旬 角、富士松山十郎座　四十一
○大きに評判して夏までつゞき。（同）

六六、正徳年中 瀧屋橋の喧嘩　同 同　五月（?）　同

六七、夕涼蚊追店　同 同　七月　同

六八、二の替り 眞一文字魁評判　同 中、小川吉太郎座　十一月　同

六九、桑名屋徳藏入船物語　明和八卯年春 同　四十二
一切に、面影六歌仙さて、故中村粂太郎所作事まで
古今にすぐれ入つめ、（同）

七〇、中睦妖藏宮嶋臺　同 中、市山助五郎座　十一月　同
○歌右衛門猩々の役、これもおかしく、（同）

七一、二の替り 三千世界商往來（やりくり）　同 同　同

七二、近江源氏瑢講釋　安永元辰年三月末　四十三
○皆々大當りにて、辰の秋、（安永元年）頃より、正三
胸痛みの病症、時々おこりけれどもたじろがず、
まへ廣に江戸表へ入をつかはし、來る顔見世に故
尾上菊五郎の相談成るよし通達有りて、中の芝居
へ中村歌右衛門名前を上げ、故菊五郎前かんばん
出せし所、俄かにへんがへ故、係の者ども大に騒
亡し、術計つきたるに、病中ながら、ちつともひ
るまず、頓智の外題を思ひ付、尾上菊五郎不登嘶
と顔見世狂言のかんばんを出し、坂田半五郎を呼
寄せ、出來にくき難義の所をわかやかし、思の外
大入して、（以下次の項につゞく）

七三、尾上菊五郎不登嘶　安永元辰年十一月 中、中村歌右衛門座　四十三
○（前よりつゞく）合のもの新うす雪も相應に入りた
る内胸痛日々に增長し、此頃は、腹中にてやぶれ
鼓を打つごとき音を出し、眤近の内に醫心ある醫
もあれば、養生に如才なく、病氣の内にも二の替
り、狂言に心を使へば、次第に重るといふさても
輕うはならず。時々は堺の醫家へ導引の療治にか
よひ、打臥すとはなしにぶらぶらせし内に、漸く二
の替の時候世界を思ひより、夫より日もつまりあ
れば、せり付て三ツ目四ツ目を相定め、序二ツ目
もあらかたにきはまりし時惟安永二年癸巳二月十
六日、いつにかはりて甚だ病氣こゝろよしさて、
眤近の者をよせ、四方山の噺しの内にうかみしや
日本一和布苅神事と外題をなしたゝめ、脇付までも

こま／＼と書付け、病氣もいとはず座本中村歌右衛門方へ持ち行きけれども、折ふし富市道頓堀名代の料理屋方にて御屋敷の振舞の席へ立ち越えしと留守の也方 樣子を聞き、明日までも延されぬ急なる家業づくなれば、杖にすがり、富市の勝手へ行き（是れ使ひにても事濟むべきなれども大事の外題の內談なれば、直に行きし也）、歌右衛門を呼び出し、密に外題を見せたりしに、大きに氣に入りければ、看板あつらへの手つがひまで、其座にて內談し、こゝろよげに立ち歸りしが、其夜八ッ時分に、俄かに心痛取詰めたりしにや、妻をおこして水を乞ふにより、打おどろき、―以下、正三傳中、第六、「正三の死」と同文。參照。 以上一代噺

同、二の替り 和布苅神事 同 安永二巳年（正三歿後） 同

以上 作劇年表 完 ――

以上で、「並木正三一代噺」に據つた正三作劇年表は終る。或は無論脫漏もあらうし、はた又同一作で、後日改題のものも或は混つてゐよう。したがつてこの七四なる數字は無論正確ではない。唯、「並木正三一代噺」のあの原文のまゝでは、迚も一目、正三の劇作年次を知る由もないから、正三の「和布苅」に言ひ及ぶに先立つて、かゝる徒勞を敢てしたのである。が然し正三の一般、作の推移並に外題を比較的多く見うる點に於て、滿更無駄な事には屬すまいか、如何。

〇並木正三の根本刊行數と並に、活字本登載數

並木正三傳並に作劇年表を終るに際し、此の彼の根本刊行數、並に活字本登載の如何なるものなるかを述べ、以て涉獵繙讀の參考に資せよう。（根本の意義、並に刊行の顚末等、凡て、坪內博士著「歌舞伎の追憶」二〇、二一等に出づ。よりて略。）

一、刊行の根本

繪本戯場棊（宿無團七時雨傘）　松好齋畫　享和二年版
三十石艠始　鐘成畫　文政四年版
桑名屋德藏入船話　同　同　五年版
霧太郎天狗酒宴　同　同　六年版
和布苅神事　同　同　十年版

――「歌舞伎の追憶」に據る――

二、活字本

傾城天羽衣　（寶曆）德川文藝類聚　七
桑名屋德藏入船噺　同
霧太郎天狗酒宴　同
宿無團七時雨傘　（寶曆）脚本傑作集　上
三十石艠始　同　同　下　有朋堂文庫脚本集上

以上を以て、略〻並木正三一代の經歷、劇作の迹を闡かにし得たことゝ思ふ。以下、筆を改めて、彼の絕筆、彼が劇作家として最後の心血を傾到せる、且つ或は之に由りて彼の死期を早めたるやの感ある（正三作劇年表、第七三の後參照）「和布苅」の梗概、その妙處、且つ彼の特徵、比較論に亘りて說かう。

大正十三年二月二十七日印刷納本
大正十三年三月一日發行
第十八冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第十八冊

本文

賣比丘尼考

名義——寛永より万治の歌比丘尼——天和貞享の歌比丘尼——元祿期の賣比丘尼——花洛、浪花の賣比丘尼——各地方の賣比丘尼——比丘尼と武士との心中——極盛期江戸に於ける分布——寛保の禁令——終期。（未完）

清廣は清滿門人なり（井上和雄）

賣比丘尼考

歌比丘尼、熊野比丘尼、勸進比丘尼、繪解比丘尼、賣比丘尼、或は丸太など〻稱した江戸時代私娼の一種、比丘尼の考證である。

熊野比丘尼とは、次掲以下の如く、熊野に因縁を多く持つた故の稱呼であり、其他は、歌を唄ひ、勸進を爲し、地獄極樂の繪解を爲したからそれ〴〵個々に假名としたのである。賣比丘尼は、謂はずと知れた賣色比丘尼の義。丸太は、圓頂、太は賣女の女。「好色訓蒙圖彙」の「比丘尼、丸女」と傍訓せるも爾なりといふ。（其他、尼出――尼の振りにて出づる賣女。竹釘――圓頂にして髮なきを象りて謂へるなりといふ。凡て賣淫比丘尼の異名。外骨氏著「笑ふ女」に據る。）

歌比丘尼の現れたる文獻中、最も古きは、淺井了意（寛永六年九月二十七日歿。年七十歳）の著といはる〻「東海道名所記」（万治年間或は同元年刊行といふ）であらう。曰く、この沼津泊りの記事の内に、

「いつのころか、比丘尼の伊勢熊野にまうでゝ行をつとめしに、その弟子みな伊勢熊野にまゐる。この故に熊野比丘尼と名づく。其の中に聲よく歌をうたひける尼のありて、うたうて勸進しけり。その弟子また歌をうたひけり。又熊野の繪と名づけて、地ごく極樂すべて六道のあり樣を繪にかきて、繪ときをいたし、奥深くおはします女房達

は、ちそうで談義なんどもきく事なければ、後世を知らぬ人のために、比丘尼はゆるされて、佛法をもすゝめたりける也。いつの間にかさなへうしなうて、熊野伊勢にはまゐれども行をもせず戒をやぶり、歡といふ事をもしらず、歌を肝要とす。繪の眉細く、薄化粧、齒は雪よりも白く、手あしに臙脂をさし、紋をこそつけねど、たんがら染、せんざい茶、黄がら茶、うこん染、くろちや染に白裏ふかせ、黑き帶にこしをかけ結びたれて長く、黑き帽子にてかしらを包みたれば、その行狀はお山風になり、ひたすら傾城白拍子になりたり。持戒の比丘尼をなかすらいはその科五逆罪の内なりと經には說かれたるに、比丘尼の方より、つきつけの切賣をいたし侍ることのかなしさよ。（中略）と藥阿彌すゝりあげて泣きければ、氣のちがひけるさて、男も亭主も興をさます。ひくにどもけ肝をつぶして、逃げて去けり。」（温故要言本に據る）「藥阿彌すゝり泣き、比丘尼二人、逃げゆく圖を載す。比丘尼いかにも黑帽子にて、手に箱を持ち、その箱には、牛王を入れ居るものゝ如し。尾崎。」

右に、「いつの頃か」とあれば、此の「東海道名所記」の萬治年間より、更に古に溯つて、此の起源は存するであらう。（骨董集には、寛永の頃との比丘尼の圖を載せてゐる、次掲）右にもある如く、當初は、此の比丘尼、歌とお談義と、自行化他でひたすら固めたものが、後には、歌どころでもない化他（賣色）とに轉化したものであらう。（寛文の頃、びんざゝらを持たせ、歌をうたはせしより風俗大に下る。尤も唱歌もやひなり。此時より賣女のきざしを現せり。「我衣」にも見ゆ）さうして初めは、熊野に必ず行しに行つたものが、後には、彼等の己が勝手、さまざまな巣窟が、始終の熊野となつたものであらう。

此間、此の熊野に行つた云々に就ては、異説がある。この「東海道名所記」よりは後世の筆者ゆゑ、何ともいへないが、即ち谷川士清の「倭訓栞」には、「熊野に住んだ」とある。曰く、

「びくに。熊野比丘尼といふは、紀州那智に住みて、山伏を夫とし、諸國を修行せしが、いつしか歌曲を業とし拍板をならしてうたふ。こを歌比丘尼といひ、遊女と伍をなすの徒多く出來れるをすべて、其の歳供をうけて一山富めり。此の淫を賣るの比丘尼は一種にして、縣御子とひとしきもなかし」（[illegible]）

「其の歳供をうけて一山富めり」とある。これが果して事實であつたとすると、熊野のお山は賣比丘尼の元締、僧形私娼の大本山のやうに取れる。（落語家ならば、だから賣女をおやま――お山といひますと落をとるところだが）。この倭訓栞と殆ど同説のものには、

「紀州那智の比丘尼は　皆山伏を夫とし、諸州歌曲を以て勸進をなする比丘尼を總べて其の歳供を受く。殊に東都色を賣る比丘尼數千人ありて多くの供料を贈る故、一山富みて豊なる一寺家なり。」（[illegible]）といふがある。

こゝに「東都色を賣る」云々とあるから、即ち倭訓栞説と東海道名所記説とは折衷して考へられる。即ち、當時、比丘尼には種々の系統ありて、熊野在住のものと、また熊野を道場とした他國のものと、後には更に何ら熊野に上つた經驗なき、他の土地在住のものとの各種に別れたものであらう。さうして然しそれらの凡てが熊野を以てとにかく己がじゝのお山としたことは同一であらう。（「倭訓栞」の「紀州那智に住みて」とあるは、行をしに在山しての意にも通ふのか

も知れない。)ともあれ後には、何でもない者までもが、熊野を眞似たり歌を眞似たりしたことは無論で、此等も、はた正眞の勸進お談義專門の清淨比丘尼も、ひとしなみに熊野比丘尼又は繪解比丘尼、又は歌比丘尼などと汎稱されたものであらう。

倘、萬治以前の比丘尼形態を窺ふに足る多少の材料がある。曰く「近世奇跡考」所引の殘口の記。曰く、骨董集。即ち、近世奇跡考(京傳。文化元年の序あり。)卷二の中に、

「殘口の記に、歌比丘尼、むかしは脇挾(わきばさみ)し文匣(ふんこ)に卷物入れて、地獄の繪說(ゑとき)し、血の池のけがれをいませ、不産女の哀を泣(なか)する業なし、(此邊、「艶道通鑑」にも同文あり。尾崎。)年籠(としごもり)の戻りに、烏牛王配りて、熊野權現の事觸(ことふれ)めきたりしが、いつの程よりか、かくし白粉つけて、付鬢(びん)帽子(此の付鬢帽子、不詳。或はしころ付頭巾の如きをいふか。即ち東海道名所記の圖にも、しころの如きもの垂れたれり。即ち、こゝの「黑帽子」と同一の物なるべきか。尾崎。)に帶はど廣く成し云々(下略)東海道名所記(萬治中板本)云、比丘尼ども一二人いで來て歌をうたふ。頌歌は聞きもわけられず、丹前さかやいふふしなりとて、たゞあゝ〱と長たらしく引きずりたるばかり也。次に柴垣(明暦中はやり小歌)とやらん、もとは山の手の奴どもの踊歌なるを、比丘尼簓(さゝら)にのせてうたふ。みどりの眉はそく、薄化粧し、歯は雪よりも白く、黑き帽子にて頭をあぢに包む。云々。(下略)かゝれば熊野比丘尼の風萬治の頃はや變りたり。(この變りたりとは、萬治以前は、繪解比丘尼。以後は、歌比丘尼——實色の變化を斥せるならんか。尾崎。)紫の一本に云々。(次揭「嬉遊笑覽」所引のもの悉しければ、こゝに略く。尾崎。)此の歌比丘尼といふもの、今はたえて

名のみ殘れり。」(此の「近世奇跡考」所引の東海道名所記の項は、本考冒頭の東海道名所記の文の前半である。尾崎。)

然るに、「今はたえて名のみ殘れり」とある。その今は、京傳が近世奇跡考編纂了の時は、文化元年なれば、即ちその以前に此者亡びたりと見ることが出來よう。然るに、同京傳著骨董集の中にも、挿圖ありて、(同上編下之卷後。)

「下にいだせる古畫、その風体をもて時代を考ふるに、寛永の比かけるものにて、勸進比丘尼の繪解する体にてあるべき」

とありて、その挿圖は、「○古畫勸進比丘尼繪解圖、按ずるに今よりおよそ百八十年ばかり前、寛永中に於ける繪なるべし。頭を白き布にてまきたるは、ふかきふり也。七十一番職人盡の繪を合せ見るべし」とあつて、その左に、武士体の若衆二人、その前に、頭に白き布を卷きたる比丘尼二人差向ひにて、(即ち寛永頃は、白き布を頭にまき、未だ付髮帽子黑帽子ならざりし也。尾崎。)手に細長きものを持つてゐる。その傍書に「手に持てるはぢごくの繪卷なるべし」とある。又、庭の縁先に腰かけたる丸頭の小比丘尼あり、腰に柄杓を挿し、手に物を持てる圖がある。その傍書に、「此小びくに、手にもてるはびんざゝらなり」とある。縁の上に、蓋なき筥やうのものあり、その上に編笠載りをり、(編笠は、今一蓋、小比丘尼の足ちかくにも、縁に立てかけあり。)それに、「牛王箱なるべし」とある。

（この作と、東海道名所記挿繪中の書と頗る相似たりと頭は、黒帽子と此白布を巻とこそ異れ、書は同じであつたのだ。）

これに、寛永頃と判斷せるを見れば、即ち歌比丘尼は、東海道名所記の萬治よりも更に古く、寛永（元年は、西紀一六二四年。同二十年は同一六四三年、共に家光治世。）若しくはそれ以前にその濫觴を認めなければならぬ。唯さへ、尼と將軍家光とは聯想され易いのに、（三代家光が、伊勢宇治、正慶院の院主某尼を過分に引援したさは、野史に夙に傳へられてゐる處で、某尼は懐姙したとの噂も立つた。）この歌比丘尼までもが、その治世下の寛永に端を發してゐるとすると、上の好む所下之を好むの理に依りて、これが發生を招致し、後來の純私娼風を生むに至つたのではなからうか。少くとも、將軍家光、歌比丘尼を産むといふは酷評であらうか。將軍家光、歌比丘尼顧客の皮切りとはいへるであらう。

（骨董集の記者―京傳―は、本寛比丘尼考冒頭に自分が引いた東海道名所記の文を更に掲げ、「かゝれば、昔の勸進比丘尼は、地獄極樂の繪巻をひらき、人にさしをしへ繪解して、佛法をすゝめたりき。下の古畫――骨董集所掲のもの――の体を見るに、寛永の頃に至りては、それを略し、かの繪巻は手に持てる斗りにて、比丘尼むかひ居て、繪解の言に節をつけて、拍子とりてうたふしにやさおにゆ」と考證してゐる。誠にさもあるべし。尾崎。）

尚、萬治以後の比丘尼風俗については、「嬉遊笑覽」に『紫の一本』と共に『一代男』を引いて、略々其の輪廓を説明してゐる。即ち同九に、左の記事がある。

「比丘尼は、同書（紫の一本）赤阪の條、「うら傳馬町へ出たるに、下町めつた町から來る比丘尼風流に出でたちて云々。やうすを聞けばめつた町よりあまた來る比丘尼の中にても、永玄おひめおまつ長傳と申候が、爰もとの名とり

にて候。あげや〔あげやの發生に注意すべし〕是れ、「我衣」の中宿といふに同じからん。尾崎。」は仁兵衛安兵衛さ
申候が、きれいにて候。今の小袖かたびらは宿へつき候とぬぎすてゝ、あかしちゞみ絹ちゞみ白さらし鬱金染に、
紅絹(もみ)の袖口うら襟かけ、黑じゆす茶じゆす幅廣帶、黑羽二重の投頭巾又は帽子で包むもあり。小比丘尼供につれ、
是れに酌さらせ、市川流の夜もすがら藻鹽草の大事のふし云々」。「一代男、越後坂田の條、〔一代男卷三、「木綿布子
もかりの世」の中に出づ。尾崎。〕「勸進比丘尼聲を揃へて唄ひ來れり。是はさ立ちよればかちん染の布子に黑繻子
の二つ割り前結びにして、あたまはいづくにても同じ風俗なり。元これはかやうの事をする身にあらねど、いつ頃
よりなりやうみだりになして、遊女同前に相手をさだめず、百に二人と云ふことをかしけれ。「勸進比丘尼の輪、何
れを見るも、此の如く凡て二人づれなり。是れ部部の如何を問はず常にかく定まりゐしもののやう也。いかなる所
因ぞ。後揭「續飛鳥川」にも歷然二人とあり。古今二人は不文の規約なりしか。而して二人を一人がいかにしたりし
か、をかし。倘、揚代も百と、此の一代男を始め、以下揭ぐる諸書にも散見するが如く、並の場合は、殆ど一定し
なりしものの如し。尾崎。〕あれは正しく江戶めつた町にて忍び契りをこめし清林がつれし來かみ、其の時は菅笠が
ありくやうに見えしが、はやくも其の身にはなりぬ云々」。按ふに〔嬉遊笑覽の著者、喜多村信節〕めつた町は、寬永
江戶圖に神田鍋町新石町の南の方に二丁あり。是れ今の多町なり。今の名は略名と聞えたり。今小柳町邊に比丘尼
橫町の名あり。其の邊昔よりこれ有りし處なり。」

「紫の一本」は、元祿期の歌學者戶田茂睡の著、〔茂睡は、寬永三年四月廿四日、七十八歲にて歿。〕その奧書に、天和三年癸
亥遺佚道人ことりて、「此の紫の一本は、櫻田に住し光融入道所勞の頃、慰みに書集め、予に清

書せよと贈りて」云々とあるに據れば、天和三年若しくはそれ以前の茂睡執筆たることと明かである。即ち此の「嬉遊笑覽」所引の比丘尼の記事は、天和年間の風俗と見て可であらう。即ち「東海道名所記」の萬治前後についでの、好記錄であらう。一代男は、西鶴、天和二年版、これ亦當時の比丘尼風俗を知る一資材とすべきであらう。

恰もよし、此等の傍證となすべきものが尚、一個ある。即ち武江年表天和年間記事の條に、「この頃はやりし唄比丘尼の內、神田めつた町より出づる永玄、お姬、おまつ、長傳といふが名とりにてありしとぞ。繻子か羽二重の投頭巾をかぶるによつて、これを繻子鬢と名づけたり」とある。神田めつた（滅多）町は格別上玉が巢を食つてゐたのであらう。

天和についで貞享、元祿、寳永、此の頃の比丘尼には、尚一個好個の資料がある。「我衣」（江戸曳尾庵南竹著、卷尾に文政八年とあり。）である。曰く、

「（前略）天和の頃より世上遊女發行するによりかやうの族も賣女となりたり。然れども元來僧形なれば、衣服は木綿を着したり。天和貞享の頃は、淺黃木綿、白き淺黃もあり。素足、わら草履、菅笠手覆、かけひしやく腰にさし、文庫を持たせたり。元祿頃より黑棧留頭巾を着す。これより他の色の布子を着す、されども無地也。すげ笠手覆文庫を持つ。

寶永より小比丘尼に柄杓をさゝせ、文庫を持たせたり。（小比丘尼、柄杓をさせることは、骨董集の寛永頃の圖と同

じ也。然れば、此間——寛永より寶永——此の事なかりしや否や。尼崎。」元祿より中宿ありて是へ行く。朝五ッ過或は四ッを限りに出で、夕七ッ限りに宿へ歸る。夜の間彼の中宿にありて他へ修行に出る事なし。和泉町北側裏とこにあり、新道へ拔けて大方中宿なり。玄治法師とて公儀御醫者の屋敷也。是を玄治店といふ。又八官町御堀通り町屋に中宿有り。後京橋疊町に有り。(下略)」

如上、天和より元祿寶永に亙る頃の比丘尼風俗の一斑仄見えたるは多とすべきであらう。殊に中宿の發生を元祿なりと明かにせるは、比丘尼賣淫史上貴重なる記錄である。以後の中宿の分布も前揭「一代男」のめつた町と共に、また記憶すべき好資料であらう。貞享時代の比丘尼については、なほ「好色一代女」卷三(貞享三年板。西鶴。)の「調謔歌船」の中に左の如くある。勿論大阪の所謂船比丘尼に局限されたものではあるが。

「そも〳〵川口に西國舟の碇下して、我が故郷の懷かしく思ひ遣りて淋しき涙の袖を見かけて、其人に濡袖の歌比丘尼とて、此津に入り亂れての姿舟、艫に年がまへなる親仁居ながら棹さして、比丘尼は、おほかた淺黃の木綿布子に、龍門の中幅帶前結びにして、黑羽二重の頭巾、深江のお七指の加賀笠、「此邊、江戸と大差なき風俗なり。尼崎。」うね足袋はかぬといふ事なし。絹の二布の裾短かく、とりなり〳〵に拵へ、文臺に入れしは、熊野の牛王・酢貝・耳かしましき四つ竹、小比丘尼に定りての一升柄杓、「これもまた寛文寛永と稱する頃の風俗なり。尼崎。」勸進といふ聲も引切らず、流行節を諷ひ。それに氣を取り、外より見るもかまはず、元船に乘り移り分け立ちて後、百[illegible]の

錢を袂へ（こゝも寶代百世、前掲、「一代男」參照、尾崎。）投げ入れけるも可笑（をかし）。あるはまた割木を其直に取り、又はさし鯖にも代へ、（さんだ物々交換なり。尾崎。）同じ流さはいひ乍ら、これを想へば、すぐれてさもしき業なれども、昔日（そのかみ）より此處に日馴れて可笑しからず。云々」

以上は、大阪船比丘尼の記事として、後掲「筆拍子」と前後相照應して、好個の輪廓一斑であらう。

尙、貞享頃の京洛の比丘尼の狀がある。「近世風俗志」（守貞漫稿）所引の「好物訓蒙圖彙」（時や貞享三年寅仲春中の五日。洛下の野人作者無色軒三白居士」）の中に。その散見がある。守貞曰く、「予が藏するところの貞享三年の印本好物訓蒙圖彙壹卷當時の名妓及び其ころ名ある比丘尼夜發に至るまで其の事跡を委しく載せたり。原本の十が三を抄出して左に載す」云々とありて、その中、比丘尼に關しては、（圖あり、略す。黑頭巾に鉢卷をなしたり。手に筥を持つ。二人描かれて、一人に、「さりへのよし」とあり。「烏邊野の芳」、當時此のよし比丘尼中の流行妓なりし也。尾崎。）

「（訓蒙圖彙）いつのころよりか齒は水晶をあざむき、眉ほそく墨を引き、黑い帽子もおもはくらしく被きて加賀笠にばらをの雪駄、小歌をよすがにしてくはんくといふしほの目もとにわけをほのめかせ、下略」

即ち、未だ歌比丘尼の形態を有したる賣比丘尼であつたのである。（守貞附記に曰く、「齒を磨き眉を描き黑頭巾かゞ笠ばらを雪踏等惣て江戸比丘尼の扮と相似たり。唯京坂にまるたと異名す。江戸にも謂ふ之歟否を知らず」というてゐるが、江戸も稱したのである。「風流志道軒傳」に、「踏返したる丸太の名物」とある。「好色徒然草」にも此由出づ。後掲。尾崎。）

尙、當時の京の比丘尼については、略々是と同說ながら、尙一書がある。即ち「人倫訓蒙圖

彙」(元祿三年板、師宣畫。)の中に、

「歌比丘尼は、もとは清淨の立派にて、熊野を信じて諸方に勸進しけるが、いつしか衣を略して歯をみがき頭をしさいに包みて、小歌を便に色を賣るなり。巧者歴たるを御寮と號し、夫に山伏を持ち、女童の弟子あまたとりしたてつるなり。都鄙に有り。都は建仁寺町藥師の圖子に侍る。皆是末世の誤也。」

といふが、即ちそれである。即ち都(京洛)にも、貞享元祿の頃、比丘尼の持て囃された例證である。

(尙、京洛の賣色比丘尼は、一名仕懸比丘尼ともいうた。貞享の京板「好色貝合」の中に、此名出でたりといふ。色仕懸の義なりと。外骨氏「笑ふ女」に據る。即ち、貞享、元祿、京に於てまた比丘尼の跋扈した好記錄である。)

京大阪、江戸と限らず、般賑な驛路にもその出沒を見たことは、「東海道名所記」の沼津に限らなかつた。前揭「一代男」の坂田もその例であるが、現に、同じく西鶴の「織留」(元祿七年刊)の卷四、「諸國の人を見しるは伊勢」の中にも、

「又明野原が(宮川の西岸、山田と一橋を隔つる小俣にありと、現時電車飛行場也。)(中略)此の廣野錢掛松の邊りに三十四五年以來道者に取り付きて世を渡りたる歌比丘尼二人ありける。前の人異名を付けて取付虫の吉林、古狸の清春といひて、通し馬の馬士萬萬迄も見知らぬはなし。歌も唄はず、立ち寄りて是れ伊豫の松山の衆樣、是れ播磨の書寫の御出家さまこれ備前岡山の女中

さまざ、人を見立てゝ關所の違ふこと千度に一度なり。云々」

と。元祿七年の刊本であるから、その當時と見ても、その二十四五年前」は、寛文元年頃にあたる。即ち「東海道名所記」の萬治と殆ど同時代である。但し、此の比丘尼、「備前岡山の女中樣」などゝ云つた所より推せば、此の比丘尼二人は純然たる賣色の徒でもなかつたらう。歌比丘尼の本來に近い者であつたらう。現に、「繊留」此の章の終りに、「勸進一文に換へて行きける」とあるに據つてもそれが窺れるのである。

偖、當時、これを買つたお客の種別については、如何であらう。江戸に關した記事ではあるが、

「昔は小者奴などの遊び者なりしが、今やうは人によりて若きさぶらひもするさ語れり。いづみ町、八官町などに宿あり。日毎に行くなり。わけて桶町、疊町へ行くを上品とす。一此の同名、「我衣」とよく吻合せり。尼崎。頭巾に針させるは、鉢卷に留めけるなりとぞ。（源太郎と云ふ比丘尼、米屋のむす子と情死したる事などと見えた。是な異名にまるたと云ふ。」（好色徒然草。）（「嬉遊笑覧」所引の文に據る。）とある。

附記。此の源太郎比丘尼と米屋の息子との情死一件は、正德の頃であらう。「我衣」に、「正德年中中村源太郎と云ふ女形の役者あり。これに面よく似たる比丘尼あり。源太郎比丘尼といふ。名高き比丘尼也」とある、これにはあらざるか。尼崎。

即ち前には町家の子弟（その中より心中者も生じた。前掲の如し。）後には武士までも、殊に、後掲「江戸眞砂六十帖」所載の如く、武士と比丘尼との心中まで生じた位ゐであるから、即ち此の賣比丘尼の顧客は、四階級の凡てを通じてあつたと斷じて可からう。勿論これは、江戸を標準にしたのであるが、他都市も然りであつたらう。

青栗園隨筆にも、「東都色を賣る比丘尼數千人」とあつた。即ち此の比丘尼、當初は街道筋、津々浦々、到る處殷賑なる土地にその勸進の姿を見せたりしが、元祿の峠を經て、政令の他に漸く文化の中樞たる實際的地歩を占め、人馬亦絡繹、更に漸く圓熟し來れる士民の變態性欲性は、茲に野郎、遊女の他に比丘尼の面白きを發見し、（強ち三代家光將軍のイカモノ食ひに倣つたといふのではあるまいが、）隨つて此の比丘尼は、一層の流行を此の東都に極めたといふべきであらう。即ち當初の勸進、繪解、歌、漸く廢れ、天和貞享の頃よりは唯賣淫の比丘尼のみ榮え、終に普通の娼婦もこれに加入し、續々比丘尼出で變形賣女と、以て交々賣比丘尼の名を擅にしたのであらう。

然るに「骨董集」前掲の段のツヾキに、「日次記事」なるものを所引して曰へるがある。曰く、

「日次記事（延寶貞享の間に作れりといふ）十二月の條に、「倭俗彼岸中。專作二佛事一。民間需二熊野比丘尼一。使レ讀二

極樂地獄圖」。是書レ揭ト善云々。」とあれば、延寶貞享の比迄も其名殘はありけんかし。」

とある。即ち延寶貞享の比迄も其名殘はとある、其の名殘とは何の名殘であらうか。恐らく繪解比丘尼の名殘との意であらうが、これに似た賣比丘尼は、なか〳〵、延寶貞享ごころか、元祿享保愈々後世永くこれが在り、その跋扈を見たことは、（元祿寶永までの記錄は、旣に載せたり。）殊に東都に於てその猛烈さがあつたことは、左の諸記錄がある。

「熊野比丘尼勤に出づる事如何の謂れや。勸進して牛王を賣りしよし、何れとなく賣女となる。先づ神田（これめつた町か。尾崎）より出づるを上として、早稻田下谷竹町本所あたご下として、宿は新和泉町上とし、八官町を中とし、其の外淺草門跡前京橋太田屋敷同心町所々へ出でぬ。（以上、「我衣」と又よく照應せり。尾崎。）下も船へ出る。（是れ舟饅頭と均しく、一名舟びくに。丸太船ともいふ。尾崎。）元頭巾は黑ちりめん加賀笠なり。（是れ東海道名所記所載と符を合す。尾崎。）正德二年、俄に頭巾淺黃木綿に成る。當座殊の外見苦しく、後は上比丘尼は子比丘尼二人連れる。但し吉原の太夫のまれにして衣類を著飾る。大鶴小鶴などとてはやり、（「我衣」には、鶴、小鶴として、當時神田にゐたりし名妓ならぬ名比丘尼の事を記せり。後、鶴は、喇へ煙管より出火、火罪に問はれたりと同書に見ゆ。尾崎。）歷々の遊びにして、全盛目を驚かしける。元文六年（元文六年は、二月二十七日改元、寬保元年なり。こは、元文と明記しあれば、その一月二月頃のことか。武江年表には、寬保元年の頃とあり。尾崎。）八官町にて櫻田邊の武士と心中して、其の跡より（寬保三年に觸出づ。尾崎。）一切比丘尼町屋（中宿の意ならん。尾崎。）へ出間

敷旨御停止なり。此の頃比丘尼の商ひ廢し、衣類頭巾の仕立各別違ひ、著たる姿よきやうにして遣しける。さるによつて姿よろしき也。」（江戸眞砂六十帖）「江戸眞砂六十帖。序に、「私に曰元祿二己巳年出生して六十餘年の星霜を考へ見るに世々珍事多し云々」とあれば、寶曆頃の著ならんか。尾崎。」

とあるにもよりて知れよう。

恰も此の記事に相應して「我衣」にも左の記事がある。

「正德頃は、（比丘尼の中宿）茅場町組屋敷に出す。享保九年小濱民部屋敷脇へ引く。（比丘尼の）往來は木綿服なれども、中宿にては紗綾縮緬嶋八丈の紅裏模樣を著す。夏冬黑ちりめんの投頭巾を着す、尤も長し。櫛笄さしぬ遊女にひとしく、けしからぬ有樣也。其頃淺草門跡の脇、法恩寺前にも中宿有り。是は劣れり（宿は神田多町より出る。又深川新大橋向より出る、安宅丸の跡の町家なり。是をあたけ比丘尼と云ふ、下品なり。四ッ谷の早稻田と云ふ在よりも出る下々なり、小身屋敷の門番或は寄合辻番を頼み宿とす。享保十年茅場町組屋敷白コシ長屋より八丁堀松平越中守殿屋敷北の方鳥居丹波守殿上り屋敷の跡へ引越す。寛保二年（此の年次違へり。元年ならん。尾崎。）八官町に心中出來る。公邊になり、つひに賣女に落ちて、（中宿解散せられて、營業禁止。よりて去つて公娼となりたりといふの意か。尾崎」それより中宿堅く御停止にてやみたり。延享二年まで神田の宿にて客を留ると云ふ。（これ中宿以前の自家營業に還りしものか。尾崎。）此ごろ（不詳。曳尾庵折々の隨筆なれば、卷尾の文化八年と見るを得す。尾崎。）は又何々方へ行くやらん、往來するなり。

）延享の頃より、御停止を破り元の如くに成したり。（こは後揭寛保三年の觸書を破り、延享の頃、更に賣比丘尼復

興せりとの意ならんか。尼崎つし（[illegible]）

彼此、江戸眞砂と我衣と對照せば、正德、享保後の賣比丘尼の形態分布歴然たるものあらう。

さて右にもある如く、當時、比丘尼は、町住居の巣窟と、枕席出仕の中宿と二個に往來してゐた。町にも中宿にも上中下の品等があつたこと、右等に依つて知るべしである。

即ち、歌比丘尼は、寛永以前、寛永、正保、慶安、承應、明暦を經て、賣淫の風漸く盛んに、萬治（東海道名所記即行の年）、寛文、延寶、天和、貞享を經て、殆ど賣淫専門となり、元祿、寶永、正德、享保、（元文、以上、寛永以前より約百二十餘年。）を經て、益々その横行を見るに至つたのである。

內、元文六年（寛保元年）の心中事情の如きは、賣比丘尼史上、特筆すべき一事件であらう。

幕府はこれに懲りたのか、此の心中後間もなく、即ち寛保三年亥閏四月二十八日といふに、

（増訂武江年表にも此の記載あり）

「一勸進比丘尼、花麗なる衣類着賣女体紛敷不屆に候。右中宿等致候者有之候はゞ、早々可訴出」

旨の觸を出したといふ。（尚、已に寛永三亥年にも、此の種の御觸一度び出できといふ。）然しこの御觸も一向效果なく、延享二年の頃より再び此種賣女を見たことは、「我衣」上揭の如くである。

而して、その終期については、

「古老云、寛延、寶暦の初ころ迄も、勸進比丘尼も〔勸進の頭、未だ一部を存したりし也。但しこれとて本院に賣色の徒たりしことは疑なし。尾崎。〕賣比丘尼もあり。芝八官町、神田横大工町にあり。是につゞきて下直なるは、淺草田原町、同三島門前、新大渡川端抔に、家毎に二三人づゝ出て居りたりとぞ。表に長き暖簾を立てたり。鬘、綟輪、一帶しなほして化し風俗、々比丘尼淺黄に戻る日和虹。」「賣られぬ先に遊女しならふ、紙はつた柄杓で小倉うちつけて」。六玉川、「比丘尼の化粧しずから見る。」（嬉遊笑覽卷九上。娼妓）

とあるを信ぜば、寶暦（その元年は、西紀一七五一年。）の初めを最後とすべきやうである。然るに、燕石雜志（文化七年の序あり。馬琴の撰。）には、その卷二に、

「ゆたけき御代の長久はる隨に、物として今大江戸に具足せざるはなし。しかれども昔ありて今なきものは云々。このうちすたく坊主、おはらひなさめ、唄比丘尼と扇賣りは二三十年以前までありけり。十歲前後の小比丘尼ども黑き頭巾を被り裙を高く引あげ、腰に柄杓を挿したるが、三四人を一隊とし老尼に宰領せられて人の門に立ち、いと訛たる聲してうたな唄ふに、物をとらせざればおやんなといふて催促せり。昔は簓をすりて唄ひしかば、今に比尼簓の名は遺れりとぞ。地獄變相の圖を說き示して、愚婦を泣かせし熊野比丘尼の流なるべし。云々。」（守貞漫稿所引の「睡餘小錄」の文、また殆どこと同文なり。但しこれには、天明の比まではさありの尾崎。）

但しこれには、十歲前後の小比丘尼と宰領の老尼とあるのみで、別に賣色の十八九は書かれてない。隨つて賣色比丘尼の終期は、或は、事實、寶暦の終りに絕え、正系の勸進風だけが、小比丘尼どもによりて、この文化より二十年前までありしものか。即ち燕石雜

志の文化七年より二三十年前といへば、天明元年頃か若しくは寛政三年頃で、嬉遊笑覧故老の言の寛延寶暦の初めといへること、餘りに懸隔が甚しい。（文化七年より三十年前は、天明元年、寶暦元年以後三十一年。文化七年より二十年前は寛政三年、寶暦元年後四十一年。）

（守貞漫稿にも、「睡餘小錄」の文を引いて、「天明以前には賣色の風も廢して門戸に立ちて米錢を乞ふを事らとせし也。又京坂にも當時は彼比丘尼廢絶せし也。此比丘尼其始を知らず寛文より風衰へて歌を唄ひ、天和より賣色し、元祿より中宿あり。寶永正德、享保元文、寛保の間盛んに行れ、寛保一たび中宿を禁ずれども亦其禁弛み、再び行はれしが、又漸くに衰へて安永天明比に至り、全部に廢絶せし也。」と斷じてゐる。但し「京坂にも當時は廢絶」といへるが、然らず、多少形態こそ異りたらんが、近く、文化頃までありしことは、　而も賣色の徒也　後掲の「筆拍子」の文を以て推すべしである。尾崎。」

然るに、蛛蜘の糸卷（山東京山著、弘化三年の序）の「かくし賣女」の中に、「天明中盛んなりしは云々。深川大橋びくに切二百。下は百。泊り二朱云々」とあるを見れば、天明期なほ賣色比丘尼が殘壘を據守してゐたことは明かである。（又、此に珍とするは、當時の比丘尼揚代の明細なる表示あることである。）

天明年間盛んなりしには、尙一典據がある。曰く、增訂武江年表の天明年間の中に、

「勸進比丘尼、芝八官町、神田横大工町より出る。是に續いて淺草田原町、同三島門前、新大橋海岸等なり」

とある。場所まで明細に指定してある以上、これが本當であらう。（予は此の「勸進比丘尼」を、禁令の爲已むを得ず勸進の古態に戻

り、而かも密賣淫を續行せし、即ち以前の賣比丘尼に異らざる者と見る也。尾崎）即ち天明頃まで未だ賣色比丘尼盛んなりといふを正しとすべきか。乃ち「嬉遊笑覽」故老曰くを斥けねばならぬことになる。如何。

然るに、こゝにより多く年次を延長した尙ほ異說がある。曰く、明和誌（鼠璞十種第二冊收）に、

「一、享和の頃より往々處々さかり場に、小比丘尼合力を乞ありく。每朝さし頃十八九二十位の比丘尼、十四五人づくつれ立、所々もらひあるく。大塚邊にかしらありて、年ごとに越後加賀の國へ女の子を買出し行、比丘尼とするといふ。」

とある。此の比丘尼どもは何であらうかである。享和は、その元年は、馬琴「燕石雜志」の文化七年の以前十年である。但し此の明和誌所揭の享和頃の小比丘尼といふは、歌比丘尼賣比丘尼とも明記してないから何ともいへず。或は、他普通の勸進比丘尼の一時的流行であらうか。（當時、比丘尼に各種あり。伊勢比丘尼なども相當に流行したことは各書にある。其他、各地に此等比丘尼があつたことは、無論である。）然しこの「十八九二十」といへるが、何ともいへず臭いのである。

尙、「只今お笑草」（二代瀨川如皐の著。自序にみづのへさる〔壬申。即ち文化九年〕とあり。續燕石十種第二所收。）の中にも、黑帽子を冠れる年增尼と同じく子供尼との繪ありて、上に、「浪花にびやんせうとよび、江都に丸太ぶねといふ。（守貞漫稿に曰、京阪のみの帽子の如し、この丸太を云へることと、前にいへり。之に據れば、東西共通の異名ならん。尾崎）其詳は知らず。花淸しいわしや是も芥子畑」とあり。次

に「歌比丘尼（朱書 今は絶てなし」の題下に、左の記事が見えてゐる。重複の嫌あれど、是も載せておかう。曰く。

「往古柴の一本などにも見えし、いづみ町八官町びくになぞの餘流にて、天明（これ即、また嬉遊笑覧故老の言と、燕石雜志の二三十年前との中間說にして、若し燕石雜志の二三十年前を、三十年前とすれば、即ち天明元年にして、期せずして、只今お笑草と、燕石雜志と、及び守貞漫稿所引の「睡餘小錄」と、及び武江年表天明年間記事と、四者歌比丘尼の廢滅期の一致である。天明說が、「多少確實さを加へたりといふべきか。」尾崎）の比まで新大橋の東詰、淺草、みしま門前など（武江年表記事と殆ど同一箇所なり。尾崎）葭簀立よせし花實、江口の宿にてありしが、勸進にていづるは春のころ、飛鳥山日ぐらし、逸目黑の不動雜司ヶ谷なんど、人群集の所へ、十六七廿許の比丘尼、薄化粧して無紋に淺黃ねづみ、袖やうの小袖うち著し、幅ひろき帶前にむすび、つむりは納豆ゑぼしといへるものの如く、黑木綿にて折たる帽子をかむり、牛王箱にやあらん、たい箱とはいへる黑塗の文庫樣のもの小わきにかいこみ、小唄うたうてもの乞ふ事にありける。これにも小比丘尼二人り三人りつれたり。また小比丘尼は粗末なる木めん布子にて脚絆はき、手おひかけて、うしろへ垂れのある常の角頭巾黑もめんにて作りたるをかむり、五合程も入るべき柄杓の柄のみじかきを持ちたるが年のころ六ッばかりなるより、十一二比迄の小比丘尼三人り四人りうちつれ、これには御寮比丘尼とて四十有餘にていと憎さげなるが、同じ出たちにて牛王箱かゝへてつき添ひ、町々門々へ來てうたひける。唱歌よくも覺えねど、

　鳥羽のみなとに船がつく。今朝のおゐて（退屈）にたが（賀カ）らの舟か、大こくとおゑびすとにつこりと、チトくわんおやんなんさて、愛々敷こわれにて物こひける。」

大正十三年三月二十七日印刷
大正十三年四月一日發行
第十九冊（毎月一回一日刊行）

尾崎久彌著

第十九冊

本文

賣比丘尼考（完）
「大地震末代噺種」
享樂者の自白

享樂者の自白

初め、「享樂者の夢」としたのを、更に此の新しい原稿紙に、斯く書き直したのである。夢ではない、本當なんだ。夢といふと、回避するのは、卑怯のやうにも見え、又一つには、自分で自分を甘く、さうしてうそのやうに取扱ひたくはなかつたからである。

さて何を書き出すつもりか。いつも餘り自分の核心と離れた（本當の物とは多少離れたといふ意味。然しそれも程度問題であるが。）考證や其他を雜書を綴り合してそれに肉をつけてえらさうにいふよりも、たまには自分の泣言も述べて見たい、否聞いて貰ひたいといふのである。

自分と江戸軟派とは、今は切つても切れぬ仲のやうに見える。人がさういふ。然し本人自身としては何うだらう。何だか、まだそこに物足らない。端的にもつと直截に、此の自分が表現したくて堪らぬ。それがその野心が他で遂げられず、窮して斯うした思はぬ所へ通じたやうに、心底思はれて仕方がない。然し江戸軟派も此の「自分」といふものの或る部分ではある。輪廓の片隅ではある。然しそれを全部のやうに考へ、人からも考へられて來ると、何だか違ひますといひたくなる。では何か？といはれても困る。自分は地方に埋れて（埋れるのが當然かも知れない）しかしその割にあらゆる雜筆を書いてきた。作らぬものは、漢詩ぐらゐだ。自分の脚本が實演せられる時の妙な感じも知つてゐる。自分の情事（いろごとと今ではルビーが振りたい）を小説に書いて、自分で危なく思つたり人に何とかいはれるのを面はゆく思ふ感じも知つてきた。必ず活字になるといふ事を條件にしてペンを取るあの最初の誇にも慣れてきた。自分の本が市場に現れる時のあの快感、期待も知つてゐる。殘す所何にもない。唯思ひきつて此頃の江戸軟派情調を實際に行つてみた機會はこれ迄たゞの一度もないし、且又二十歳の前後東京に三年ゐても吉原を見ず、知らずごころではない）青樓の氣分は生れてから一度も味はず、藝者とか花魁とかに唯の一度も惚れられた事はない。此の方面は經驗に於て全くの白紙である。殘つてゐるといふなら、此の方面だ。うそぢやない、本當だ。但し前にいうた自分の情事は、それでは何かと聞かれると困るが、それは、單にしゝ臭い——大人にはなつてもまだ不通だと人のいふ女、それも過去に於て一人といふに過ぎない。唯智識の上、それも本の上や繪の上ばかりだ。そのくせ、人の放蕩し盡したと稱する者や現にそれに在る者と共鳴はあり、時にはその人らの知らぬ憧憬感や熱愛感がそれらにある。自分のやうなものこそ、金持に生れなかつたから、幸はひだといふのかも知れぬ。從つて憧憬だけのつまらなさ、然し平穩無事、家内圓滿なのかも知れない。

今の女房は、愛人でも何でもなかつた。然しこれを讀んだら、怒られるかも知れぬが、（誰でもない、あの自分の女房に）子供が出來て見て、それから起つた連帶責任者、親愛なる二人の交渉者といふに過ぎぬ。それが今では、唯一の自分の生活の材料半身、伴侶（やつとこの世間虫の字が書かれた）といふのである。

さて、茶屋酒を自分の意志から飲んだ事もなし、地上の逢曳も知らず、まして後朝背中を叩かれた事もなければ、待合の石疊の濡れた灯あかりを通るあの期待と稱する緊張とも自分は知らぬ。その自分が、それ程の野暮天

（裏表紙ウラへ）

歌まであるはとんだめつけ物である。

尙、「續飛鳥川」（八十九翁、文化七年以後の著。）の中にも、比丘尼の歌を載せてゐる。曰く、

「歌比丘尼、うりびくに。歌びくには、雜司ケ谷會式に茶屋々々を廻る。唄に、「めぐりあはせいうつり替も、むすびさめたよ糸ざくら、おやりなんし」「神のおまへに松うへて、花も咲しよ小金はな」っ賣びくには、二人づゝ屋敷を廻る遊女也」。〔これに據れば、當時、復古の歌比丘尼と、全娼の賣びくにと二樣ありたるが如し。「守貞漫稿」中の睡餘小錄を引ける論斷中〔前揭〕にも照應して、此の事確實なりといふを得べし。尼崎。〕

同じく、「續飛鳥川」の別項に、

「比丘尼、寬政以前大橋にばかり有り、隱賣女なり。」

とあり。こも、天明を終期とせるに、多少の裏書せるものと謂ふべきである。尙「親子草」にも「比丘尼といふもの、今は一向見當らず候」とある。「親子草」は寬政九年版、即ち矢張り前說と相呼應して、天明を以て賣比丘尼の廢絕期としてゐるらしい。すれば、明和誌の「享和の頃より」が益々怪しい。若し有りたりとせば、復古の勸進一方であつたことが確實である。或は是延享の誤りではなからうか。

尙、すでに貞享頃、又はそれ以前より阪地にも是あつたことは、「好色一代女」の記述を初めとし、「大阪にはびやんせう」とこれを謂ふと「只今お笑草」の冒頭にもあれば、爾來引續きこれ

が榮えてゐたことは、明かであるが、尙、「筆拍子」(文化頃板行)の「伽遣ふ船」の條にも、

「中古は熊野の牛王を賣りて、さも殊勝なりしも、いつの程にか色を商ふ者に成りしが、それさへ今(文化頃)は衰かはりて舟比丘尼と云うて、小舟に打乘り、大船毎に漕寄すれば、いつとても炭薪の類を與へる習とは成りぬ。これなん比丘尼に布施物を遣はせし餘風なるべし。」(外骨氏著「賣ふ女」に據る。)

とある。宛然「一代女」記述と同一であり、船比丘尼泯びなかつたことはこれで分つたが、さてこゝに疑問を措くのは、江戸は、前にも云うた通り、遲くとも天明頃に泯んだと見ねばならぬ純賣色比丘尼が、「一代女」當時其のまゝの船比丘尼として、大阪の此の「筆拍子」の「今」にあつた、文化に存してゐたことは聞き物である。江都は嚴令の爲已むを得ず廢滅したが、阪地は割合に緩かであつた爲、水上に猶出沒してゐたと見ねばならぬのであらうか。如何。疑はしいけれど、とにかく此に擧げておく。

尙、田舍まはりの比丘尼については、古く「一代男」の坂田と好個の對照を爲すものに、文化期の「東海道中膝栗毛四編上」(喜三二の序文化乙丑春(二年)とあり)の二川さき(坊主持の項)がある。即ち文化頃、原始的な比丘尼風俗が猶ほ街道筋に出沒してゐた證左であらう。(以て、下揭、本居宣長の「賤者考」と對照すれば一層妙であらう。)曰く、

「(前略)此内あさより、びくにが三人づれにて うた(ゆびにつけし管をならしてうたひくる)「身をやつす賤がおもひを夢ほどさまにしらせたや。ゑいそりや。ゆめほど

さまにしらせたや。サアサさんから〳〵　北八「あざやかな聲がするトふりかへりヒヤア比丘尼だ〳〵。サヤ彌次さんわたしやす　彌次「エヽいめへましい　北八「人に荷をもたせるは中〳〵いゝものだ。是でお供を連た心もちだ。ヤア〳〵こいつらアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへ。こちらの比丘尼がおれを見て。アレいつそにこ〳〵と愛敬がこぼれるよふだ。畜類め　彌次「あいきやうのいゝのじやアねへ。アリヤ顏にしまりのねへのだは　北八「わるくいふぜト北八あとになりさきになり行びくにはまださしも廿二三、今ひとりはさしま、十一二の小びくにともに三人つれ、中にもわかいびくにがきた八のそばへよりて「モシあなた火はおざりませぬか　北八「アイ〳〵（中略）北八「今夜一所に泊りてへの。なんと赤坂を行なせへ。一所にしやせう（中略）びくに「ナニわたしらが。たごへ髮が有つたとて誰も構人はおざりませぬ　北八「あるだんか。わつちらア一ばんにかまうかまひて氣だ。なんとかまはしてくんなさらんか　びくに「サ ホヽヽヽ（中略）野みちをさつ〳〵と行過る、北八あきれて見おくる云々（下略）

以て當時の比較的色氣乏しき比丘尼（それだけ本來の廻行比丘尼）の一端を知るに足りよう。（尙、此項、「膝栗毛輪講」駿遠の卷、此の折の比丘尼の唄、其他について考）（比丘尼の唄、尙こゝに又一「證見ゆ。就て看るべし。」例を見たるを奇とすべし。）

最後に、本居宣長の賤者考より、「勸進比丘尼」の項を拔かん。

「勸進比丘尼は、歌比丘尼とも熊野比丘尼ともいふ。地獄の繪卷物を昔は持ちありきて、繪解して婦女輩を勸進したりしが、繪卷物はすたれて、一種の歌をうたひ、柄杓を持ちありくことなり。もと熊野に來りてかの繪卷物をうけ、諸國をありきける由なるが、今は本國には總べて此の者なし。江戸、名古屋などにはありて、歌をうたひてお勸進をして米錢を乞ふ。京大阪にもかゝることありやよくも聞きしらず。（大阪にありしこと、「一代女」「只今お笑草」及

び「筆拍子」等に見ゆ。（前參照。尾崎。）京あたりに此の種はあれども、賣婦同様にうち〳〵色を賣る者なり。大阪もしかるにやあらむ。その他の國々にもあるべし。伊勢の小俣比丘尼といふあり。是れはビンザヽラといふ物を手にかけ鳴らして錢を乞ふ。此の者たま〳〵熊野に來る事ありときけり。昔の餘波なるべし。（小俣比丘尼は、前掲「織留」中の比丘尼と同じ也。即ち織留の元祿前後より、寶曆の近世まで、彼の二女の傳統を嗣ぐ者、小俣にありし也。かくる類他の地にも多かりしなるべし。尾崎。）

名古屋あたりの歌比丘尼も、もとは此のビンザヽラを持ち鳴らして來りしが、後はふところにいれて軒毎には鳴らさず、別に長きつゞきたるかぞへ歌などありて、好む時はこれを用ふと。おのがわかき比聞きしろのみにて、ふつに見たる事なし。何ごともかはりゆく世なれば、今はいかならん。それもうち〳〵には色を賣るなどもきけり」（宣長は、享和元年九月二十九日、年七十二歿。故に、若き頃とは、いつ頃なりか。恰もよし、寶曆元年は、彼の二十二歳である。すれば、嬉遊笑覧故老說と相似たりといふことになる。尾崎。）

とにかく、「鮭、鰹、大名やしき、生いわし、比丘尼、柴、ねぶか、大根」（三都名物の狂歌の中、江戸。蜀山人「一話一言」所載。）とも云囃された歌比丘尼は、寛永以前すでにその風都鄙に行はれ、専ら熊野仕込の繪解をなして米錢を乞ひあるきしが、寛永頃は、繪解よりも、さゝらに合せて歌を歌ふこと主となり、その頃すでに往々にして賣色の風あらはれ、萬治頃は、宿場女郎と同じく、街道筋に出沒、以

て「東海道名所記」の作者に拾はれ、この頃寛永頃の白き布を卷ける頭は、黒き帽子樣と代りゐた。さうして無論京大阪にも流行してゐた。（大阪は、屋形町に彼等の巣窟があつたといふ。近世世相史に據る。）顧客は、小者奴より後は武士までも之に加はり、江戸は、益々賣淫の風盛んに、延寶、天和、貞享、元祿の間愈々流行を極め、その巣窟並びにあげや現れ、中には舟稼ぎともなり、正德二年以後は、その風俗も多少變りて、頭巾は淺黃木綿となり、又吉原の太夫のまねして、以前の木綿にひきかへて綾羅を纏ふこととなり、全盛人の目をそびやかし、遂には元文六年一武士と心中するまで情海の花形となつた。此頃江都以外は漸く廢れて、殆ど江戸の名物の如くなり、隨つて上司の取締漸く嚴しく、しかも需要猶旺んに天明の頃（或は寶曆頃。）までその流行を續け、終にその跡を滅するに至つた。勿論その間、非賣色の比丘尼連の戸每の勸進もあつたであらうが、比丘尼勸迎の主體はこの賣色者流にあつたことは否めぬ。而してその賣色の徒も、盛行につれて、純比丘尼出もあれば、はた純私娼の變形、急拵への丸坊主もあつたことは無論であらう。後は、賣比丘尼たらんが爲に、その扮を裝つた者多きにゐたことも事實であらう。これが大略、以上の歸納である。

なほ、當時比丘尼の惣頭は何處であつたか。初めは、熊野のやう記せるもあるが、（前揭「倭訓栞」等）更

に一説、

「今の比丘尼の惣頭といふは、本江州木日甲賀郡大峰の大先達飯導寺御朱印二百石の寺にて、天台宗梅元岩本院なり。故に文臺といへるものに元は牛王をいれたりといふ。此事人の知れる事まれなり。」（増訂一話一言巻四十八）

とあり。然しこれは所謂歌比丘尼に關係なき一般普通の比丘尼の惣頭であつたのかも知れぬ。然し牛王といふ點、多少の疑ひがある。或は、是れ歌比丘尼輩のまた惣頭でもなかつたのであらうか。如何。

附記　尚、歌比丘尼の帽子、衣裳、履物、笠等の變遷については、「我衣」（燕石十種第一所收）に圖解をもて約説しあり。就て見るべし。守貞漫稿（近世風俗志）にも、そのまゝこれを轉載せり。これらにも及ばんかとせしが、予の此の考、歌比丘尼の變遷分布を主にせる記述なれば、殘り惜しけれど凡て省きつ。恕せられたし。尚、以上の記述の他、餘日、再び他書渉獵を重ね、增補修正することあるべし。

「大地震末代噺種」

此頃手に入れたものゝ中に、端本ではあるが、「大地震大津浪珍説見聞錄」といふものがある。（拙藏には、此の本一と二と二册ある。但し問題にするのは、その一である。故に姑らく二については省く。）表紙外題には偏く命名されてゐるが、見返しには、藍摺で帆檣の模樣があり、上に前代未聞大地震津濤乃奇談とあり、本文のはじめには、大地震大津浪珍説見聞錄序とありてその序文があり、その次の丁には、大地震末代噺種（おほぢしんまつだいばなし）とあつて、ツゞキ二面で避難の繪あり、上に説明が加へられてゐる。本文第一丁の初めには、大地震津波乃奇談とあり、以下本文十九丁、最後に、大地震津波農奇談卷之一終とある。到る處表題が異つてゐるから、何ともいへないが、とにかく、内容は、嘉永七甲寅年十一月四日五日（嘉永七年十一月二十七日改元、安政元年。普通に安政元年十一月四日五日といふ。即ち江戸の安政二年十月二日の地震以前約一ケ年。）に亘る近畿地方の震災津浪の被害の中、大阪を主にして書かれたものである。

從來、安政の地震といへば江戸のみ傳へられ、比較的此の前年の近畿地方の震災が等閑に附せられてゐる。實は自分も此の書を手にして始めての注意である。此の本の「大地震末代噺種」の文字を見て、江戸の安政地震と早合點した程であつたから。恰もよし、最近發行された「史的研究天災と對策」（本庄榮治郎氏著大阪毎日新聞社發行）の中にも、第三章第三節近世近畿地方の大震なる條下、第三に安政元年十一月の震災として、數頁を費されてゐる。同書には、主に大阪市史の記錄によ

り、且つ現木津川大正橋東詰の震災記念碑なるものゝ全文を紹介して、その輪廓を幾分示しては居らないが、當時の市内及び附近の人心恟々被害の實情に於ては、掻痒の感が甚しい。丁度此の缺陷を償うて餘りあるは、偶然自分の發見した此の「大地震大巨濤珍説見聞錄」である。敢て珍書といふ程でもないが、零碎なる小冊子であるだけ、従來問題にされたものではなからうし、それだけ却つて好事家研究家には、案外の献物ならずやも不知と、茲に、その大たいを原文のまゝ紹介することにした。

行文、時として人心教戒の筆に走り、道學と警世の目胸あるは、著者不明なれど、當時市井の無名識者の筆になつたものであらう。〔因みに此「珍説見聞錄」は、中本。板元出版年月並に著者凡て不明。挿圖卷一には、卷頭色摺避難の圖の他に、高坊主の圖と、八助遭難の圖と計三面あり。卷二には、「水難の相云々」の挿圖一面あり。〕〔以下原文紹介〕

大地震大巨濤　珍説見聞錄序

此冊子は、近き地震巨濤の天災に依て、日比善事乃德行に依て危難を免がれ、亦は積惡不善によりて災を蒙り、或は身を亡し家跡を斷ち、不義にして朽(汚)名を世に流せしを始め、地妖に恐怖顛倒の餘り衆人を蟄(?)戰し奇談滑稽珍説等、諸國損所乃地名員數もらさず、擧類人々後世に殘し、子孫乃爲に勸善懲惡の一助ともなり、次て天變の節に臨みて狼狽ざる心得の樣種々を記す。是前事を忘ずして、後变乃師となすの謂也。書乃大体を演て換端書。

大地震末代噺種

一嘉永七甲寅年十一月四日朝五ツ時過より大地震、それより晝夜少々づゝゆり、五日晝七ツ過又〳〵大ゆり、夜五ツ半時頃又大ゆり、夫より格別の大震は無之候へども大底人家崩れ破損圖のごとく、且大道へたゝみを敷あるひは小屋を掛け、夜を明しける事、前代未聞の事ども也。（コレダケニテ表裏の一丁。下半は、各〻二面ツヾキ、避難の圖。代赭と藍の二彩を混ず。軒先に、障子の屋根、莚の戸などの小屋がけありて中に人々坐せる圖。）

大地震 津波乃奇談

古語に曰く、治世に亂を忘れざれとは、强に武夫をのみ誡しめの格言にあらず。億兆の萬民皆此語に據ずんばあるべからず。既に當嘉永七甲寅年十一月四日朝五つ半時頃、東の方より大地震起り、市中の騷動大方ならず。老を助け子を抱へて、大道に出、あるひは廣野に逃惑ふ。大震半時ばかりにして、神社佛閣門塀人家倒れ、或は破損し、死人怪我人等も少〳〵ありて、漸く治り、

其後は小ゆるぎと成ければ、人々安心しけれども猶大震のあらん事を恐れ、俄に家に突張をかひ、大道空地に小家をしつらひ拵して、四日の夜は是に夜を明し、翌る五日の朝に至れども、大震なければ少し安堵をなし、人々打集ひ、誰彼は昨日は顔色土のごとく成たり、誰々は落著がほをなして狼狽ぬるなどゝ言て打どよめきける。此話はさし置つ。又々昨日の如き事もあらんと地震を避るの設けさま〴〵なる中に、是をさくるは舟にしかじとて、川舟を借て、大震あらば是に取乗らば上より落懸るものなければ心安しとて、船を用意する人多くありて、其うろたへ甚し。斯る處に五日晝七ツ半時頃、又未申の方より大地震起しかば、取物も取敢ず、用意の川舟に取乗、内川に繋ぎならべ、ふたゝび震ん事を恐れ、船中にて食事等の支度拵してしばらく時を移すに、夕方より沖の方雷のごとく鳴出しけれども、時ならぬ雷鳴ならんと何の心付たる事もなく、只地しんをのみ恐れゐたりしに、夜五ツ半時頃に至り、大津波起り、安治川口木津川口にかゝり居る大船小船、纜切れて高浪に押れ、右兩川口より彌が上に内川に込入事、矢よりも早く勢ひ烈しければ、是が爲に海船も川舟もこと〴〵く打くだけ、川端の人家土藏掛並べし橋等は、船のみよしの爲に破却し、死人怪我人數知らず。是治世に亂を忘るゝこと勿れといふ誡めを忘却して、無事の時に變事を覺悟せざるより斯る事とはなりぬ。むかし寶永四年十

月四日の大地震にも、川舟に取乗り内川に並繫ぎしに、津波來りて舟をくだき、溺死する者數を知らず。又は廣野明地に出て難をのがれし等の記錄ありて、後のいましめとせしも、無事の時は此記錄を眺めもやらで、常の覺悟なきが故也。又常に心掛ある人々は、左迄うろたへる事なく、廣野に疊を出して敷かさね、其上に座し、あるひは家の内に在乍も、家碎けて上より落かゝる物の防ぎに心をくばり、無事にのがれし人も多くあり。是治世に亂を忘れず、變の時に至りて動ぜざるは、常の覺悟能と謂つべし。因に云、家の內にありて地震の防ぎをなすは、重戶棚簞笥等すべて手丈夫なる物を並べ、上に疊あるひは蒲團などを敷、その下に居るべし。是弱よく强を淩ぐの理なり。

○高坊主の話

大阪海邊へ、十一月五日大つなみの前に、たけ二丈餘の海坊主出て海より陸のかたに向ひ、水を搔遣るやうにして姿見へずなりぬ。人々奇異のおもひをなし居る內に、海面雷のごとく鳴出し、程なく大津波來たり。これは此變を告んが爲に出たるならんと、もつぱらいひふらせども全く左にあらず。地震に就て海底裂け、泥水を吹上たる也。其高さ二三丈にして形ち高坊主のごとく見へしが、諸人昨日よりのぢしんにて心落つかぬ折からなれば、海怪の樣に見なし、一

人が高坊主といひ出しぬるより、市中一統のうはさと成たり。其證とするは、高坊主の出たりといふあたりは、是迄船の通路に櫓にてこぎ行きしが、つなみの後は櫓立ず。船人等不審りて長き竿又は縄に石などを付て下し見るに、その深さ底を知らず。是に依て泥みづを吸上し事の實なるを知るべし。

○破船並に死人の話

大津波に付、安治川口大船百七十四艘、破船に成。十一日迄に川中より上る死骸三十八。木津川には、大船五百九十艘茶船六十九艘上荷五百六十六艘破船に相成。十一日迄に川中より上る死骸三百四十三人。此外死骸の上らざる分數知らず。人別大不足の由にて、凡死人六千餘人有之由。

○大阪大地震ニ而混亂の話

天滿天神井戸屋かた崩れ、夫より東寺町寺院門塀崩れ、此近邊いたみ家住居ならざる所多し。西寺町金毘羅の繪馬堂大崩れ、不動寺本堂菱形に大損じ、堀川戎境内破損多し。堂島北の新地曾根崎少々づゝ損じ家多くあれども、大損じなし。下原邊大損じ、人家多く倒れる。福島上の天神大損じ、鳥居倒る。同中の天神拜殿崩る。同下の天神繪馬堂崩る。此近所人家四五軒崩る。

五百羅漢堂大崩れ、羅漢像堂外へ出たるもあり。またその儘なるもあり。同光智院玄關倒れ、本堂大損じ、汐津橋北詰東へ入人家四五軒大崩れ、同南詰大土藏壁落る。常安橋南詰西角の人家往來へ倒れかゝる。ざこば両國ばし籠屋町南西角十二三軒大崩れ、紀伊國橋南詰西へ入表家少々崩れ、裏長家二三軒大崩れ。京町堀羽子板橋角人家大崩、手過ちあれども早速火鎮る。それより半丁斗り西角五軒大損じ。阿波座奈良屋橋筋あくび町角人家倒れ掛り、住居ならず。同小間物店西南角右同斷。戸屋町すじはぶの横町六七軒大崩。戸屋町すじ阿波橋西へ入南がは裏八軒大崩。この近邊損じ家多し。願教寺對面所崩る、境内損じ數多あり。帶屋町北がは裏大土藏大崩れ。北ほり江六丁目人家四五軒大崩れ、此邊損じ多し。阿彌陀池本堂少々損じ。堀町さのや橋高塀西へ倒れ、即死二人あり。長堀さのや橋東へ入裏長屋八九軒大崩。順慶町井池二三軒大ゆがみ。久太郎町井池北へ入二軒大崩れ。南御堂少々そんじ南の門大ゆがみ。本町狐小路半丁斗大崩。座摩鳥居繪馬堂倒れ、末社の破損多し。北御堂井戸屋形大崩れ。清水舞臺西へこけ大破損となり、そのまゝ留り有之。天王寺太鼓堂大崩れ、同龜井の水屋かた倒れる。其餘境内所々損じ多し。五重の塔少しゆがむ。のばく蠟や納屋十三間斗崩れ、蠟も土も一所に成。玉造觀音寺本堂大崩れ。高津新地高津ばし南へ入納屋十軒ばかり大くずれ。玉造二三軒茶屋壹丁東大

薪を焚き兎角し始めた。その人等を蒲團の中から八助聞いて、ソリャ鬼共が我を責めんとて來た、と誠に恐ろしく思ひ乍ら、覗き見ると、「一ツの鬼は火を焚きながら鐵棒を持つてゐる。是はいまこの前に火吹竹を持つて居る也。一ツの鬼は罪人を石臼に入れて鐵棒にて搗碎きゐる。是は擂鉢にて味噌を擂る也」八助一層恐れて精一ぱいの聲を出して、南無阿彌陀佛をふるひ〳〵唱へ出したから、人々は大に驚いて「火吹竹を持ち、すりこ木を持たる二人は其儘蒲團の積み上げたる傍へ走り行くにぞ」、八助はスハヤと蒲團の中にすつこみ、なほも念佛を唱へてゐた。彼の二人の者は、てつきり海の妖怪がつなみにつれて陸に來たのだ、よしその本性見屆けやらんと蒲團を取り除けにかかる。八助は「此一枚を取られなば忽ち鬼に責めらるべし」と力の限りふとんを持つて放さぬ。二人の者は、双方よりやつと聲をかけて引捲くつた。八助力及はずハアツといふ聲と共にふとんを取り放した。八助も今は堪らず仁王立に立つたから、八助なりとは心付かず、一途に海妖なりと心得て二人の者は却つて氣絶した。とかくするうち、「夜も明け渡りて、よく見れば、蒲團の中より出たるは八助にて、二ツの鬼と見えたるは同じ家に召使はるゝ傍輩(ほうばい)なりき」といふのである。

○

序でに、同「大地震大津浪珍説見聞録」二の記事を拾つてみよう。此方は、概して平凡である。大分勸善懲惡の傾向が、一よりも激しいといふのが眼につく位ゐである。巻頭に、「大地震津浪の奇談巻之二」とあつて、以下、「變を遁れし善人の話」、「變にあひし惡人の話」、「水難の相免がれざる

話」、「新居驛の話」の四篇を收めてゐる。

「變を遁れし善人の話」といふのは、斯うである。（全文にも及ぶまいから、梗概だけにする）

「大坂西邊に或人がゐた。十一月四日のことである。例の地震に、「舟に乘るにしかじ」と隣の人が勸めたから、自分も舟を借りて川端に繫ぎおき、「四日の夜も小震度々なれば、」震る度毎に舟に乘り、震りやめば又家に歸り、神棚に燈明を捧げ佛前に額き信心不亂でゐた。「五日の晝七時半頃、前日よりも猶烈しく震ひ出しければ、」主人女房息子幼き娘、下女と都合五人舟に至つたが、暫くにして漸く震も穩になつた。がふと、「佛壇の本尊先祖よりの位牌は持來れども、肝心の伊勢大神宮を始めとし神棚に納めし所の御祓を失せり。勿体なし」と主人船より立ち上る。息子これを見て、親父一人にては覺束なし。我も共々にといへば、女房は小用に娘も小用に、行き度よしいへば、「下女一人ふれに殘さんも心元なし」とて怱々打連れ一度に船より上り、我家へ歸り、主人は手水をつかひ、身を清め、神棚の御祓をおろし、女房娘は厠に小用などして、暫く時を移すうちに、怪しからぬ人の泣聲、鳴聲など聞えければ、何事やらんと門に出て、川端近くに至り見れば、大津浪の來襲で、大船小船悉く碎け、船にゐる人々殘りなく溺れ泣き叫んでゐる。云々。」

その末尾に、「少々此の敎訓を云はんが爲、强いての假作であると、我等をして此の物語を思はしめる程の、曰く「此人平常に奢りを愼しみしに、急難の場に臨みても神明を疎かにせず、大神宮の御祓を取忘れしとて家に歸るといふは、全く神明此人を加護ありて免れしめ給ふなるべ

し。實に我神國に生れては、斯ありたきもの也。」と縷々述べてゐる。

○變にあひし惡人の話

前とすつかり反對で、「常に金銀を貸て不當の利を貪り慈悲善根をなさず、神佛をも尊信する事なく、悋嗇にして壹錢をも費さゞりければ」といふ男が、舟に避難してゐたばかりに溺れ、その家の下婢は、主人の無理な命を畏んで、家に殘りて火の番してゐたばかりに助かつたといふ因果譚。

次に荒唐無稽な話ではあるが、丁度今度（大正十二年九月の關東震火災）の流言蜚語の頻々たるあつたと同じやうに、當時の蜚語の一として見れば無邪氣であり、且つ教訓味もある。但しこれとても著者の作爲かも知れぬと疑つてみるが、滿更、さうらしくもない物がある。これは全文を掲げよう。

○水難の相免がれざる話

爰に志州鳥羽御城下の片邊りに、某の院といへる眞言宗の寺あり。下男毎朝墓原の掃除をなすに、或苔むしたる五輪の石碑の邊りに、長き髮の毛地中より生出るを切取事時々也。いつとて

も不思議の事とのみおもひながら、別に人にも噺さざりしに去る十一月三日、例のごとく墓原の掃除をなすに、彼五輪の本に、いつよりも餘斗に髪の毛生出ありしかば、餘り奇異におもひ、此よしを申により、住僧を始め沙彌等もともに五輪の傍にいたり見れば、下男の申すにたがはず、いかにも不審なれば、五りんを取除け掘反し見るに、石櫃あり。其石櫃の蓋の隙間より、髪の毛見へければ、ふたを除けて見るに、中に髪髭長くのび、顔は土色にて、骨と皮とのみの人、目を見開き邊りを見廻すゆへ、住僧は恐れ怖きながら、其人に向ひ「見受くる處、袈裟ころもを着し居給ふは、御僧と思ひ侍る。何の頃に土中に葬むり、又何人なるや」と尋ねけるに、其人答へて「我は此寺の住持也。水難の相あるにより、難を避、且は祖師大師の跡を追ひ、文祿二年に定に入たる者也（文祿二年は今を去る事三百六十二年）」と答へける。人々是を聞て、誠に星移り、代換り年久しければ口碑にだにも傳へねば、我等迚も知らねども、今に存命なし給ふは實に末代の不思議也。先々方丈へ御越あるべし」と寄かゝり助け出し、方丈にともなひ、邊り近所同宗の寺院は勿論丹那の人々にも使を馳て知らせけるにぞ、皆々此所にあつまり、敬ひ尊み、幾久しく御教化に預りたしと申ければ、彼の人、「イヤ〳〵我等は水難の相ありて定に入、年を經たる事なれば、矢張元の土中へ埋め給へ」と辭しければ、人々も其意に應ずべけれども、平に一兩日は此所に

止り給へと勸めける故、止事を得ず、其儘にてありしに、翌日大津浪の爲に其邊のこらず、押流しける。其人も共に死したらんと、其寺近邊の者一人不思議に命を助かり、難波のしるべの方へ逃來りて物語りし也。

因に云。此僧水難の相あれば、是を避んが爲に年久しく土中にありしが、天變の時に至つて掘出され死したる也。是前世の因縁遁れがたき理り也。されば此度溺死の人々も、皆前世の約束とおもひ給ふべし。〔掘り返されたる前住持と尻餅つける住持と小僧の圖ヒラキ、此卷此の一圖のみ。尾崎。〕

最後に「新居驛の話」といふ昔語がある。元祿年中の話っ少し今度（嘉永七）の地震話に盡きて、その附錄たるの觀がある。極概だけにする。元祿年中、「當驛に築紫潟の大諸侯」が、「關東下向の節お泊りに」なつたが、侍醫何某も御供に侍つてゐた。それが旅宿に着いて平日嗜の通り自脈を取りしに、死脈であつた。他の從者を召して、一人〻診察するに、これも「死脈あらざるものなし」。驚いて殿の本陣に走り、殿の御脈をうかゞひしにこれも死脈。只事にあらずと、右の趣を申上、「是は當所に變あるべし。」と急ぎ跡の驛白須賀まで來て、御脈を見ると、こゝもだめ。とうとう二川まで來ると、すべてが平脈になつた。と、その時「遙かに海山震動の音聞えければ」さてこそ二川白須賀一帶大津浪の來襲をうけたことが明らかになつた。といふのである。

大正十三年四月二十七日印刷納本
大正十三年五月一日發行
第二十冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十冊

本文

都々一を浮世節といへる説
附、よしこのを浮れ節といへる説
「昨日の花は今日の夢」
○新内に現れたる「心中」心理の考察
渉獵漫筆（六）

渉獵漫筆（六）

〇粋　と　は

粋考（本著二九一頁以後）の補遺ともいふべき、適當な粋の説明を見付けた。新内の「仇比戀浮橋」の一節である。そのはじめの方に「すいとは色のいさぎよく、諸わけしかたの行とゞく心をこへによませたり。やぼとは月のかへ名にて、水にうつれるかげの月、もと本たいにあらざれば、取所なき空人も金が光らすびんつけやいとによる物ならなくに、柳にうけてあひしらふ。」とある。かくして以下野暮客の精寫に移つてゐるのである。

〇藍摺のはじめ

錦繪の藍一色の摺は、天保十三年の水越の嚴命に由らず、それ以前にもすでにあつたことは、既に曰はれてゐるが、稍性質の差はあらうが小説、口繪に此の藍摺が既にあり、それが年月が確かであるため、從つて此の藍摺の工夫は、錦繪は斷言出來ないが、小説口繪類には天保以前すでに行はれてゐたことが明確である。それは、文政九丙戌年正月發兌の序ある「花街壽々女」（初期の人情本、花街鑑の續篇）の序及び口繪が藍摺であることである。（外骨氏「此花」第十三枝には、天保五年の國貞畫「其裏梅眞砂白浪」の草双紙を例として擧げてある。）序、ヒラキ二面の口繪及び目錄全部藍摺である。畫者は英泉の艶筆である。

〇房種の風景畫

房種の面白い風景畫を此頃手に入れた。房種とは、畫家の傳統からいふと、恐ろしく下級である。知る人がないかも知れぬ。初代國貞の門人に貞房があり、その貞房の門人に房種があるのである。房種は明治にも生きてゐて、予等の從來知る房種は、赤々した明治の風俗畫美人畫を描いたもののみに所見が劃られてゐたが、これが今度一大驚異（房種としてはである）にぶつかつた。その明治以前、好個の風景畫を爲したものがあるに於てである。それが予の最近蒐集の一つ。圖は、比良暮雪の一枚。近江八景の八枚物であるか否かを自分は知らない。年月も房種としては案外舊い。檢印は、改印と寅九の二個印である。即ち安政元年の終りである。まだ初代廣重も國芳も房種の祖父師匠なる國貞も三代豊國として盛んに榮えてゐた頃である。そんな頃に此の一個年少、眇たる彼が、廣重國芳らとは別個な好風景畫を爲してゐたことに驚かれる。圖は大錦横繪、比良の雪を被いだ峯が遠景にあり、前は漫々たる湖水、その間に五六の帆船が浮ぶ。それだけでは何の變てつもないが、特徴且つ此の畫を好印象的に新味多からしめてゐるのは、湖水の水の部分に、斜に山もとから手前へ、二本著く太く引いた藍の線である。これが潮流の意味を表したのでもあらうが、とにかくこれが故意とらしくもなく見に、その大膽さがまた婉曲に收まり、新鮮味を多量に持たしめてゐる。山と上緣との間の墨のボカシもよく利いてゐる。一刷毛二刷毛の雲も歸雁も、相應した器用さである。板元は森治である。房種であるだけ、我らの敬意と愛著とを一層増さしめた。彼の師の貞房は國貞門下では有數の好手である。これに培はれたせゐもあらうけれど。

〇美艶仙女香の廣告文

大したことではないが、仙女香の廣告を「和合人」中卷の卷尾に見付けたから、寫しておく。こんなものも、今に探すに困るやうにならうと思ふから。（本著二四七頁參照）

おかほの藥美艶仙女香　一包四十八個

此御くすりは享保十一年二十一番の船の主伊孚九といへる清朝人長崎偶居の時丸山中の近江屋の遊女菊野に授たる顔の藥の奇方なり。傳ていふ清朝にて宮中の婦人常に此藥を用て粧をかざるとぞ。右の傳方故あつて予が家に傳へたるを（略）

功　能（略）

口上　右の御くすり十包以上御もとめに候はゞ當時三芝居立者立役女形正めい自筆の御扇子けいぶつとして差上候間十包以上御もとめ被遊候節は御このみの役者名前御しるし御こし候はゞ其品差上申候

この「口上」が面白いではないか。役者を利用した所なんぞ、今どき眞似が難からう。

都々一を浮世節といへる説

附たり、よしこのを浮れ節又は浮れ唱歌といへる説

都々一を「浮世節」と稱したといふ説である。それは、或る證左を今度發見したからである。勿論その證左はあまり芳しくもない物ではあるが、實は最近手にした末期艶書本によつて、ふと暗示、いな的確な憑據を得たのである。

その艶書本は、「春情うきよぶし」といふ表題である。「春情」の二字は、肩に小さくある、無論うきよぶしが主題である。中本、本文圖書六丁十二面、終りに三丁全部都々一が五十首ほど掲げられてゐる。圖の各面にも、下部は例のエロチックスであるが、上半には、普通の花柳其他市井の婦女戀愛の描書があつて、その右に、短冊形になつて一首づゝと都々一が掲げられてゐる。その三四を拾ふと、「宵にちらりと三日月さまのおもはせぶりなる入ちらし」。「はかない戀のわたしちやさても心に二つがあることいな」で「客は小判の色よき手くだ間夫はさびても地金いろ」。「折れぬ枝だと思へばなぜかなほも折れたくなるものかいな」と云々。たゞこれだけでは、どゞいつを浮世節と稱した大した材料にはならないが、中の、三丁目裏の、上欄、青樓婦女雜魚寢の中に、一人の女が起きて三味を彈きをる、その詞として、

左の如きがある。

「どゝいつをうきよぶしとは
　　よくつけいしたね　よつぼどいゝ」

とある。これである。勿論この稱呼が彼等花柳婦女のみの喧傳であつたか、市井一般のそれであつたかは不明であるが、しかし此の本の表題が斯く「うきよぶし」とある以上、その稱呼の發源は何れもせよ、やはり市井一般斯く稱した時機があつたやうに思ふ　此の本、体裁、書樣より類推すると、無論嘉永頃だと思はれる。畫は數ある歌川系統。然しまだ多少ましな物である。

一たいこの「浮世節」といふのは、此の一本の他にも我等の知れる記載はある。曰く寛天見聞記である。即ち「今は一町内に二三ヶ所づゝ、よせと號し、看板に行燈をかけ、晝に音曲を入れ、役者の聲色物眞似、娘上るり、八人藝、うきよぶしなど藝人をあつめて、外に家業もなし、人よせをのみ業とする家あまたあり。云々」とある、その「うきよぶし」である。但し此のうきよ節は、或は都々一以外のものかも知れない。然し都々一らしくも惟へる。といふのは、此の「寛天見聞記」の「今」とは無論天保であり、而して一方都々一は、天保九年には牛込の藁店に都々一坊扇歌が謠ひ始めたこと事實であるから、（然しそれ以前天保四年の人情「梅暦」には既にどゞ一の名が見えてゐる）即ちこの寛天見聞記のうきよ節は、またどゞ一の事

ならずやと惟はれるのである、但し「國語辭典」には、はやり歌のふしと單にあつて、同じく此の寛天見聞記を抜萃はしてゐる、

然しともあれ、（寛天見聞記のこれが何であるにもせよ、）此の艶書本「うきよぶし」の外題並に内容によつて、的確に、都々一を指て（恐らく天保嘉永の頃）浮世節と専稱した證據である、此説、都々一研究者の參考にもと此に披露した。

「附記」今ふと思ひ出したことである、嘗て四五年前、此の名古屋へも浮世節の元祖だというて、名人會の怪しい者の中に混つて、開演した某女藝人があつた。何でも元は大阪系統で、仕込は東京のやう覺えてゐる。今その名は忘れてしまつてゐるが、その歌曲は此の都々一のまゝであつたやうに覺えてゐる。現に此の頃でもこの一派が行はれてゐると見えて、本月（四月）十四五日頃の、當地のある寄席小屋、物眞似の猫八一座の曲目を新聞で見ると、浮世節（壽々女）といふのがある。即ち此等の浮世節なるものと、昔、都々一を浮世節と稱した、それと何からの縁由があるのであらうか。或は、これらは、凡て此の天保嘉永頃の古異名をそのまゝ踏襲した、即ちやはり都々一その物ではなからうか。」

○附たり、よしこのを浮れ節又は浮れ唱歌といへる説

「よしこの」は、都々一と歌詞の形を共にし、曲節を違へた、しかも都々一より古く、文政三四年頃より三都に流行し、天保期都々一節の起りし後は、上方のみに行はれたるものなることは誰しも知る所であらう。今自分のいはんと欲するは、此のよしこのが、うかれぶし又は浮れ

唱歌又は浮れ歌と稱した、しか惟はるゝ事實を擧げようとするのである。この事、都々一の浮世節と相似して面白しと、こゝに附記する事にした。

風流世志幸能圖會「北六齋月庭撰。國重繪、（心齋橋通ばくろ町角河内屋茂兵衛外三舍梓。）の序に、それが見えてゐるのである。

「（上略）春風や華の吾嬬に咲初て櫻の浪華に香をとゞめ粹となる身の浴衣さへ解て寢た夜のつゆ時雨雪の翌朝の泥濁にながれの水も今は澄心の垢を洗ひあげ一寸呑ほす盃の巡るかず〳〵うかれぶし情を込たひと口に迷ふこゝろも戀の實時花五七唱も三絃の律も合た婀娜文句高位下輩も根〆よき六百集の其中に喜惡別るよし此の玉の聲なる百余吟圖書を添たる端書と浮世の夢の轉寢に出傍題なる戲言をしるすものは　楊柳園主人」

とある、是である。これだけでは、單に固有名詞的ではない、文辭の或る修飾との反駁が出るかも知れぬが、尙、他にこれと同時代の同一体裁の「容新興能萬題集」初編（これは、嘉永二云々と序にあり。楊柳園糸兒選とあれど、圖會のと同一人と思はれる。同じく國重の畫。板元、大阪心齋橋通南本町南へ入柏原屋義兵衛。）の序の中にも、今度は、觀然、「浮れ唱歌と云々」とある。曰く、

自序

風流を好は偏屈を忘絶學文なりよし此を作するは人情をさとる一德有實や戀の信意得がたき事糸情翁だに通をうしなふ落し穴と要心堅固におよぶ時はつゐに誠をしらず玉の盃底ぬけも美婦ないかけにかけられて誰が彼でも思ざしをする時はうわ氣な色と焼付られ眞闇の間酒無利呑も愚知に沈し最中ならん歟、それをしり是をうがち迷を詠してまよひを離れうかれ唱歌とゆへど其情合を考る時は世教の一助にもならん歟と氣まゝ利屈をしるすもの也

嘉永二己酉乃夏

と。即ち此の「浮れ唱歌」も彼の「浮れ節」も結局同一、とにかくよしこの一名ではないか。それに今一つ相呼應して、「浮連哥よしこの集二編」と外題した一册が家藏の中にある。これは、此の浮れ云々の特殊稱呼の繼續年代を知る爲の、好個の資料とも做すに足りよう。即ち極の近世よしこの本の一である。彩色表紙の横長本であつて、貞信筆、松榮堂梓と表紙にある。此の本、外題にすでに浮連哥とあるが、中にも、見返しに二面の彩色圖ありて、それに、「浮連唱哥閨巻社中打寄前拵之体」とあるのである。〔松榮堂は、大阪心齋橋通八幡筋北へ入と奥附にあり。〕乃ち以上三の證據で、浮れ節、又は浮れ唱哥、又は浮れ哥とよしこのを別名したことが的確に事實づけられたと思ふが

奈何。〔若しさうとすれば、吾人は今日の知識で浮れ節といへば、今の浪花節の前名、一名のやう心得てゐるが、こゝにも名同じくして物異へる例がある。〕さて、その年代であるが、第一の「よしこの圖會」には表紙に圖重畫とあり、且つ第二の「容新與能萬題集」も圖重畫で、〔但し此の圖重は、豊川二世の圖重ではない、年代が相異する。〕これには自序に嘉永二己酉乃夏とあること前に云うた　即ち第一第二は、嘉永年同時代と見做すべきであらう。作者も無論、楊柳園主人、同系兒、同一人であらう、即ち嘉永年頭、すでに浮れ節又は浮れ唱哥といつた證である。尙、「よしこの集二編」は、序〔松葉堂のあるじ狂助述るとあり〕の終りに、卯のはつ春とある　但しこのよしこの集は、挿繪に散髪の男も見え、且つシャップ、代書人など丶新語見えたれば、明治十二年の卯ではなからうか。とすれば、此の浮れ云々の稱呼の年代は、嘉永頃より明治初期に亘り、持續されたものといふことになる

尙、從來「よしこの」は、通説明治維新以前に廢れたりといふなるが、此の「よしこの集二編」の如きありて、中々以て明治初期たほよしこのとして主に阪地に榮えたりとすべきであらう。丁度これと同年と見らる丶横小本名古屋本〔名古屋、其中堂板〕には、すでに「情歌」と銘記されてある。すれば此時代獨り「よしこの」の稱呼は、阪地のみこれを維持してゐたものであらう。

『昨日の花は今日の夢』

昨日の花は今日の夢、とは、我らの愛誦措くあたはぬ名文句である。我らは、この句を思ひ浮べると共に、「いまは我身につまされて云々」と後をつゞけ、而して、「ヱ、此の苦しみに引きかへて、あの二階の三味線は……」とつゞけるのが常だ。しかはどこれは、新内の「明烏」に採り用ひられて、誰知らぬ者もない、唄の一ふしである。我らは此の「昨日の花は今日の夢、いまは我身につまされて云々」の唄が、本據をいづこに有せるやを知らない。恐らく明和安永年間、或はそれ以前にすでに存在したものであらう。〔明烏の新内は、此の心中明和六年の事實なれば、それ以後、若狹掾の歿年天明六年までの作たるは無論なるが、恐らく、明和末、安永初の作と見做すべきか。〕新内の「明烏」を殆ど其儘受け入れて、唯短かくこれを摘んだのみで、詞句も殆どその儘なる清元の「明烏花濡衣」〔嘉永四年〕にも、この唄と同じく浦里のクドキとは展開されてゐる。「昨日の花は今日の夢」、本當にさうだ。此の句の現はす幻滅、失望、落膽の情が、古來幾多の痴男痴婦を泣かしたことであらう。夢と知りせば覺めざらましをといつたところで追つつかない。花は、昨日。これは儼たる事實だ。今日に至りて花を描くは、恰も痴人夢を描き、

空に苦しむと同樣だ。その悲歎、やがて此の夢を彼土に實化せんとする。昨日の花を今日の花たらしめんとする、永劫の花咲く里を求めんとする、それが得られず、さらば此世に潔くけりをつけて、いざさらばあの世に。かうなるのは、戀愛至上主義者、はかない耽醉者溺者の當然の過程であらう。

さて「昨日の花は、今日の夢」、此の思想は古くからあつた。今これに最も近似したものは見出せないが、花の存在を瞬時に見たものは、けだし和漢の詩歌に頗る多からう、容易に唇に上るは、「世の中は三日見ぬ間の」であるが、なほ、「明日ありと思ふ心の仇櫻」の歌もある。「花發風雨多、人生足別離」の詩もある。有名な春眠不覺曉の詩にも、「夜來風雨聲、花落知多少」とある。而してこの「昨日の花は今日の夢」とさまざま現れ出たのは、謠の葵の上、「人間の不定、芭蕉泡沫の世の習ひ、昨日の花は今日の夢」とあるのが最初であらう。「葵の上」は、今春氏信（禪竹）の作曲、彼は應永八年〔明應又は大永の誤かといふ〕歿八十六といふ。とにかく室町期、佛教文學的詞句の好典型であらう。即ち、その花に託して、諸行無常、有爲轉變の思想を孕めることは、謂ふまでもなからう。此の單なる無常觀に根ざした「昨日の花は今日の夢」が

昨日の花は今日の夢、今は我身につまされて、義理といふ字は是非もなや。勤する身

の儘ならず、分れとなれば今更にいなせともない放れぎはと。即ち戀の陶醉去つて、現實の苦澁にハタと當面した、然る心境の好譬喩に巧みに採り用ひられてゐる。昨日の花を今日の夢たらしむるは風と雨。昨日の美酒を今日の苦汁たらしむるは義理と生活苦。人事にも自然にも永劫の歡びはない。そこに自棄の心、自ら存在を味氣なく思ふ、はかなむ心が潜む。古來心中文學に於ける心中當事者の描寫、千態萬樣なれど、けだし此の「昨日の花は今日の夢」と知つたその刹那の悲哀、自棄感、强きものはこれに反逆せんとし確實なる彼岸の信念より、弱き者もはた朧ろげなる未來欣求の凡情より來た、彼此然りといふべきであらう。

さて此の「明烏」に引かれたる「昨日の花は今日の夢、今は我が身につまされて、」の唄は、何に本據を有してゐるであらうか。「明烏」の本文中に、ウタとあり、且つ「ヱ、此のくるしみに引きかへて、あの二かいの三味せんは」とあるに由つて、此の唄、當時の流行唄であつたらうと思はれる。或はやはり「めりやす」などの勃興と殆ど時期を同じうした、恐らく此の明和前後の詞曲であらうか。〔後世に生れた「いなせ」の通語が、安政頃廓内を流し歩いたある新内語りの「いなせともなきその心から歸らしやんせと惚れた情」の都々一を唄うて、それから生れたと謂ふ。その都々一も、この唄あたりから脫胎したのではあるまいか。とみかうみ考へて來ると面白い。〕

とにかく、新内「明烏夢泡雪」の

「二しょに死にたい時次郎さん。殺（ころ）して下んせ死たいわいのふ。ウタ昨日の花は今日の夢、今は我身につまされて、『合義理といふ字は是非もなや、ウレヒ勤する身の儘ならず、分れさなれば今更にいなせともない放れぎは、合 ヱ、此の苦しみに引き替へて、あの二階の三味線は、いつぞや主の居續に、寢卷のまゝに引きよせて、互ひに語るたのしみの、今宵は引きかへ今頃は、どこにどうして居さんすやら、とにかく添はれぬ二人が身の上、ハッア味氣なき浮世ぢやなア、ウタ好いた男にわしや命でもハル何の惜しかろぞ露の身の合消えば恨みもなきものを。詞コレ緑（みどり）さぞそなたは悲しかろ、おれが憎かろ、こらへてたもと云々。」

〔清元は、此のあたり、頗る散文的に、しかしそれだけ意を平明にしてゐる。下らぬ事であるが、試みに對照しておかう。敍情詩といふ點、はるかに新内が傑れたりとするは、此の點からもある。豈曲節の差のみではない。〕

「昨日の花は今日の夢合今は我が身につまされて、義理といふ字は是非もなや〔此ウタ以下チ唱キタリ〕」「アノ二階で彈く三味線を、聞くにつけても思ひ出す、いつぞや主が居續に、寢まきのまゝに引きよせて、彈く三味線の面白さ、それに引きかへ今宵の苦しみア、味氣なき浮世ぢやなア「好いた男にわしや命でも合なんの惜しかろぞ露の身の、消えば恨もなきものを」わしが此の身はどうなるとも、「たとへ此の身は淡雪とともに消ゆるも厭はぬが、」」

と。此の新内を聽いて來ると、「昨日の花は今日の夢」が一層我らの耳に戀愛至上の痲醉藥と

なつて、現れる。「互ひに語るたのしみの、今宵は引きかへ」と來るから、そこに昨日の花云々と相照應して、油に火を注ぐの概がある。で「とにかく添はれぬ二人が身の上」と來るのである。やはり、「とにかく」といふ以上、一時迷ひはあつたのだ。昨日の花をどうかして今日も花にしたかつたのだ、否したいのだ。すれば、「味氣なき浮世ぢやなア」の嗟嘆は生れて來なかつた筈である。で「好いた男にわしや命でも何の惜しかろぞ露の身の云々」の唄を借りてさらに彼女――浦里の喜んで死に行く心境が明細に描かれてゐる。浦里は、唯、この幻滅を悲しんだのである。昨日の花今日の花ならざるを悲しんだのである。さうして、今日の花ならざる浮世に、いつそ我が身に興味も、生きの身の樂しみも忘失し果てたのである。そこへ來ると、男の方が余程浮薄である。寧ろ不純である。男は、

「此程だん／＼噺す通り、國の親仁の江戸表、地頭の方へ出す金、二百両は扨置いて、其の外一門出入屋敷、かたり盡くして此の有樣、そなたも共にと云ひたいが、いとしそなたを手にかけて、どうなるものぞ云々」

といふのである。「そなたも共にといひたいが云々」で稍、戀愛の至純の聲らしいが、然しこれは、連心中の誘惑の語にもとりやうによつてはとれる。とにかく主原因は、騙りつくし不義

理を盡した果の自滅である。それの自滅も、相手の女の、連帶責任ときて、そこで相手の女も一しよに死なずば義理がすまぬと出た心持も(女に)多少あらうけれど、然し男としては、戀と義理(主に自身の處置、体面)との板挾みといふよりも、意志の弱い、所謂無分別な(これも濡兒讃美からはよくはいへるが。)濡兒の窮死といふのみで、それに多少肉的な愛著が相手の女にあるといふのみである。此の多少を、新内作者は、多にしたり、少にしたりしてゐるに過ぎぬ。戀愛至上の純なる聲は屹度女から聞かれる。男は、不義理の身のフンづまり、女は、「昨日の花は今日の夢」となつた悲歎。その幻滅を未來にとり戻さんとの欲求、此の熾烈から來るのが多い。

序でゝある。左に、新内正本中の、心中代表作十篇について、それ〴〵男の心持と女の心持と、及び彼らの動機、結果とに概說してみよう。元祿の近松物を除いては、唯一の心中文學だと信ずる新内の此の種の詮索も強ち徒事ではなからう。

□明烏夢泡雪　　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　早春。

男　春日屋時次郎。

女　山名屋浦里。

動機　前にもいうたやうに、男は親の公金を費消した上に「一門出入屋敷騙りつくし」て生きてゐられなくなつた。女は、「昨日の花は今日の夢……どうで死なんす覺悟なら三途の川もこれこのやうに二人手をとり諸ともに」といふのである。

結果。　若狹掾の「夢泡雪」では、終りを正夢にしてゐるが明烏後正夢（富士松登中）では、道行があつて、その果て慈眼寺の墓場で未遂、めでたしくに終らせてゐる。

□若木仇名草　　鶴賀若狹掾直傳

場所　　吉原。時　夏。〔「二人が命みじか夜の」とあり〕

男　　　市川屋蘭蝶といへる幇間。女房あり。

女　　　榊屋此糸。

動機　此糸が、藝者上りの蘭蝶の女房お宮に對して義理立をするのである。しかもその義理だてが、

「そんなら、そなたはいよく切れる氣か。イイ切られぬ義理づく。イヤそなたは切れる氣じやあるまい。死ぬる氣であらうがの。これが死なずにゐられうかいな。おみや樣への義理だて。此世でそはぬ其かはり、おまへはながらへおみや樣と仲ようして百萬年のお命すぎて未來は必ず私と女夫、蓮座をわけて待つてゐるぞへ。」

といふたばつかりに、男もつれて心中と來たのである。此の男の俺も心中といふ言葉は、これこそ女房を思はぬ、

苦しんで添ひとげた昔の思ひ出もさらりと忘れた、この海千に鼻毛を拔かれた始末。しかし意氣な藝者上りのおみやよりも、純情な女郎の此糸の方に、より多く愛情を持つた何物かがあつたかのも知れない。此の俗曲は藝者を負かし、女郎に團扇を揚げてゐる觀がある。或は單に、浮氣な男の心理かも知れないからうが、しかし蘭蝶の伴死は、ちよつとした浮氣からでは出ないからう。死よりも強き牽引が、おみやよりも此糸により多くあつたのであらう。そこに女郎對藝者との關係に於て、作者が男を思ふ純眞さの何れ劣りはなしといふより外に、男が相手の二人に持つ、肉體的の愛著に等差を付けてゐるやうな氣がしてならぬ。即ち、此糸の艶治な、諸譯知りの體が、お宮の單なる純眞熱情の體よりも示唆強かつたせゐであらう。それを暗示してゐるかのやうに思へてならぬ。

餘分な事であるが、此の男の伴死の理由らしい言草の、

「イヤくそれではみやへの義理ばかりで一しよに死なうと云ひかはした俺への義理は何で立てゐるぞ。ソリヤ聞えぬわいのう。そなたを殺しておれ一人世にながらへて

人中へ何と顔が向けられう。辿もながらへはてぬ身を。一所にやいのとすがり付き抱きしめたる心と心。二人が命みじか夜の」

と來た。それを聞いてゐると、男の理由が分つたやうで分らなくなる。唯、何處までも女房を忘れた、相手に引きずられた、否相手は引きずらうとの意志は持たなかつたかも知れぬ。(丁度外の男女の關係とは正反對である)にも拘らず心中決行と來た、即ち單に相手の爲に死も辭せぬ牽引を感じた。それだけに見てしまへば、さつぱりする。しかしかうして男を、男の女房に義理立てをせねばならぬそのためには、大切な男を、いかに男が迫ればとてよしさらばと來て、一しよにすぐに甘い未來を娯しむ氣になつた此糸の心理も疑はしい。結果からいふと、このおみやさんへの義理立て故云々も甚だ怪しくならざるを得ぬ。丁度、これとよく似たのは、淨瑠璃の「時雨の炬燵」(近松の原作でもさうだ)の折角おさんへ義理立てようとしたのを思ひかへて、その大切な女の亭主を奪つて死ぬ小春の心持とよく似てゐる。男の方も、唯、娼婦の蠱惑に眼が眩んで引きずられて行く所は、治兵衞と閒蝶とよく似たものだ。唯、おさんとおみやと、前身が全く違ふばかりだ。女に女房から絶緣を賴み入れるのもよく似てゐる。唯おみやの方が、比較的、思ふ男を取られた女の鼠卒な氣持が現はれてゐて、人間らしい、といふだけである。さて此の「仇名草」の結果は已遂のやうに受けとられる。

□藤蔓戀のしがらみ　鶴賀新内直傳

場所　吉原。　時　夏。

男　藤の屋喜之助。女房あり。

女　菱野屋早衣。

動機　「親女房友だちの意見と義理に責められて」と切れようとしたのがいつの間にやら心中と變更へた。それも「連も添はれぬ仲ならば、一しよに殺して下さんせ」と女から心中を強請するのである。

結果。已遂。

□歸咲名殘命毛　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　冬。〔「裸參りの濡坊主」とあり〕

男　玉木屋伊太八。勘當の身也。

「生れついたる商人」とあれど、本來は祐筆役の武士なる事、實說にいへり。

女　堺屋尾上。

動機　「此の頃は夜の目も合はず、食事さへ胸を通さぬ身受沙汰、家にかへ、親にかへ、身にも換へたるそなたをば、人手に渡すがくやしさに、さまざま才覺してみれど押つまつたる金の事云々」それも是迄は、勘當受けてまる二年其の日暮しにも差支るのに、物日節句も相應に茶屋船宿の付届、遣手禿に仕着まで、みんな女の工面づく。添ないぞや嬉しいぞや。といふのである。女は、「いやな男に添寢して朝夕苦勞するよりも、やつぱり二人が手鍋さげ」苦しい暮しも樂しいといふ。まだ心中とは決心してゐない、出來えたら現世にどこまでも眞の快樂を續けて行きたいといふのである。それが「ハテいつまで云ふても盡きぬこと」の男の詞で、心中と定まるのである。此の曲では、不思議と、「明烏」の浦里に似て、しかも彼よりは一層素直に、しかもより多く現世的に、二人の愛に生きようとした人間的な、女性の誠らしさがよく現れてゐる。從つて、どこまでも男に追從してゆくのである。男が押肌脱いで思ひつめたる白無垢の死でたちを見せると、自分も悲しさ嬉しさに手早く簞笥押あけて、供に着かへる死用意と來るのである。

結果。未遂。めでたし〳〵に終る。

（但し、實說、未遂後捕はれて非人に落ちたりといふ。）

あまり長くなつても自他ともに迷惑、こゝらであとの六篇は、一走りとしよう。

□戀衣對の白むく　鶴賀若狹掾直傳

場所　吉原。　時　不明。

男　淺草池の屋義助。

女　津田屋歌波。

動機　「友だちを賴み親一門へ色々というてみてもとかく女房にはさせぬ。たつて女房にせうといはゞ、子が

一人ないとおもはばすむととつてもつかずいひきらるゝ。（中略）そなたな女房にもたいでは生きてゐても何樂しみ。かれてそなたといひかはせし、死ぬる覺悟に胸をするゝ、遺書までも認めて、今宵限りの此の世のなごり」。女は「アヽうれしう御座んす忝じけない、それでこそかれての本望」といふのである。

結果。已遂。

□仇比戀浮橋　　鶴賀若狹掾直傳

場所　　吉原。　時　秋。〔「ながき長夜」の句あり〕

男　　浮世猪の介。（幇間）。

動機　「おれが身はとうで死なぬばならぬゆゑ、ひとりで死なうと覺悟せし姿はこれ」と男がいふが、この憎かな譯は不明である。女は「おもひはおなじ妹と背が心くらべのかたみぐさ」で、ともに浮世を棄てたといふのみである。

結果。已遂のやう書かれてある。

□浮世の別霜　　鶴賀若狹掾直傳

場所　　吉原。　時　冬。〔「題名より　の類推也」〕

男　　かわせや清七。〔男、藥種商の手代の如し。〕

女　　てんまや花の井。

動機　男「くめんもならぬ遣ひこみ」。女「いやしいわしに繋がれて、大事のお身をすてさせる咎をわが身にひきうけて獨り死んで此の世に……」。それがたうとう心中。

結果。未遂。

□眞夢血染抱柏

場所　　吉原。　時　冬。〔夜嵐さむく吹きおくるとあり。〕

男　　星の屋平三。

女　　京町のかしまや花園。

動機　男「養父の咎めにあひ勘れし中を引わけ上方へのぼさうとある悲しさに、死なうと極めしおれが身」、女「お前とされてわしとても生きて居られぬ身の上を一しよに死ぬるが何のその、お前にさせる恩がいな」と來た。

結果。此の心中を眞夢とせり。

□浮名初紋日　鶴賀若狭掾直傳

場所　吉原。　時　正月過ぎた頃。

男　本町の桝酒屋の手代小七。

女　山科屋の菊の井。

動機　男「内方の首尾が惡い。死んでくれ〳〵」女「喜ぶ間もなくお前の首尾。かくなり果つる此の世ではよく〳〵添はれぬ緣かいな」。

結果。已遂の如し。

□二世玉襷　鶴賀新内直傳

場所　吉原。　時　春。〔「三月の月かげもおぼろ」とあり。〕

男　松代屋惣五郎。

女　永樂や歌菊。

動機　男「……ホホッその實情は俺とても何の仇には思はれど、今はかさなる此身の不首尾。無理なくぜつなしかけしもそなたときれて俺ひとり死ぬる心に極めたる覺悟はまつことと白無垢な肌へに着込し死出たち」女「さても此世でそはれずば一しよに死んで、後の世はいつはちずに誕生し現世の念をはらさん」と共に覺悟の白むくといふ、未來欣求主義。

結果。已遂の如し。

昨日の花は今日の夢だ。「踏花同惜少年春」だ。まして、生命の花に、醉ひ痴れてその花のまざ〳〵散るを見つけた時の心は、どんなであつたらう。あゝ死により強きは、何がある。生命の花は、徒らなる生命の寶よりも尊く、求むるに値づけられたものであらうか。我らは、我國近世文學がその殆どは情痴の世界の描寫であり、その描寫の簡潔にして要を得たるは、俗曲であり、しかも物語体と叙情詩体と共に併せえたる、しかも就中奔放の情痴を走らせ、しかも近世

文學の唯一取材たりし花街に同じく取材した、惑溺の溜息、情痴の喘ぎ著き此の新内淨瑠璃に於て、彼等の曲中の男女が死に至る道程、その心域の大半は、此の「昨日の花は今日の夢」とはかなんだのにあるを思へば、此の單なる一詞句は、我らにとつても最も懷しき、彼ら悲戀悲愛の結晶したる痛しき微粒の如き感なき能はぬ。

自然の花も散つて、今日は青葉の現となつた。陽の光も白く、耀かしいものとなつた。鳥は囀り朗らかに、花より青葉に、己がじゝその生を悅樂してゐる。鳥は現實主義者である。人は花を戀ひること多きものは、その無限の惆悵、これをいづこに醫すべきであらうか。

ふと思ひ浮んだことがある。それは彼ら新内曲中の男女の幻滅を感じたと爾く稱した、その程度に就てゞある。即ち彼ら男女、殊に女の幻滅とは、昨日の花は今日の夢とはいふもの丶、それは唯、花の形ばかりに即した幻滅であつて、花自らの（心の花の、永劫不斷の花の）幻滅ではなかつたといふのである。彼女らは、憐れなる相愛協和者として、共に今日に於ける形の花（戀愛の外的事情）の破滅を嘆いたに過ぎぬ。死んでも醫されぬ幻滅は、彼らの心と心とに感じなかつたのである。唯、生活、事情の激變を夢と稱したに過ぎぬ。企圖してゐた戀愛場面が一旦に破却されたそれ丈の幻滅、それも外的物件に由るのである。心と心が創り出す幻滅、破綻

ではないのだ。更にいへば、彼等の夢と觀じたのは、兩人の心的內容には些の支障影響なく、唯晴れて夫婦に、又は逢曳を重ぬるにすぎなしといふ程の、しか程の外部的、要求實現上の幻滅のみである。畢竟蟲のいゝ幻滅である。起因は、浮世の義理、生活の逼迫、さうした自己らの核心に觸れざる外的條件のみである。よりて彼等は、心中をする程の破綻に陷つても、彼等自身、男女は相互の心情に更に幻滅を感じなかつた。これが羨ましいのである。人の實情といふものを、相互に攫んで、それを信じて死んで行つたらしいのが、なる程近代的ぢやない、それだけ近代人たる我らよりは、夢のやうに、他界のやうに、よく云へば羨まるゝといふのである。

我らの知る限りでは、此の愛する心の破滅、それ自身の幻滅をまで描いたものは、我ら近世文學に殆ど尠ない。唯溺れざる所謂通人流義の或は欺瞞愚弄の愛の生活は、偶々見受けうるも、〔現に新內にも「不心底闇蛇」の如きがあるが、こは初めより僞瞞にかゝつた男の滑稽さ、失敗である。この愛して愛し得ざる例ではない。〕此の愛して愛しえざる、その心內の幻滅、對象そのものに夢を感じた、その苦悶悲愁を描いたものは絕無である。要するに、彼らはとにかく一婦一男主義、たとへ娼婦といへども、心情に於ては、その愛に於ては、極めての淸教徒である。嚴肅なる童男童女の純愛に生きてゐた。然し謂ふが如くしか程に果して單純で

あつたらうか。やゝ男の方に、自己主義、自己の立塲、生活の推し詰りを嘆いてそれから來る心中ゆゑ、そこに不純らしき影あれど、なほ女に對する愛著には些の不純さも幻滅もないやうである。女性は、唯熾烈なる犠牲愛（或は把握愛）に燃えた。即ちその積極的に女から心中を唆のかした者も、同じく愛するが故に、その全部を攫みたいといふ可憐な欲求からに過ぎぬ。（此類、此種の女、愛に於て自我的であるともいへよう。但し蓋し此の類は、數に於て少ない。）女も生活の逼迫を嘆いてゐる心持はあれど、しかしやはりそれもその男が主題である。僞繭と技巧、自分の生活の破綻の道伴に男を爲さうとするやうな女は一人も見當らない。男も心中を道具にするのではなかつた。却つてそれを隨喜してゐる。その單純さ、純情さが、非近代である。我らが、新内淨るりをきく度に、その凄絶なる旋律と、その大膽なる歌詞とに吸はれゆくのも、此の純情、單純さが力强く我らを打つのではなからうか。我らも時として、かゝる機會に、純情、單純さの昔に歸らんとする、生れざりし世の昔に歸らんとする、その自然の情よりの共鳴同感、悌涙かも知れない。

即いて離れ、離れて即く、愛して愛し得ず。同時に二人をも三人をも愛しうる。（紙治でも蝴蝶でも、小春、此糸に對つては、夙うにおさん、おみやを忘れてゐた。彼等の愛は唯一對象に燃えた。これを三角關係と見るは非だ。）かゝるものは遂に彼等にない。幸はひなるかな彼等の純情。といひたい。新内の彼らは、女は肉より靈に向ひつゝある、男は恐らくは肉本位

大正十三年五月二十七日印刷
大正十三年六月一日發行

第二十一册（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十一册

本文

「昨日の花は今日の夢」（完）
並木正三の「日本第一和布苅神事」（中）
賣比丘尼考補遺
都々一一家言（飯島花月）

都々一家言

飯島花月

「江戸軟派研究」第二十册の浮世節浮れ節さいふか說に就いて聊か私の考へを述べさして戴きたい。

私は、「浮世ぶし」は當世流行ぶしさいふ樣の意味で用ゐられた言葉さ思ふ。遊女狂ひを浮世狂ひさ稱し、又昔から浮世さいふ語は廣く行はれて浮世袋、浮世繪、浮世床、浮世風呂などの熟語が續出した。畢竟は憂き世の語から轉訛し文字も浮き世さ書換へられて頗る樂天的の語さ成り更に當世樣さいふ意味を成すに至つたものさ思ふ。されば流行小唄を總稱して浮世ぶしさ稱し書籍の表題にも寄席の看板にもどゞいつさか、トッチリトンさか或は八木節、安來節、濱花節など樣々の稱呼を揭出するの煩を避けて當世ぶしの名稱に包括して揭げる事が簡便で要を得てゐるから、或る場合にはドドイッツの別名を浮世ぶしさも稱へた樣に聞ゆる事も有つたらうが、畢竟はドドイッツさいへば浮世ぶしさいふ汎稱中の部分稱に屬するものさ私は考へてゐるので有る。(見世物雜誌天保二年の條名古屋大須で都々一坊扇歌が興行した時の張出しに「浮世連ぶし」さして其下に一段低く「即席三題よしこの」さ書いたさある)。

浮かれぶしは其の名稱で既に明らかな如く浮き立つ浮き〳〵する浮かれるの義から出て人心を浮き立たしむる節奏の意で有らう。されば器樂の噺しは勿論コリヤ〳〵さか浮いた〳〵さかの噺し詞さへ添へたりして人心を浮動挑撥せしむる當世樣の小唄のふしを汎稱して斯く云うたので、多くの寄席では一流浮かれぶしの看板の下にトッチリトンやドドイッツや其他の小唄を即ち浄瑠璃長唄以外の端唄を雜唱する藝人の名を示して居る。要するに浮かれ節は浮世節の稱呼さ嚴格に區別は付け樂れるものゝ浮世節中の一層浮き〳〵した小唄さいふ意味に解して差支無く思ふのである。即ち私は浮れ節さいふ特殊の節が有つたり又はそれが都々一の別稱であつたらうさは思はぬ。從つて浮れ唱歌さいふも浮れ節さ同じく當世樣の小唄の義さ解して居る。(明治になつての浮れ節は之さ異ることさいふ迄もない)。

潮來節がよしこのさ成り再變して都々一さなつたさいひ或はどゞいつは投節の餘流ださいふ說も有るが其邊の事は姑らく茲に省略するさしてよしこのさ都々逸は兩者其時代を前後して江戸に錯綜的に流行し、一隆一替を見て最後よしこのは江戸に滅び上方に存する事さ成つた樣に思ふが、現今上方のよしこのは東京の都々逸さ其曲節に幾ばくの差違も無い。殆んど同一物の觀が有る。これは東西交通の自在に成た爲融和混合したので、維新前迄はよしこのさ都々逸にもう少し明らかな區別が有つたさ思ふ。東阪人は江戸の都々逸節を喜ばないのか或は都々逸の稱を快しさせぬのか昔から都々逸さいふ語を口にせずよしこので今日迄通して來たが、明治に成つては純然たる都々逸が流行して往つて遂に東西の混融を見るに至つたものさ思ふ。但し上方のよしこのさ江戸の都々逸さは其歌詞に於ても嘉永安政頃から既に若干の徑庭が有り、それが明治二十年頃には矢張混融して分け難いものに成つた。私は曾て「江戸の都々逸」さいふ一文を草して此間の變遷を或る雜誌に述べた事が有つた。

忠臣藏さなせ小濱道行常盤津(綠花旅路嫁入)の文句に「ういていたこも名古屋さかはりそしてどゞいつ鈍な洒落」さいふ一章がある。いたこから名古屋どゞ一節さ流行が變遷したさいふ意味か或は前者が後者を産み出したさいふ義か兩樣に解せられるが、私は後說の方に解して居る。又式亭三馬の「潮來婦誌」に潮來の川崎節を取りて章句を江戸流に直したるものなりさして「わしが思ひは仙臺川岸よ」の唄にヤレ〳〵ソレ〳〵〳〵の囃詞を添へて示し、「小歌志彙集」には小田原節の唱歌にソレ〳〵〳〵コリヤ又よしかへの囃詞を示し、「浮れ草」には同じ節にソリヤ又よしかへ(東長唄ウラヘ)

のみの傾向、しかる差はあらうけれど、とにかく彼等は、聖愛（肉本位にしろそれ以外にしろ、純情なれば、それを聖愛と名つくるに何の不可かあらう。）だつた。今日の我等の如き、生活の爲の生活を考へたり、愛の爲の愛に理窟を催したりするものではなかつた。近代的情死の殆どが、愛の爲の生活の破綻ならずして、自己の爲の生活の破綻、或は思想の破れ、其他各種雜多の起因を含み、單に愛しあふ同士が、唯その當面せる生活に對して、愛を續行せんが爲に幻滅を感じた、その破綻を招いた、しかほどの愛本位、純愛の立場は殆どなからう。我らは、古今情死の心的動機の比較を爲すの煩を省く、唯思半ばにして足りよう。

ダヌンチオの「死の勝利」の如き、愛して憎む、豊醇なるその肉體に戀々たり乍らも、一面蛇蝎の如くこれを憎む、さうした複雜なる男の苦悶も新内の悲曲には現れなかつた。唯溺れた、唯弄つた。その果は死んで愛しようとした。なべて男も女も、幻滅といふものの、それは單なる外的の幻滅に過ぎなかつた。彼らは、心的に於て、やはり「昨日の花は今日も花」だつたのである。それを夢と見做すのは、生活と相應じた場合、そこに不滿、失望が生れたといふのに過ぎぬ。彼等の愛は、昨日も今日も、確乎たる不拔なる確實性、久遠不壞のものであつた。而してその對象は、勿論各自唯一であつた。三角關係も四角もなかつたのだ。まして彼らは有神論者

であり、有靈魂の信徒であつた。即ち彼等の悲嘆は、唯だ現土に於ける外的生活の一端の破綻唯それを無上に嘆けるに過ぎぬ。乃ち彼等は死して、外的にも內的の心內要求のその如く、即ち內外融化した、愛の實現不斷の永劫可能土を目がけて去つたのである。この點、彼等は、現代の吾人身邊の心中者の苦汁に比して、甘味津々たるものあつたことは無論である。

「昨日の花は今日の夢」とは、愛に於て、眞に現代の吾等の口にすべき事である。苟くも純情に生き、唯一人の愛に燃えた昔の彼等には、唯假(かり)の夢、明日はまた花だつたのである。我らは、最後この結論に至ると、この「昨日の花は今日の夢」が、初めは傷んだそれが、今は却つて彼ら古への心中者の凱歌の如く聞えてならぬ。

○

「昨日の花は今日の夢」と頗る似た唄を一つ發見した。この餘白に寫しておく。

「昨日までながめて花もいつしかに今日はわが身と夏草の、目にぞしほるゝ憂き思ひ、せめてあはれと夕顏の露の命さかれては知れど知らではかなき夢の世や」（地唄、本調子）

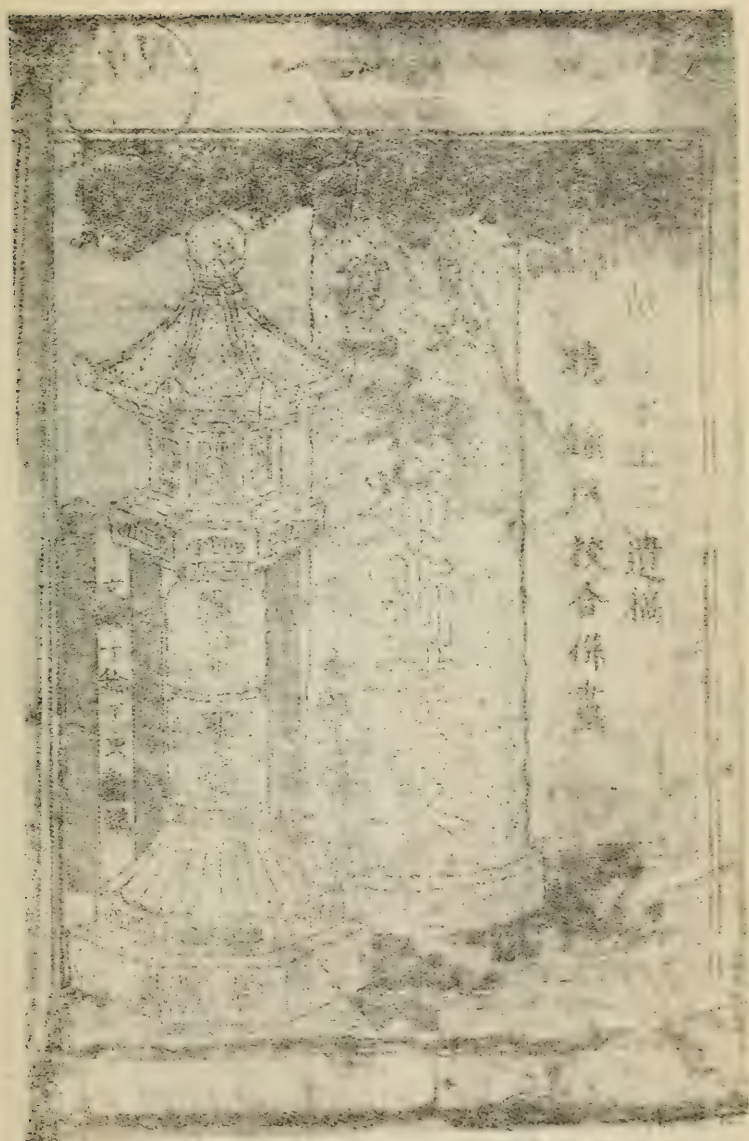
以下、「和布苅神事」の梗概に移らう。全部七卷、第一の見返しに文政十稔丁亥新鐫とある。板元は、第七の末尾に、尾州松屋善兵衛　京都鉛屋安兵衛　浪華河内屋太助とある。半紙本七冊、挿圖每卷三四圖。（但し第一卷のみは、淡彩の口繪數葉を添へてゐる。）挿圖は、無論此の本の校合者、鐃鐘成の畵である。〔鐘成が、浪華の浮世繪の一畫であり且つ戯作も兼ね、しかもその狷介倨傲な性が災して、晩年政治上の事故に因れて悲慘な死を遂げた事は、有名な話で[illegible]、ここにはその悉しきを略く。〕

第一卷の見返し傘用扉の次に、浪の繪ありて、上に、

和漢三才圖會ニ云和布苅ノ社在ニ豐前國企救郡集部村ニ昔ハ爲ニ長門國豐浦郡赤間ニ祭神彦火火出見尊地神四代尊也每年除夜子ノ刻許ニ海水乾クテ於レ是神職以テ炬明ヲ入ニ海中ニ苅リニ和布ニ翌ル元朝備ニ神前ニ謂ニ之ヲ和布苅神事ト一

此地舊屬ニ長門國ニ而神功皇后三韓征伐之後門司赤間之交成リレ海ト門司ノ關及當社ハ屬ニ豐前ニ而赤間關ハ屬スニ長門ニ而南北隔ツレ海コト一里

「和布苅神事」の扉

「和布苅神事」の第一丁表

とあつて、先づ和布苅神事の普通行はるゝ意義を明らかにしてゐる。〔尚、此の神事に就ては、古松軒の西遊雜記にやゝ悉し。栗里先生雜著一五に所引。〕次に、左の如き狂言姓氏略目なるものがヒラキ二面にある。

日本第一和布苅神事俳優狂言姓氏略目　次烈俳優之不レ拘二高卑一

右兵衛佐賴朝　中山新九郎	源判官義經　小川吉太郎	江田源藏　小川吉太郎
賢鈴門院　嵐小六	靜御前　藤川友吉	政子ノ前　中村尾ノ上
平敦經　假に橘宮又五郎トなのる 中村歌右衛門	梶原平三景時　中村歌右衛門	武藏坊辨慶　中村歌右衛門
富樫後室岩倉　中村歌右衛門	梶原源太景季　假に漁師喜作ト云 市川鰕十郎	梶原平三景高　市川鰕十郎
龜井六郎　市川鰕十郎	小柴文內　市川鰕十郎	飯原左衛門　嵐來芝
宇都宮友綱　市川團藏	伊勢三郎　市川團藏	安達景盛　市川市藏
千葉之助　坂東壽太郎	鷲尾三郎　坂東壽太郎	佐々木盛綱　假に漁師雁四郎ト云 大谷友右衛門
片岡八郎　嵐橘三郎	江間小四郎義時　假に馬士万平ト云 嵐橘三郎	津田判官　中山紋七
佐藤忠信　かりに馬士貫八ト號く 中村芝翫	益雄十郎　中村芝翫	富樫左衛門　片岡小六郎
駿河治郎　淺尾額十郎	土肥實平　淺尾額十郎	醒ヶ井兵太　中村東藏
津ノ戸泰重　後常陸坊海尊ト云 片岡仁左衛門	岸濤主鈴　嵐團八	備前ノ助行家　淺尾園五郎

沙渇羅龍王　澤村國太郎　景高妻室榊葉　澤村國太郎　千葉妻室千種　嵐璃光
文内娘安督　忠信の妻中村歌六　文内娘誰袖　義時の妻嵐富美三郎　富樫娘常陸　嵐富美三郎
友綱妻室菊町　中村三光　土肥妻室巻絹　嵐加納　忘八喜右衛門　市川市雷
蜑丁若松　中村三光　蜑丁老松　中山喜樂　福山徳庵　市川助十郎
禰宜治郎藏　嵐車丸　小厮仁太郎　中村歌七
姓氏略目終

次に、ヒラキ二面、沙渇羅龍王（澤村國太郎）、寶劒を持ちて立ち、蜑丁若松（中村三光）、右手に鎌を持ちて、挑みかゝる圖あり。（草さ代赭の淡彩）次にヒラキ二面、山伏姿の義經從者七人の似顔あり。（淡彩同上）次にヒラキ二面、小者にやつせる義經を打たんとする山伏姿の辨慶の圖がある。（淡彩同上）次は、ツラ一面、後ろ松矢來、前に高札の建ちをる圖ありて、その高札に左の如くあり、以て此の戯曲の全輪廓を摘示してゐる。〔この高札のしかけは、恐らく、第一幕安宅の關の心であらう。〕

條

一富樫之後室よしつねを窺ふ事

一吉野山に英雄共を圍む事

一鶴ケ岡に諸士梶原と爭論之事
一梶原が館に兩子血戰之事
一隼部の浦に義經寶を尋事
一老松が磯家に景季軍功を物語る事
一和布苅の浦に義經寶劍を得る事
　右大序より大切まで都而勸善懲惡を本
　とし兒女の教訓となす者也
　　　　　　　　作者　故並木正三
　　　　　　　　校合並書　曉鐘成

以上が、一條づゝ一卷、計七卷なのである。
以下原文を省略した、「見たまゝ」式の梗概を語つてみよう。

　　　□卷之第一
　　　　富樫庄司屋敷

上座に後室岩倉、次に富樫左衞門、下に關所の役人大勢居る。富樫、役人共を叱り居る。義

經共と思はれた山伏を何故通したと叱る。と兵藤太といふが、「其節あなた樣は御病氣。後室樣の御差圖で厶りました」と云譯する。富樫、後室に喰つてかゝる。〔左衞門は、後室に劈て〕後室は、「義經を囚へよとの鎌倉の嚴命で此の新關をしつらひしは夫の庄司殿、但し折ふし老病でお果てなされた仕儀。その跡は、男子とてはなく、自らが舅のそなたを富樫左衞門とならせて娘常陸が後見、これしきの事驚くやうな魂では此國のせいとふは覺束ない」と突つ放す。富樫は、義經一味と鎌倉から見られては、此館は斷絶と口惜しがる。アト、軍兵どもに、半月以前の山伏一行通過の模樣を聞く。いよ〳〵口惜しがる。ドド軍兵共に嚴重詮議を命ずる。軍兵ども引退る。アト左衞門と後室。左衞門、頻りに、後室に、「義經は此館にかくまひあらう」と、義經に同情の辭を陳ねて、聞き訂さうとする。後室は、「いづかたに厶るやら」知らぬといふ。「いづ方とは白々しい。此間から見馴れぬ客人奧の間にとりこもつて御しのびあるは、正しく義經公でおらうがや。」岩倉は、「アレは娘常陸の大事の戀婿」といふ。左衞門は、「ヱヽ、コレ〳〵常陸の婿は此左衞門。今更外に婿があつては……さういふ奴なら猶逢つてめつきしやつきさせにやならぬ」と立つて行くを引戾し、立寒がつて、「あの娵は庄司殿の爲にも自分が爲にも義理ある娘、娘が氣に入つた者を婿がねとはかねての遺言。姫に添ひたくば氣に入るやうにしたがよい」と

心を殘して岩倉は奥に入る。アト、左衛門獨り悋氣をむやしてゐる。義經の長臣津戸三郎春重、熊野山伏の形にて笈を肩に登場す。關所にて一夜の宿を乞ふ。左衛門咎めて、山伏と知つてとにかく通す。津戸、緣に上り、笈を下し、笈より「懷かしきづまより、いざまづこれへ」と、靜御前の手を引いて座に通す。左衛門呆れて、「あつぱれ美なるかな妙なるかな。して此女性は」と聞く。津戸「身が女房だ」といふ。郞黨兵藤太も出合頭に呆れて見てゐる。靜、津戸奥へ退場。アト兵藤太と左衛門。左衛門、「きやつが愈々津の戸の三郞あの女は靜めに極まつた。コリヤ」と兵藤太に耳打。兵藤太「すりや梶原殿の郞黨番場忠太殿が此邊に」常「おうさ、一時も早く人數の手配り相圖の烽火(のろし)コリヤ」かう〳〵と囁く。兵「ハツ」立去る。左衛門は一ト間へ入る。ト常陸(富樫娘)いでゝ、「世を忍ぶ身と仰有るが、義經さまではあるまいか」とア、氣遣ひやといふ聲をもれ聞き、一ト間に靜御前思はず見合はす顏と顏。常「それにふんずお前はたれじや」結局此の二女の角突き合ひ。靜が、奥のその客に逢はしてたもれといふ。常陸、わたしの大切なお客、いやじやといふ。靜くわつと上氣して、たうとうこゝで靜御前の本名を名乘り、是非我君を爰へ出してもらひたいと詰め寄せる。二人が愈々せりあふ。そこへ義經公立出でる。靜御前「ヤアお前は我君」義「しづか御前か」常陸「そんならあなたは義つね樣に紛ひはない」ハア、ハツと斗

りに泣き入る常陸。此方に富樫左衛門、奥に主の後室が聞くとも知らず、義經公、いろ〲あつて、「不思議にも此館にての對面、いかがして來りしぞ」靜「君を求めて大和路へ尋ね參る道にて梶原が家來に見咎められ危き所、津の戸三郎殿に助けられ、思はず今宵お顏を拜し、夢ではないか」と愁嘆。義經「此上は何國までも召具して、比翼の契は替るまじ」、傍に聞きゐる常陸見かねて、「これ申し義經樣餘りじやわいな〲。此程よりのお情は事かけの仇枕か、そりや洞慾じやわいな〲」。義「ヲヽその恨みも尤も。志は嬉しいけれど、義經が今の身の上、縁と月日を待てといふ。常陸は待たぬ。どこまでもわしやついてゆく。むごい〲と抱き付く。障子くわらりと岩倉御前。義經は、はつと驚き立退くを、持ちたる弓にてはつし〲と打すゑ、聲勵まし、「靜御前の色香に迷ひ、我が身を我でに訴人も同然。辨慶にうけ合うて君をあづかり御一人此館にお留申せし心はな、關所々々に目を付けなば若御一人、一緒に下すは十二人の爲ならずと、此岩倉が寸志の忠義。行く先々の關所の切手、肌身はなさぬ左衛門、何卒して奪ひとり、やす〲と奧州へ御下向なし奉らんと、心を碎く此岩倉が心の中、御推量なき御身持」と怨みつ怒りつ道理の詞、義經「迚もかく〲ても傾く我運命、潔く名を名のり、その方が手にかかる所存とは知らざるか」岩倉驚き、いろ〲あつて、「腑甲斐なき御所存、命全う時節を待つて御兄弟御和

睦からんこそ、御身のほまれ。これ娘、こなたには母が云ひ聞かすことがある。眞實おもふ心が定ならさつぱりとお暇(いとま)願や。お情もこれぎりじやぞよ。おもひ切るも君の爲、合点がいたかーといへど、娘は泣くより外のことばなきと來た。後室の詞に勵まされ、義經、捕まる二女を振切つて奧へ入る。アト常陸だけ殘る。樹蔭より左衞門、「常陸は何處にぞ」と、潛がらり、白木の箱携へ、片手に長柄の銚子もち出て、「オヽ、爰にいるか。若後家同前。あゝ惜しいことぢやなア」常「エヽ、そんなら最前からの樣子を」、「とつくりと聞いた。おれが初手から思うた通り、義經に極まつた。何にも知らずにまだ義經に心中立、阿呆ではある」と、散々常陸を焚きつける。若倉が今の樣にいつたのは、繼母根性だと納得させる。常陸悋氣の焔を燃やす。たうとう靜御前を殺してしまへと唆かされて、その氣になる。「こりや氣をせいて仕損じな」と抜きさしならぬにしておいて一ト間へ入る。常陸、刀をとつて、ふるふ足もと踏みしめて靜が寢所へ忍び入る。富樫左衞門一ト間をそつと呼子の笛、兵藤太庭の木蔭に現れいで、「お丹那首尾は。」富樫「上首尾／＼。奧に居るは義經といふこと慥に聞屆けた。常陸めに毒氣をふき靜御前も打とる手筈。して人數の手配りは」兵「お氣遣ひなされな。追付(おつつけ)これへ」。でかした／＼で主從忍び入る。こなたの一ト間は女の聲、ばつたばたつく障子の内、はつしと太刀音。松が枝に篝火。ひさしく四方

八方あまたの人音鉦太鼓。血刀打ふり兵藤太弓手に女の首ひつ下げ緣先へ躍りいで「ヤアく番場殿は何くにある。義經が思者靜御前の首打つたり」と庭先へ込入る軍兵、中にも忠太勇みをなし、「して義經は何とく」。といふ間もあらせず義經公左衞門と渡り合、激しき立廻り、番場の家來ども付て懸るを事ともせず薙ぎ立て、皆逃げては入る。義經追うてゆく。此ひま、左衞門取つて返し、「兵藤太く。義經めが死にもの狂ひ、めつたに手に合ふまい。行く先々の關所く。知らせの早打一時も早くく」。兵「ちやと申て新參の都者、つら見知らねば行先く何を證據に關所の固め」。富「おうさく。それこそこれ」と切手を投げる。兵「かしこまつた」とその儘飛ぶ如くに。アト、富樫「かうしておけば大丈夫。御褒美には國郡(くにこほり)うまいく」と悦に入つてゐる。ト義經立返る。富樫「こりや叶はぬ」と逃足。家來もひと括め逃げうせる。義經こゝで「所詮叶はぬ運命、せめて此家の後室の手柄ともなし呉れん」と自害の覺悟、腹押くつろげ既にかうよと見えたる處へ、一ト間の中より大音聲「ヤアく義經公の御身替りに及ばず江田の源藏しばしく」。源「何がなんと」。ト津戸三郎悠然と立ちいで、述懷。「八嶋の浦の合戰より我君の不興をうけ、引こもりゐると聞きしに、扨は忠臣どもの計らひにてお身替りとなつたるか」。即ち彼の見拔いた所では、この安宅で、先だつて辨慶が杖をもつて打擲したのも江田の身

枠りだつたらうといふのである。引いては、それを一旦引きとめて、跡より一人易々と落さんと、君をおもふ此家の後室も天晴の心底」。（こゝにみれば、本物の義經はこんから安宅の難はない、こゝにいつてゐる。然れば眞義經の身の在處は？それを知つてゐる者は、海存と作者たる變幻自在、こゝらが、受けた所だらう。而して眞義經は、第六番になつて現れる。）更に津戸、「吉野にて、藏王權現を斬つたお咎、滿願の明方權現のお告によりて、山奥に入り、不思議や一人の老翁に會ひ、仙術を授かり海存仙人と號をゆるされ二時に滿たず。かく海存ある上は、義經公のお身の上」「大丈夫といふ。」「ホヽツ天晴……去り乍ら靜御前の最期を外に見られしは」。津「それこそ身替り。ヤア〳〵後室、靜御前をこれへ伴なひ、娘常陸が最期の有樣出でゝ名殘を惜まれよ」と聞くより二人が立ち出で、死骸にとりつき愁嘆。源藏も供養ふ「來世は江田源藏が二世かけし女房、必ず迷うて呉れるなよ。かわいや」。ト、後室自害しかゝる。「この子は夫富樫殿宿願あつて常陸國鹿島明神へ參詣の歸るさ守り刀を添へて捨てありしを拾ひ歸りて直にその名を常陸と呼んで夫婦が寵愛。なさぬ中の義理といひ、未來の夫へ此身の云譯」放して〳〵と泣く。津の戸「……さり乍ら現在の兄が手にかけし此の常陸、したがつて死ぬには及ぶまい。」「何と仰有る」驚く。津の戸の話によると、父が浪人してゐた時の妹。天眼通にて此家にゐるを知つたり。それに同姓同血あつては仙術を行ふに妨げあり。今妹を打つたれば三千世界に津の戸が血脈たち切つて我一体千變萬化。これ

とても源家の行末武運を祈る忠義の首、打とりし心の中、ア、不便や」といふ。〔大分著しい忠義だが〕このあとを手つとり早く言ふと、さつきの左衛門の郎黨と見えた兵藤太、——關所切手を提つて駈け出した彼、實は海存の分身で、切手手に入れば用ずみ、その形は炎と水とで消える。江田が、常陸の追善のため出家しようとするのを止めて、「近く衣川にて合戰あらん、急ぎ彼地に馳向ひ忠死あることこそ武士の本意」と、さつきの切手を渡す。源藏、靜、後室、奥へ入る。アト左衛門大勢軍兵つれて押しよせる。海存、術にて撃退。左衛門悶絶する。ト宙より大のかいなぬつと出で、左衛門を二つに引さく。これ凡て海存の仙術也。浮るゝ帋のごとく段切幕。

〔以上でやつと、第一だけな終つた。辿りも書いてゐると、容易に要が摘めなくて、やりきれない。たうとうこれだけの丁數。根が、出を作り放題だから、模様だけでも並ではない。これな思ふと、「一見たまく」の筆者は、餘程手馴れたものだ。今更作ら感服した。さて、此の第一、卷中の挿畫図あり。「春薫宮樫に宿を乞ふ」のヒラキ。「後室岩倉局なさつけ義經な諫言す」のヒラキ。「春薫安宅に源藏の死をとゞむ」のヒラキ。但しこの一圖は門人重成畫とあり。夫に、雲中、大賊・常陸の闘を引つ攫み居る圖。これは一丁表。この圖である、自分が子供の時分から瑰奇と奇怪に驚かされてゐるといふのは。〕

〔尚、第二で、自分の氣のついたことは、義經千本櫻と共通つた點のあることである。即ち川連とお里、及び佛誓。義經と常陸、及び靜と、お情ならぬお情にあづかる點、よく似たり。殊に、權太と三郎も似たれ共、共に見である。唯男女三角關係に於て著しいものがあらう。〕

□卷之第二

吉野山麓、文吉宅の場

（以下略々筋とする。）

安督——文内の姉娘である——。嘗て京にゐた時、浪人の源氏方木村源藏なるものと逃げ、その後子供を設けて、今度母子二人で親許のこの吉野へ舞ひ戻つて來てゐる。親爺の文六は強慾面、安督を女郎に叩き賣らうと折檻する。そこへ「梶原さまのお先手の荷もつをつけた」馬子の万平（妹娘の情夫菊王である。其の實江間義時）が來かゝり、十兩出して急場を救ふ。万平の話の中に、景時が、賴朝と一しよに、吉野の藏王權現へ參詣に、追つつけ來るといふことが知れる。（現に、此の文内宅の碁會所が、休息所に宛てられてゐると見えて、門口に碁將棊會合所、能き所に梶原平三休足所と高札を立てゝゐる。）ト京の簪屋の親方が、妹娘の誰袖をつれて親許へ遊擬に來る。誰袖に平家客の間夫があつて、それが爲欠落するやら、一向やくたいもない。それで今日連れて來た。サア立銀じや請け取らうぞと責めたてる。ト馬子の貫八（これも梶原に雇れてゐる。實は佐藤忠信。安督の情夫。）が現れて、十兩を出す。それで年季證文を取りあげる。アト、文内と貫八と万平、姉妹の二人とで巴になる。聟爭ひになる。男二人は共に十兩づゝ娘の危難を救うてゐる。それが万平は誰袖、貫八は安督と一對であるべきものが、作者の細工はこゝにあるのか、貫八は十兩の相手の妹娘誰袖に、万平は年季證文支辨の安督に殊更しなだれかゝる。娘は娘で、互ひに人の相手の男をそれと氣がつく。お互ひ、男が心變りしたものと思うて、ひがむ、嫉む。娘二人に聟二人、文内もその選定に弱りきる。ト兩雄（菊王——万平と忠信——貫八）は碁を打つて、聟を決めようとする。勝負半ばに代官が來て、「梶原樣俄かに今宵一宿。人よせはならぬ程にどいつこいつも早くぼい出せ」。文内はよきしほ。貫八、万平遊々立去る。アト文内と娘二人。そこへ村の歩きが、繪圖二枚を持ち來る。四郎兵衛忠信平家の落人菊王丸との人相書である。文内に、此の歩きと更に庄屋の所へ行くと　アトの娘二人は、互ひにちがつた男の繪を一枚づゝ持つて二

人が見合せ、互ひにそれと氣がつく。さうして双方・他の一人を密告して、その恩賞で自分の夫は助けたい氣になる。姉妹とも、心を探りあつて、口爭ひ。「此の繪がほしかろかな」「お前もこの繪がほしかろがな」。二人ながら「ほしうはない」と負惜む。二人奥と納戸へ入る。文内立ち歸り、我家の首尾を窺ひ、獨りのみ込み忍び入る。安督、子供の峰松の手を引いて立ち出でる。峯松、叔母(誰袖)の持つてゐた繪がほしいといふ。安督、逆に自分の手にある繪(誰袖の夫菊王を描いたもの)を持たして、庄屋に訴人さす。アトへ忠信(實八)來る。菊王も現れる。互ひに相手の首を取つて、その賞に梶原に近より、更に賴朝をも圖らんと企てる。結句二人とも切り結ぶ。そこへ文内あらはれ、「二人の命果さずとも仇を討つ思案がある」と、求めて二人の刄に刺される。兩雄驚く。兩二人も鎮りつゝ。文内遺書を安督に讀ます。それによると、文内は知盛の遺臣といふのである。強慾非道と見せかけたのも平家再興の軍用金。「婿殿、俺が義心をついで賴朝を討つて下され。忠信は此の文内の首を持つて梶原に近より本意を遂げ、此の場の勝負はこれきりに、菊王丸の力となり共に仇(賴朝)を討つて下され。」といひおいて死に入る。アト、菊王と忠信・源平一致で和解。で 、双方の手に主君より預つた、菊王は、大内より源家に賜はる大將の印、義朝滅んで平家に傳へ我主人教經より預つたるものなれどもといふて忠信に渡す。忠信は、平の維盛へ内裏より下された軍勢催促諭軍の印、時忠より義經公へ、更にわれの預れるものなれどもと、それを菊王に渡す。菊王「我は用意」と奥に入る。折から軍勢遠よせ。處へ阿呆の仁太郎(こいつは、誰袖に賴れて、姉の夫忠信を密告した者である)來り、「褒美に何ぞうまいものおくれんか」といふ。そこで遠よせは、互ひに二人の夫を捕縛の爲とわかる。(菊王は、既に安督の伜峰松が密告してゐるからである。)安督、誰袖もろともに面目なさに自害を圖り、來迎る峰松に、一庄は殿で逢うたけれど、そこへ大勢大將人形が來て、坊をぶん抱かへてどこへやらつれていたわいなア」と阿呆の仁太郎がおか

すゝ結局人質さらつたのであらう。忠信「女の猿智惠」と怒りに怒る。「あんまり怒つてゐるからこの峰松には譯がわからぬ」「いつ」大將黑綱晋軍兵大勢來かゝり「忠信隱れぬる由慥かに聞く。叶はぬ所腹を切れと いかに〳〵」忠信、碁盤を操つて奮戰。又もよせ來る討手の大將江間義時「ヤア四郎兵衞忠信。わが父北條四郎時政直に逢うて尋ね問ふべき仔細あり、召し具しまゐれとの命によつて、迎ひに來た。いざ用意せよ」忠信それが菊王であることに驚くと、義時「源家を狙ふ菊王は早先だつて擒め取つた。父時政の斗らひで、某郎へ紛れ入り、菊王丸が姿に似せ、我畫姿を寫させしも平家の殘黨一つにはわ主が在家を知らん爲父時政の御計略だ」といふ。結句、義經公の罪なき樣子を父に言上させんために、お身を捕へるのだ」といふ。これを聞いてゐた誰袖は、菊王と江間と分つて、愈々姉と姉婿忠信に相すまず、がばと臥に伏す。一と間より賴朝と稱した平政子、梶原が名代土肥次郎が女房の卷絹も現れる。峰松を引き連れ居る。小四郎「あれ見よ、お傍に仕ゆる峰松、重罪たりとも咎を赦す。訴人の功には義時が命にかへて申上げ名將の御胤を永く傳へん心ざし」と來た。即ち峰松は義經の胤である、結局義時の養子ときまる。忠信、黒髪に斷られ、召捕られる。安督は尼となる。

□卷之第三

鶴が岡の松原

靜が捕はれて賴朝の面前にひかれて來る。こゝへ義經の首が、衣川の合戰後、奧州より到着、其の含み狀を披露する。アト八十五人の諸侯が、梶原の讒奸を憎んで、賴朝に景時の死を乞ふ件にて幕。

〔第三は、さしたる山もなく、普通に筋を運んで居る。以下第四以後は波瀾重疊、迚も息つぎをしなければやり切れない。正三の脚色の寃手、寧ろ奇手はこれからである。さ大きな提灯を持つて姑らく筆を擱く。〕

賣比丘尼考補遺

その後、「賣比丘尼考」の補遺として、偶然左の三項を發見した。尙、此類多からう、既載所引のものと重複のものもあれど、面白き珍資料もあれば特に、登載しておく。所據の本凡て別に珍しくもなけれど、一括通覽の便を計らひての事である。比丘尼の細腰については、鳶魚氏著「新小説」所載「細腰の研究」なる一文にくはし。

〇色比丘尼　比丘尼は女僧なり。異名を髮長といふは、齋宮の忌詞に僧を髮長と稱し、尼を女髮長と稱すとあるに本づきたるにや。尤も衣を着て佛道を修行すべき身の、いかなれば邪行の戒を破て、婬を賣ることを活業とするや。業も清女がいひけん木のはしの類なれば、丸太と呼ぶも宜なり。されば都といへど、比丘尼のさまは法氣つきて、可怜からず、伊勢の間の野原朝熊の比丘尼も、職人盡の繪を見る心地して愛なし。況んや遠州繩手の比丘尼に、さながら花子に等し。今は昔になりぬ、神田安宅よりねり出る折腰歩の風流なる、楚王に見せなば六宮細腰なしと歎足したまふべし。思出や八官町の桃に落る三縁山の七に、鐘のなからん里もがなとかこち、和泉町のきぬ〴〵をそふ阪大王の壁に、鳥はものかはとわびけんも夢なりや。昔見し其面影も渚に遊ぶ蜑の子ならで蜆の窓より顏さし出し、小歌つたふもはしたなく、蛤辨慶の名にしおふ顏の色も、雪のふる日にはいとゞ愛なし。柿本太夫が、夕越ければさ侘けん、川風寒く千鳥鳴なる橋の袂に、軒を比し暖簾の内より、ゆきゝの人を喚子鳥、おぼつかなくも立よる亡魂が、短き藺筵の夢に五十の濁目を算しあへず縮ひきちぎつてやるも、流石に物の哀もこれよりぞしるさ、住成領の昔の葉もおもひ出られて可笑し。〔艷の色卷上（近世文藝叢書第十風俗）〕

〇大橋　新大橋西廣場なりとぞ〔寶鹿子〕按、新大橋袂チヨンノマコロリ此淨土の風俗、頭に黒き頭巾を戴き、衣裳は常の[illegible]、

其形佛體なり。マツシ／＼と呼ぶ事頻なり〔遊里花〕上大橋端詰、濡事を見て心わるい海士〔蜘の糸巻〕大橋（[illegible]）町下〔好色訓蒙圖彙〕（[illegible]に載る圖北丘尼[illegible]）比丘尼々々いざ事問ん、歯は白うして頭の黒きはこれなん丸太船、貫へ定めず色をうり歩行く。昔を聞けば妙法も手まだうし、阿爺もたず魚くはず、寺参りに疎き家業なかさま、談義も説法も耳にとまらぬ女通に、地獄極樂の繪をかけて繪解して聞かせ、老の坂登れば下る常ならぬ世の常を示して、心なきにも泪をこぼさせ、いとも殊勝に有けらし。いつの頃よりか繪は水晶を歎き、眉細く墨を引き、黒い帽子もおもはくらしくかつぎて、加賀笠にばら緒の雪駄、小唄をよすがにして、勧進と云ふしほの目もさにわけをほのめかせ、六尺中間が思ひ種となる。帽子さりて枕したる頭つきは、西瓜のはけたるにいきうつしなれど、なづむ上からは吉野の春、高尾の秋と目もあやなり。夜の逢瀬は仲間の堅い法度にて、おてきさなれば我方へつぼ入りさする。酒のまぜ茶飲する宿茶屋に替る事なし。勤に事かゝさぬ比丘尼は、紙も相應につかひ、鬢齋も色白なり、衆生に縁薄き御方は、揚錢も定まらず、はりもいきぢも沙汰なし。安い物は錢失ひ、いやな虫を置土産にしつゝく、跡にては何ぞが見えぬと云はぬ事なし。〔びくに人せりふ〕時にこつちの宗體は、つむりの頭巾は富士の八葉を表し、かんざし月の光をかす、帶は虚空の一圓絲、下駄は九品の蓮華を踏み、文臺は世の布施物を保ち、流れ盡きせぬ相泉町は、昔のえにし千束の文を、白壁町と客が無理云ふは、せまいと口舌に安宅の中直り、云ひ拔け間に合ひ繩茶屋、男を神田の多町と伏せうと、涅槃の床は是こそ蜻蛉の八官町、世間をさんさ丸太船。〔華里通娟言〕比丘尼國（[illegible]）と入物毛なし。天竺の風俗に近し。佛法を信じて、勧進を業にする。但し此國晝ありて夜なし。大熱國にて、寶を放さす。接に此國の人往々小船に棹さして、深川の大船の間に遊て、船中の旅客をたぶらかし、巾着の底をはたかしむ。或は鄙陽駿臺の諸邪に漂流して赤坂奴のへそくり錢を奪ふ。土産、頭巾（天竺道具）、文臺（臺にあらず箱なり、米と錢とを入れて上下の口を[illegible]）（[illegible]）びんざさら、黒米飯（細腰を好む故に飯の食へざるやうにす、楚王細腰を好むて餓死）有國の產物なり。〔**かくれざと下巻**（近世文藝叢書十二[illegible]）〕

〇びくに　　神田へんにて比丘尼が二三人行逢ひて、つれ立はなして行くを聞くに、「けふはつちやら、通り町で、ゐゝ女を見やした。ソレかノ＼とんだきりようでの、島ちりの小袖に紫うらを付けての、帶は黒繻子の幅廣を路考にむすんでの、そして髪はさいふて手をあげ、「わが身でなし深川はんださ。」〔**聞上手**（小咄十[illegible]）〕

大正十三年六月二十七日印刷
大正十三年七月一日發行

第二十二冊 （毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十二冊

本文

「好色むらく坊」首卷と作者桃隣

「婚姻男子訓」から

都々逸と浮れ歌に就て

都々逸と浮れ歌に就て

下川浩造

「江戸軟派研究」第二十一冊に掲げられました飯島さんの「都々一一家言」は、都々逸研究上、有益な記事として嬉しく拝見致しました。それにつけ二三思ひ浮んだ事がありますので左に記しまして御一粲に供します。「私は浮れ節といふ特殊の節があつたり又はそれが都々逸の別稱であつたらうとは思はない」といふ一節があの中にありましたが、あれは今少し飯島さんの御說明が足りないやうな氣がします。私は只今「情歌花言集」（よしこのはなことしうと讀ませてゐます）といふ本を藏してゐますが、これは慶應二年の刊本でありまして當時流行の「よし此」の高点を、一荷堂半水といふ「よしこの」の宗匠が撰集したものです巻頭に撰者の自序がありまして、「（前略）されば此浮れ歌は雅俗に通じておぼれやすき色にまよはず得がたき戀のなさけを語る云々」とあります。それから其の次の頁には、席亭か料亭からしい家の入口を、藝者と大盡風の男とそれに供人が伴つて、今しも家に這入らうとする所を示し、入口にはビラが懸つてゐる繪があります。そのビラには「戀情」と割書きしまして其の下に大きく「有嘉麗……」（以下文字不明なるも第一字は歌であらう）と書き、其の右の傍に一段高く「當日於當席開巻……（文字不明）催」とあります。其の繪の裏の頁が「浮連歌開巻之圖」と說明書きをした、今の歌澤の例會でも見るやうに、高座で一人は唄ひ一人は三味を彈いてゐる繪が描いてあります。この本のこれ等の「浮れ歌」の意は、どうしても「よしこの」を指して云つてゐると思ふより外に意の取りやうが無いやうですが、どんなものでせう。飯島さんの御一考を煩します。但し此の本は大阪心齋橋河内屋佐助板でありまして、大阪では「よしこの」が一名「浮れ歌」で慣用されてゐても、江戸で都々逸が「浮れ歌」で通つて居たかどうかは知りませぬ。

それから都々逸の名稱の話ですが、私は矢張り「よしこの」同樣に、その囃子詞から出たのでは無いかと思ひます。佐々醒雪博士も其の著「俗曲評釋」に於て同じ事を云つて居られますし、現に假名垣魯文の「都々逸古今馬鹿集」の序に「どうでもよしこの、どゝいつ〱井鉢やういた〱。と唱へしにより、一によしこの節、のち都々逸節といひ習はしける」とあり、天保板「娘節用」後篇上巻にも都々逸をうたふ條がありまして「どゝいつどい〱、なだべて、ちやら〱、どんぶり鉢あらいた〱」といふ囃子詞が用ひられて居ます。爲永物などを調べたら、まだ此の外にいろ〱例證が見付かると思ひます。

私は今、若木清卿の萬葉俚歌集（古歌略解註釋入）と續古今俚歌集を探して居ます。古今俚歌集は手に入れる事が出來ましたが二枚落丁がありますので、完本御所持の方は御一報を願へませんでせうか。（福岡縣八女郡羽犬塚町）

都々一一家言（承前）

飯島花月

又、索々道人記の一節に、

此歌（どゝいつ）根元は知らざれども古く尾張の厚田の傀儡ドドイツとて皆謠へる亂の囃しにドドイツ〱浮世はサク〱と折返しはやしことを我れ稚き小耳に挾みて云々。とある事や、前記道行文句中のどゞいつ

ういていたこも名古屋とかはりそしてどゞいつ鈍なしやれ

とある名古屋節がどゞいつに變じたといふらしい意味から考へて、ドドイツの起原果して名古屋に在りとしたら、宜しく名古屋市人の誇として研究して頂きたいと思ふ。

拙著都々逸考（明治四十三年內外出版協會發行）は今から考へれば頗る杜撰極まるもので汗の出る樣だが多少の參考には成らうと思ふ。それに出てゐる事はこゝには概

（裏表紙ウラへ）

『好色むらく坊』首卷と作者桃隣

本著の冒頭に掲げた「元祿板「好色むらく坊」解題」の補遺と名づくべきものである。天下は廣い、かうなると珍本も左程珍本らしくなくなる。最近自分はその首卷を見る機會を得たからである。此の首卷、本著愛讀家の一藤倉潜吉氏（下谷區）の好意に依る。氏の手紙——首卷を所藏される由の——に接したのは大分以前である。最近自分は急に此の補遺、並に自家寫本の要を思ひ立つて、貸覽を依頼に及んだ。さうして速かに貸與の好意に與つたのである。此の欣びを數人共に頒ちたいと、急遽此の執筆となつた次第である。

貸與に與かつた首卷も、自分所藏の第五と同じく、表紙外題は不明である。この首卷の分は、元表紙がついてはゐるが、それが表面が殆ど剝がれてしまつてゐて、唯綴目の所に、くすんだ青の色を殘してゐるのみである。青表紙との類推に付くのか、外題等は不明である。初めに、序が（序と銘記はされてゐない）一丁ある。

呂望が。空鉤の点爆釣に。鱸魚をまふけ。屈原が。江潭に叔を携て。海鼠ねらふ賢意地。倣上戸とやいわむ。唯堅く和なきは。石に似て。しかも鮓の壓石にも用かたし。丸く柔なるを。雞卵の國風と称。身は色上戸の辛口いふも、笑上戸のそしりをかへりみず。風の朝に紅葉を

あつめ。雺の夕間鍋を焙て。楢柴の菴寥々と居たるに。一人の美僧來りて。十二の色を語る。是心の垢を洗たねと。兎毫（本ノマヽ）に留内に。東雲風に額墮。矮鷄の聲。茅檐の下に東天光

桃　林　堂［印］

以上が一丁の表裏、全十三行全幅にある。（最後の關防の印は、文字白ヌキ）次に、左の目錄が一丁表裏に亘つてある。

目　錄

第一　利生有原の天神
第二　わけあるらく隱居
第三　濡て氣味よき雨宿
第四　色は人しらぬ貧樂寺
第五　裸酒もり持合の肴
第六　鈴虫は後家の中立
第七　恩はあだし密夫
第八　嶋原の花吉野が情

第　九　ちらぬまに折鳥邊の花

第　十　しぐれのくされ緣

第十一　草枕うつゝの小町

第十二　妹背の千人きり

とあつて、第三丁目より 第一 利生有原の天神、第二 わけあるらく隱居、第三 濡て氣味よき雨宿の三篇が收められてゐる。繪は各篇ヒラキ一丁づゝ、計三圖。なる程、師宣が鳥居淸信かといふ所である。が恐らく鳥居庄兵衞（淸信）であらう。〔最近、同じく桃の林の作たる大福帳（元祿十年板）が鳥居庄兵衞畫たることを知つた。即ち稀書珍本全集刊行會の同刊行目錄に、これが闕記を見たのである〕さて、この目錄は、全五卷の目錄である。各卷にいかに之を分つたか。明瞭であるのは、首卷と第五卷（自分所藏）のみである。即ち一より三までは第一卷。第十一と第十二とは本著既載の如く第五卷所收の項である。即ち第四より第十までの各篇が、第二、第三、第四の三卷に分けられてゐることになる。

以下、「むらく坊」首卷の本文である。

第一　利生有原天神

〔迚も全篇紹介は、遺憾ながら好色本の性質上不可能である事を諒せられたい。西鶴本以上に猥雜なる描寫が一篇の山となり居るからである。〕

はじめの全文を、或る程度まで引いてみる。

入がむらく坊となつたもの丶、いまだ煩惱截ちきれず、再び凡体に還さしめ給へと、好色道の神業平天神に祈念するのである。〔陽物を作藏と稱した古文獻の一でもある。尚外骨氏の日本擬人名辭書中には、作藏を天和より明和までの淫書に此語を多く使用せりといへり。〕でこの文のアト、何うしたかといふに、業平天神いはく、「汝、好色の世をすてぬるといへども、ふたゝびさい合のたねを祈ることそ不聽なれ。われ神通の眺を以て三界を見るに、」事が大げさである。三界を見るにと來た。さうして、以下の敍述は稍顰蹙すべきものである。即ち概略をいふと、今の世は、孩兒より大人にいたるまですべて好色に耽り、六味八味の地黄丸、牛蒡卵の德を味はへ、若者といへども持ち料を粗略にするものなし。よりてさるに仍りて、汝に與ふべき□□なしといふのである。（以下原文のまゝ）「しかれども汝が念ぐわんを無にせんことも心うし。こゝに、我が寶物のひとつ、すきびたいの赤烏帽子有り。これを汝に與ふる也。この烏帽子かぶりなば、汝が姿を見る者あるべからず。これより山城の國へ赴きなば、汝に緣ふかき女あるべし。此女に逢ふならば、念願成就すべし。されば此の烏帽子をかぶりて、心に任せ、ぬれの家に忍びて、秘計を見物し娛しむべしと、御手づから法師が頭（かしら）へ烏帽子をひきかぶせ給ふとおぼえて、むらく打驚きかしらをさぐりて見れば、朱塗にしたる左折（ひだりをり）の烏帽子に紫の紐を付けて與へ給ふ。さては念願叶ひたるよと、ありがたく思ひ、御堂を禮拜して、後に負ひたる風呂敷包の内より、一つの錢とり出し、太夫薄雲が黑髮、格子小ゑたに貰ひたる伽羅の香箱、並びに局（つぼね）若松が誓紙三枚、百遣の三よしがおくせし□さうし、散茶初瀨が縫ひたる服紗に包み神前に獻げて、三度禮拜し、赤烏帽子を背負ひて、急ぎ庵にかへりて、それより都へとこゝろざし、旅の

用意する程こそあれ、先づ三里の灸五ッ火牟、ひとつある飯釜に、つぶれたる小藥鑵、口の欠けたる擂鉢、かれこれとりあつめて、總路銀となし、あけむつの鐘ともろとも、あさぢの庵をぞ立出ける。」といふのである。これで第一は終つてゐる。

〔この圖、天神社内に、業平に對面の圖を挿めり。築地のうしろの、竹むらなど、極めて雅致に富む。〕

第二、わけ有らく隱居

「さるほどに夢樂坊は、都へと足をつまだつるに、けふははや駿河の府中に着きける。日もくれかゝりければ、かしこに宿を借りて、休みいたりけるが、此家の裏に家居つき〴〵しく、白壁付きたる土藏あまた立てならべ、からうす踏む男の、今めかしく、與作ぶしうたふもいとをかしく、塀の透よりさし覗けば、隱居とおぼしくて、表屋にひき放れて、家造り美をつくし、庭には秋の草花、さま〴〵咲きみだれ、人おともせずいと靜なるてい、心床しく、赤烏帽子を眉深にかぶりて、ひそかにしのび入てみれば、南表の欄干に、紅の蒲團うちしき、とし比廿四五なる女、綠の髮、中より切りたるを、しどけなく結びて、白小袖に淺黄の一重帶して、脇息に凭れゐたる、顏天人の此土へ店換へしたるやと、築山のかげより、目もはなさず守りゐたるに、内より、十六七の若衆座頭、三味せんを手にさげ、かの女の御傍へさぐり寄、今迄女房しゆに唄を望まれ、表に居りましてといふ〳〵、三味せん調べけるを、かの女、いや三味せんは、後にきかう（下　略）」（以上原文）

〔恰かもこゝに、後家と座頭、庭より見るむらくの此の圖ヒラキを挿む。〕で、むらく、赤烏帽子の有難味を發揮することになる。（中略）むらく、「ぬき足して、もとの宿に歸り、夜明けて馬借りし男に、かの家を尋ねければ、それこそ福田屋といふ米屋。三人目の亭主も、去年の春□□して世を去りぬ。後家の齢は二十五ひのへむまの年。世にまたとない色好み。もはや夫の望なく、弟の介八に家を讓り、その身は裏に隱居を構へ、金ずくめの男狂ひ、氣に入りたる手代どもは、□□□□□□□、其上に家を買うて貰ひ、思はぬもとでを儲くること、幾人といふ數を知らず。さるによつて男よく、□□□□□□なるものは、馬方米搗によらず、俄かに家やしきを求めて、新店を出す事、みな此後家のなさけなりと語りし」（以上原文）といふのである。むらく好色透見の第一の收獲といふものである。

第二、濡て氣味能雨宿

「秋の日短かしといへども、昨日十二里けふ□（原本虫）十里、休む内に、日が暮れば、野にねる迄と無理をさめに行けば、戻り馬有り。むらく坊、これこそあれと思ひ、なるみ（鳴海）まで其馬貸せといへば、馬子幾らでといふもをかしく、しかじか値段して、やがて鞍壷にのり直れば、馬方競ひ面して追ふ程に、つゐ（ひ）鳴海の宿に着き、とある家に宿借りけるに、十七八の娘、茶をもち來り御僧さまはまだお若うて、お一人旅、おいとしやと何となく、したるきしかけ□（原本虫）で、むらく心にくゝ思ひ、樣子を問へば、亭主は聊かの用有りて、昨日京へ立たれまして、わたくしと妹を留

守に殘し、屋内からげて上下四人、別に御氣遣ひなことは御ざりませぬ。かつてへ御座りまして、お茶をまゐりませなど、しどけなき口上に、やがて勝手へ通りける。されば妹も姉に劣らぬ品もの、みる目もあやに、名を問へば、姉はおしも、妹はおゆきと云ふに、天から降つたかと、見たも理と云へば、おしもうち笑ひ、私は十九、妹は十七、いまだ殿とやらも持たいで居りますと、尋ねぬことまで物語して。ゐたる所に、「御亭主、内にかと入り來るを見れば、これも旅裝束、はなやか成る笠とりたるを見るに、色白く鼻筋通り、年比二十斗の男なり。おしも出迎ひ、「どなた樣か」といへば、「わたくしは勢州松坂の者にて、杉山三之丞と申ます」といへば、おしも打うなづき、「いかにも御噂は、かねておやぢも申されまして、とゝ樣お心易い段は存じて居ります。幸ひ旅の御借にもお宿いたしました。これへお通り」といふや否や、お茶の洗足の□(原本虫)ことすみ、すでに盃はじまり、おしも□□□(原本虫)「われ〳〵は、亭主むすめ、おしも。妹はおゆきと申します。とゝ樣留守にて候へども、われ〳〵御馳走いたしませう。ゆる〳〵と御休みあれかし」と、しか〴〵のとり合。ことゝ終りてむつく坊、もろとも打まじり、さしつさゝれつする程こそあれ、夜も更け過る比なりければ、おしも云ふやう、御くたびれあらむに、もはや御休みと、上の間に床をとらせ、兩人を(?)休ませ、はらからの娘は、奧の間に入りける。その夜は、雨つよく降り、いとさびしく、かまふだいの仁兵衛は、年の氣やら、寸白起り二疊敷の部屋にいびきまじりの高鼾り、飯焚とも乳母ともたゞひとりのお福は、わかしざましの酒にゑひ□□(原本虫)、寢言いふやら齒ぎしりするやら、前後知らぬ夜半に成りて、雨は一しほ強く

降りて、もの音も聞かぬ程也。むらく坊は、宵の酒まだ醒めやらで、ねいらでゐたりしが、おしもが三之丞との目喰わせ、下心(したごころ)にくらしく、狸ね入りして聞きゐたるに、案の如くおしもは手燭とぼし、」(中略)〔このところに、おしも手燭を持ちて來かゝる圖を挿む。〕以下おしも三之丞の出會ひ。なほ三之丞がお雪が閨にいたる事。さて、「しのゝめの空明けわたりければ、(中略)むらく坊(略)起き出で、旅の仕度して、二人の娘三之丞にも、しば〳〵暇乞ひて、宿を出で、都へと急ぐ心の内にも、跡にのこりし三之丞がしあはせ、思ひやるにも、さりとは〳〵。

初　巻　終」　(以上、序文とも全丁數十九。)

以上で、第一、第二、第三は終りを告げてゐる。第二巻より第四巻にいたる闕如が惜みである。嘗て、第五巻の解説當時にも述べた如く、西鶴などに比べては遙かに劣る此の筆路、且つ着想。但し江戸板好色本の一種として、而かも江戸板としては最初期に屬するもの。當時江戸人は、西鶴物の江戸再板物(一代男の江戸板行は貞享四年正月)等と共に、此の創作等をも耽讀したらう。從つて此の幼稚さ、間ぬけさ加減、西鶴に比べて更なる露骨さ加減が(洗練されざるといふ)當時の江戸人の文學心の具現であらうと見らるゝ所に、甚だ興味があり、此の點から此の閲本ながら「むらく坊」の首尾二巻は、とんだめつけ物であらうと、自分密かに思ふのである。

○

次に以前に、發見した(氣付いた)ことであるが、序でであるから、こゝに附記しておかう。

此の「むらく坊」は、「浮世榮華一代男」（國書刊行會「江戸時代文藝資料」第五に所收。）の摸倣ならずやとてつきり惟はるゝことである。榮華一代男は、西鶴の一代男（天和二年大阪初版、貞享四年江戸覆刻。）の景氣に煽られて生れた類作、貞享年間（日本小說年表は貞享四年とする。）、初名、好色四季咄として出でた。後、元祿六年に、浮世榮華一代男と改題した。（同十一年には、好色構忍記。正德三年には、浮世花鳥風月と改めた。）一代男を摸倣し乍らも、隱れ笠の趣向から一機軸を出してゐる作である。（但しこの隱れ笠、隱れ簑の趣向は、古くから日本化した俗說であつたことは、謂ふまでもない。保元物語、爲朝鬼ヶ島のくだりにも見え、梅園日記にも、經律異相に、百喩經卷上にもいへる事を述べたりと。但し隱形術と此等にあるを、「隱簑、隱笠にかへたり」云々というてある。）その隱れ笠とこの「むらく」の隱れ烏帽子と、彼此相似たり、且つ榮華一代男も業平の祠に詣づとある點、「むらく」を榮華一代男の摸倣かといふのである。即ち、一は元祿六年の再板。この「むらく」は元祿八年正月板。即ち先蹤を彼なりと斷ずるは、「むらく」作者たる桃林堂も言句あるまい。左に、榮華一代男の冒頭を摘載してみよう。（榮華一代男は、花鳥、風、月四卷あり、各卷四章あり。即ち全四卷十六章である。隱笠は、花の卷一の一、花笠は忍びの種の中にある。）

「（前略）淺草寺に參詣ける。（中略）此の木陰に、昔男業平の面影を社にこめおかれ、是陰陽の神とて、宮（色？）を好める人は殊更に祈りける。彼男此やしろに百日の大願、我一度び心に任する宮（色）道の榮華を授け給はれ、誰をさして戀の相手はなし。唯天道次第と骨髓拋つて願ひかけしに、此神も祈りつめられ、難儀のあまりに、夜更物の淋しく、松の風靜かなる時いたりて、枕がみに立せ給ひ、あらたなる御告、夢事にも忘れざりき。汝が身に應ぜざる願ひ叶ひ難し。前生にして滿更の戀知らず、此道にもさづける程なければ、神のまゝにもならざり。然れども已れ深く歎くも痛まし。是を與へぬるぞと、金銀珠玉をちりばめし花笠をわたし給ひ、已れに具はらぬ榮花なれば、耳に聞き目に見るより樂しみなしと御神託、覺めて常の曙とはなりぬ。肝に銘じてあり難く、此笠を

祓ば、忽ち外よりは見えぬ印あつて、是なん世の重寶と嬉しく、隱れ笠の忍之介と我と名を改め、けふよりは願ひのまゝと勇みて、諸國の戀づくしを見る事聞く事、其身にはつかざる事のよしなや。」

以下上方へ上り、色々見聞きする事あつて、伏見のある比丘尼と物語、「あるじの比丘尼は、けふよりは男にあはじと大誓文にて身固め給へば、忍之介に隱れ笠を讀み破り、塵も埃も心にかゝる事もなく、二たび東武に歸り、年たけかされて後、金龍山の土佛に成りけるとや。」で終を告げてゐる。〔此の著書一代男の番外、元祿六年正月、江戸版、外に大坂版、京三都合版である。〕唯「むらく」が、上方にのぼり、既掲第五卷の如く、姉背の千人斬あけて、爰出度しくの夫婦に終るとは、格段の差である。然し發端、並に、戀の見聞など頗る彼を倣ひたりと云ふべきであらうと思ふ。

○

最後に、作者桃林堂についてである。本著冒頭に既に謂へるが如く、桃林堂蝶麿、桃林堂、桃の林、桃隣堂、桃隣、林、紫石は凡て同一人であると信じられるが、然らば桃林堂即ち桃隣なりとすると、茲に臆斷とは強ちいへない私の發見がある。即ち芭蕉の弟子の一人に、桃隣なるものゝあることである。即ち元祿七閏五月三日の序ある「炭俵」の中に、〔この年十二月十二日、翁五十一にて歿。〕元祿十一年五月吉日の奥書ある「續猿蓑」の中に、此の桃隣の名と、及び其の作句を發見するのである。即ち芭蕉の桃青に因んで、與へられた弟子の名と惟はれ、且つ本記述にも載せたる「むらく坊」の序が、頗る俳文めいてゐるのも一證左であり、且つ好色本目錄中の種彥の「江戸の俳諧師にして伊勢の産にあらずや」にも頗る相吻合するからである　桃隣（桃林堂）の好色本試作

が、此の「むらく坊」の元祿八年板、「大福帳」の元祿十年板など、此の元祿中期に行はれてゐる、それに一方炭俵、續猿蓑もまた元祿七より同十一年である。この間頗る相聯絡ありと見たい。即ち桃隣彼は、芭蕉の江府に於ける門人にして、（伊勢の產なりを信ずると、芭蕉の出府以前よりの弟子でも知れない。）俳諧の座にも連り、傍ら當時流行の好色本をまねて、三四の創作があつた。西鶴の俳諧師出身なるに、自己も負けじとの張合心地があつたか、又は自然の相似か、とにかく、江戸の好色本作家として相當に名を有したと見るべきだらう。以上、唯この桃隣身もとのヒントだけに、今は姑らく止めておく。序でに炭俵、續猿蓑中の、桃隣の句を拾ひ書きしておかう。

鶯の聲に起きゆく雀かな□晝舟に乘るや伏見の桃の花□閏くまでは二階に寐たり郭公□五月迄ホすみかねるあやめかな□五月雨の色や淀川大和川□宮城野の萩や夏より秋の花□紺菊も色に呼出す九日かな□市中や木の葉も落すふし風□木枯の根にすがりつく檜皮かな

〔次に桃隣、野坡、利牛の三人の俳諧あり。野坡などゝ並び立つところ、桃隣もまた有數の士たりしならん。此俳諧略く。尙、最後に、杉風、芭蕉、利牛、野坡曾良等十三人一座の俳諧あり。中に桃隣四句ありとせり。此の俳諧略くと〕

〔以上炭俵〕□白桃や雫も落す水の色□菊の氣味ふかき境や藪の中〔以上續猿蓑〕

唯、炭俵と續猿蓑とのみに散見して、猿蓑其他になきは如何。翁晚年の弟子と見るべきか。

「婚姻男子訓」から

家藏に、「婚姻男子訓」といふのがある。硬いやうな、軟かいやうな本である。上下二冊の大本で、一冊序共約四十枚づゝの量。著者は、尾張津田義宗撰〔本文の冒頭には、尾張六合亭毓宗集說とある。毓宗とも書したものであらう〕とある。上卷表紙裏の扉にも、

此書は、古今先達の確言を集めて、繫緣の至要を記し、世間の人情に通じて、男子の妻を娶るに頼りある事をおしへ、末に至りてはむことなりて身を治め天然の壽を保つ肝要をしるす。

とある通り、男子本位に書かれてある。上梓は上卷凡例の末に、文化二年乙丑立春とある。なほ凡例の中に、「愚今年三十。故に三十歳迄のことは身に徹して發明すれば、愚言を附く。三十以上の事は推量りのみにして、未だ其塲に至らざれば不知」とある。即ち、津田氏三十歳の時の編纂であるにしては、相當に纏まつた著書である。尚凡例の最末に「此書高位高官の人の爲にも著はさず、牛馬を追ひ車をひく者の爲にも著はさず。唯農商中品の息男の用心に記すのみ云々」とある。極めて普通人的な立塲からといふのである。上下二卷の目錄をいふと、

上之卷（緣談大意　年月之事。夫婦離違之法則。男女相性之解並ニ丙午庚申之事。血脈の解。息男愼むべき條々。雜記。）

下之卷（女子見立る傳　婚姻之略傳。婿心得べき事。夫婦情之事、夫婦交接愼むべき事。）　以上十二篇

である。

下卷は、稍憚るべきこともあるから、今は上卷のみに就て、姑らく言はう。編纂であるから、篇中諸處に、故老の言や、他國人の言や、或は内外の典籍の中から、それに該當した言葉を拾ひ出し、またそれに就て編者の意見も添へてゐる。支那の物から引いてゐるのでは、周禮や小學が多い。其他、老醫曰とか、學醫曰とかいふのが多い。（老醫や學醫やは、編者の接見した人々であらう。）以下古典の拔截を除いて、此等の當時現存の人々の言や、愚言曰くの編者自身の言の中、面白く又價値ある物を成るべく、拾つてみよう。一に、當時、江戸末期文化初期に於ける庶民の婚姻方法、男性本位の女性觀家庭觀等が見えて、誠に面白い所のものである。

先づ一、「緣談大意」の面白い記事を拾はう。

○古老曰。唐土にては、同姓を娶るは、族を亂ると云ひて禁ずれども、我朝にては、親しきを重ぬるといひて、同姓相娶るなり。されば從弟より以下は、此を合せて妻夫とすさいへり。

第二は、「婚娵する年月の事」である。

○愚言。凡て城下津泊、驛宿此外繁華の地は、嫁娶の道早く、村里山家は晩し。

どういふ加減で、村里山家は晩かつたのか。古今正反對。此頃では却つて都會の方が晩婚のやうである。昔は、今の都會の如く、田舍の方が生活難を訴へたせゐではなからうか。

○近江國人曰。江州は、木本小谷の邊は、女の歳二十二三より三十迄に嫁入すと。

○曾屋曰。阿波國は城下といへども多くは十九二十に至りて、嫁づく。十四十五にして、緣に付くはひたすら稀なりといへり。

近江は極めて晩婚であるが、是れは近江國人が世間傳稱の如く、理財の念強く、働けるだけ女子をして家に居らしめたせゐではなからうか。阿波の十九二十は、南國のせゐもあつたらうが、今から思へば普通の年齡である。然し編者の耳には、普通よりも早しと聞かれたのではなからうか。

○老翁曰、凡吉事を表するには、春夏に執行ふべし。百事育てめぐむの意あり。秋冬にはなすべからず。百事廢して末を遂げぬ意なり。又日を定むるにも上、十五日の間を吉とすといへり。

○恩田仲任（本卷の序文執筆者）曰。和漢とも納采には朝を用ひ、入輿には夕を用ゆ。婚は昏時行ふよりの名にして、陽去陰來の義を表するのみと見えたりとぞ。

○山家人曰。我里の邊は、嫁入はみな白齒なりといへり。

以上は、婚姻の月次、時間の解說である。

第三、夫婦齡違の法則では、

○愚言曰。二三違ひは、嫁の姿年老に見えて釣合よろしからず。十四五違は、婿の姿年老に見えて、是亦よろしからず。七ッ八ッ違ひ可なり。子ありて後恰好の至極なるは、十年違ひなり。云々。

第四の男女相性云々は、餘りに時代錯誤が甚しいから、一般には興味がなからうと、一切省くことにした。

第五は、血脈の事である。癩病の話であるが、當時の癩病觀としても面白い、殊に玄醫曰くの如きは、當今の學說の如く、癩病は遺傳ならずして黴菌の傳染作用であることを旣に道破してゐる。即ち、

○老醫曰、按に癩は、正しく外因ならず。血分の清濁によれり。（中略）此故に癩を病む人の子なりといへども、常に胎生卵生の物を不食。外邪傳淫の調護を失せざれば、則ち免るゝことを得て、そのうへ三世を經るうちには、自然と傳染の根を絕するの理あり。

○玄醫曰。癩は血筋清き家の人々といへども、新たに發ることあり。云々。

○一書曰。此病よく傍人に注ぎ染む。故に人と床を同じうすべからずと云々。

「婚姻男子訓」から

○學醫曰。右の如初めはみな外邪に侵され氣血凝滯して惡疾を起す也。然れどもそれよりは、血脈相承してもやむ也。………いかなる貴人といへども卒然として、感ずる事あり。云々。

最後の學醫曰では、傳染と遺傳と、兩つ乍ら之を認めてゐるやうである。

第六の息子愼むべき條々の中では、却々現代の青少年にも與へていゝやうなものもあるかと思へば、稍滑稽なものや、餘りに道學者めいたものもある。それ〲に引いてみよう。

○縁を需めんと思ふ三年も前よりは別して女色を愼むべし。尤も愛姿（かこひもの）すべからず、良縁を破するの理あり。

○嫁にする氣もなき娘に文などおくりて瑕つくべからず。

○他の愛姿に手さすべからず。但貢庇戀（かこひ）は女の方より賴をよらば、手さしても苦しからず。（親のもとにおきて、一ケ月に金一分もやるを貢庇戀といふ。）

○三味線、小唄、舞など上手なる子。又宮園豐後節など語る娘を曾て娶るべからず。

（餘分な事だが、これは、此時分名古屋あたりに豐後節の流れ宮園節が流行つてゐたことの文獻である。殊に三味線小唄、舞など上手なる女一切ならずとならば、名古屋は由來遊藝の地、上下流を通じて娘に三味線、小唄などを習はしめた。何處に習はざる、娶るによきものがあつたらうか。但し「上手」と特に斷つてはゐるが、この所は、稍當時の風尙に憤慨した道學家の口吻である。）

○遊女を請出して妻にすることいはずとも惡しき也。

○小借家住ひの娘の艶姿に愛でゝ取り上ぐべからず。大家を修むること成りがたきもの也。

○我が身はたとひ二度目なりとも、嫁は素娘がよし。新手の嫁は使ひよきもの也。

最後の言葉は、男性本位として、稍得手勝手な話である。然し男性からは、どち道斯うなくてはならぬのだらう。

○すべて人は身を蕩せば、放蕩に染み、身を慎めば、篤實に染まる物也。されば、宮園長唄を好けば、心淫亂に流れ、敵討をよめば、魂性悪くなり、奇談を好めば怪事に近づき、洒落本を好けば、懷輕くなる。老莊列淮南子の類を信ずれば、五常の正しきを輕んじて、放埒に流るゝも、皆我氣の侍せ所によるが故也。然れば書を讀むにも取捨あり。

○男子たる者、餘の事は稽古せずとも、孝經、論語、曲禮を學びて尊き敎を味はひ、晝夜身をはなすべからず。

最後の語は、無論編者一流の道學的口吻であるが、それだけ當時の商家の青少年が、滔々として遊藝に走つてゐたのであらう。前掲の、「宮園(豊後節の一派薗八節の派流、春太夫節とも云ひ男女痴情を哀切に唄つたもの。丁度新内と同樣よく似たもの)長唄を好けば云々」や、「洒落本を好けば云々」やは、寧ろ當時の市井の青年に、宮園を唸つたり、長唄の女師匠へ日參したり、洒落本を讀んで大通を氣取つてゐた者たちの多かつたことを傍證する所のものだ。殊に「洒落本を好けば」懷中が輕くなるとは、時弊を云ひ得て寸鐵妙々。以て洒落本などの軟文學や、宮園長唄などの俗曲の、當時尾州の城下にも歡迎されてゐたことがわかる。況して本元の江戶は、如何の狀であつたらう。本著の編者津田氏の言のないのが遺憾で

ある。

最後に第七、雜記の中から、一二を拔かう。

○或人曰。妾腹の子は必ず美麗なり。愛妾には美女を用ゆるが故也。

○鳥屋が曰く。然れども鳥類は、多く雄鳥に似る物なりといへり。

○老醫曰。女の年十四にして胎をなす者あり。而も其小兒必らず夭す。

○愚言。予が知る方にも娘の齡十二にして經水くだり、十三にして懷孕し出産ありて、其小兒程なく死たり。

○愚言。同年ぐらゐの女を嫁に入れるときは、後必ずお袋のやうになる也。心得べし。

○慈母曰。十四五歳の娘は、善朴（むほこ）にして、親達まかせになるもの也。十七八の娘ははやかれこれいふものなり。

此の慈母曰くは、昔でもかれこれといふ娘に手古擦つた母親の述懷である。今は一層の事であらう。

○花街（くるは）女見曰。禿のとき、剛氣（おほちやく）なる子がよき遊女になる也。叉してもほへる奴は善すぎて結句あかぬもの也。女房とは左右反也。といへり。（おほちやくは、名古屋地方の方言。剛情と亂暴と狡猾と放縱と色々に使ひ分ければならぬ。結句あかぬのあかぬは、駄目の意也。）

○愚言。此故に唯氣配のやさしき娘を見立て求むべし。さり乍ら他に育ちたる娘の氣質までは知れぬものなれば、其子の友だち或は縫物に行く家などにて聞合すべし。

以上で上卷は終つてゐる。略、その輪廓を紹介しえたと思うてゐる。通讀されて、諸君は案外、人情古今同一揆な事に、今更乍ら感じられたであらう。我等もその感なき能はぬのである。

大正十三年七月二十七日印刷
大正十三年八月一日發行

第二十三冊（毎月一回一日刊行）

文　本

俄、並に吉原俄考

一、京阪の俄―古代より―技巧化の濫觴―稱呼は大阪―語義―各種を生む―俄役者―江戸の茶番―京の俄。

二、吉原俄の起原と沿革―二說―享保十九年說―明和四年說―發生の動機―京阪の摸倣―九郎助稻荷と眞崎天神―中間說―吉原俄の完成―斷案と傍証―其後の吉原俄―要略―挿繪について。

都々一節一消息（湯朝竹山人）

尾崎久彌著

江戸軟派研究

第二十三冊

都々一節一消息

湯朝竹山人

貴誌に都々一節の記事が賑はひ私も一文を寄せたしと存候所、短文では蕊しかれ候ゆゑ遺憾ながらお約束にそむき恐ひとまり候それとも貴誌の全部をせめて一回だけにても都々一節研究のために提供くださらばまた思ひなほすべく候此頃整理候「都々一節文献一斑」は他日出版の目論見に候されぱその機會をお待ちくだされたく候。

都々一節の起源は既に今日までに明にされあり初代都々一坊扇歌のこともはや紹介濟みとぞんじをり候されば若しこれらの題目につき研究される人のために私ぞんじよりの範圍内において二三參考とすべき文献を紹介いたしたく候。

東北大學所藏「どゞいつぶし根元集」（寫本嘉永五年成珍文節老人著）が都々一節の起原を簡單ながら紹介致居候この寫本は嘗て狩野博士の家藏であり往年博士の他の藏書と共に同大學の所有となりし由傳聞いたしをり候。

幕末時代にも明治初期にも都々一節に就て價値の認むべき文献なしといふをはばからず候明治三十六年一月發行「風俗畫報」の「都々一節」及び同年八月の同誌に「都々一坊扇歌の墓」の二篇あり都々一節研究家に向つては空谷の跫音、啓蒙的紹介と認め候以上二篇は廣田星橋翁の執筆に候翁は默阿彌門下の出、風俗の研究家に候、翁は「都々一節根元集」は知りをられず候されど翁の記事は簡略なる根元集の紹介する所を一層明細に記述されたるの觀あり仍て私はその出典根據を糺し候ところ翁が嘗て名古屋へ旅行されたる時同地の一古老の直話を忠實に記述されたる由にて候而して根元集の記事が廣田翁の紹介を裏書し翁の記事が根元集の紹介するところを裏書し先づ大體に一致せり、既に斯の如き記錄の存することを知らぬ人ありそれら不案内の方へ一應紹介いたしたく候。

次で明治三十九年十一月發行「趣味」掲載谷の村人氏の「都々逸坊扇歌」、大正五年一月發行「邦樂」所載吉丸一昌氏の「都々逸節の紀念」の二篇は一讀に値し、而も如上二篇の紹介する所は重要の點において「根元集」の記事、廣田翁の記事を證明裏書きするものと認められ候。

幕末このかた都々一節についての文献枚擧にいとまなしされど信用するに足るものなし仍て都々一節の起原と初代扇歌とについて知らんと欲する人は先づ如上數篇を一讀するを捷徑とぞんじ候。

都々一節を稍近代的に研究せんとしたる人に今は故人なれど蜃氣樓主人岸上操氏あり明治二十二年の「新選歌曲集」（第一卷）の記事を見ても同氏の研究態度が髣髴として窺はれ候されど此も奥の院に本尊を直拜せず研究が根本に觸れをらず候齋藤隆三氏の「近世々相史」（明治四二年）の都々一記事の如きは氏の名を汚すもの、飯島花月氏の「都々逸及俗謠集」（同四三年）は當時出色と認め候が奥の院を飛び越えて遙か向ふの遠い世界の小唄に因はれたる傾きあり、佐々醒雪氏の「俗曲評釋小唄と端唄」（同四四年）は爲永春水の「梅暦」を根據とし事實とは大分迂遠な說明をされをり候世人が都々一天保說に誤まられたるは偏に醒雪博士が奥の院に本尊の安置されあるを知らず漸く山門より遙拜しての宣傳でお茶を濁された結果とも申すべきか。その他この類の

（裏表紙ウラへ）

俄、並に吉原俄考

夜櫻、燈籠、俄と吉原の三景容の一であつた吉原俄について、その起原、沿革などを査ねてみようといふのである。

先づ、吉原俄に言及する以前、その先蹤と思はるゝ京阪の「俄」の起原、形態に、一走り眼を曝してみよう。無論知らるゝ如く、後世の所謂る單なる「俄」は、阪地仕込のものである。但しこれに類似したものは、古くより京洛にもあつたやうである。その京阪の概觀である。〔吉原俄は京阪俄とは別物だとの議論も起るであらうが、自分は、その系統、京阪に在りと見るのである。くはしくは後説。〕

○京阪の俄

俄に類似した滑稽の所作、踊が、我が國古來より各地に、祭禮、祝典を機として行はれたことは、察するに難くない。唯、原始的な單純なものが、巧緻を混へた複雑な物になるだけの差である。嬉遊笑覧にも引いてある「一代男」島原遊興の件に現れる滑稽所作は、これを俄と未だ

名づけなかつたにしても、次第に原始的な滑稽さが、見た上のみの形態の滑稽さが、思案を混へての滑稽に移り來たつた頃の、技巧化した頃の灑脱であることは否めない。試みに、「一代男」の原文に就て見ると、「好色一代男」卷之七の中の、「末社樂あそび」の條に現れてゐるものである。曰く、

「……蜘舞、棕櫚箒に四手切つて、むしこより兀さ出せば、丸屋の三階より大黒恵比須を差出す。これを見て、柏屋の二階より、懸小鯛見せければ、庄右衛門は炮烙に釣髭を作り出せば、隣より三社の託宣を拜ます。又、向ひより金槌を出す、其時あふむは懸燈蓋に火を點じて見せる。丸屋から佛に頭巾着せて出せば、綿屋より釣瓶取を出す。八文字屋より澁紙見すれば、丸屋より牛蒡一把見せかける。猫に大小差させて出せば、干鮭に楊枝銜へさせて見する。炭消に注連繩張りて出せば、竹の先に醤油の通帳を附けて出す。彌七烏帽子着て頭差出せば、向ひより十二文の包錢を投げる。北から擂粉木に綿帽子卷いて出せば、南から障子に上々吉墮胎藥あり、同じく日雇の取揚婆もありさ書いて見する。中の二階よりは、幟、天蓋、葬禮の道具を出せば、泣くやら、大笑やら、揚屋町に其の日出かけたる女郎も男も、殘らず表に出て、心は空になりて三所の二階を眺め暮して、古今稀なる慰是なるべしさ、輿に乘じて、まだ所望々々といふ程に、後は大道に出て文作、何れか腰をよらざるはなし。（云々）」

かうした、滑稽な、當意即妙、後世の「いふが如し」の問答体のものは、一代男〔天和二年板〕の當時、（或は尚古く）、恐らく現實されてゐたものであらう。無論作者の空想ではあるまい。さうしてこれが、所謂る複雜化時代の俄の最初のものであらう。（原始的、單純な俄の最初は、無論安永四年六月大阪上梓の「古今俄選」にもいへる如く、神代天の岩戸の鈿女命の舞の如きであら

う。)

これに類似したものが、大阪にもこの當時行はれてゐたことは無論であらう。唯「俄」と名づくる稱呼を生んだのは、これより後、享保の頃、しかも大阪が元だといふについては、

一、享保の頃ほひ、住吉祭の參詣群をなせる中、其の歸さ、飲みあかしたる酒樽を竹馬の先にくゝり付け、提灯の如くし、めい／＼持ち添へて、高く差上げ(云々)翌年は、はや鬼お福の面などを袂にして行きて、歸るさを樂しみ／＼たるが、いつとなく趣向をなすやうになりて、今の姿になりし。(中略)其の頃より程もあらせず、たゞたとへなどを寄らさして、或ひは形も作らず、やはり住吉參りの歸るさの姿にて、「俄じや思ひ出した」とて通るを、所望なりとて袖に縋れば、「扨去年も、此の歸るさには、聞いてもない事ながら、思ひ付てお目にかけましたが、當年はとんと智慧が出ませぬゆゑ、無念ながらも捕へられた所で、一度／＼斷樣にお斷を申上げます。其代りには、よく／＼顏をお見知りおかれ下さりませい。來年はきつと思ひ付て笑はせますぞ」などゝいひて行き過ぐると、其のあとより鬼の面をきて大手をひろげて、かゝゝかゝゝと大笑して行きしていい、これらを余程の奇妙なる趣向なりとてどよみたる事也。(古今俄選卷一)〔雜藝叢書第二所收〕

恐らくこれが、「俄」なる名稱の元であらうといふ。さて、「俄」なる語義は如何であらう。無論、當意即妙の義であらう。「思ひ出した」とあるによつても知れる。頓才、とつさの滑稽所作である。については、

「俄といふ言葉は、物に當て思案工夫もなく、思ひもよらざるに、卒忽とつい／＼ひよこ／＼いひ出し仕る事を俄とはいふなんめり。是れ天下の通稱也。此を以てこれを思へば、漢土の滑稽、日本の俳諧、皆是れ俄也」(下略)」(古今俄選卷之一、漢土俄濫觴の中)

「或人の云、古人註して、にはかは速戯なり。諺に云、俄は我も人も趣向を爭ひ競ふの字義なり。字彙に曰(略)。されば、當意即妙の風流、間に髪も入れざるにや。其の趣向あるを以て本意とすと云々。されど、年々さまざまの事くさ、善盡し美盡し、潤色いやましにして、人の耳目を喜ばしむる事等閑ならず、故に祭の花なるに准じ、踊の曲あるによれり。(以下略)」(吉原雜話)(燕石十種第三所收)

とある「卒忽といひ出し仕る事」、又は「速戯」、恐らく此等の解に盡きてゐよう。

而して此の「俄」が、京阪に於て、次第に發達し、各種を產み出した。即ち、一、俄(くはしくは俄狂言) 京阪にて夏月諸神祭の夜、之を爲して興ず。二、座敷俄 劇場用のかづら衣服を用ふ、しかも紅粉は用ひず、素顏也。或は芝居狂言を學び、或は種々の行を學び、共に滑稽を專としたり。三、流し 種々の扮を摸し、或は平服にぼてかづらを着し一言の滑稽或は諧謔をなして行き過ぎるを云。など(以上、守貞漫稿雜劇下に據る。)と生じたるは、必然であり、且つ、第一の俄が簡單なる民衆的野外劇、第二の座敷の俄は、後世の所謂大阪二の加芝居、第三は賤民の徒の遊藝と、かく別れ、尙ほ後世の專業的二の加役者は、第二の物より恐らくは發達したものであらう。(近來(天保十二年前後)……老練の翟新作の俄をなせしより、連を結び、俄師と呼びしより素人俄黑人俄と二流に分ち、今や……なんど、殆ど歌舞伎役者の心となり、給金いかい程と定め、芝居の小屋にて道具鳴物を入れ、場棧敷にて見する事となりぬ。(皇都午睡初編上、俄茶番)) 無論初めは、廓内の幇間、或は一般市井間の通人若しくは、茶目中年どもの戯に發したものではあらうが。(又、時には、第一の俄狂言の中にも、第二の座敷俄の素質——

より複雜なる――即ち役者の聲、其他芝居物眞似等より來たものも混和してゐたであらう。）

「難波の夜宮は俄の始まり」（古今俄選の序）とあるのは、恐らく第一の俄狂言の始まりの謂であらう。（さうして或はこれが後説の、島原住吉祭の俄に傳染したものとも知れない。）此類が、江戸の茶番と似かよひ、蜀山人をして、似て非なるもの也と力ましたものであらう。（俗耳鼓吹）とにかく、「俄」は、夏祭の景物たる滑稽所作、又は臨時の座興として、野外に、又は戸内に、又は路上に隨時京阪を主に發達し來り、その風流れて都鄙に傳播し來つたものであらう。而して、この名は大阪に享保頃より生れたこと前にも述べたが、京は、一代男等によりても知らるゝ如く、その風古くより間々行はれ、阪地の發達と同時に、この風（阪地の複雜なる各樣式）また京にも流染し至つてゐたものであらう。

年號の明記はないが、元文のはじめ、大阪式俄京に流行るといつた傍證的記事、即ち左の如きものがある。

「俄といふものあり」云々。始りて三十年ばかりになるべし。近年はます〳〵繁に行はる。云々。多くは裸身又は肌を脱ぎ、顏面手足或は全身に丹墨藍粉などをわざと描く塗り隈取り（云々）（尾崎曰く、これ「古今俄選」の中にいへる、俄の一種「出たらめ」であらう。）今宮祇園御靈の祭などには彼の躍幾群ともなく、しかも大方その近邊の者にてぞ有りける。聲をかけて所望といへば立ち止り、或は無根の戲語をいふ。或は得もいはれぬ身の働きをなしてゆく、冷眼にてこれを見れば、そのまゝなる乞食といふべし」（孔雀樓筆記）（嬉遊笑覽に據る）

嬉遊笑覽には、著者喜多川氏曰く、「孔雀樓は清田君淸（尾崎曰く、越後の學徒なりと。「海錄」には播磨淸絢撰とある。）が號なり。此の

筆記明和戊子冬と記せり。それより三十年前は元文四年なり」と考證してゐる。（但し、原文は、三十年ばかりとある即ち元文四年とも限るまいが、とにかくその頃――即ち享保後間もなく、大阪式猥雑なる俄が京に流行つてゐたといふ自分の説の裏書ではなからうか。それとも偶然、同時の發生と之を見ねばならぬだらうか。）

その頃の京俄に就ては、尙一個、同じく嬉遊笑覽之を引いてゐるが、出典は「一目千軒」の記事である。今原文（近世文藝叢書、第十風俗所收）についてみると、

天和年間、中堂寺村に住吉屋太兵衞といふ泉州堺の出生の女郎屋があつた。家の裏に住吉大明神を勸請してゐたが、今の島原に移轉した後、右の鎭守を殘しておいた。そのあとにて庶民、その明神に願かけするに凡て協うた。今は眞言地になり、光明院といふ。社僧あり、中堂寺村の住吉といへる本社これである。其後、太兵衞庭に、住吉の祠を移し、中堂寺村住吉の御旅所となした。御旅所參詣夥しきにより、享保年中、今の山に移し替へた。毎年五月十九日より、此の祭禮の練物が出る。二十一日より二十九日まで暮方より君達中ねり物、二十八日には練物(ねりもの)廓を出て中堂寺村本社へ參つて西口より歸る。「夜に入りて他所より廓へ、紙細工、燈籠、作り物、俄などあまた持來り、夜明るまで京町中の老若男女貴賤男女群集おびたゞし」（住吉神社の事並に祭の事」（以上、原文の要略）

とある、此の住吉御旅所祭禮の俄は、たしかに、「一代男」當時より更に進步した即ち阪地式のものであつたらう。それが獨自のものであるか、大阪難波の夜宮そのまゝであるか、不明ではあるが。但し、これを引いてゐる嬉遊笑覽の著者は、以て「かかれば一目千軒にいふ所、即ち俄と名づけて一種の戯事となれるが始と見えたり。江戸の吉原町のにはかも同じ頃にや云々」とあるが、即ち此の島原の「俄」を、俄の起原のやう見てゐるが、これはやはり大阪を最初とす

べきであらう。何となれば、「一目千軒」の原文に據ると、享保年中、今の由にこの御旅所を移したので、祭の發展は、それ以後である。すれば、大阪の享保の頃に生れた「俄」の名實の出現に乾度遲れてゐるに違ひない。〔即ち此の住吉祭の俄も、「孔雀樓筆記」所載の物と同樣、元文初めの物であらうと思ふ。〕

以上で、一先づ、「俄」の語義、起原、京阪の發生を打切とする。阪地俄の複雜化、營業化は「古今俄選」にくはしい。又、俄流行に對する大阪町奉行の諸禁令は、大阪市史二、四に數條を收めてゐる。これらに就いて看るを可とする。〔尚、大阪の俄と江戸の茶番、茶番の起原等もあるが、此等は他の機會に讓らう。茶番と俄の別は、その觀念は、俗耳鼓吹、皇都午睡初編上の卷、守貞漫稿雜劇下にも現れてゐる。〕

○吉原俄の起原、沿革

吉原俄の起原には、二說ある。一、享保十九年八月說。二、明和四年說である。一の享保十九年說は、動機を、廓內九郎助稻荷に正一位の宣下のあつた祝であるとし、二の明和四年說は、眞崎（まつさき）稻荷社內天神への奉納に關してとしてゐる。先づ一を擧げると、山崎美成の「新吉原略說」（文政八年晩夏十三日の序。燕石十種第二所收）に曰く、

「同月（八月）廓中ねりものを出し仲の町をねり行く。これを今俄といふ。其の始は、享保十九年甲寅のとし九郎助稻荷正一位大明神と官階ありし時の八月祭禮の頃にてこの事起れり。（近頃までも俄の中は大門口に葉附の竹二本

左右に立てしめ、繩引きはへてありし。これ祭禮の意なるをもてなり。然るに今さる事もなしといへり。」とて今の有樣の一斑を窺ふべきものは、喜多川歌麿がゑがける年中行事〔尾崎曰く、これ初代十返舍一九編、歌麿畫の青樓年中行事上下、享和四年板。〕に、六樹園が吉原十二時〔尾崎曰く、例の北溪畫。此の中に假裝人物の行く俄の繪あり。〕など併せても思ひやるべし。」

とある、これが基本であらう。現に「嬉遊笑覽」にも、一目千軒の文を引きて、

「江戸の吉原町のにはかも同じ頃〔尾崎曰く、一目千軒にいへる島原の住吉祭の俄〕にや、享保十九年八月、九郎助稻荷の祭禮に起れりといふ。」

と、乃ち新吉原略說の說の受賣りかと思はるる程である。〔笑覽は文政十三年の序あり。〕この「新吉原略說」「嬉遊笑覽」說の享保十九年をその儘承認して反復してゐるものは、「日本花柳史」、「近世世相史」などである。

二の明和四年說は、一に金曾木（かなそき）が基本のやうである。金曾木〔文化六年五月より文化七年八月までの蜀山人の手記。（新百家說林所收）〕の中に、

「一、庚午（文化七年）三月十五日、淺草黑船町の邊の本屋にて、安永六年吉原俄の繪本の古きを見たり。明誠讖と云へる序あり。喜三二の事なりと思ひて買はんとせしに、主人見えずして果さず。同十八日淺草雲市の日、隅田川の花見んと淺草を過ぎし故、此書を買ひたり。序に、

鳥の鳴くあづまの花街に連戲（遊カ）を翫ぶ事は難し。明和のはじめ祇園囃、雀踊など其萠ありしに因りて、同四のとし亥の秋にして初めて起れり。厥後（その）中絕えたるを去々年不圖再興ありて、猶去年に繼ぎ其賑ひ年を追うて盛んに趣向倍輿有（らん）か、これ此鄉の榮をますみの鏡なれば、各其の藝を移して燈籠の花の蕋を通さず、明月の餘情を

儲けて紅葉の先駈せんと、或風流の客人の仰を秋の花にして、藝者と素人とを論ぜず、禿と娘とを厭はず、我と人との譲りなく、人と吾との隔てぬをもて俄の文字調ひ侍り、豈又宜ならずや。

安永六年仲秋　　明誠識

ここに文化七年まで三十四年なり。〔按此序明和四年丁亥俄起り、安永四年乙未に再興になり〕かゝる本にても、俄の起りし年號を考ふるに足れり。又跋に「郭中にわかものあり、頭は茶番の如く、尾は祭禮、足は踊の如くにて、嗜聲芝居に似たるものは何や／＼、是即ち俄てふ物にして日々夜々趣向をなし精らす、きのふの與は飛鳥川かわりやすきを花にして、余さず殘さず圖畫せしめ、明月余情と題し、初編より二編三編に及び、追々數編を繼て遊客の重寶に備ふといふ、大門口つたや十三郎板。」此の跋にて此の本の名明月余情といふ事を知れり。三月廿二日狂風中

といふのである。〔尾崎曰く、序でに。此の「金曾木」中の明誠のいへる、我と人との譲りなく云々によつて俄といへるなりとは、「吉原雜話」其他にも散見してゐた。牽强附會甚しい語義考として一切取らなかつたゞ、基は、この喜三二の戯文が俑を爲してはゐなからうか。尚此の喜三二の跋は、吉原俄の實体を巧みに約說してゐる。即ち茶番、獅子、踊の謂である。くはしくは後說を參照。〕

然し明和四年は是で確かとしても、その動機が分らない。茲に明和四年說には反逆してゐるが、その發生の動機に就て明らかなるものがある。一說として引かう。前にも語義の上で一寸引いた「吉原雜話」である。〔吉原雜話、年代作者不詳。然し記事に據れば、前揭喜三二の明月余情と同時代、若しくは以後であらう。〕

「一、にわかは、寶曆の頃、もちろん其前より三月花見の頃などは藝者等頭持折にふれ客人の慰みに、取りあへず仲の町にて色々の思付をなせしが、（尾崎曰く、これ吉原俄の、秋のみならず春にもありし異說なり。又、藝者等頭持の色々の思付、これにその先蹤を京阪に在りと自分が做ふのである。）京都にての夜宮（尾崎曰く、これ島原の住吉祭の類か。）などの折のやうに（尾崎曰く、やうにとあれど、京を眞似ての意とも取れるが如何。）其の一興となしける。然るに寶曆の頃（尾崎曰く、頃とあり。これ寶曆明和の頃にして、即ち明和四年ならざるか。）橋場眞先（眞崎）

神明の社地に高辻家よりして、天滿宮を勸請ありし時、仲の町に梅松の作り花を飾り、梅鉢の提灯を飾りて、其時いと花やかなる俄を始めし事より貴賤群集せり。是れ全く祭のやうにて、しかも其の時直に思ひ付きてなす事故、俄といふ名あり。(尾崎曰く、これ尤もらしき詮索なれど、既に京阪に一般名詞として「俄」が生れてゐる以上、可笑しき話である。或は強ひて江戸獨特のものとなさんための附會ならざるか。やはり、名稱に於ては、京阪を輸入せりと見るを可とせん。但し形態が如何程まで京阪を眞似たりや、又は暗合なりや、又は特殊のものなりやは不明也即ち、或る點まで、獨創、暗合、摸倣交々ありしならん。後にも謂ふが如く、踊の類は獨創に近く、幇間の戯技の如きは、京阪の摸倣といふべきが如し。唯名目のみは、當時祭の余興などの義にて「俄」が普通名詞となれる、その語をそのまゝ借りしならん乎。)云々。

其後暫く中絶せしが、安永五年にや菊月の頃、五町より家々の子供をえらみ、樣々の趣向ありしより、年々春に花秋は燈籠、つゞいて俄の遊びある事となりぬ。云々。)

明誠の記には、安永四年と蜀山人も類推してゐる如くであるが、これは安永五年、但しにやとあるから、これは同一と見て可からう。唯寶暦の頃と明和四年の相違のみである。これも自分の前の説の如く、この「吉原雜話」の筆者が唯記憶に任せての稱呼で、實は明和四年であつたらう。然し眞崎云々は異説である。九郎助に全然關係がない。然しこれも或は最初の一回だけこれ眞崎を機會として、所謂る吉原俄の華美なる新形式が生れ、以後は、九郎助の祭禮に伴つて此の新形式を續いで行つたと見るべきだらうか。但し吉原雜話は、菊月とある。一月相違する。乃ちこの吉原雜話の記載を素直に受けると、吉原俄が九郎助の祭と結び付き、さうしてそ

れが八月一杯となつたのは、餘程後のことかも知れないと惟へて來る。

この眞崎稲荷社内の天神祭と、かの明和四年とを一しよにしたものが、關根氏の「江戸花街沿革誌」の記事である。曰く、

「（前略）俄踊の起りは、明和四年眞崎天神へ奉納のため、年若き遊女を出せしを始とす。」

といふのである。

なほ、享保說、明和說の中間說ともいふべきものに、北里見聞錄卷四の「中秋俄の事」がある。此の記事、當時の吉原俄の原始的形態を描きて、精しきものがあるから、その全文を左に掲げよう。

中秋俄の事

其起りさだかならず、北女閭起原にも、當世廓にて春秋など俄と稱し、踊やうのことなするも、何となく昔しいだしくこそ云々。是を見れば、明和の頃まで、春も俄といふ事有しにや、これは近年の事なれば猶可レ尋。予按するに諸國に盆踊といふ事あり、此里の俄踊も其餘風にや。〔尾崎曰く、此等は吉原俄の原始を踊とし、且つ各地盆踊の類と做す說、自分の京阪俄傳播說とは反對である。自分は吉原俄の漸く名づけざる最初の物が、踊一体のものであつてもよい。そは、自分のいふ京阪の俄東流說以前のもので、これ以後假裝、滑稽所作など入り來り、踊一体でなくなつた。現に「吉原雜話」にもあるが如く、幇間藝者の類が戯事を爲した。これ「一代男」の記事にも均しく、即ちこれらに純京阪の餘風を認めたい。さうして後世江戸人の手に江戸化した吉原俄の實が生れた。つまり、全然種を京阪に借りず、京阪は滑稽なる言語、問答、所作、江戸は踊で二種別途であるにしても、その單調なる踊が、複雜なる吉原俄となつた。その助產婦は、僅かに京阪俄が勤めてゐる、異名稱の同一位ゐからの話ではないといふのである。尙後を見られたい。〕明和の頃の俄の儀、單に吉原俄を

繪圖を見るに、其の内に大津繪所作事雌子方、大でき／＼と有りて、引なり屋臺持囃子に幕をなを下げ、内に囃子の体、其前にて女舞著雌し方、おいし、おくみ、おゆき、おなみと有りて、何れも振袖を着し頬被りをなして、立ちながら三味線をひく。又其前にて新しなや内たけの、大ふびや内すまの、同ふり袖にて塗笠藤の花を持ち所作事の体也。次に京町一丁目まんご持ちぶる十人餘と有り。其次に官女揃と有りて、鶴や内かしく、岡本屋内みよ、額侯屋内紅葉、丸海老屋内ゆかり、若松屋内若鶴と云、何れも五つ衣に緋の袴、瓔珞を戴き檜扇を持ち、うしろより爪おりの傘をさし掛けたる圖也。古風なり。又其頃の細見を見るに、角町大津繪所作事たけのといへるは、新しなや華抱江口が禿也。すまのといふは、大海老屋和右衛門抱染山が禿也。京町の官女みよといふは、引込禿にや、今に於て此の岡本やにては禿のおの字名あまた有り。紅葉は、額侯屋忠右衛門抱由岡が禿なり。ゆかりは丸海老や甚兵衛抱風折が禿也。然れ共鶴や内かしく、若まつや内若鶴は、ともに全盛にて、へ座敷持の印をすゑたり。然れば其頃は、全盛の傾城も、俄のねり物にも出でたりと見えたり。是等も又白拍子の遺風といふべし。戸張仙里曰、例年俄に獅子の練物を出す事は、安永の頃藝者においちといへる者、天然の妙聲にて、きやり音頭に妙を得て、大當せしかば、是よりいつも獅子を出すことゝはなりけるよし。」〔文化十四年撰、喜闇樓作者編〕〔近世文藝叢書、第十風俗所収〕

〔註。引込禿とは、禿を十四五より引込み（禿の役を止めさせ）、やがて振新として客に接せしむるものだといふ。（尾崎）〕

以上である。中、踊は元よりあれば別問題、他の二者の中、獅子の起原は右で分つたが、對間どもの俄――後に化して茶番の起りが不明、恐らく「吉原雜話」に謂ふが如く、寶暦以前からあり、これらが京阪をまね、而してこれを俄と京阪その儘呼んだため、後の吉原俄の名の起りとなつたのだらう、猶、此の北里見聞錄の記事を其儘踏襲せしものに、「江戸花街沿革誌」「江戸より東京へ3」などがある。

「江戸花街沿革誌」には、此の明和以前に、廓內に春秋二期俄ありしことを、「舊記に見えたれど疑ふべし」としてゐるが、古く春にもあつたことは、「吉原雜話」（前掲を見よ）の中にも見えてゐる。即ち、或は、春秋二期、古くはあつたのかも知れない。然し此等は、未だ吉原俄ならざる無名のもので、即ち、それが、京阪の廓內遊びを眞似た、或はそれと偶然同じい單なる假裝、ねり物、又は滑稽なる所作の類に止まり、吉原俄の如き美麗絢爛なる踊　獅子　茶番の三者完成したものでは無論なかつた。

（今自分は、京阪のを眞似た、又は偶然同じいといふたが、眞似た方に主をおく。故は、江戸抱の京生れ女郎又は來府の京阪通人どもの教示によつたらうといふ意見もある。殊に、享保といへど、まだ遊藝の大體は京阪に師を借りてゐるものが多いからである。享保十九年といへば、豊後節が東下してゐて、豊後節が歡迎されてゐる頃だ。その頃、同じ京阪系統のこの俄遊び（無論これは前段にもいへる如く、踊一体のものではない。幇間らの戯事を指す。）が乙なりとして、吉原通士に歡迎されたかも知れない。それが吉原俄の形態となつたのに、江戸人の趣向によつて洗錬されたせゐであらう。純江戸の茶番が、安永年間に發生したといふのもこの自說の裏書になる。即ち、野山人には怒られるかも知れぬが、茶番も、その初め、型は、此の吉原にも流行つた京阪流の俄狂言を取つたが、實は茶番起原にもある通り、樂屋の茶の番をした役者の下廻り連が、それらが京阪から東下りの連中で、大阪で見様見まねの座敷俄をして見せ、それが江戸人の洗錬を經て、今日の全く異種のものとなり來つたのかも知れない。茶番は措いて、とに角、自分には、吉原內の幇間どものにはか、後の吉原俄の三要素の一たる滑稽演技、吉原俄の名稱の元たるもの、元を質ねたら、京阪俄であらうと考へるのである。無論人間共通の滑稽動作は、京阪も江戸も區別はないが、その遊藝らしきものに於てである。）

俄、遂に吉原俄が

さうしてそれが古く享保十九年頃より行はれ、（大阪で俄の名を生んだと同時頃）同時に、踊ねり物も行はれ、それらがやがて、秋一回となり、所謂、吉原仁和賀となり恆例事となつたのは、眞崎天神奉納にもせよ、九郎助の爲にせよ、とにかく明和四年頃であつたのかも知れない。即ち自分は、享保十九年説と明和四年説とに、積極的に妥協、中庸を取らうといふのである。北里見聞錄の曖昧なる態度を打開してである。さうして尚、吉原仁和賀の、盛大なる廓内俄——三景容の一が生れたその誘因には、自分は、京島原の「一目千軒」にもいへる、住吉社御旅所の奉納などの摸倣から來てはゐないかといふ臆斷を掲げたい。即ち島原がやつてゐるなら此方もといふのではないだらうか。即ち、島原は、元文寛保の間、（享保とは見ずに）その漸次の發達と共に、遂に摸倣又は對抗の意味で、明和四年（其間約二十幾年）新吉原にもこれに劣らぬ美々たる景容を生んだのではなからうか。

吉原俄の明和年間説には、尚、一記事がある。

「吉原俄の始めは、明和年中予二十三歳の時なり、最初は、張抜の大天窓など冠りて、さまざまの異形にして、男藝者踊り歩きたるもの今ある茶番狂言の如し。（尾崎曰く、これ確實に、京阪俄の直輸入たる憑據也。故は、茶番の起りは、これより尚遲し。）見物の笑ひを歡びたるものなるが、近比色々樣々工夫をなし、祭禮同樣しなして、古への俄の趣意は失ひける。」（寶暦現來集卷之二）（近世風俗見聞集第三所收）（尾崎曰く、古への俄の趣意は失つたといふのは、自分からいふと、京阪の摸倣を脫した、祭禮同樣とは、江戸生粹といふ意にされるのである。即ち自分の京阪俄を吉原

俄の先蹤とする」
典據とも思へる。」

こゝに、尚一つ、吉原俄の起原を、享保にもあらず、明和にも非ず、尚以後の安永天明におくものあり、但し「の頃にや」とあれば、明和四の誤聞であるかも知れない。即ち、

「桐屋伊兵衛といふ役者の物眞似上手の人、安永天明の頃にや、遊女屋中記字屋と同氣相求め、二三人にて俄狂言をなす。これ八月俄の始なり。」（小川顯道著、「塵塚談」）

といふのである。

以上で、吉原俄の起原を終る。次に、若干、その後の繼續、隆盛に及ばう。

「吉原にて俄といへる戯れ、大いに流行す。仲の町に埒をゆひたり。」（半日閑話卷十三）

安永五年の項である。

起原は、眞崎天神への奉納であつたかは知らぬ、以後は、九郎助の祭禮と伴つたことは、諸書が一致してゐる。「吉原大全」にも左の如くある。

「（前略）……新吉原へ引きうつし、すぐに正一位九郎助稲荷大明神とあがめける。今よし原にて縁結びの神として立願す。毎年八月朔日より祭禮ありて、ねり物等を出し、夜は所の人々にわかなど思ひ付きて、見物の群集山をなす。………」

〔異考〕――「吉原大全」は、誤謬多しとの說もあるが、明和五年の印本、澤田東江の著。すれば、この吉原俄の明和四年說の直ちに一年後である。然るに、右の文を見ると、どうやら、九郎助稲荷の祭が以前からあつて、無論これは、享保十九年の正一位以後毎年あるにはあつたらうが、その祭の景物として、夙に俄があり、明和四年の眞崎奉納に始まつたものでないやうに解釋される。如何だらう。明和五年印本であるから、この項には誤りはなからうと

思ふのである。然し、何處までも明和四年の眞崎奉納說を固守するとならば、吉原俄の美々しさだけは、明和四年、然しその俄の形態は、すでに一部の滑稽所作として、九郎助の祭禮、享保十九年以後、無論あつたと、矢張り此の妥協が生れる。」

九郎助の祭禮と同時に行はれた倘ほ他の記事には、

「八月朔日より黒助稻荷の祭式行はれて、晴天三十日の間俄を出す。此日又抱のものに祝儀を出して、遊女仲の町へ出るに、俄中の人拂をさする。十五日目に至りては其狂言を改め、此里の見物湧出するが如し。但し此の里に限りて、今日より娼妓おしなべて座敷着に袷を着る事を例とせり。此日仲の町へ出る遊女は、みな白無垢を着せり。〔尾崎曰く、是れ八朔也。但し問題外なればこれには言及せぬ。〕」（柳花通志）〔天保十五年、秀山人撰、近世文藝叢書第十所收〕

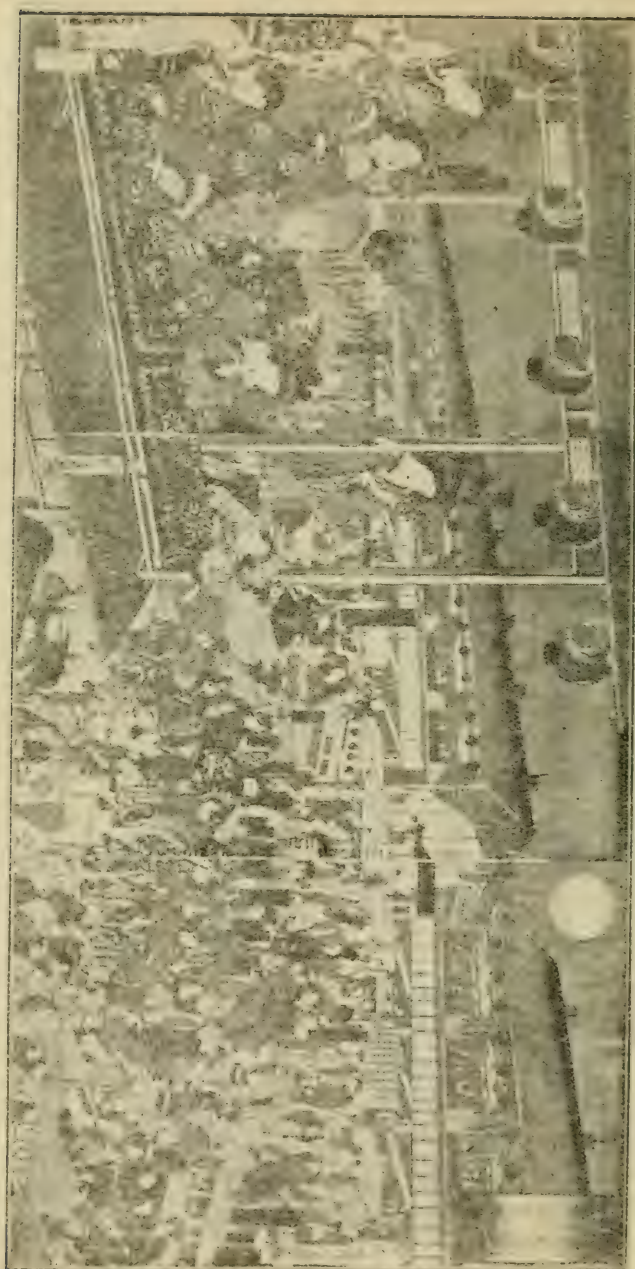
即ち、單調を破るため、上半月、下半月と二度に分けて、上下と呼んだ、さうして狂言も變へたのである。〔風向も、安永の「明月餘情」には、二三日で變へたやうに書いてゐるが、こゝへ來ると、稍窮して上下二回に限つたもののやうだ。〕

「當月中（八月）新吉原俄ねり物出る、風流のおどりあり。」（增補江戸年中行事。享和年間刊。）〔民間風俗年中行事所收〕

「此月（八月）朔日より九郎介いなり祭禮にて、ねり物を出す。」（北里年中行事。安永二年著、花樂散人）（同）

ともある。

即ち何處までも、京阪と同じく神事祭禮と緣を有してゐたのである。全くの遊戯と化し終つてからも、倘、大門口に竹を建て注連を張つたといふ〔前揭。新吉原略說。〕のが可愛らしい。さうして吉原俄そのものの內容は、獅子舞と、藝者が三番、男藝者（幇間）が三番の踊り茶番があつた。即ち、踊、茶番、獅子舞の三体一致である。「丁度、方今各地の祭禮にもこの三者が殆ど踏襲され

仲之街吉原仁和賀之圖

てゐるやうに。」さうして明治の末には、九月中旬から晴天十五日間行はれた。

所々、臆斷を混へ〳〵來たから、自分の意が分らなかつたであらう。最後に自分の思ひ付いた「吉原俄の起原、沿革」を、一纏めにして見る。

○

一、初期。單なる廓内春秋、花時又は秋の九郎助祭日其他をり〳〵の、大盡其他の客に見すべき爲の、遊女牽頭持どもの遊び。要素は、牽頭持の戯事（滑稽仕打）及び間々、遊女の踊の二點。（此頃未だ踊子、又は藝子現れず。）これ純然たる京阪俄輸入又は摸倣時代。享保十九年前後。

二、中期。京の島原住吉祭等の俄、或は浪花夏祭の例に倣ひ、九郎助稻荷の祭禮に多く之を行ふ。但し未だ年中行事とならず、華美ならず。要素は從來よりの、幇間どもの戯技、（これ狹義の俄也）新たに廓内に發生したる踊子、又は藝子、又は女藝者（後に一括して藝者。この項には、本著三一頁——三八頁の「藝者の起源」參照の事。）の踊との二點。

「俄」の稱呼は、初期以後すでに之を稱してゐた。初めは、男藝者どもの戯れ、滑稽の技のみに、京阪その儘「俄」の名を借りて用ひた。この語次第に口馴れ、轉じて、後には廓内

の一般遊戯、祭禮時の余興類一般をも稱するに至つた。即ち無論踊も俄と稱するに至つた。即ち恰も此頃は、すべて廓内をり〳〵の戯技並に踊を一括して「俄」と稱するに至つた。是れ即、廣義の「俄」の發生である。但し、その語が元來京阪仕込なのに漸く氣がさし、さりとて今更口馴れた親しみ深き「にはか」の他に適當な概括的稱呼なく、不得已「仁和賀」の字を宛て、中に通人どもは、人と我とが云々とか、或は何の祭に俄に思ひついたから俄と稱したとか、京阪と別物のやう、出自を異にせるやう惟はれ度き爲め、附會說樣々出づるに及んだ。即ち此の頃は、江戸化せんとしたる時代。明和四年前後。

三、後期。確實に、毎年八月一ぱい、九郎助稻荷の祭禮に伴ふ祝事として行ふことに決定。（眞崎說は取らず）。その要素は、從來の幇間共の茶番（但し此の物、前期の狹義俄より轉化。府内今期の茶番の發生發達に伴ひ、京阪風より純江戸風のもの、即ち狹義俄より茶番と脫す。）と、藝者（今期以後、廓内藝者益々多し）の踊と、新たに藝者の獅子舞との三點。ここに於て、純江戸化し盡せる時代。即ち吉原三大技容の一として、府内外の耳目を奪ひたる時代。（爾後、昂然吉原仁和賀と之を呼ぶ。）是れ安永以後幕末まで。

以上で、自分の敍述は、一先づ擱筆する。自分は大の野暮天、大正年次に亘つて、吉原に此

の景容が行はれてゐたか否かを知らぬ。又、今次、此の震災後に、此の行事を復興するの餘裕ありや否やも知らぬ。唯、時、新舊の差こそあれ、八朔に面して、この吉原俄(繪に知る)を思ひ出して、この叙述に及んだのである。最後に、別に挿圖とした、明治二年八月板芳幾ゑがくの「仲之街仁和賀一覽之圖」三枚續を今一度見返して、この往時の景容を偲ばうと思ふ。

挿圖としては、歌麿の年中行事の繪もあるが、これは複製數本ありて、知る人多からんと思ひて、幸ひ本文の叙述、比較的江戸末期に歩ければ、その補足にもと、この芳幾畫を以てした。芳幾畫尚一圖あれど、賑かなれば、それに予が本文の圖說として十分と惟うたから、これにした。他の一圖とは、獅子舞三枚續である。尚、自分の想像する吉原仁和賀の屋臺の跡に均しいものは、――芳幾の圖の如き――、無言で人形好みではあるが、伊勢古市に毎年八月十五日行ふ。現に自分が大正十一年夏實見してゐることを告げておく。即ち此等は、吉原仁和賀と同じ趣向、同じく廓内の一行事として見るを得よう。

(余白に、一九撰歌麿畫の青樓(一に吉原)年中行事上之卷の、吉原俄の項を引かう。
「又こゝに九郎助といへるは、往昔千葉九郎介なるものゝ勸請せしによりて其稱を家らしむ。此柳巷にては赤縄の神と崇め、毎年八月朔日より祭式おこなはれて、練物にわか等を出す事連綿と怠慢なし。此節燈籠客仁和哥客と號して、恒に倡門に履を納れざるものも倶に倡行せられて、來往の錯亂、貴賤混じ、夜毎に湧出するがごとし。」)

大正十三年八月二十七日印刷
大正十三年九月一日發行
第二十四冊（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十四冊

本文

江戸人の性的犯罪
歌麿と英泉畫く
フェノロサの板畫優越論
溫泉土産

温泉土産

ピンポン旅行の温泉話を始めよう。初め古見(名古屋の近く、海水浴場)の寺を借りるかといふ話を持ち出したが、女房の抗議で駄目。平常女中やら助手やら分らぬ程使つた禮もあるから再三乍ら女房の郷里越後高田に近い妙高山麓の或る温泉場と決めた。赤倉だけは此方へも響いてゐたから、自分では此處にしようかと目算んでゐた。とにかく、女房子供連の四人を七月三十日の朝に少量の金を持たして一先づ在處へと旅立してやつた。金主元はアトからといふ意味である。私は、三十一日の晩にあの八月號の本誌の發送を獨りでやり翌々二日まで用あつて殘り、二日の夕方出立、途中中津川(美濃)の友人の所で一泊、三日朝高田へ立つた。長野で途中下車して、お寺はつけたりで、實は例の名物の林檎を一籠買つてその晩高田へ着いた。高田では、すでに盆踊の稽古を始めてゐた。自分の泊つた女房の在處は、高田の遊廓内にあつたから、地廻り連の踊の稽古、太皷の撥で終夜寢つかれなかつた。翌四日は、食料の準備。其晩、中頸城の關温泉へ行くことに決めた。話に聞くと、妙高の中腹以下、温泉が矢鱈にあつて、燕が最も高く(地面である)、關がその中間、赤倉は最も低いとの事。然るに費用は低い赤倉が最も高く、關が最も安いとの事。然し湯は、關が最も適度の温度で、且つ一ばん效くとの事。それに燕へも赤倉へも一時間以内の行程(歩いて)。關に根城を構へて、行きたければどちらへも散歩に行けばいいではないかとの男の建言。

高田から逆戻りの關山驛で、一行と女房の母と計六人が下りたのは、五日の朝の十時、自動車で關へ着いたのは、晝少し前。成程涼しい。宿屋は富山屋といつて、高田の町の人の行きつけの所。少々汚ないが、田舍者の鷹揚な所がさりに。湯は、すぐ前の坂上にあつて、瀧と普通と二個ある。晝からポツ／＼湯の稽古を始めた。子供も私もその當時は日に二回。しかし間もなく三回。終り一週間は、私は五六回だつた。案外廉かつた。高田で食料を用意(女房の實家の寄附もあつた)したせゐもあるから、豫定通り自炊と決めたが、廉いこと此の上ない。先づ云ふと、大人一人の部屋代日に參拾五錢、炭石油拾五錢、布團一枚拾錢、湯錢八錢、計六拾八錢、小人は二才以上此の半額である。米は向うで焚いてくれて、一升四拾七錢。結局子供二人を大の一人に見て、大人四人が、一日五圓はかゝらない。(米代、座敷、炭石油、湯錢、布團其他一切)高いといふても、卵位ゐで、他は高田で買ふ位ゐの野菜や果物の値。結局これ丈が二週間ゐて(十八日まで)宿屋への拂が、煙草や醤油や菓子や一切入れて五拾圓に足らず、高田で仕入れておいた食料だつて貳拾圓に滿たぬ。茶代を拾圓おいたが、それでも全部で八拾圓以内。唯、往復の自動車が高い、歸りはぶらぶら歩いたが、(女房と子供と荷物丈は馬に乘せた)その往復、往は九圓余、歸りは參圓。高田でまだ私は古本屋を漁り、本少々、道具屋で繪を少々買ふだけの餘裕があつた。唯名古屋からそこ迄行くのが莫迦らしい。然し他に比べて結局安價だらう。總費用百參拾圓以内、(高田宿泊は無料)然し貯金は是でフイ也。

とにかく朝晩の涼しさたらない。寒いとは聞いたが驚いた。それに朝夕の霧のひどいこと。町住居の者では迚も嘘としか思へない。關山驛から關まで二里の山路を、途中に茶屋が一軒あるきり、全く高原の氣分だ。夜などは、遠くの方の灯が一つか二つ光るだけで、默りこくつた山の姿が寂しい。しかし星はいつも細かく散らばり、丁度十三日頃からは月が美しかつた。月を見ては湯に入り、湯から出ては月を見た。ここでも盆踊の太皷の撥はトン／＼響いた。かうした所にはつき物の、聲のいい追分の名手、老婆がゐて、それが女湯にゐる時は、喝采だつた。概して平民的な、大抵貧しい人たちが多かつた。然し後には、大分赤倉から逃げて來た連中で殖ゑた。赤倉は、宮さまの見にろ所から、唄もうたへぬ、肌一つ脫げぬ、警察がやかましいと、この關へ避難した不心得者が多かつた。山には夏だといふのに鶯が啼いてゐた。子供が蕨を摘んで來たりした。温度は、赤倉が八十五度なら、こゝは八十度。赤倉へも時々散歩に行つたがつまらぬ所だ。唯高原の中の廣つぱで、遊園地だ。設備が文明だといふだけ。温泉場の氣分はない。

暗いランプの湯場、そこでダニに食はれ乍ら、夜十時、十二時に入つたあの面白さ、あのノンキさが忘られぬ。尻きりトンボになつたが、十八日に高田へ歸り、十九日休養。その晩本屋歩き、二三の安い本と繪を買つて、二十日の夜歸宅した。これでおしまひ。(著者)

江戸人の性的犯罪

江戸人の性的犯罪を横から觀ようとするのである。即ち當時の幕府司直が下した刑法の一班を査ねて、之を觀ようといふのである。物、必要なければ生ぜず。此の種複雜なる處刑の幾條を生じたのも、必要已むを得ぬからで、乃ち當時の都鄙一般に斯かる痴的犯罪が頻出した憑據であらうと思ふ。〔幕府は、士以上の者には、別に刑法を設けなかつた。然し士以上にも無論この種の犯罪が多かつた。然る時は、この庶民の刑法に准じたことは無論である。〕

先づ、公事方御定書一卷（寫本）に依つて此れを見よう。此書、左の奥書を有する。

右御定書之條々元文五庚申年五月松平左近將監を以被　仰出之前々被
仰出之趣並先例其外評議之上追々伺之今般相定之者也

寛保二壬戌年三月二十七日　　牧野越中守

〔次に、「越中守御役替ニ付寛保二戌年六月代被仰付　大岡越前守」とありて、以下青山因幡守、鳥居伊賀守、阿部伊豫守、毛利讃岐守、松平和泉守、………、以下數十の役替を經て、「甲斐守（曲淵）御役替に付文化十三子年七月代被仰付　榊原主計頭」で副署を終つてゐる。〕〔但しこの公事方御定書は、本來は、寛保二年の物は單に御定書と稱し、以後追加修正せられ、延享二年これを公事方御定書と改名したのである。故に、本文は、此の牧野越中守奥書以後の、修正も含んでゐると見ればならぬ。現に本文所々に、何年極追加と斷つてゐる。〕即ち此の公事方御定書は、その骨子寛保二年三月に於

て相定まり、爾來三年を經て、延享二年名實兼備の公事方御定書となり、爾後文化十三年七月頃までは確實に此の條文に據つて、處決せられたものと見て可からう。然し寛保二年以前、元文五年五月に、已に此の御定書の母胎が出來てゐることは、前の牧野越中守の奥書に依つて知れる。元文五年に先例の輯修出來、(十五册、これを法度書と稱したと云。此年五月の事。)それが二年を經てこの寛保二年の刑法編纂、延享二年の追加、即ち寛保より數へて文化十三年まで七十余年間之が踏襲厲行されたものである。元文五年の物、若しくは、その以前各時々の町觸、定の類は今檢索しうべくもないが、とにかく寛保延享――文化間の「公事方御定書」の條項によつて、その前後の幕府法令の一般を知るに足りようとは思ふ。休題、以下は則ち此の「公事方御定書」に據つた、性的犯罪處刑の全部である。以て江戸時代此種處刑の一般となすに足りるものである。

密通御仕置之事

從前々之例
一密通いたし候妻　死罪

同
一密通の男　死罪

寛保三年極追加
一密通の男女共に夫殺候はゞ　無紛においては　無構

寛保三年極追加
一密夫を殺妻存命に候はゞ其妻　死罪
但若密夫逃去候はゞ妻は夫の心次第に可申付

同追加
△一女同心無之に密通を申掛け家内に忍入候男を夫殺候時不義を申掛候證據於分明は　男女共　無構

同　同

一夫有之女之密通之手引いたし候もの　中追放

從前々之例

一密夫いたし實の夫を殺候女　引廻の上　磔

　但實の夫を殺候樣に勸候歟又は致手傳殺候男獄門

寬保元年極

一密夫いたし實の夫に疵付候もの　引廻の上　獄門

寬保三年極追加

一主人の妻と密通いたし候もの　男は引廻の上　獄門　女は　死罪

從前々の例

一主人の娘え密通の手引いたし候もの　死罪

寬保三年極追加

一夫有之女得心無之に押而不儀いたし候もの　死罪

　但大勢にて不義いたし候はゞ頭取獄門同類重き追放

同　同

一密通御仕置妻妾都而無差別

（以上は、姦通罪に關する處分である。）

寬保二年極

一養母養娘並娵と密通いたし候もの　男女共　獄門

同

一姉妹伯母姪と密通いたし候もの　男女共遠國　非人手下

（以上は、近親相姦に關する處分である。）

同

一離別狀不遣後妻を呼候もの　所拂

　但利欲の筋を以の義に候はゞ家財取上江戸拂

從前々之例

一離別狀を不取他え嫁候女　髮を剃親元に相歸ス

　但右之取持いたし候もの過料

從前々の例

一離別狀無之女他え緣付候親元　過料

　但呼取候男同斷

（以上は、重婚に關する制裁である。芝居でする四谷怪談の民谷の如きは、彼が町人だつたら、さしづめ此の前々條に適中しよう。）

寛保元年極

一主人の娘と密通いたし候もの　中追放
　但娘は手鎖かけ親元に相渡

同

一主人の娘え密通の手引いたし候もの　所拂

寛保三年極追加

一幼女え不義いたし怪我致させ候もの　遠嶋

同　追加

一女得心無之に押而不義いたし候もの　重追放

從前々之例

一夫無之女と密通いたし誘引出候もの　女は爲相歸　男は手鎖

同

一下女下男の密通　主人え引渡遣ス

寛保四年極追加

△一他之家來又は町人等下女と密通いたし忍入候もの　男は江戸拂　女は主人心次第可爲致

從前々の例追加

△一夫有之女と密通いたし候男に被賴女を貰掛候もの　所拂

（此の意味不明である。夫これ有る女と密通いたし候男に賴まれ、女を貰ひかけ候ものといふのか。即ち、姦夫の妻を貰はうとした、姦夫の厄介拂を引受けたものといふのか。）

延享二年極追加

一夫有之女艶書は度々取替候得共密會不致儀無紛においては　男女ともに中追放

（以上は、私通、強姦、姦通未遂等の條項である。）

緣談極候娘と不義いたし候ものの事

元文五年極

△一緣談極置候娘と不義いたし候男　見屆候段無紛においては　無構

並娘共に切殺候親

寬保五年極追加

△一緣談極候娘を不義いたし候男　輕追放

但女は髮を剃親元え相渡す

（所謂、お染久松、お駒才三の類、すべて此の法令に觸れれば觸れ得るので、古來、いやな結婚を無理強ひされた娘、それに同情した男のすべては、此の法令の前に幾度あはれな犧牲を出したことか。）

男女申合相果候者之事

享保七年極

△一不義にて相對死いたし候もの　死骸取捨爲吊申間敷候

但一方存命に候はば下手人

同

△一双方存命に候はゞ　三日晒　非人手下

享保七年極

△一主人と下女相對死いたし　主人存命候はゞ　非人手下

（相對死と名づけたのは、八代吉宗が、大岡忠相に諮つての事だといふ。〔但し此の享保七年極は、七年度に決定の意か。內外發布は、凡ての記錄之を翌八年二月の事になしてゐる。德川實紀其他、凡て然りである。〕とにかく、心中者の制裁は、右の通り享保八年より變改なく實行せられた。新內の伊太八尾上の類か、未遂の爲非人手下になつた實說などは、凡てこの法令からである。尙、後に、相對死禁令のその享保度の悉しきを揭げよう。）

女犯之僧御仕置之事

元文四年極

一寺持の僧　遠嶋

享保六年極

一所化僧の類　晒の上本寺觸頭に相渡寺法之通可爲致

寬保二年極

一密夫の僧　寺持所化僧の無差別　獄門

以上が、「公事方御定書」から拾ひ出した性的犯罪とその制裁一斑である。

更にこれを、御改正御定百箇條（安政六年二月。寫本一册）なるものと對比して見る、乃ち此の性的犯罪の條項に於て、多少の增減（寧ろ要約）あることを發見する。御改正御定百箇條は、奥書に、

右御定之條々元文五庚申年五月松平左近將監を以て被仰出其後寛保二戌年四月御改其後兩度御改の上今般御改正相成大切之儀に付其掛役人之外猥に他見有之間敷もの也

安政六未年二月

寺社奉行　松平伯耆守
町奉行　池田播磨守
勘定奉行　大澤豐後守

とある、即ち幕末法令の綱領である。内、性的犯罪に關する制裁に就て、此の百箇條と彼の公事方御定書との異同點を査ねて見よう。即ち、前掲公事方御定書の性的犯罪の各項に、自分がその頭に△印を付したものは、異同のあるものである。即ち最初からいふと、寛保三年極、追加の、女同心無之に密通を申掛け家内に忍入候男を夫殺候時不義を申掛候證據於分明は　男女共無構といふのが、百箇條では、

一女得心無之密通申掛口口家内に忍入候男を夫殺時全不義申掛候證據於不分明は夫中追放

と、變つてゐる。次の　夫有之女え密通之手引いたしもの中追放　といふのが、百箇條では削除されてゐる。更に、　密夫いたし實の夫に疵付候もの　引廻の上獄門　といふのも、百箇條では無い。主人の娘と密通云々の條では、主人の娘え密通の手引いたし候もの　所拂　といふのが、百箇條では、無い。女得心無之に押而不義いたし候もの　重追放　といふのもない、他之家來又は町人等下女と密通いたし忍入候もの　男は江戶拂　女は主人心次第云々　といふのも、闕け、　夫有之女と密通いたし候男に被賴女を貰掛候もの　所拂　といふのも闕けてゐる。要するに、煩を削り、要を詰めたと云ふべきである。

「緣談極候娘と不義いたし候ものの事」の中の二條、　緣談極置候娘と不義いたし候男並娘共に切殺候親　見屆候段無紛においては　無構　といふのもなければ、緣談極候娘と不義いたし候男　輕追放云々　といふのもない。相對死の項では、多少の異同がある。即ち

一男女申合不儀相對死候はば死骸取捨爲弔間敷

但男存命に候はゞ下手人　女存命に候はば三日晒の上非人手下、双方存命に候上は三日晒の上非人手下

一主人と下女相對死致、主人存命に候はゞ非人手下　下女存命に候はゞ中追放

といふのである。

以上の他で、即ち寛保二年以前、性的犯罪の禁令として、見當りたるものの二三を左に列擧してみよう。（主に徳川十五代史に據る。）

一密懐ニ他人妻ニ輩、於ニ其所ニ男女共討留者、不レ可レ有ニ子細ニ、證據分明者、申出候はゞ、穿鑿之上、可レ處ニ男女同罪ニ、然上者爲レ私、不レ可レ遂ニ遺恨ニ事、

（明暦元年十月十三日　發令せる「江戸町中定」十九條の中一）

一、町中ニテ、女童ヲトラヘ、下々共ナブリ、ムダ口ヲ申掛、或ハ酒ニ醉不作法成義申者於レ有レ之者、町人者不レ及レ申、武家召仕タリトイフ共、其所ニ捕置、早々奉行所エ可ニ申來ニモノ也。

（元祿七年十一月　令せるもの）

更に、寛保二壬戌年三月改の奥書ある幕府仕置一件帳御仕置定書（日本社會事彙所載「即ち公事方御定書の前本と見るべきか。」）なるものを見るに、前掲「公事方御定書」より頗る箇ではあるが、往々、彼に無きものがある。即ち彼と重複せざるもの、異項の全部を左に拔き、以て公事方御定書の補足としよう。

一、押而密通致候出家は死罪、女は得心の義に無之といへども不同に付髪を剃り親へ渡す。

一、主人の後家と於密通は、後家下人共に追放古例。

一、主人之女房臥居候處へ忍入、又は艶書を於遣は死罪古例。

一、女房致欠落、又は外の者と夫婦に於相成は、新吉原へ永被下候。

一、主人の娘を申合候て於誘引出は所拂。

一、夫有之女を奉公の内、傍輩と於致密通は男女共死罪古例。

一、主人の妻と密通の上、右女を可切殺と元主人方へ踏込候者は、引廻獄門、女房は死罪。

一、主人の妻と致密通候處、下人助命の義夫願出候に付非人の手下に申付、新吉原へ年季無限相渡。

以上の條項である。尚、寛政年間修正したもの（同、日本社會事彙所載。但し此者、實は寛政二年、松平定信等の修正增補になつたもの、延享の公事方御定書の百條に、三條を增したといふ。）といふものゝ中に、前掲と重複の嫌はあるも、強姦罪に於て二個、特に明瞭なる具体的な箇條がある。それを尚補つておく。

一、夫ある妻妾を強姦したる者は、死罪。

一、幼女を强姦して折傷したるときは遠島、死に至らしむれば、獄門。

さて、以上性的犯罪の中、姦通は最も重きをおいてゐることとは無論であるが、然し此の姦通も多くは示談で濟んだものらしい。現に七両二分とは、姦通の代償金として有名である。然し蜀山人の「金曾木」にいへる如く、江戸は七両二分、大阪は五両二分であつたといふ。大阪の方が下値であるのは可笑しいが、それ丈姦通を輕視したのか、（土地淫靡の風甚しくて、姦通の如きも尋常茶飯事の如く見做すに至つたのか。）又は所謂流行らせて金儲けをした所謂美人局流の跋扈があつたせゐかも知れぬ。然し江戸でも後には七両二分が五両に値下げせられたらしいのである。その證據として、「賣女の内で高いのは五両なり」等の川柳を擧げる事が出來る。（これについては、外骨氏の「私刑類纂」に悉しく、尚他の痴情犯罪に對する私刑を該書に列擧してゐる。）

尙、相對死について、大岡越前守（忠相）が享保八年二月に發布した禁令の全文を擧げておかう。

一、男女申合ニ而相果候者之儀、双方共自今、死骸取捨可申付候、一方存命ニ候ハヾ下死人ニ申付ケ、繪双紙又ハ歌舞伎狂言ニモ不爲致、尤死骸弔ヒ候事停止可申付候。

一、双方共存命ニ候ハヾ、三日サラシ非人ノ手下ニ可申付候。

一、此度大阪ニ而主人ト[illegible]ストト申合セ相果テ候者之儀、主人存命ニ候得共、下人ノ身トシ

テ主人ニ對シ不屆候間不レ及ニ下死人一非人ノ手下ニ可申付候。惣而此類ハ向後右ノ通リ可被申付候。以上

最後に、一個異色な禁令を拔載しておかう。德川十五代史（内藤耻叟）第四卷、承應二年の條に現はれてゐる物であるが、男色道の禁令として、自分の見當つた最初である。

一、頃日、町中ニテ衆道之出入有レ之候、跡々ヨリ堅ク御法度ニ候間、衆道之儀申カケ候モノ有レ之ニ於テハ、申カケ候者迄、急度曲事ニ可ニ申付一候、若左様之無作法之モノ候ハヾ町中ノモノ隨分異見申、承引不レ申候ハヾ、早々御番所ヘ可ニ申上一候事。（同五月）

德川家光は既に死んで居らないが、彼は有名な衆道好將軍、乃ちその薨後間もなき承應の二年五月（家光の薨は、慶安四年四月二十日、この發令の二年前。）に、此の衆道の禁令出でたるを、彼家光は地下に在りて何と見たか、蓋し苦笑の蔽ふべからざるものあつたらう。

以上を以て、一先づ禁令より見たる「江戸人の性的犯罪」の一走りとする。

〔姦通は、大阪にも嚴令行はれ、丁度江戸に於て明暦元年十月に現れたと同文のもの、同月十三日に掟として發布されてゐる。〔大阪市史第三（卷四九―五〇）〕但し此の「密懐他人妻輩……」の前項に、一條左の如きを別に掲げてゐる。

一、夫相果無二相續之子一、家屋舗後家令二進退一、無程下人與密通而忘二亡夫之恩一、不レ憚二諸親類一女は拂二其町一、夫之親類以二相談一家屋舗可レ致二相續一事。

後家の不品行を戒めたものだが、これが又惡意ある親類共の罠となり、不義のなき名を負はされて、その貞實な後家と、お家に忠義な番頭とが、追ひ出され、そのあとへ强慾な親類が横領相續するといつた悲劇もないではなかつたらう。現に講談種として、我等往々にして見受ける所のものである。」

追記――今、この餘白に、尙云ひ洩らしたこと、即ち一般幕府法令書の變遷、特に前掲、御定書(寬保)と、公事方御定書(延享)と寬政の增補などについて、その變移を約說しておかう。即ち、幕府は、以前は、武士以上以外、庶民僧尼等に關する一定の刑律書がなかつた。時々の各觸、掟、又は各奉行等の任意の裁判に依つた。それが元文五年、家康以來の諸條例を輯修して、一法典を成した。(十五冊、法度書と云ふ)。寬保二年三月に、更に刑法類を主に編纂、御定書とした。(百箇條あつた故、御定書百箇條ともいつた。)延享二年これを更に修正、公事方御定書と改名した。更に寬政二年に三條を增して、百三條とした。但し此の時の名稱は、前例公事方御定書をそのまゝ追うた。それが更に安政六年改正されて、御改正御定百箇條とした。さうして安政の御改正の奧書中の、「其後兩度御改」とは、延享二年と寬政二年との兩度を指してゐるものであらう。即ち自分藏本の、公事方御定書は、寬保、延享、寬政の修正改補の凡てを含んだもの、否、幕府全時代の法度綱領とも見るべきである。日本社會事彙などより、自分が前掲の如く引いたものは、或は、寬保のものは、此の公事方御定書の基本であり、寬政のものは、全く寫本上の些々たる異同で、自分所藏の寫本の「公事方」に據るのみで正しいのかも知れないと。以上。

歌麿と英泉畫く

○

重い藤の花房が、雨に濡れてしなつてゐるやうな、

「うたまろ」の美女の國、神聖化せられた媚笑の國よ。

或者は盃を口に啣ふ。或者は子に乳房を含ます。或者は、江の嶋詣の鮑取に見惚れ、或者は不忍の池を相合傘に走る。面長の、眼鼻立すつきりと、丈長きその黑髮よ。

神聖なるエロチツク。淨化せられたる魅惑、顏の線の、特にうす紅色の別摺のあと、なつかしきことよ。

寬政から文化文政を大きなそのシーンとして、昌えに昌えた「うきよゑ」の唯一典型となつた「うたまろ」よ。民衆藝術が、或は音曲に、或は俗文學に花と咲き出した中に、ちやうど君は、繪畫の上に、眞乎の民衆藝術を樹立した。さうしてそれは、偶然にも西の國の畫家鑑賞家をも驚異せしむべき線と色彩との齎らす、あらゆる效果の神髓にまで到及してゐた。おお浮世繪師、うたまろよ。

マダム、マダム。あなたは、うたまろの版畫のやうな顏です。顎の括りのなつかしさよ。し

かしあなたには、うたまろの版畫を生んだ江戸の背景がない。蕭條と雨の降る驛路や、蒲目薄尾花の枯れ〴〵な曠野や、或は今よりより多く心も體も壓迫させられた封建時代をシーンとして考へるとき、私は、あなたの存在よりも、うたまろの版畫の存在を、神秘だとも或はその反對に當然だとも、祝福したいやうな、いみじい悦びのやうな、さまざまな心に打たれるのです。

まことに「うたまろ」の美女は、悲しい桎梏にあつた江戸人が、やつと產み出した逃避の國、幻想の花園、はかない耽美、思慕の下に、一瞬の苦を忘れようとした、生命の泉であつたのだ。うたまろの名は、私に不盡の春を送る。その名を呼び起すと、私は甘い、咽びたい、噎せたいやうな氣になる。永劫不斷、命の春……。

うたまろ、うたまろ、…………………。

山姥や難波屋おきたや、瀨川や、おさんや、梅川や、お糸や、柳櫻をこきまぜたさまざまの顏。その匂ひ。

なつかしさ、床しさ、遣瀨なさよ。

○

櫛や笄や重たげに頭に支へて、稍伏目に、睫毛の長い眼の色。青い色のかがやきを見せた唇、上唇の赤が艶かしい。すべて板畫の美人中、唇の紅に靑の綠を用ひたのは、歌麿に剏まつたか

も知れぬが、（現に歌麿の作畫に間々見うける）恐らくこの畫家の妙手、獨壇塲であらう。彼英泉は、文化文政の空氣を吸うた。頽廢し來つた江戸の士風の流れをうけて、彼も亦壯時武士であつた。間もなく人の讒言に逢うて、官を逐はれた。彼は、素直であつたらうか。或はイコヂな性格であつたらうか。晩年無名翁隨筆（彼の筆作。浮世繪類考の增補。）で、自分獨り高しとする矜持の態度がある彼は、潔白は潔白であつたらうが、壯時から、傲岸な、人と相容れぬ所があつたかも知れぬ。

彼は、役者を河原乞食と罵つた。物の本にも、彼は俳優を嫌つて、一生それを描かなかつたとある。しかしそれもどうだか分らぬ話だ。彼の作畫、一枚繪には、役者はさら／＼無かつた。しかし彼の作畫の草双紙或は讀本（よみほん）の挿畫には、時々當時の所謂彼の唾棄したといふ名優の面貌が寫象されてゐると思ふのが、無きにしも非ずだ。

それにをかしい事がある。彼は、謂ふ迄もない遊君畫家である。青樓の描寫、閨房の秘情に於て、第一人者であつた。遊女と河原乞食、その間何れ程の差があるであらう。何れも媚を賣る卑しい稼業のものではないか。それに、彼は平氣で、中年期を根津遊廓の一樓の主人で暮した。名義は彼の義弟であつたにもせよ、彼が實質の營業者であつたことは、彼の頽廢を是認した心では當然な事であつたらう。武士の身分（それが雀の舌ほどの扶持（ふち）であつたにもせよ）から、女郎屋の亭主、その宙がへりの甚しいことよ。それにしても頽廢に徹底したやうに見ゐる彼が、河原乞食に表面反感を持つたのは、どうしたものだらう。彼の頽廢から流れ出る愛情は

今様美人拾二景の内しんきさう　　英泉画

遊女のみを容(ゆる)し、河原乞食を容さなかつたのであらうか。（或は、それが彼の怜悧な點で、役者繪は、畫名上の大敵たる豊國、國貞輩に讓り、趣味と得意と兼備した、美人のみに趁つた、その狡猾さが糊塗する彼の辭令だともいへる。）彼は、どんな心持で、遊女や其他の賣女を描いたのであらう。稀には素人の女房や娘子供迄描いてゐる。然し彼の描いた顔は、何處までも彼だけの顔である。睫毛の濃い、唇の厚い、腫れぼつたい、挑發的な、さうして背の低い、腰の屈んだものばかりだ。然しその畫面を沸々として湧き出る彼の賣女讃美の氣分、性の國の黄金化、それには、初心な若い男女は誰しも顔を背向けずにはゐられぬであらう。彼は、何處までも、一種藝術的好色漢であつた。女性崇拜の一代表であつた。

然しその描かれた女性が、蠱く男性の欲情の的、靈的に美化といふよりも、直ちに實感挑發の域にまで及んでゐる。そこに彼のパラドックスの意味の崇拜があつたかも知れない。男性――特に彼一個の享樂、翫弄の對象としてである。

とにかく、古往今來、彼ほど自分のこの趣味、變態な藝術欲を擅にした畫家はなかつた。私は、女性を淫情の巣として取扱つた點、深い性の國の澱に滲入し穿貫した點で、彼を自分より傑(え)らいと思ふ。或る意味で、彼は偉大な人格、まして偉大な藝術家といひ得るであらう。

私は、十一代將軍家齊、丁度化政期を手裡に握つた彼(か)の有名な放蕩將軍よりも、率直なさうして、恐ろしい程な性の穿入を敢へて試みた英泉を羨ましいと思ふ。勿論それも私の享樂的な半面からである。

フェノロサの板畫優越論

フェノロサの板畫優越論を、此の機會に紹介しておかう。今となれば別に不思議もないが、身は外人であり、而も明治年間に於て、既に此の板畫優越論、卓拔なる浮世繪藝術論あつたことを偉とし、異とせねばならぬ。すべて明治三十一年四月十五日刊、故小林文七氏發行に拘る「浮世繪展覽會目錄」（和紙和裝、中本。序二、緒論六、本文五十一枚より成る。序、重野安繹、緒論、本文共にフェノロサ氏執筆の日本文。本文は、展覽に附せる小林氏藏品の肉筆及板物の明細なる解說也。）の緒論より、之を拔く。左に先づ掲ぐるは、同氏が浮世繪藝術一般論也。

外人をして浮世繪を賞揚措かざらしめし理由は、今や日本人の興味を喚起せんとせるものに等し。第一浮世繪が平民美術の一派にして、歷史的特殊の價値を有せること是なり。貴族は其權勢を諸般の事物に及せるが如く、又美術にも之を及したれども、權勢は美術に於ては大抵頽廢の種子たり。即ち德川時代の狩野派土佐派の美術は寧ろ悲しむべき無變動の狀態に陷りぬ。加ふるに此の如きは多く抽象的思想又は虛僞的社會の美術なること、猶十八世紀に於ける佛蘭西宮廷の美術のごとし。たゞ其保護者の想ふ所を知らしむるのみにて、遂に其保護者の何人にして又何事を爲すやを知らしめず。吾人は希臘の平民美術の一瞥を得んが爲には何の惜しむ所かあらん。吾人が數世紀以前の歐洲の平民美術を知るは獨り板刻に據るのみ。日本にては德川時代に至るまで、實際平民美術と稱し得るものなかりき。德川時代の緊要なるは啻に大名武士の行爲のみならず、又平民が自ら進んで獨立生活を營むに至りしにあり。貴族は其主義、文學、又美術をば盡く過去又は支那より得來りしも、平民は遂に何等の先例傳說を有せず。

然も猶自己特有の趣味、智識、又文化を開發し、以て今日の國民生活に對する大責任を果しぬ。試みに想へ、若し日本が足利時代の蒙昧より、一躍して直に今日の輿論を基させる立憲政治に至りたりとせば、果して如何なるかを。元祿以降江戸平民の富饒なる生活は、實に今日の國民の學校たり。通俗の歷史小說、演劇、繪本、精細なる道中記、科學的事業の初步、是等はすべて平民の階級よりして其名譽ある起原を發し、而して浮世繪は此新傾向の驚嘆すべき特殊獨立の美術にして、畫工、手訣、標準、題目、及趣味につき、古代又は同時代の貴族派より得たる處殆ど無し。其大事業は板繪の印刷、殊に之を色摺にする發明にあり。こは單に美術を廉價にし、全國民をして之を得易からしめ、稍今日の新聞紙の功用を果したるのみならず、又その性質に適應せる色彩布置の新方法の發明を促し、以て簡單なる平衡及調和に關する根本的原則を注意せしめき。若し外人にして斯の如き社會學的興味ある日本の事物に專心留意すとせば、日本人は此國家的精神發展の必要なる一部——縱令微賤なりと云ふとも——を釋了するに於て、一段の奮發を爲さざるべからざるなり。

次に、同氏の板物（內筆畫以外版畫の義。）の優越價値、東西比較論を摘載しよう。眞に浮世繪藝術價値發見の雷聲である。

されど外人の浮世繪殊に其板物を賞するは、他に大に理由の存するあり。即ち普通の見解を以てするも、是等板物が純乎たる審美學的優秀を有するにあり。歐洲板物の愛翫家又蒐集家にして、最上の日本古代板物、例へば奧村政信、春信、淸長、又北齋の板物の、意匠及手訣に於て、明に審美學上世界の好標本なるを確信せざる者一人も無し。巴里の浮世繪板物の大蒐集家の一人は彩色印刷を業とせる大工場の長たり。紙の撰擇、紙質、線彫刻の性質、色の度の平坦、並列、重疊により、如何にせば最も簡單廣濶巧妙なる結果を得べきかの智識は、擧げて板物に存す。こは西洋人にとりては完全なる一の啓示にして、工藝美術のみならず、工藝美術のあらゆる原理は實に之によりて變更せられぬ。西洋人が浮世繪を愛するの深理は此美術が繪畫の根音(キイノート)所謂樂典を彈ぜるに在り。若し美術が澗渋、色目、大小、形狀の調和的關係に從ひて色彩を點綴するにありとせば、かゝる困難なる湊合に奏効せんには、先づ

其最も簡單なるものに熟達せざる可からず。而して其最も簡單なるは、大小、形狀、濃淡、及色目をたゞ二色を用ゐて配置するにあり。肉筆は調子の一致及純潔を得るに困難なれども、平坦なる木版より印刷せられたる板物は、簡單なる着色を與ふること容易なり。かるが故に薔薇色及綠色を用ゐたる清信の諸作、又寶曆年間に於ける清信の繼續者の諸作は、簡單なる色彩排列の最上乘の文法となり、其完全にして一致せるは希臘裝飾の最佳なるものに比して勝れりと云ふも可なるべし。而して清滿の三色摺、春信の六色摺に至りては、此文法の絕妙の修辭法に達せるを見る。西洋にては能く此點を理會せるが故に、工藝品製造所圖案學校より審學校に至るまで、孰れも是等の板物を蒐集し、以て生徒用の極めて有益なる標本とせり。全世界中美術の根本的原則の最豐富なる出所は即ち板物にて、圖案科の教授は最上級の生徒に對し、之に就きて審美學上の講義を試みつゝあり。板物の表はせる諸原則と歐洲美術の純潔なるもの、即ち希臘、十四世紀の伊太利、又ミレー、コロー派の佛蘭西美術の原則とは調和を失ふこと無くして最も簡單に又最も鞏固に、是等普通の諸原則を現出せるは板物なるに、日本人がその美術教育上の無雙の價値を認めざる唯一の人民なるは奇とすべし。單純、一致、調子、濃淡、又調和即ち往々今日の日本美術に缺くる所は夙に茲に明示せられぬ。

邦文浮世繪研究書中の一大異彩であり、且つ該研究發達史上の唯一の或る時期を劃せるものでなくて、何であらう。而も人々は永き間、此の板書藝術の價値を知らなかつたのである、否これに聽かうとはしなかつたのである。眞に一先覺、颯爽たる論議と謂ふべしである。然るに未だに邦人美術愛好者間にありて、此の板畫の優越價値に知了せざるの士頗る多し。彼輩、此の一外人の堂々たる比較論に豈赧顏たるなきを得ようや。如何。〔余分なことであるが、故フェノロサ氏の日本美術に對する殊に浮世繪に對する業績は、誰知らぬ者もないが、尙くはしくは、梅澤和軒氏の「芳崖と雅邦」中にも出でてゐる。フェノロサ、一八五三——一九〇八〕

大正十三年九月二十七日印刷
大正十三年十月一日發行
第二十五冊（每月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

本文

並木正三の『第一日本和布刈神事』
『艶道俗説辯』と不知足山人
『小唄夜話』と『誹風柳多留拾遺』

第二十五冊

「小唄夜話」と「誹風柳多留拾遺」

「小唄夜話」は湯朝竹山人氏の近業である。震災當時不在にせられて、折角纏つた原稿を多數灰にしながら、とに角これ丈に近業を輯修されたのは偉とすべきである。寄贈を受けたその日から直に讀みにかゝり、今では略方讀み終つた「氣の利いた文である、歌謠研究の趣味風味、小唄雜話、洒落た小唄と端唄、鴨綠江節の調査、音曲耳學問、涙香先生の好きな俚謠、俚謠正調雜記、信州小諸あたりの印象、罹災原稿の追憶、俗謠拙著の紹介、追分節資料手記（小笠原久恒氏）、はやま小唄と云ふ名稱に就て（英十三氏）の全内容である。歌謠研究の趣味風味は、歌謠研究の書目其他を親切に列擧して、後學の徒に便利な事頗る多い。小唄雜話以下は、例の「趣味の小唄」式の氏の小唄に於ける面白きノートの集りである。涙香先生の好きな俚謠も、涙香氏と氏との關係も分り、且つ近世俚謠發達史上、涙香氏の記念塔を要求する隨一記錄である。罹災原稿の追憶は、氏の業蹟の如何を知るに足らしめ、また附錄として、小笠原氏の追分節資料、英氏のはやま小唄の名義考は、氏の「趣味の小唄」に現れた追分の研究、はやま小唄全集のはやま小唄名稱の發義に對する好增補として、前二著と併せ讀むべきものである。小唄に關する記述は、氏の畢生の事業たる以上、該博有益ならねばいふ迄もないが、行文また極めてこれを行るに適したイキな筆である。がさて今度の氏の本から受けた私の最大感激は何かと聞かれたら、私は言下に「小諸あたりの印象」を擧げたい。こは、氏が昨夏病を得て信州に入り、途次大震災に遇ひ、京阪から東上するまでの、氏としての稀な人生記錄の斷片である。それが今度の大震災を背景として、痛ましくも如實に描かれてゐる。昨年九月中旬、氏が東上の際、私は來訪を受けたこれで始めて同氏を識つたのであるが、その折悉しくは聞かなかつた氏の生活、背景がこの文にあり〱と染み出てゐる。妻も子もない六無齋同樣な氏が、唯一の有とした藏書（それも半生の事業たる小唄の）を灰燼にした同氏の哀傷は、昨年面識の際、これ程とは思はなかつた。あの氣の利いた、イキな小父さん、決して新聞記者タイプは見えない、同氏の諸分知りの風丰、しかも涙を堪へてゐた氏の哀傷が、今度の此の文で新たに私の胸に蘇るのを覺えた。ここに私は特殊の感激を與へられたのである。私と同時に面識された小笠原氏（古潭）も同樣の感があらう。内輪話はこれに止めるとしても、氏の淪寂たる今の境地を慰めるものは、小唄宗の天下の諸君の此書に對する喝采、協贊に越したものはなからうと思ふ。敢て眞先に小さな推奬を灯す所以である（四六版本文三二四頁布裝、壹圓八拾錢、東京市外日暮里谷中本十八、新作社刊）

○

「誹風柳多留拾遺」は、今井卯木氏の校訂に成つたもの。柳多留拾遺が、一名川柳大全ともいつて、川柳研究者の必具のものであることは、門外の我らも知つてゐた。さうして、それが從來嘗て活字に載らなかつたことをも。それが今度同氏の嚴かなる校訂を經て、新に美裝されて出でたのである。自分は、東京堂に注文し、中々來なかつたので、中京川柳社にいひ、更に發行所へかけ合、購入したと同時に、東京堂よりも郵送してきた。結局二冊まで背負ひ込んだが、餘分の一冊はすぐに人が購つてくれた。それ程いゝ本である。裝訂も今井氏の自費出版だけあつて贅を盡してある。特別染の布表紙、和綴。コロタイプの口繪を數葉附してゐる。校正も嚴格である。それに、この本のいゝことは、内容が分類されてゐることである。春、夏、秋、冬、賀、離別、羈旅、戀、哀傷、釋教、神祇、故事、戰場、青樓、鄙ぶり、思はせぶり、戲場、雜上雜下の以上に別たれ、全篇本文四一二頁、横長本である。是非好著として迎へられ、同氏の勞に報ゆること多大であつて欲しい。筆勞に對する世上の賞讃こそ一ばんうれしい慰安である。同樣此感なき能はぬ。したがつて一層おとり持したい。（著者）

並木正三の「日本第一和布刈神事」下

巻之第三ノ續　梶原館

造り物向ふ一面の金襖、惣縁付二の手の西にあづち的あり。幕の中より二の手の東のかたに、龜丸片肌をぬぎか け、白木綿にて腹たまき矢を射て居る。腰元もみぢ若葉見物して居る。傍に卷絹ちくさ打萎れゐる躰にて幕ひらく

といつた樣子。こゝへ土肥千葉兩家から、姉と妹の鏡臺、手箱、或は琴箱、貝桶いろ〳〵持運びくる。奴が口さがない噂、やがて足早に歸つて行く。と、表から打かけ姿の平治が妻榊葉が、神詣でから腰元打連れ歸つて來る。ト、榊葉と卷絹ちくさとの應對。「お二人午ら打揃うて、ようお出で遊したなア。」卷「此程は父上樣にもお目にかゝらぬ故、お見舞に參りましたので厶りまする。」ち「わたくしとても同じこと。御見舞にまゐり申して厶りまする」榊「これはようこそお出遊ばしました。御覽じませ的矢の稽古、ヲヽ龜丸、この間より大分拳が堅まりましたわいのふ」「母さま今日は矢つぎが致しようござりまする。」榊「その筈、精の出たのが見えまする。イヤ卷絹さま千種さま、おまへ方は男平三樣を御見舞ひにお出でと成つたじやないか。」龜

丸が射まへをなせほめてやつて下さりませぬぞいなア」巻「さいなお先刻から心で譽めてをりまする。たつしやなことで厶りまする。」千「イヤもうきやうな事で厶りまするなア」榊「ソレおばご様方の御褒美ありがたうおもやア」龜「伯母様御ほうびのお詞ありがたう厶りまする。」おなじやうの挨拶は、氣を張弓と知られける。榊葉廣間を見るよりも、榊「ハテ合点の行かぬ、ありやお前がたのお手道具、いつの間にもつて來た。お二人様様子はどうで厶りまする」。こゝで榊葉が不審顔になる。姉と妹は、當惑したが、「譯は、父様がお歸りになつたら知れませう」と口を噤んで語らぬ。と、そこへ、「殿様のお歸り」、平三景時が歸つて來る。景時、不機嫌面でおる。「ヤア千種卷絹、うぬらは去られて戻つたな。」卷千「あい。」景時二人に目もくれず、「コリヤ兵太、靜めが胎内には義經が種を懐胎なれば、大切の科人、奥座敷へ押込、嚴しく番を仕れ、きつと申渡したぞ。早く／＼。」兵「ハア、、」早く／＼に醒井兵太、網のり物に引添うて奥座敷へぞ入りにける。卷「ヤア、扨は靜様をあのごとく俘にして御歸り被成しは。」平「鶴が岡にて某が望んで預るアノ靜め。判官びいきの大名めら、身が威勢に恐れ手出しはならず、大勢かゝつてやつさもつさ。聞えた、わいらは去られて戻つたので有らうがの。」星をさゝれておとゞひは恨しげにッヽとより、卷「さられたかとは聞えませぬ。夫土肥の次郎どの、倿人讒者の娘をば女

房に持つも汚らはしい。隙をやると此一腰が暇のしるし。」千「わたくしとても同じこと、千葉の助どの一門に家の顔よごしとあかぬ中をば去られたは、とゝさんお前の心から。」卷「もとのやう女夫(めうと)にして。」卷千「下さりませいなア。」ト右と左に戀と義理、一ト方ならぬ二た思ひ、心を察して榊葉も胸に迫りし貰ひ泣、梶原が空吹く風、煙草のけぶりすつぱ〳〵……と來た。……所へいづくよりか乘物をひた〳〵〳〵と舁き据ゆれば、早見の金五郎、謹んで、金「宇都宮彌三郎樣が御內意の御使とて、此乘物舁き据ゑ歸られましてムります。」平「ムヽ、是も大方推量した娘菊町めを離緣したる乘物ならん。ヤア娘菊町苦しうない、早く出イ。」と呼はる聲に乘物より、友若「宇都宮よりの使それへ參つて申上げふ」ト、中より出づるは、友綱が一子友若、明けて十二の上下姿、大小さすが武士の奧と呼るゝ菊町も夫に離れて、しほ〳〵と出る我子に手を引かれ、翼しをれし風情にて跡に付添ひ立出でた。榊葉はまたびつくり、「やアおまへもか。」卷千「姉さまお前も去られしやんしたか。」結局、景時の娘三人全部が離緣されて來たのである。榊葉氣をいらち、「コレ友若殿、御使の口上を早う聞かして下されいよ。」友「おば樣使の口上は、じき〳〵祖父樣へ申せとのことでムりまする。」榊「ムウそんなら早ふ、いざこれへ」。そこで、友若の口上、「申し、ぢい樣、大惡人の梶原が娘なれば、かゝ樣に暇をやる。われも侫

人の孫じや、此の惡名をぬかねば屋敷へ歸るなと仰有つた。かゝ樣を元の女夫にして、わしが惡名もぬけるやうにして下され。エヽおもへば惡人で厶るのふ。」そこで龜丸は、祖父びいき、「祖父樣を惡ういやるとわしが聞かぬぞや」。喧嘩にかゝるを引分けて、榊葉も卷絹千種も結句景時を怨む。榊「やお舅樣、今の友若の口上何となされますぞ。」菊「けふ八十五人の大小名申合せお前の命を貰ひかけしと夫の噂。」卷「私が夫土肥の次郎も一分立たぬと御立腹。」千「夫千葉の助も其通り。」菊「せめて云ひ開きの筋あるならば」、榊「御命を助かるやうにして下さりませ舅御樣。」卷千「コレ申しとゝ樣」とこりやまあ何となる事ぞと泣沈む。景時見向きもやらず、「こりやよつく聞け、頼朝を助けし命の親、八十五人や百人のへろ〳〵武士とはつり合はぬ。言譯もへちまもいらぬ。三人とも一生おばで居をらう」とちつとも屈せぬ大丈夫、金吾を連れて奧庭さして入りにけると來た。跡は四人の歎き。榊「ハテお聞届けない時は」、菊、卷、千「さし違へて死ぬばかり」榊「私が心も同じこと」、で、榊葉だけ殘して、皆々奧へ入る。折から都よりいきせき歸る平治景高、追取刀でずつと通る。榊葉うれしくいろ〳〵。平治「マア挨拶は跡で聞かう。親人に怪我過ちはなかりしか」。無事と聞いて「先づ安堵」。さては、靜が此家に連れられて來てゐると聞いて、大喜び。金吾を呼んで何事か惡事の耳打。榊葉いろ〳〵諫めても聞かぬ。平

治、父の召で奥へ、榊葉伴ひて入る。夫の魂を去り狀代りに抱いた卷絹千種、こゝで都を竊み出す相談よろしくあつて、「サア用意〳〵」、帶をひきしめ〳〵氣をくばるをりこそあれ、

（以下卷之四へ續く）

斯る折から宇都宮彌三郎（その妻は、平三の娘、景高の妹。その妹は景高の妻榊葉。平治と重縁。）義經の首桶を抱へて登場、對客の間に打通る。平三景時出迎ふ。彌三郎は、大小名の名代として來た。義經の首を生けて返せといふのである。義經の含み狀も持參に及んだ。景時、含み狀を懷中なし、首桶に手をかける。平治景高出でゝ、友綱（彌三郎）と論判。「死んだものが生き返る方があるか」と景高がいへば、「其そりや此方から差圖はせぬ。生さるゝか生されぬか平三どのに問うてきけ」。そのうち、孫の龜丸、友若が太刀拔き合せて出る。菊の井、榊葉驚いて、譯をきけば、友若が惡口からきたとの事。祖父がげじげじや、じやないといふのである。菊の井尤もと淚に昏れ、「これ平治樣兄樣、大兄樣の源太樣は諫言ゆゑにこゝ樣の御勘當、その外は女ばかり、お前がなぜ御意見なされませぬ。」といへど平治に一ごなしにやつつけられる。平治は平治で、友若に、「あやまれ。」龜丸に「詫びろ」といふのである。延いては、二人の子供の育て柄の自慢から、母の榊葉（龜丸の母、景高の妻）、菊の井（友若の母、平治の妻）までが口爭ひ。景時仲裁に出て、二人の孫友若、龜丸に、「勝負せい」と命ずる。

「その勝負しだい、この首（義經）を生かす殺すの返答しよう」といふ。二人の子供の亂鬪が始まる。母はひや〳〵危さに目を塞ぎ、また眼をひらいて信ずる神佛とも力をつけあつたが、両方が受け外したる肩先へ双方はつと血ばしる。母が氣は互ひに半亂、抱き留めようにも、景時が尖なる眼差。友綱平治は見向きもやらぬ。子供は愈々切つつ切られつ修羅の苦患、双方へどつと倒れて苦しむを、見かねて二人の母親、思はずかけより（此の數條、作者の筆致精妙を極む。凄慘の場面を如實に點綴し出してゐる。）母「友若やい。」母「龜丸いのう」と呼び生かせば、張りつよく、相手をしとめぬ口惜しさから、「無念無念」と息も絶え〴〵。やがて刀を握りしめたまゝ絶え入る。

母「景時殿、龜丸と友若が勝負は御覧なさるゝ通り、其の首の生死の返答分明に承らう。」景時「返答聞きたくば云つて聞かさう。畠山北條なんどがない智惠を振ひし難題、この首を生せといふは、我が預り歸りし靜に安産させ、義經の家名をとり立たゝせよといふ此の難題。此の死首の活かせ樣、何と斯うだらう。」母「ハ、ア驚き入つたる御賢慮。」と威儀を正せば、景「オツトさうなつたら其方どもの勝手はよいが、斯ういふことかと云つたばかり。」とあつて、奥へ入らうとする。それを靜を殺す氣かと詰る。さすがの平治景高もたまりかねて、此時始めて自分の本心を明かす。親を諫めの言葉である。この程の惡体我儘は、兄源太の正直に懲りて、親と同心

と見せかけて、「實は親を異見のたね。」さ、樣々嘆けど、平三いつかな聞かぬ。一間より醒ヶ井
兵太、「もうし〳〵、梶原樣、押込んである靜めを卷絹樣千種樣が奪ひ取らうとなさるゝ故、
番人共が支ゆるうち、ごつと吹來る一まくり、番人どもは吹き倒され、うろたへ廻るそのうち
に靜めもお二人も行方知れず、御注進々々。」平三「ヤア狼狽者、早く追つ付けい」。鯛「ヤアうれ
しや土肥治郎千葉之助、しづか御前を迎ひの手筈、首尾よく御伴させせんため異見にことよせ隙
どつたり。サア命の切羽、手を拱いて降參するか」。平治「但し讒者の名を取つて末代恥辱を殘
す氣か」。平三「ヤアくど〳〵しき異見よばはり。靜めを奪られし不孝者、追つかけさせて引
くゝり、面縛せん」ト首桶携へ、座を蹴たてゝ、一さ間に入りにけると來た。彌三郎、縋る女
房を振り切つて、心强くも驅りゆく。アト菊の井、榊葉の愁傷。子に先だたれて何とせう、ド
ド二人とも自害。平治景高も、「兄源太殿に惡を以て惡心を飜がへさせて見せんと番うた詞の
中譯、平治景高お先へ參る」さ、腹十文字に切さき、止めさゝんと取なほす。さ、平三「ヤアヤ
ア平治、止めをさすな。云ひ聞かす仔細あり。暫し〳〵」と聲凜然、平三景時烏帽子大紋、首
桶をかかへ立いづれば、平治「ヱヽ、親ながら愛相のつきた極あく人。仔細とは何と」。平三「ヲヽ
助からぬと見し故、我本心を先立し妹や娘へ言傳する。梶原が實正は此の御首への申譯、若し

くこゝも曾時こたへよ。ト（首實上座にすゝめ、シーンの有を直しおき禮（以下、諸氏善言なれど、從來嶺文き戯時の義臣ら座を下り、烏帽子を疊にすりつけ／＼（以白に事實なれば、全文を戯せることゝし面白いさ思ふ）（チート）ト言先此ごとく我首を義經公の御前に直し、我實正を一紙に認め、合狀にて申譯仕らんと存せしに、過去の因縁のがれずして、伊達錦戸が心變り、天命つきさせ給ひしは、さてぜひもなや殘念や。抑々義經公を讒言せしは、平家西海の浪に沈み、源氏凱歌を上ぐるの時、我は逆櫓の爭ひより、諸軍の心を一致させんと都に歸り、旅館せしに、當今の內勅とて、大納言重虎、われを招き、此度の合戰源氏の凱聞。しかるに今度賴朝へ追討仰せ付けられし平家こそ討ちとるべきに、帝の正統安德帝海に入らせ給ひしうへ、神寶失せさせ給ひしは、是全く賴朝が武勇にほこり、王位を望み、義經にいひ含め、かく斗らひし物なるべし。總じて今度の軍立、帝を助ける手段もなく、王位たりとも恐れざる軍慮の程こそ不審なれ。其上汝軍中に都にのぼり窺ふこと、賴朝が斗らひにて、帝位を奪ふ大望ならんと、以ての外の逆鱗、言譯あらばいへ聞かんと思ひ設けぬ難題。察する所これらの公家ばら、大望あつて賴朝公の御身のうへ、帝へ讒言するものならん。すは鎌倉の御大事と心づくより思慮をめぐらし、此度の合戰まつたく賴朝が軍慮にあらず、安德帝を助くべき旨申し含めて候へども、義經武勇に高慢し、かかる疑ひ蒙りしは、是義經が科なりと、心に思はぬ讒言は、賴朝公を助けんと、思ひ込んだる

わが存念。重虎が思ふ圖に當りしにや、汝が詞にいつはりなくば、諸神諸佛を誓ひにかけ、誓紙を捧げ義經が善惡を告げしらせよ。若し他言せば賴朝が身上なるべし。よく〳〵心得申べしと退引ならぬ手詰の誓紙。ハヽ、畏まり奉ると、恐ろしき神文して、重虎に渡せしは賴朝公の御身をかばひ、この身をすてる覺悟とも知ろし召されぬ義經公、西海の手柄に慢じ、酒食に溺れ、剩さへ源氏重代の白旗紛失、ハア南無三寶、斯くて義經堀川の御所にましまさば、帝の御怒り强く、終には鎌倉の御大事と思ふに付けても我君に、わけていはれぬ讒言は、源氏を長く傳へんため、又讒言に讒言を重ね、難なく都を開かせ申し、義經公は奥へ下り、秀衡が館につき給ふ。ハア心易やと思ふ折から、重虎我を密かに招き、備前之助を語らひ、王位を望むと非道の工み。早速一味と領承し、心に思はぬ連判して、備前之助が奪ひおきし御旗を賴みの印、ヱヽ嬉しや鎌倉に立歸りなば、此のおん旗を奥州へ密かに送り參らせんと思ひしかひも情なや錦戸伊達が心變り落命ありしと御沓を鶴ヶ岡にて見し時の、此景時が胸の苦しさ、悔むに效なく、此のうへは、義經の御弔に命を棄て、死後に至つて此のおん旗、梶原が奪ひおきたりとせめて御名をすゝがん爲一倍ましたる惡口雜言、とは知らずして、嫁むすめ、悴や孫が一すじに命をすてての諫言も眼前に見殺しにせしは主人を讒せし梶原が血脈を斷ち切つて、義經公へ申

譯、せめての其方が死しなに、安堵させんと只今まで、包みかくせし一大事、明すは則ち御首へ申上る我が心底の一通り、御聞き届け下されかし」。

と、（やつとこれで終つた。中村歌右衛門がそのかみ、いかに名優であつたにもせよ、この長ぜりふには、弱らされたであらう。）あつぱれ源氏の大忠臣、佞人讒者の名を取りし類稀なる義臣なりと來た。平治との愁嘆よろしくある處へ、常「ヤア、梶原、犬死するな。暫し〳〵」と雲中より聲をかけつゝ、生首引つさげ、常陸坊海存忽然として現れ、いふ所を聞けば、義經の首は江田の源藏が身代り。義經公は無事、以後「義經公のかげ身にそひ、御身をやつさせ、寶劍のおん行衞を尋ね求め、疑を帝都に晴さん。」といふのである。平三「イヤ、義經公存命とあつては、梶原これ迄讒言せし其功空しくならん。其の死首にわざとつれなくもてなさば、八十餘人の大小名愈々怒りの氣を發し、恨の刄に梶原が命すつるは本望なり。若し我死後に義經公、京鎌倉に御入あらば諸士の面々心を亂し又御兄弟の不和とならん。」常「ヲヽ、尤も至極の咎なり。十握の御劍手にいらば、其時こそ六十餘州に望みなき判官殿の御供し、蝦夷が千島におし渡り、唐高麗をも攻め靡け、四百餘州に我君の清和の氏をかゞやかさん。和主が秘密の忠節は、餘人の耳目にさへぎらぬ海存より外知る者なし。且末世まで梶原が讒言の舌頭に義經公落命ありしと云ひ傳へ、唐と日本に御連枝の枝葉を榮え申させんは、梶原が義を感

じ、此の常陸坊海存雲に跨がり、浪に乘る仙術秘術の計略あり。ちつとも氣づかひし給ふな。」景高これで「ハ、アたのもしや」。思ひおくこと更になしとて落ち入る。ト、矢一つ來つて、景時の左の股に中る。宇都宮友綱、弓矢携へ、アト八十餘人の大小名、口々に覺悟〳〵と取卷く。景時は、相變らずの佞人ぶり。しかし海存の通力にて、大小名は、景時によりつけぬこなし。海存せり上り、立ち別れゆく。アト、梶原、腹へ刀を突つ込む。始終ドロ〳〵にて、宜しく幕。

（靜は、友綱のせりふのうちに、卷絹千種が働きにて助け出し、土肥治郎、千葉之介二人の夫に手渡したとある。さうして卷絹らは、其座にあつて自害した、あつぱれ己れに似合はぬ貞女、といふのである。何處までも割の惡い役廻りなるかなだ、梶原はである。惡と見せかけて、實は善だといふ仕掛は面白いが、それが梶原たる點に於て、奇拔、恐らく古今隨一だらう。それに海存の口上によつて、作者は、支那金の始祖、淸皇室の祖が義經だといふ所謂史外史傳――浮說にしろ、それを働かしてゐる。渡邊氏の「世界に於ける日本人」の中にも、此の義經滿洲開拓說は悉しく紹介されてゐるが、この並木正三の當時既にこれをとり入れる丈の、この傳說が時人にも諒解されてゐたものらしい。義經蝦夷渡海の傳說は、近松門左衞門の院本「源義經將棊經」（寶永三年刊）にも現れてゐる。江戸期この種浮說が行はれたことは、「判官びいき」流行の心理からも否めぬが、滿洲渡海說の並木正三は、稍珍、且つその日本支那双立の理由か、附會とはいへ、この戲曲の展開には理窟づけられて、自然に出でてゐる。梶原の表面徹頭

徹尾の俠人ぶりも面白い。

且つ、龜丸友若の血戰は、丁度、「蝶花形名歌島臺」の八冊目にもこれに似た話が現れてゐる。小坂部兵部は祖父と、その娘二人は、羽柴の臣加藤正淸と、大内の臣出海左衞門宗貞とに嫁き、生れた笹市（加藤）、松太郎（出海）の兩兒が、祖父を、互ひの家に味方づける爲、面前、血戰するのである。しかし慘虐さは、此の和布刈神事の方がより多い。蝶花形は、寛政五年七月十六日初日、若竹笛躬、中村魚眼の作。並木正三の安永以後である。恐らく、若竹等は、此の和布刈に暗示を得たものであらうか。」

○

中村歌右衞門が座元であり、且、その特殊なる性格變化の表現を持たした故、折角の梶原の儲役（或は損役か）を沒しまいと、大車輪で以上長々と梗概し終つた。その爲、折角のアト二幕が書けなくなつた。それにアト二幕は、この梶原の斷末を峠にして、その鳧を結ぶに過ぎぬから、（多少のヤマはあるが）極の略筋に止めておく。〔現に梶原館の爲、作者は、この根本(ねほん)の一冊半（卷三の半より卷四全部）の量を費してゐる。以てこの場が當脚本の見せ場であることが知れよう。〕

卷之第五　和布刈ノ海

靜は、隼部(はやとも)明神の巫女千早となり、義經は藥賣三平となりで、邂逅、相戲れる。又海女の若

和布刈神事巻之五の挿繪

松と漁師喜作とが通ずるのを、雁九郎に妨げられる。禰宜の又五郎（實は平敦經）、海中の光り物に、寶劒のありかを知る件、幕。

巻之第六 第七　海女老松の宅

老松は、若松の母である。實は、平家の臣伊賀平内左衞門が妻。此家に建禮門院をかくまひおく。ト、茲へ喜作鎧入りに來て、喜作實は源太景季と分り、生田の森の戰物語をする。〔よくある手、實盛、直實、敦盛に遠からず〕結句、若松と仇同士であるが、景季は、一圖に寶劒探索、京へ持ち歸り義經公の寃罪を云ひ譯する心底、それ迄は惜しい命、また建禮門院の身も安泰を計らひ申さんといふ。さういふ景季は、生田で親

の平内を殺した敵であるが、戀は強し、建禮門院の粹な捌きによつて、母の勸當うけて、景季との女夫約束が叶つた、若松喜悅。さて雁九郎、踏入を邪魔しに來てゐたが、後己れは、佐々木盛綱であるといひ、「寶劍探索の爲に、水練稽古いたし、汝は知らねど此方は知つたる梶原源太、主君義經を親の仇と害せん爲かとつけ狙つたれど、打つて變つた心底、寶劍をもろとも探索なし、親の罪亡しなさんとは殊勝、此の上は義經公に、お目見えさせん」と首尾よく妥協が調ふ。處へ、備前之助行家、大綱言重虎の命を含んで、「雁四郎、建禮門院を召捕つたか」と催促に來る。〔行家は、この脚本では、反義經方である。重虎も、建禮門院につられて、この邊へ來てゐるのである。〕それが雁四郎は義經方、重虎に仇する者と分つて、行家家來ども取卷く。このひまに、若松、寶劍を取りに、海底に急ぐ。返し。

卷之第七續　利布刈の神事

千早(靜)と若松と、仕丁又五郎(敦經)、各々海底に入りて、寶劍を求める。〔こゝに、所謂る和布刈の神事の故事を作者は利かしてゐる。〕ト、せりあげ。

卷之第七續　龍宮城

安德天皇、在らせらる。又五郎對面、名乘り合ふ。安德天皇は、山田の大蛇の再來、龍の都

風水龍王の化身であるゝ知れる。敎經いはく、「一ノ八嶋の合戰に、安藝の太郎兄弟を小脇に挾み、入水ゝ見せ、今日まで存命せしは、時節を待つて平家の御代に飜さん爲。印さして神璽寶劍二品を我密かに守り奉り、先達つて隱しおきたるに、このめかりの海の光り物、心得ずゝ神職に身をやつし、尋ね來つてこの仕合せ、扨は先達つて隱しおいたる劍は贋物でありしよな。」「ヤアいふにや及ぶ。實の劍はこれこゝに」ゝ差出し給ふを、恭しく袋を開くその中に、樣子伺ふ若松、千早、それやつてはゝ取付くを拂ひのけ、打伏せ、敎經、寶劍をよく〳〵眺めて「ハヽア天晴これこそ十握の寶劍紛れなし」、一座の龍王跋提側「してまた贋の神璽寶劍は何處に」ゝ問はれて、「うつかり、讃岐の沖の二ツの嶋に、岩を穿つて隱しあるゝいふかゝ思へば、宮殿樓閣忽然消え、豐前の沖、岩ほの上に茫然たる、岸に義經、龜井片岡伊勢駿河以下、安德帝を守り奉つて控へ居る。敎經「こは何事にゝ驚けば、義經いはく、「常陸坊海存の仙術にて汝をたばかり、贋ゝいつて眞の神璽寶劍の在處を聞かう爲の、からくりであつたわやい」ゝきた。敎經、無念ゝあせる海上には、海存、すでに、〔今、敎經の自白を聞くも聞かぬに、早、讃岐まで行つて、眞の二寶を得て歸つたのである。意想外の工夫、今時の忍術物そこのけだ。〕本物の神璽寶劍を得て歸つたゝ報告する。ト、義經、敎經に降參をすゝめ、「源家に仕ふる所存はなきか、何ゝ〳〵」。「ヤア穢らはしき一言」、たうゝう敎經は、自害する。ト、梶原源太、佐々木三郎、

重虎と備前守に縄をかけ中に引さげ走りつく。忠、重「もとの起りはこいつら両人」。重忠「両人はいで首を刎ねい」。迚おいゝせに両人が首うちおとしよろこびの聲は八隅のすみまでもおさまりなびく御大將御夫婦中も義經公兄は日本の惣追捕使弟は東國のさくるみ主神と君との道すぐに千鶴万龜とかきおさむ。幕。

和布刈神事卷之第七大尾

といふのである。長々の連載、以上を以て不本意乍ら、「和布刈」の紹介總りとする。正三の作劇ぶりの概念が、これによつて得らるれば幸甚である。挿圖の例として、卷五の總り二面の縮寫を掲げておく。又五郎（敎經）は、歌右衛門の扮裝である。光り物、波浪、岩、鐘成の筆を見る一例として、且つ圖としても一ばんまとまつてゐると思うた故である。

〔附記、この根本七冊は、尾、京、阪の合板である。參考としていふと、卷七の末尾奥付に、右に義伊勢物語　全部七冊近刻　とあつて、左に、上に、文政十歳丁亥春王正月上浣吉日發兌とあり、下に・尾州　名古屋本町十丁目　松屋善兵衛　京都　寺町通御池上る鈆屋安兵衛　浪華　心齋橋通唐物町　河内屋善兵衛と三行にある。尾州が筆頭であることも尤らしい。即ち「北齋漫畫」などの永樂屋と共に、尾陽出版史の唯二の記錄であらう。〕

『艶道俗説辯』と不知足山人

半紙本型、青表紙、最近入手したものである。「艶道俗説辯巻之一」とある。巻之二以下既刊なりや否や、未詳。巻之一は、序二丁、品目一丁、本文十五、計十八丁のもの。表紙ウラの扉には、

不知足輯
艶道俗説辯
悦丸梓

とある。悦丸といふのも分らなければ、不知足といふのも分らない。然しこの不知足なる名には、自分は初對面ではない。身元素性分明ではないが、嘗て面識はある。

嘗て雜誌「浮世繪」誌上に、自分が物した「艶本に現れたる春信の推奬」なる一文中に紹介した春信書の艶本の序、その文末、二個の印の一に、この不知足山人があることはいうた。（「浮世繪」第四十四）

號參照）上の印は奇山氏、下は不知足山人と讀める事、既記の如しである。この不知足山人である。此の「艶道俗說辯」も、硬さうで稍軟ら味を負びてゐる物。艶書本に序を描いた不知足山人の輯さしては尤もである。がさて、この不知足山人の名に馴染が出來ただけ、一層その正体が知りたくなつたのである。「浮世繪」誌上では、その艶本の中にある襖の繪に、歸山筆と落款せるを根據として、奇山氏、歸山氏同人ならずや、或は、春信は不知足山人、奇山氏即ち春信かと疑つておいたが、しかしこのかゝる別著「艶道俗說辯」の如きあるを見ては、この言は全く誤りであるとして、訂正しなくてはならぬ。即ち、不知足山人は、立派に春信以外、實在の人物である。少くとも、この「俗說辯」の著者であり、及び艶書式、女容辯斷等（この二種の著、「俗說辯」の序に出づ）及び春信の艶本に序を物した男といふだけでも、多少輪廓が分つてきた。しかし本氏本名は杳として分らない。梓元の、「悅丸」といふのも何だか分らない。女悅丸などのふざけ氣持からではなからうか。春信艶本の序尾の印に、一方、奇山氏と讀める事はいうた。すれば、やはり、この男の姓は、この奇山の一休、崎にかゝりあつた物でありはしなからうか。見當の付けやうもないが。この面白い疑問の序でに、不知足山人の輯著ぶりを紹介するため、その片鱗として、左に、「艶道俗說辯卷之一」の序文（全文）、品目（全）、本文の二三を揭げておく。以て彼の輪廓捕捉の一端

となり得ばである。彼の年代は、無論、春信生存當時の寶曆明和の頃と見てよからう。現にこの序の終りにも、己丑季冬とある。是れ明らかに明和六年である。丁度春信の歿年同七年の前年である。無論其頃の一風流學徒ではあらう。

詩に鶉の奔々を刺譏に禽獸麀を聚にするを戒む。嗚呼聖人の訓を埀る事嚴なる哉。君子は是に則て豁然として惑はず。小人はこれを聞て而も迷ふ。小人理を失ひ自欺き是を誣ゆ。これ誤謬の端なり。累世轉傳して爲は焉と成り馬と成る。是誤謬の成れるなり。茲におゐて俚言譫々として虚實を別つ事能ざるに至る。悲ひ哉。近世好色者流妄説を逞ふして先達を恥しめ。邪淫を好ンで艶道を黷す。余不敏なりといへども竊に艶書式。女容辨斷等の書編をなして同志にしめし。今又世俗膾炙する所の彼道に闇れるの有を蒐輯して。其由て來る處を校へ其あやまれる所を正して後輩に授け。相倶に蕕を芟薫に培ひ邪を矯て正に歸せしむるの一助とす。童蒙婦女是を以て階梯とせば。小き補ひならんはあらじと云爾

己丑季冬　不知足山人書

艶道俗説辨　巻之一

品　目

〇男女わかくして縁變を赦さぬ說　〇結納を言入れといふ說　〇女葉男葉の折形の說　〇夫を丹那といふ說　〇女房といふ說付上﨟と云說　〇頭を五もじと云說　〇新造といふ說　〇偕老同穴の說　〇水あびせの說付礫打の說　〇結び文に夕の字を書く說　〇かよふ神の說　〇三重の帶の說　〇褌をおくらぬものと云說　〇花筐の說　〇忘れ形見の說　〇背に蜘蛛出れば待人來らずと云說　〇かひなしと云說　〇じくねると云說　已上

本文の例として、「結び文に夕の字を書く說」、「じくねるといふ說」の二を擧げよう。

〇結び文に夕の字を書く說　世俗封じ文にメの字を書、むすび文に限りて封じめに夕の字をかく事通用の文法にて男女ともにこれを用ゆる也　按るに艶書より起れり　懸露集に云文はうつくしき薄やうに書て丸くむすびて上にさだかならず行といふ文字を封のやふにひろく引也とあり　しかれば夕の字は行の字のやつしなりとしるべし

〇じくねるといふ說　おもふ中の小いさかひとてむつましき間にもいさゝかの事に口舌して互にひぞりあひ中の直りそこねたるを野俗にじくねるといへり　按るにいやしき詞なれども其ゆへあるべし　たゞくねるといふべきにや　くねるといふはねたみ恨るなり　おみなへしの一時をくねると貫之もかゝれしなり　かやうの言葉よりいゝ出しけるならん

變哲もないものだが、たゞであつたら、その儘書庫の塵に埋れべきものが、前年の自分「浮世繪」の一文に多少係りあひのあるばかりに、こゝに推して紹介と出でた。詮索する程もない、案外、凡庸な、女用物筆作者の一であるに過ぎぬのかも知れぬ。然し當時聲名嘖々たるものあつた春信の艶本に序した傍例あるに氣が付いて、隅へもおけぬと思うたからである。

大正十三年十一月五日印刷
大正十三年十一月八日發行

第二十六冊（毎月一回一日刊行）

本文

江戸時代小説（翻刻物）索引

一、假名草紙の部。　二、浮世草紙の部。
三、讀本の部。　四、滑稽本の部。
五、笑話本の部。　六、洒落本の部。

不知足山人に就て（鶴岡春三郎）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十六册

不知足山人に就て

鶴岡春三郎

江戸軟派叢書上尾崎氏の艶道俗説辯と不知足山人を讀み心付きたる數点を記して著者の垂教を得たいと思ふ。

先づ順序として氏が曩に浮世繪第四十四號で艶本に於ける春信の推奬といへる題名の下に記された艶本の正體からして解決して行きたい。氏が認めて春信の作とせられた、この不知足山人の印章を捺してある艶本は、青表紙上中下の三冊ものである。余の見たものも題箋がとれて居て書名は判らないが、此時代の細見などの題名法から考へて序文にある「姫小松」といふのが多分外題であつたらうと思ふ。この点は氏も指摘して居られる。

この艶本は果して春信の作であるかどうかは、仔細に觀ると頗る怪しい處がある。といふのは、其の下巻に縫物指南の女主人が春信の畫いた春畫の羽織を見てから中絶した男心を起し、お物師に出入して主なる男をたらす條があるのに依て余は春信が豈夫(まさか)自分の著書の中に自家廣告をする譯もなからうと思ふからである。之れに就て、斯道の研究家某氏は北尾重政の筆ではないかと云はれたが、これも俄に首肯出來ない。

然らば本書は何人の手に成つたのであらうか、サアそれが問題である。余は之れを小松屋百龜の筆であると推定したいのである。

小松屋百龜は既に御承知の通り西川祐信の畫を愛し春畫をよくし其の繪は、祐信のやうな品位もあれば春信のやうな筆癖もある人である、これは彼の作品を見れば何人も頷くに違ひない。のみならず彼は文才あり落語の本を數種類出版して居る、中でも聞上手は實に出色の出來である。此人の作つた右の聞上手に著者が捺さないで誰れが捺すだらうか。これは百龜即ち不知足山人であると思はるゝ節は前記の姫小松の中に他人の女房の〇〇泣きに打込んで百両で〇〇〇〇〇〇〇ても少しも〇〇らず、翌日其の亭主に仔細を話せば、あれは私でござりますといふ落語が上せてあるのに見ても余の推定が獨斷でないことが首肯されるであらう。

扨次に不知足山人の作に成る艶道俗説辯であるが、この本は余の見たものでは卷之五丈けである、今尾崎氏に據つて卷之一を紹介されたのは兄弟が再會したやうな心持がする。試みに卷之五目錄を掲げると、枕繪を具足櫃へ入る說□脚布(キヤフ)の說□新嫁(ハナヨメ)血なきを疑ふ說□産神(ウブスナ)の抓(ツメリ)し跡といふ說□双子(フタゴ)の說□墮胎(コオロシ)の說□春三夏六の說□ふたなりの說□石女(ウマズ)と云說□五不男といふは□五不女といふは□生下未(セウケミ)分(ブン)の說等である。恐らく本編は卷之五で以て終りではないかと思ふけれども判らぬ。未だ後編があるのかも知れぬ。これに就いて讀者の示教を得れば幸である。(大正十三、十、五)

右の御教示について、自分と意見の違ふ點だけを左に項分けにして述べて見よう。

一、あの艶本が、春信畫だらうは未だに確信するといふ事。それは、鶴岡氏がこの本下卷の記事によつて、春信が自家廣告をする譯もなからうと思ふ一てゐられるが、これはあり勝なことである。事實、浮世繪には、匿名又は無名の艶本の上に、時々此の自家廣告の類をやつてゐる。歌麿などは格別多い。

二、あの艶本を春信とする唯一根據は、あの上卷序文の、政豊(政信と豊信)の二信についで、今此ぬし云々と推奬してゐる、即ち春の一信(春信)だと惟へるあの語調である。それにあの畫の内容からも此の序文の意氣込からも、無論百龜の知きアマチユア的畫家、第二流畫家でないことは事實だ。

三、其他は或は御指示の通りかも知れない聞上手の序に、不知足山人とあることの御示は忝じけなかつた。此の說を容れると、即ち此の姫小松の艶本は、序と附錄の文章とが百龜で、内容の畫は春信であらう」百龜の畫であるとすると、鶴岡氏の言を借りると「百龜が政豊二信に張ぐの美人畫大家と自家廣告又は自惚れるのは可笑しいといひたい。

四、聞上手二編は自分にもあるが、序を逸してゐる。小噺十種、滑稽文學全集の複刻二種とも不知是とある、誤植であらう。聞上手が百龜作たる事は動かぬ所、この傍證を以てすれば、「艶道俗說辯」の不知足山人も無論百龜であらう。但し春信艶本にある奇山氏といふのが分らないのである。(著者)

江戸時代小說飜刻物索引

敍

「江戸軟派研究」初編完了に際し、急に思ひたつて、此の索引を作ることゝした。朝倉氏の「小說年表」、中根氏の「小說家著述目錄」新群書類從の「書目」の類も結構ではあるが、こは原本の渉獵容易なるに於て特り其の用を爲すもの、今日の如く原本凡て湮滅し、在るも骨董的高價な喚びなるに於ては、我ら貧學徒には、殆ど直接の用を爲さない。即ち今度自分の試みた此種飜刻物索引こそ、直ちに用を爲すものである。今自分は、家藏の貧寒なるに殆ど據つて、此の索引を爲し終へた。今、第一に小說の部だけ爲し終へて、明治大正聖代の文運旺んに、此の種飜刻の如斯く多量豐富なるものあるに、今更乍ら驚かされた。これ程の量はなからうと思うてゐたのである。爾後自分は、此れを使用して、大に至便を得ようといふのである。事は必要に迫られなければ、生るゝものではない。今私の必要は、自ら此を生んだ。然し自分の必要、それが眞正のものであれば、他に於ても必ず均しきものがあらうと即ち未定稿乍ら茲に此を發表することゝした。無論脫漏、錯誤もあらうが、それは、大方の是正に俟つことしたい。尙、自分に藏本なきが故に、知りつゝ洩らしたものもある。此等は、諸家藏本によりて補足せられたい。第一次はこれであるが、更に機を見て、闕本、淨瑠璃、歌謠、隨筆、及び明治以後 諸家江戸文學風俗著述の解題年表等にも及したいと思ふ。以上。

久　瀨　誌

本索引略號一斑

○帝文（帝國文庫五十册、博文館）○續帝文（續帝國文庫五十册、同）○繪本稗史（繪本稗史小說十五册、同）○近世文叢（近世文藝叢書十二册、國書刊行會）○江戸資料（江戸時代文藝資料五册、同）○德川類聚（德川文藝類聚十二册、同）○滑稽全集（近代文藝叢書十八册の中、滑稽文學全集十二册、文藝書院）○人情（人情本刊行會本第一期二十四册。第二期一册。同刊行會）他略す。

目次

一、假名草紙の部
二、浮世草紙の部
三、讀本の部
四、滑稽本の部
五、笑話本の部
六、洒落本の部
七、人情本の部
八、黄表紙の部
九、草雙紙の部

一、假名草紙の部

書名	作者	所收
ア、鴉鷺合戰物語	室町期 不詳	滑稽全集第八
あだ物語	三浦爲春	近世文藝第三
イ、井、伊勢物語平言葉（一名業平物語）	紀賢計	近世文藝第七、擬物語
犬方丈記	不詳	同
犬つれづれ	不詳	江戸資料第四
一本菊	不詳	近世文藝第三、小說
爲愚痴物語	曾我休自	德川文藝類聚第二、教訓
ウ、恨之介	不詳	近世文藝第三、小說
薄雪物語	不詳	同
薄雲物語	同	同
浮世物語	淺井了意	德川文藝類聚第二、教訓
オ、ヲ、をさな源氏	野々口立圃	近世文藝第七、擬物語
をちくぼ物語	不詳	近世文藝第七、擬物語
伽婢子（おとぎばうこ）	淺井了意	近世文藝第三、小說
カ、可笑記	如儡子	德川文藝類聚第二、教訓

書名	作者	所收
かぶきのさうし	不詳	江戸資料第四
歌舞妓草子	不詳	藤井乙男著（江戸文學研究）
キ、きのふはけふの物語	不詳	江戸資料第四（滑稽全集第九）
ケ、雞鼠物語	不詳	續帝文三十二（万物滑稽合戰記）
コ、古今役者物語	不詳	江戸資料第四
サ、草木軍談鷺ヶ爪木	不詳	續帝文三十二（万物滑稽合戰記）
三人法師	或は室町期 不詳	珍書刊行會本（江戸文藝資料一）
シ、新竹齋（一名、竹齋行脚袋）	不詳	滑稽全集第一
七人比丘尼（一名、さんげ物語）	不詳	近世文藝第三、小說
諸分店颪（一名、涙花鉦）	不詳	江戸資料第四
精進魚類物語（一名、魚鳥平家物語）	或は室町期 不詳	滑稽全集第八
ス、水鳥記	地黄坊樽次	續帝文三十二（万物滑稽）／近世文藝第三、小說
角田川物語	不詳	近世文藝第三、小說
タ、たきつけ 上／もえくゐ 中／けしずみ 下	不詳	江戸資料第四

誰が身の上　山岡元隣　近世文藝第三、小說／名著文庫

チ、竹齋物語　不詳　滑稽全集第一

ト、東海道名所記　淺井了意　溫知叢書第一／滑稽全集第一

ニ、仁勢物語　傳、烏丸光廣　近世文藝第七、擬物語／滑稽全集第八

二人比丘尼　鈴木正三　近世文藝第三、小說

錦木　不詳　江戸資料第四

ヒ、貧人太平記　不詳　近世文藝第三、小說／滑稽全集第八

フ、福齋物語　不詳　德川類纂第二、事實

ム、蟲合戰物語　一名、御伽夜話　不詳　續帝文三十二（万物滑稽合戰）／滑稽全集第八

モ、當世尤の草紙　或は室町期の作　不詳　近世文藝第七、擬物語

藻屑物語　不詳　燕石十種第二

ヨ、よだれかけ　楳條軒　江戸資料第四

吉原戀の道引　不詳　江戸資料第四

四人比丘尼　不詳　近世文藝第三、小說

二、浮世草紙の部

ア、赤烏帽子氣質　龜友　帝文三十一（珍本上）

イ、一夜船　一―四　北條團水　帝文三十一（珍本上）

一夜船　五　同　帝文三十二（珍本中）

今樣二十四孝　月尋堂　近世文藝第四、小說

市川正德追善替裝　不詳　新群書類從第三、演劇

狗張子（伽婢子續篇）　淺井了意　德川類纂第四（怪談）

色縮緬百人後家　西澤一風　江戸資料第二

色里三所世帶　西鶴カ　同　第五

ウ、雲州松江鱸　不詳　德川類纂第一、事實

薄紅葉　不詳　江戸資料第四

浮世榮華一代男（原名、好色四季囃、更に浮世花鳥風月と改む）　不詳　同　第五

浮世親仁形氣　同　帝文二十七（其磧自笑上）／有朋堂文庫（八文字屋本五種）

梅若一代記　其磧自笑　帝文三十一（珍本上）

オ、ヲ、置土產　西鶴　帝文二十四（西鶴下）／有朋堂文庫（西鶴上）

織留　西鶴　帝文二十四(西鶴下)、有朋堂文庫(西鶴下)
御伽名代紙衣　其磧自笑　帝文二十七(其磧自笑上)
お伽百物語　鷺水　帝文三十三(珍本下)
御伽厚化粧　不詳　徳川類聚第四、怪談
御伽空穂猿　靜觀堂好阿　同
女大名丹前能　西澤一風カ　近世文藝第五、小説
紅白源氏物語(かう)　梅翁　帝文三十三(珍本下)、近世文藝第七、擬物語
鎌倉諸藝袖日記　多田南嶺　帝文三十一(珍本上)、有朋堂文庫、八文字舍本五種
棠大門屋敷(からなし)　錦文流　帝文三十二(珍本中)
好色一代男　西鶴　帝文二十三(西鶴上)
同　二代男　同　同
好色一代女　同　同
好色五人女　同　同、有朋堂文庫(西鶴下)
好色三代男　不詳　帝文二十四(西鶴下)
好色盛衰記　一名、西鶴榮花咄　不詳　新選繪入西鶴全集驕樂篇第一

好色文傳受　由之軒政房　江戸資料第四
好色小柴垣　醉狂庵　同　第五
好色伊勢物語　不詳　新從書所好　第三
〔但し、此の飜刻は風流伊勢物語と改題せり〕

キ、鬼一法眼虎の巻　其磧　帝文二十八(其磧自笑下)
禁短氣　三編　帝文三十三(珍本下)
近代艶隱者　西鶴　帝文三十二(珍本中)
近代長者鏡　落月堂操巵　近世文藝第五、小説
京縫鎖帷子　森本東烏　徳川類聚第一、事實

ク、寛濶大盡氣質　一洞　帝文四十(續氣質)
寛濶役者氣質　自笑　帝文三十一(珍本上)
寛濶平家物語　其磧カ　近世文藝第七、擬物語
熊谷女編笠　錦文流　帝文三十一(珍本上)
怪醜夜光魂　音久　徳川類聚第四、怪談
關(くわん)東名殘の袂　不詳　江戸資料第三

ケ、傾城情の手枕　其磧　帝文二十八(其磧自笑下)
傾城歌三味線　同　同二十八(同)、珍書刊行會本の中一冊

書名	作者	所收
傾城禁短氣	其磧	帝文二十八（其磧自笑下）
傾城色三味線	自笑	帝文三十一（珍本上）
傾城播磨石	不詳	帝文四十一（四大奇書下）
風流傾城野群談	自笑	近世文藝第五、小說
傾城太々神樂	不詳	同
傾城武道櫻	西澤一風	近世文藝第四、小說
傾城風流杉盃	不詳	同
傾城仕送大臣	不詳	江戸資料第二
兼好一代記	自笑其磧	帝文三十三（珍本下）
東海道敵討元祿曾我物語	都の錦	帝文三十二（珍本中）
元祿太平記（一名、諸藝太平記）	梅園堂都の錦	帝文二十四（西鶴下）、江戸資料第五

コ、

書名	作者	所收
國姓爺明朝太平記	其磧自笑	帝文二十七（其磧自笑上）
國花(家)諸士鑑	雲齋山人	帝文三十三（珍本下）
風流御前義經記	西澤一風	帝文三十二（珍本中）
御入部伽羅女	湯漬翫水	德川類聚第一、事實
古今堪忍記（一名、本朝新堪忍記）	青木鷺水	德川類聚第二、教訓

サ、

書名	作者	所收
五箇の津餘情男	都の花風	江戸資料第二
咲分五人娘	其磧自笑	帝文二十八（其磧自笑下）、江戸資料第三
西鶴冥途物語	不詳	德川類聚第三、通俗
小夜嵐	不詳	同
三千世界色修行	不詳	同
猿源氏色芝居	濟長	江戸資料第二

シ、

書名	作者	所收
子孫大黑柱	月尋堂	德川類聚第二、教訓
心中大鑑	不詳	近世文藝第四、小說
拾遺御伽婢子	柳糸堂	德川類聚第四、怪談
諸國咄（一名、大下馬）	西鶴	帝文二十四（西鶴下）、有朋堂文庫（西鶴上）
諸國心中女（一名、貞女白無垢）	不詳	德川類聚第一、事實
諸國物語	其磧自笑	帝文二十七（其磧自笑上）
諸國武道氣質	不詳	帝文三十一（珍本上）
諸藝獨自慢	福陽軒	滑稽文學全集第三
諸國落首咄	不詳	帝文三十二（珍本中）
諸道聽耳世間猿	和譯太郎（上田秋成）	帝文三十二（同）、滑稽文學全集第三

書名	作者	所收
新可笑記	西鶴	帝文二十四（西鶴下）
新百物語	俳林子	德川類聚第四、怪談
新小夜嵐（一名、地獄太平記）	不詳	德川類聚第三、遍歷
新小夜嵐物語 一名、棹久二世物語	西鶴カ	賞奇樓叢書 繪入西鶴全集（騒樂篇の二）
新色三ツ巴	不詳	江戸資料第二
新色五卷書	西澤一風	江戸資料第五
商人軍配團（うちは）	其磧 自笑	有朋堂文庫（八文字舍本五種） 帝文二十八（其磧自笑下）
商人世帶氣質	其磧	帝文四十（續氣質）
自笑樂日記	自笑其磧	帝文二十八（其磧自笑下）
正月揃	北條團水	帝文三十一（珍本上）
眞實伊勢物語	不詳	江戸資料第五
色道懺悔男（但し此飜刻は、單に懺悔男）	不詳	（單行）
世間息子氣質	其磧 自笑	有明堂文庫（八文字舍本五種） 帝文二十七（其磧自笑上）
世間娘氣質	同	同
世間手代氣質	同	同

せ、

書名	作者	所收
世間母親氣質	南當	帝文三十（氣質）
世間御旗本容氣	升孤	同
世間妾氣質	和澤太郎（上田秋成）	同
世間學者氣質	無跡山人	同
世間姑氣質	龜友	同
世間丹那氣質	同	同
世間仲人氣質	同	同
世間化物氣質	大梁 金陵	帝文三十（氣質）
世間侍婢氣質	蛙文臺	帝文四十（續氣質）
世間長者氣質（浮世親仁氣質後編）	其笑 瑞笑	帝文四十（同）
善惡身持扇	自笑 其磧	帝文三十一（珍本中）
妬（せき）婦人傳	山岡明阿彌	帝文三十二（同）
小兒養育氣質	龜友	帝文三十（氣質）
笑（せう）談醫者氣質	同	同

ソ、

書名	作者	所收
俗つれづれ	西鶴	帝文二十四（西鶴下） 有朋堂（西鶴下）
續小夜嵐	不詳	德川類聚第三、遍歷

書名	作者	所收
タ、當流雲のかけ橋	不詳	江戸資料第四
當世乙女織	錦文流	近世文藝第四、小説
當世芝居氣質	金陵	帝文三十(氣質)
當世銀持氣質	龜友	同
當世宗匠氣質	其風	同
當世傾城氣質	碧舍大梁	帝文四十(續氣質)
當世貞女氣質	不詳	帝文四十(同)
當世誰が身の上	自笑	帝文三十三(珍本下)
玉箒木	林九兵衛義端	德川類聚第四、怪談
太平百物語	不詳	同
男色大鑑	西鶴	帝文二十三(西鶴上)
チ、珍術罌粟散國	其風	德川類聚第三(遍歴) 續帝文三十二(萬物合戰)
忠孝永代記	森本東烏	江戸資料第三
忠義武道播磨石	其磧カ	帝文三十五(赤穗復讐)
忠義太平記大全	不詳	德川類聚第一、事實
千尋日本織	不詳	近世文藝第五、小説
晝夜用心記	北條團水	有朋堂(西鶴下)

書名	作者	所收
地獄樂日記	自笑	滑稽全集第七
テ、手代袖そろばん	自笑	江戸資料第三
庭訓染匂草	松代柳枝	德川類聚第二、教訓
ト、渡世身持談義	其磧自笑	帝文二十七(其磧自笑上)
富宮笥	不詳	德川類聚第一、事實
ナ、名殘の友	西鶴	帝文三十一(珍本上)
傾城難波みやげ	不詳	近世文藝第五、小説
ニ、日本永代藏	西鶴	帝文二十三(西鶴上) 有朋堂(西鶴上)
日本新永代藏	北條團水	帝文二十四(西鶴下)
ノ、野澤名物燒蛤	不詳	帝文三十二(珍本中)
ヒ、百姓盛衰記	不詳	江戸資料第三
古今百物語評判	元隣	德川類聚第四、怪談
美景蒔繪松	市中軒	近世文藝第五、小説
フ、風流軍配團	其磧自笑	帝文二十七(其磧自笑上)
風流西海硯	同	同
風流曲三味線	同	帝文二十八(其磧自笑下)

書名	作者	所収
大和言葉風流俳人氣質	亀友	帝文三十一(珍本上)
風流茶人氣質	亀友	帝文三十(氣質)
風流敗毒散	夜食時分	江戸資料第二
風流比翼鳥	不詳	江戸資料第三
風流門出加増藏	不詳	同
風流呉竹男	不詳	江戸資料第五
風流源氏物語	都の錦	近世文藝第五、小説
風流日本莊子	同	近世文藝第四、小説
風流今平家	西澤一風	同
風流夢の浮橋	雨滴庵松林	徳川類聚第一、事實
武家義理物語	西鶴	帝文二十四(西鶴下)
武道傳來記	西鶴	帝文二十三(西鶴上)(有朋堂西鶴上)
武道眞砂日記(原名、文武さざれ石)	不詳	帝文三十三(珍本下)
武道繼穂梅	石川流宣	江戸資料第三
武道張合大鑑	團粹序(白眼居士作カ)	近世文藝第四、小説
懐硯	西鶴	帝文三十一(珍本上)

書名	作者	所収
商人職人懐日記	不詳	江戸資料第二
筆の初ぞめ	不詳	江戸資料第三
夫婦氣質	不詳	帝文四十(續氣質)
ホ、本朝二十不孝	西鶴	帝文二十三(西鶴上)
本朝櫻陰比事	西鶴	帝文二十四(西鶴下)
本朝藤陰比事	不詳	近世文藝第五、小説
本朝濱千鳥	永井正流	江戸資料第三
ミ、三島曆	不詳	江戸資料第三
亂脛三本鑓	西澤一風	近世文藝第四、小説
ム、胸算用	西鶴	帝文二十四(西鶴下)(有朋堂西鶴上)
メ、女敵高麗茶碗	不詳	徳川類聚第一、事實
ヤ、野傾旅葛籠	其磧	江戸資料第五
野傾友三味線	西澤一風	江戸資料第二
ヨ、萬の文反古	西鶴	帝文二十四(西鶴下)(有朋堂西鶴下)
吉原鑑	不詳	江戸資料第四

吉原つれ〲草　結城屋来示　近世文藝第七、擬物語
世の是沙汰　西楽　同　第四小說
リ、立身大福帳　唯楽軒　江戸資料第二
略緣起出家氣質　自笑　帝文三十（氣質）
レ、戀慕水鏡　山八　江戸資料第四

三、讀本の部

ア、淺間嶽面影草紙　種彦　帝文十六（種彦）　繪入文庫
阿波の鳴門　種彦　帝文十六（種彦）　繪本稗史第十一
逢州（あふみ）排着譚　同　帝文十六（種彦）
松染情史　秋七草　馬琴　帝文四十六（馬琴）　袖珍繪入文庫
朝夷巡島記　同　續帝文七
青砥藤綱摸稜案　前後　馬琴　續帝文三十八（續馬琴）　繪入文庫
復讐奇談　天橋立　一九　續帝文二十一（一九）
復讐奇談　安積沼　京傳　繪入文庫
阿古義物語　三馬　同

ワ、椀久一世の物語　不詳　繪入西鶴全集（驕樂篇第一）
和漢遊女容氣　其磧　江戸資料第五
和國小姓氣質　鱗長　帝文四十（續氣質）
忘（わすれ）花　如酔　江戸資料第五
朝顔日記　雨香園柳浪　同
近江（あふみ）縣物語　石川雅望　帝文三十二（珍本中）　有明堂文庫（石川雅望集）
イ、弄、絲櫻春蝶奇緣　馬琴　續帝文三十八（續馬琴）　繪入文庫　繪本稗史十一
陰陽妹脊山　振鷺亭　繪入文庫
和漢今昔　犬の草紙　曉鐘成　同
ウ、浮牡丹全傳　京傳　繪入文庫
優曇華物語　同　帝文十五（京傳）　繪入文庫　繪本稗史第五
雨月物語　上田秋成　帝文三十二（珍本中）

書名	作者	所收
エ、ヱ、繪本西遊記	馬琴	帝文三十九（同大奇書上）／有朋堂文庫
繪本更科草紙	栗枝亭鬼卵	繪入文庫
長柄長者 繪本黄鳥墳	同	同 繪本稗史十四
復讐奇談 繪本在原草紙	中川昌房	繪本稗史第三
秋葉霊驗 繪本金石譚	文東陳人	同 第十三
繪本亀山噺	不詳	同
オ、ヲ、阿旬殿兵衛實々記	馬琴	續帝文三十八（續 馬琴）
翁丸物語	一九	繪入文庫
カ、甲越軍記	不詳	帝文十九
敵討女夫似我蜂	南仙笑楚満人	續帝文四十八（名家短篇）
敵討裏見葛の葉	馬琴	繪本稗史十四
敵討雨夜傘	嘯月堂重孝	同 十二
重扇五十三驛	梅菊山人	同 四
笠松峠鬼神敵討	松風亭琴調	同 十
川童一代噺	後穿窪山人	德川文藝類聚第一、實事
キ、近世説美少年錄	馬琴	續帝文二
繪本金花談	速水春曉齋	繪入文庫

書名	作者	所收
ク、會談興語門人雜話	振鷺亭	續帝文四十八（名家短篇）
怪談登志男	靜話房	德川文藝類聚第一、實事
近世怪談霜夜星	種彦	繪本稗史十四
觀延政命談	品田郡太	德川文藝類聚第一、實事
ケ、雲妙間雨夜月	馬琴	繪入文庫
復讐月氷奇縁	馬琴	繪本稗史第九
開巻驚奇俠客傳	馬琴	日本文學叢書（[illegible]三冊）
コ、小櫻姫風月奇觀	京山	續帝文十七（京山）
今昔庚申譚	栗枝亭鬼卵	繪入文庫
古乃花草紙	小枝繁	袖珍繪入文庫
サ、雙蝶記	京傳	帝文十五（京傳傑作）／袖珍繪入文庫
櫻姫全傳曙草紙	同	繪入文庫
三七全傳南柯夢	馬琴	帝文四十六（馬琴）／袖珍繪入文庫
復讐奇談 小夜中山	同	繪本稗史第四
繪本三國妖婦傳	高井蘭山	繪本稗史第一
英草紙後編 繁々夜話	近路行者	有朋堂文庫 雅文小説集の中
シ、俊寛僧都島物語	馬琴	帝文四十六（馬琴）

新累解脫物語　馬琴　續帝文二

美少年[illegible] 新局玉石童子訓　馬琴　續帝文三十八（美少年錄）

自來也說話　感和亭鬼武　續帝文五（續馬琴）

深窓奇談　一九　續帝文三十三（兒雷也豪傑）

俊傑神稻水滸傳　知足館松旭・岳亭定岡　續帝文（續一九）（四十四、四十五、四十六の三冊）

寶本淨瑠璃姬物語　狂蝶子文鷹　繪本稗史第三

ス、 墨田川梅柳新書　馬琴　帝文四十六（馬琴）

新編水滸畫傳　馬琴・蘭山　帝文三十六、同三十七

セ、 小說比翼文　馬琴　讀帝文四十八（名家短篇）

占夢南柯後記（三七全傳の第二編）　馬琴　帝文四十六（馬琴）、袖珍繪入文庫

勢田橋龍女の本地　種彥　帝文十六（種彥）

ソ、 相馬將門總猨僭語　如皐　繪本稗史（第五）

驚談傳奇桃花柳水　京山　續帝文十七（京山）

タ、 大盡舞花街（くるわ）始　三馬　續帝文四十八（名家短篇）

刀筆靑砥石文　[illegible]亭琴魚　繪入文庫

繪本道成寺鐘魔記　綠山　繪本稗史二

大經師宗像曆　ちぬ平魚　同十二

チ、 忠臣水滸傳　京傳　帝文十五（京傳）、繪入文庫

椿說弓張月　馬琴　帝文三十九（四大奇書上）

同拾遺殘編　同　同四十一（同下）

千代曩媛七變化　振鷺亭　繪入文庫

ツ、 通俗吳越軍談　帝文二十

通俗漢楚軍談　同

通俗十二朝軍談　同十八

通俗武王軍談　帝文十八

通俗明淸軍談　同

通俗巫山夢　一九　續帝文二十一（一九）

月宵部物語　四方歌垣　帝文三十三（珍本下）

同後編　三千丸　同

竺志（つくし）船物語　村田春海　同、有朋堂文庫、雅文小說の中

テ、 觀音利生天緣奇遇　蓬州　帝文十六（種彥）

ナ、 南總里見八犬傳　馬琴　帝文六、七、八、

楠廷尉祕鑑　帝文二十一

ニ、 西山物語　綾足　帝文三十一（珍本上）

ハ、古今奇談英（はなぶさ）草紙　近路行者　有朋堂文庫 雅文小説の中
春雨物語　上田秋成　有朋堂文庫（上田秋成集）名著文庫の一冊
万（まん）世百物語　烏有庵　德川類聚 第一、事實
八丈綺談　馬、琴　袖珍繪入文庫
ヒ、飛騨匠物語　石川六樹園　帝文三十三（珍本下）繪本稗史九 有朋堂文庫（石川雅望集）
フ、風俗遊仙窟　寸木主人　滑稽全集第七
ホ、星月夜鎌倉顯晦錄　闌山　帝文十七（繪入文庫二冊）
北條五代記　三浦淨心　續帝文十五（後太平記）
本朝醉菩提　京傳　帝文十五（京傳）
本朝水滸傳　綾足　帝文三十二（珍本中）

四、滑稽本の部

ア、奥羽（あうう）一覽道中膝栗毛　二代一九　帝文九（膝栗毛）
イ、潮來婦誌　三馬　帝文十三（三馬）
一盃綺言　同　帝文二十六（滑稽下）滑稽全集第四
田舍芝居忠臣藏　三馬補　帝文四十一（四大奇書下）

マ、松風村雨物語　文東陳人　繪本稗史第三
松浦佐用媛石魂錄　馬琴　同 第一
ミ、操（みさを）草紙（一名、鸚鵡草紙）　淡海子　德川類聚 第一、事實
ム、昔話稻妻草紙　京傳　帝文十五（京傳）
夢想兵衛胡蝶物語　馬琴　帝文四十一（四大奇書下）滑稽全集第七
モ、綟（もぢ）手摺昔木偶　種彦　帝文十六（種彦）
ヤ、情花奇話奴の小まん物語　種彦　繪本稗史第十二
廿三間堂棟材奇聞柳の糸　歙離陳人　繪本稗史第十四
ユ、風流夕霧一代記　振鷺亭　帝文三十二（珍本中）
ラ、賴豪阿闍梨恠鼠傳　馬琴　帝文四十六（馬琴）
ワ、復讐奇談稚枝（わかえ）鳩　同　續帝文三十八（續馬琴）

✓田舍芝居　万象亭　帝文二十二（風來山人）滑稽全集第五
風流田舍草紙　一九　續帝文三十三（續一九）滑稽全集第五
五百崎虫の評判　市川白猿 談州樓焉馬　續帝文三十二（万物滑稽合戰）
ウ、浮世名所圖會　四娟主人　帝文二十六（滑稽下）

浮世風呂　三馬　帝文十三(三馬)、滑稽全集第三、有朋堂文庫
柳髮新話浮世床　初貮　同　同、滑稽全集第四、同
柳髮新話浮世床　三編　纒丈　同、滑稽全集第五、同
滑稽牛島土産　同　滑稽全集第四

エ、ヱ、滑稽江の島家土産　一九　帝文九(膝栗毛)、滑稽全集第六
榮花の夢(滑稽郡郭枕の後編)　龜水軒　繪本稗史第六

オ、ヲ、女浮世床(一名、玉櫛笥)　二代楚滿人(初代春水)　滑稽全集第三
丘(岡)釣話　岡三島　帝文三十三(珍本下)
大山道中膝栗毛　一九　帝文二十六(滑稽下)
お年玉の春　一九　續帝文二十一(一九)

カ、金のなる木　風來山人　帝文二十二(風來)、滑稽全集第六
叶福助略縁起　振鷺亭　帝文二十六(滑稽下)

キ、木曾街道續膝栗毛　一九　帝文九(膝栗毛)、滑稽全集第二
従木曾善光寺道續膝栗毛　同　同　同
狂言綺語　三馬　帝文十三(三馬)

狂言田舍操　三馬　同二十六(滑稽下)
客者評判記　同　帝文四十一(四大奇書下)
魚貝荚記餅酒合戰　不詳　續帝文三十二(万物滑稽)
狂歌著聞集　司馬園盛砂　滑稽全集第八
舊觀帖　鬼武　帝文二十五(滑稽上)

ク、くせ物語(獨癖談)　上田秋成　温知叢書第四、滑稽全集第八、有朋堂文庫(上田秋成集)

ケ、獸太平記　木容堂　續帝文三十二(萬物滑稽)
乾坤三州志　東山園篠齋　同
戯場粋言幕の外　三馬　滑稽全集第五
見外白宇瑠璃　舍樂齋鈍草子　同第七
稽古三味線　一筆庵(英泉)　帝文二十六(滑稽名作下)

コ、金毘羅道中續膝栗毛　一九　帝文九(膝栗毛)、滑稽全集第二
滑稽二日酔　同　帝文二十五(滑稽上)、滑稽全集第二
同六阿彌陀詣　同　帝文二十五(滑稽上)
古今百馬鹿　三馬　帝文十三(三馬)、滑稽全集第四

魂膽夢輔譚　一筆庵（英泉）　帝文二十五（滑稽上）滑稽全集第六

滑稽和合人　鯉丈　帝文二十五（滑稽名作上）滑稽全集第五 繪本稗史第十五 有朋堂文庫の中

滑稽雌黄　桂非皆八　續帝文三十二（萬物滑稽合戰）滑稽全集第十二

滑稽邯鄲枕　龜水軒　繪本稗史第六

サ、

座敷藝忠臣藏　京傳　帝文四十一（四大奇書下）

雜談紙屑籠（反古障子前編）　一九　滑稽全集第六

堀之内詣後編雜司ヶ谷紀行　同　續帝文三十三（續一九）

猿著聞集　岳亭定岡　滑稽全集第八

シ、

上州草津温泉道中續膝栗毛　一九　帝文九（膝栗毛）滑稽全集第二

新（しん）吹　一九　續帝文二十一（一九）

四十八癖　三馬　帝文十三（三馬）滑稽全集第四

人心覗機關　同　同 同第三

素人狂言紋切形　同　同 同第五

○指面草　京傳　帝文二十六（滑稽下）滑稽全集第六

妙竹林話七偏人　金鵞　同 滑稽全集第五 有朋堂文庫の中

身代山吹色　都扇舍千代見　繪本稗史第六

素人芝居　慈悲成　同第十五

ス○つれづれ睟が川　艶好法師（西村定雅）　滑稽全集十二

セ、善光寺道中續膝栗毛　一九　帝文九（膝栗毛）滑稽全集第二

○穿當珍話　黒白山人　帝文二十六（滑稽下）

世帯平記雜具噺　不詳　續帝文三十二（萬物滑稽合戰）

同諌略卷　同　同

異國風俗笑（せう）註烈子　烈子散人　德川類聚第三、遊歴

ソ、そしり草　風來　帝文二十二（風來）

それそれ草　乙州　滑稽全集第八

タ、大千世界樂屋探　三馬　帝文十三（三馬）

はなげは長し面はみぢかし道外物語　三馬　繪本稗史十五

大師巡　一九　帝文二十六（滑稽下）

戯（たはれ）男伊勢物語　頭少々禿齋　滑稽全集第八

太平記餅酒合戰　不詳　續帝文三十二（萬物合戰）

當世杜選商（とじつけあきない）　李慶子　帝文二十六（滑稽下）

當世お多福面　粥腹得心　滑稽全集第十二

チ、忠臣藏偏痴氣論　三馬　帝文二十五（滑稽上）

ツ、茶番樂屋　慈悲成　同二十六（同下）

　つべこべ草　盧・橘庵　滑稽全集第八

テ、再建見物天王寺まゐり　一九閑　繪本稗史第十五

ト、東海道中膝栗毛　一九　帝文九（膝栗毛）・滑稽全集第一・有朋堂文庫

　東唐細見噺　不詳　德川類聚第三、遊歷

ナ、成程根殼一九作　一九　滑稽全集第二

　七癖上戸（一名、新水鳥記）　三馬　滑稽全集第四

　成仙玉一口玄談　大江菊江　德川類聚第三、遊歷

ニ、人間萬事嘘計　三馬・鯉丈　帝文二十六（滑稽下）・滑稽全集第四

　俄ジャ〳〵　不詳　帝文二十六（滑稽下）

　鎌倉大名日待物語二十三夜待　岡山鳥　續帝文四十八（名家短篇）

ネ、根なし草　風來山人　帝文二十二（風來）・滑稽全集第六

　同後篇　同　同

ノ、【蚤蝨蚊狂言】（外題なきを、校訂者が假につけたもの）　不詳　續帝文三十二（萬物合戰）

ハ、俳優家贔屓氣質　三馬　帝文四十（續氣質）

　早替胸機關　同　帝文十三（三馬）

　送麻疹神表　同　同

　麻疹戲言　同　續帝文三十二（萬物合戰）

　【麻疹太平記】　不詳　同

　繪本黴瘡軍談　船越敬祐　同

　花暦八笑人　鯉丈　帝文二十五（滑稽上）・繪本稗史第六・滑稽全集第四・有朋堂文庫の中

　箱根草　鯉丈・春水　帝文二十六（滑稽下）・繪本稗史第十五

　貴色安本丹　一九　繪本稗史第六・滑稽全集第六

　針の供養　銅脈　滑稽全集第十二

　養漢裸百貫　睟川子（西村定雅）　同

ヒ、貧窮合戰記　不詳　續帝文三十二（萬物合戰）

　評判龍美野子　泉山坊・梁鶴州　同

フ、風姿紀文　蟾局子　滑稽全集第十二

風流志道軒傳　風來山人　（帝文二十二（風來山人）滑稽全集第七）
風來六々部集　同　同 滑稽全集第十二
風來紅葉金唐革　不詳　德川類聚第一、事實
古朽木（ふるくちき）　喜三二　滑稽全集第十二
ホ、滑稽誹諧堀之內詣　一九　續帝文三十三（續一九）
反古張障子　同　滑稽全集第二
同　續篇　同　同第五
マ、當世まゝの川（障の川後篇）　川子（西村定雅）　滑稽全集第十二
ミ、宮島參詣續膝栗毛　一九　（帝文九（膝栗毛）滑稽全集第二）

三千世界見て來た咄　壘洲山人　德川類聚第三、遊歷
メ、酩酊氣質　三馬　（帝文十三（三馬）滑稽全集第六）
妙々痴談返註錄　誘馬　帝文二十六（滑稽下）
ヤ、役者必讀妙々痴談　三芝居士　同
役者妙々後の正夢　同　同
ヨ、世の中貧福論　一九　帝文二十六（滑稽下）
ワ、和莊兵衛　前　遊谷子　後　澤井菜　（帝文四十一（四大奇書下）德川類聚第三、（遊歷）滑稽全集第七）

五、笑話本の部

ア、戯聞鹽梅餘史　馬琴　（滑稽全集第十一 帝文三十四（人情本下））
イ、一休咄　不詳　（近世文藝第六、笑話 滑稽全集第九 有朋堂文庫の中）
一休關東咄　不詳　（近世文藝第六（笑話）滑稽全集第九）

いちのもり　來風山人　賞奇樓叢書二ノ一
田舍莊子　續帝文十八（落語全集）
ウ、うぐひす笛　蜀山人　新百家說林二
エ、ヱ、枝珊瑚珠　不詳　（近世文藝第六（笑話）滑稽全集第十）
江戸前嘶鰻　一九　滑稽全集第十一

書名	著者	所収
江戸自慢	三笑亭可樂	近世文藝第六、笑話

オ、ヲ、

書名	著者	所収
落斷六義		續帝文十八（落語）
落噺彌次郎口	一九	續帝文廿一（一九） 近世文藝第六、笑話
落噺見世びらき	同	續帝文廿一（一九）
御伽草	城戸樂丸	小噺十種 滑稽全集第十一
大きにお世話	神眞人	小噺十種

カ、

書名	著者	所収
開卷百笑	露馬	帝文二十五（滑稽名作上）
かるくちばなし		續帝文十八（落語）
輕口斷		續帝文十八（落語）
輕口森の山		同 滑稽全集第十一
輕口浮瓢簞		同、
輕口露がはなし	露の五郎兵衛	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十
輕口居合刀	不詳	同 同
輕口あられ酒（原名、露休ばなし）	露休	近世文藝第六、笑話
輕口都男	不詳	同
輕口福藏主	不詳	同 滑稽全集第十
輕口御前男	米澤彦八	滑稽全集第十
輕口福ゑくぼ	不詳	同
輕口利益咄	同	同 第十一
輕口機嫌袋	松泉	同
輕口耳過寶	洛風之	同
輕口福德利	玉花	同
輕口東方朔	並木正三	同
輕口太平樂	不詳	同
輕口片頰笑	同	同
輕口曲手鞠	同	同
輕口大黑柱	雛蝶亭	同
輕口五色帋	百尺草	同
輕口かたいばなし	不詳	同
河童の尻子玉		續帝文十八（落語）
珍話樂牽頭	稻穗	小噺十種 滑稽全集第十一
話稿鹿の子餅		近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十一

	書名	作者	所収
キ、	開上手	小松百亀	小咄十種 滑稽全集第十一
	同二篇	同	同 同
	開童子	不詳	賞奇樓叢書 三ノ六
ク、	くだ巻	糟喰八月風	小咄十種
	新作落語口拍子		續帝文十八（落語）
	口合恵寶袋	春松子	滑稽全集第十一
	俗諺今歳花時（ことしはなし） 附録口拍子		續帝文十八（落語）
コ、	滑稽即興噺	京傳	滑稽全集第十一
	落噺言葉の花	爲馬	同
シ、	春色三題噺	春の家淺久	帝文三十四（人情本下）
	鹿の巻筆		續帝文十八（落語） 滑稽全集第十
	商賣（しやうばい）百物語		續帝文十八（落語）
	春宵一刻	蜀山人	新百家説林二 滑稽全集第十一
	私可多話	中川喜雲	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十
	正（しやう）直咄大鑑	石川流宣	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十
	新（しん）話（わ）笑屆	不詳	同 同
	新（しん）口（こう）花（はな）笑（え）顔	聖齋聞取	小咄十種
	説話仕形噺口拍子	書苑武子	小咄十種
ス、	壽々葉羅井		續帝文十八（落語）
セ、	醒睡笑		同 滑稽全集第九 有朋堂文庫の一冊
	笑（せう）府衿裂米	馬琴	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十一
ソ、	曾呂利話		續帝文十八（落語）
	曾呂利狂歌咄		同 滑稽全集第九 有朋堂文庫の中
タ、	鯛の味噌津	蜀山人	賞奇樓叢書二ノ五 新百家説林二 滑稽全集第十一
	高笑	不詳	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十一
ツ、	露（つゆ）新（しん）輕口ばなし	露が五郎兵衛	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十
	つれづれ御伽草	不詳	滑稽全集第十
テ、	出放（類）題	夢樂庵	小咄十種 滑稽全集第十一
ト、	獨（どく）樂（らく）新話	不詳	續帝文十八（落語）
	鳥の町	同	近世文藝第六、笑話

書名	著者	所収
ニ、二休咄	同	同
ハ、初音草大鑑		續帝文十八(落語)
春遊機嫌袋	戀川春町	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十一
咄の開帳		續帝文十八(落語)
噺(咄)物語		續帝文十八(落語) 近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十
鹿の子餅後篇譚嚢	百龜カ	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第十一
ヒ、評判の俵	深川珍話	帝文二十六(滑稽の下)
百物語	不詳	近世文藝第六、笑話 滑稽全集第九
ブ、落咄無事志有意	焉馬等	近世文藝第六、笑話
鬼外福助噺	一九	續帝文二十一(一九)
福祿壽	露鯉	滑稽全集第十一
ヘ、臍の宿替		續帝文十八(落語)
ヨ、万の寶	四方の赤良	小咄十種
リ、理窟物語	徑山子	滑稽全集第十
ロ、露休置土産	不詳	同
ワ、落語笑嘉登		續帝文十八(落語)

六、洒落本の部

書名	著者	所収
ア、商内神	一九	江戸資料第一
ヽ新宿穴學問	秩都紀南子	徳川類聚第五、洒落、
イ、井、伊賀越増補合羽之龍	蓬來山人 歸橋	江戸資料第一
一向不通替善運	甘露庵 山跡蜂滿	同
一事千金	田螺金魚	徳川類聚第五
異素六帖	澤田東江	同
、遊子方言	田舍老人 多田爺	徳川類聚第五 賣奇叢書二ノ二
遊里不調法記	礎音成	江戸軟派叢書初編
ウ、浮世の四時	南陀伽紫蘭(洒田倭通)	江戸資料第一
三眸一至うかれ草紙	非闇	同
✓自惚鏡	振鷺亭	徳川類聚第五
エ、ヱ、惠比良濃梅	一九	同

	書名	作者	所收
オ、	惠世物語	止動堂馬呑	德川類聚第五
ヲ、	面美多勤身	不詳	江戸資料第一
カ、	寒紅梅丑の日待	振鷺亭	帝文三十四〔人情本下〕
	甲驛妓談角雞卵	月亭佳笑	江戸資料第一
	學通三客	秋收冬藏	同
	嘉和美多里	不詳	德川類聚第五
	甲子夜話	梅暮里谷峨	同
	甲驛新話	蜀山人	新百家說林第二
キ、	戯作四書京傳予誌	京傳	帝文十五〔京傳傑作〕
	傾城買談客物語	三馬	帝文十三〔三馬傑作〕
	客衆肝膽鏡	京傳	續帝文四十〔續京傳三馬〕・新從吾所好第四・〔三都洒落本〕
	玉の蝶	振鷺亭	江戸資料第一
	喜夜來大根	梨白散人	德川類聚第五
	狂詩諺解	蜀山人	新百家說林第二
タ、	倡客眞話傳授之巻廓意氣地	一九	續帝文三十三〔續一九〕
	廓の大帳	京傳	江戸資料第一
	手管早引廓節用	樂亭馬笑	人情第一

	書名	作者	所收
	籬の花後編廓宇久爲壽	鼻山人	人情第三
	廓通遊子	蘆江	江戸資料第一
	郭中奇譚	不詳	德川類聚第五
ケ、	傾城買二筋道	谷峨	帝文廿五〔滑稽上〕
	傾城買四十八手	京傳	江戸資料第一
	契國策	不詳	德川類聚第五
	妓者呼子鳥〔後、藝者虎の巻と改む〕	田螺金魚	同
	月花餘情	獻笑閣主人	同
コ、	古契三娼	京傳	同
サ、	咲分論	竹窓	江戸資料第一
	酒の徒雅	えいじ	帝文廿六〔滑稽下〕
	柳巷訛言	手柄岡持	賞奇樓叢書二ノ二
シ、	仕懸文庫	京傳	帝文十五〔京傳傑作〕
	志羅川夜船	同	同
	洞房妓談繁々千話	同	帝文四十〔續京傳三馬〕
	淨瑠璃稽古風流	佐伊野散人	江戸資料第一
	十八大通百手枕	田水金魚	同

大正十三年十一月二十七日印刷
大正十三年十二月一日發行

第二十七冊　（毎月一回一日刊行）

江戸軟派研究

尾崎久彌著

第二十七冊

本文

江戸時代小説索引（翻刻物）

六、洒落本の部。　七、人情本の部。
八、黄表紙の部。　九、草雙紙の部。
補遺、室町時代の小説等。

「浮瀬」と「茶菓詩」と「魂膽遊婦窟」

「浮瀨」と「茶菓詩」と「魂膽遊婢窟」

○

前册の補遺でも一寸書いておいたが「浪華の賑ひ」(曉晴翁編輯、半山畫圖。安政二乙卯歲四月發行)の二篇にくはしく出てゐる。(曉翁とは、鐘成のこといはずもがなであらう。)今、それを左に全記しておく。

浮瀨　此遊宴の樓は、新淸水の坂の下にありて、風流の席なり。遙に西南を見わたせば海原往來ふ百船の白帆、淡路島山に落かゝる三日の月、雪のけしきは言もさらなり、庭中には花紅葉の木々春秋の草々を植て、四時ともに眺めに飽ざる遊觀の勝地なり。名にしおふ浮瀨幾瀨の貝腸をはじめ、種々の珍膓又七人猩々の大さかづき等を秘藏す。浪花に於て貨食家の魁たるものなり

きのふ笠けふ傘の雲見かな　　柳亭

とあつて、下に、雪げしきの浮瀨の圖が畫かれてある。町角にあたつて、二階建の家が幾棟もつゞき、手前の樓の二階には、人々の集りなれる圖。右手に、塀越雪ながぶれる大木など、背景も、うす墨と木立。廣重の繪本江戶土產やうの畫致である。

蕉雜之記にもあるが、尙、「狂句解釋」(大正三年刊、荒木魚泉著)の中にも、

一ぱいで氣も浮む瀨の忘れ貝

「浮瀨」は大阪天王寺の西、新淸水の料理屋である。「忘れ貝」は、浮む瀨の什物で、鮑の貝殼の穴を塞ぎ、酒杯に作りてあるので、七合半の酒を盛るに足る大杯である。この句は浮む瀨で七合半入の大杯一ぱいで氣が浮いたといふのである。とある。

○

「茶菓詩」は方外道人の著である。本著にも紹介した「江戶名物詩」と同作者である。最近その別著「茶菓詩」を手にしたから、その片鱗を左に載せておかう。体裁と序と、一二の例とである。体裁は、中本型(美濃四つ折)外題は、茶菓詩初編とあり。見返しには、方外道人著　茶菓詩　小倉菴藏と三行にある。この小倉菴とは、例の幕末强賊の小倉菴長治ではなからうか。序は、

茶菓詩序

有茶必有菓子。有菓子必有詩矣。是則下戶世界之樂。而非上戶菩薩之樂也。雖買一樽之酒不買一筒之菓子。菩薩非惜買菓子之錢。以不好其甘故也。予生來下戶。不解酒中之趣。唯茶菓詩之三味耳。今春一夢中。得兩三卷之茶菓詩經。覺而記之。以爲下戶世界之說法云。

天保癸巳春三月　方外道人題
栗山人書

とあつて、古詩　茶菓詩歌、食傷行、湯屋行、開帳行、の數篇。(皆一丁位ゐづゝの長篇)絕句　茶銘、無馳走、夜深、大丸店、煉塀小路、道成寺、風邪、論語雜詠、感應寺富、扇面亭、琉球風、一朱銀、山勢檢校彈琴、六歌仙、春水藥品會、山手松魚、八百善、谷中、年明、大晦日、夜發、婚禮の數篇。五言律には、淺草觀音、醫者、早起、風邪、成田山開帳、送掘堂先生歸伊勢の數篇、附錄として座右銘、浴衣賣初の二篇。奥附は、東都書肆として、須原屋、山城屋、小林以下の數肆の連名を見る。茶菓詩といふものゝ、主に命題にそぐはぬもの、寧ろ江戶風物詩といつたものである。

〔茶銘〕喜撰非和尙、嬉野似傾城、山吹棠ニ信樂一、終成ニ茶漬名一。

〔夜發〕吉田町内送春秋、輕粉防成向月羞、自道姿身如織女、往來夜々作千牛。

といつたものである。江戶の地方色は、寧ろ「江戶名物詩」に多く、この「茶菓詩」は、名を借りただけの彼の狂詩集である。此の本、天保癸巳は、同四年。江戶名物詩は同丙申、即ち同七年、乃ち名物詩に先だつ四年の著である。

附記、譚海の卷四に、小倉菴長治の詳傳がある。を今見ると、「初以ニ菁莢一著、無レ幾造ニ亭衡一、起ニ櫻閣一、遂改ニ今業一」云々とある。今業とは、江東小梅の小倉菴、即ち割烹店の義である。すれば、この茶菓詩の頃は、まだ菓子屋業の頃で、その長治と方外道人と心易かつたかどうかで、小倉菴藏とあり、即ち小倉の出費で此の本が成つたのだらう。即ち小倉菴の宣傳用であらう。方外道人若し慶應元年閏五月廿七日まで生きてゐたならば、小倉菴が强賊であつたことに啞然たるの一人であつたらう。

(前表紙ウラへ)

書名	作者	所收
家暮長命四季物語	蓬來山人歸橋	江戸資料第一
品川楊枝	芝晉交	同
眞女意題	萬象	徳川類聚第五
男倡新宗玄々經	鐘西翁	同
寸南破良意	南鐐堂一片	江戸資料第一
粋町甲閨	蜀山人	新百家説林第二 / 賞奇樓二ノ一
船頭深話	三馬	帝文十三（三馬）
船頭部屋	同	同
舌（ぜつ）講油通汚	南陀伽紫蘭（窪俊満）	江戸資料第一
世界の幕なし	本膳亭坪平	同
聖遊廓	不詳	徳川類聚第五
世説新御茶	蜀山人	同
青樓〇（たまの）語言	花山亭笑馬	人情第十
曾我糠袋	唐洲	帝文二十六（滑稽下）
贅亭先生多佳餘宇辭	不埒山人	江戸資料第一
白拍子の文反古誰が袖日記	寶嘉傳	徳川類聚第五
當世左様候	無物庵別世界	江戸資料第一
當世虎之巻（一名、傾城買虎之巻）	田螺金魚	帝文三十四（人情本下）
當世風俗通	喜三二	雜誌「江戸趣味」一より六 / 稀書複製會本第一期
當世女風俗通	同	同七より十二 / 同
輕井茶話道中粋語錄	蜀山人	新百家説林第二
大通秘密論	夢中庵	江戸資料第一
大通契語	鈴成	同
大抵御覽	朱樂菅江	徳川類聚第五
辰巳婦言	三馬	帝文十三（三馬）
辰巳の園	夢中山人寐言	徳川類聚第五 / 賞奇樓二ノ六
短華蕋葉	不詳	徳川類聚第五
仲（ちゅう）街艶談	戯家山人	江戸資料第一
通言總籬	京傳	帝文十五（京傳）
通言粋語傳	同	續帝文四十（續京傳三馬）
通人の寐言	桃栗山人 柿發齋（[illegible]）	江戸資料第一
通詩選笑知	蜀山人	新百家説林第二
東西南北突當富魂短	西奴	江戸資料第一
登美賀遠佳（とみがをか）	豊川里舟	同

書名	作者	所載
富岡八幡鐘	かはまち	江戸資料第一
ナ、浪花色八卦	外山翁	新從吾所好第四（三都洒落本）
假里擇 中洲之華美	內新好	德川類聚第五
中洲雀	道樂山人無玉	江戸資料第一
南品傀儡	青海舍主人	同
南閨雜話	夢中山人寐言	德川類聚第五
南江驛話	北左農山人	同
ニ、青樓之世界 錦之裏	京傳	同
ネ、猫謝羅子	正德馬鹿輔	同
ハ、賣花新驛	朱樂菅江	同
芳深交話	穴好	同
ヒ、一目土堤	內新好	江戸資料第一
フ、風俗問答	劉道醉	同
深川新話	蜀山人	同
深川手習草紙	十方茂內	同
富賀川拜見	蓬萊山人歸橋	德川類聚第五
婦美車紫鹿子	不詳	同

書名	作者	所載
二日醉卮觶（大入盃）	萬象亭	同 賞奇樓二ノ四
ホ、北華通情	花丸	德川類聚第五
マ、娼妓美談 籬の花	鼻山人（東里山人）	人情第二
驛路風俗 廻し枕	山手山人左英	江戸資料第一
ミ、美地の蠣殼	蓬萊山人歸橋	德川類聚第五
南門鼠	紫色主	同
ム、無駄酸辛甘	千差萬別	同
モ、文選臥座	狂示、湖舟、谷峨	江戸資料第一
ヤ、山下珍作	奈蒔野馬鹿人	德川類聚第五
山あらし	種彦	同
ヨ、滑稽吉原談語	一九	續帝文三十三（續一九）
同後編 夜廓行燈	同	同
夜半の茶漬	京傳	帝文十五（京傳）
吉原楊枝	同	江戸資料第一 人情第八
リ、李不盡通詩選	蜀山人	新百家說林第二
里鶴風語	風來山人	賞奇樓二ノ二 滑稽全集十二
龍虎問答	蓬萊山人歸橋	江戸資料第一

レ、聖遊廓後編 列仙傳　不詳　江戸資料第一
ワ、和漢同詠道行　蜀山人　新百家説林第二

七、人情本の部

ア、仇競今樣櫛　紀山人　帝文三十四（人情本下）
明鳥後正夢　楚満人（春水）・縫丈　繪本稗史十・人情第一
寄縁奇遇 梓物語　新吉原・玉樓花紫　人情第十四
松間花情 香嬌春雨　金龍山人（春水）　人情本刊行會續刊（人情世話の第二）
イ、ヰ、正史實傳 いろは文庫　二代春水　帝文三十五（赤穂復讐）
祝井風呂時雨傘　春水　人情第六
書月寄縁 妹脊鳥　爲永春雅　人情第十三
ウ、長巳清談 梅の春（一刻千金梅の春とも云）　春水　帝文三十四（人情本下）・人情第二十四
鶯塚千代の初聲　金水遺稿・有人編　人情第二十
エ、ヱ、英對暖語　春水　帝文十（梅暦）
緣結月下菊　種彦　人情第十一
緣結娛色の糸　金水　人情第廿三
オ、ヲ、四季曉望 恩愛二葉草　鼻山人　人情第廿一

和唐珍解　唐來三和　德川文藝第五
カ、假名文章娘節用　曲山人　帝文二十九（人情本上）・人情第七・名著文庫
孝女二葉の錦　谷峨　帝文二十九（人情本上）
閑情末摘花　金水　帝文三十四（人情本下）・繪本稗史九
キ、秋夕寄觀 霧籬物語　玉川亭調布　人情第十九
ク、両個女兒 郭の花笠　金水　人情第六
花鳥風月　竹葉舍金瓶　同　第十九
ケ、明烏發端 教訓郭里の東雲（けうくんさとのしののめ）　金水　人情第一
契情肝粒志　鼻山人　同　第二十二
コ、深契情話 戀の若竹　萬丸、三九　同　第八
浮世新形 戀の花染　金水　同　第十二
サ、玉菊全傳 花街鑑（さとかがみ）　鼻山人　人情第五
廓鑑余興 花街壽々女（さとすずめ）　同　帝文三十四（人情本下）・人情第五

シ、春色恵の花　春水　帝文十（梅文暦）
春色梅兒誉美（ごよみ）　同　同
春色辰巳園　同　同
春色梅美婦禰　同　同
春色羅の梅　同　同
春色戀志良那美　同　帝文二十九（人情本上）
春色湊の花　同　人情第十五
春色淀の曙　金水　同第十七
春色連理の梅　二世谷峨　人情及世話列行會第一
春色雪の梅　春雅　人情第五
春色戀廼染分解　朧月亭有人　同第十
春色江戸紫　同　同第十八
春色玉襷　同補　同第二十
春秋二季種　春馬　帝文二十九（人情本上）
セ、清談若緑　曲山人　帝文二十九（人情本上）人情第二十一
清談松の調　春水　人情第七
チ、珍説豹之巻　鼻山人　同第二十二

ツ、蔦蔓戀の花菱　鐵鶏　帝文三十四（人情本下）
テ、貞女婦女（をんな）八賢誌　一世春水 二世春水　人情第三 同第八
貞操園の朝顔　金水　人情第十四
毬唄（てまり）三人娘　金水 有人補　同第十三
ナ、浪模様尾花草紙　詠月堂甲太　同第十五
兒女美譚 椰（なぎ）の二葉　志満山人　同第二十三
明烏後傳 寢覺の繰言　二世楚満人（春水）　同第十一
錦帶屋雪白木屋 軒並（のきならび）娘八丈　同　同第十六
ハ、春告鳥　春水　帝文十（梅ごよみ）
春の若草　同　同
秋色染話 秋の枝折　二世楚満人（春水）　人情第十六
四時遊覽 花筐　金水　同第九
比翼連理 花の志満臺　同　同第十八
三人お七 花暦封じ文　朧月亭有人　繪本稗史第十一 人情第十二
ヒ、氷縁（ひようえん）奇遇都の花　管垣琴彦　帝文三十四（人情本下）
フ、婦（ふ）女今川　二代楚満人（春水）　帝文廿九（人情本上）
風俗粋好傳　鼻山人　人情第九

ミ、春宵美談 三日月阿専　二世楚満人(春水)　人情第二
花筐拾遺 湊の月　金水　同 第十
ム、娘太平記操之早引　曲山人 金水　帝文三十四(人情本下) 人情第二
秋色艶麗 處女七種　初代春水 金鶯　同 第四
ヤ、三日月夜の 柳の横櫛　金鶯　帝文三十四(人情本下)

八、黄表紙の部

ア、鸚鵡返文武二道　春町　有朋堂文庫(黄表紙十種)
青嵐柳下蔭(但し、續帝文には、「柳下陰」)　一九　續帝文三十三(續 一九)
甘哉名利研　京傳　續帝文三十四(黄表紙百種)
イ、井、色男十八二文　杜芳　同
一粒萬金談(丹)　喜三二　同
ウ、浮世操九面十面　全交　同
運附太郎左衛門　吟雪　同
瞠多雁取帳　馬手人　同 黄表紙名作集 有朋堂文庫(黄表紙十種)
エ、ヱ、江戸生艶氣蒲焼　京傳　同 黄表紙名作集 賞奇樓二ノ三

藪の鶯　業亭行成　人情第十七
ユ、由佳里の梅　春水　帝文二十九(人情本上)
所縁の藤浪　二代一九　同
ラ、此糸蘭蝶記　鼻山人　江戸趣味文庫 第一編
延壽反魂談　同　黄表紙名作集
オ、ヲ、拜壽仁王參　全交　續帝文三十四(黄表紙百種)
親敵討腹鼓　喜三二　續帝文三十四(黄表紙百種) 黄表紙名作集
父母怨敵現腹鼓(前三後二)　竹塚東子　續帝文四十八(名家短篇)
カ、高慢齋行脚日記　春町　續帝文三十四(黄表紙百種)
鐘入七人化粧　喜三二　同 黄表紙名作集
景清百人一首　同　續帝文三十四(黄表紙百種)
孔子縞于時藍染　京傳　同
地獄一面 照子淨頗梨　同　同
復讐後祭記　同　同

書名	作者	所收
敵討両輛車	同	續帝文四十（續京傳三馬）
敵討孫太郎蟲	同	同
復讐煎茶濫觴	同	續帝文四十八（名家短篇）
敵討女鉢木	蓬來山人	續帝文三十四（黃表紙百種）
敵討記乎汝	六樹園	同
敵討蚤取眼	馬琴	同
堪忍五両金言語	同	同
通鬼寢子の美女	黃山堂	同
海中箱入娘	萬寶	同
擧家（案内）安全鼠山入	一九	續帝文二十一（一九）
雁將軍勸略卷	可候（北齋）	續帝文三十二（萬物滑稽） 續帝文三十四（黃表紙百種） 有朋堂文庫（黃表紙十種）
閙思獸境界	一九	續帝文三十二（萬物滑稽）

キ、

書名	作者	所收
魚鳥あんばいよし	不詳	有朋堂文庫（黃表紙十種）
金々先生榮華夢	春町	續帝文三十四（黃表紙百種） 黃表紙名作集 大通世界ノ一
金銀先生再寢夢	同	續帝文三十四（黃表紙百種）
金々先生造花夢	京傳	續帝文三十四（黃表紙百種）
金銀太平記	琉金土生	續帝文三十二（萬物滑稽）
莫切自根金生木	參和	續帝文三十四（黃表紙百種） 黃表紙名作集 大通世界ノ二
龜山人家妖	喜三二	續帝文三十四（黃表紙百種）
曲亭一風京傳張	馬琴	有朋堂文庫（黃表紙十種）
京傳浮世醉醒	京傳	續帝文三十四（黃表紙百種）
京鹿子娘泥鰌汁	全交	同
狂言好野暮大名	吐芳	賞奇樓叢書二ノ三
奇妙頂禮地獄の道行（但し、此書、合卷時代の黃表紙也）	種彦	續帝文三十四（黃表紙百種）

ク、

書名	作者	所收
元利安賣鋸商賣	好町	同
楠無益委記	春町	同 黃表紙名作集
菓物見立御世話	政演（京傳）	續帝文三十二（萬物滑稽）
稗史億說年代記	三馬	續帝文三十四（黃表紙百種） 有朋堂文庫（黃表紙十種）
怪談豆人形	文溪堂	續帝文三十四（黃表紙百種）
怪談筆始	一九	同

ケ、源氏重代劒宮居（但し、此本、黒本時代のもの也）　不詳　續帝文三十四（黄表紙百種）

コ、辭闘戰新根　春町　同

國漢無体此奴和日本　四方山人　同

手前勝手御存商賣物　京傳　同

這奇的見世物語　同　同

小人國穀櫻　同　黄表紙名作集

思ひ付た二五郎兵衞商賣 變つた　紫（[illegible]）蘭　續帝文三十四（黄表紙百種）

壽御夢想の妙藥　三蝶　同

木壯社野狐復讐　一九　續帝文二十一（一九）

滑稽しつこなし　改、串戯しつこなし　同　同

サ、猿蟹遠昔噺　春町　續帝文三十二（萬物滑稽）

三幅對紫曾我　同　續帝文三十四（黄表紙百種）

扨化狐通人　可笑　同

三太郎天上巡り　喜三二　同

作者根元江戸錦　慈悲成　同

三藥太平記　笑給　續帝文三十二（萬物滑稽合戰）

シ、四天王大通仕立　是和齋　續帝文三十四（黄表紙百種）

時代世話二挺鼓　京傳　續帝文三十四（黄表紙百種）

大極上請合賣心學早染草　同　同

新吉原聖賢繪圖　二代喜三二　同

白髪大明神御渡申　全交　同　黄表紙名作集

財布の紐しらみうせ藥　坪平　續帝文三十四（黄表紙百種）

人心兩面摺　一九　同

セ、世上酒落見繪圖　京傳　同（有朋堂文庫 黄表紙十種）

世上還親子鏡獨樂　三和　續帝文三十四（黄表紙百種）

全交法師常々草　全交　同

衣食住三ヶ國世帯太平記（續帝文には、[illegible]とあり）　馬琴　續帝文二十四（萬物滑稽）

ソ、夫從以來記　爲輕　續帝文三十四（黄表紙百種）　黄表紙名作集

夫者德育玉得　貫齋　續帝文三十四（黄表紙百種）

染直大名縞　信普　同

タ、太平氣　不詳　續帝文三十二（萬物滑稽）

當世大通佛開帳　全交　續帝文三十四（黄表紙百種）

御手料理御知而已大悲千錄本　同　同　黄表紙名作集　大通世界ノ二

玉磨青砥錢　京傳　續帝文三十四（黄表紙百種）

竹本義太夫武士　一九　黄表紙名作集
煙草戀中立　鳥居清倍　續帝文三十四（黄表紙百種）
（但し、此本、黑本時代の黄表紙也）

チ、
近頃嶋巡り　通笑　續帝文三十四（黄表紙百種）
茶哥舞妓茶目傘　全交　同
茶漬原御膳合戰　薮庵薮蓁　續帝文三十二（萬物滑稽）
忠臣瀬戸物藏　一九　同

ツ、
通風伊勢物語　可笑　續帝文三十四（黄表紙百種）
通一聲女暫　全交　同
蠢用而二分狂言　大榮山人（馬琴）　同（黄表紙名作集）（大通世界ノ二）

テ、
天下一面鏡梅鉢　參和　續帝文三十四（黄表紙百種）
天道浮世出星操　三馬　同

ト、
通增安宅關　鳥居清長　同
年寄冷水會我　全交　同
鈍作萬八噺　不詳　黄表紙名作集

ナ、
食類合戰和睦香之助　通笑　續帝文三十二（萬物滑稽）
長生見度記　喜三二　續帝文三十四（黄表紙百種）（黄表紙名作集）

直讀見臺萩　全交　續帝文三十四（黄表紙百種）

ニ、
憎口返答返し　通笑　同
三國傳來無匂線香　京傳　同
人間萬事塞翁馬　馬琴　同

ハ、
鼻ヶ崎高慢男　喜三二　同
八代目桃太郎　三蝶　同
春遊七福曾我　春英　同
鳩八幡豆ト德利　好町（四方眞顔）　同（大通世界ノ二）
化物小遣帳　一九　續帝文二十九（二）
（但し、續帝文には、萬物さあり）
化物仲間別　可笑　續帝文三十二（萬物滑稽）
花見（話）虱盛衰記　馬琴　同
早道節用守　京傳　黄表紙名作集

ヒ、
鼻下長物語　全交　有朋堂文庫（黄表紙十種）
貧福蜻蛉返　一九　續帝文三十四（黄表紙百種）
一狂言紙書入　楚滿人　同

フ、
文武二道萬石通　喜三二　同（有朋堂文庫）（黄表紙十種）
仁田四郎富士之人穴見物　京傳　續帝文三十四（黄表紙百種）

書名	作者	所收
ヘ、福德果報兵衛傳	京傳	續帝文三十四（黄表紙百種）
紅皿缺皿往古噺	丈阿	同
ホ、本の能見世物	通笑	同
マ、間違狐女郎買	同	同
間合噓言曾我	飯橋	同
松茸責親方	新業	同
萬福長者榮花談	京傳	同
萬福長者寶藏開	樹下石上	黄表紙名作集
ム、金銀先生 開運先生 夢中印斷	勝川春章	續帝文三十四（黄表紙百種）
虫看鑑野邊若草	一九	續帝文三十二（萬物滑稽）
メ、めくら仙人目明仙人	富川吟雪	有朋堂文庫（黄表紙十種）
名物梅がえでんぶ	京傳	大通世界ノ一
面向不背の御子玉	萬象亭	續帝文三十四（黄表紙百種）
明眼千人盲仙術	一九	黄表紙名作集
モ、本樹眞猿浮氣噺	唐丸	續帝文三十四（黄表紙百種）
桃太郎發端說話	京傳	同
桃太郎後日噺	喜三二	同
ヤ、山入桃太郎昔噺	菊舟	續帝文三十二（萬物滑稽） 續帝文三十四（黄表紙百種）
ユ、唯心鬼打豆	京傳	同
ヨ、齡長尺桃色壽主	甲龜	同
悅贔屓蝦夷押領	春町	同 黄表紙名作集
リ、浦太郎兵衛 山龍宮卷	俊滿	續帝文三十四（黄表紙百種）
豐前豐後兩國名取	飯盛	同
ロ、盧生夢魂其前日	京傳	同

九、草雙紙の部

書名	作者	所收
ア、謎染逢山鹿子	種彦	續帝文二十三（邯鄲諸國）
合于三國小女郎狐	同	同
淺間ケ嶽煙之姿繪	同	同
秋津島仇討物語	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
難有孝行娘	同	同
朝茶湯一寸口切	京傳	同

油屋お染丁稚久松讃染潤模樣　京　山　繪本稗史第二
油町製本菜種黃表紙　笠亭仙果　續帝文四十八（名家短篇）

イ、井、以呂波引寺入節用　種　彦　帝文四十一（四大奇書下）
以呂波引寺入節用（いろはびきてらいりせつよう）

イ、井、
以呂波引寺入節用　種　彦　帝文四十一（四大奇書下）
風雲井物語　三　馬　續帝文四十（續京傳三馬）
伊勢管物通神風　同　江戸軟派叢書初編
絲車九尾狐　京　傳　續帝文四十八（名家短篇）
妹背山長柄文臺　同　續帝文四十（續京傳三馬）
絲櫻本朝文粹　同　同
四十七手本裏張後日いろは演義　南　北　帝文四十一（四大奇書下）
色三味線艶連引（化合奏）　路　考（實は、濱村輔）　續帝文三十五（俳　優）
一番太皷春の曙　七代市川三升　同
情競傾城嵩（いきじくらべ）　阪東秀佳（實は、五街道人琴布）　同

ウ、
入艤倭取楫　種　清　繪本稗史第四
梅櫻振袖日記　種　彦　續帝文四十三（種彦短篇）
浮世形六枚屛風　同　同
浮世一休廓問答　同　同
雲龍九郎偸盜傳　三　馬　續帝文四十（續京傳三馬）

腕雕一心命（うでぼり）　三　馬　續帝文四十八（名家短篇）
靑蛇お長鯼草紙（うはばみ）　同　繪本稗史第四

エ、ヱ、
畫傀儡二面鏡（あやつり）　種　彦　續帝文四十三（種彦短篇）
江島御利生對帶笠　京　山　續帝文十七（京　山）
枝珊瑚京打笄　梅　幸（實は、奕泉）　續帝文三十五（俳　優）

オ、ヲ、
女合法辻談義　種　彦　續帝文四十三（種彦短篇）
女模稜稻妻染　同　同
女郎花喩言粟嶋　同　同
侃俠雙蛺蝶全傳（をとこだて　てふ）　京　傳　續帝文四十（續京傳三馬）
女俠（達）三日月お僊（をてて）　同　同
於六櫛木曾仇討　同　同　繪本稗史第二
俠客諱の安賣（をとこ　いさみ）　紫　若（實は、欣堂間人）　續帝文三十五（俳　優）
尾上松緑百物語　菊五郎作　花笠文京校　同
女船頭矢口之渡場　二世春町　繪本稗史第二
帶屋お蝶三世談　林屋正藏　續帝文四十八（名家短篇）
敎草女房氣質　京　山　帝文四十（續氣質）
十團子女六部仇な宇津谷由來記　同　續帝文十七（京　山）

女壻忠臣要	南北	續帝文四十一（四大奇書下）

カ、

邯鄲諸國物語	種彦	續帝文二十三（邯鄲諸國）
雁金紺屋作の早染	同	續帝文四十三（種彦短篇）
蛙哥春の土手節	同	同
高野山萬年艸紙	同	同
假名反古一休草紙	種員 種久	續帝文四十二（倭文庫下）
冠辭筑紫不知火	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
敵討宿六始	同	續帝文四十八（名家短篇）
敵討浪速男	一九	續帝文三十三（續一九）
復讐（かたきうち）女諸禮鑑	同	同
報仇（かたきうち）女用文章	同	同
敵討鷲娘來由	同	續帝文二十一（一九） 繪本稗史第四
復讐熊腹帶	京山	續帝文十七（京山）
復讐猫魅（また）橋由來	關亭傳笑	續帝文四十八（名家短篇）
鎌田又八強力譚	墨川亭雪麿	同
照子（かゞみ）池浮名寫繪	馬琴	同
開運菊一文字	一九	同

金儲花盛場	一九	續帝文三十三（續一九）
杜若紫再咲（ゆかりのにどざき）	岩井粂三郎	續帝文三十五（俳優）
四十七手本裏張	南北	帝文四十一（四大奇書下）

キ、

桔梗辻千種衫	種彦	續帝文四十三（種彦短篇）
北島女敎訓	一九	續帝文二十一（一九）
狂言袴五ッ紋盡	紫若	續帝文三十五（俳優）
聞勇（きいてきをい）八幡祭	市川三升（實は、五柳亭德升）	同
着替浴衣團七縞	欣堂間人	繪本稗史第二
聞道女自來也	東里山人	同 第四

ク、

鯨帶博多ゞ三國	種彦	續帝文四十三（種彦短篇）
關東小六昔舞臺	同	繪本稗史第四
黑雲太郎雨夜譚	乾坤坊良齋	續帝文四十八（名家短篇）
怪談岩倉萬之丞	南北	同
久米平內闘力物語	京山	繪本稗史第二

ケ、

傾城盛衰記	種彦	續帝文四十三（種彦短篇）
契情畸人傳	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
傾城水滸傳 一名、曲亭水滸傳	馬琴	續帝文三十六（傾城水滸）

コ、

化粧坂懷忠鑑　京山　續帝文十七(京山)
小脇差夢の蝶鮫　種彦　續帝文四十三(種彦短篇)
小櫻姫風月奇觀　京山　續帝文十七(京山)
五人女都紅筆　同　同
御所奉公東日記　應賀　續帝文四十二(優文庫下)
爰個天網島　三升(實は德升)　續帝文三十五(傑優)
小幡怪異雨古沼　河竹新七案 種清綴　繪本稗史第十
御大悧志目多發驚　二代一九　續帝文三十三(續一九)
古今復讐大全　東里山人　續帝文四十八(名家短篇)
戀女房仇討雙六　姥尉輔　同

サ、

傾色諸口は曆手　種彦　續帝文四十三(種彦短篇)
播洲皿屋敷物語　京傳　繪本稗史第四
三世相婦手鑑　一九　續帝文三十三(續一九)
西國奇談月廼夜樂　德升　續帝文四十八(名家短篇)

シ、

正本製　種彦　帝文十六(種彦)
忍費對花籠　同　續帝文四十三(種彦短篇)
新製八百屋の藏開　同　同
忍笠時代蒔繪　同　同
出世奴小萬の傳　同　同
十三鐘孝子勳績(一名、山中鹿之助稚譚)　馬琴　續帝文四十八(名家短篇)
志道軒昔講釋　京傳　同
新製交(小人)島巡　一九　續帝文二十二(一九)
串談しつこなし後編(黃表紙滑稽しつこなしの後編)　同　同
白縫譚　種員 二世種彦 種清　續帝文二十八 續帝文二十九(白縫上、下)
兒雷也豪傑譚　笑顏 種清　續帝文八(兒雷也)
北雪美談時代鏡　二世春水　續帝文三十一(時代鏡)

ス、

摺針太郎豪傑譚　春水　續帝文四十八(名家短篇)
隅田春藝者容氣　京山　續帝文十七(京山)
隅田川梅若緣起　二世春町　繪本稗史第十二

セ、

仙術獨稽古　一九　續帝文二十一(一九)
善惡附込當座帳　同　同
宮城野信夫小說娘楠樹　京山　續帝文十七(京山)

ソ、

曾我昔狂言　種彦　續帝文四十三(種彦短篇)

書名	作者	所收
其由縁部廼俤	一筆庵（英泉）	續帝文五（田舍源氏）
其俤錦畫姿	幸四郎（實は、來黑山人）	續帝文三十五（俳優）
其俤夕暮譚	同	同
タ、		
唐人髷今國姓爺	種彦	續帝文四十三（種彦短篇）繪本稗史第十四
旅硯富士見西行	臨賀	續帝文四十二（倭文庫下）
玉藻前三國傳記	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
高尾丸劍の稻妻	京山	繪本稗史第二 續帝文十七（京山）
梅若松若竹取物語	同	續帝文十七（京山）
驚談傳奇桃花流水	同	同
忠信老嫗餅	一九	續帝文二十一（一九）
伊達姿辰巳八景	三升（實は、德升）	續帝文三十五（俳優）
チ、		
忠孝両岸一覽	種彦	續帝文二十三（邯鄲）
忠孝義理物語	同	同
竹生島琵琶湖水	一九	續帝文三十三（續一九）
兒ヶ淵誓仇討	月池山人（關亭傳笑）	續帝文四十八（名家短篇）
テ、		
蝶雙春花壇	芝甁（實は、[illegible]）	續帝文三十五（俳優）
ト、		
燈籠踊秋の花園	種彦	續帝文三十（時代鏡）
床飾錦額無垢	種彦 柳菊	續帝文四十八（名家短篇）
大津土産吃又平名畫助刀	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
わんゝ松山歳男金豆蒔	京山	繪本稗史第十二
ナ、		
南色梅早咲	種彦	續帝文二十三（邯鄲諸國）
長髮姿の蛇柳	京傳	續帝文四十（續京傳三馬）
浪華浴衣團七編	南北	續帝文四十八（名家短篇）
ニ、		
修紫田舍源氏	種彦	續帝文五（田舍源氏）繪本稗史第七、第八
女房氣質異赤縄	三馬	續帝文三十三（合本下）
ヌ、		
濡燕子宿傘	京傳	續帝文四十（續京傳三馬）
ぬしや誰問白藤	三升（實は、德升）	續帝文三十五（俳優）
ハ、		
春霞布袋本地	種彦	續帝文四十三（種彦短篇）
花吹雪若衆宗玄	同	同
花紅葉名所扇	同	同
花照草紙	一九	續帝文三十三（續一九）
初時雨矢口渡	同	同

書名	作者	所收
坂東太郎強盜譚	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
艶容歌妓結（はでこうりこ）	同	同
流行（はやり）歌川船合奏	梅幸（實は、文京）	續帝文三十五（俳優）
腰之佳話鸚鵡八賛	京山	續帝文十七（京山）／繪本稗史第六
花綵女敵討	同	續帝文十七（京山）
早引說要集	同	同
ヒ、		
比翼紋松に鶴賀	種彥	續帝文四十三（種彥短篇）
日高川淸姬物語	三馬	續帝文四十（續京傳三馬）
百物語長者萬燈	馬琴	繪本稗史十三
フ、		
富士額うかれの蝶鳥	種彥	續帝文四十三（種彥短篇）
不動九劍威德	一九	續帝文三十三（續一九）
文（ふみ）法（はふ）語（ご）（一名、女達摩之由來）	京傳	續帝文四十（續京傳三馬）
風俗金魚傳	馬琴	續帝文二十六（傾城水滸）
風俗女三國志	七代目三升	續帝文三十五（俳優）
復讐奇談ふた子山	竹塚東子	繪本稗史第二
ホ、		
堀川歌女猿曳	種彥	續帝文二十三（邯鄲諸國）
雛案道中双六	種彥	續帝文四十三（種彥短篇）
マ、		
孝行酒屋譽劍菱	京山	續帝文十七（京山）
八百屋お七傳松梅竹取談	京傳	續帝文四十（續京傳三馬）
松山稻荷御利生新話	一九	續帝文二十一（一九）
枕琴夢通路	仙果	續帝文四十八（名家短篇）
ミ、		
水木舞扇之猫骨	種彥	續帝文二十三（邯鄲諸國）
操（みさを）競三人女	同	同
三ッの浦雛波復讐	一九	續帝文二十一（一九）
三國太郎再來傳	二代一九	續帝文三十三（續一九）
三國小女郎物語	京山	續帝文十七（京山）
ム、		
國字小說三蟲（むしけん）拇戰	種彥	續帝文二十三（邯鄲諸國）
娘金平昔繪艸紙	同	續帝文四十三（種彥短篇）
娘狂言三勝話	同	同
向入廓山彥	秀佳（實は、南仙笑）	續帝文三十五（俳優）
古今彥惣昔唄猿狂言	京山	續帝文四十八（名家短篇）
方言（むだ）修行金草鞋（初編より十三）	一九	續帝文二十一（一九）
同（十四より二十四迄）	同	續帝文三十三（續一九）

メ、銘正宗刀珍說　一九　續帝文二十一（一九）

モ、𡱝鴛籠故鄉錦繪　京山　續帝文四十八（名家短篇）

ヤ、椰絲花組交（まぜ）　種彦　續帝文二十三（種彦短篇）繪本稗史第四

奴勝山愛玉丹前（おすがた）　京山　續帝文十七（京山）

皇國文字娘席書（やまとことば）　梅幸（實は、文暁）　續帝文三十五（傑僊）

ヨ、[illegible]八重倭文庫　續帝文四十一　同　四十二

鈴[illegible]路與作春駒　馬琴　繪本稗史第二

戀の川渠合ばなし　一九　續帝文二十一（一九）

義經越路松　同　續帝文三十三（續一九）

ワ、戲場花牡丹燈籠（わるきつ）　京傳　續帝文四十（續京傳三馬）

和歌三人由來　路考（實は、楚滿人）　續帝文三十五（傑僊）

賞奇樓叢書と大通世界に就て

以上の索引に折々現れた賞奇樓と大通世界とは、御存じのない諸君があらうかも知れぬ。自分の藏本は完本ではないが、これでも概念の足しにはならう、でちよつと解題やうのものを、この余白に記しておく。

一、賞奇樓は、宮崎三昧氏の校訂に成つたもので、創刊は、藏本がないから不明であるが、自分のものでは、とく／＼の句合（大正三、一〇）百鬼夜狂（同）が最も古く、以下、二期一集（一集に二冊つゝ）より同二期の六集まであり、別に三期第六集の開童子一冊がある、手許にある丈で、此索引に應用しておいたが、完本を藏しないのは、遺憾である。開童子は、大正五、一二になつてゐる。主に笑話、こんにやく、句集、評判記、浮世草紙等の珍本校訂である。

二、大通世界は、三冊は出てゐる筈であるが、藏本は、一と二とである。一冊に大掛三部位の黄表紙が、原本の繪を大たいそのまゝ模刻して、上に校訂者の略註がついてゐる。木版手摺和紙本で、幸堂得知翁校訂、明治二十四年五月（第一）、同七月（第二）の春陽堂出版、當時勿論一冊拾錢であつた。

補遺

以上で、自分の「江戸時代小說飜刻物索引」は、一先づ終つた。さて今になつて思ひ當り見當つた二三をこゝに補足しておかう。

1、室町時代の小說。室町時代は、命題が「江戸」ゆゑ、その多くは省略したが、附篇として若干列擧しておかう。(既に、本索引「假名草紙」の中に現れたものは省く。)

〔室町時代小說集〕平出鏗次郎著)

○天稚彦物語○靑葉の笛物語○硯破○付喪神○中書王物語○李娃物語○富士の人穴草紙○朽木櫻○阿漕の草紙○寳満長者○辨の草紙○あしびき○田村の草子○辨慶物語○異本秋月物語○あきみち○梅津長者物語(以上十七篇)

〔日本文學全書十九〕秋の夜長物語。

お伽草紙の類は、有朋堂文庫「お伽草紙」に、「文正さうし」以下三十九篇の所收。他に「お伽草紙」及「新篇お伽草紙」(今泉定介校)の類もある。

2、**此の索引で目に著いた脫漏と正誤。**

イ、脫漏の部。一、假名草紙の部で、「鴉鷺合戰物語」は、續帝文三十二(萬物合戰)と、日本文學全書十九とにも、「精進魚類物語」、は續帝文三十二(萬物合戰)にも出てゐた。二、浮世草紙の部で、鎌倉諸藝は、百萬塔の中にもある。尙、エ(エ)の項に、艶道通鑑　殘口　單行と、タの項に、丹波與作無間鐘自笑　百萬塔の中といふのを補ひたい。三、滑稽本の部でキの客者評判記は、カクシヤと訓んで、カの部に入るべきであつた。四、笑話本の部で、オの「落噺六義」は、コの「言葉の花」と同一物。カの「開卷百笑」は、フの「無事志有意」の改題であつた。共に重出ゆゑ、其の旨を他に附記して、一方を削る事。五、洒落本の中で、キの「客衆肝膽鏡」は、カクと訓んで、カに入れ直す事。シの「仕懸文庫」は、人情世話刊行會本第一にも出てゐる事。

ロ、誤植五〇八頁下欄、八行目の三島層の江戸資料第三は、同第四の誤。五一六頁上欄、八行目に、晔川子の跡を脫した。五一七頁の下欄十二行目の百尺草、百尺亭の誤。

ハ、尙、今手許に藏本なきため、此の索引に入るべくして洩らしたもの二三を、記憶に任せて、書きつけておく。

浮世草紙には、石川巖氏校訂の「浮世草紙」五册がある。この中には、重複せざるものもあらう。□向陵社から嘗て「洒落本全集」の何册かゞ現れた。その中には、本索引の「洒落本」に入るべきものもあらう。尙洒落本には、石川氏の謄寫版物もある。其他博文館の文藝叢書(菊版十二册のもの)や、冨山房の名著文庫又は三教書院の「袖珍文庫」、東亞堂の「日本文藝叢書」、某の「拾錢文庫」、葵文庫本、國民文庫本の類には、讀本、人情本、草雙紙等に於て重複すべきもの多々、せざるもあらう。

(大正十三年十一月十九日初稿了)

江戸時代小說飜刻物索引　畢

尾崎久彌著

江戸軟派研究

初編　全

江戶軟派研究 初編 總目次

本文

元祿板「好色むらく坊」解題……一―一六
「好色むらく坊」首卷と作者桃隣……四二一―四三二
大近松の破倫物……七―一二
大近松の破倫物餘談……三九―四一
浮世繪の賣春讚美……一三―一六。四二―四八
評釋藤蔓戀のしがらみ……一七―三〇。一八六―二〇四。二八六―三一一
藝者の起源……三一―三八
藤十郎擬間男の件……四九―五二
本朝艶畫考……五三―六〇。七四―八〇。一〇一―一〇八
鳥追から女太夫へ……六一―六七
「踊形容」に就て（一圖入）……六八―七三
浮世繪師の心理……八一―八七

新内の話……八八―九六
「滑稽東都一圖會」「教諭謎々春の雪」……九七―一〇〇
西鶴に據るおさんの正體……一〇九―一一八
近世墮胎史雜考……一一九―一三八
廣重畫最初の「東都名所」(二圖入)……一三九―一四五
半二の「心中紙屋治兵衛」(一圖入)……一四六―一六五
馬琴初期の黃表紙(一圖入)……一六六―一八五
浮世繪風景畫雜談(一圖入)……二〇五―二二〇
一九の「三都の口眞似」……二二一―二二九
原始的な稚兒物……二三〇―二四四
ヱロチックスに滲む心持(一圖入)……二四五―二六一
方外道人著の「江戸名物詩」……二六二―二八五
東風吹江戸繪榮(二圖入)……三一二―三二二
並木正三の「日本第一和布刈神事」(三圖入)……三二三―三四〇。四〇三―四一八。四八一―四九六
賣比丘尼考……三四一―三六六
賣比丘尼考補遺……四一九―四二〇

○

最近「魂膽遊婦寢」といふ半紙本の讀和を見た。自分の見たのは、一、三、五の三冊であるから、無論五冊物であらう。詞は、各題を設けて、短づゝの挿繪がある。これ丈なら、別に文句はないのだが、これが不知足散人著とあるから面白い。即ち前々冊、前冊の鶴岡氏の文などで繰り返された不知足散人が氣の付く時は、頻々と見當るのである。惜しいことにはこれが和印本であることである。安ければと思つたが、あまり先方の鼻息が荒いので止めたものである。繪は小咄の或篇の說明で、決して春信とは、間違へられさうもない。自分が「浮世繪」に執筆した當時に見た「舍本姫小松」(?)の類とは、似つかぬ、麁で拙な書き方、丁度漫畫のやうな氣分にある、聞上手の挿繪とは全く同一である。又、文の書体には、之は全く聞上手と同一、更に、艶道俗說辯とも同一である。即ち結論は、聞上手が小松百亀たることを疑ひなくば、不知足散人の名ある「魂膽遊婦寢」も不知足散人の名ある「艶道俗說辯」も「聞」と「魂」との挿繪、「聞」と「魂」と「艶」との文字体の同一であることより推して全部小松百亀たる事疑なく、即ち不知足は百亀たることと豪厘も相違ないのである。唯然し、自分の問題とした春信艶本(と自分は信ずる)のみは、畫は春、序と附錄の詞の部分「立聞の耳違」とが百亀であらう、又、この艶本は當時、百亀の小咄作家としての聲名著しかつたせゐか、姫小松云々の小松も百亀の小松らしく思へる。即ち、百亀の小松を名にし、彼の小咄体のものを卷尾に、なほ當時美人畫家としての最たる春信が之に艶麗の筆を揮つたと見るべきであらうと自分は思ふ。尙、「艶」「聞」、「魂」等の文字体の一致は、百亀の自筆そのまゝか、或は、同一筆耕の手に成つたものと見るべきか。然し自分は前者に惟へてならぬことを附記しておく。

無論之に慢じやしない。内容体裁共に益々力を盡すつもり。唯、始終いふ通り自分一人の事業だから、當今は迚も月刊といふ譯には出來ないのである。次編も來春元旦までにはと思つて頂きたい。○本月は初めから忙しい思ひのしづめであつた。女房が產をしたので、(本月十六日午前、これで第四女を生んだのです)折角の助手に逃げられ、自分一人の返信と發送、本當に寧日なかつた。○自分の拙ない前今の索引が、これ亦大歡迎を得た。私は勞力に對して、酬いられる事極めて多いのを知つて、非常に嬉しかつた。○來月からは、この「研究」も愈第二編に移ります。益々の御愛顧を願ひたい。(十一月二十三日夜)

寄贈紹介

□愛憂 英十三、羽鳥千柱共著)四六版一四二頁壹圓。東京市四谷麴町十三丁目町田書店。二氏の小說、隨筆、小唄と詩との合編であるとりどりに面白いものである。英氏の隨筆中小唄に關した物最も佳く、「落葉する頃」といふ震災後の記事も注目すべき物である。好著□墓碑史蹟研究(磯ヶ谷紫江著)菊、百頁口繪十頁入貳圓。東京府代々木四三〇同發行所。從來月刊册子の第十迄の合本である。内容の斯道唯一の物であることと論なし。唯この合本の製本用紙佳良、氣品高きことを特に述べておかう。□延壽情話(忍頂寺務氏著)第四(〇)うた澤(第五號)□國學院雜誌(每號)□國語と國文學(同)墓碑史蹟研究(同)□性の智識(同)

著者より

○先日、湯朝竹山人氏下阪の途、立寄られ、一泊して行かれた。堀田三登茂氏と三人が、さる料亭で小唄の會を開いた。妓も數人ゐた。○軟派叢書初編が意外に好評、再版の必用に迫られてきた。新聞は勿論、其他購讀諸氏先輩よりの贊辭は降る矢の如きものがあつた。

定價表

一册	廿錢	郵税貳錢
六册分	壹圓四拾錢	税共
十二册分同	貳圓八拾錢	

○郵券代用一割增の事
○照會は返信料添付の事

大正十三年十一月二十七日印刷
大正十三年十二月一日發行 【定價廿五錢】

名古屋市東區道場町百五十七番地
編輯兼發行者 尾崎久彌

名古屋市中區大[illegible]町二丁目三番地
印刷者 英比眞造

名古屋市中區南大[illegible]町二丁目三番地
印刷所 扶桑社

名古屋市東區[illegible]一五七番地
發行所 江戸軟派研究發行所
振替名古屋九六七二番

依託賣品書目（四）

帝國文庫の內〇田舍源氏參圓〇種彥傑作集貳圓八拾〇忠臣藏淨瑠璃集參圓〇風來山人傑作集貳圓六拾〇赤穗復讐全集貳圓八拾〇甲越軍記貳圓廿〇續仇討小說集貳圓半〇美少年錄參圓〇文耕堂貳圓八拾〇紀海音參圓〇竹田出雲參圓貳拾〇太平記貳圓五拾〇武田三代記貳圓參拾〇京傳傑作集貳圓八拾〇近松時代淨瑠璃參圓貳拾〇四大奇書（西遊記、弓張月）貳圓參拾〇東京史稿（皇城編第二）壹圓貳拾〇日本淨瑠璃史（小山）四十〇續歌舞伎年代記（新群書類從の中）貳圓七拾〇續々群書類從地理二册四圓五拾〇同法制一册壹圓〇風俗圖說（朝倉編）七册揃五圓〇雜誌浮世繪八號以下十一册揃五圓〇日本女裝七册五圓五拾〇近世世相史（齋藤）八圓八拾〇近松門左衛門（藤井）貳圓參拾〇有朋堂文庫黃表紙十種參圓貳拾〇同、脚本集二册五圓〇十千萬堂日錄（紅葉）九拾〇日本演劇史（伊原述）參圓〇獎文庫東海道膝栗毛二册壹圓六拾〇同、朝顏日記七十〇同、弓張月一、二、四、三册壹圓貳拾〇大日本史食貨志貳圓貳拾〇東海道五十三次（廣保布）貳圓五拾〇醒睡笑（策傳）、鎌倉諸藝袖日記（其磧）活字本二册合壹圓〇續德川實記五册揃新本貳拾貳圓〇日本木板畫粹一輯より十五輯まで拾六圓〇人情本略史（村上靜人）貳圓五拾〇戲子名所圖會（馬琴）和三册九圓〇日本風俗圖繪特製絹帙入十二帙揃美本四拾圓〇同師宣一帙參圓七拾〇美術寶庫浮世繪類集初摺美本十一册揃參拾圓〇書畫薈粹（銀鷄著）三編揃九册上摺、拾圓〇東海道膝栗毛畫帖橫大判帙入爲信筆合拾參圓〇冠髮狂歌集（廣重芳虎彩畫入）上本一册貳圓貳拾〇狂歌千本櫻彩畫入二册貳圓五拾〇德川文藝類聚俗曲上下二册八圓〇印刷文化展覽會目錄六拾錢。

江戸軟派叢書初編

（十一月五日發行）

世評一斑

◆「江戸軟派叢書」初編（尾崎久彌校訂）和本仕立四六判通計五六頁七拾五錢送料貳錢名古屋市東區車道東町同發行所礎晋成撰「遊里不調法記」上下兩卷と十返舍一九作「馬士の歌ぶくろ」式亭三馬作「伊勢名物通神風」の兩編を總振假名附に飜刻し江戸趣味の豐潤な挿畫も多いまことに大正稀有の珍本である。

——讀賣新聞。十一月十二日紙上——

□**第二編**　「宮古路豐後掾正本拾遺」一冊近刊

內容　國書刊行會本の德川文藝類聚俗曲上所收の宮古路正本は、豐後正本の一部分である。我叢書本は、「宮古路祇園囃子」「宮古路紫竹調」及び他一本の三種より、從來未見の全部正本を集め以て豐後掾藝術の全輪廓を浮彫りせんとする也。常盤津清元、富本、新內所謂豐後諸派の母胎たる此の豐後掾正本、特に此の拾遺を措いて、又如何ぞ我國近世俗曲を云々するさいひたくなるものである。

風俗研究（京都）第十七、第二十〇風俗畫報（第八號、第十四號）〇演藝畫報、明治四十四年五月號、大正八年八月號計二册〇以上は當所文庫に、永らく缺號のまゝです。どうにも揃はりません。大方の御紹介、御分讓を御願ひします。

誌友諸氏より買入希望の分一括。川柳膝栗毛〇時代狂句選〇俳諧歲時記（馬琴）〇歌舞伎年代記（揃）〇雜誌歌舞伎〇同邦樂〇風俗志林一ノ一、一ノ二、一ノ三、一ノ四、一ノ五、一ノ七、二ノ四以下〇中央史壇創刊より本年七月迄の分揃〇稀書複製會第一、第二、第三期全部〇德川禁令考〇百萬塔（揃）

大正十三年十一月二十七日印刷
大正十三年十二月一日發行

定價貳拾五錢　送費貳錢